BL Tripitaka. Japanese. 1929
1411 Showa shinshu kokuyaku
T8J3 Daizokyo
1929
v.8

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和新纂

國譯大藏経

LIBRARY
MAY 31 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

BL
1411
T8J3
1929
v. 8

昭和新纂 國譯大藏經 經典部 第八卷

大毘盧遮那成佛神變加持經 目次

卷第一

入眞言門住心品第一……一

入曼荼羅具緣眞言品第二之一……一三

卷第二

入曼荼羅具緣眞言品第二之餘……三九

息障品第三……五七

普通眞言藏品第四……六〇

卷第三

世間成就品第五……七六

悉地出現品第六……七八

成就悉地品第七……九七
轉字輪曼荼羅行品第八……一〇〇
卷第四
密印品第九……一〇九
卷第五
字輪品第十……一三三
祕密曼荼羅品第十一……一三五
入祕密曼荼羅法品第十二……一六一
入祕密曼荼羅位品第十三……一六二
祕密八印品第十四……一六五
持明禁戒品第十五……一六七
阿闍梨眞實智品第十六……一七一
布字品第十七……一七四
卷第六
受方便學處品第十八……一七六

說百字生品第十九……一八一
百字果相應品第二十……一八二
百字位成品第二十一……一八三
百字成就持誦品第二十二……一八六
百字眞言法品第二十三……一八九
說菩提性品第二十四……一九〇
三三昧耶品第二十五……一九二
說如來品第二十六……一九三
世出世護摩法品第二十七……一九五
說本尊三昧品第二十八……二〇一
說無相三昧品第二十九……二〇二
世出世持誦品第三十……二〇三
囑累品第三十一……二〇四

卷第七

供養次第法中眞言行學處品第一……二〇六

增益守護淸淨行品第二……二二一
供養儀式品第三……二二九
持誦法則品第四……二三六
眞言事業品第五……二四五

金剛頂經目次

卷上
金剛界大曼茶羅廣大儀軌品之一……二五五
卷中
大曼茶羅廣大儀軌品之二……二七六
卷下
大曼茶羅廣大儀軌品之三……二九七

蘇悉地羯羅經目次

卷上

請問品第一……二二三
分別阿闍梨相品第二……二二九
分別持誦相品第三……二三〇
分別同伴品第四……二三一
擇處品第五……二三四
持眞言法品第六……二三六
供養花品第七……二四六
塗香藥品第八……二五〇
分別燒香品第九……二五二
燃燈法品第十……二五五
獻食品第十一……二五六

卷中

分別悉地時分品第十二……二六五
圓備成就品第十三……二六七
奉請成就品第十四……二六九

補闕少法品第十五……三七四
被偸成物卻徵法品第十六……三八九
成就具支法品第十七……三九六

卷　下

分別成就品第十八……四〇一
奉請品第十九……四〇三
供養品第二十……四〇七
增威品第二十一……四一四
本尊灌頂品第二十二……四二六
祈請品第二十三……四二七
受眞言品第二十四……四二九
滿足眞言品第二十五……四三一
增力品第二十六……四三二
護摩品第二十七……四三三
備物品第二十八……四三六

成諸物相品第二十九……四三七
取物品第三十……四三九
淨物品第三十一……四四〇
物量品第三十二……四四一
灌頂壇品第三十三……四四一
光物品第三十四……四四六

解深密經目次

卷第一

序品第一……四五一
勝義諦相品第二……四五三
心意識相品第三……四六七

卷第二

一切法相品第四……四七〇
無自性相品第五……四七三

卷第三
分別瑜伽品第六……四九
卷第四
地波羅蜜多品第七……五三
卷第五
如來成所作事品第八……五三

大毘盧遮那成佛神變加持經

經典部
第八卷

大毘盧遮那成佛神變加持經　卷第一

東晉天竺三藏善無畏共沙門一行譯す

入眞言門住心品第一

（一）是の如く我聞けり。一時、薄伽梵、如來、加持廣大金剛法界宮に住したまふ。一切持金剛者悉く集會す。如來の信解遊戯神變より生ずる大樓閣寶王は、高うして中邊無く、諸の大妙寶王を以て種種に間飾し、菩薩の身を師子座と爲す。其金剛は名けて、虛空無垢執金剛、虛空遊步執金剛、虛空生執金剛、被雜色衣執金剛、善行步執金剛、住一切法平等執金剛、哀愍無量衆生界執金剛、那羅延力執金剛、大那羅延力執金剛、妙執金剛、勝迅執金剛、無垢執金剛、刃迅執金剛、如來甲執金剛、如來句生執金剛、住無戯論執金剛、如來十力生執金剛、無垢眼執金剛、金剛手祕密主と曰ふ。是の如きを上首として十佛刹微塵數等の持金剛衆と倶なり。及び普賢菩薩、慈氏菩薩、妙吉祥菩薩、除一切蓋障菩薩等の、諸大菩薩に前後に圍遶せられて、而も法を演說したまふ。謂ゆる三時を越えたる如來の日加持の故に、身語意平等句の法門なり。

（二）時に彼菩薩には普賢を上首と爲し、諸の執金剛には祕密主を上首と爲す。毘盧遮那如

【入眞言門住心品】金剛薩埵因根究竟の三句を以て佛に問へるに、佛即ち菩提心爲因、大悲爲根、方便爲究竟を答へ、乃至之を實說せるを明す。

【一】初に通序。

【薄伽梵】世尊と譯す。如來の德を歎じたる語、密教は之に能破、女人有德の三義あり。

【持金剛】執金剛の異名。金剛杵を執持する尊をいふ。

【妙吉祥菩薩】文殊師利のこと。

【除一切蓋障菩薩】無分別法を以て諸戯論を滅すれば、除蓋を得て蓋障なるをいふ。

【三時を越えたる如來の日】佛日は實相の日なれば、圓明常住にして時分有ること無し。
【二】以下別序。
【謂ゆる初發心等】初發心時に阿字門に入るを得るは、如來金剛性より牙を生じて、運運增進して退義なく、乃至菩提を成じ、行として增すべき無くして後息むをいふ。
【緣と業とより等】有情は三業に種種の不淸淨業を造り六趣にありて諸苦を受く
【業壽】第八阿賴耶識、
【芽】第八修生の菩提心、種は本有の菩提心なり。
【三】以下正宗分
【一切智智】大日如來の總智をいふ是れ智中の智、
【譬へば虛空界等】以下の五喩は大悲胎藏萬行方便を發

來加持の故に、身無盡莊嚴藏を奮迅示現したまふ。是の如く語意平等無盡莊嚴藏を奮迅示現したまへる毘盧遮那佛の身は、或は語、或は意より生ずるに非ず、一切處に起滅の邊際不可得なり。而も毘盧遮那の一切の身業、一切の語業、一切の意業よりして、一切處と一切時とに有情界に於て眞言道句の法を宣說したまふ。又執金剛、普賢、蓮花手菩薩等の像貌を現じて、普く十方に於て眞言道淸淨句法を宣說したまふ。謂ゆる初發心より乃至十地に至るまで次第に此生に滿足す。緣と業とより生じて增長する有情類の業壽の種を除きて、復芽は種より生起することあり。

（三）爾時、執金剛祕密主、彼衆會の中に於て、坐して佛に白して言さく、世尊、云何が如來應供正遍知、一切智智を得たまひ、彼に一切智智を得しめて、無量の衆生の爲に廣演分布し、種種の趣と種種の性欲とに隨つて、種種の方便道を以て一切智智を宣說し、或は聲聞乘道、或は緣覺乘道、或は大乘道、或は五通智道、或は願つて天に生じ、或は人中及び龍、夜叉、乾闥婆に生じ、乃至摩睺羅伽に生ずる法を說きたまふや。若し衆生有つて佛を以て度すべき者には、即ち佛身を現し、或は聲聞の身を現し、或は緣覺の身を現し、或は菩薩の身、或は梵天の身、或は那羅延、毘沙門の身、乃至摩睺羅伽、人、非人等の身に至るまで、各各に彼言音に同じき種種の威儀に住したまふ。而も此一切智智の道は一味なり。謂ゆる如來の解脫味なり。世尊、譬へば虛空界の一切の分別を離れて、分別も無く無分別も無きが如く、是の如く一切智智も一切の分別を離れて、分別も無く無分別も無し。世尊、

起せしめんと欲す
【世尊是の如き等】本經の根本義たる因、根、究竟の三句に就いて問を起す
【毘盧舍那佛等】大日如來の答說中初に三句の略答。
【云何が菩提等】大日如來後に廣く菩提心を明すところの菩提心觀の正觀を說く。
【心は內に非ず等】以下菩提心觀の助觀を明す。

譬へば大地は一切衆生の依たるが如く、是の如く一切智智も天人阿修羅の依たり。世尊、譬へば火界は一切の薪を燒くに厭足無きが如く、是の如く一切智智も、一切の無智の薪を燒くに厭足無し。世尊、譬へば風界は一切の塵を除くが如く、是の如く一切智智も一切の諸の煩惱の塵を除去す。世尊、喩へば水界は一切衆生之に依つて歡樂するが如く、是の如く一切智智も諸天世人の利樂を爲す。世尊、是の如きの智慧は何を以てか因と爲し、云何が根と爲し、云何が究竟する。』是の如く說き已りたまひて、毘盧遮那佛、持金剛祕密主に告げて言はく、『善い哉善い哉、執金剛。善い哉、金剛手。汝吾に是の如きの義を問ふ。汝當に諦かに聽くべし。極めて善く作意せよ。吾今之を說かん。』金剛手の言さく、『是の如し、世尊。願樂くは聞かんと欲す。』佛の言はく、『菩提心を因と爲し、悲を根本と爲し、方便を究竟と爲す。祕密主、云何が菩提とならば、謂く、實の如く自心を知るなり。祕密主、是阿耨多羅三藐三菩提は、乃至彼法として少分も得べきこと有ること無し。何を以ての故に。虛空の相は是れ菩提なり、知解の者も無く、亦開曉のものも無し。何を以ての故に。菩提は無相なるが故に。祕密主、諸法は無相なり、謂く、虛空の相なり。』

爾時、金剛手、復佛に白して言さく、『世尊、誰か一切智を尋求する。誰か菩提の爲に正覺を成ずる者ぞ。誰か彼一切智智を發起するや。』佛の言はく、『祕密主、自心は尋求なり、菩提なり、及び一切智なり。何を以ての故に。本性清淨なるが故に。心は內に在らず、外に在らず、及び兩中間にも得べからず。祕密主、如來應正等覺は青に非ず、黃に非ず、赤に

【所以は何ん等】虚空、心、菩提は本同一相にして畢竟因緣を壞せざるを明す。

【秘密主云何が等】重ねて法に就て菩提心の助觀を明す

【初法明道】本宗は直に淨菩提心を門とす、即ち一切如來の境界に入るなり。

【除一切蓋障三昧】淨菩提心に因り諸法を照明ならしむるが故に除蓋障三

非ず、白に非ず、紅紫に非ず、水精色に非ず、長に非ず、短に非ず、圓に非ず、方に非ず、明に非ず、暗に非ず、男に非ず、女に非ず、不男女に非ず。秘密主、心は欲界と同性に非ず、色界と同性に非ず、無色界と同性に非ず、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人趣と同性に非ず。秘密主、心は眼界に住せず、耳鼻舌身意界に住せず。見に非ず、顯現に非ず。何を以ての故に。虚空相の心は諸の分別を離れて無分別なればなり。所以は何ん。性、虚空と同なれば即ち心に於て同なり。性心に於て同なれば、即ち菩提と同なり。是の如く秘密主、心と虚空界と、菩提との、三種無二なり。此等は悲を根本と爲して、方便波羅蜜を滿足す。是故に秘密主、我諸法を說くこと是の如し。彼諸の菩薩衆をして、菩提心淸淨にして其心を知識せしめんとなり。秘密主、若し族姓の男、族姓の女、菩提を知識せんと欲せば、當に是の如く自心を知識すべし。秘密主、云何が自ら心を知る。謂はく、若は分段、或は顯色、或は形色、或は境界、若は色、若は受想行識、若は我、若は我所、若は能執、若は所執、若は淸淨、若は界、若は處、乃至一切分段の中に求むるに得べからず。秘密主、此菩薩の淨菩提心門を初法明道と名く、菩薩此に住して修學すれば、久しく勤苦せずして便ち除一切蓋障三昧を得るなり。若し此を得れば、則ち諸佛菩薩と同等に住して、當に五神通を發し、無量の語言音陀羅尼を獲、衆生の心行を知り、諸佛に護持せられ、生死に處すと雖も而も染著無く、法界衆生の爲に勞倦を辭せず、住無爲戒を成就し、邪見を離れ、正見に通達すべし。復次に秘密主、此除一切蓋障に住する菩薩は、信解

味を得、八萬四千の煩惱の實相を見、八萬四千の寶聚門を成ず。

【住無爲戒】除蓋障三昧を得る時、心の本性は尸羅にして造作法に非ず他得に由らざるをいふ。

【大勤勇】佛の異名。

【心と心に殊異有ると】衆生異熟の識心と瑜伽行者との殊異の心。

力の故に久しく勤修せずして一切の佛法を滿足す、祕密主、要を以て之を言はば、是善男子善女人は、無量の功德皆成就することを得

爾時、執金剛祕密主、復偈を以て佛に問はく、

　云何が世尊、此心に菩提の生ずることを說きたまふ
　復云何なる相を以てか菩提心を發すことを知る
　願くば識心と心と勝れたる、自然智の生ぜるを說きたまへ
　大勤勇、幾何の、次第ありて心續生するや
　心の諸相と時と、願くば佛廣く開演したまへ
　功德聚も亦然なり、及び彼行を修行すると
　心と心に殊異有ると、惟大牟尼說きたまへ

是の如く說き已りて、摩訶毘盧遮那世尊、金剛手に告げて言はく、

　善い哉佛の眞子、廣大の心もて利益す
　勝上大乘の句、心續生の相は
　諸佛の大祕密なり、外道は識ること能はず
　我今悉く開示せん、一心に應に諦に聽くべし
　百六十心を越えて、廣大の功德を生ず
　其性常に堅固なり、知んぬ彼は菩提の生なり

【四】以下心相續の義に答へて順世の八心を明す。

【補特伽羅】數取趣又は人と譯す、有情又は有情の我をいふ。

【阿賴耶】藏識と譯す、第八識のこと。

【社怛梵】外道の名。

無量なること虛空の如く、染汚せずして常住なり
諸法も動ずること能はず、本より來寂にして無相なり
無量智を成就し、正等覺顯現す
供養行を修行して、是より初めて發心す

(四)祕密主、始無き生死の愚童なる凡夫は、我名と我有とに執着して無量の我分を分別す。祕密主、若し彼、我自性を觀ぜざれば則ち我と我所とを生ず。餘は復時と地等の變化と、瑜伽の我と、建立の淨と、不建立の無淨と、若は自在天、若は流出及び時、若は尊貴、若は自然、若は內我、若は人量、若は遍嚴、若は壽者、若は補特伽羅、若は識、若は阿賴耶、知者、見者、能執、內知、外知、社怛梵、意生、儒童、常定生、聲非聲有りと計す。祕密主、是の如き等の我分は、昔より以來、分別と相應して、理に順じて解脫することを希ひ求む。祕密主、愚童凡夫の類は猶し羝羊の如し、或時は一法の想生ずること有り、謂ゆる齋を持するなり。彼此少分を思惟して歡喜を發起し數數修習す。祕密主、是れ初の種子善業の發生するなり。復此を以て因と爲して、六齋日に於て父母と男女と親戚とに施與す、是れ第二の芽種なり。復此施を以て親識に非ざる者に授與す、是れ第三の疱種なり。復此施を以て器量高德の者に與ふ、是れ第四の葉種なり。復此施を以て歡喜して伎樂の人等に授與し及び尊宿に獻る、是れ第五の敷華なり。復此施を以て親愛の心を發して、而も之を供養す、是れ第六の成果なり。復次に祕密主、彼戒を護つて天に生ずるは、是れ第七の

【那羅延】人本生と譯す、天の力士

【商羯羅】麻醯首羅の別名。

【黑天】自在天の眷屬。

【倶吠濫毘沙門等】以下皆世の宗奉する大天なり。

【五】以下煩惱の六十心を明す、即ち見惑なり。

受用種子なり。復次に祕密主、此心を以て生死に流轉して、善友の所に於て是の如きの言を聞く、此は是れ天なり、大天なり。一切の樂を與ふる者、若し虔誠に供養すれば一切の所願皆滿つ、謂ゆる自在天、梵天、那羅延天、商羯羅天、黑天、自在子天、日天、月天、龍尊等と、及び倶吠濫毘沙門、釋迦毘楞博叉、毘首羯磨天、閻魔、閻魔后、梵天后、世の宗奉する所の火天、迦樓羅子天、自在天后、波頭摩、德叉迦龍、和修吉、商佉、羯句啅劍、大蓮、倶里劍、摩訶泮尼、阿地提婆、薩陀難陀等の龍、或は天仙と大圍陀論師となり、各各應に善く供養すべし。彼是の如くなるを聞いて心に慶悦を懷ひて、殷重に恭敬し隨順し修行す。祕密主、是を愚童異生の生死流轉の無畏依の第八の嬰童心と名く。祕密主、復次に殊勝の行あり。彼所說の中に隨つて殊勝に住して解脫を求むる慧生ず。謂ゆる常無常空なり。是の如きの說に隨順す。祕密主、彼空と非空とを知解するに非ず。常と斷、非有と非無とを、倶に彼は分別を以て分別無しとす。云何が空を分別する。諸空を知らざれば彼能く涅槃を相るに非ず。是故に應に空を了知して、斷と常とを離るべし。』

(五)爾時、金剛手、復佛に請うて言さく、『惟願くば世尊、彼心を說きたまへ。』『是の如く說き已りて、佛、金剛手祕密主に告げて言はく、『祕密主、諦に聽け。心相とは、謂く、貪心、無貪心、瞋心、慈心、癡心、智心、決定心、疑心、暗心、明心、積聚心、鬪心、諍心、無諍心、天心、阿修羅心、龍心、人心、女心、自在心、商人心、農夫心、河心、陂池心、井心、守護心、慳心、狗心、狸心、迦樓羅心、鼠心、歌詠心、舞心、擊鼓心、室宅心、師子

心、鵂鶹心、烏心、羅刹心、刺心、窟心、風心、水心、火心、泥心、顯色心、板心、迷心、毒藥心、羂索心、械心、雲心、田心、鹽心、剃刀心、須彌等心、海等心、穴等心、受生心なり。祕密主、彼云何が貪心、謂く、染法に隨順す。云何が無貪心、謂く、無染の法に隨順す。云何が瞋心、謂く、怒法に隨順す。云何が慈心、謂く、慈法に隨順し修行す。云何が癡心、謂く、修不觀の法に隨順す。云何が智心、謂く、殊勝增上の法に順修す。云何が決定心、謂く、尊の教命を說の如く奉行す。云何が疑心、謂く、常に不定等の事を收持す、云何が闇心、謂く、疑慮無き法に於て疑慮の解を生ず、云何が明心、謂く、不疑慮の法に於て疑慮無くして修行す。云何が積聚心、謂く、無量を一と爲るを性と爲す。云何が鬪心、謂く、互相に是非するを性と爲す。云何が諍心、謂く、自己に於て是非を生ず。云何が無諍心、謂く、是非俱に捨つ。云何が天心、謂く、心念に隨つて成就せんと思ふ。云何が阿修羅心、謂く、生死に處せんと樂ふ。云何が龍心、謂く、廣大の資財を思念す、云何が人心、謂く、利他を思念す。云何が女心、謂く、欲法に隨順す。云何が自在心、謂く、思惟して我一切意の如くならんと欲す。云何が商人心、謂く、初には收め聚めて後には分析する法に隨順す。云何が農夫心、謂く、初に廣く聞いて而も後に求むる法に隨順す。云何が河心、謂く、二邊に依り因る法に順修す。云何が陂池心、謂く、渴して厭足無き法に隨順す。云何が井心、謂く、是の如く思惟すること深くして復甚深なり。云何が守護心、謂く、唯此心のみ實なり、餘心は不實なり。云何が慳心、謂く、已が爲にして他に與へざ

る法に隨順す。云何が狸心、謂く、徐に進む法に順修す。云何が狗心、謂く、少分を得て以て喜び足れりと爲す。云何が迦樓羅心、謂く、朋黨羽翼の法に隨順す。云何が鼠心、謂く、諸の繋縛を斷ぜんと思惟す。云何が歌詠心、云何が舞心、謂く、是の如きの法を修行して、我當に上昇して種種に神變すべし。云何が撃鼓心、謂く、是法に修順して、我當に法鼓を撃つべし。云何が室宅心、謂く、自ら身を護る法に順修す。云何が師子心、謂く、一切の怯れ弱むこと無き法を修行す。云何が鵂鶹心、謂く、常に暗夜に思念す。云何が烏心、謂く、一切處に驚き怖る思念なり。云何が羅刹心、謂く、善の中に於て不善を發起す。云何が刺心、謂く、一切處に惡作を發起するを性と爲す。云何が窟心、謂く、窟に入ることを爲す法を順修す。云何が風心、謂く、一切處に遍じて發起するを性と爲す。云何が水心、謂く、一切不善を洗濯する法に順修す。云何が火心、謂く、熾盛の炎熱を性と爲す。云何が泥心、云何が顯色心、謂く、彼に類するを性と爲す。云何が板心、謂く、量に隨ふ法に順修して、餘の善を捨て棄つる故に。云何が迷心、謂く、執する所異に、思ふ所異なる。云何が毒藥心、謂く、生分無き法に順修す。云何が羂索心、謂く、一切處に我縛に住するを性と爲す。云何が械心、謂く、二足止り住するを性と爲す。云何が雲心、謂く、常に雨を降す思念を作す。云何が田心、謂く、常に是の如く、自身に事ふることを修す。云何が鹽心、謂く、思念する所に彼復思念を增し加ふ。云何が剃刀心、謂く、唯是の如く、剃除する法に依り止る。云何が彌盧等心、謂く、常に思惟して心高擧なるを性と

【祕密主一二三等】以下眞言行者の經る所の修行の位を明す。此は初に十地の前にある三劫を明す。故に三劫段といふ。
【世間の三妄執等】以下初劫を明す。四妄執とは三毒の根本なり。
【瑜祇】瑜伽の女聲、相應と譯す。
【復次に祕密主等】以下第二劫を明す。二心あり、即ち無緣乘と覺心乘となり、大乘三乘教の有教と空教とに寄せて明す。
【彼是の如く等】覺乘心に就いて。
【復次に等】以下第三劫、直に眞言

爲す。云何か瀬等心、謂く、常に是の如く自身に受用して而も住す。云何が穴等心、謂く、先には決定して、彼後には復變改するを性と爲す。云何が受生心、謂く、諸の行業を修習して彼に生ずること有り。心是の如く同性なり。祕密主、一二三四五、再數すれば凡そ百六十心あり。世間の三妄執を越えて出世間の心生ず。謂く、是の如く唯蘊無我を解し、根と境界とに淹り留つて修行し、業と煩惱、株杌と無明の種子との十二因緣を生ずるを拔く、建立宗等を離れたり。是の如きの湛寂は、一切の外道の知ること能はざる所、先佛は一切の過を離れたりと宣說したまへり。祕密主、彼出世間の心、蘊の中に住するに、是の如くの慧隨つて生ずることあり。若し蘊等に於て著を離るることを發起して、當に聚沫、浮泡、芭蕉、陽焰、幻等を觀察して解脫を得べし。謂く、蘊、處、界、能執、所執、皆法性を離れたり。是の如きの寂然界を證する、是を出世間心と名く。祕密主、彼違と順との八心の相續と、業と煩惱との網を離るるは、是れ一劫を超越する瑜祇の行なり。復次に祕密主、大乘の行あり、無緣乘の心を發して法に我性無し。何を以ての故に。彼の往昔に是の如く修行せし者の如く、蘊の阿賴耶を觀察して、自性は幻、陽焰、影、響、旋火輪、乾闥婆城の如しと知る。祕密主、彼是の如く無我を捨つれば、心主自在にして自心本不生を覺る。何を以ての故に。祕密主、心は前後際に得べからざるが故に。是の如く自心の性を知るは、是れ二劫を超越する瑜祇の行なり。復次に祕密主、眞言門に菩薩の行を行ずる諸菩薩は、無量無數百千俱胝那庾多劫に積集する無量の功德智慧と、具に諸行を修する無量

行者に就いて明す中に二心あり、一道無爲心及び極無自性心なり。

【業と煩惱とに於て等】行者一切業煩惱を解脫する時即ち一切業煩惱の佛事に非ざる無きを知る。若し此不思議解脫時に住する時は是れ眞の羅漢にして有爲無爲に著せず、即ち世間の宗奉するところたり。

【信解行地には等】以下眞言行者修行位の十地を明す。是れ此經の宗にして淨菩提心以上十住地は皆信解中の行なり。

【三心を觀察す】因根究竟心なり。

【十心】初地を種子、二地を牙、三地を疱、四地を葉、五地を花、六地を

の智慧方便と皆悉く成就す。天人世間の歸依する所にして、一切の聲聞辟支佛地を出過せり、釋提桓因等親近し敬禮す。謂ゆる空性は根境を離れ、相も無く境界も無く、諸の戲論を越えたり、虛空に等しき無邊一切の佛法、此に依つて相續して生ず、有爲無爲の界を離れ、諸の造作を離れ、眼、耳、鼻、舌、身、意を離れて、極めて自性無き心を生ず。祕密主、是の如きの初心をば、佛は成佛の因と說きたまふ。故に業と煩惱とに於て解脫すれども、而も業と煩惱との具依たり、世間宗奉して常に供養すべし。復次に祕密主、信解行地には三心を觀察す、無量の波羅蜜多の慧もて四攝の法を觀ず。信解地は對無く、量無く、不思議なり。十心に逮んで無邊の智生ず、我一切の諸の說く所有るは皆此に依つて而も得るなり。是故に智者は當に此一切智と信解地とを思惟すべし。復一劫を越えて此地に昇り住す。此四分の一に信解を度するなり。」

(六)爾時、執金剛祕密主、佛に白して言さく「世尊、願くば救世者、心相を演說したまへ、菩薩は幾種の無畏處をか得ることある。」是の如く說き已りて、摩訶毘盧遮那世尊、金剛手に告げて言はく、「諦に聽け、極めて善く思念せよ。祕密主、彼愚童凡夫は諸の善業を修し、不善の業を害するときは、當に善無畏を得べし。若し實の如く我を知るときは、當に身の無畏を得べし。若し取蘊の集むる所の我身に於て、自の色像を捨て觀ずるときは、當に無我無畏を得べし。若し蘊を害して法の攀緣に住するときは、當に法無畏を得べし。若し法を害して無緣に住るときは、當に法無我無畏を得べし。若し復一切の蘊、界、

處、能執、所執、我、壽命等、及び法、無緣、空にして自性無性なり、此空智生ずるときは、當に一切法自性平等無畏を得べし。秘密主、若し眞言門に菩薩の行を修する諸菩薩は、深く修して十緣生句を觀察し、當に眞言の行に於て通達して證を作すべし。云何が十と爲す。謂く、幻、陽焰、夢、影、乾闥婆城、響、水月、浮泡、虛空華、旋火輪の如し。秘密主、彼眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は、當に是の如く觀察すべし。云何が幻と爲す。謂く、呪術、藥力の能造、所造の種種の色像の如きは、自の眼を惑はすが故に、希有の事を見る。展轉相生じ、十方に往來すれども、然も彼去るに非ず、去らざるに非ず。何を以ての故に。本性淨の故に。是の如く眞言の幻を持誦し、成就して、能く一切を生ず。復次に秘密主、陽焰の性は空なり、彼世人の妄想に依つて成立して談議する所有り。是の如く眞言の想も唯是れ假名なり。復次に秘密主、夢中に見る所の晝日と、牟呼栗多と刹那との歲時等に、種種の異類に住して、諸の苦樂を受くるが如きは覺め已りて都て見る所無し。是の如く夢の眞言行も、應に知るべし、亦爾なり。復次に秘密主、影の喩を以て眞言の能く悉地を發くことを解了す。面は鏡に緣つて面の像を現ずるが如く、彼眞言の悉地も、當に是の如く知るべし。復次に秘密主、乾闥婆城の譬を以て悉地宮を成就することを解了すべし。復次に秘密主、響の喩を以て眞言の聲を解了せよ。聲に緣つて響有るが如く、彼眞言者、當に是の如く解すべし。復次に秘密主、月の出づるに因るが故に、淨水を照して月の影像を現ずるが如く、是の如く眞言の水月の喩を以て彼持明者、當に是の如く

果、七地を受用種子、八地を無畏依九地を有進求佛地慧生、十地を心決定となす。

【四分の一に等】下方便、中方便、上方便、上上方便の四、この第四に至つて佛地開け、究竟一切智地と名く。即ち佛果なり。

【六】以下六無畏を明す。妄想業煩惱に縛せられしがこの六處に至つて再生を得るなり。

【秘密主若し等】以下眞言行者因位の觀行に修觀する所、十喩を明す。

【牟呼栗多】時の名。

【乾闥婆城】蜃氣樓。

【入曼荼羅具緣眞言品】七日作壇大曼荼羅灌頂法を明す。

說くべし。復次に祕密主、天より雨を降し泡を生ずるが如く、彼眞言の悉地種種の變化も、當に知るべし亦爾なり。復次に祕密主、空中には衆生も無く、壽命も無く、彼作者も得べからざるなり、心迷亂するを以ての故に、是の如きの種種の妄見を生ずるが如し。復次に祕密主、譬へば火燼の、若し人執持して手に在りて、而も以て空中に旋轉するに、輪の像生ずることあるが如し。祕密主、應に是の如く大乘の句、心の句、無等等の句、必定の句、正等覺の句、漸次大乘生の句を了知すべし。當に法財を具足し、種種の工巧大智を出生し、實の如く遍く一切の心想を知ることを得るなり。〔二〕

入曼荼羅具緣眞言品第二之一

爾時、執金剛祕密主、佛に白して言さく、「希有なり、世尊。此諸佛自證の三菩提を說きたまふ。不思議法界は心地を超越せり。種種の方便道を以て、衆生類の爲に本性信解の如く、而も法を演說したまふ。惟願くば世尊、次に眞言行を修して、大悲胎藏より大曼荼羅王を生ずることを說きたまへ。彼諸の未來世の無量の衆生を滿足せしめ、救護し、安樂ならしめんが爲の故に。」〔三〕

爾時、薄伽梵毘盧遮那、大衆會の中に於て遍く觀察し已りて、執金剛祕密主に告げて言はく、「諦に聽け、金剛手。今曼荼羅の行を修行して、一切智智を滿足する法門を說か

【一切の支分より等】支分生の曼荼羅を明す。

【阿闍梨】密教にては三密を解する人中の最上金剛薩埵、或は毘盧舎那を名く、以下説く所は灌頂の阿闍梨たるべき人の十三德を述ぶ。

【若し衆生を見るに】以下弟子たるの相を明す。

ん。爾時、毘盧遮那世尊、本昔無盡法界を成就し、無餘の衆生界を度脱せんと誓願したまふが故に、一切如來同じく共に集會して、漸次に大悲藏發生三摩地に證入したまふ。世尊一切の支分より皆悉く如來の身を出現したまふ。彼初發心より乃至十地の諸の衆生の爲の故に、遍く十方に至り、佛身の本位に還來して、本位の中に住して而も復還り入りたまふ。時に薄伽梵、復執金剛祕密主に告げて言はく、『諦に聽け、金剛手。曼荼羅の位の初の阿闍梨は應に菩提心を發し、妙慧と慈悲ともて兼ねて衆藝を綜べ、善巧に般若波羅蜜を修行し、三乘に通達し、善く眞言の實義を解し、衆生の心を知り、諸佛菩薩を信じ、傳教灌頂等を得、妙に曼荼羅の畫を解し、其性調柔にして我執を離れ、眞言行に於て善く決定することを得、瑜伽を究習し、勇健の菩提心に住せん。祕密主、是の如きの法則の阿闍梨は、諸佛菩薩の稱讃したまふ所なり。復次に祕密主、彼阿闍梨は、若し衆生を見るに法器と爲るに堪へて諸垢を遠離し、大信解と勤勇と深信と有りて常に利他を念せん。若し弟子是の如きの相貌を具せば、阿闍梨、應に自ら往いて勸發して、是の如く告げて言ふべし。

佛子、此大乘　眞言行道の法を
我今正しく開演せん、彼大乘器の爲なり
過去の等正覺、及與未來世と
現在の諸の世尊、饒益衆生に住したまふ
是の如きの諸賢者、眞言妙法を解して

【山林に華果多く】曼荼羅建立の地處を按擇するを明す

【阿練若】アーランヤ(Araṇya) 意寂靜と譯す、行者が所樂の處なり。
【制底】チャイトヤ(Caitya) 塔のこと。

勤勇にして種智を獲、無相の菩提に坐せり
眞言の勢は無比なり、能く彼大力の
極忿怒の魔軍を摧く、釋師子救世なり
是故に汝佛子、應に是の如きの慧の方便を以て
成就を作し、當に薩婆若を逮ぶべし
行者悲念の心を以て、發起して增廣せしめ
彼堅住して教を受けば、當に爲に平地を擇ぶべし
山林に華果多く、意を悦ばしむる諸の清泉は
諸佛の稱歎したまふ所なり、應に圓壇の事を作すべし
或は河流の處に在つて、鵝鴈等の莊嚴をなせば
彼處に慧解を以て、悲生曼荼羅を作るべし
正覺と緣導師と、聖者と聲聞衆と
曾し此地分に遊びたまふ、佛常に稱歎したまふ所なり
及び餘の諸の方所、僧坊、阿練若
華房、高樓閣、勝妙の諸池、苑
制底、火神祠、牛欄、河渚中
諸天廟と空室、仙人得道處

【火神祠】浄行梵志火祠の所。
【牛欄】牛糞堆積の處。
【河潬】雨水或は多水の會合する所
【宿直の諸執等】曼荼羅を建立するに就いて日時と曜宿とを擇ぶべきを明す。
【汝天等】驚發地神の作法を明す。

　上の所說の如く、或は所意樂の處に
弟子を利益せんが故に、當に曼荼羅を畫くべし
祕密主、彼地を揀擇して礫石、碎瓦、破器、髑髏、毛髮、糠糟、灰炭、刺骨、朽木等及び蟲、蟻、蜣蜋、毒螫の類を除去すべし。是の如きの諸過を離れ、良日辰に遇ひ、日と時分とを定め、宿直の諸執皆悉く相應じて、食前の時に於て、吉祥相に値うて、先づ當に一切如來の爲に禮を作し、是の如き偈を以て、地神を警發すべし。

汝天親り護る者は、諸佛導師に於て
殊勝の行を修行し、地波羅蜜を淨む
魔軍の衆を破せし、釋師子救世の如く
我も亦魔を降伏す、我曼荼羅を畫かん

彼應に長跪して手を舒べ、地を按じて頻りに此偈を誦し、塗香と華等とを以て供養すべし。供養し已りて、眞言者は應に復一切如來を歸命すべし。然して後に地を治して、其次第の如く當に衆德を具すべし。

爾時、執金剛祕密主、頭面を以て世尊の足を禮して、偈を說いて言さく、

佛法は諸相を離れたり、法は法位に住せり
所說は譬類無し、相も無く爲作も無し
何が故に、大精進、此有相

【復次に祕密主】
隨順方便說なり。

及び眞言行を說きたまふ、法然の道に順ぜず
爾時、薄伽梵毘盧遮那佛
執金剛手に告ぐらく、善く法の相を聽け
法は分別及び、一切の妄想を離れたり
若し妄想と心思と、諸の起作とを淨め除けば
我最正覺を成じ、究竟すること虛空の如し
凡愚は知らざる所なり、邪にして妄に境界を執る
時と方と相貌等の、樂欲は無明に覆はる
彼等を度脫せんがための故に、隨順して方便を以て說く
而も實には時と方と無く、作も無く造者も無し
彼の一切の諸法は、唯實相に住せり
復次に祕密主、當來世の時に於て
劣慧の諸の衆生は、癡愛を以て自ら蔽はるゝを以て
唯有著に依つて、恆に諸の斷常と
時方と所造の業の、善と不善との諸相を樂ふ
盲冥にして果を樂ひ求め、此道を知解せず
彼等を度せんが爲の故に、隨順して是法を說く

【香水の眞言等】灑水の法を述ぶ。
【瞿摩夷】ゴーマティー（Gomati）牛糞なり。
【瞿摸怛羅】牛の液。

祕密主、是の如く所說の處所に隨つて、一地在るに治めて堅固ならしめて未だ地に至らざる瞿摩夷、及び瞿摸怛羅を取つて和合して之を塗り、次に香水の眞言を以て灑淨せよ。

即ち眞言を說いて曰へ。

南麼三曼多勃駄喃一凡そ眞言の中に平聲字あらば、皆稍上聲に之を呼べ、已下此に准ぜよ阿鉢囉二合底丁以反下同二迷二伽伽那三迷三三麼多奴揭帝四鉢囉二合吃嘌二合底微輸上聲五達摩駄睹微戍達儞六莎訶。

行者次に中に於て、意を定めて大日を觀ぜよ
白蓮華座に處し、髮髻を以て冠と爲す
種種の色の光を放ち、身に通じて悉く周遍せり
復當に正受に於てすべし、次に四方佛を想ふべし
東方をば寶幢と號く、身の色日の暉の如し
南方は大勤勇なり、遍く覺華開敷せり
金色にして光明を放ち、三昧にして諸の垢を離れたり
北方は不動佛なり、惱を離れたる清涼の定なり
西方は仁勝者なり、是を無量壽と名く
持誦者思惟して、佛室に住せよ
當に是地を受持せんには、不動大名を以てし
或は降三世を用ゐ、一切の利成就すべし

【白檀を以て等】白檀九位の曼荼羅を明す。

【諸佛慈悲者等】地を受持する法を明す。

【或は夢の中等】好相感見を明す。

白檀を以て、圓妙の曼荼羅を塗り畫け
中は第一我身、第二は諸の救世
第三は彼に同じて、等しき佛母虚空眼
第四は蓮花手、第五は執金剛
第六は不動尊なり。想念して其下に置いて
塗香と華等とを奉れ、諸の如來を思念して
誠を至して殷重を發し、是の如きの偈を演説せよ
諸佛慈悲者、我等を存念したまふが故に
明日地を受持すべし、幷に佛子當に降したまふべし

是の如く説き已りて、復當に此眞言を誦すべし。曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一薩羅婆怛他蘗多二引地瑟姹二合那引地瑟祉二合帝三阿者麗四微麼麗五娑麼二合羅嚩平六鉢囉二合吃嚟二合底丁以反鉢囉輸上曝七莎訶八

眞言を持する行者、次に悲念の心を發して
彼西方に依りて、念を繫け以て安く寢ねて
菩提心清淨の中に、我無きことを思惟せよ
或は夢の中に於て、菩薩大名稱と
諸佛の量ある無き現れて、衆の事業をなすを見るに

【或は十等】一期道場の阿闍梨灌頂の限數を作し、三六九を簡ぶ、如來の密意は阿闍梨の所釋に由らざるなり。

【一】曼荼羅名義を問答によりて述ぶ

或は安慰の心を以て、行者を勸囑したまふ
汝衆生を念ふが故に、曼荼羅を造作す
善哉摩訶薩、畫く所甚だ微妙なり
復次に餘日に於て、度すべき人を攝受せよ
若し弟子の信心ありて、種姓清淨に生れ
三寶を恭敬し、深き慧を以て身を嚴り
堪忍して懈倦すること無く、尸羅淨かにして缺くること無く
忍辱にして慳悋ならず、勇健にして行願を堅くせん
是の如くならば應に攝取すべし、餘は則ち所觀無し
或は十或は八七、或は五二一四に
當に灌頂を作すべし、若は數數此を過ぎてもせよ

（一）爾時、金剛手祕密主、復佛に白して言さく、『世尊、當に云何が此を曼荼羅と名くべき。曼荼羅とは其義云何。』佛言はく、『此は發生諸佛の曼荼羅と名く。極めて比無き味、過上無き味なり。是故に說いて曼荼羅と爲す。又祕密主、無邊の衆生界を哀愍するが故に、是れ大悲胎藏より生ずる曼荼羅の廣き義なり。祕密主、如來の無量劫に於て、積集せる阿耨多羅三藐三菩提の加持する所なり。是故に無量の德を具せり。當に是の如く知るべし。祕密主、一衆生の爲の故に、如來は正等覺を成じたまふに非ず、亦二に非ず、多に非ず、無

餘記と及び有餘記との諸の衆生界を憐愍したまふが爲の故に、如來は正等覺を成じたまへり。大悲願力を以て無量の衆生界に於て、其本性の如く而も法を演說したまふ。祕密主、大乘の宿習無く、未だ曾て眞言乘の行を思惟せざるものは、彼少分をも見聞し、歡喜し、信受すること能はず。又金剛薩埵、若し彼有情、昔大乘眞言乘道の無量の門に於て、進趣し已つて、曾て修行す。彼等が爲の故に、此に限りて名數を造立す。彼阿闍梨も亦當に大悲心を以て、是の如くに誓願を立てて無餘の衆生界を度せんが爲の故に、應當に彼無量の衆生を攝受して、菩提種子の因緣を作すべし。

眞言を持する行者、是の如く攝受し已りて
彼に命じて三たび自ら歸して、說いて先の罪を悔いしめよ
塗香と華等とを奉り、諸の聖尊を供養せしめ
彼に、三世無障礙智戒を授くべし
次に當に齒木を授くべし、若は優曇鉢羅と
或は阿說他等を結護して、而も淨を作せ
香華を以て莊嚴せよ、端直にして本末を順にせよ
面を東にし或は面を北にして、嚼み已りて而も之を擲げしめよ
當に彼衆生の成器と、非器との相を知るべし
修多羅を三結して、次に等持の臂に繫げ

【或は夢寐の中等】夢中瞻見の好相を説く。

是の如くして弟子に受けしむれば、諸の塵垢を遠離す
信心を増發せしめんが故に、當に隨順して法を說き
慰喩して其意を堅うせしむべし、是の如く偈を告げて言へ
汝無等の利を獲て、位大我に同じ
一切の諸の如來、此教の菩薩衆
皆已に汝を攝受して、大事を成辦せしむ
汝等明日に於て、當に大乘の生を得べしと
是の如く教授し已りて、或は夢寐の中に於て
僧の住處と、園林の悉く嚴好なると
堂宇の相殊特なると、顯敞なる諸の樓觀と
幢と蓋と摩尼珠の、寶と刀と悅意の華と
女人の鮮かなる白き衣ありて、端正にして色姝麗なると
密親と或は善友と、男子の天身の如くなると
群牛の牸乳に豐なると、經卷の淨無垢なると
遍知と因緣覺と、幷に佛の聲聞衆と
大乘の諸菩薩と、現前に諸果を授け
大海と河と池とを度り、及び樂ふ所の聲を聞き

【那羅延】人本生と譯す、天の力士

【商羯羅】麻醯首羅の別名。

【黑天】自在天の眷屬。

【俱吠濫毘沙門等】以下皆世の宗奉する大天なり。

【五】以下煩惱の六十心を明す、卽ち見惑なり。

受用種子なり。復次に祕密主、此心を以て生死に流轉して、善友の所に於て是の如きの言を聞く、此は是れ天なり、大天なり。一切の樂を與ふる者、若し虔誠に供養すれば一切の所願皆滿つ、謂ゆる自在天、梵天、那羅延天、商羯羅天、黑天、自在子天、日天、月天、龍尊等と、及び俱吠濫毘沙門、釋迦毘楼博叉、毘首羯磨天、閻魔、閻魔后、梵天后、世の宗奉する所の火天、迦樓羅子天、自在天后、波頭摩、德叉迦龍、和修吉、商佉、羯句嗔劍、大蓮、俱里劍、摩訶泮尼、阿地提婆、薩陀難陀等の龍、或は天仙と大圍陀論師となり、各各應に善く供養すべし。彼是の如くなるを聞いて心に慶悅を懷ひて、殷重に恭敬し隨順し修行す。祕密主、是を愚童異生の生死流轉の無畏依の第八の嬰童心と名く。祕密主、復次に殊勝の行あり。彼所說の中に隨つて殊勝に住して解脫を求むる慧生ず。謂ゆる常無常空なり。是の如きの說に隨順す。祕密主、彼空と非空とを知解するに非ず。常と斷、非有と非無とを、俱に彼は分別を以て分別無しとす。云何が空を分別する。諸空を知らざれば彼能く涅槃を相るに非ず。是故に應に空を了知して、斷と常とを離るべし。」

(五)爾時、金剛手、復佛に請うて言さく、『惟願くば世尊、彼心を說きたまへ。』是の如く說き已りて、佛、金剛手祕密主に告げて言はく、「祕密主、諦に聽け。心相とは、謂く、貪心、無貪心、瞋心、慈心、癡心、智心、決定心、疑心、暗心、明心、積聚心、鬪心、諍心、無諍心、天心、阿修羅心、龍心、人心、女心、自在心、商人心、農夫心、河心、陂池心、井心、守護心、慳心、狗心、狸心、迦樓羅心、鼠心、歌詠心、舞心、擊鼓心、室宅心、師子

心、鵂鶹心、烏心、羅刹心、刺心、窟心、風心、水心、火心、泥心、顯色心、板心、迷心、毒藥心、羂索心、械心、雲心、田心、鹽心、剃刀心、須彌等心、海等心、穴等心、受生心なり。祕密主、彼云何が貪心、謂く、染法に隨順す。云何が無貪心、謂く、無染の法に隨順す。云何が瞋心、謂く、怒法に隨順す。云何が慈心、謂く、慈法に隨順し修行す。云何が癡心、謂く、修不觀の法に隨順す。云何が智心、謂く、殊勝增上の法に順修す。云何が決定心、謂く、尊の教命を說の如く奉行す。云何が疑心、謂く、常に不定等の事を收持す、云何が闇心、謂く、疑慮無き法に於て疑慮の解を生ず、云何が明心、謂く、不疑慮の法に於て疑慮無くして修行す。云何が積聚心、謂く、無量を一と爲るを性と爲す。云何が闘心、謂く、互相に是非するを性と爲す。云何が諍心、謂く、自己に於て是非を生ず。云何が無諍心、謂く、是非倶に捨つ。云何が天心、謂く、心念に隨つて成就せんと思ふ。云何が阿修羅心、謂く、生死に處せんと樂ふ。云何が龍心、謂く、廣大の資財を思念す、云何が人心、謂く、利他を思念す。云何が女心、謂く、欲法に隨順す。云何が自在心、謂く、思惟して我一切意の如くならんと欲す。云何が商人心、謂く、初には收め聚めて後には分析する法に隨順す。云何が農夫心、謂く、初に廣く聞いて而も後に求むる法に隨順す。云何が河心、謂く、二邊に依り因る法に順修す。云何が陂池心、謂く、渴して厭足無き法に隨順す。云何が井心、謂く、是の如く思惟すること深くして復甚深なり。云何が守護心、謂く、唯此心のみ實なり、餘心は不實なり。云何が慳心、謂く、己が爲にして他に與へざ

る法に隨順す。云何が狸心、謂く、徐に進む法に順修す。云何が狗心、謂く、少分を得て以て喜び足れりと爲す。云何が迦樓羅心、謂く、朋黨羽翼の法に隨順す。云何が鼠心、謂く、諸の繫縛を斷ぜんと思惟す。云何が歌詠心、云何が舞心、謂く、是の如きの法を修行して、我當に上昇して種種に神變すべし。云何が擊鼓心、謂く、是法に修順して、我當に法鼓を擊つべし。云何が室宅心、謂く、自ら身を護る法に順修す。云何が師子心、謂く、一切の怯れ弱むこと無き法を修行す。云何が鵂鶹心、謂く、常に暗夜に思念す。云何が烏心、謂く、一切處に驚き怖る思念なり。云何が羅刹心、謂く、善の中に於て不善を發起す。云何が刺心、謂く、一切處に惡作を發起するを性と爲す。云何が窟心、謂く、窟に入ることを爲す法を順修す。云何が風心、謂く、一切處に遍じて發起するを性と爲す。云何が水心、謂く、一切不善を洗濯する法に順修す。云何が火心、謂く、熾盛の炎熱を性と爲す。云何が泥心、云何が顯色心、謂く、彼に類するを性と爲す。云何が板心、謂く、量に隨ふ法に順修して、餘の善を捨て棄つる故に。云何が迷心、謂く、執する所異に、思ふ所異なる。云何が毒藥心、謂く、生分無き法に順修す。云何が羂索心、謂く、一切處に我縛に住するを性と爲す。云何が械心、謂く、二足止り住するを性と爲す。云何が雲心、謂く、常に雨を降す思念を作す。云何が田心、謂く、常に是の如く、自身に事ふることを修す。云何が鹽心、謂く、思念する所に彼復思念を增し加ふ。云何が剃刀心、謂く、唯是の如く、剃除する法に依り止る。云何が彌盧等心、謂く、常に思惟して心高擧なるを性と

【祕密主一二三等】以下眞言行者の經る所の修行の位を明す。此は初に十地の前にある三三劫を明す。故に三劫段といふ。
【世間の三妄執等】以下初劫を明す。四妄執とは三毒の根本なり。
【瑜祇】瑜伽の女聲、相應と譯す。
【復次に祕密主等】以下第二劫を明す。二心あり、即ち無緣乘と覺心乘となり、大乘三乘教の有教と空教とに寄せて明す。
【彼是の如く等】覺乘心に就いて。
【復次に等】以下第三劫、直に眞言

爲す。云何か海等心、謂く、常に是の如く自身に受用して而も住す。云何が穴等心、謂く、先には決定して、彼後には復變改するを性と爲す。云何が受生心、謂く、諸の行業を修習して彼に生ずること有り。心是の如く同性なり。祕密主、一二三四五、再數すれば凡そ百六十心あり。世間の三妄執を越えて出世間の心生ず。謂く、是の如く唯蘊無我を解し、根と境界とに淹り留つて修行し、業と煩惱、株杌と無明の種子との十二因緣を生ずるを拔く、建立宗等を離れたり。是の如きの湛寂は、一切の外道の知ること能はざる所、先佛は一切の過を離れたりと宣說したまへり。祕密主、彼出世間の心、蘊の中に住するに、是の如くの慧隨つて生ずることあり。若し蘊等に於て著を離るることを發起して、當に聚沫、浮泡、芭蕉、陽焰、幻等を觀察して解脫を得べし。謂く、蘊、處、界、能執、所執、皆法性を離れたり。是の如きの寂然界を證する、是を出世間心と名く。祕密主、彼違と順との八心の相續と、業と煩惱との網を離るるは、是れ一劫を超越する瑜祇の行なり。復次に祕密主、大乘の行あり、無緣乘の心を發して法に我性無し。何を以ての故に。彼の往昔に是の如く修行せし者の如く、蘊の阿賴耶を觀察して、自性は幻、陽焰、影、響、旋火輪、乾闥婆城の如しと知る。祕密主、彼是の如く無我を捨つれば、心主自在にして自心本不生を覺る。何を以ての故に。祕密主、心は前後際に得べからざるが故に。是の如く自心の性を知るは、是れ二劫を超越する瑜祇の行なり。復次に祕密主、眞言門に菩薩の行を行ずる諸菩薩は、無量無數百千俱胝那庾多劫に積集する無量の功德智慧と、具に諸行を修する無量

行者に就いて明す中に二心あり、一道無爲心及び極無自性心なり。

【業と煩惱とに於て等】行者一切業煩惱を解脫する時即ち一切業煩惱の佛事に非ざる無きを知る。若し此不思議解脫時に住する時は是れ眞の羅漢にして有爲無爲に著せず、即ち世間の宗奉するところたり。

【信解行地には等】以下眞言行者修行位の十地を明す。是れ此經の宗にして淨菩提心以上の十住地は皆信解中の行なり。

【三心を觀察す】因根究竟心なり。

【十心】初地を種子、二地を牙、三地を疱、四地を葉、五地を花、六地を

の智慧方便と皆悉く成就す。天人世間の歸依する所にして、一切の聲聞辟支佛地を出過せり、釋提桓因等親近し敬禮す。謂ゆる空性は根境を離れ、相も無く境界も無く、諸の戲論を越えたり、虛空に等しき無邊一切の佛法、此に依つて相續して生ず、有爲無爲の界を離れ、諸の造作を離れ、眼、耳、鼻、舌、身、意を離れて、極めて自性無き心を生ず。祕密主、是の如きの初心をば、佛は成佛の因と說きたまふ。故に業と煩惱とに於て解脫すれども、而も業と煩惱との具依たり、世間宗奉して常に供養すべし。復次に祕密主、信解行地には三心を觀察す、無量の波羅蜜多の慧もて四攝の法を觀ず。信解地は對無く、量無く、不思議なり。十心に逮んで無邊の智生ず、我一切の諸の說く所有るは皆此に依つて而も得るなり。是故に智者は當に此一切智と信解地とを思惟すべし。復一劫を越えて此地に昇り住す。此四分の一に信解を度するなり。

（六）爾時、執金剛祕密主、佛に白して言さく『世尊、願くば救世者、心相を演說したまへ、菩薩は幾種の無畏處をか得ることある。』是の如く說き已りて、摩訶毘盧遮那世尊、金剛手に告げて言はく、『諦に聽け、極めて善く思念せよ。祕密主、彼愚童凡夫は諸の善業を修し、不善の業を害するときは、當に善無畏を得べし。若し實の如く我を知るときは、當に身の無畏を得べし。若し取蘊の集むる所の我身に於て、自の色像を捨てて觀ずるときは、當に無我無畏を得べし。若し蘊を害して法の攀緣に住するときは、當に法無畏を得べし。若し法を害して無緣に住するときは、當に法無我無畏を得べし。若し復一切の蘊、界、

果、七地を受用種子、八地を無畏依九地を有進求佛地慧生、十地を心決定となす。
【四分の一に等】下方便、中方便、上方便、上上方便の四、この第四に至つて佛地開け、究竟一切智地と名く。即ち佛果なり。
【六】以下六無畏を明す。妄想業煩惱に縛せられしがこの六處に至つて再生を得るなり。
【祕密主若し等】以下眞言行者因位の觀行に修觀する所、十喩を明す。
【牟呼栗多】時の名。
【乾闥婆城】蜃氣樓。

處、能執、所執、我、壽命等、及び法、無緣、空にして自性無性なり、此空智生ずるときは、當に一切法自性平等無畏を得べし。祕密主、若し眞言門に菩薩の行を修する諸菩薩は、深く修して十緣生句を觀察し、當に眞言の行に於て通達して證を作すべし。云何が十と爲す。謂く、幻、陽焰、夢、影、乾闥婆城、響、水月、浮泡、虛空華、旋火輪の如し。祕密主、彼眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は、當に是の如く觀察すべし。云何が幻と爲す。謂く、呪術、藥力の能造、所造の種種の色像の如きは、自の眼を惑はすが故に、希有の事を見る。展轉相生じ、十方に往來すれども、然も彼去るに非ず、去らざるに非ず。何を以ての故に。本性淨の故に。是の如く眞言の幻を持誦し、成就して、能く一切を生ず。復次に祕密主、陽焰の性は空なり、彼世人の妄想に依つて成立して談議する所有り。是の如く眞言の想も唯是れ假名なり。復次に祕密主、夢中に見る所の晝日と、牟呼栗多と刹那との歲時等に、種種の異類に住して、諸の苦樂を受くるが如きは覺め已りて都て見る所無し。是の如く夢の眞言行も、應に知るべし、亦爾なり。復次に祕密主、影の喩を以て眞言の能く悉地を發くことを解了す。面は鏡に緣つて面の像を現するが如く、彼眞言の悉地も、當に是の如く知るべし。復次に祕密主、乾闥婆城の譬を以て悉地宮を成就することを解了すべし。復次に祕密主、響の喩を以て眞言の聲を解了せよ。聲に緣つて響有るが如く、彼眞言者、當に是の如く解すべし。復次に祕密主、月の出づるに因るが故に、淨水を照して月の影像を現すが如く、是の如く眞言の水月の喩を以て彼持明者、當に是の如く

【入曼荼羅具緣眞言品】七日作壇大曼荼羅灌頂法を明す。

說くべし。復次に祕密主、天より雨を降し泡を生ずるが如く、彼眞言の悉地種種の變化も、當に知るべし亦爾なり。復次に祕密主、空中には衆生も無く、壽命も無く、彼作者も得べからざるなり、心迷亂するを以ての故に、是の如きの種種の妄見を生ずるが如し。復次に祕密主、譬へば火燼の、若し人執持して手に在りて、而も以て空中に旋轉するに、輪の像生ずることあるが如し。祕密主、應に是の如く大乘の句、心の句、無等等の句、必定の句、正等覺の句、漸次大乘生の句を了知すべし。當に法財を具足し、種種の工巧大智を出生し、實の如く遍く一切の心想を知ることを得るなり。」

入曼荼羅具緣眞言品第二之一

爾時、執金剛祕密主、佛に白して言さく、「希有なり、世尊。此諸佛自證の三菩提を說きたまふ。不思議法界は心地を超越せり。種種の方便道を以て、衆生類の爲に本性信解の如く、而も法を演說したまふ。惟願くば世尊、次に眞言行を修して、大悲胎藏より大曼荼羅王を生ずることを說きたまへ。彼諸の未來世の無量の衆生を滿足せしめ、救護し、安樂ならしめんが爲の故に。」

爾時、薄伽梵毘盧遮那、大衆會の中に於て遍く觀察し已りて、執金剛祕密主に告げて言はく、「諦に聽け、金剛手。今曼荼羅の行を修行して、一切智智を滿足する法門を說か

【一切の支分より等】支分生の曼荼羅を明す。

【阿闍梨】密教にては三密を解する人中の最上金剛薩埵、或は毘盧舍那を名く、以下說く所は灌頂の阿闍梨たるべき人の十三德を述ぶ。

【若し衆生を見るに】以下弟子たるの相を明す。

ん。『爾時、毘盧遮那世尊、本昔無盡法界を成就し、無餘の衆生界を度脫せんと誓願したまふが故に、一切如來同じく共に集會して、漸次に大悲藏發生三摩地に發入したまふ。世尊一切の支分より皆悉く如來の身を出現したまふ。彼初發心より乃至十地の諸の衆生の爲の故に、遍く十方に至り、佛身の本位に還來して、本位の中に住して而も復還り入りたまふ。時に薄伽梵、復執金剛祕密主に告げて言はく、『諦に聽け、金剛手。曼荼羅の位の初の阿闍梨は應に菩提心を發し、妙慧と慈悲ともて兼ねて衆藝を綜べ、善巧に般若波羅蜜を修行し、三乘に通達し、善く眞言の實義を解し、衆生の心を知り、諸佛菩薩を信じ、傳教灌頂等を得、妙に曼荼羅の畫を解し、其性調柔にして我執を離れ、眞言行に於て善く決定することを得、瑜伽を究習し、勇健の菩提心に住せん。祕密主、是の如きの法則の阿闍梨は、諸佛菩薩の稱讚したまふ所なり。復次に祕密主、彼阿闍梨は、若し衆生を見るに法器と爲るに堪へて諸垢を遠離し、大信解と勤勇と深信と有りて常に利他を念せん、若し弟子是の如きの相貌を具せば、阿闍梨、應に自ら往いて勸發して、是の如く告げて言ふべし。

　佛子、此大乘眞言行道の法を
　我今正しく開演せん、彼大乘器の爲なり
　過去の等正覺、及與未來世と
　現在の諸の世尊、饒益衆生に住したまふ
　是の如きの諸賢者、眞言妙法を解して

【山林に華果多く】曼荼羅建立の地處を揀擇するを明す

【阿練若】アーラヌヤ(Aranya)意樂處と譯す、行者が所樂の處なり。

【制底】チヤイトヤ(Caitya)塔のこと。

勤勇にして種智を獲、無相の菩提に坐せり
眞言の勢は無比なり、能く彼大力の
極忿怒の魔軍を摧く、釋師子救世なり
是故に汝佛子、應に是の如きの慧の方便を以て
成就を作し、當に薩婆若を獲べし
行者悲念の心を以て、發起して増廣せしめ
彼堅住して教を受けば、當に爲に平地を擇ぶべし
山林に華果多く、意を悅ばしむる諸の清泉は
諸佛の稱歎したまふ所なり、應に圓壇の事を作すべし
或は河流の處に在つて、鵝鴈等の莊嚴をなせば
彼處に慧解を以て、悲生曼荼羅を作るべし
正覺と緣導師と、聖者と聲聞衆と
曾し此地分に遊びたまふ、佛常に稱歎したまふ所なり
及び餘の諸の方所、僧坊、阿練若
華房、高樓閣、勝妙の諸池、苑
制底、火神祠、牛欄、河潬中
諸天廟と空室、仙人得道處

【火神祠】淨行梵志火祠の所。
【牛欄】牛糞堆積の處。
【河潬】雨水或は多水の會合する所
【宿直の諸執等】曼荼羅を建立するに就いて日時と曜宿とを擇ぶべきを明す。
【汝天等】驚發地神の作法を明す。

上の所說の如く、或は所意樂の處に
弟子を利益せんが故に、當に曼荼羅を畫くべし
祕密主、彼地を揀擇して礫石、碎瓦、破器、髑髏、毛髮、糠糟、灰炭、刺骨、朽木等及び蟲、蟻、蜣蜋、毒螫の類を除去すべし。是の如きの諸過を離れ、良日晨に遇ひ、日と時分とを定め、宿直の諸執皆悉く相應じて、食前の時に於て、吉祥相に値うて、先づ當に一切如來の爲に禮を作し、是の如き偈を以て、地神を警發すべし。

汝天親り護る者は、諸佛導師に於て
殊勝の行を修行し、地波羅蜜を淨む
魔軍の衆を破せし、釋師子救世の如く
我も亦魔を降伏す、我曼荼羅を畫かん

彼應に長跪して手を舒べ、地を按じて頻りに此偈を誦し、塗香と華等とを以て供養すべし。供養し已りて、眞言者は應に復一切如來を歸命すべし。然して後に地を治して、其次第の如く當に衆德を具すべし。

爾時、執金剛祕密主、頭面を以て世尊の足を禮して、偈を說いて言さく、

佛法は諸相を離れたり、法は法位に住せり
所說は譬類無し、相も無く爲作も無し
何が故に、大精進、此有相

【復次に祕密主】

隨順方便說なり。

及び眞言行を說きたまふ、法然の道に順ぜず
爾時、薄伽梵毘盧遮那佛
執金剛手に告ぐらく、善く法の相を聽け
法は分別及び、一切の妄想を離れたり
若し妄想と心思と、諸の起作とを淨め除けば
我最正覺を成じ、究竟すること虛空の如し
凡愚は知らざる所なり、邪にして妄に境界を執る
時と方と相貌等の、樂欲は無明に覆はる
彼等を度脫せんがための故に、隨順して方便を以て說く
而も實には時と方と無く、作も無く造者も無し
彼一切の諸法は、唯實相に住せり
復次に祕密主、當來世の時に於て
劣慧の諸の衆生は、癡愛を以て自ら蔽はるるを以て
唯有著に依つて、恆に諸の斷常と
時方と所造の業の、善と不善との諸相を樂ふ
盲冥にして果を樂ひ求め、此道を知解せず
彼等を度せんが爲の故に、隨順して此法を說く

【香水の眞言等】灑水の法を述ぶ。
【瞿摩夷】ゴーマティー(Gomati)牛糞なり。
【瞿摸怛羅】牛の液。

祕密主、是の如く所説の處所に隨つて、一地在るに治めて堅固ならしめて未だ地に至らざる瞿摩夷、及び瞿摸怛羅を取つて和合して之を塗り、次に香水の眞言を以て灑淨せよ。
即ち眞言を説いて曰へ。
南麽三曼多勃駄喃一凡そ眞言の中に平聲字あらば、皆上聲に之を呼べ、已下此に准ぜよ阿鉢囉二合底丁以反下同三迷二伽伽那三迷三三麼多奴揭帝四鉢囉二合吃哩二合底微輸上駄五達摩駄睹微戍達儞六莎訶。

行者次に中に於て、意を定めて大日を觀ぜよ
白蓮華座に處し、髮髻を以て冠と爲す
種種の色の光を放ち、身に通じて悉く周遍せり
復當に正受に於てすべし、次に四方佛を想ふべし
東方をば寶幢と號く、身の色日の暉の如し
南方は大勤勇なり、遍く覺華開敷せり
金色にして光明を放ち、三昧にして諸の垢を離れたり
北方は不動佛なり、惱を離れたる清涼の定なり
西方は仁勝者なり、是を無量壽と名く
持誦者思惟して、佛室に住せよ
當に是地を受持せんには、不動大名を以てし
或は降三世を用ゐ、一切の利成就すべし

【白檀を以て等】白檀九位の曼荼羅を明す。

【諸佛慈悲者等】地を受持する法を明す。

【或は夢の中等】好相感見を明す。

白檀を以て、圓妙の曼荼羅を塗り畫け
中は第一我身、第二は諸の救世
第三は彼に同じて、等しき佛母虚空眼
第四は蓮花手、第五は執金剛
第六は不動尊なり。想念して其下に置いて
塗香と華等とを奉れ、諸の如來を思念して
誠を至して殷重を發し、是の如きの偈を演說せよ
諸佛慈悲者、我等を存念したまふが故に
明日地を受持すべし、幷に佛子當に降したまふべし

是の如く說き已りて、復當に此眞言を誦すべし。曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一薩羅婆怛他蘖多引二地瑟姹二合那引地瑟恥二合帝三阿者麗四微麼麗五娑麼二合羅孃六鉢囉二合吃嘌二合底丁以反平鉢唎輸上睇七莎訶八

眞言を持する行者、次に悲念の心を發して
彼西方に依りて、念を繫け以て安く寢ねて
菩提心清淨の中に、我無きことを思惟せよ
或は夢の中に於て、菩薩大名稱と
諸佛の量ある無き現れて、衆の事業をなすを見るに

或は安慰の心を以て、行者を勸囑したまふ
汝衆生を念ふが故に、曼荼羅を造作す
善哉摩訶薩、畫く所甚だ微妙なり
復次に餘日に於て、度すべき人を攝受せよ
若し弟子の信心ありて、種姓清淨に生れ
三寶を恭敬し、深き慧を以て身を嚴り
堪忍して懈倦すること無く、尸羅淨かにして缺くること無く
忍辱にして慳悋ならず、勇健にして行願を堅くせん
是の如くならば應に攝取すべし、餘は則ち所觀無し
或は十或は八七、或は五二一四に
當に灌頂を作すべし、若は數數此を過ぎてもせよ

〔一〕爾時、金剛手祕密主、復佛に白して言さく、『世尊、當に云何が此を曼荼羅と名くべき。曼荼羅とは其義云何。』佛言はく、『此は發生諸佛の曼荼羅と名く。極めて比無き味、過上無き味なり。是故に說いて曼荼羅と爲す。又祕密主、無邊の衆生界を哀愍するが故に、是れ大悲胎藏より生ずる曼荼羅の廣き義なり。祕密主、如來の無量劫に於て、積集せる阿耨多羅三藐三菩提の加持する所なり。是故に無量の德を具せり。當に是の如く知るべし。祕密主、一衆生の爲の故に、如來は正等覺を成じたまふに非ず、亦二に非ず、多に非ず、無

【或は十等】一期道場の阿闍梨灌頂の限數を作し、三六九を簡ぶ、如來の密意は阿闍梨の所釋に由らざるなり。

【一】曼荼羅名義を問答によりて述ぶ。

餘記と及び有餘記との諸の衆生界を憐愍したまふが爲の故に、如來は正等覺を成じたまへり。大悲願力を以て無量の衆生界に於て、其本性の如く而も法を演說したまふ。祕密主、大乘の宿習無く、未だ曾て眞言乘の行を思惟せざるものは、彼少分をも見聞し、歡喜し、信受すること能はず。又金剛薩埵、若し彼有情、昔大乘眞言乘道の無量の門に於て、進趣し已つて、曾て修行す。彼等が爲の故に、此に限りて名數を造立す。彼阿闍梨も亦當に大悲心を以て、是の如くに誓願を立てて無餘の衆生界を度せんが爲の故に、應當に彼無量の衆生を攝受して、菩提種子の因緣を作すべし。

眞言を持する行者、是の如く攝受し已りて
彼に命じて三たび自ら歸して、說いて先の罪を悔いしめよ
塗香と華等とを奉り、諸の聖尊を供養せしめ
彼に、三世無障礙智戒を授くべし
次に當に齒木を授くべし、若は優曇鉢羅と
或は阿說他等を結護して、而も淨を作せ
香華を以て莊嚴せよ、端直にして本末を順にせよ
面を東にし或は面を北にして、嚼み已りて而も之を擲げしめよ
當に彼衆生の成器と、非器との相を知るべし
修多羅を三結して、次に等持の臂に繫げ

【或は夢寐の中等】夢中觀見の好相を說く。

是の如くして弟子に受けしむれば、諸の塵垢を遠離す
信心を增發せしめんが故に、當に隨順して法を說き
慰喩して其意を堅うせしむべし、是の如く偈を告げて言へ
汝無等の利を獲て、位大我に同じ
一切の諸の如來、此教の菩薩衆
皆已に汝を攝受して、大事を成辦せしむ
汝等明日に於て、當に大乘の生を得べしと
是の如く教授し已りて、或は夢寐の中に於て
僧の住處と、園林の悉く嚴好なると
堂宇の相殊特なると、顯敞なる諸の樓觀と
幢と蓋と摩尼珠の、寶と刀と悅意の華と
女人の鮮かなる白き衣ありて、端正にして色姝麗なると
密親と或は善友と、男子の天身の如くなると
群牛の粹乳に豐なると、經卷の淨無垢なると
遍知と因緣覺と、幷に佛の聲聞衆と
大乘の諸菩薩と、現前に諸果を授け
大海と河と池とを度り、及び樂ふ所の聲を聞き

【二】灌頂入壇の前方便の佛性戒を說く。

空中に吉祥なり、當に意樂の果を與ふべしと言ふを覩見せん
是の如き等の好相を、宜しく諦に分別すべし
此と相違せんものをば、當に善夢に非ずと知るべし
善く戒に住せん者、晨に起き師に白し已れ
師は此句法を說いて、諸の行人を勸發せよ
此殊勝の願道は、大心の摩訶衍なり
汝今能く志求す、當に如來自然智の
大龍を成就すべし、世間に敬ふこと塔の如し
有と無と悉く超越して、垢無きこと虛空に同じ
諸法は甚だ深奧なり、了じ難く含藏無し
一切の妄想を離れ、戲論本より無なるが故に
作業妙にして無比なり。常に二諦に依る
是乘の殊勝の願なり、汝當に斯道に住すべし

(二)爾時、住無戲論執金剛、佛に白して言さく、『世尊、願くば三世無礙智戒を說きたまへ。若し菩薩此に住するものは、諸佛菩薩をして皆歡喜せしむるが故に。』是の如く說き已りて、佛、住無戲論執金剛等に告げて言はく、『佛子、諦に聽け。若し族姓の子、是戒に住する者は、身語意を以て合せて一と爲して、一切の諸法を作さざれ。云何をか戒と爲す。謂ゆる、

【淨香水を授與等】誓水をいふ、一切衆をして此前に於て此香水を喫らしめて自ら其心に誓らて要ず大菩提の願を退かしめざるなり。

觀察して自身を捨てて諸佛菩薩に奉獻す。何を以ての故に。若し自身を捨つる時は、彼三事を捨つと爲す。云何が三と爲す。謂く、身語意なり。此故に、族姓の子、身語意の戒を受くるを以て菩薩と名くることを得。所以は何ん。彼身語意を離れたるが故に。菩薩摩訶薩、應に是の如く學すべし。次に明日に於て金剛薩埵を以て自身を加持し、世尊毘盧遮那の爲に禮を作せ。應に淨き瓶を取つて香水を盛滿して、降三世の眞言を持誦して用て之を加し、初門の外に置いて、用て是諸の人等に灑ぐべし。彼阿闍梨、淨香水を以て授與して彼に飲ましめよ、心清淨の故に。

爾時、執金剛祕密主、偈を以て佛に問はく、

種智說中尊、願くは彼時分を說きたまへ
大衆は何れの時に於てか、普く集りて靈瑞を現じ
曼荼羅の阿闍梨は、慇懃に眞言を持せん

爾時に薄伽梵、持金剛慧に告げたまはく

常に當に此夜に於て、曼荼羅を作るべし
傳法の阿闍梨、是の如く
次に五色の修多羅を取て、一切の佛に稽首すべし
大毘盧遮那もて親り、自ら加持を作せ
東方を以て首と爲し、對して修多羅を持せよ

臍に至り空に在いて、漸次に右に旋り轉じて
是の如く南及び西、終に北方に竟れ
第二に界を安立せんとき、亦初方より起せ
諸の如來を憶念し、所行は上の說の如くせよ
右方及び後方、復勝方に周せよ
阿闍梨、次に廻りて涅哩底に依る
受學對持のものは、漸次に以て南に行れ
此より右に旋繞して、轉じて風方に依る
師位は本處を移して、火の方に居せよ
眞言を持する行者、復是の如きの法を修せよ
弟子は西南に在り、師は伊舍尼に居す
學者復旋繞して、轉じて火の方に依れ
師位は本處を移して、風の方に住せよ
是の如く眞言者、普く四方の相を作る
漸く次に其中に入る、三位を以て之を分つ
已に三の分位を表して、地相普く周遍せば
復一一の分に於て、差別して以て三とせよ

【內心に妙白蓮を等】曼荼羅の中臺八葉院を明す、即ち一に曼荼羅の總體を說く。

【彼東には等】次に遍知院、三角印は其院主又以下は下三重の第一院なり。

【導師諸佛の母】毘盧舍那佛母なり

是中の最初の分は、作業所行の道なり
其餘の中と後との、分は聖天の住處なり
方に等しく四門有り、其分劑を知るべし
誠心を以て殷重に、諸の聖尊を運布せよ
是の如く衆相を造さんには、均調にして善く分別せよ
內心に妙白蓮をかけ、胎藏は正しく均等にして
藏の中に一切の、悲生曼荼羅を造れ
十六央具梨にせよ、此を過ぎても是れ其量なり
八葉正しく圓滿にして、鬚蘂皆嚴好にせよ
金剛の智印を遍く、諸の葉間に出せ
此華臺の中より、大日勝尊現れたまふ
金色にして暉曜を具し、首に髮髻冠を持せり
救世圓滿の光ありて、熱を離れ三昧に住せり
彼東には應に一切、遍知印を畫き作るべし
三角にして蓮花の上にあり、其色皆鮮白なり
光焰遍く圍遶し、晧潔にして普く周遍せり
次に其北の維に於ける導師諸佛の母は

【北方に等】次に觀音院大精進は院主。
【淨月或商佉】是れ上妙の蠡貝なり
【軍那花】西方に生ずる鮮白の花。

晃曜ありて眞金色なり、縞素を以て衣と爲せり
遍く照すこと猶し日光のごとし、正受にして三昧に住せり
復彼南方に於て、救世の佛菩薩
大德聖尊の印をなせ、號して滿樂願と名く
眞陀摩尼珠を、白蓮華に住せしめよ
北方に、大精進　觀世自在者あり
光　色皓月と、商佉と軍那華との如し
微笑して白蓮に坐し、髻　に無量壽を現せり
彼の右に大　名　稱、聖者多羅尊あり
青と白と色を相雜へて、中年の女人の狀にせよ
合掌して青蓮を持し、圓光遍ぜざること靡くして
暉發せること猶し淨金のごとし、微笑して鮮白の衣なり
右邊に毘倶胝をけ、手に數珠鬘を垂れ
三目にして髮髻を持し、尊形皓素の如し
圓光の色、主無くして黄赤　白　相入れり
次に毘倶胝に近きて、得大勢尊を畫け
彼服は商佉の色にして、大悲蓮花手なり

滋榮して未だ敷けず、圍遶するに圓光を以てす
明妃を其側に住せしめよ、持名稱者と號す
一切の妙なる瓔珞を以て、金色の身を莊嚴せり
鮮妙の華の枝を執れり、左は鉢胤遇を持せり
聖者の多羅に近きて、白處尊を住せしめよ
髮冠にして純帛を襲ひて、鉢曇摩花の手なり
聖者の前に於て、大力持明王を作せ
晨朝の日の暉色にして、白蓮を以て身を嚴る
赫奕として焰鬘を成し、吼え怒りて牙を出現せり
利爪にして獸王の髮あり、阿耶揭利婆なり
是の如き三摩地は、觀音の諸の眷屬なり
復次に華臺の表、大日の右の方に
能く一切願を滿たせる、持金剛慧者あり
鉢孕遇華の色なり、或は復綠なる寶の如くせよ
首に衆寶の冠を戴き、瓔珞を以て身を莊嚴せり
間錯して互に嚴飾し、廣多にして數無量なり
左に拔折羅を執り、周環して光焰を起せり

【阿耶揭利婆】ハヤグリヷ（Hayagriva）馬頭觀音のこと。蓮化部の忿怒持明王なり。

【復次に華臺の表等】次に金剛手院の持金剛慧者は其院主。

【鉢孕遇華】淡黄色なり。

【拔折羅】ヷジラ（Vajra）金剛杵のこと。

【忙莽雞】金剛部母なり。

【金剛商羯羅】金剛鏁なり。

【執金剛の下等】以下降三世不動等は持明院を明す。

金剛藏の右には、謂ゆる忙莽雞あり
亦堅慧の杵を持し、身を嚴るに瓔珞を以てせり
彼の右の次に、大力金剛針を置くべし
使者衆圍遶して、微笑して同じく瞻仰せり
聖者の左方には、金剛商羯羅あり
金剛の鏁を執持し、自部の諸使と倶なり
其身淺黃色にして、智杵を以て標幟とせり
執金剛の下に於て、忿怒降三世あり
大障を摧伏する者なり、號して月黶尊と名く
三目にして四の牙を現せり、夏時の雨雲の色にして
阿吒吒の笑ふ聲あり、金剛寶もて瓔珞とし
衆生を攝護するが故に、無量の衆圍遶せり
乃至百千の手に、衆くの器械を操持せり
是の如きの忿怒等は、皆蓮華の中に住せり
次に西方に往いて、無量の持金剛を畫け
種種金剛の印、形、色各の差別にして
普く圓滿の光を放つ、諸の衆生の爲の故なり

【眞言を持する行人】以下第三院を明す。第二院は隱密語たり。

眞言主の下に、涅哩底の方に依つて
不動如來使あり、慧刀と羂索とを持し
頂髮を左肩に垂れたり、一目は諦に觀
威怒にして身に猛焰あり、安住して盤石に在す
面門に水波の相ありて、充滿せる童子の形なり
是の如きは具慧者なり。次に應に風方に往いて
復忿怒尊を畫くべし、謂ゆる勝三世なり
威猛の焰圍遶し、寶冠にして金剛を持せり
自の身命を顧みず、專ら請うて教を受く
已に初の界域の、諸尊の方位等を說く
眞言を持する行人、次に第二院に往いて
東方の初門の中に、釋迦牟尼を畫け
圍遶して紫金色なり、三十二相を具せり
袈裟衣を被服し、白蓮華の臺に坐り
教をして流布せしめん爲に、彼に住して法を說く
次に世尊の右に於て、遍知眼を顯示せよ
熙怡の相にして微笑せり、遍體に圓淨の光あり

【能寂母】釋迦牟尼母のこと。

喜見無比の身なり、是を能寂母と名く
復彼尊の右に於て、毫相の明を圖寫せよ
鉢頭摩華に住し、圓に照して商佉の色なり
如意寶を執持して、衆の希願を滿足す
暉光ありて大精進なり、救世の釋師子なり
聖尊の左の方に、如來の五頂あり
最初をば白傘と名く、勝頂と最勝頂と
衆德の火光聚と、及與捨除頂と
是を五大頂と名く、大乘の釋種なり
應當に是處に依つて、精進にして衆相を造るべし
次に其北の方に於て、淨居衆を布列せよ
自在と普華と、光鬘と及び意生と
名稱遠聞と等なり、各其次第の如し
毫相の右に於て、復三佛頂を畫け
初をば廣大頂と名け、次をば極廣大と名け
及び無邊音聲となり、皆善く安立すべし
五種の如來の頂は、白と黃と眞金との色なり

【七母、黑夜】何れも女鬼。
【涅哩底鬼王】護方の羅刹王。
【縛嚕拏龍王】西方護方龍王なり。

復次の三佛頂は、白と黄と赤とを兼ね備へたり
其光普くして深廣なり、衆の瓔珞を以て莊嚴せり
發す所の弘誓力、一切の願を皆滿ず
行者の東の隅に於て、火仙の像を作れ
熾焰の中に住す、三點灰を以て標と爲す
身色皆深赤なり、心に三角の印を置く
圓焰の中に在りて、珠と及び澡瓶とを持せり
右の方に閻魔王あり、手に壇拏の印を秉り
水牛を以て座と爲す、震電玄雲の色なり
七母と并に黑夜と、死后等と圍遶せり
涅哩底鬼王は、刀を執る恐怖の形にせよ
縛嚕拏龍王は、羂索を以て印と爲せり
初の方には釋天王あり、妙高山に安住せり
寶冠の瓔珞を被りて、跋折羅の印を持せり
及び餘の諸の眷屬を、慧者善く分布せよ
左に日天衆を置く、輿輅の中に在らしめよ
勝無勝の妃等、翼從して侍衞せり

【毘紐】那羅延天なり。
【塞建那】童子天なり。
【商羯羅】摩醯首羅なり。
【眞言を持する行者】以下第二院文殊院を明す。第三院といふは隱密語なり。

大梵を其右に在け、四面にして髮冠を持せよ
唵字の相と印と爲し、蓮を執つて鵝の上に在す
西の方には諸の地神と、辯才と及び毘紐と
塞建那と風神と、商羯羅と月天となり
是等は龍方に依つて、之を畫いて遺謬すること勿れ
眞言を持する行者、迷惑せざる心を以てせよ
佛子次に應に、持明大忿怒を作るべし
右をば無能勝と號し、左は無能勝妃なり
持地神は瓶を奉げて、虔み敬ひて長跪せり
及び二の大龍王、難陀と拔難陀と對して
廂の曲れる中に處せり、通門の大護なり
所餘の釋種の尊の眞言と、印壇との所說の
一切の法は、師應に具に開示すべし
眞言を持する行者、次に第三院に至つて
先づ妙吉祥を圖せよ、其身鬱金色なり
五髻の冠其頂にあり、猶し童子の形の如し
左に青蓮花を持し、上に金剛印を表せり

【髻設尼】髻端嚴の義、優婆は共に次ぐものなり。【質多羅】雜色の義。

慈顏を以て遍く微笑して、白蓮臺に坐し
妙相圓普の光、周匝して互に暉映せり
右邊に應に次に、網光童子の身を畫くべし
衆の寶網を執持し、種種の妙なる瓔珞あり
寶蓮華座に住して、而も佛長子を觀ず
左邊には五種の、與願の金剛使を畫け
謂ゆる髻設尼と、優婆髻設尼と
及與質多羅と地慧と、並に請召となり
斯の如きの、五の使者に五種の奉教者あり
二衆共に圍遶して、無勝智を侍衞せり
行者右方に於て、次に大名稱の
除一切蓋障を作れ、如意寶を執持せり
二分の位を捨てて、當に八菩薩を畫くべし
謂ゆる除疑怪と、施一切無畏と
除一切惡趣と、救意慧菩薩と
悲念具慧者と、慈起大衆生と
除一切熱惱と、不可思議慧となり

次に復斯位を捨てて、北の勝方に至れ
行者一心を以て憶持し、衆の綵を布して
善忍を具する、地藏摩訶薩を造れ
其座極めて巧嚴ならしめよ、身焰胎に處せり
雜寶莊嚴の地、綺錯互に相間へたり
四寶を以て蓮華と爲す、聖者の安住する所なり
乃與大名稱の、無量の諸の菩薩あり
謂く寶掌と寶手と、乃與持地等と
寶印手と堅意となり、上首の諸の聖尊
各無數の衆と、前後に共に圍遶せり
次に復龍方に於て、當に虛空藏を畫くべし
勤勇にして白き衣を被、刀の焰光を生ぜるを持す
乃與諸の眷屬、正覺所生の子
各其次第に隨つて、正蓮の上に列坐せり
今彼の眷屬の、大乘の菩薩衆を說かん
善く圖し藻繢すべし、諦誠にして迷忘すること勿れ
謂く虛空無垢と、次に虛空慧と名くると

及び清淨慧等と、行慧と安慧と等なり
是の如きの諸の菩薩は、常に精進を勤むる者なり
各其次第の如く畫いて、身を莊嚴せよ
略して大悲藏、曼荼羅の位を說き竟りぬ

爾時、執金剛祕密主、一切衆會の中に方て、諦に大日世尊を觀じたてまつりて、目暫くも瞬かず、而も偈を說いて言はく、

一切智慧者、世間に出現したまふ
彼優曇華の時時に、乃ち一たび現るるが如し
眞言所行の道は、倍復甚だ遇ひ難し
無量俱胝劫に、作れる所の衆の罪業
此曼荼羅を見るときは、消滅して盡く餘すこと無し
何に況んや無量に稱して、眞言の行法に住するをや
此無上句の、眞言救世者を行ずれば
諸の惡趣を止斷し、一切の苦生ぜず
若し是の如きの行を修するときは、妙慧深くして動ぜざるなり

時に普く集會す。一切大衆及び諸の持金剛者、一音聲を以て金剛手を讚歎して言はく、

善い哉善い哉、大勤勇、汝已に眞言の行を修行す

【云何なるか彩色の義】曼荼羅彩色の義を問ふ。

【門標の旗等】諸門の標相を問ふ。

【食と華と等】供養の具を問ふ。

【云何が弟子を等】加持敎授の方便を問ふ。

【願くは護摩の等】護摩の處所を問ふ

【云何が眞言の相】眞言の部類字義句義を問ふ。

【云何が三昧に等】眞言三昧門淺深差別の相を問ふ。此れ皆曼荼羅を建立するの支分なり。

【法界の味】同一淨菩提味をいふ。

能く一切の眞言の義を問はんとす、我等も咸く意に思惟することあり
一切現に汝が證驗になるべし、眞言の行力に住するに依るなり
及び餘の菩提大心の衆も、當に眞言の法に通達することを得べし
爾時、執金剛祕密主、復世尊に白して、而も偈を說いて言さく、
云何なるか彩色の義、復當に何の色を以てすべき
云何なるか而も運布せん、是色は誰をか初とせん
門標の旗の量等、廟衞も亦是の如し
云何なるか諸門を建てん、願くは尊、其量を說きたまへ
食と華と香等と、及與衆の寶瓶とを奉る
云何が弟子を引かん、云何が灌頂せしめん
云何なるか師を供養せん、願くば護摩の處を說きたまへ
云何が眞言の相、云何が三昧に住する
是の如く問を發して已つて、牟尼諸法の王
持金剛慧に告げたまはく、一心にして諦に聽くべし
最勝の眞言の道は、大乘の果を出生す
汝今我に請問す、大有情の爲に說かん
彼衆生界を染むるに、法界の味を以てす

【大乘の果】佛の無上慧なり。

【潔白を最も初と等】白は毘盧遮那淨法界色、赤は寶幢如來の色、黃は娑羅樹王の色、青は無量壽の色、黑は鼓音如來の色なり。

古佛の宣說したまふ所なり、是を名けて色の義と爲す
先づ内色を安布す、外色を安布するに非ず
潔白を最も初と爲して、赤色を第二と爲す
是の如く黃と及び青と、漸次にして彰に著けよ
一切の内は深き玄にせよ、是を色の前後と謂ふ・
門の標幟を建て立てんこと、量中胎の藏に同うせよ
廟衞も亦是の如し、華臺は十六節にせよ
應に彼初門は、内壇と齊等なることを知るべし
智者、外院に於ては漸次に增し加ふ
彼廟衞の中に於て、當に大護者を建つべし
略して三摩地を說かん、一心にして緣に住せよ
廣義は復殊異なり、大衆生諦に聽け
佛一切空と、正覺の等持とを說きたまふ
三昧を以て心を證知す、異緣に從つて得るに非ず
彼是の如く境界は、一切如來の定なり
最に說いて大空と爲し、薩婆若を圓滿す

大毘盧遮那成佛神變加持經卷第一

大毘盧遮那成佛神變加持經　卷第二

大唐天竺三藏善無畏共沙門一行譯す

入曼荼羅具縁眞言品第二之餘

【一切如來一體速疾等】一切如來は皆同一法界智體なりと證知し、一念の中に能く無量諸三昧門を次第觀察し、一一の門に各無量衆生を成就する一體速疾力三昧といふ。

【昔道場に坐し】成佛の下迹を明す

【我本不生を等】菩提の實義を說く 語言の道等以下は阿字義の轉釋なり

爾時、毘盧遮那世尊、一切の諸佛と同じく共に集會して、各各に一切の聲聞、縁覺、菩薩の三昧道を宣說したまふ。時に佛、一切如來一體速疾力三昧に入りたまふ。

是に於て世尊、復執金剛菩薩に告げて言はく、

我昔道場に坐して、四魔を降伏し

大勤勇の聲を以て、衆生の怖畏を除く

是時に梵天等、心に喜んで共に稱說す

此に由つて諸の世間に、號して大勤勇と名けき

我本不生を覺り、語言の道を出過す

諸の過を解脫することを得て、遠く因縁を離れたり

空は虛空に等しと知つて、如實相の智生ず

已に一切の暗を離れて、第一實にして垢無し

諸趣は唯想と名とのみなり、佛相も亦復然なり
此第一の實際は、加持力を以ての故に
世間を度せんが爲に、而も文字を以て說きたまふ

爾時、執金剛具德者、未だ曾て有らざる、開敷の眼を得て一切智を頂禮して、偈を說いて言さく、

諸佛は甚だ希有なり、權智は不思議なり
一切の戲論を離れて、諸佛自然の智あり
而も世間の爲に說いて、衆の希願を滿足せしめたまふ
眞言の相は是の如し、常に二諦に依る
若し諸の衆生有りて、此法教を知る者は
世人の應に供養すべきこと、猶し制底を敬ふが如くせよ

時に執金剛、此偈を說き已りて、諦に毘盧遮那を觀たてまつりて、目暫くも瞬かず、默然として住す。是に於て世尊、復執金剛秘密主に告げて言はく、「復次に秘密主、一生補處の菩薩は、佛地の三昧道に住して造作を離れ、世間の相を知り、業地に住し、堅く佛地に住す。復次に秘密主、八地の自在の菩薩の三昧道は、一切の諸法を得ず。有の生を離れて、一切の幻化なりと知る。是故に、世に觀自在者と稱す。復次に秘密主、聲聞衆は、有縁の地に住して、生滅を識り、二邊を除き、極觀察智もて、不隨順の修行の因を得、是を

【此第一の實相等】通じて世諦を釋し起教の所由を明す

【一】以下金剛手の領解を明す。

【開敷の眼】心蓮花眼の開敷なり。

【若し諸の衆生等】佛の菩提印を信解すれば無量の福業を得ることを明す

【默然として住す】若し言語を以て佛に白さば恐らく至理に乖かん、是れ甚深の發問なり。

【復次に秘密主】以下佛、菩薩、聲聞、緣覺、世間の五種三昧道を明す

【二】曼荼羅具緣の中、眞言の支分を明す。
【等正覺の眞言等】以下諸眞言の相を說く。鈔中初四句は眞言の通相なり。
【因陀羅宗】帝釋自ら聲論を造り、能く一言に具に衆義を含む故に引證とす。
【增加の法句等】次に眞言の別相を明す。諸佛菩薩の眞言は一言の中に具に衆德を含めり

聲聞の三昧道と名く。祕密主、緣覺は、因果を觀察し、無言說の法に住して、無言說を轉ぜず、一切の法に於て極滅語言三昧を證せり、是を緣覺の三昧道と名く。祕密主、世間の因果と及び業とは、若は生じ、若は滅して、他の主に繫屬して空三昧生ず、是を世間の三味道と名く。」

爾時、世尊、偈を說いて言はく、

祕密主、當に知るべし、此等の三昧道
若し佛世尊と、菩薩救世者と
緣覺と聲聞との說に住するときは、諸の過を摧き害す
若し諸天世間の、眞言法教の道は
是の如きの勤勇者には、衆生を利せんが爲の故なり

(二)復次に世尊、執金剛祕密主に告げて言はく、『祕密主、汝當に諦に諸の眞言の相を聽くべし。』金剛手言さく、『唯然り、世尊、願樂くば聞かんと欲す。』

爾時、世尊、復頌を說いて曰はく、

等正覺の眞言の、言名成立の相は
因陀羅宗の如くにして、諸の義利成就せり
增加の法句と、本名と行と相應することあり
若は唵字、吽字、及與發磔迦と

【一一の句安布等】聲聞は法性に入ること未だ深からず一言の中に衆德を含む能はざるが故にいふ。

【三昧分に異等】緣覺も聲聞の如きも其眞言は、四聖諦にも非ずして、十二因緣寂滅の理のみを說く故に、三昧分異といふ。

【此眞言の相等】此れ眞言の相は常住不變なるを明す

或は頡利嬪と等は、是れ佛頂の名號なり
若は揭喋俱拏と、佉陀耶咩闍と
訶那と摩囉也と、鉢吒也と等の類は
是れ奉教使者の、諸の忿怒の眞言なり
若し納塞の字と、及び莎縛訶と等有らば
是れ三摩地を修する、寂行者の標相なり
若し扇多の字と、微戍陀の字等有らば
當に知るべし、能く一切の希願する所を滿足す
是れ正覺佛子、救世者の眞言なり
若し聲聞の所說は、一一の句安布せり
是中に辟支佛は、復少しき差別あり
謂く三昧分に異にして、業生を淨め除く

復次に祕密主、此眞言の相は、一切の諸佛の作る所に非ず、他をして作らしめず。亦隨喜せず、何を以ての故に。是諸法は、法として是の如くなるを以ての故に。若し諸の如來出現したまふとも、若は諸の如來出でたまはざるとも、諸法は法爾として是の如く住す。謂く、諸の眞言は眞言にして法爾なるが故に。祕密主、等正覺を成ぜる一切知者、一切見者、世に出興して而も自ら此法もて、種種の道を說き、種種の樂欲と、種種の諸

【等正覺を成ぜる等】法爾常住なるも、加持神力を以て世に出興し衆生を利益するを明す。
【此書寫の文字等】世間の文字の外に眞言の文字なきことを明す。
【眞實の諦語】能加持の法を明す。
【阿字門】阿字は一切法教の本にして凡そ最初開口の音は皆阿聲あり、若此を離れては一切の言說なれば衆聲の母となす。

の衆生の心とに隨つて、種種の句と、種種の文と、種種の方に隨ふ語言と、種種の諸趣の音聲とを以て、而も加持を以て、眞言の道を說きたまふ。祕密主、云何が如來の眞言道なる。謂く、此書寫の文字を加持するなり。祕密主、如來は無量百千俱胝那庾多劫に、眞實の諦語、四聖諦、四念處、四神足、十如來力、六波羅蜜、七菩提寶、四梵住、十八佛不共法を、積集し修行したまへり。祕密主、要を以て之を言はば、諸の如來の一切智智と、一切如來の自福智力と、自願智力と、一切の法界の加持力ともて、衆生に隨順して、其種類の如く、眞言教法を開示したまふ。云何が眞言教法なる。謂く、阿字門は一切の諸法は本より生せざるが故に。迦字門は一切の諸法は作業を離れたるが故に。佉字門は一切諸法は虛空に等しくして得べからざるが故に。哦字門は一切諸法は一切の行得べからざるが故に。伽重聲字門は一切諸法は一合得べからざるが故に。遮字門は一切諸法は一切の遷變を離れたるが故に。車字門は一切諸法は影像得べからざるが故に。若字門は一切諸法は生得べからざるが故に。社字門は一切諸法は戰敵得べからざるが故に。吒字門は一切諸法は慢得べからざるが故に。咤字門は一切諸法は長養得べからざるが故に、拏字門は一切諸法は怨對得べからざるが故に、茶重聲字門は一切諸法は執持得べからざるが故に。多字門は一切諸法は如如得べからざるが故に。他字門は一切諸法は住處得べからざるが故に。娜字門は一切諸法は施得べからざるが故に。馱重聲字門は一切諸法は法界得べからざるが故に。波字門は一切諸法は第一義諦得べからざるが故に。頗字門は一切諸法は堅からずして聚沫の如くなる

【眞言の三昧門等】以下五偈は眞言の功德を歎ず。

【是れ第一の眞實なり等】次二偈は眞實誠信印成す。【若し此法教を等】諸佛道同を引いて世諦を信ぜよと勸むるなり。

が故に。麼字門は一切諸法は縛得べからざるが故に。婆字門は一切諸法は一切有得べからざるが故に。野字門は一切諸法は一切乘得べからざるが故に。囉字門は一切諸法は一切の諸の塵染を離れたるが故に。邏字門は一切諸法は一切相得べからざるが故に。縛字門は一切諸法は語言道斷の故に。奢字門は一切諸法は本性寂の故に。沙字門は一切諸法は性鈍の故に。娑字門は一切諸法は一切諦得べからざるが故に。訶字門は一切諸法は因得べからざるが故に。秘密主、仰若拏那麼は、一切の三昧に於て自在に速に能く諸事を成辦し、所爲の義利皆悉く成就す。

爾時、世尊、而も偈を說いて言はく、

眞言の三昧門は、一切の願を圓滿す
謂ゆる諸の如來の、不可思議の果なり
衆の勝願を具足するは、眞言の決定の義なり
三世を超越して、垢無きこと虛空に同じ
不思議の心に住して、諸の事業を起作す
修行の地に到るものに、不思議の果を授けたまふ
是れ第一の眞實なり、諸佛の開示したまふ所なり
若し此法教を知りぬれば、當に諸の悉地を得べし
最勝眞實の聲と眞言と、眞言の相と

行者諦に思惟して、當に不壞の句を得べし

(三)爾時、執金剛祕密主、佛に白して言さく、『希有なり、世尊、佛不思議の眞言の相の道法を說きたまふ、一切の聲聞緣覺に共せず、亦普く一切衆生の爲にしたまふに非ず。若し此眞言道を信ずる者は、諸の功德の法は皆當に滿足すべし。唯願くば世尊、次に曼荼羅に須ふる所の次第を說きたまへ。』

是の如く說き已りて、世尊、復金剛手に告げて、偈を說いて言はく、

眞言を持する行者、諸の聖尊を供養するには
意を悅ばしむる華の、潔白黄朱色なる
鉢頭摩と靑蓮と、龍華奔那伽と
計薩羅と末利と、得蘗藍と瞻蔔と
無憂と底羅劍と、鉢吒羅と娑羅と
是等の鮮妙華と、吉祥にして衆の樂ふ所とを奉るべし
採り集めて以て鬘と爲して、敬心にして而も供養すべし
栴檀と及び靑木と、苜蓿香と鬱金と
及び餘の妙塗香とを、盡く持ち以て奉獻すべし
沈水と及び松香と、薩藍と龍腦と
白檀と膠香等と、失利婆塞迦と

【最勝眞實の偈等】以下は眞諦に任せよと勸む。
【三】以下上を躡て入曼荼羅に須ふる所の次第を請問す。
【意を悅ばしむる華の等】供養具の中先づ獻花を明す。如來部には白、蓮花部には黄、金剛部には赤を以てすべし。又諸佛には白、諸菩薩には黄、諸の世天には赤を以てすべし。
【奔那伽】龍樹花なり。
【計薩羅等】以下婆羅までの花は天竺の花。
【鬘と爲して等】これ錯雜莊嚴にして或は綴り或は結ぶなり。
【栴檀と等】次に塗香を明す。
【沈水と等】次に焚香を明す。
【失利婆塞】此方の薫陸香に似たり

【復次に大樂生等】次に飯食。【歡喜】草を以て餅を煮、藥味及び三種辛藥とを雜へたるものを歡喜丸といふ。【曼茶迦】薄き餅【布利迦】籠を著けたる餅、間穴は棘して穴を爲す餅【末塗失囉】籠を著けたる上に更に糖蜜を塗る餅、【嬔諸迦】起麺を用て餅を作りて籠を著けて油を以て煮たるもの、【播鉢吒食】麪を卷きたる沙糖餅播鉢吒は不起麺の饅頭なり【謇茶】白糖なり【又諸の燈等】次に燈明を明す。【門標は異形類等】其非業は入曼茶羅具緣品中所示の相に准ずべし。【或は心を以て等】三密の理供を明す

及び餘の焚香の類との、芬馥にして世に稱美せしを
常に法教に隨つて、聖尊に奉るべし
復次に大樂生、教に依つて諸の食を獻むべし
乳糜と酪飯と、歡喜と曼茶迦と
百藥の甘美の餅と、淨妙の砂糖餅と
布利迦と間穴と、及び末塗失囉と
嬔諸迦と無憂と、播鉢吒食等との
是の如きの諸の餚饍と、種種の珍妙の果と
謇茶と石蜜と、糖蜜と生と熟との蘇と
種種の諸の漿飲と、乳と酪と淨牛味とを奉れ
又諸の燈燭を奉るには、異類の精淨の器に
妙なる香油を盛滿して、布き列ねて照明を爲せ
四方の繒幡蓋は、種種の色を相間ふべし
門標は異形類にして、幷に懸くるに鈴と鐸とを以てす
或は心を以て供養す、一切皆之を作せ
眞言を持する行者、意に存して遺忘すること勿れ
次に遏羅者を具せよ、或は六或は十八なり

【次に迦羅奢を等】吉祥瓶の法瓶を明
迦羅奢はなすり。
【參照】上服なり
其脩常の服に兼倍
する故なり
【次に受すべき等】次に受者引入の法
を明す。

諸々の寶と藥とを備へ足らしめ、衆々の香水を盛滿せよ
枝條上に垂れ布いて、華の果實を間へ挿さめ
塗香等嚴飾し、結護して作淨すべし
頸に繫くるに妙なる衣を以てし、瓶の數或は增廣にす
上首の諸々の尊等に、各各に兼服を奉れ
諸餘の大有情に、一一に皆之を獻れ
是の如く供養を修して、次に度すべき者を引け
之に灑ぐに淨水を以てし、塗香と華とを授け與へ
菩提心を發して、諸々の如來を憶念せしめよ
一切皆當に淨き佛家に生るることを得べし
法界生の印と、及與法輪の印を結んで
金剛有情等、而も用て加護を爲せ
次に當に自ら、諸佛の三昧耶を結んで
三轉して淨衣を加し、眞言法教の如くせよ
而も用て其首に覆うて、深く悲念の心を起して
三たび三耶昧を誦すべし、頂に戴くに囕字を以てし
嚴るに大空點を以てし、周匝して焰鬘を開け

【寂然護摩を作す等】息災護摩を明す。

字門より白光を生ず、流れ出づること滿月の如し
現に諸の救世に對して、而も淨華を散ぜしめよ
其所至の處に隨つて、行人而も尊奉すべし
曼荼羅の初門の、大龍廂衞の處
二門の中間に於て、學人を安立せよ
彼に住して法教に隨つて、而も衆の事業を作せ
是の如く弟子をして、遠く諸の過を離れしむべし
寂然護摩を作すべし、護摩は法に依つて住す
初め中胎藏より、第二の外に至つて
曼荼羅の中に於て、無疑慮の心を作す
其自ら肘量の如く、陷りて光明壇を作れ
四節を周界と爲し、中に金剛印を表す
師位の右方に、護摩の其支分をおけ
學人其左に住して、蹲踞して敬心を增す
自ら吉祥草を敷き、地に藉いて以て安坐す
或は衆の綵色を布すべし、形顯し極めて嚴麗ならしめて
一切の慧の事を成せよ、是れ略護摩の處なり

【四】大天の眞言なり、此中初の阿字を種子とす。

【五】寂災の眞言なり、初の阿字を種子とす。

【行者護摩し竟て】阿闍梨を供養する法を明す、世財を捨てて出世の法財を得しめんが爲なり。

周匝して祥茅を布け、端坐して互に相加して
右に旋し皆齊く厚うして、遍く灑ぐに香水を以てす
火光尊を思惟すべし、一切を哀み愍むが故に
當に滿器を持して、而も以て之を供養すべし
爾時に善く住する者は、當に是眞語を說くべし
(四)南麼三曼多勃駄喃一 唵揭喃二合曳 莎訶三
復三昧の手を以て、次に諸弟子の慧手の
大空指を持して、略して護摩を奉持せよ
獻る每に輙ち誠に誦して、各別に三七に至せ
當に慈愍の心に住すべし、法に依つて眞實の言を以てす
(五)南麼三曼多勃駄喃一 阿去摩訶引 扇底丁以反下同 蘖多二 扇底羯囉三 鉢囉二合 睒摩達摩儞入 惹引多四
阿婆去嚩薩嚩二合婆引嚩五 達麼娑麼多引六 鉢囉二合鉢多二合 莎訶七
行者護摩し竟つて、教へて儭施をせしむべし
金と銀と衆の珍寶と、象と馬と及び車乘と
牛と羊と上の衣服と、或は復餘の資財なり
弟子當に誠を至して、恭敬して殷重を起すべし
深心に自ら忻び慶んで、而も所尊に奉れ

【十八】以下は灌頂法を明す。甚だ祕密なり。

【第二の壇を等】十二肘の灌頂曼荼羅なり、大壇に對して次小の故に第二といふ。

淨捨を修行するを以て、彼をして歡喜せしむるが故に
已に爲に加護を作して、召して告げて言ふべし
今此勝れたる福田は、一切の佛の說きたまふ所なり
廣く一切の諸の有情を、饒益せんと欲ふが爲なりと
一切の僧に奉施して、當に大いなる果を獲べし
盡ること無き大資財は、世に常に隨つて生ずと說けり
僧を供養するものは、德を具するの人に施すを以てなり
是故に世尊、當に歡喜を發して
力に隨つて衆寶を辦へて、現前僧に施すべしと說きたまふ

（十九）爾時、毘盧遮那世尊、復執金剛祕密主に告げて、而も偈を說いて言はく、
汝摩訶薩埵、一心に應に諦に聽くべし
當に廣く灌頂を說くべし、古佛の開示したまふ所なり
師第二の壇を作りて、中曼荼羅に對して
外界に圖畫せよ、相距ること二肘量なり
四方正に均等なり、內に向ひて一門を開け
四執金剛を安んじて、其四維の外に居らしむ
謂く住無戲論と、及び虛空無垢と

【中央に法界等】純白色なり、所謂不思議法界の標幟なり。

【四寶所成の瓶】事物は金銀瑠璃水精なり、若し深祕に就けば、無盡願行の寶、無盡饒益衆生の寶、無盡淨知見の寶、無盡大悲方便の寶にして、即ち毘盧遮那四德の寶なり、即ち普賢等の四菩薩なり

無垢眼金剛と、被雜色衣等となり
內心には大蓮華をなせ、八葉及び鬚蘂あり
四方の葉の中に於て、四作侶の菩薩あり
彼大有情の、往昔の願力に由るが故に
云何が名けて四と爲る、謂く總持自在と
念持と利益心と、悲者菩薩と等なり
餘す所の諸の四葉には、四奉教者を作る
雜色衣と滿願と、無礙と及び解脫となり
中央に法界、不可思議の色を示す
四寶所成の瓶に、衆の藥と寶とを盛滿す
普賢と慈氏尊と、及與除蓋障と
除一切惡趣と、而も以て加持を作す
彼を灌頂の時に於て、當に妙蓮の上に置くべし
獻るに塗香と華と、燈明と及び閼伽とを以てし
上に幢幡蓋を蔭ひ、攝意の音樂
吉慶伽陀等の、廣多の美妙言を奉れ
是の如く而も供養して、歡喜を得しめ已れ

親り諸〻の如來に對したてまつりて、而も自ら其頂に灌ぐ
復當に彼妙善の、諸〻の香と華とを供養すべし
次に應に金篦を執て、彼が前に在つて住して
慰喩して歡喜せしめ、是の如きの伽陀を說くべし
佛子佛汝が爲に、無智の膜を決除したまふ
猶し世の醫王の、善く金籌を用ふるが如し
眞言を持する行者、復當に明鏡を執つて
無相の法を顯さんが爲に、是妙伽陀を說くべし
諸法は形像無し、清く澄んで垢濁無し
執無く言說を離れたり、但し因業より起る
是の如く此法の自性は、染汙無きことを知れば
世の比無き利を爲す、汝佛心より生ずと
次に當に法輪を授けて、二足の間に置き
慧の手に法螺を傳へて、復是の如きの偈を說くべし
汝自ら今日に於て、救世の輪を轉ず
其聲普く周遍して、無上の法螺を吹け
異慧を生ずること勿れ、當に疑悔の心を離れて

【三昧耶の偈】此れ祕密の四重禁にして一切戒法の根本なり。

【七】以下祕密の四重禁を受け竟るに由て得る所の無作の眞言門の中の功德を明す。

世間に於て勝れたる行の眞言の道を開示すべし
常に是の如きの願を作して、佛の恩德を宣べ唱へよ
一切の持金剛、皆當に汝を護念すべし
次に當に弟子に於て、而も悲念の心を起すべし
行者應に中に入つて、三昧耶の偈を示すべし
佛子汝今より、身命を惜まざるが故に
常に應に法を捨て、菩提心を捨離し
一切の法を慳悋し、衆生を利せざる行をなすべからず
佛三昧耶を說きたまふ、汝は善く戒に住する者なり
自ら身命を護るが如く、戒を護ることも亦是の如くせよ
應に誠を至して恭敬して、聖尊の足を稽首したてまつるべし
所作敎に隨つて行ぜよ、疑慮の心を生ずること勿れ

(七)爾時、金剛手、佛に白して言さく、『世尊、若し諸の善男子と善女人と有つて、此大悲藏より生ずる、大曼荼羅王の三昧耶に入る者は、彼幾所の福德聚を獲るや。』是の如く說き已りて、佛、金剛手に告げて言はく、「祕密主、初發心より乃至如來を成ずるまでの、所有の福德の聚なり。是善男子と善女人との福德の聚は、彼と正しく等し。祕密主、此法門を以て當に是の如く知るべし。彼善男子と善女人とは、如來の口より生ず、佛心の子なり。

【八】以下曼荼羅法事の時の所要の眞言を明す。

【淸淨法幢高峰觀三昧】淨菩提心は萬行の幢旗にして中道第一義諦山上に住して安固不動なる故に名く。

【明妃】明とは大慧光明の義、妃とは三昧の義、所謂大悲胎藏三昧なり。此三昧は淨菩提心の母なり。

若し此善男子と善女人との在る所の方所には、即ち爲に佛有して佛事を施作したまふべし。是故に祕密主、若し佛を供養せんと樂欲する者は、當に此善男子と善女人とを供養すべし。若し佛を見たてまつらんと樂欲せば、即ち當に彼を觀ずべし。』時に金剛手等の上首の執金剛と、及び普賢等の上首の諸の菩薩と、聲を同うして說いて言さく、『世尊、我等今より已後、應當に是善男子と善女人とを恭敬し供養すべし。何を以ての故に。世尊、彼善男子と善女人とを見れば、佛世尊を見たてまつるに同きが故なり。』

（八）爾時、毘盧遮那世尊、一切の衆會を觀じて、執金剛祕密主等の諸の持金剛者と、及び大衆に告げて言はく、『善男子、如來出世の無量の廣長の語輪の相有り。巧色摩尼の如く、能く一切の願を滿して無量の福德を積集し、害すべからざる行に住する三世無比力の眞言句なり。』是の如く言ひ已りて、金剛手祕密主等の諸の執金剛、及び大會の衆、聲を同うして說いて言さく、『世尊、今正しく是れ時なり、善逝、今正しく是れ時なり。』と

爾時、毘盧遮那世尊、一切の願を滿せる廣長の舌相を出して、遍く一切の佛刹に覆ふ淸淨法幢高峰觀三昧に住したまふ。時に佛、定より起つて、爾時、一切如來の法界に遍く、無餘の衆生界を哀愍したまふ聲を發し、此大力大護の明妃を說いて曰はく、

南麼薩婆怛他引蘖帝弊毗也反一薩婆佩野微蘖帝弊二微濕嚩二合目契弊三薩婆他引含四欠囉吃沙上二合摩訶引沫麗五薩婆怛他引蘖多六奔抳也二合儞入闍引帝七吽吽八怛囉二合吒怛囉二合吒九阿鉢囉二合底丁以反訶諦十莎訶十一

【合欠】此兩字正しく眞言の體にして、亦種子なり。以下の諸句は此二字を轉釋するなり

【時に一切如來等】十方佛土六種に震動して以て佛の本願眞實不虛なることを明す。

【六種震動】秘密の釋には貪瞋癡見慢疑の六根本煩惱なり、今佛の至誠に感動せられて佛芽萌生する故に六種震動なり。

【諸佛は甚だ奇特等】十方の菩薩領解の偈なり。

時に一切如來及び佛子衆、此明を說き已りて、卽時に普く佛刹に遍くして六種に震動す。一切の菩薩、未だ曾て有らざる開敷眼を得て、諸佛の前に於て意を悅ばしむる言音を以て、而も偈を說いて言はく、

　諸佛は甚だ奇特なり、此大力護を說きたまふ
　一切の佛護持したまふこと、城池皆固密の如し
　彼心を護つて住するに由つて、有ゆる障をなす者
　毘那夜迦等の、惡形の諸の羅刹
　一切皆退き散る、眞言を念ずる力の故に

時に薄伽梵、廣大法界の加持を以て、卽ち是時に於て法界胎藏三昧に住したまふ。此定より起つて入佛三昧耶の持明を說いて曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一阿三迷二呾囇二合三迷三三麼曳四莎訶五

卽ち爾時に、一切の佛刹の一切の菩薩衆會の中に於て、此入三昧耶の明を說きたまひ已りて、諸の佛子等、同じく是を聞くもの、一切の法に於て違越せず。

時に薄伽梵、復法界生の眞言を說いて曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一達摩馱睹二薩嚩二合婆嚩句痕三

金剛薩埵の加持の眞言に曰はく、

南麼三曼多伐折囉二合赧一伐折囉二合呾麼二合句痕二

金剛鎧の眞言に曰はく、

南麼三曼多伐折囉二合赧一伐折囉二合迦嚩遮鈝二

如來眼又觀の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一怛他引揭多斫吃蒭二合尾也二合嚩路迦也三莎訶四

塗香の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一微輸上駄健杜引納婆二合嚩二莎訶三

華の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一摩訶引妹咀囉也二合毘庾二合蘖帝三莎訶四

燒香の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一達摩駄睹弩蘖帝二莎訶三

飮食の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一阿囉囉二迦羅羅三沫隣捺娜弭四沫隣捺泥五摩訶引沫履六莎訶七

燈の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一怛他引揭多引喇旨二薩叵二合囉停嚩婆去娑娜三伽伽娜陀哩耶二合四莎訶五

閼伽の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一伽伽上那三摩引三摩二莎訶三

如來頂相の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 伽伽那難多薩發二合囉拏二 上微輸上馱達摩儞 入闍引多三 莎訶四

如來甲の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 伐折囉二合入嚩引二合羅二 微薩普二合囉鉡三 莎訶

如來圓光の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 入嚩二合羅引 摩履儞二 怛他引蘖多引隷旨二合三 莎訶四

如來舌相の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 摩訶摩訶二 怛他蘖多爾訶嚩二合三 薩底也二合 達摩鉢囉二合底丁以反 瑟恥二合多四 莎訶五

【息障品】灌頂の時心風雨魔等の障を息むる法を明す

息障品第三

爾時、金剛手、又復毘盧遮那世尊に請問して、而も偈を說いて言さく、

云何が道場の時に、諸の障者を淨く除きて
眞言行を修する人をして、能く惱害をなすこと無からしむる
云何が眞言を持する、云何が彼果を成ずる

是の如く問を發し已りて、大日尊歎じて言はく、『善い哉、摩訶薩、快く是の如きの語

を說く、汝が心の問ふ所に隨つて、今當に悉く開き示すべし。障者は自心より生じて、心思昔の慳悋に隨順す。彼因を除かんが爲の故に、此菩提心を念ずべし。善く妄分別の、より生ずる所を除かんには、菩提心を憶念すべし。行者諸の過を離る、常に當に意に不動摩訶薩を思惟し、而も彼密印を結んで、能く諸の障礙を除くべし。祕密主、復聽け、散亂の風を繫ぎ除かんには、阿字を我體と爲して、心に阿字門を持すべし。健陀を以て地を塗つて、而も大空點を作して、嚩臾の方に依つて圍ふに捨囉梵を以てす、彼器に大心の彌盧山を思念すべし。時時に其上に在つて、阿字の大空點あり、先佛の宣說したまふ所なり。能く大風を縛る。大有情、諦かに聽け、行者駛き雨を除くには囉字門を思惟す、大力火光の色なり、威猛にして熾んなる焰鬘あり。忿怒にして遏伽を持せり。起る所の方分に隨つて、地を治め藍雲を興す。斷ずるに慧刀の印を以てす。昏徹して尋いで消散す。行者懼れ無き心を以て、或は[illegible]羅[illegible]を作り、是金剛橛を以てすれば、一切金剛に同じ。復次に今當に一切の諸の障を息むることを說くべし。眞言の大猛不動大力者、本曼荼羅に住すと念ずべし。行者或は中に居して、而も彼形像は三昧の足を頂戴すと觀ずべし。彼障、當に淨く除かるべし。息滅して而も生せず、或は羅遮迦を以て微妙と共に和合して、行者形像を造つて、而も以て其身に塗れ。彼諸の執着の者、斯對治に由るが故に、彼が諸根熾然たり。疑惑の心を生ずること勿れ。乃至釋梵の尊も、我敎に順はざるが故には、尙當に爲に焚かるべし。況んや復餘の衆生をや。」

【障者は自心等】一切の障法は心より生じ、又過去に慳法に隨順する故に今世に多く諸障あり、故に慳貪等の諸障の因を除けば諸障自ら息む、之を對治する者を法に就ていはば菩提心、人に就ていへば不動明王なり。

【不動摩訶薩】無相の中に於て是相を現じて一切眞言行者を護る。行者常に能く憶念すれば一切の障を離る。此明王の一目を閉づるは佛眼を以て明に唯一の理を見て無二無三の義を表すなり。

【健陀】塗香なり【捨囉梵】瓦礫なり。【遏伽】大刀印なり。【[illegible]】[illegible]金剛杵なり。

【復次に今等】上には別して風水等の障を治する法を

説き、今以下に總じて一切の障を治する法を説く。【本曼荼羅】三角の曼荼羅なり、此中二意あり、一は不動王壇の中に在て彼障者の頂を踏むと想ふと、二とは行者自身不動王と成て彼頂上を踏むとなり、彼形像とは障者の形像なり。又三昧足とは左足なり。【羅邇迦】芥子なり。【微妙】諸の毒藥

爾時、金剛手、佛に白して言さく、「世尊、我佛の說きたまふ所の義を解るが如くに、我も亦是の如く、諸の聖尊の本曼荼羅の位に住し、威神有らしむることを知りぬ。彼是の如く住するに由るが故に、如來の教勅を能く隱し蔽ふこと無し。何を以ての故に。世尊、卽ち一切の諸の眞言の三昧耶とは、謂ゆる自種性に住するが故なり。是故に眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は、亦當に本位に住して諸の事業を作すべし。又祕密主、若は諸色と彼諸の聖尊の曼荼羅位とを說かば、諸尊の形相も當に知るべし亦爾なり。是れ先佛の說きたまふ所なり。祕密主、未來世に於て、劣慧無信の衆生、是の如きの說を聞いて信受すること能はず、無慧を以ての故に疑惑を增す。彼唯聞くが如く堅く、住して修行せざれば、自ら損じ他を損ず、是の如きの言を作さん、彼諸の外道に是の如き法あり、佛の所說に非ずと。彼無智の人は當に是の如きの信解を作すべし。」

爾時、世尊偈を說いて言はく、

一切智の世尊は、諸法に自在を得たり
其通達する所の如く、方便を以て衆生を度したまふ
是れ諸の先佛の說なり、法を求むるものを利益したまふ
彼愚夫は、諸佛の法相を知らず
我一切の法は、所有の相皆空なりと說く
常に當に眞言に住して、善く作業を決定すべし

普通眞言藏品第四

(一)爾時、諸の執金剛には祕密主を上首と爲し、諸の菩薩衆には普賢を上首と爲し、毘盧遮那佛を稽首したてまつり、各各の言音を以て世尊に請白して、「此大悲藏より生ずる大曼荼羅王に於て、通達する所の法界の淸淨門の如くに、眞言の法句を演說したまへ」と樂欲す。爾時、世尊、壞すること無き法爾の加持を以て、諸の執金剛と及び菩薩とに告げて言はく、「善男子、當に通達する所の法界の如くに、衆生界を淨め除く眞實語句を說くべし。」

時に普賢菩薩、即時に佛境界莊嚴三昧に住して、無礙力の眞言を說いて曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一 三麼多引奴揭多二 微囉闍達摩喔闍多三 摩訶引摩訶四 莎訶五

時に彌勒菩薩、發生普遍大慈三昧に住して、自心の眞言を說いて曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一 阿爾單若耶二 薩婆薩埵引捨耶弩蘗多三 莎訶四

爾時、虛空藏菩薩、淸淨境界三昧に入つて、自心の眞言を說いて曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一 阿去迦引奢三麼蘗引弩蘗多二 微質怛囉引嚩羅達羅三 莎訶四

爾時、除一切蓋障菩薩、悲力三昧に入つて、眞言を說いて曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一 阿去 薩埵係多引毘庾二合蘗多二 怛囕二合怛囕二合囕囕三 莎訶四

【普通眞言藏品】諸尊の眞言一百十九種を說く。

【一】下にいふ二の眞言能說主は皆是れ大日如來の差別智印なり。廣く衆生を利益せんと欲する故に各一門の眞言を說く、彼一門に由て進行すれば彼尊に同ずることを得て成佛する。

【佛境界莊嚴三昧】諸佛自證の境界は無言說の故に、其面門より種種の光を發し光中に此眞言を說くなり。

【發生普遍大慈三昧】一切衆生に對して平等に菩提の大樂を與ふる大慈を發生する三昧。

【淸淨境界三昧】自心の本性淸淨の境界に了達する三昧にして即ち自證なり。

爾時、觀世自在菩薩、普觀三昧に入つて、自心と及び眷屬との眞言を說いて曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 薩嚩怛他上蘗多上嚩盧吉多二 羯嚕儜麼也三 囉囉囉吽若短聲四 莎訶五

得大勢の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 髯髯索二合 莎訶三

多羅尊の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 羯嚕奴嗢婆上二合吠平二 多嚟哆嚟抳三 莎訶四

大毘俱胝の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 薩婆陪也怛囉引二合散儞平二 吽薩破二合吒也三 莎訶

白處尊の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 怛他引蘗多微灑也二 三婆去吠平三 鉢曇摩二合摩履儞平四 莎訶五

何耶揭嚟嚩の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 吽佉引陀畔闍二 薩破二合吒也三 莎訶四

時に地藏菩薩、金剛不可壞行境界三昧に住して、眞言を說いて曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 訶訶訶二 素上怛弩三 莎訶四

時に文殊師利童子、佛加持神力三昧に住して、自心の眞言を說いて曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 係係俱摩囉迦二 微目吃底丁以反二合 鉢他悉體反他以多三 薩麼二合囉薩麼二合囉四 鉢囉二合底丁以反然五 莎訶六

【悲力三昧】大悲自在の力能く一切衆生の自心の菩提を蓋ふ障を除く三昧にして、卽ち化他なり、如來の大悲なり。

【普觀三昧】平等の智眼を以て遍く衆生界を觀ずる故に普觀と云ふ。

【得大勢】煩惱所知の二障を離れて菩提心の大勢を得。

【多羅尊】多羅は度なり、遍く一切衆生を度するなり、大本の中に、五百の多羅尊あり、皆觀音の眼より生ず。

【毘俱胝】額上の皺の文をいふ、此菩薩大忿怒の狀を作すなり。

【白處尊】白とは菩提心なり、此菩提心に住するを以て白卽ち住處なり、之に住して能く諸佛を生ず、之れ卽ち觀音の母なり、蓮花部の主なり。

【何耶揭嚟嚩】是

爾時、金剛手、大金剛無勝三昧に住して、自心と及び眷屬との眞言を說いて曰はく、

南麼三曼多伐折囉二合赧一戰拏摩訶引路灑拏平二吽

忙莽計の眞言に曰はく、

南麼三曼多伐折囉二合赧一怛嚟二合吒輕怛嚟二合吒二若衍底丁以反三莎訶四

金剛鎖の眞言に曰はく、

南麼三曼多伐折囉二合赧一滿陀滿陀也二慕吒慕吒也三伐折路二合嗢婆二合去吠三薩嚩怛囉引鉢囉二合底丁以反訶諦四莎訶五

金剛月黶の眞言に曰はく、

南麼三曼多伐折囉二合赧一頡唎二合吽發吒輕二莎訶三

金剛針の眞言に曰はく、

南麼三曼多伐折囉二合赧一薩婆達摩儞入唎吠平二達儞二代折囉二合素旨嚩入囉泥三莎訶四

一切持金剛の眞言に曰はく、

南麼三曼多伐折囉二合赧一吽吽吽二發吒輕發吒輕發吒髯髯三莎訶四

一切諸奉教者の眞言に曰はく、

南麼三曼多伐折囉二合赧一係係緊質嚟引也徙二訖㗚二合佷儜二合訖㗚二合佷儜三二合佉那佉那四鉢履布囉也五薩婆二合鉢囉二合底丁以反然六莎訶七

時に釋迦牟尼世尊、寶處三昧に入つて、自心と及び眷屬との眞言を說いて曰はく、

は馬頭と譯す、即ち白馬頭なり。蓮花部の明王なり。

【金剛不可壞行境界三昧】菩提心を不可壞といふ。此に依て進行するを金剛といふ、即ち行なり。

【佛加持神力三昧】經題の神變加持と同義なり。

【大金剛無勝三昧】等比なき諸佛の金剛智に入る三昧なり。

【忙莽計】忙は母の義、莽計は多の義、即ち一切の金剛の母なり。

【金剛鎖】諸佛の金剛智を以て菩提心を結護しこ壞せざらしむるの義。

【金剛月黶】大怖は一切諸魔をして皆退散せしむ、即ち忿怒尊なり。

【金剛針】金剛の慧を以て無明を徹して實際相に通穿達するの意。

【一切持金剛】十

南麼三曼多勃馱喃一 薩婆吃麗合二 者儞入 素捺那二 薩婆達摩嚩始多引 鉢囉合二 鉢多三 伽伽那三摩引 三摩四 莎訶五

毫相の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 嚩囉泥二 嚩囉鉢囉合二 鉢帝吽三

一切諸佛頂の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 鍐鍐鍐二 吽吽發吒輕三 莎訶四

無能勝の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 地入 陵合二 地入 陵合二 嚟嚟三 馹陵合二 馹嚟合二四 莎訶五

無能勝妃の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 阿上 鉢囉引 爾帝二 若衍底丁以反 怛抳帝三 莎訶四

地神の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 鉢嘌合二 他 體以梅反 無蓋平 曳合二 莎訶

毘紐天の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 微瑟傳合二 吠二 莎訶

嚕捺囉の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 嚕捺囉合引二 也二 莎訶三

風神の眞言に曰はく、

佛刹塵數の執金剛なり。

【一切諸奉教者】専ら本尊の側にあつて命を承けて往來し、隨つて所作ある者なり。

【寶處三昧】三乘一乘等の無量の法寶は彼處より出づるが故にいふ。

【一切諸佛頂】頂は尊勝の義、形像は釋迦に同じ、唯頂の肉髻のみ菩薩の尊形を作る、これ十八不共法の別名なり。

【無能勝】釋迦の化身にして無能勝は慧を表し妃は定を表す。

【地神】大菩提心の大地を表す。此亦釋迦の方便身なり。

【毘紐天】那羅延天のこと。

【嚕捺囉】暴惡と譯す、是れ六欲天中の他化自在天なり。

南麼三曼多勃馱喃一嚩引也吠二平莎訶三

美音天の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一薩囉婆嚩二合底丁以反曳二合莎訶三

涅哩底の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一邏引吃灑二合娑引地鉢多曳二平莎訶三

閻魔の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一梅無蓋反嚩娑上嚩三合哆也二莎訶三

死王の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一沒嘌二合怛也二合吠二平莎訶三

黒夜神の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一迦引囉囉引怛唎二合曳二平莎訶三

七母等の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一忙怛哩二合弊毘也反二莎訶三

釋提桓因の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一鑠吃囉二合引也二莎訶三

薄嚕拏龍王の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一阿上半鉢多曳二平莎訶三

【美音天】　辯才天

【涅哩底】　羅刹主又佛の化身。

【死王】　閻魔と同體。

【黒夜神】　閻魔の侍后なり。

【七母等】　閻魔の眷屬、即ち七姉妹。

【薄嚕拏龍王】　水天の異名。

【難陀と跋難陀】摩竭陀に住む兄弟の二龍王。

【二】上の諸の菩薩等眞言を説くは各各に同類を引攝せんと欲するが故なり。今法佛自ら明妃の眞言を説いて修行せば、我が如く異ることとなからしめんとなり。

【自の教跡の等】秘密平等の教なり

【障】障に二あり、一に内障、即ち自

梵天の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 鉢囉二合闍引鉢多曳平二 莎訶

日天の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 阿去儞怛夜二合耶二 莎訶三

月天の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 戰捺羅二合引也二 莎訶三

諸龍の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 謎伽上設濘曳平二 莎訶三

難陀と跋難陀との眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 難徒鉢難捺瑜二 莎訶三

(二)時に毘盧遮那世尊、樂欲して自の教跡の不空悉地、一切佛菩薩母、虚空眼明妃の眞言を説いて曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 伽伽上那鉢囉落囉灑二合嬌平二 伽伽那糝迷三 薩婆覩嗢蘗二合多四 引避婆去囉三婆吠五 入嚩二合羅引 那謨阿上目伽引 難六 莎訶

復次に薄伽梵、一切の障を息めんが爲の故に、火生三昧に住して、此大摧障聖者不動主の眞言を説いて曰はく、

南麼三曼多伐折囉二合赧一 戰拏摩訶路灑呢上二 薩破二合吒也三 吽怛囉二合迦四 悍引 曼五引

心より生ず。二には外障、即ち外事より生ず。

【三世】貪瞋癡の三毒また三界なり、三界主の身を現じて三界の諸天を降伏し、又三毒を降伏す、行人を守護して佛果を成ぜしむるは不動明王なり、世間難調の衆生を降伏するは降三世明王なり、皆是れ法佛の三昧。

【諸の聲聞の等】法佛大悲願力の故に有情を利せんとして三昧の中に於て二乘の眞言を現じ若し衆生の此法を以て入道すべき者には、此門より大悲藏に入らしむ。

【不可越守護門者】衣の相向とは曼荼羅第一重の西門にあつて之を守り又教命する所あれば必ず之を行ず。

復次に降三世の眞言に曰はく、

南麼三曼多伐折囉二合赧一訶訶訶二微薩麼二合曳三平薩婆怛他引揭多微灑也三婆馱四怛嚧二合路枳也二合微若也五吽若六急呼莎訶七

諸の聲聞の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一係睹鉢囉二合底丁以反也二微蘗多羯磨涅入闍多三吽合四

諸の緣覺の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一嚩二

普一切佛菩薩心眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一薩婆勃馱菩提薩埵二訶㗚捺耶三寧夜合二吠奢儞四平南麼薩婆尾泥去五莎訶六

普世天等の諸の心眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一路迦引路迦羯囉引也二薩婆提婆那伽藥吃沙合二健達婆阿上蘇嚕藥嚕茶緊捺囉摩護囉伽上備三訶㗚合二捺耶四寧夜合二羯屣㗚合二也五微質怛囉合二蘗底丁以反六莎訶七

一切諸佛の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一薩婆他二微麼底三微枳囉儜四上達摩馱睹涅入闍多五參參訶六莎訶七

不可越守護門者の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一訥㗚馱合二㗚沙二合摩訶引路灑儜三上佉那也薩鑁平引怛他引蘗多引然矩嚕

【結大界】持眞言者等結護せざるを以ての故に、能く法事を破しての持誦を以て人の損すべきを故に、この法をく故に結界るなり、故に結界を設くるが故に、一切亦に由る破壊するなりと能はざる。

【菩提の眞言】これより先の眞言以下は界の體相を、以て一は種子の字を説くと生ずるよりが故能く多くと名く。

四
莎訶五

相向守護門者の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃一 係摩訶鉢囉二合戰拏二 阿毘目佉三 蘖㗚二合訶拏二合佉那耶四 緊質囉也引
徙五 三麼耶麼拏婆麼二合囉六 莎訶七

結大界の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃一 薩婆怛囉二合 跢蘖帝二 滿馱也徙嚩引三 摩訶三摩耶入 闍去帝四 娑麼二合
囉嬭五 阿鉢囉二合底丁以反訶諦六 馱迦馱迦七 折囉折囉八 滿馱滿馱九 捺奢儞鑁十 薩婆怛他引 蘖
多引 拏壤帝十一 鉢囉二合嚩囉達摩臘馱微若曳十二 薄伽上嚩底十三 微矩㘑微矩㘑十四 麗魯補㘑十五 莎
訶十六

菩提の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃一 阿上

行の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃一 阿去

成菩提の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃一 暗

涅槃の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃一 惡

降三世の眞言に曰はく、
南麼三曼多伐折囉赧二合一訶去
不動尊の眞言に曰はく、
南麼三曼多伐折囉赧二合一悍
除蓋障の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃駄喃一阿去急呼
觀自在の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃駄喃一娑上
金剛手の眞言に曰はく、
南麼三曼多伐折囉赧二合一鑁急呼
妙吉祥の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃駄喃瞞
虛空眼の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃駄喃一儼輕呼
法界の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃駄喃一嚂
大勤勇の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一欠平

水自在の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一髯

多羅尊の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一耽

毘俱胝の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一勃嚟二合

得大勢の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一參

白處尊の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一半

何耶揭哩婆の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一含

耶輸陀羅の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一閻

寶掌の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一參

光網の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃駄喃一 糝
釋迦牟尼の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃駄喃一 婆上
三佛頂の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃駄喃一 鈝吒嚂
白傘佛頂の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃駄喃一 嚂
勝佛頂の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃駄喃一 苫
最勝佛頂の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃駄喃一 賜
火聚佛頂の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃駄喃一 怛隣二合
除障佛頂の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃駄喃一 訶㘕二合
世明妃の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃　一躭含牟含闍

無能勝の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃　一吽

地神の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃　一微

鉢設尼の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃　一枳履

鄔波髻設尼の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃　一儞履

質多童子の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃　一弭履

財慧童子の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃　一係履

除疑怪の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃　一訶婆難

施一切衆生無畏の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃　一嚩婆難

除一切惡趣の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一特憎二合娑難

哀愍慧の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一微訶娑難

大慈生の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一詔勅減反

大悲纏の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一閻

除一切熱惱の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一縊

不思議慧の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一汙

寶處の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一難上

寶手の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一衫

持地の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一唅

復次の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一糝輕呼鼻聲

寶印手の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一泛普含反

堅固意の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一[艹+赦]

虚空無垢の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一含

虚空慧の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一[口+隣]

清淨慧の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一藥丹都痕反

行慧の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一地嚂

安慧の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一吽

諸奉教者の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃一地室唎合二唅沒囕合二

諸菩薩所說の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃一吃沙合二拏囉闍劍

淨居天の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃一滿拏輕囉麼二達摩三婆去嚩微三婆上嚩迦那四三三五莎訶

羅刹娑の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃一吃囕二計履

諸荼吉尼の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃一訶去唎合二訶上

諸藥叉女の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃一藥吃叉合二尾儞夜合二達驪

諸毘舍遮の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃一比旨比旨

諸部多の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃一喁縊喁伊上懵散寧去

諸阿修羅の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃 一 囉吒 知嫁反 囉吒 上同 特嚩毗沒囉 二合 波羅 二合

諸摩睺羅伽の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃 一 蘖囉藍 尾囉藍

諸緊那羅の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃 一 訶 上 散難 微訶 上 散難

諸人の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃 一 壹車 去 鉢囉 二合 麼努 輕 麼曳迷 三 莎訶

秘密主、是等の一切の眞言を、我已に宣說せり。是中の一切の眞言の心は、汝當に諦に聽くべし。謂ゆる阿字門なり。此一切諸の眞言の心を念ずるを最も無上と爲す。是れ一切の眞言の住する所なり。此眞言に於て、而も決定を得べし。』

大毘盧遮那成佛神變加持經卷第三　終

大毘盧遮那成佛神變加持經　卷第三

大唐天竺三藏善無畏共沙門一行譯す

世間成就品第五

爾時、世尊、復執金剛祕密主に告げて、而も偈を說いて言はく、
眞言教法の如くすれば、彼果に於て成就す
當に字と字とに相應すべし、句と句とも亦是の如し
心想を作して念誦して、善く一落叉に住せよ
初の字は菩提心なり、第二をば名けて聲と爲す
句を想ふを本尊と爲す、而も自處に於て作すべし
第二の句は當に知るべし、卽ち諸佛の勝句なり
行者彼極めて圓淨なる、月輪に住すと觀じて
中に於て諦誠に、諸の字を想うて次第の如くす
中に字句等を置いて、而も想うて其命を淨む
命とは謂ゆる風なり、念は出入の息に隨ふべし

【世間成就品】四種念誦を說く。

【字と字とに等】眞言の一一の字なり、一一の字は卽ち實相に入るの門なり。眞言を念誦するに一一の實相と相應すべしとなり。

【句と句とも等】眞言の諸字合して句となる、此句は正しく實相の體を詮す。

【心想を作して等】心をして專注して一緣不亂に字字句句相應するをいふ

【落叉】數量の名十萬なり。
【彼等を淨め等】上來は心想と聲句と命息との四種念誦を說きをはりて、以下三月念誦を說く。三月念誦とは先受持法を一月とし、六種供養等を二月、能く所願を滿ずるを第三月とす。
【次に當に等】第二月念誦。
【次に此月等】第三月念誦。
【山峰】一一の事皆理と相應す、謂く不動を山と名く、即ち是れ菩提心なり、諸法の上に出でて究竟なるを山峰と名く。
【牛欄】牛は是れ五淨の所生、能く穢を却け障を除き淸淨の事を成就するなり、菩提心の能く妄想分別を防ぎ諸の心地を淨むることを表す。
【河潭】生死と涅

彼等を淨め除き已りて、先持誦の法を作せ
善く眞言に住するものは、次に一月念誦すべし
行者前方便に、一一の句に通達す
諸佛大名稱、此先受持を說きたまふ
次に當に所有に隨つて、塗香と華等とを奉り
正覺を成ぜんが爲の故に、自の菩提に廻向すべし
是の如く兩月に於て、眞言當に無畏なるべし
次に此月を滿し已りて、行者持誦に入るべし
山峰と或は牛欄と、及び諸の河潭等と
四衢道と一室と、神室と大天室となり
彼曼荼羅處は、悉く金剛宮の如くせよ
是處にして而も結護し、行者成就を作せ
即ち中夜の分を以てし、或は日出の時に於て
智者當に知るべし、是の如きの相現ずることあり
吽聲あり或は鼓の音あり、若は復地震ひ動き
及び虛空の中に、意を悅ばしむる言辭あるを聞く
應に知るべし是の如きの相あらば、悉地の總て意の如し

諸佛兩足尊、彼果を宣說したまふ
是眞言行に住すれば、必定して當に成佛すべし
一切の種類に應じて、常に眞言を念持すべし
古佛大仙の說なり。故に當に憶念すべし

悉地出現品第六

爾時、世尊、復諸の大衆會を觀じて、一切の願を滿足せしめんと欲するが爲の故に、
復三世の無量門に於て、決定智圓滿法句を說きたまふ。
虛空は垢無く自性無ければ、能く種種の諸の巧なる智を授く
本より自性の常に空なるに由るが故に、緣起甚だ深くして見るべきこと難し
長き恆の時に於て殊に勝進して、念に隨つて上無き果を施し與ふ
譬へば一切趣の宮室は、虛空に依ると雖も著行無きが如く
此清淨の法も亦是の如し、三有をして餘り無くして清淨にして生ず
昔の勝生業は此を修するが故に、一切如來の行を有つことを得たり
他句の行に非ず得べきこと難し、世の遍明を作すこと世尊の如し
極清淨修行の法を說きたまふ、深く廣くして盡ること無く分別を離れたり

槃との二河、菩提心は此兩河の中間にあつて中道の境なる義を表す。【四諦道】苦集滅道の四諦なり。【一字】如如の一行。【神室】不思議の妙用、【大天室】涅槃の室、此を以て菩提を成辦する自在力なり。【金剛宮】三股金剛杵を以て周匝して相接するをいふ。【結護し等】降三世と不動とを以て加持するなり。【悉地出現品】悉地成就相并に無所不至印、三月念誦、一切智智の眞言、五輪五字を說く。【復三世の無量門等】此二句は三世無量決定智門の三句を明す。一念三世の中に無量無礙の智門を說く、卽ち所入の定體なり。【虛空は垢無く等】

以下十六句は此品の體にして十六大菩薩を表す。十中初四句は心體、次六句は心相、次四句は心用、後二句は歎德の相なり。

【勝生嚴】過去の菩薩をいふ、卽ち是れ先行者なり。

【一】此一段法界神力悉地流出の句を明す。

(一)爾時、毘盧遮那世尊は是偈を說き已りたまひ、金剛手等の諸の大衆會を觀察して、執金剛に告げて言はく、『善男子、各各に當に法界神力の悉地を流出する句を現ずべし。若し諸の衆生、是の如きの法を見ば、歡喜踊躍して安樂の住を得べし。』是の如く說き已りて、諸の執金剛、毘盧遮那世尊の爲に禮を作し、是の如く法主の敎勅したまふ所に依る。復佛に請うて言さく、『唯願くば世尊、我等を哀愍して、悉地を流出する句を示し現したまへ。何を以ての故に、尊者薄伽梵の前に於て、而も自ら通達する所の法を宣示するは、是れ宜しき所に非ず。善い哉、世尊。唯願くば、未來の衆生を利益し安樂ならしめたまふが故に。』

時に薄伽梵毘盧遮那、一切の諸の執金剛に告げて言はく、『善い哉、善い哉、善男子。如來の說きたまふ所の法の、毘奈耶一法を稱讚す、謂ゆる羞あるなり。若し羞有る善男子善女人、是の如きの法を見ば、速に二事を生ず。謂く、作すべからざる所を作さざると、衆に稱讚せらるるとなり。復二事有り、謂く、未だ至らざる所に至らしむると、佛菩薩と處を同うすることを得るとなり。復二事あり、謂く、尸羅に住すると、人天に生るとなり。善い哉、諦に聽き善く思ひ之を念ずべし。我當に眞言の成就を流出する相應の句を宣說すべし。諸の流出相應の句は、眞言門に菩提を修する諸の菩薩、速に是中に於て當に眞言の悉地を得べし。若は行者曼荼羅を見て、尊に印可せられ、眞語を成就し、菩提心を發し、深く信じ、慈悲有りて慳悋有ること無く、調伏に住し、善く緣より生ずる所を分

別し、禁戒を受持し、善く衆學に住し、巧なる方便を具し、勇健にして時と非時とを知り、好んで惠捨を行じ、怖畏すること無く、眞言行法を勤修し、眞言の實義に通達し、常に坐禪を樂ひ、成就を作さんと樂ふ。祕密主、譬へば欲界に自在悅滿意の明あり。乃至一切の欲處の天子、此に於て迷ひ醉うて、衆妙の雜類の戲れたる笑を出し、及び種種の雜類の受用遍受用を現して、自の變化する所を他化自在天等に授け與へ、而も亦自ら之を受用するが如く、又善男子、摩醯首羅天の勝意生の明有り、能く三千大千世界の衆生の利益を作し、一切の受用遍受用を化して、淨居の諸天に授け與へ、亦復自ら之を受用するが如く、又幻術の眞言の能く種種の園林人物を現ずるが如く、阿修羅の眞言の幻化の事を現ずるが如く、世の呪術の毒及び寒熱等を攝し、摩怛哩神の眞言の能く衆生の疾疫災癘を作し、及び世間の呪術の衆毒、及び寒熱等を攝除し、能く熾なる火を變じて而も清涼を生ずるが如し。是故に善男子、當に是の如きの流出の句の、眞言の威德を信ずべし。此眞言の威德は、眞言の中より出づるにも非ず、亦衆生に入るにもあらず、持誦者の處に於て、得べきこと有るにもあらず。善男子、眞言加持力の故に、法爾にして而も生じ過ぎ越ゆる所無し、三昧を越えざるを以ての故に、甚深不思議の緣より生ずる理なるが故に。是故に善男子、當に不思議の法性に隨順し通達して、常に眞言道を斷絕せざるべし。

爾時、世尊、復三世無礙力の依たる、如來加持不思議力の依たる、莊嚴淸淨藏三昧に住したまふ。卽時に世尊三摩鉢底の中より、無盡界の無盡の語表を出したまふ。法界力と

【祕密主譬へば等】次に眞言成就の相を說く、有疑を慮つて世事を取りて譬となし、諸法實相の中に種種の事相あることを示すなり。

【自在悅滿意の明】第六他化自在天、此天自然の報力を以ての故に此眞言を成就す、明とは眞言なり。

【摩醯首羅】色界第四禪天、意生とは變易自在なるをいふ。

【法爾】眞言の悉地は本來より成就し其體は阿字にして常住不變の故に法爾なり、此不思議の果は眞言の加持力に由りて自ら生起すべし。

【二】以下は如來

無等力と正等覺の信解とに依つて、一の音聲を以て四處に流出したまふなり。普く一切法界に遍く虚空と等しうして、至らざる所無し。眞言に曰はく、

南麼薩婆怛他引蘖帝弊毗庾反一微濕嚩二合目契弊毗也反二薩婆他三阿阿引闇噁四

正等覺の心、是より普く遍ず、即時に一切法界の諸の聲聞、正等覺標幟の音より而も互に聲を出す。諸の菩薩是を聞き已りて未だ曾て有らざる開敷眼を得、微妙の言音を發して、一切智離熱者の前に於て、而も頌を説いて曰さく、

奇なる哉、眞言行、能く廣大の智を具す
若し此を遍く布する者は、佛兩足尊と成る
是故に勤めて精進して、諸佛の語心に於て
常に無間の修を作し、心を淨め我を離るべし

爾時、薄伽梵、復此法句を説きたまはく、

正等覺心に於て、成就を作さんとする者は
園苑と僧房とに於てし、若は巖窟の中に在りてし
或は意に樂ふ所の處にして、彼菩提心を觀じて
乃至初安住に至れば、疑慮の意を生ぜず
隨て彼一心を取て、心を以て心に置け
極淨の句を證して無垢なり。安んずること不動にして

の自證の大智化他の大悲の所依たる莊嚴清淨三昧を明す。此三昧は如來衆德の根本にして、無盡莊嚴毫も闕減あるなき故清淨莊嚴といふ。

【三世無礙力】自證の大智。

【三摩鉢底】等至と譯す。

【一の音聲】本有絶待の總阿。

【四處】阿阿（引）暗噁の四字なり、次の如く東西南北の四處なり。

【阿阿闇噁】此四字は大日經中正宗の體にして、一切の秘密藏は皆此れより生ず、即ち毘盧遮那の心なり。

【聲を出す】此處を聲門といふ、即ち阿字なり、四字なり、一字より二字を生じ、二字より四字を生じ、四字より八字を生じ、八字より十六字を生ず、是の如く展

轉無窮なり。【開敷眼】蓮の未開なるが日光に因て開くが如く、此菩提の心目も亦爾く、佛の加持に由て開くなり。【此を遍く布する者】即ち此眞言の字を以て普く一切世界に遍ずるなり即ち阿字門なり。【園苑】大菩提心なり、此處寛うして道を修するに第一の上處なり。【僧房】大悲を表す、菩薩は常に大悲を住處とす。【巖窟】是れ甚深の禪定、菩提心の獅子王其中に住す【或は意に等】六度四攝の行等を表す。【心】本尊の眞言の心なり。【第二正覺句】初には本尊の心を觀じ今は其形を觀ず【鏡曼荼羅】深遠の義を示す。【一月に等】一月

分別せざること鏡の如し、現前すること甚だ微細なり
若し彼常に觀察し修習して、而も相應すれば
乃至本所尊と、自身との像皆現ず
第二正覺句、鏡曼荼羅の
大蓮華王座に於て、深邃にして三昧に住す
總持の髪髻冠にして、圍遶するに無量の光あり
妄執分別を離れて、本寂なること虚空の如し
彼中に於て思惟して、攝意の念誦を作せ
一月に等引を修め、持して一落叉を滿ぜよ
是を最初の月の、持眞言の法則と爲す
次に第二月に於て、塗香と華とを奉つて
而も以て種種の衆生類を饒益することを作せ
亦復他の月に於て、諸の利養を捨棄すべし
時に彼瑜伽に於て、思惟すること自在なり
一切に障無くして、諸の群生を安樂ならしめんと願へ
如來の稱讚したまふ所の、圓果を成ぜんと樂欲し
或は一切有情の、衆の希願を滿足す

はは初地菩提心爲因の位、二月は二地以上大悲爲根なり第三月は方便爲究竟なり。

【是に於て等】一切所願を成就せしめん爲に此眞言を說く。

【三たび轉ずれば】此眞言を誦すること三遍なれば、所念に隨つて亦成就す。

理に應じて障蓋無く、而も是攀緣を生ず
傍生相噉食する、所有の苦み永く除き
常に諸の鬼界をして、飲食皆充滿せしめ
地獄の中に苦を受くる、種種の諸の楚毒
當に願くは速に除滅すべし。我功德を以ての故に
及び餘の無量の門、數數心に思惟して
廣大の悲愍を發し、三種の加持の句を以て
一切を想念して、心に眞言を誦持す
我功德力と、如來の加持力と
及び法界力とを以て、衆生界に周遍して
諸の念じ求むる義利、悉く皆之を饒益す
彼一切理に如へば、念ふ所皆成就す

是に於て薄伽梵、卽ち爾時に於て、虚空等力虚空藏轉、明妃を說いて曰はく、

南麼薩婆怛他引蘗帝弊反一微濕嚩二合目契弊反二薩婆他三缺四嗢弩蘗帝薩叵二合囉係門五伽伽娜劒六莎訶七

此を持すること三たび轉ずれば、彼所生に隨つて、善願皆亦成就す

(三)行人滿月に於て、次に作持誦に入れ

【三】先承事供養已て白月十五日に於て作成就法の念誦をなすことを明す。

【金剛に同じ】其色と體と其との三金剛に同じ。

【四方相周匝等】境は正しく四方に作り金剛印も亦境の四方面に當て作るなり、金剛印とは三股金剛なり。

【金剛の慧印】五股金剛の印をいふ。

【圓光普く等】成就の相なり、自ら

山峰と牛欄の中と、寒林と或は河洲と
四衢と獨樹下と、忙怛哩天室となり
一切金剛の色にせよ、嚴淨にして金剛に同じ
彼中の諸の障者、摧伏せられて心迷亂せん
四方相周匝せよ、一門及び通道あり
金剛互に連り屬き、金剛結んで相應せよ
門門に二つの守護あり、不可越と相向となり
手を擬して面も指を上げ、朱目にして奮怒の形なり
慇懃に隅角に、輪羅焔光の印を畫せよ
中に妙なる金剛の座あり、方位正しく相直つべし
其上に大蓮花あり、八葉にして鬚蘂敷けたり
當に金剛手の、金剛の慧印を結ぶべし
一切の佛を稽首し、數數堅く誓願して
應に是處を護持し、及び諸の藥物を淨むべし
此夜に於て持誦すれば、清淨にして障礙無し
或は中夜分に於て、或は日出の時に於て
彼藥物當に轉じて、圓光普く暉焔すべし

上中下成の別あり上成は初夜に煙氣生じ、中夜に烟起り、五更に炎出づ中成は炎の出づることなし、下成は唯煙氣の生ずるのみなり。

【四】以下は道場を建立すると薬物等との深旨を説く法爾本性の無爲の性は有爲に異らざるを以て、能くこの有爲緣起の法を以て無爲常住の果を成ずるなり、無爲より有爲を生じ所爲あるに由て能く無爲を生ずるなり。

【計都】幢なり、塲伽は刀、眞陀摩尼は如意寶、安膳那藥は龍腦の上品なり。

眞言者自ら取て、大空に遊歩し
壽に住して大威德あり、生死に於て自在あり
世界の頂に行いて、種種の色身を現ず
具德吉祥者、展轉して而も供養す
眞言の所成物、是を名けて悉地と爲す
以て藥物を分別して、無分別を成就す

(四)祕密主、一切世界の、諸の現在等の如來應正等覺は、方便波羅蜜に通達したまへり。彼如來は一切の分別は本性空なりと知れども、方便波羅蜜の力を以ての故に、無爲に於て、有爲を以て表と爲す。展轉相應して、而も衆生の爲に示現して法界に遍ず。法を見て安樂に住し、歡喜の心を發すことを得しめ、或は長壽を得、五欲嬉戲して而も自ら娛樂し、佛世尊の爲に供養を作す。是の如きの句を證すること、一切世人は信ずること能はざる所なり。如來此義利を見たまふが故に、歡喜の心を以て、此菩薩の眞言行道の次第法則を說きたまふ。何を以ての故に。無量劫に於て、勤め求めて諸の苦行を修すれども、得る能はざる所なり。而るに眞言門に道を行ずる諸の菩薩は、即ち此生に於て、而も之を獲得す。復次に祕密主、眞言門に、菩薩の行を修する菩薩は、是の如く計都、羯伽、傘蓋、履屣、眞陀摩尼、安膳那藥、盧遮那等を以て、三落叉を持して而も成就を作し、亦悉地を得。祕密主、若し方便を具する、善男子と善女人とは、樂ひ求むる所に隨つて、而も所作有れ

【祕密主若し等】以上は藥力の成就を明し、以下は藥力の成就因縁を離れて法爾自然なる義を說く。

【正等覺の句】上の所說の如く阿の一字より能く四字を生ずるをいふ。此句に於て悉地成就する法を問ふ、四字は即ち佛心の句。

【阿字門を以て等】阿は大日の種子なる故正等覺の句。

ば、彼唯心自在にして而も成就を得。祕密主、諸の因果を樂欲するものは、祕密主、彼愚夫の能く眞言と諸の眞言の相とを知るに非ず。何を以ての故に。

因は作者に非ず、彼果も則ち不生なりと說く
此因は因すら尚空なり、云何が果有らん
當に知るべし眞言の果は、悉く因業を離れたり
乃至身に無相三摩地を證觸するとき
眞言者は當に知るべし、悉地は心より生ずることを

爾時、金剛手、佛に白して言さく、『世尊、唯願くば、復此正等覺の句、悉地成就の句を說きたまへ。諸の此法を見る善男子、善女人等は、心に歡喜を得、安樂を受けて住し、法界を害せず。何を以ての故に、世尊、法界とは、一切如來應正等覺なり、說いて即ち不思議界と名く。是故に世尊、眞言門に菩薩行を修する諸の菩薩は、是れ法界に通達することを得、分折し破壞すべからず。』

是の如く說き已りて、世尊、執金剛祕密主に告げて言はく、『善い哉善い哉、祕密主。汝復善い哉。能く如來に是の如きの義を問ひたてまつる。汝當に諦に聽き善く之を思ひ念ずべし、吾今演說せんこと。』祕密主の言さく、『是の如し、世尊。願くば聞かんと欲す。』佛、祕密主に告げて言はく、『阿字門を以て而も成就を作せ。若は僧の所住の處に在り、若は山窟の中にし、或は淨室に於てせよ。阿字を以て遍く一切の支分に布して、時に三落叉

【三落叉】本尊と種子の字と圓明とを觀ずるをいふ。落叉とは見の義。

【乃至普賢等】見る時に於て上中下成の相の別あり、若し親しく見ること分明にして目前に對すると異ることなきを上成、若し但說法の聲のみを聞くを中成、夢に見る等は下成。

【耳の上に等】阿字を耳根に想布して後念誦すれば、即ち耳根清淨を得聞持して忘れざるなり。

【訶字門】訶字は因不可得の故に法身法爾の德、商佉は權智說法の德、蓮花は大悲憐愛の德なり。

【商佉】螺貝なり

【五】復普現色身三昧に隨て種種の應現を爲して衆生を度することを明す

【見と非見】見は種種無戲の相、非

を持すべし。次に滿月に於て、其所有を盡して以て供養すべし。乃至普賢菩薩と、文殊師利と、執金剛等と、或は餘の樂天現前し、頂を摩でて唱へて言はく「善い哉行者」と、當に稽首して禮を作すべし。閼伽水を奉れ。即時に菩提心を忘れざる三昧を得。又是の如く身心輕安なるを以て、而も之を誦習すれば、當に隨生と心清淨と身清淨とを得べし。耳の上に於て之を持すれば、當に耳根清淨なることを得べし。阿字門を以て出入の息と作し、三時に思惟せよ。行者、爾時、能く持すれば、壽命長劫にして世に住す。曤闍等に愛敬せられんと願はば、即ち訶字門を以て、度すべき所の者を作つて、鉢頭摩華を授け與へ、自ら商佉を持して、而も互に相觀て即ち歡喜を生ずべし。』

(五)爾時、毘盧遮那世尊、復一切の大會を觀て、執金剛祕密主に告げて言はく『金剛手、諸の如來の意より生じて業戲行舞を作すこと有り。廣く品類を演べ、四界を攝持して、心王に安住し、虛空に等同なり。廣大の見と非見との果を成就し、一切の聲聞と及び辟支佛と諸の菩薩との位を出生し、眞言門に修行する諸の菩薩をして一切の希願皆悉く滿足して、種種の業を具して無量の衆生を利益せしむ。汝當に諦に聽き善く之を思念すべし、吾今、演說せん。祕密主、云何が行舞して、一切の廣大の成壞の果を作し、持眞言者一切を親しく證するや。』

爾時、世尊、偈を說いて曰はく、

行者次第の如く、先づ自の眞實を作せ

見は涅槃の理なり
【金剛の標】三股金剛杵。
【一切處尊佛】大日如來の形。
【七】以下五字の秘密眞言を說く。
【南麼三曼多等】本書には三千五百頌あり、唯此五字の義を說く。

前の如く法に依つて住し、正しく如來を思念せよ
阿字を自體と爲し、幷に大空點を置け
端嚴にして遍く金色なり、四角に金剛の標をなせ
彼中に於て、一切處尊佛を思念すべし
是れ諸の正等覺、自ら眞實相を說く
修行して疑慮せざれば、自の眞實の相生ず
當に世間の一切樂の爲に、利樂を得しめ
廣大の希有を具し、如幻の句に住す
無始の時より宿植の、無智諸有の迫は
行者等引を成ずるを以て、一切皆消除す
若し彼心の、無上菩提心の觀ずれば
眞言の業を持するが故に、淨と非淨との果に於て
理に應じて常に染無し、蓮の淤泥を出るが如し
何に況んや自體に於て、人中尊と成ることを得るをや

(七)爾時、毘盧遮那世尊、又復降伏四魔金剛戲三昧に住して、四魔を降伏し、六趣を解脫して、一切智智を滿足する、金剛の字句を說きたまふ。

南麼三曼多勃馱喃 一 阿呼 去急 味囉吽缺

【大金剛地際等】阿字を說く、下身とは卽ち菩提心なり。

時に金剛手秘密主等の諸の執金剛と、普賢等の諸の菩薩と、及び一切の大衆と、未だ曾て有らざる開敷眼を得、一切の薩婆若を稽首して、而も偈を說いて言はく、

此は諸佛と菩薩、救世との諸の庫藏なり
是に由つて一切の佛と、菩薩救世者と
及び因緣覺と、聲聞害煩惱と
能く行く所の地に遍じて、種種の神通を起し
彼無上智と、正覺無上智とを得
是故に願くば、廣く此教の諸の方便と
及び布想等との、種種の衆の事業を說きたまへ
諸の大乘無上の、眞言行を志し求むるもの
法を見て安住するもの、當に歡喜住を得べし
是の如きの偈を說き已つて、大日世尊の言はく
普く皆諦に聽き、一心にして等引に住すべし
大金剛地際を以て、時に下身を加持す
此法を說かんが爲の故に、而も菩提座を現ず
最勝の阿字の句、大因陀羅輪なり
當に知るべし內外等しく、金剛曼茶羅なり

【說いて瑜伽の等】以上は初に無點の阿字を座とすることを明し竟る。

【阿字は第一命等】次に長聲の阿字を說く、即ち行なり攝召の義なり。

【常に大空點等】次に暗字を說く、即ち菩薩の果なり

【今攝字の法等】次に暗字を說く、隱は等覺の義、即ち涅槃なり、上に所說の四阿は皆黃金色方相に觀ずべし。

中に一切を思惟す、說いて瑜伽の座と名く
阿字は第一命なり、是を引攝の句と爲す
常に大空點を安じ、能く攝して諸の果を授く
行者一月に於て、金剛慧印を結んで
三時に持誦を作せ。無智の城を摧き毀ち
不動堅固なることを得て、天、修羅も壞ること莫し
乃至自の意に隨つて、增益の事成就す
行者一切常に、曼荼羅の中に
金色光明の身を作れ、上に髮髻冠を持す
正覺三昧に住せり、大金剛句と名く
金剛と蓮花と刀と、素鷄と及び金と地と
眞陀末尼寶と、是等の衆の器物を
大因陀羅に觀じて、而も諸の悉地を作すべし
今攝持の法を說かん、一切一心に聽くべし
行者一緣に、八峯の彌盧山を想へ
上に妙なる蓮花を觀ずべし、金剛智印を立てたり
瑜伽者上に於て、字門と威焰の光あり

【是等悉く等】以上の四阿は一阿を以て總體とする阿に金剛曼荼羅なり故に增益なり。
【第一の囕字門】是れ水輪曼荼羅なり、純白色圓形にして息災の中の第一。

而を用て其頂に置け。安住して傾き動ぜず
百轉する所持の藥を、行者之を服すべし
先世の業より生ずる疾、是等悉く除き癒す
佛子復聽くべし、第一の囕字門は
雪と乳と商佉との色なり、而も臍の中より
鮮かなる白蓮花の臺を起して、而も彼中に於て住す
甚深寂然の定なり、秋の夕の素き月の光あり
是の如きの曼荼羅は、諸佛希有なりと說きたまふ
思惟するに純白を以てし、輪圓九重を成ず
霏霧の中に住して、一切の熱惱を除く
淨乳は珠曼と、水精と月の光との如くにして
普遍して而も流れ注ぎ、一切の處に充ち滿てり
行者心に思惟すれば、諸の障毒を出離す
是の如く聞き壇に於て、等引して成就を作せ
乳と酪と生と熟との酥と、頗胝迦と珠曼と
藕と水と等の衆の物、次第に悉地を成ず
當に無量壽を得べし、殊特の身を應現し

【空點】若し此字點を安ずれば然も病患等の內外の諸毒を除て速に成就す。

【囉字】大輪の曼茶羅を明す、赤色三角形、調伏なり能く煩惱業苦の三道を燒滅する故に卽ち不動明王なり

【訶字】風輪曼荼羅を說く、黑色半月形、亦調伏相の故なりといふ、

一切の患を除息し、天と人と咸く愛敬す
多聞にして總持を成じ、善慧にして淨無垢なり
斯に由りて成就を作せ、速に悉地の果を證す
是を寂災者の、吉祥曼荼羅と名く
第一攝持の相は、安ずるに大空點を以てす
囉字は勝眞實なり、佛火中の上と說きたまふ
所有の衆の罪業、應に無擇の報を受くべし
瑜祇善修の者、等引して皆消除す
住する所の三角の形、悅意にして遍く形赤し
寂然にして焰曼を周らし、三角を其心に在け
相應して彼中に、囉字大空點を觀ずべし
智者瑜伽に如ひ致れば、此を以て衆の事を成ず
日曜の諸の眷屬と、及び一切の火を作すと
攝取と怨對を發すと、衆の支分を消枯すると
是等作すべき所は、皆智火輪に於てす
訶字は第一實なり、風輪の生ずる所なり
及其因業と果との、諸の種子增長す

【言の円等】空輪曼荼羅を明す、其曼荼羅に方円半月等の相無く、虚空無相の故に能く用を成就し、種種色相を現ずるなり。

彼一切を摧壊するには、幷に大空點を以てす
今彼色像を説かん、深玄にして大威徳なり
暴怒せる形を示現し、焔曼普く周遍して
曼荼羅位に住す、智者眉の間に
深く青き半月輪を觀ぜよ、吹いて幢幡を動すの相あり
而も彼中に於て、最勝の訶字門を想へ
彼曼荼羅に住して、所應の事を成就するとき
一切の義利を作し、諸の衆生に應現す
此身を捨てずして、神境通を逮得し
大空位に遊歩して、而も身秘密を成ず
天耳と眼との根淨なり、能く深密處を開く
此一心の檀に住して、而も衆の事業を成ず
菩薩大名稱、初めて菩提場に坐して
魔軍衆を降伏したまふ、諸の因得べからず
因に性無ければ果も無し、是の如きの業も不生なり
彼三に性無きが故に、而も空の智慧を得
大徳正遍知、彼色を宣説したまふ

【那刺遮】錐と譯す、金剛錐の梵名なりと、大日經疏參照。
【日蝎鼠】ムドガラ(Mudgara)鈎棓杵鐵矛索の類。
【七】以下五字の義を細說す、卽ち五字相觀なり。
【阿字を等】阿字を觀ずるなり。
【囕字に等】囕字門の義、大悲水にして世間極熱惱を息滅す。

佉字及び空點は、尊勝にして虛空の空なり
兼ねて慧刀印を持ちぬれば、作す所速に成就す
法輪と及び羂索と、摩伽と那刺遮と
幷に日蝎鼠等と、久しからずして斯句を成ずと

(七)その時、毘盧遮那世尊、大衆會を觀じて、執金剛祕密主に告げて、而も偈を說いて言はく、

若し眞言門に於て、修行する諸の菩薩は
阿字を自身と爲して、內外悉く同く等しうす
諸の義利皆捨てて、礫石と金寶とを等しうす
諸の罪業及び、貪瞋等を遠離して
當に俱に淸淨なることを得べし、諸佛牟尼に同じく
能く諸の利益を作し、一切の諸の過を離る
復次に囕字に於て、行者瑜伽に依るときは
作業儀式を解す、衆生を利益するが故に
內身救世者なり、一切皆是の如し
心水湛へて盈滿す、潔白なること猶し雪と乳とのごとし
當に決定の意を生ずべし、一切の身より出でて
悉く諸の毛孔に遍じ、流れ注いで極めて淸淨なり

【囉字門】囉字門の觀、大智大にして世間の極苦を滅す。

【風は一切處等】訶字門の觀、大願の風なり。

此内より充溢して、遍く大地に滿つ
是悲愍の水を以て、世の苦の衆生を觀ずべし
諸の有ゆる飲み用ふる者、或は復身に觸る所のもの
一切皆決定して、菩提を成就することを得
思惟して等引に在れば、一切囉字門なり
周輪にして焔光を生じ、寂然として而も普く照す
瑜祇の光外に轉じ、而も一切處に遍じて
世を利し樂欲に隨ひ、行者神通を起す
上身に囉字門あり、囉字勝輪の中にあり
火を出し而も雨を降らし、俱時に而も應現して
地獄の極寒の苦をば、囉字能く消除し
囉字熾然を燭く、眞言法に住するが故に
作業速に成就すれば、重罪の衆生を救ふ
囉字を下身と爲し、訶字を標幟と爲す
大因陀羅に住して、水龍の事業を作せ
一切を擯除する等、眞言者疑ふこと勿れ
風は一切處に遍じて、一切悉く開壞す

【意生悉地の句】意の欲するところに從つて皆成就するをいふ。

【時と方と等】時とは三時に生滅する時、方は四方四隅の方所、造作は三業の所作なり

此種種の雜類、各各の衆の事業
色曼荼羅の中にして、法に依つて而も之を作せ
心に觸れて而も念持すれば、意根淨を逮得す
輕く擧ぐることを習ひ、經行の中に誦して神足を獲べし
宴坐して阿字を觀じ、耳根に在ると想へ
念誦して一月を滿つれば、當に耳淸淨を得べし

秘密主、是の如き等は、意生悉地の句なり。秘密主、此を觀ずるに形色有ること無けれども、種種の雜類の業行生ず。思念の頃に於て、纔に之を轉誦するときは、是の如きの一切の善業の種子を作す。復次に秘密主、如來は作さざる所無し。眞言門に於て修行する諸の菩薩は、影像に同じく、一切處に隨順し、一切眞言の心に隨順して、悉く其前に住して、諸の有情をして、咸く歡喜を得しむ。如來は分別の意無く、諸の境界を離るるに由ればなり。而も偈を說いて言はく、

時と方と造作と無く、法と非法とを離るれども
能く悉地の句を授くることは、眞言行より發生す
是故に一切智の、如來悉地の果は
最も尊勝の句と爲す。當に成就を作すべし

【成就悉地品】悉地來處は即ち衆生心品なるを明す。
【吉祥金剛】金剛手菩薩の德を歎じて呼ぶ、金剛は智慧を、吉祥は福德を歎ず。
【奇特開敷眼】妙法蓮華の眞實の智眼。
【手に金剛印】五智の金剛杵なり。
【法自在牟尼】大日如來なり。
【過上無き句】曼荼羅をいふ。
【說きたまへ】これに我が爲にと、一切衆生の爲にと二意あり。
【摩訶薩の意處】此れ衆生自心の處を指す。
【決定の心を等】理智不二阿字不生の三昧なり、此阿字門に入るに由つて眞言の果を得るなり。

成就悉地品第七

時に吉祥金剛、奇特開敷眼あり
手に金剛印を轉ず、流れ散じて火の光の如し
其明普遍く、一切の諸の佛刹を照す
微妙の音を以て、法自在牟尼を稱歎す
諸の眞言行を說きたまへ、彼行は得べからず
眞言は何れより來る、去る所は何れの所にか至る
諸佛是の如きの、更に過上無き句を說きたまへ
一切の法の歸趣すること、衆の流れの海に赴くが如し
是の如く說き已りて、世尊、執金剛祕密主に告げて言はく、
摩訶薩の意處を、說いて曼荼羅と名く
諸の眞言の心位を、了知せば果を成ずることを得ん
諸の分別する所有るは、悉く皆意より生ず
白黃赤を分辯する、是等は心より起るなり
決定の心を以て歡喜するを、說いて內心處と名く

【彼蓮花處等】以下正しく三昧を修する初門を明す。【八葉にして等】心處を觀じて八葉の蓮花となして開敷せしむるなり。凡夫の心は、合蓮花の如ければ、此心を現じて開敷せしむ。八葉は四方四隅なり、四方は四智四隅は四攝の法【阿字門】此中に四品あり、初に阿字品を說く、是れ眞言の果なり。【次に其首の等】以下第二囉字品、卽ち眞言の因なり【囉字】次に囉字品、囉字とは淨如見、この淨眼もて自心を觀る、卽ち眞菩提、【頭を俛ぶ等】觀の修法を明す。

眞言斯位に住して、能く廣大の果を授く
彼蓮花處を念ずべし、八葉にして鬚蘂敷けたり
華臺に阿字門あり、焰鬘皆妙好なり
光暉普く周遍して、衆生を照明するが故に
千電を合會するが如くして、佛の巧色の形を持せり
深く圓き鏡の中に居して、諸の方所に應現すること
猶し淨水の月の如くして、普く衆生の前に現ず
心性は是の如しと知れば、眞言行に住するを得
次に其首の上の、頂會の交際せる中に於て
標するに大空點を以てして、而も闇字を思惟せよ
妙好にして淨無垢なること、水精と月と電との如し
寂靜法身なりと說く、一切の依持する所なり
諸の眞言の悉地、能く殊類の形を現し
天の樂と解脫とを得、如來の句を逮見す
囉字を眼界と爲せ、輝燭明燈の猶し
頭を俛ぶせ小しく頭を低れ、舌を齶の間に近づけて
而も以て心處を觀ずべし、當に心に等引を現ずべし

【此より次に等】次に邏字品。

【不死の句】邏字は入涅槃を表す故に名く、邏は相を以て字相とす、然るに大空點を冠する故に相即無相なり、無相は涅槃寂滅の故に。

【無上智】一切種智にして權方便の

無垢にして妙に清淨なること、圓鏡の如くして常に現前す
是の如く眞實の心は、古佛の宣說したまふ所なり
心明達を照了するときは、諸色皆光を發す
眞言者當に、正覺兩足尊を見るべし
若し見るときは悉地の、第一の常恆の體を成ず
此より次に思惟して、此囉字門を轉ずべし
囉字の大空點なり、之を眼位に置け
一切空の句を見、不死の句を成ずることを得
若し廣大智と、或は五神通を起すと
長壽の童子の身と、成就持明等とを欲するに
眞言者未だ得ざるは、之に隨順せざるに由つてなり
眞言の智を發起するは、是れ最勝の實知なり
一切の佛菩薩、救世の庫藏なり
是に由つて諸の正覺と、菩薩救世者と
及び諸の聲聞等と、他の方所に遊涉し
一切の佛刹の中にして、皆是の如きの說を作す
故に無上智と、佛の無過上智とを得るなり

智なり。

【無過上智】一切智智にして實智なり。

【轉字輪曼荼羅行品】阿字を旋轉して曼荼羅を成ずるを明す。

【甘露生三昧】天の甘露を飲むに、即時に不老不死にして諸の疾苦を除愈するが如く、此三昧により出世間第一の樂を得て常住不變なるが故に名く。

【三世無礙力明妃】三世に於て此明の力を破するものなき故に三世無礙力といふ。此力は能く無明煩惱の闇を破するが故に明とす、此明能く菩提心を修養して增長ならしむる故に妃といふ、く心口より出すを眞言といひ、一身の支分より任運に生ずるを明といふ。

【入蓮花座】此

轉字輪曼荼羅行品第八

爾時、毘盧遮那世尊、一切大會を觀察したまひ、大慈悲を修習したまふ眼を以て、衆生界を觀察して、甘露王三昧に住したまふ。時に佛、是定に由るが故に、復一切三世無礙力明妃を說いて曰はく、

怛姪他伽伽娜三迷一 阿鉢囉二合底丁以反 三迷二 薩婆怛他引藥多三麼哆弩藥帝三 伽伽那三摩四 嚩囉落吃灑二合孃五 莎訶六

善男子、此明妃と如來の身の無二の境界なるを以て、偈を說いて言はく、

是佛加持に由つて、菩薩大名稱
法に於て罣礙すること無く、能く衆の苦を滅し除く

時に毘盧遮那世尊、尋で諸佛の本初不生を念じ、自身と及與持金剛者とを加持して、金剛手等の上首の執金剛に告げて言はく、「善男子、諦に聽け、轉字輪曼荼羅行品の、眞言門修行の諸の菩薩は、能く佛事を作し、普く其身を現ず。」

爾時、執金剛、金剛蓮華座より旋轉して而も下つて、頂を以て世尊を禮して而も讚歎して言さく、

菩提心を歸命し、菩提を發す者を歸命し

菩薩は五股金剛杵の上に蓮花台あるを以て座とす。

【此を】　阿字輪の法。

【我は一切の本處等】此一偈は大日如來が法界萬法の能造能生にして、又本地極位の說法を明すなり。

【勝願の佛菩提座】普く一切衆生界中に現じて佛事を作すが故に勝願なり、又阿字本不生の座を佛菩提座といふ。

【是字】　阿字の眞言。

【壽命に等】壽命と種子と依處と救世者とは皆阿字なり、世出世の一切所作の妙業は皆阿字を以て命とし、一切の字は阿字を

行體の、地波羅蜜等を稽首し
先に造作する者を敬禮し、空を證する者に歸命す

祕密主、是の如く歎じ已りて、而も佛に白して言さく、「惟、願くば法王、我等を哀愍護念して、而も此を演說したまへ、衆生を利益せんが爲の故に、說く所の如く、眞言を修せん者をして圓滿せしむるが故に。」

是の如く說き已りて、毘盧遮那世尊、執金剛祕密主に告げて言はく、

我は一切の本初なり、號して世の所依と名く
說法に等比無し、本寂にして上有ること無し

時に佛、此伽陀を說いて是の如く而も加持を作したまふ。加持を以ての故に、執金剛者と及び諸の菩薩と、能く勝願の佛菩提座を見るに、世尊は猶し虛空の戲論無きが如し。無二の行にして瑜伽の相を以て是業を成熟したまふ。即時に世尊の身の諸の支分より皆悉く是字を出現して、一切の世出世間の聲聞緣覺の靜慮と思惟とに於て、悉地を成就することを勤修せしめたまふ。皆壽命に同じく、種字に同じく、依處に同じく、救世者に同じ。

南麼三曼多勃馱喃　一　阿

「善男子、此阿字は一切如來の加持したまふ所なり。眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は、能く佛事を作し、普く色身を現じて、阿字門に於て一切の法を轉ず。是故に祕密主

以て種子とす。阿の聲無ければ口を開くこと能はず、口を開かざれば一切の字なきが故に阿字は本有菩提心なり。故に一切法の所依なり。阿字は人天の大救護者なり、阿字を觀ずる者は生死を解脫するが故に。【此一切佛心等】阿字の眞言なり。【一】上來は轉字輪の相を說き、以下は曼荼羅行を說く。【阿字の一切智門に等】阿字を觀じて自身大日如來となるなり。【內心】中胎のこと。【第二曼荼羅】外三重中の第一重。【三分】第一行道の處、第二供養物を置く處、第三諸尊の坐處。【餘す所の二曼荼羅】外三重中の第二第三重。更に第

眞言門に菩薩行を修する諸の菩薩、若し佛を見んと欲し、若し供養せんと欲し、發菩提心を證せんと欲し、諸の菩薩と同會せんと欲し、衆生を利益せんと欲し、悉地を求めんと欲し、一切智智を求めんと欲せば、此一切佛心に於て、當に勤めて修習すべし。』

爾時、毘盧遮那世尊、復決定して大悲藏より生ずる曼荼羅王に、聖天の位を敷置し、三昧神通の眞言行不思議の法を說きたまはく、『彼阿闍梨、先づ阿字の一切智門に住して、修多羅を持して、一切諸佛を稽首したてまつる。東方より之を申べて、旋轉して而も南より以て西方に及し、北方に周らし、次に金剛薩埵と作つて、執金剛を以て自身を加持し、或は彼印を以てし、或は嚩字を以てして、內心に入りて曼荼羅を置け、是の如く第二の曼荼羅も、亦本寂もて自身を加持するが故に、無二瑜伽の形、如來の形、空性の形なり。次に所行の道と二分の聖天處とを捨て、三分を遠離して、如來の位に住して、東方より修多羅を申べて周匝し旋轉す。餘す所の二曼荼羅も、亦當に是方便を以て諸の事業を作すべし。復大日を以て自身を加持し、廣く法界を念じて衆色を布け。眞言者、潔白を以て先と爲すべし。』

伽陀を說いて曰はく、

此淨法界を以て、諸の衆生を淨除すること
自體如來の如し、一切の過を遠離す
是の如く而も觀想して、囉字門を思惟せよ

四に外緣をかく。
【復大日を以て等】次に彩色を下す法を說く。
【此淨法界等】囉字門なり。
【第二に赤色等】邏字門なり。
【寶冠にして等】阿閦如來の忿怒身にして鉢囉底哩茶と梵にいふ。
【二】如來前には甘露生三昧に住して上の法門を說き已る、今修眞言者

寂然にして光焰鬘あり、淨月と商佉との色なり
第二に赤色を布せ、行者當に憶持して
字を思惟すべし明照にして、本無の大空點あり
煥炳にして初日の輝あり、最勝にして能く壞するもの無し
第三に眞言者、次に黃色を運布すべし
意を迦字門に定め、當に法教に隨ふべし
身相猶し眞言のごとし、正受にして諸毒を害し
光明一切に遍ず、金色にして牟尼に同じ
次に當に靑色を布すべし、生死を超え度らんには
麼字門を思惟せよ。大寂の菩提座あり
身色虹霓の如し、一切の怖畏を除く
最後に黑色を布せよ、其彩甚だ玄妙なり
訶字門を思惟せよ、周遍して圓光を生ず
劫災の猛焰の如し、寶冠にして手印を擧ぐ
能く一切の惡を怖れしめ、諸の魔軍を降伏す

(二)爾時、世尊毘盧遮那、三昧より起つて、無量勝定に住したまふ。佛定中に於て、遍一切無能害力明妃を顯示したまふ。一切如來の境界の中より生ず。其明に曰はく、

南麼薩婆怛他引蘗帝弊毘也反一薩婆目契弊二同上 阿娑迷三 鉢囉迷四 阿者麗五 伽伽泥薩麼二合囉嬭六薩婆怛囉合引弩蘗帝七莎訶八

次に彩色を調ふるには、頂もて世尊及び般若波羅蜜を禮して、此明妃八遍を持せよ。座より起つて曼荼羅を旋遶して、内心に入つて、大慈大悲の力を以て諸の弟子を念じ、阿闍梨復獨摩金剛薩埵を以て自身を加持す。𤙖字門と及び施願金剛とを以てすること已りて、當に大悲藏より生ずる大曼荼羅を畫くべし、彼安祥として内心に在つて、而も大日世尊を造れ。白蓮華に坐して首に髮髻を戴き、鉢吒を裙と爲し、上に綃縠を被たり。身相金色にして身を周りて焰鬘あり。或は如來頂印を以てし、或は字句を以てす。謂く、阿字門なり。東方の一切諸佛には、阿字門及び大空點を以てす。伊舍尼の方の一切如來持虚空眼には、應に伽字を書くべし。火天の方の一切諸菩薩には、眞陀摩尼寶を書け、或は迦字を置け。夜叉の方の觀世自在には、蓮華印なり。並に一生補處の菩薩眷屬を書け、或は娑字を作せ。焰摩の方には三分の位を越えて、金剛慧印と持金剛秘密主と並に眷屬とを置け。或は𤙖字を書け、彼復三分の位を乘てて一切の諸執金剛の印を畫け。或は字句を書け、謂はゆる吽字なり。次に涅哩底の方には、大日如來の下に於て不動尊を作せ。石の上に坐して羂索と慧刀とを持せり。周匝して焰鬘あり、障を作す者を攝る。或は彼印を置け、或は字句を書け、謂ゆる唅字なり。風天の方には降三世尊をなせ、大障を摧く者なり。上に光焰あり、大勢威怒にして猶し焰摩の如し。其形黒色にして、怖るべき者の中に於て極めて怖畏

をして諸の方便を滿足せしめんが爲に更に無量勝三昧に入りたまふなり。無量勝とは無能勝の義なり。

【阿闍梨復等】如來自ら所作の事を成ずるは應ぜざる所なるを以ての故なり。

【普賢金剛】文殊と共に金剛薩埵となり、金剛門の尊たり。

【鉢吒】極細絹なり。

【金剛慧印】三股金剛。

【彼印】鉞及び羂索。

【金剛を】三股金剛。
【彼印】五股金剛杵。
【次に四方等】次に四方四大結護を明す。
【彼印】檀茶棒の印なり。
【彼印】刀形。
【彼印】刀印。
【彼印】檀茶の円
【法界性を等】法界自性の觀をなすなり。法界性とは即ち阿字なり、之を以て加持して菩提心を發するなり。
【金剛慧杵】三股金剛杵。

せしめん。手に金剛を轉ず。或は彼印を作せ。或は字句を書け、謂ゆる訶字なり長聲。次に四方に於て、四大護を書け。帝釋の方をば無畏結護者と名く、金色にして白衣なり。面に少しく忿怒の相を現じ、手に檀茶を持せり。或は彼印を作せ、或は字句を置け、謂ゆる嚩字を作せ、夜叉の方をば壞諸怖結護者と名く、白色にして素き衣なり。手に朅伽を持し、并に光焔を布く。能く諸の怖を壞る。或は彼印を書け、或は字句を置け、謂ゆる嚩字なり。龍方をば難降伏結護者と名く、亦無優華の色の如し、朱き衣を被たり、面像微笑にして光焔の中に在り、而も一切の衆會を觀ず。或は彼印を置け、或は字句を置け、謂ゆる索字なり。焔摩の方をば金剛無勝結護者と名く、黑色にして玄き衣なり。毘俱胝形にして眉の間に浪の文あり、上に髮冠を戴き、白身に威光ありて衆生界を照す。手に檀茶を持し、能く大いに障を爲す者を壞る。或は彼印を作す、或は字句を置く、謂ゆる吃識二合字なり。及び一切の眷屬使者は、皆白き蓮華の上に坐せしむべし。眞言者、是の如く敷置し已りて、次に當に外に出でて、第二分に於て釋迦種牟尼王を畫くべし。袈裟衣を被て三十二尊師の相あり、最勝の敎を說いて、一切衆生に無畏を施さんが爲の故なり。或は袈裟と鉢との印なり、或は字句を以てす、謂ゆる婆字なり。次に外の曼荼羅に於て法界性を以て自身を加持して菩提心を發せ。彼三分の位を捨てて、當に三たび囉を作して、心に大日世尊を念ずべし。前の調色の如く、第三分に於て、帝釋の方には、施願金剛童子の形を作れ。三昧の手には青き蓮華を持し、上に金剛慧杵を置く、諸の瓔珞を以て而も自ら莊嚴せり。上妙の絹縠を以

【密印】三股杵。
【或は字句】鑁字なり。
【彼印】金剛鉤。
【彼印】如意寶珠。
【彼印】蓮花。
【彼印】寶鈴。
【菩提心】即ち法界の性なり。
【淨を作せ】不動降三世二明王の加持を用ふべし。

て裙と爲し、極めて輕細の者を用て上服と爲す。身鬱金色にして、頂に五髮あり、或は密印を置き、或は字句を置け。

南麼三曼多勃馱喃一鑁

其右の邊に於て、光網童子あり、一切の身分皆悉く圓滿せり。三昧の手には寶網を執持し、慧の手には鉤を持す。或は彼印を置き、或は字句を書け、謂ゆる染字なり。焰摩の方に依つて、除一切蓋障菩薩あり、金色にして髮冠あり、如意寶を持す。或は彼印を畫き、或は字句を置く、謂ゆる噁長聲字なり。夜叉の方には、地藏菩薩、色は鉢孕遇華の如し、手に蓮華を持し、諸の瓔珞を以て莊嚴す。或は彼印を置き、或は字句を置く、謂ゆる伊字なり。龍方の虚空藏は、白色、白衣なり、身に光焰あり、諸の瓔珞を以て莊嚴し、手に竭伽を持てり。或は彼印を置き、或は字句を置く、謂ゆる伊字長聲なり。』

眞言者宴坐して、法界に安住せよ
我即ち法界性たり、而も菩提心に住せよ
帝釋の方に向ひて、金剛慧印を結べ
次に金剛の事を作し、懸空に供養を修せよ
諸の佛救世の、三昧耶の印等を現ぜよ
一切の方所を念じて、三たび轉じて眞言を持し
法に依つて弟子を召して、壇に向つて而も淨を作せ

彼に三自歸を授けて、勝菩提心に住せしめよ
當に諸の弟子の爲に、法界性の印を結び
次に法輪の印を結んで、一心にして彼體に同じうし
繒帛を以て面門を覆ひ、而も悲愍の心を起すべし
不空の手を作して、菩提を圓滿せしめんが故に
耳語して而も彼に、無上正等戒を告げよ
次に當に彼が爲に、正等三昧の印を結ばしめ
彼に開敷せる華を授けて、菩提の意を起さしむべし
其所至の處に隨つて、而も學人を敎へ
是の如く要誓を作して、一切應に傳授すべし
具德持金剛、又請うて世尊に白さく、
唯願くば仁中の勝、灌頂の法を演說したまへ
爾時、薄伽梵、法界に安住して
而も金剛手に告げたまはく、一心に應に諦に聽くべし
我諸の法敎を說かん、勝自在の攝持なり
師如來の性を以て、自體を加持し
或は復密印を以てす、次に應に弟子を召して

【三自歸】入佛三摩耶、法界生、轉法輪の三印明なり即ち佛法僧の三寶にして、此三印の加持によつて三寶に歸依し、菩提心に住す。
【不空の手】手中に花ありて空しからざる故に名く。
【無上正等戒】三摩耶戒。
【正等三昧の印】入佛三摩耶の印。
【其所至の處】投花の隨つる處に依つて其印を授くるなり。
【勝自在の攝持】心に願求あれば悉く能く攝取して、自在に願を滿ずるをいふ。
【如來の性】阿字門なり。

【寶印】外五股印或は塔印なり、

【法界性の等】小塔即ち正覺壇なり

【四大菩薩】普賢、慈氏、除蓋障、滅惡趣尊これなり。

【支分生の印】普賢の印。

【心に無生の句等】阿字本不生の故にく無垢、字とは囉字なりの清淨無垢染を義とする故に

【仁者】毘盧遮那如來。

法界性の大蓮花王の、中に住せしむべし
四大菩薩の、加持する所の寶瓶を以て
支分生の印を結んで、而も用て其頂に灌げ
髻の中に、應に大空の闇字門を授與し
心に無生の句を置き、胸に無垢の字を表すべし
或は一切阿字なり、髪と髻とに金色の光あり
白蓮華臺に住して、仁者に等同なり

大毘盧遮那成佛神變加持經卷第三　終

大毘盧遮那成佛神變加持經　卷第四

大唐天竺三藏善無畏共沙門一行譯す

密印品第九

爾時、薄伽梵毘盧遮那、諸の大衆會を觀察して、執金剛祕密主に告げて言はく、『祕密主、如來莊嚴の具に同じく法界趣に同じき標幟あり。菩薩是に由りて身を嚴るが故に、生死の中に處し、諸趣に巡歷すれども、一切如來の大會に於て、此大菩提の幢を以て而も之を標幟すれば、諸の天、龍、夜叉、揵達婆、阿蘇囉、揭嚕荼、緊那囉、摩睺羅伽、人、非人等、敬つて而も之を遶り、敎を受けて而も行ず。汝今、諦に聽け。極めて善く思念せよ、吾當に演說すべし。』是の如く說き已りたまふ。金剛手白して言さく、『世尊、今正しく是れ時なり、世尊、今正しく是れ時なり。』

爾時、薄伽梵、卽便身無害力三昧に住したまふ。斯定に住したまふが故に、一切如來の三昧耶に入り、一切に遍じて能く障礙する無き力ある無等の三昧力の明妃を說いて曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一　阿三迷二　帝哩三迷三　三麼曳四　莎訶五

祕密主、是の如きの明妃は、一切如來の地を示現す。三法道の界を越えざれば地波羅蜜、

【密印品】百三十九印明を說く。

【如來莊嚴の具等】一切佛は此を以て莊嚴となす故、如來法界の身を成ずることを得、若し衆生の行ずるあらば印、加持を以ての故に、亦如來法界身に同ずるなり。法界趣とは法界身なり。

【標幟】無上大菩提の標幟なり。

【身無害力三昧】如來無量の身自在力の故に能く害する者なし。

【三法道】本尊の力と眞言と印。

【是密印の相】入佛三昧耶の印相を明す、密印の相は合蓮花にして即ち凡夫の心を表す、二空を立つるは大空の果徳を表す即ち凡夫より直に佛果に入るの義なり

【又定と慧と等】左右の拳は色と心とにして六大法界を表す、二風を立て合せたる緣起の諸法を表す。

【復定と慧と等】地水火風の四指翻へして鈎するは輪の八輪を表し、二空相向つて首を合するは輪轂を表す即ち輪の形なり。

【復定と慧と等】左右の地水火立て合せたるは刀、二風二空相捻したるは、鐔なり、即ち大刀の形なり。

【歸命合掌】金剛合掌なり。

を圓滿す。是密印の相は、當に定と慧との手を用て空心合掌を作し、定と慧との二の虚空輪を以て並べ合せて、而も之を建立す。頌に曰はく、

此れ一切の諸佛の、救世の大印
正覺の三昧耶なり、此印に於て而も住す

又定と慧との手を以て拳と爲して、虚空輪を掌の中に入れて、而も風輪を舒べよ、是を淨法界の印と爲す、眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一達摩馱睹二薩嚩二合婆嚩句痕三

復定と慧との手を以て、五輪皆等しく迭に翻へし相鉤し、二の虚空輪の首倶に相向けよ。頌に曰はく、

是を名けて勝願の、吉祥法輪の印と爲す
世の依たる救世者は、悉く皆此輪を轉じたまふ

眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一伐折囉引二合怛麼二合句痕二

復定と慧との二手を舒べて歸命合掌を作し、風輪を相捻して二空輪を以て上に加ふべし、形朅伽の如し。頌に曰はく、

此大慧刀の印は、一切の佛の說きたまふ所なり
能く諸の見を斷ず、謂く倶生の身見なり

【朅伽】刀の梵名

【復定と慧と等】印相法螺の形を表す。

【商佉】シャンカ(Saṅkha)螺貝のこと。

【復定と慧と等】八葉蓮花の印。

【揵吒】鐸の義。

眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 摩訶朅伽微囉闍二 達摩珊捺囉舍二合 迦婆訶闍三 薩迦耶捺喋二合 瑟致二合上 吽、吒曳入掣反 諸入迦引 怛他引 蘖多引 地目吃底丁以反二合 儞入 社多五 微囉引 伽達摩儞入 社多吽六

復定と慧との二手を以て、虚心合掌を作し、二の風輪を屈して二の空輪を以て之を絞ふべし、形商佉の如し。頌に曰はく、

此を名けて勝願の、吉祥法螺の印と爲す
諸佛世の師、菩薩救世者
皆無垢の法を說いて、寂靜の涅槃に至る

眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 暗

復定と慧との手を以て、相合せて普く之を舒べ散ず、猶し揵吒の如し。二の地輪と二の空輪と相持して、火と風との輪をして和合せしめよ。頌に曰はく、

吉祥願の蓮華は、諸佛救世者の
不壞金剛の座なり、覺悟するを名けて佛と爲す
菩提と佛子と悉く、皆是より生ず

眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 阿去急呼

【復定と慧と等】外縛五股の印。

【復定と慧と等】佛頂印。

【復次に智慧の手等】次に如來毫相の印、

復定と慧との手を以て、五輪を外に向けて拳と爲し、火輪を建立し、二の風輪を舒べ屈して鉤の形と爲し、傍に在つて之を持せよ。虚空と地との輪を並べて而も直く上げ、水輪を交へ合せて跋折囉の如くせよ。頌に曰はく、

金剛大慧の印は、能く無智の城を壞り
睡眠の者を覺寤す、天人も壞ること能はず

眞言に曰はく、

南麼三曼多伐折羅二合赧一吽

復定と慧との手を以て、五輪を内に向けて拳と爲して、火輪を建立し、二の風輪を以て傍に置き、二の虚空を屈して相並べよ。頌に曰はく、

此印は摩訶の印なり、謂ゆる如來頂なり
適に纔に之を結び作せば、卽ち世尊に同じ

眞言に曰はく、

南麼三曼多勃䭾喃一吽吽

復次に智慧の手を以て拳と爲して、眉の間に置け。頌に曰はく、

此を毫相藏、佛常滿願の印と名く
纔に此を作すを以ての故に、卽ち人中の勝に同じ

眞言に曰はく、

【瑜伽の座に等】次に如來鉢印。

【復次に智慧の手等】次に施無畏手の印、これ一切衆生の種種の怖畏を除く。

【復次に智慧の手等】次に如來滿願手の印、これ衆生に向ひて一切の願を與ふるの相なり。

【復次に智慧の手等】次に怖一切爲障者の印。【毘俱胝】ブルクティー(Bhrukuṭī)皺の義。

南麼三曼多勃馱喃一阿去急痕惹呼急

瑜伽の座に住して、鉢を持するに相應して、定と慧との手を以て、倶に臍の間に在く、是を釋迦牟尼の大鉢の印と名く。

眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一婆上急呼

復次に智慧の手を以て上に向けて、而も施無畏の形に作せ。頌に曰はく、

能く一切の衆生類に、無畏を施し與ふ

若し此大印を結ぶを、施無畏者と名く

眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一薩婆他二爾嚩爾娜三婆也那奢那四莎縛訶五

復次に智慧の手を以て、下し垂れて施願の形を作せ。頌に曰はく、

是の如き與願の印は、世依の所說なり

適に纔に此を結ぶ者は、諸佛其願を滿したまふ

眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一鉢囉嚩代折羅引二合怛嚩合迦二莎訶

復次に智慧の手を以て拳と爲して、而も風輪を舒べ、毘倶胝の形を以て等引に住せよ。

頌に曰はく、

【諸の障者を等】これ如來大悲の力用なればなり。

【復次に智慧の手等】次に佛眼印。

【悲生眼】この眼は大悲より生じ亦能く大悲を生ずるを悲生眼といふ。

【復次に定と慧との手等】次に如來羂索印。此印能く一切爲惡者を縛す、又彼を壊して其をして諸惡を除息せしむるなり。

是の如きの大印を以て、諸佛救世の尊
諸の障者を恐怖せしめ、意に隨つて悉地を成じたまふ
是印を結ぶに由るが故に、大惡の魔軍衆と
及び餘の諸の障者は、馳せ散じて礙ふる所なし

眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一摩訶引沫羅嚩底丁以反二捺奢嚩路嗢婆二合吠三摩訶引昧怛囉也二合毘庾二合嗢蘖二合底丁以反四莎訶

復次に智慧の手を以て拳と爲して、而も火輪と水輪とを舒べて、虚空輪を以て而も其下に在け。頌に曰はく、

此を一切の佛の、世依の悲生眼と名く
眼界に置くと想へば、智者佛眼を成す

眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一伽伽那嚩羅洛吃灑二合拏上二迦嚕拏麼耶三怛他引蘖多斫吃芻二合四莎訶

復次に定と慧との手を以て、五輪を内に向けて拳と爲して、而も風輪を舒べ、圓かに屈して相合せよ。頌に曰はく、

此の勝願の索の印は、諸の惡を造る者を壊る
眞言者之を結べば、能く諸の不善を縛す

【復次に定慧の手等】次に如來の鈎印。一に合して拳となしとは內縛をいふ。風輪を舒べて第三の節を屈するは鈎の相を表す能く十方一切衆生を召じて此道を得しむ。

【即ち此鈎印等】次に如來の心印、印相は右の風と火とを並べ舒べて第三節を屈するなり此智他より得ず、還つて佛心より生ずるなり。

【復此印を等】次に如來臍印。前印に更に水指を舒べ加ふるなり。

眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 係係摩訶引 播者二 鉢羅二合娑嚩那履也三二合 薩埵馱睹四 微摸訶迦五 怛他引蘗多引地目吃底丁以二反儞人社多六 莎訶七

復次に定と慧との手を以て、一に合して拳と爲し、智慧の手の風輪を舒べて、第三の節を屈すること、猶し環の相の如くせよ。頌に曰はく、

是の如くなるを鈎印と名く、諸佛救世者

一切の十地の、位に住する

菩薩大心者と、及び惡慧の衆生とを招集す

眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 阿去急 薩婆怛囉引二合 鉢囉二合底丁以反 訶諦二 怛他引蘗黨矩奢三 菩提浙囉耶二合 鉢履布囉迦四 莎訶五

即ち此鈎印其火輪を舒べて、而も少しく之を屈せよ。是を如來心印と謂ふ。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 壞怒嗢婆二合嚩二 莎訶三

復此印を以て其水輪を舒べて、而も之を竪立せよ、如來臍印と名く。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 阿沒喋二合覩嗢婆二合嚩二 莎訶

即ち此印を以て直く水輪を舒べ、餘亦之を竪てよ、如來腰の印と名く。彼眞言に曰はく、

【即ち此印を等】如來腹印、前印の如くにして風と水と火との三指を直く立つるなり。

【復定慧の手等】次に如來藏印。此印に就て空心合掌は本有菩提心を表し、二地は佛と衆生との本不生相對の形、二水と二風を掌中に入るは分別散動を止むるの義、二火立合は一切智心、二空を並べ立つるは本地の大空法界を表するなり、

【即ち此印を等】次に結大界印、大界とは發菩提心より成佛に至るまで其中間に間斷せしめず、生死に復せず菩提を退かず、是れ其義なり。

【即ち此印を等】次に大護印、

【復風輪を等】次に普光印、印相は普く法界を照す光明を表す、

南麼三曼多勃馱喃一怛他引蘗多三婆嚩二莎訶

復定と慧との手を以て、空心合掌を作し、二の風輪を以て内に屈して入れよ、二の水輪亦然なり。其二の地輪少し屈せしめて、而も火輪を伸べよ、此は是れ如來藏の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼薩婆怛他引蘗帝弊毘也反一囕囕落囕二莎嚩二合訶

即ち此印を以て、其水輪を散じて上に向けて之を置け、大界の印と名く。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一嚧嚕補曬微矩麗二莎訶三

即ち此印を以て、其二の火輪を鈎屈して相合せて、風輪を散じ舒べよ、無堪忍大護の印と名く。彼眞言に曰はく、

南麼薩婆怛他引蘗帝弊毘也反下同一薩婆佩也微蘗帝弊二微濕嚩目契弊三薩婆他引四唅欠五囉吃灑二合摩訶引沫麗六薩婆怛他引蘗多本抳也二合儞入社帝七吽吽入怛囉二合引二吒輕囉吒九同上阿鉢囉二合底丁以反訶諦十莎訶十一

復風輪を以て、而も之を散じ舒べ、空輪を並べて其中に入れよ、普光の印と名く。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一入嚩二合羅引摩履儞二怛他引蘗哆喇旨二合三莎訶四

又定と慧との手を以て、空心合掌を作して、二の風輪を以て火輪の側に持せよ、如來

【又定慧の手等】次に如來光印。

【二の水輪を等】次に如來舌印。

【此印を以て等】次に如來語門の印

【前の印の等】次に如來牙の印。

【又前の印相等】次に如來四辯印。空心合掌して二地と二空とを掌中に聚め、頭を相著くること勿れ。

甲の印と名く。

二の水輪を屈し、二の空輪を合せて掌の中に入れて、二の水輪の甲の上を押せ、是を如來舌相の印と名く。眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一　怛他引蘗多爾訶嚩二合　薩底也二合達摩鉢囉二合底瑟恥二合多三　莎訶四

此印を以て、風と水との輪をして、屈して而も相捻せしめ、空輪を上に向けて而も少しく之を屈し、火輪を正しく直くして相會せよ。地輪も亦是の如し、如來語門の印と名く。

彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一　怛他引蘗多摩訶引嚩無各反　吃怛囉二三合　微濕嚩二合壞引曩摩護娜也三　莎訶四

前の印の如く、二の風輪を以て屈して掌の中に入れて上に向けよ、如來牙の印と名く。

彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一　怛他引蘗多能上　瑟吒羅二三合　囉娑囉娑引　娑囉三二合　參鉢囉二合引　博迦四　薩婆怛他引蘗多五　微灑也參婆上　嚩六　莎訶七

又前の印相の如くして、二の風輪を以て上に向けて之を置き、第三の節を屈せよ、如來辯說の印と名く。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一　阿振底夜二合那部二合多二　路波嚩引　増三麼哆上　鉢囉二合引　鉢多三二合　微輸上　駄婆嚩二合囉四　莎訶

【復次に定慧の等】次に如來十力印。空心合掌し地空を掌中に聚めて頭を聚合して相拄ふるなり。
【又前の印の等】次に如來念處印。二空二風聚めて相捻せしむるなり。
【又前の印の等】次に一切法平等開悟印。二水二空を以て掌中に聚めて相捻す。
【復定慧の手等】次に如意摩尼普賢印。以下は諸尊の寶印を說く、普賢の印相は寶珠の形
【即ち此虛心等】次に慈氏印、印相は寶瓶の印なり、瓶塔の義に依りて慈氏の持す法身の塔ともいふ。
【又前の印等】次に虛空藏の印。寶珠の印なり。

復次に定と慧との手を以て和合して、一相に空心合掌を作し、二の地輪空輪を屈し入れて相合せよ、此は是れ如來の持十力の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一 捺奢麼浪伽輕達囉二 吽參髯去 莎訶四

又前の印の如くして、二空輪と風輪とを以て、上節を屈して相合せよ。是れ如來念處の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一 怛他引蘖多娑麼喇合底二 薩埵係哆弊反毘庾 嗢蘖多三 伽伽那糝忙引糝麼四 莎訶四

又前の印の如くして、二の空輪を以て水輪の上に在け、一切法平等開悟の印と名く。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一 薩婆達麼三麼哆鉢囉合引二 鉢多二合 怛他引蘖哆弩蘖多三 莎訶四

復定慧の手を以て合して一と爲して、二の風輪を以て火輪の上に加へよ、餘は前の如し、是れ普賢如意珠の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一 參麼哆弩蘖多二 微囉惹達摩儞入 社多三 摩訶引摩訶四 莎訶五

卽ち此虛心合掌、二の風輪を以て、屈して二の火輪の下に在け。餘は前の如し、是れ慈氏の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一 阿爾單惹也二 薩婆薩埵引 奢夜弩蘖多三 莎訶四

又前の印の如くして、二の虛空輪を以て中に入れよ、虛空藏の印と名く。眞言に曰はく、

【又前の印等】次に除蓋障菩薩の印

【前の如く等】次に觀音印、即ち心蓮開敷の相、即ち觀音の大悲衆生界の心蓮を開くなり以下は第二に觀音院の諸尊の印明を說く、地藏を合して七尊。

【前の如く、等】次に大勢至印、未敷蓮の印にして開き已りて却て合するものなり。

【前の如く等】次に多羅菩薩の印。內縛して二風を立て合せ二空並べ立つるの印なり。

【前の印の等】次に毘俱知印。二風指を參へ差へて相抑すは鍼の形なり

南麼三曼多勃駄喃一阿去迦引奢參麼哆弩蘖多二微質怛囕二合鉢囉達囉三莎訶四

又前の印の如くして、二の水輪と二の地輪とを以て、屈して掌の中に入れて、二の風輪と火輪と相合せよ、是れ除一切蓋障の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一阿去急呼薩埵係哆弊反毘庾嗢蘖多二怛囕二合三囕囕四莎訶五

前の如くして、定と慧との手を以て相合して、五輪を散じ舒べて、猶し鈴と鐸との如くし、虛空と地輪とを以て、和合して相持して、蓮花の形に作れ、是れ觀自在の印なり。眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一薩婆怛他引蘖哆嚩路吉多二羯嚕儜麼也三囉囉囉吽若四莎訶五

前の如くして定慧の手を以て、空心合掌を作して、猶し未開敷蓮の如くせよ、是れ得大勢の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一髯髯索急呼二莎訶三

前の如くして定と慧との手を以て、五輪を內に向けて拳と爲して、二の風輪を擧げて、猶し針の鋒の如くし、二の虛空輪を之に加へよ、是れ多羅尊の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一哆嚟哆唎抳二羯嚕拏嗢婆上二合吠平三莎訶四

前の印の如くして、二の風輪を擧げて參へ差へて相押せ、是れ毘俱胝の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一薩婆佩也怛囉合引二散儞入二吽婆破二合吒也三莎訶四

【前の如く等】次に白處菩薩の印。菩薩白蓮中に住するの印。

【復定と慧の等】以下第三文殊院の印相を説く。八尊あり。

前の如くして、定と慧との手を以て空心合掌し、水輪と風輪と皆中に入れよ、是れ白處尊の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一怛他引蘗多微灑也三婆上吠平二鉢曇摩合忙履儞三入莎訶四

前の印の如くして、二の風輪を屈して虚空輪の下に置き、相去ること猶し穬麥の如くせよ、是れ何耶揭哩嚩の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一佉那也畔惹娑破合吒也二莎訶三

前の印に同じくし、二の水輪と風輪とを申べて、餘は拳の如くせよ、是れ地藏菩薩の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一訶訶訶二蘇上怛努三莎訶

復定と慧との手を以て空中に合掌を作して、火輪と水輪と交へ結んで相持し、二の風輪を以て二の虚空輪の上に置け、猶し鈎の形の如くし、餘は前の如くせよ、是れ聖者文殊師利の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一係係矩忙囉二微目吃底合鉢他悉體二合他以反多三娑麼二合囉娑麼二合囉四鉢囉二合底然五莎訶六

三昧の手を以て拳と爲して、而も風輪を擧ぐること猶し鈎の形の如くせよ、是れ光網の鈎印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一係係矩忙引羅二忙引耶蘗多娑嚩合婆去嚩悉體二合他以反多三莎訶四

【卽ち前の等】以下次に無垢光印の五尊は文殊內證の五智を表す。

卽ち前の印の如くして、一切の輪相皆少しく之を屈せよ、是れ無垢光の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一係矩忙引囉二微質怛囉二合蘖底矩忙引囉三麼努娑麼二合囉四莎訶五

前の如くして、智慧の手を以て拳と爲して、其風と火との輪相合して一と爲して之を舒べよ、是れ繼室尼の刀印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一係係矩忙引履計二娜那壤難娑麼二合囉三鉢囉二合底然四莎訶五

前の如くして、智慧の手を以て拳と爲して、而も火輪を申べ、猶し戟の形の如くせよ、是れ優波髻室尼の戟の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一頻去娜夜壤難二係矩忙引履計三莎訶四

前の如くして、三昧の手を以て拳と爲し、而も水輪と地輪とを舒べよ、是れ地輪慧幢の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一係娑麼二合囉壤那計覩二莎訶三

慧の手を以て拳と爲して、而も風輪を舒べて猶し鈎の形の如くせよ、是れ請召童子の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一阿去羯囉灑二合也薩鑁引二矩魯阿去然三矩忙引囉寫四莎訶五

前の如くして、定と慧との手を以て拳と爲し、二の風輪を舒べ、節を屈して相合せよ、是れ諸の奉教者の印なり。彼眞言に曰はく、

【除疑怪の金剛印】以下第四除蓋障印八尊あり。

【毘鉢舍那】ビパシヤナー(Vipaśyana)觀と譯す。五指伸べて掌を外に向け高く立つるを施無畏といふ。五指は五根力を表す意

【除惡趣の印】は衆生の無明を以ての故に無始より三惡趣にあるを、五力を得たる學者の願つて救ふるの意

【施願の相】右手を舒べて掌を仰けて之を垂れ下すをいふ。

南麼三曼多勃駄喃一阿去急微娑麼二合也濘曳二莎訶三

前の如く定と慧との手を以て拳と爲し、而も火輪を舒べ、第三の節を屈せよ、是れ除疑怪の金剛の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一微麼底製反鷄曳諸迦二莎訶三

毘鉢舍那の臂を擧げて、施無畏の手を作す、是れ旋無畏者の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一阿佩延娜娜二莎訶三

前の如くして、智の手を舒べ、而も上に之を擧げよ、是れ除惡趣の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一阿弊反毘庾達囉儜上薩埵駄敦二莎訶三

前の如くして、慧の手を以て心を掩へ、是れ救護慧の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一係摩訶引摩訶二娑麼二合囉鉢囉二合底然三莎訶四

前の如く慧の手を以て持華の狀を作せ、是れ大慈生の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一娑嚩二合制姤嗢藥二合多二莎訶三

前の如く慧の手を以て心を覆ひ、稍火輪を屈せよ、是れ悲念者の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一羯嚕儜沒灑二合眤多二莎訶三

前の如くして、慧の手を以て施願の相と作せ、是れ除一切熱惱の印なり。彼眞言に曰は

【地藏旗の印】以下第五地藏院の印契を明す。六尊あり。

【三輪】地水火、即ち三股の印なり

【寶處の印】寶處とは寶の海より生ずるが如く、かかる處より生ずるに名く。

【持地の印】金剛部三昧耶の印なり

【寶印手の印】外五股金剛杵の印なり。

く、

南麼三曼多勃駄喃一係嚩囉娜二嚩囉鉢囉引二合鉢多二合三莎訶四

前の如くして智慧の手を以て眞多摩尼寶を執持する形の如くせよ、是れ不思議慧の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一薩摩舍鉢履布囉二莎訶三

前の如くして定と慧との手を以て拳と爲して、二の火輪をして開敷せしむ、是れ地藏旗の印なり、彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一訶訶訶微娑麼二合曳平二莎訶三

慧の手を拳と爲して、而も三輪を舒べよ、是れ寶處の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一係摩訶引摩訶二莎訶三

此慧の手を以て其水輪を舒べよ、是れ寶手菩薩の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一囉怛怒二合嗢婆上嚩二莎訶三

定と慧との手を以て反祖叉合掌に作り、定の手の空輪と慧の手の地輪と相交へよ。般若を三昧に於てすることも亦復是の如し。餘は跋折羅の狀の如くせよ、是れ持地の印なり。

彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一達囉尼尼仁反達囉二莎訶三

前の如くして、五股金剛の戟の形に作れ、是れ寶印手の印なり。彼眞言に曰はく、

【發堅固意の印】前の五股印の狀の如くにして諸指の頭を併せ相著るなり。

南麼三曼多勃駄喃一 羅怛娜二合係二入 喇爾二合多二 莎訶三

即ち此印を以て一切の輪をして相合せしめよ、是れ發堅固意の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一 伐折羅二合二 婆嚩二 莎訶三

前の如くして定と慧との二手を以て刀を作れ、是れ虛空無垢菩薩の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一 伽伽娜引 阿難多愚者囉莎訶

前の輪印の如し、是れ虛空慧の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一 斫吃囉二合嚩入 囉丁以反 底二合二 莎訶三

前の商佉の印の如し、是れ淸淨慧の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一 達磨二 娑嚩二合 二 莎訶三

前の蓮花の印の如し、是れ行慧の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一 鉢曇摩二合 羅上耶二 莎訶三

前の靑蓮華の印に同くして、而も稍しく開敷するは、是れ安住慧の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一 壞瑟嚩婆二合嚩二 莎訶三

前の如くして、二手を以て相合して而も水輪を屈して、相交へて掌の中に入れ、二の火輪と地輪と上に向け、相持して而も風輪を舒べ、第三の節を屈して相著けざらしむること

【執金剛の印】以下第七金剛手院の印契を說く、主伴六尊。

【相著けざらしむ】其二風指をして火指の上節を去ること一麥許りにす。

【忙莽雞】母と譯す、即ち金剛母なり。

【忿怒月黶の印】此金剛は佛額の毫相に在りて生ずる故に名く。毫相は明淨なること滿月の如ければ、月黶と號するなり、前の五股金剛印の如く二風を屈して勾の如くし、二空を捻するが如くして相著けざらしむるなり。

猶し礦麥の如くせよ、是れ執金剛の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多伐折囉赧一戰拏摩訶引路灑拏𤙖二

前の印の如くして、二の空輪と地輪とを以て屈して掌の中に入れよ、是れ忙莽雞の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多伐折囉赧一怛嚟二合吒輕怛嚟吒二同上若衍底丁以反莎訶二

前の如くして定と慧との手を以て、諸輪反し叉へて相糺うて、自體に向へて而も之を旋轉し、般若の空輪を三昧の虚輪に加へよ、是れ金剛鎖の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多伐折囉赧一𤙖滿馱滿馱二慕吒耶慕吒耶三伐折路嗢婆二合吠四薩婆怛嚟二合引鉢囉二合底丁以反訶帝五莎訶六

此金剛鎖印を以て、少しく虚空輪を屈して、以て風輪を持して而も相至らざらしむ、是れ忿怒月黶の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多伐折囉二合赧一曷唎二合急呼𤙖發吒輕莎訶三

前の如く定と慧との手を以て拳と爲し、二の風輪を建立し、而も以て相持せよ、是れ金剛針の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多伐折囉二合赧一薩婆達磨儞入吠達儞二伐折囉二合引素旨嚩囉泥三莎訶四

前の如く定と慧との手を以て拳と爲して、而も心に置け、是れ金剛拳の印なり。彼眞言に曰はく、

【無能勝の印】以下第八四大護院の印契を說く。二餘あり。無能勝とは一切魔も嬈亂する能はず勝るるを以ての故に名とす。

【阿毘目佉】相向と譯す、此印は無能勝と相對するを以て相向金剛ともいふ。

【釋迦鉢の印】以下第九釋迦院の印契、主伴十七印なり。

南麼三曼多伐折囉二合赧一 薩破二合吒也伐折囉二合三婆吠平二莎訶三

三昧の手を以て拳と爲して竪を擧げて開敷し、智慧の手亦拳と作し、而も風輪を舒べて、猶し忿怒して相擬する形の如くせよ、是れ無能勝の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多伐折囉二合赧一 訥達哩沙二合摩訶引盧灑拏二佉引捺耶薩鑁引薩他引蘖單然矩嚕三莎訶四

定と慧との手を以て拳と爲して、相撃つ勢を作して之を持せよ、是れ阿毘目佉の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多伐折囉二合赧一 係阿毘目佉摩訶鉢囉二合戰拏二佉引那也緊旨囉引也徙三三麼耶麼努薩麼囉二合囉四莎訶五

前の鉢を持する相の如くなるは、是れ釋迦鉢の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 薩嚩訖麗二合奢儞入素捺耶二薩婆達摩嚩始多引鉢囉二合鉢多三伽伽那三迷四莎訶五

釋迦毫相の印は上の如し、又慧の手の指の峯を以て聚めて頂上に置け、是れ一切佛頂の印なり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 鑁鑁二吽吽吽三發吒輕四莎訶五

三昧の手を以て拳と爲して、火と風との輪を舒べ、而も虛空を以て地と水との輪の上に加へ、其智慧の手は、風と火との輪を申べて三昧の掌の中に入れよ、亦虛空を以て地と

【眞多摩尼毫相印】右手を以て拳となし、便ち頭指を以て眉間に於て之を拄ふるを眞多摩尼と名く、【少し異あるは等】

水との輪の上に加へて、刀の鞘に在るが如くせよ、是れ不動尊の印なり。前の金剛慧の印の如くなるは、是れ降三世の印なり。
前の如く定と慧との手を以て合して一相と爲して、其地と水との輪皆下に向け、而も火輪を申べ二の峯相連ね、二の風輪を屈して第三の節の上に置き、虚空輪を並べて三目の形の如くせよ、是れ如來頂の印、佛菩薩の母なり。復三昧の手を以て覆せて而も之を舒べ、慧の手を拳と爲して而も風輪を擧ぐること、猶し蓋の形の如くせよ、是れ白傘佛頂の印なり。
前の刀印の如くなるは、是れ勝佛頂の印なり。
前の輪印の如くなるは、是れ最勝佛頂の印なり。
前の鈎印の如く慧手を拳と爲して、其風輪を擧げ、而も少しく之を屈せよ、是れ除業佛頂の印なり。
前の佛頂の印の如くするは、是れ火聚佛頂の印なり。
前の蓮華印の如くするは、是れ發生佛頂の印なり。
前の商佉の印の如きは、是れ無量音聲佛頂の印なり。
智慧の手を以て拳と爲して、眉間に置在するは、是れ眞多摩尼毫相の印なり。
前の佛頂の印の如くするは、是れ佛眼の印なり。復少しく異あるは、謂ゆる金剛の標相なり。
智慧の手を心に在き、蓮華を執る像の如くし、直く奢摩他の臂を申べ、五輪上げ舒べて

これ空指を開いて火指の背を去らしむること一麥許りにして相著けず、五股の形に似たるが如くせる是なり

【蓮華を執る像等】風空指の頭相捻じ火指垂れ屈して中に當りて、地水正しく竪つるなり。

【奢摩他】シヤマタ（Samatha）止と譯す。

【五輪上げ舒べ】其手を頂より高からしむるなり。

【自在天の印】以下第十世天の印契を明す、四十餘印あり。

前も外に向けて之を距ぐは、是れ無能勝の印なり。

定と慧との手を内に向けて拳と爲し、二の虚空輪上に向けて之を屈すること口の如くせよ、是れ無能勝明妃の印なり。

智慧の手を以て髏を承くるは、是れ自在天の印なり。

即ち此印を以て風と火との輪をして叢に戻へて之を申ぶるは、是れ普華天子の印なり。

前の印と同じく虚空輪を以て掌の中に在け、是れ光鬘天子の印なり。

前の印に同じく虚空と風との輪を以て、華を持ちたる相を作れ、是れ滿意天子の印なり。

智慧の手を以て虚空と水との輪相加へ、其風と火との輪と地輪と、皆之を散し舒べて以て其耳に掩ふ、是れ遍音聲天の印なり。

定と慧との手相合して、二虚空輪圓かに屈し、其餘四輪も亦是の如くす、是れ地神の印と名く。

前の如く智慧の手を以て施無畏の相と作し、空輪を以て掌の中に在け、是れ請召火天の印なり。

即ち施無畏の形を以て、虚空輪を以て、水輪の第二の節を持す、是れ一切諸仙の印なり、其次第に隨つて稍應して之を用ひよ。

前の如く定と慧との手を以て相合して、風輪と地輪と掌の中に入れ、餘は皆上に向けよ、是れ燄摩但荼の印なり。

【嚕達羅】暴悪と譯す。ルドラ(Rudra)自在天の別名

【嬌末離爍底】嬌末離は大自在の子羯底迦の妃、爍底は三戟のこと。

【風輪をして等】左手を以て地水火の三指を申べ、各舒散せしめ、風を以て空を捻ずるなり。

【劫鉢羅】髑髏なり。

【遮文茶】チヤマンダ(Cāmuṇḍā)悪鬼の名、

【難陀跋難陀の二龍の印】先づ右手の五指を以て覆うて左膝に加ふ、是れ難陀、又左の五指を覆ふに右膝を加ふ、是れ跋難陀なり。

【三昧の手等】左の五指半蓮花の印

慧の手下に向くること、猶し健吒の如し、是れ焰摩妃の鐸の印なり。

三昧の手を以て拳と爲して、風と火との輪を舒べよ、是れ暗夜天の印なり。即ち此印を以て又風輪を屈せよ、是れ嚕達羅の戟の印なり。

前の印の如くして蓮華を持する形を作れ、是れ梵天明妃の印なり。

前の印の如く其風輪を屈して、火輪の背の第三の節に加ふ、是れ嬌末離爍底の印なり。

即ち此印を以て、風輪をして虛空の上に加へしむ、是れ那羅延后の輪印なり。

三昧の手は拳と爲し、虛空輪をして直く上げしむ、是れ焰魔七母の鎚の印なり。

其定の手を仰けたること、劫鉢羅を持する相の如くす、是れ遮文茶の印なり。

前の偈伽の印の如くなるは、是れ涅哩底の刀印なり。

前の輪印の如くなるを、三昧の手を以て之を爲す、是れ那羅延の輪印なり。

以て定と慧との手を轉じて、左右に相加ふ、是れ難陀跋難陀の二雲の印なり。

前の如く三昧の手を申べ、虛空と地との輪相加へよ、是れ商羯羅の三戟の印なり。

前の如く三昧の手を申べ、虛空と地との輪相持せよ、是れ商羯羅后の印なり。

即ち此印を以て直く三輪を舒べよ、是れ商羯羅妃の印なり。

三昧の手を以て蓮華の相を作れ、是れ梵天の印なり。因んで潔白の觀を作す、是れ月天の印なり。

定と慧との手を以て顯現合掌して、虛空輪を屈して水輪の側に置く、是れ日天輿輅の印

なり。

般若三昧の手を合せ、地輪と風輪とを内に向け、其水火輪相持すること弓の如くせよ、是れ社耶毘社耶の印なり。

前の幢印の如くなる、是れ風天の印なり。

三昧の手を仰け、智輪に在つて、智慧の手の空と風と相持して身に向けて、運動することと音樂を奏するが如くすべし、是れ妙音天の費拏の印なり。

前の羂索印の如くするは、是れ諸龍の印なり。

前の妙音天の印の如くし、而も風輪を屈して空輪の上に交ふ、是れ一切の阿修羅の印なり。眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一　蘖囉邏坻二　莎訶三

内に向けて拳と爲して、而も水輪を舒ぶるは、是れ乾闥婆の印なり。眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一　微輸駄薩嚩合囉嚩引係儞二　莎訶三

即ち此印を以て、而も風輪を屈する。是れ一切藥叉の印なり。眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一　藥乞釵合濕嚩合囉二　莎訶三

又此印を以て、虛空輪と地輪と相持して、火と風とを申べよ、是れ藥叉女の印なり。眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一　藥乞叉合尾儞耶合達履二　莎訶三

【月天の印】梵王印に異るなし、但白色ありと想ふを異とす。

【顯現合掌】左右の手開き仰いで並ぶるをいふ。

【社耶毘社耶】社耶は勝、毘社耶は無勝と譯す、月天后なり。

【風輪を屈し等】風指を屈して大指の甲上に加ふるなり。

【藥叉女の印】左手の空指を以て地指の甲頭を捻じて水火を申べ、風指を以て大指の節上を捻ずるなり。

内に向けて拳と爲して、而も火輪を舒べよ、是れ諸毘舍遮の印なり。眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一比舍引遮喋底丁以反二莎訶三

改めて火輪を屈せよ、是れ諸毘舍支の印なり。眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一比旨比旨二莎訶三

前の如くして定と慧との手を以て相合し、虛空輪を並べて之を建立す、是れ一切執曜の印なり。眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一蘗囉二合醯濕䭾二合履耶二合鉢囉合引二鉢多二合彌底下以反麼耶三莎訶四

復此印を以て、虛空と火との輪相交ふ、是れ一切宿の印なり。眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一怛吃灑二合娜囉二合入二儞囊捺儞平三曳莎訶四

即ち此印を以て、二の水輪を屈して掌の中に入るべし、是れ諸の羅刹娑の印なり。眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一囉引吃灑二合娑引地鉢多曳二莎訶三

三昧の手を申べて以て、面門を覆ひ、爾賀嚩を以て之を觸れよ、是れ諸の荼吉尼の印なり。眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一頡㗚二合訶二急呼

祕密主、是の如きの上首の諸の如來の印は、如來の信解より生ぜり、即ち同じく菩薩の標幟にして其數無量なり。又祕密主、乃至身分の擧動住止は、應に知るべし、皆是れ密

【改めて火輪を等】前印の二中指を稍屈す。

【一切宿の印】合掌して右を以て左を押して二火を交へ二空を交へるなり。

【羅刹婆の印】合掌して二水を屈して掌に入る。

【爾賀嚩】香の梵名。

【荼吉尼】ダーキニイ(Dakini)夜叉鬼の一、

【諸の如來】上の諸尊は皆大日如來の示現なればなり

印なり。舌相の轉ずる所の衆多の言説は、應に知るべし、皆是れ眞言なり。是故に祕密主、眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は、已に菩提心を發し、當に如來地に住して曼荼羅を畫くべし。若し此に異る者は諸佛菩薩を謗するに同じ、三昧耶を越ゆ、決定して惡趣に墮せん。』

大毘盧遮那成佛神變加持經卷第四　終

【如來の信解より等】大日如來因位の信解願力を以ての故に此身密印を現じて一切衆生を救ふをいふ。

【又祕密主等】上に明す印は有相の身密なり、以下無相の三密を明す。

【三昧耶】一切如來の本所立の誓願なり。

【字輪品】一切字輪を三部四處輪に攝し行者之に住すべきを明す。【一】初に三重歸命三寶眞言の心あり、阿娑嚩の三字是なり、此三字は三部の義を顯す、阿字は如來部、娑字は蓮華部、嚩字は金剛部、三部毎に發心修行菩提涅槃の四輪を轉ず、第一の阿は菩提心の體、娑と嚩とは此各屬なり、伽佉等四五の字及び野等の九字悉く阿字輪に入る。是れ則ち一字より多字を轉生する故に名けて字輪といふなり【二】行者已に菩

大毘盧遮那成佛神變加持經 卷第五

大唐天竺三藏善無畏共沙門一行譯す

字輪品第十

爾時、薄伽梵毘盧遮那、持金剛祕密主に告げて言はく、諦に聽け、祕密主、遍一切處の法門有り。祕密主、若し菩薩、此字門に住すれば、一切の事業皆悉く成就せん。

(一)南麼三曼多勃駄喃阿
南麼三曼多勃駄喃娑
南麼三曼多伐折囉赧嚩

(二)南麼三曼多勃駄喃阿
迦佉哦伽遮車若社吒咤拏荼多他娜駄波頗麼婆野囉邏嚩奢沙娑訶吃灑二合右此一轉皆上聲短く之を呼べ

(三)南麼三曼多勃駄喃暗
迦佉哦伽遮車若社吒咤拏荼多他娜駄波頗麼婆野囉邏嚩奢沙娑訶吃灑二合右此一轉は皆去聲なり長に之を呼べ

提心を發す、故に當に進んで菩提の行を修すべし、故に次に長聲の字輪を明す、是れ行なり。

【三】已に菩提の行を具足すれば則ち菩提を成ずべし故に次に大空點を冠したる字輪を明す、大空智は即ち菩提の故に。

【四】已に菩提を成ずれば當に何れの所にか至るべき、謂く大涅槃なり、故に次に涅槃の點を附けたる字輪を明す、傍の二の圓點は即ち涅槃の點なり。

【一切如來の神力等】只上の悉曇の字母等は世間の童子も當に修するところなるも、然も此諸字は皆是れ如來の加持神力を以て如來内證の體證より流出したまふ、故に是不思議の業用なり、若し人能

南麼三曼多勃馱喃糝

南麼三曼多伐折囉赧

劍欠儼儉占襜染瞻諵喃湛擔探喃淡噞鑁瞰

閻嚂監參瞫衫參甜吃衫 二合 共口邊字は皆第一轉を帶す本音に之を呼べ

(四)南麼三曼多勃馱喃噁

南麼三曼多勃馱喃索

南麼三曼多伐折囉赧莫

屩却虐噱灼綽弱　杓　磔坼搦擇愽託諾鐸愽泊漠薄藥喀落嘆鑠嗦索嗦吃索 二合皆第一轉の音を帶す入聲に之を呼べ

伊縊塢烏哩哩里狸翳藹汙奧

仰壤喏曩莽　暘　穰　儜曩忙嶮髯喃南鑁瞻　弱　搦諾莫

秘密主、是の如きの字門の道は善巧法門なり、次第に眞言の道に住せよ、一切如來の神力の加持したまふ所なり。善く正遍知の道を解するは、菩薩の行舞なり。過去と未來と現在との諸佛世尊已に說き、當に說き、今說きたまふ。秘密主、我今普く諸佛の刹土を觀ずるに、此遍一切處の法門を見ざること無し。彼諸の如來宣說したまはざる者有ること無し。是故に秘密主、若し眞言門に菩薩の行を修せんことを了知せんと欲せば、諸の菩薩は此遍一切處の法門に於て、應に勤めて修學すべし。婀遮吒多波に於て、初中後相加し、等持

の品類を以て相入すれば、自然に菩提心と行と成等正覺と及び般涅槃とを獲得す。此等の說く所の字門、相與に眞言法教に和合して初中後俱なることあり。眞言者、若し是の如く知るときは、其自心に隨つて而も自在を得ん。此一一の句に於て決定の意もて之を用ふべし。慧を以て覺知するときは、當に無上殊勝の句を授けらるべし。是の如く一輪より字輪を輪轉す、眞言者、此を了知するが故に、當に世間を照すこと大日世尊の如くして而も法輪を轉ず」と。

祕密曼荼羅品第十一

爾時、薄伽梵毘盧遮那、如來眼を以て一切法界を觀察して、法界俱舍に入りたまふ。如來平等莊嚴藏三昧を奮迅したまひ、法界無盡莊嚴を現じたまふを以ての故に、此眞言行門を以て、無餘の衆生界を度し、本願を滿足したまふ。故に時に佛、三昧の中に在して、是の如きの無盡の衆生界に於て、衆の聲門より隨類の音聲を出したまふこと、其本性の如く、業生成熟して、果報を受用する顯と形との諸色の、種種の語言と、心の思念する所にて、而も爲に法を說き、一切衆生をして、皆歡喜を得しめたまふ。復一一の毛孔より法界の增身を出現したまひ、出し已つて虛空に等同なり。無量世界の中に於て、一一の音聲の法界の語表を以て、如來發生の偈を演說したまふ。

く此中の意を了解すれば、即ちこれ三菩提道に通達するなり。

【菩薩の行舞】能く衆生の心に順ふが故に菩薩も亦種種の威儀を現じて印を成ぜざるなく種種の妙法音を出す、皆是れ眞言なり。

【迦遮吒多波】前の迦等の眞言の初二十字中の各四字の最初の字を擧げて餘を顯す、又初中後とは阿等の五字を初とし、迦等の二十字を中、囉等の八字は皆傍點にして此諸字皆助成字の故に後といふ。

【大日世尊の如く等】若し行者人の爲に阿闍梨となり曼茶羅を建立せんとする時は、先づ世尊の位に住すべし、此諸字門を以て合集して身を成ずれば、即ち是身

佛と同じ。
【秘密曼荼羅品】以心傳心の最上曼荼羅即ち我身功德開發の曼荼羅にて自この經の最要、自體四輪等の秘密境大曼荼羅以心灌頂法を明す。
【法界俱會】如來自證の三昧なり、此位は微妙寂絶にして示現するを得べからざるなり。
【如來平等莊嚴三昧】如來の神力加持を以て身口意種種の形相を示現して法界に遍滿するをいふ。
【法界無盡莊嚴】平等法界を以て法身を莊嚴して衆生を度するなり。
【普身】無盡色身即ち種種の形をいふ。
【一の音聲】阿字門。
【廣生の偈】法界性の阿字門より能く十法界の一切法を生ずることを

能く隨類の形、諸法と法相とを生ず
諸佛と聲聞と、救世の因緣覺と
勤勇の菩薩衆と、及び人尊も亦然なり
衆生と器世界と、次第に而も成立し
生住等の諸法、常に恆に是の如く生ず
智と方便とを具するに由つて、慧の無き疑を離る
而も此道を觀じたまへるが故に、諸の正遍知を説きたまふ

爾時、法界より生じたる如來身、一切法界に於て、自の身表を化して雲の如く遍滿せり。毘盧遮那世尊、纔に心を生じたまふ頃に、諸の毛孔中より無量の佛を出して、展轉して加持し已りて還つて法界宮の中に入りぬ。是に於て大日世尊、復持金剛秘密主に告げて言はく、『秘密主、曼荼羅の聖尊の分位と種子と標幟とを造ることあり、汝當に諦に聽くべし。善く之を思念せよ、吾今演説せん。』持金剛秘密主言さく、『是の如く世尊、願樂くば聞かんと欲す。』

時に薄伽梵、偈頌を以て曰はく、

眞言者は圓壇を先づ自體に置け
足より而も臍に至りては、大金剛輪を成す
此より而も心に至りては、當に水輪を思惟すべし

明す。

【眞言者は等】以下阿闍梨曼茶羅を建立して弟子の爲に灌頂せんとする時に、先づ自身を觀ずる作法を明す即ち五字嚴身なり圓壇とは空大なり此段の五輪の形は正しく身分と相稱はしむべし。

【次に持地を等】壇地を加持することを觀念するをいふ、即ち前の五輪を翻倒して壇地に之を觀じて其上に曼茶羅を書くなり曼茶羅を書く時は自身及び壇地を觀じて五輪となし、亦弟子の身を加持して五輪となして後に之を書くべきなり。

【金剛手等】金剛手は大覺位に同じきも衆生を度せんと欲するが爲の故に菩薩となつて相を起發するなり。

【暗欠暗噁糝索含

水輪の上に火輪あり、火輪の上に風輪あり

次に應に持地を念じて、而も衆の形像を圖くべし

爾時、金剛手、大日世尊の身と語と意との地に昇つて、法に於て平等觀を以て、彼未來の衆生を念じて、一切の疑を斷ぜしめんが爲の故に、大眞言王を說いて曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一阿三忙引鉢多二合達摩駄覩二蘖登反底孕蘖哆喃三薩婆他四引暗引欠引暗噁五糝索六含鶴七嚂嚕八鑁嚩九急呼沙訶吽十嚂嚕訶囉二合鶴十一沙訶嚂嚕十二沙訶十三

持金剛祕密主、此眞言王を說き已りぬ。時に一切如來十方世界に住して、各の右の手を舒べて執金剛の頂を摩でて、「善哉」の聲を以て而も稱歎して言さく、「善い哉善い哉、佛子。汝已に毘盧遮那世尊の身と語と意との地に超昇せり。一切の方所の平等の眞言道に住する諸の菩薩を照明せんと欲するが爲の故に、此眞言王を說く。何を以ての故に。毘盧遮那世尊應正等覺、菩提の座に坐したまひしとき、十二句の法界を觀じて、四魔を降伏したまふ。此法界生は、三處より流出して天魔の軍衆を破壞す。次に世尊の身と語と意と平等を得て、身量虛空に等同なり、語と意との量も亦是の如し。無邊の智生ずることを逮得して、一切の法に於て自在に而も法を演說したまふ。謂ゆる此十二句は眞言の王なり。佛子、汝今現に毘盧遮那世尊の平等の身と語と意とを證するが故に、衆に知識せらるること正遍知者に同じ。」

而も偈を說いて言さく、

【鶴噓啉鋑時】この十二字を十眞言の王といふ。【十二句】即ち十二眞言王なり、此眞言王は法界の體性なり。

【優陀那】總じて攝するの義一偈を以て無量の法義を攝するが故に。【已に一切の疑等】以下四十五問あり次第して佛の秘要方便を問ふなり。

汝一切智の、大日正覺世尊に
最勝の眞言の行を問ひたてまつる、當に法教を演說すべし
我往昔是に由りて、妙菩提を發覺し
一切の法を開示して、滅度に至らしむ
現在十方界の諸佛、咸く證知したまふ

爾時、具徳金剛手、心に大いに歡喜し、諸佛の威神に加持せらるるが故に、而も偈を說いて言さく、

是法は盡くること有ること無く、自性も無く住も無し
業と生とに於て解脫して、正遍知に同じ
諸の世を救ふ方便を以て、悲願に隨つて轉じて
無生智を開悟したまふ、諸法は是の如きの相なり

時に執金剛秘密主、復優陀那の偈を說いて、毘盧遮那世尊に請問したてまつりて、此大悲藏より生ずる大曼荼羅に於て、疑ふ所を決斷す、未來世の諸の衆生の爲の故なり。

已に一切の疑を斷じたまへる、種智は熱惱を離れたり
我衆生の爲の故に、導師に請問したてまつる
曼荼羅は何をか先とする、惟大牟尼說きたまへ
阿闍梨に幾か有る、弟子に復幾種かある

【地相を知る】地の好惡の相を知つて其好地を取るなり。

【云何が彼に竪住せん】魔障の爲に惱さるゝが故に之を避けて安穩に住するなり。

云何が地相を知る、云何が而も擇治せん
云何が當に作淨すべき、云何が彼に堅住せん
及び諸の弟子を淨むる、惟願くば導師說きたまへ
云何が已に淨むる相なる、何を以てか而も護ることを作す
云何が地を加持する、事業には誰をか初とする
修多羅に幾か有る、云何が地分を作す
幾種の供養を修する、云何なる華と香と等をかせん
此華當に誰にか獻るべき、香も亦復是の如し
云何が而も奉獻せん、應に何の華と香とをか以てすべき
諸の食と護摩と、各の何の軌儀をか以てせん
及び諸の聖天の座、願くば此教法を說きたまへ
身相の顯と形との色、唯次第に開演したまへ
尊ぶ所の密印と、及與自ら敷く座とを說きたまへ
何が故にか名けて印と爲し、是印何に從つてか生ずる
灌頂に復幾種かある、三摩耶に幾か有る
眞言者は幾時にか、眞言の行を勤修して
當に菩薩の道を具すべき、云何が眞諦を見る

【正覺一切智】以下如來の答說。

悉地に幾の種か有る、及與成就の時を說きたまへ
云何が大空に昇る、云何が身祕密
此身を捨てずして、而も天身と成ることを得る
種種の諸の變化、彼復何に從てか生ずる
日と月と火と方と等、曜と宿との星の時分の
現ずる所の諸の不祥と、生死の樂の苦を受くるとを
云何が起らざらしむ、起す所を盡く除滅せしめて
而も常に諸佛兩足尊に、親近することを得ん
幾種の護摩の火かある、幾の事を以てか而も威を增す
諸佛の差別の性、唯願くば導師說きたまへ
無餘の諸世界と、及與出世間と
彼果と及び數と量との、殊勝の三摩地と
成熟すること何の所にか在る、成熟せざること云何
復幾の時を齊りてか、業と生とを解脫することを得る
正覺一切智、熱惱を離れたる世尊
金剛手に告げて言はく、善い哉大勤勇
祕密曼荼羅の、聖天の位を決定す

【阿闍梨に二有り】深祕と顯略との二阿闍梨、前者は出世間の阿闍梨、後者は世間の阿闍梨なり。初に深祕。

【第二は等】以下第二顯略の阿闍梨の相を明す。

【四種の弟子】時念誦、非時念誦、俱時非時俱念誦、俱非念誦の弟子をいふ。

大悲を根本として生ずる、無上摩訶衍の
諸佛の最祕密なり、汝が問ふ所の如く
大力持金剛、我今略して
曼荼羅の初業を宣說すべし。佛子應に諦に聽くべし
十二支句生の、大力持明王は
應に最も先に作すべき所なり、本三昧に住し
瑜伽の道を解了して、而も衆の事業を作せ
阿闍梨に二有り、印と眞言とに通達せり
彼相も亦是の如し、深祕と顯略との分あり
能く深廣の義を知つて、傳ふべき者には方に授く
正覺の長子なり、遠く世の樂を離す
第二は現法を求め、深く癡の攀緣に著す
世間の曼荼羅なり、一切斯が爲に作る
諸佛二足の尊、灌頂傳授の者に
四種の弟子を說きたまふ、時と非時と差別なり
一には時念誦と、非時と俱と非俱とあり
具に一切の相有るは、佛親の弟子なりと說きたまふ

最初に地相を知れ、即ち謂ゆる心地なり
我已に作淨を説き、前の如く事業を修せよ
若し過患を離るれば、心地に畏るる所無し
當に眞淨を成ずることを得て、一切諸の過を離るべし
堅く是の如きの知に住すれば、自の三菩提を見る
若し此に異るものは、能く淨地を淸むるに非ず
若し妄分別に住せば、行者其地を淨めよ
祕密主淨に非ざれば、菩提心を離るるを以てなり
故に應に分別を捨てて、一切の地を淨除すべし
我廣く法教にある所の、曼荼羅を説くべし
是中に先とする所の事を、愚癡にして知解せざれば
世間の覺と名くるに非ず、亦一切智に非ず
乃至分別諸普の、因を捨つること能はず
應當に弟子の爲に、而も菩提心を淨むべし
護るに不動尊を以てす、或は降三世を用ふ
若し弟子妄執の爲に、動ぜられざれば
當に最正覺を成ずべし、垢無きことを虚空に喩ふ

【時念誦】若干の期限を以て修行して成就を得るをいふ。期限中に成就を得ざる故に更に加行を加修するを非時といふ、久如法に修行せずして成就の時に至らざる故に非時なり、更に依行せざる故に倶なり、未だ倶せざる所ありて眞言を與ふることを得ざるを非倶といふ、此れ攝受する弟子の相なり。

【具に一切の相等】諸根相好等の具するは外相、一一能く如法に修行して佛の教指に遵せざるは内相なり。

【心地】菩提心。

【不動尊を以てす】淨菩提心堅固不動の譬なるが故に其心を護て傾動せざらしむ。三世は三毒なり。

【蘇多羅】スートラ（Sutra）綖と譯す、衆德を連持して散逸せざらしむるの義。

【一切如來の座】如來の座は八葉蓮の全く開けたるもの。若し菩薩なれば花座半開なり。

初には是地を加持すること、諸佛の教に依る
第二は心自在なり、唯此れ餘教に非ざるなり
四種の蘇多羅あり、謂く白と黃と赤と黑となり
第五に應に念ずべき所は、謂ゆる虛空の色なり
空の中に而も等しく持して、曼荼羅を印定す
第二に綖經を持して、道場の地に置け
一切如來の座と、及び諸佛智子とには
悅意の妙蓮華なり、世間に吉祥と稱す
緣覺と諸の聲聞とは、謂ゆる邊智の者なれば
當に知るべし敷く所の座は、芰荷青蓮の葉なり
世界の諸天神は、梵衆を以て初と爲す
赤色の鉢曇華なり、彼を稱して座の王と爲す
此を降つては所應の如く、念じて其地分に居らしめよ
供養に四種有り、謂く作禮と合掌と
幷及に慈と悲と等と、世間の華と香とを與ふると
手より發生する華とを、諸の救世者に奉る
支分生の印を結んで、而も菩提心を觀ぜよ

【吉祥の印】空水二指頭相捻じて餘の三指皆之を舒散する印なり、此印を以て諸物供具を加持するなり。

【金剛拳の印等】普通吉祥の印を作さずして金剛拳又は蓮花鬘の印を以て加持することを明す、何れも右手をもつてすべし。

【護摩に二種等】

各各の諸の如來と、彼所生の子と等に
是無過の華の、芬妙あり復光顯にして
法界を樹王と爲すを以て、人中の尊に供養す
眞語を以て加持し、三昧自在に轉ず
勝妙にして廣きこと大なる雲の如くして、法界の中より出生す
彼より衆華を雨らして、常に諸佛の前に遍ず
其餘の世天等に、亦當に此華を散ずべし
奉獻せんときには、隨つて本眞言と性類とに相應せよ
是の如く塗香等も、亦其應き所に隨ふべし
空と水との輪を相持する、是を吉祥の印と謂ふ
彼奉る所の華等は、自心に當てて之を獻ぜよ
若し諸の世天神ならば、應に臍の位に在りと知るべし
或は金剛拳の印、若くは復蓮華鬘もて
而も空中に在りて、導師救世者に獻ぜよ
乃至諸の世天、各其次第の如くせよ
護摩に二種有り、謂ゆる內と及び外となり
業と生とに解脱を得て、復芽は種より生ずること有り

以下護摩の義を明す、護摩ホーマ、(Homa)燒と譯す
【芽は種より等】菩提心の芽は菩提心の種子より生起するなり。
【三位】本尊、眞言印。本尊は所奉の尊、卽ち火中に此曼茶羅あるべし眞言は卽ち爐なり印は行爲なり、又外護摩に由りて能く內護摩に引入せしむ、其實は內外の理本より差別なし。然れども世間の成就を求むる者の爲に此外護摩作法をなすなり。
【如來部の眞言等】以下は色及び形類を明す。
【四方等】曼茶羅の形を說く、四方は增益、輪圓は息災、三隅は降伏、半月は攝召なり。
【初に應に以等】下諸の形像を明す

能く業を燒くを以ての故に、說いて內護摩と爲す
外用に三位あり、三位は三の中に住して
三業道を成就す、世間の勝れたる護摩なり
若し此に異つて作すものは、護摩の業を解せざるなり
彼癡にして果を得ず、眞言の智を捨離す
如來部の眞言と、及び諸の正覺の說とは
當に知るべし白と黃となり、金剛には衆色を具す
觀自在の眞言は、純素にして事に隨つて選す
四方相重ねて普し、輪圓なること次第の如し
三隅と半月輪と、而も形を說くこと亦然なり
初に應に色像を知るべし、謂ゆる男女の身なり
或は復一切處に、其類の形色に隨つて
不思議の智生ず、是故に不思議にして
物に應じて殊異あれども、智と智證と常に一なり
乃至心の廣博なること、當に知るべし是れ其量なり
座と印とも亦是の如し、以て諸の天神に及す
諸佛の生ずる所の如く、印も彼に等同にして生ず

【灌頂に三種】灌頂の種類を明す、印法灌頂、事業灌頂、以心灌頂これなり。

【五種の三昧耶】第一現の曼荼羅供作法、第二結緣灌頂、第三受明灌頂、第四傳法灌頂、第五瑜祇灌頂なり。

此法より生ずる印を以て、諸の弟子を印持す
故に略して法界を說いて、是を用ひて標幟と爲す
灌頂に三種あり、佛子至心にして聽け
若し秘印の方便は、則ち作業を離る
是を初の勝法と名く、如來の灌頂したまふ所なり
謂ゆる第二とは、業事を起作せしむ
第三には心を以て授く、悉く時と方とを離る
尊をして歡喜せしむるが故に、所說の如く應に作すべし
現前に佛灌頂したまふ、是れ則ち最も殊勝なり
正等覺略して、五種の三昧耶を說きたまふ
初は曼荼羅の具足せるを見る、三昧耶なり
未だ眞實の語を傳へず、彼密印を受けず
第二の三昧耶は、入つて聖天の會を觀るなり
第三は壇と印とを具し、教に隨つて妙業を修す
復次に傳教を許すには、三昧耶を具することを說く
印壇の位を具して、教の所說の如くすと雖も
未だ心灌頂に逮ばざれば、秘密の慧生ぜず

【三處】自身と所觀の法と悉地の時となり。

【五種の諸の悉地】最無上の悉地以前の五種の悉地なり一に如來の祕藏を信じて疑はず、二に初歡喜地に入る三に世間五通仙人の地を度す、四に二乘地を度して第

是故に眞言者、祕密道場の中にて
第五の要誓を具して、法に隨つて應に灌頂すべし
當に知るべし此に異るものは、三昧耶と名くるに非ず
善く住して若し意を觀ずれば、眞言者心を覺えて
三處を得ざれば、彼を說いて菩薩と爲す
無緣の觀行を得て、方便を以て衆生を利す
衆の善本を植ゑしめんが爲なり、故に人中の尊と號す
諸法の本寂にして、常に自性無き中に於て
安住すること須彌の如し、是を名けて見諦と爲す
此れ空にして卽ち實際なり、虛妄の言說に非ず
見る所猶し佛の如し、先佛も是の如く見たまへり
菩提心を逮得する、悉地は最も無上なり
此より五種の、諸の悉地に差別あり
謂ゆる修行に入ると、及び諸地に勝進すると
世間の五神通と、諸佛と緣覺と等なり
修業に間息無くして、乃至心續淨に至り
未だ熟せざるを成熟せしむ、爾時に悉地成ず

入地に入る。五に第九地より菩薩の行道を修して勝進して如來地に入る此位は佛果の入心なり。

【二種の護摩】先に說けるは略說なり、今更に內外の護摩を分別す、外護摩は內護摩の爲の方便なり。

彼一時の頃に於て、淨業と心と俱に等し
眞言者當に、悉地意に隨つて生ずることを得べし
悉地は空界に昇ること、幻の畏るる者無きが如し
呪術の網に惑はさるること、帝釋の網に同じ
乾闥婆城の所有の、諸の人民の如し
身の祕密も是の如し、身に非ず亦識に非ず
又睡夢に於て、諸天の宮に遊べども
此身をも捨てず、亦彼にも至らざるが如し
是の如く瑜伽の夢の、眞言行に住する者の
功德の業より生ずる所の、身相は猶し虹霓のごとし
眞言の如意珠は、意と語と身とより出生し
念に隨つて衆の物を雨らせども、而も分別の想無し
猶し十方の虛空の、諸の有爲の行を離れたるがごとく
眞言者も、一切の分別の行に染せられず
唯想のみ有りと解了して、是の如く遍く觀察せよ
爾時に眞言者を、諸佛同じく隨喜したまふ
正覺兩足の尊、二種の護摩を說きたまふ

【諸尊の殊類と令】諸尊の別相と本性とを明す。

【世間の諸の眞言】世間と出世間との眞言の量を說く。

謂ゆる内と及び外となり、威を增すことも亦是の如し
諸尊の殊類と性とを、觀察して當に證知すべし
世間の諸の眞言には、今彼の限量を說く
福德自在等ある、衆の知識する天神と
彼所說の明呪と、及與大力の印とは
彼は指現世の果なり、故に分量ありと說く
成ずと雖も堅く住せず、悉く是れ生滅の法なり
出世間の眞言は、無作にして本不生なり
業と生と悉く已に斷じ、戰勝して三過を離れたり
麟角の無師者と、及び佛の聲聞衆と
菩薩との諸の眞言は、彼量我當に說くべし
三時を超越して、業緣より生起する所なり
可見と非見との果、意と語と身とより生ず
世間の所傳の、果と數とは一劫を經
等正覺の所說の、眞言は劫數を過ぐ
大仙正等覺と、佛子衆との三昧は
清淨にして想を離れたり、有想をば世間と爲し

【復次に祕密主等】以上に偈もて金剛手の問に答へて竟り次に長行を以て說く。中に略して五事を說く。手印と本尊の形相差別と曼荼羅の所住の方位と、本尊本座に來至して住すると三昧となり。此五縁を具するに由りて世間出世間の一切の曼荼羅成就するなり。

【金剛印】三股金剛なり。之を周匝に相連ねて四方の界をなすなり。

業に從つて而も果を獲るものは、成熟と熟時とあり
若し悉地を成ずることを得れば、自在に諸の業を轉ず
心自性無きが故に、因果を遠離す
業と生とを解脫して、生虛空に等同なり

『復次に祕密主、諦に聽け。彼密印と形相と、聖天の位を敷置すると、威驗現前すると、三昧の趣く所と、是の如きの五者は、往昔の諸佛の菩提を成じたまふ法界虛空の行なり。本誓願したまふ所は、無餘の衆生界を度脫し、彼眞言門に菩薩の行を修する、諸の菩薩を利益し安樂ならしめんと欲するが爲の故なり。』金剛手の言さく『是の如く世尊、願樂くは聞かんと欲す。』

時に薄伽梵、偈頌を以て曰はく、

最初の正等覺、敷置の曼荼羅は
密中の祕密なり、大悲胎藏より生ず
及び無量の世間と、出世との曼荼羅の
彼有ゆる圖像、次第に說かん當に聽くべし
四方にして普く周匝せよ、一門と及び通道とあらしめよ
金剛印を以て遍く繞る、中に羯磨金剛あり
其上に妙蓮華あり、開敷して果實を含めり

【羯磨金剛】十字羯磨杵をいふ。

【大空點莊嚴せり】中臺八葉に各一點の故に九點を想ふなり。

【八葉悉く圓整】此八葉と中臺との中に方と圓とを作して尊像を書くべし、佛は方壇、菩薩は圓壇なり。

【此より諸の壇を流す】終壇の所應作の事業と本尊の顯形色と本尊の方位と所成の果の悉地との四法を了解する者は流出の法に通ず。

【事業と形と等】以上大日曼荼羅を明し了る、以下は次に佛部の曼荼羅なり。

【復次に祕密主】次に蓮華部、觀音を以て主として中臺に置き、次に外三重の第一重には十方諸佛、第二重には觀音部の諸尊第三重には八部衆

彼大蓮の印に於て、大空點莊嚴せり
八葉悉く圓整なり、善好にして鬚蘂を具す
十二支生の句、普く華臺の中に遍くして
其上に兩足尊の、導師正覺を成じたまふ
八曼荼羅の、眷屬を以て自ら圍遶せり
當に知るべし此れ最初の、悲生曼荼羅なり
此より諸の壇を流す、各の其本敎の如し
事業と形と悉地と、諸佛子を安置するとなり
復次に祕密主、如來の曼荼羅は
猶し淨圓月の如く、内に商佉の色を現ず
一切の佛三角にして、白き蓮華に在す
空點を標幟と爲し、金剛印をもて圍遶し
彼眞言主により、周匝して光明を放つ
疑慮の無き心を以て、普遍して而も流出す
復次に祕密主、觀世自在者の
祕密曼荼羅は、佛子一心に聽け
普遍四方の相にして、中に吉祥の商佉あり

等なり。

【復次に秘密主】馬頭の境は中台三角の故に外三重も亦之に隨ふべし。此時は中臺の觀音を以て勢至の處に移して、馬頭を中台に置く、餘の眷屬は之を圍繞す。

【商佉】螺貝、大勢至の標、

【明王の邊に等】以下金剛部曼荼羅を明す、金剛手を以て中臺として、餘の部族を第二院、八部を第三院とするなり、

【第二の境】三股金剛を以て界線として之を繞す。

【金剛の印】五股金剛杵。

鉢曇華を出生す、開敷して果實を含めり
上に金剛の慧を表し、承くるに大蓮の印を以てせり
一切の種子を布して、善巧に以て種となせ
多羅と毘俱知と、及與白處尊と
明妃資財主と、及與大勢至と
諸の吉祥の受教と、皆曼荼羅に在り
得自在者の印は、殊妙にして標相を作せ
何耶掲哩婆は、法の如く三角に作して
曼荼羅圍遶せり、端好にして初日の暉あり
當に明王の邊に在き、巧慧の者安立すべし
復次に秘密主、今第二壇を說かん
正等四方の相なり、金剛の印を以て圍遶し
一切妙にして金色なり、內心に蓮華を敷け
臺に迦羅者を現ず、光の色淨月の如し
亦大空點を以て、周匝して自ら莊嚴せよ
上に大風の印を表す、靉靆として猶し玄き雲のごとし
鼓動せる幟と幡との相なり、空點を標幟と爲せ

【彼上に金剛印】中臺大日の下持明院の不動と降三世との中間に置くべき諸金剛を擧ぐ。

其上に猛き焔を生ず、劫災の火に同じくして
而も三角の形を作せ、三角を以て之を圍せ
光鬘相周普くして、晨朝の日の暉の色なり
是中に鉢頭摩あり、朱顯なること猶し劫火のごとし
彼上に金剛印あり、流れ散つて焔暉を發す
持するに𤙖字の聲を以てせよ、勝妙種子の字あり
先佛も是れ汝が勤勇の、曼荼羅なりと說きたまへり
部母と商羯羅と、及び金剛部生と
金剛鉤と素支と、大德持明王と
一切皆此、大曼荼羅の中に於て
印と壇と諸の佛子との、形と色とあり各の次の如く
類に隨つて而も相應せよ、諸業善く成就す
復次に我說く所の、金剛自在者は
謂く虛空無垢と、金剛輪と及び牙と
妙住と名稱と、大忿と及び迅利と
寂然と大金剛と、並に及び靑金剛と
蓮華と及び廣眼と、妙金剛と金剛と

【不動の曼荼羅】半月壇中に三角を畫き其中に不動尊を作る、若し別に造らば毘盧を中院の東に移して不動を中に置くなり。

【復次に秘密主等】以下佛母曼荼羅を明す。

及び住無戲論と、無量虛空步となり
是等の曼荼羅に、說く所の白と黃と赤と
乃至黑色等と、印と形と及び所餘となり
三戟と一股印と、二首皆五峯なると
或は執金剛の鬘と、色類に隨つて區に別なり
一切種子を作せ、大福德當に知るべし
不動の曼荼羅は、風輪と火と倶なり
涅哩底の方に依つて、大日如來の下にあり
及び種子圍遶し、微妙の大慧刀と
或は復羂索印と、具慧の者安布せよ
降三世は殊異なり、謂く風輪の中に在つて
遶すに金剛印を以てせよ、而も三處に住せり
復次に秘密主、先づ曼荼羅の
諸佛菩薩の母を說かん、壇の形像を安置せば
方正にして眞金色なり、金剛印を以て圍遶せよ
最勝の曼荼羅なり、今當に尊相を示すべし
彼中に大蓮華あり、暉焔遍くして黃色なり

【如來頂】佛頂の印なり。【中分等】若し佛頂を以て中臺とせば、佛眼等を以て眷屬となすべし。中分とは中臺、三分の位とは外三重なり。【次に一切菩薩の等】次に諸菩薩の曼荼羅を説く、謂く明の中央に十字羯磨を置き、其上に如意珠を置く、即ち本尊を十字金剛の上に置き、諸餘の菩薩を第二院に置き、外金剛部を第三院に置くなり。【復次に應に等】以下釋迦曼荼羅を明す。【大因陀羅】四方正等の境なり。【大鉢に光焔等】三股金剛の上に紅蓮花ある上に大鉢を置く、若し佛形を作らば、釋迦佛を畫くべし、鉢を持し、又右は、袈裟左は錫杖なり、大鉢

中に如來頂を置け、中分を超越して
而も三分の位に至つて、應に如來眼を作すべし
自ら光焔の中に住す、遍く彼種子を布せよ
次に一切菩薩の、大如意寶尊あり
謂く彼曼荼羅は、圓白にして而も門に出でたり
遍く寂にして極めて清淨なり、一切の希願を滿す
復次に應に諦に聽くべし、釋迦師子の壇は
謂く大因陀羅なり、妙善眞金色にして
四方の相均等なること、前の如くにして金剛印あり
上に波頭摩を現ぜよ、周遍して皆黄の暉あり
大鉢に光焔を具せり、金剛印圍遶せり
袈裟と錫杖等と、之を置くこと次第の如し
五種の如來頂は、諦に聽け今當に説くべし
白傘は傘印を以てす、具慧者勝頂は
開すに大慧刀を以てす、普遍く皆流光あり
最勝頂は輪印なり、除障頂は鉤印なり
大士頂は髻の相なり、是を火聚の印と名く

は釋迦の三昧耶身なり。

【大口】忿怒の口に雙牙を出せる者をいふ。上來の諸位若し釋迦を以て中とせば則ち佛頂等を次の院に列居し、若し一一の本尊に隨つて一一尊を取りて曼茶羅を作らば、釋迦を移して外に置くべし。

【淨境界の行等】以下は淨居天を始として外金剛部の印を說く。

廣生は跋折羅なり、發生は蓮華を以てす
無量聲は商佉なり、觀察して像類を知れ
毫相は摩尼珠なり、佛眼は次に當に聽くべし
頂髻にして遍く黃色なり、圍すに跋折羅を以てす
無能勝妃の印は、手を以て蓮華を持す
無能勝は大口にして、而も黑蓮の上に在り
淨境界の行は、謂ゆる淨居天なり
彼の諸の印相を置け、佛子應に諦かに聽くべし
謂ゆる思惟手と、善手と及び笑手と
華手と虛空手となり、之を畫くこと法則の如し
地神には迦羅奢なり、圓白にして金剛を圍す
請召火天の印には、當に大仙の手を以てすべし
迦揭と驕荅摩と、末建拏と竭伽と
婆私と倪刺婆とに、各の其次第の如く
應に韋陀の手を畫くべし、而も火壇の內に居く
閻摩には但茶の印なり、當に風輪の中に處け
涅栗底は鈴の印なり、黑夜は計都の印なり

嚩達羅には輪羅なり、大梵妃には蓮華なり
倶摩利には鑠底なり、毘瑟女には輪の印なり
當に知るべし焰摩后には、沒揭羅の印を以てし
嬌吠離耶后には、劫跋羅の印を用ひよ
是の如き等は皆、風曼荼羅の中に在り
烏鷲と及び婆栖と、野干等圍遶せり
若し悉地を成ぜんと欲せば、法に依つて之を圖せよ
涅哩底には大刀なり、毘紐には勝妙の輪なり
鳩摩羅には鑠底なり、難陀跋難陀には
密雲と電と倶なり、皆清潭の色を具す
門の廂衛を夾輔して、釋師子の壇に在り
商羯羅には三戟なり、妃には鉢胝の印を作す
月天には迦羅奢なり、淨白にして蓮華を敷けり
日天には金剛輪なり、表するに輿輅の像を以てす
社耶毘社耶は、當に知るべし大力の者なり
倶に大弓の印を以てす、因陀羅輪に在り
風の方には風幢の印なり、妙音には樂器の印なり

【佛子次に等】以下曼荼羅第二重の菩薩の境を明す、中に就き先づ東方文殊の曼荼羅なり
【施願金剛】文殊の金剛名號。
【火生曼荼羅】三角をいふ、卽ち三角の中に青蓮花の印を作すなり。

縛嚕拏には羂索なり、而も圓壇の中に在り
汝大我應に知るべし、種子の字環遶せり
是の如き等の標誌は、次の如く曼荼羅の
釋師子の眷屬なり、今已に略して宣說す
佛子次に諦かに聽け、施願金剛の壇は
四方相均しうして、普く衞すに金剛の印を以てす
當に彼中に於て、火生曼荼羅を作して
內心に復妙善の、青蓮の印を安置すべし
智者曼殊音の、本眞言をもて之を圍せ
法の如く種子を布して、而も以て種子と爲せ
復其四傍に於て、嚴飾するに青蓮を以てす
勤勇の衆を圖作すること、各の其次第の如し
光網は鉤印を以てす、寶冠は寶印を持す
無垢光童子は、青蓮にして而も未だ敷けず
妙音其大慧の、說く所の諸の使者は
當に知るべし彼密印は、各其所應の如し
髻設尼には刀印なり、優波には輪羅印なり

【有ゆる諸の奉等】以上は是れ東方文殊の部類眷屬なり若し文殊を中尊とせば餘の菩薩を第二重とし、八部を以て第三重とす。【復次に南方等】以下南方除蓋障の曼荼羅を明す。【火輪】三角の曼荼羅、卽ち三角の中に如意珠を畫き又は餘形を畫くなり。【除疑】寶瓶の中に獨股杵を插んで半は瓶中にあり。【發起手】手を舒べて掌を仰け下より上に向けて之を擧ぐ。【悲手】水空指相捻じて心に當て餘は伸べて放つ。【悲念】火指を屈して心前に向け餘指は皆伸べ放つ。

質怛羅には杖印なり、地慧は幢印を以てす
彼招召使者には、鵞俱尸の印を以てせよ
一切是の如く作せ、圍すに青蓮華を以てせよ
有ゆる諸の奉教には、皆光揭梨の印なり
復次に南方の印、除一切蓋障は
大精進の種子、謂く眞陀摩尼なり
火輪の中に住して、翼從して端嚴の衆あり
當に知るべし彼眷屬の、祕密の標誌
次第に應に圖畫すべし、我今廣く宣說せん
除疑は寶瓶を以て、一股金剛を置く
聖者施無畏は、施無畏の手に作せ
除一切惡趣は、發起手を相と爲す
救意慧菩薩は悲手常に心に在く
大慈生菩薩は、應に華を執る手を以てすべし
悲念は心上に在いて、火輪手を垂れ屈す
除一切熱惱は、諸願を施す手を作せ
甘露の水流れ注いで、遍く諸指の端に在り

【北方の地藏尊等】以上は除蓋障の眷屬を明し、是より下北方地藏の曼荼羅を明す。
【大蓮光焰を等】雜色の蓮花座なり
【慕達羅】ムドラー（Mudra）印契と譯す。
【二首金剛の印】五股の首を開かざるもの即ち雜五股の印なり。
【西方の虛空藏等】以下西方虛空藏の曼荼羅を說く。

其不思議慧は、如意珠を持する手なり
皆蓮華の上に住して、曼荼羅の中に在り
北方の地藏尊の、密印は次に當に說くべし
先づ莊嚴の座を作りて、因陀羅壇に在け
大蓮光焰を發して、間錯して衆色を備へたり
彼に於て大幢を建てて、大寶を其端に在く
是を名けて最勝、密印の形像と爲す
復當に殷勤に、上首の諸の眷屬を作るべし
無量無數の衆あり、彼の諸の慕達羅は
寶作には寶の上に於て、三股金剛の印あり
寶掌には寶の上に於て、一股金剛の印あり
持地には寶の上に於て、二首金剛の印あり
寶印の手には寶の上に、五股金剛の印あり
堅意には寶の上に於て、羯磨金剛の印あり
一切皆應に、彼曼荼羅の中に住すべし
西方の虛空藏は、圓く白き悅意の壇にして
大白蓮華の座あり、大慧力の印を置け

【輪の印】四股の刀輪の印。凡そ此大悲藏大壇中の文殊の一會に於て、凡て文殊と除障と地藏と虛空藏との四菩薩あり、隨つて一菩薩を以て主として中境に置けば、餘の菩薩は各第二院に於て方を案じて之を列ね、第三院には八部を置くべし。

【入祕密曼荼羅法品】轉字輪曼荼羅の字輪品に當るものにして十二支句を自身に布字して此境に住せしむ。

是の如きの堅利の刄は、鋒鋭なること猶し氷と霜とのごとし
　自の種子を幟と爲す、智者當に安布すべし
及び諸眷屬の印形を、書くこと法敎の如くせよ
虛空無垢尊は、應に輪の印を以てすべし
輪像自ら圍遶す、具足して風壇に在り
虛空慧は商佉を、風曼荼羅に在け
清淨慧は白蓮を、風曼荼羅に在く
行慧の印相は、當に硨磲寶を以てすべし
上に青蓮華を插む、風曼荼羅に在り
安慧は金剛蓮を、風曼荼羅に在く
略して佛の祕藏の、諸尊の密印を說き竟りぬ

入祕密曼荼羅法品第十二

爾の時、世尊、又復入祕密曼荼羅の法を宣說したまふ。優陀那に曰はく、
眞言遍學者、祕密壇に通達して
法の如く弟子の爲に、一切の罪を燒き盡す

【字を以て字を燒き】當に阿字を以て弟子の身となし、囕字を以て彼を菩提の性眞金の鑛を燒き、垢穢をして餘なからしむるなり。【字に因りて而も更に生ず】嚩字の水もて已に燒きたる心境に灑ぎて阿字菩提心の芽を生ぜしむ、【十二支句を以て等】[illegible]。

壽命悉く焚滅して、彼をして復生ぜざらしむ
灰燼に同じ已りて、彼壽命還つて復す
謂く字を以て字を燒き、字に因りて而も更に生ず
一切の毒と及び生と、淸淨にして遍く無垢なり
十二支句を以て、而も彼器に作せ
是の如きの三昧耶は、一切の諸如來と
菩薩救世者と、及び佛の聲聞衆と
乃至諸の世間と、平等にして違逆せず
此平等誓の、祕密曼荼羅を解せば
一切の法教に入るに、諸境に自在なることを得ん
我身彼に等同なり、眞言者も亦然なり
相異らざるを以ての故に、說いて三昧耶と名く

入祕密曼荼羅位品第十三

爾時、大日世尊等至三昧に入つて、未來世の諸の衆生を觀じたまふが故に、定中に住したまふ。即時に諸佛の國土地平なること掌の如し。五寶間錯し、大寶の蓋を懸け一門

【入祕密曼荼羅位品】內心大曼荼羅を開示し始めて中臺の八尊を明す。【定中に住す】佛は畢竟無相寂滅の法に住したまふも大悲の故に此三昧に入つて衆生の爲に大悲胎藏曼荼羅莊嚴大會微妙の法を見しめたまふ。即ち是れ無相の中に於て有相を現ずるなり。

標を莊嚴す。衆色流蘇して其相長廣なり。寶鈴と白拂と名衣と幡珮とを、綺絢し垂布して而も之を校飾す。八方の隅に於て、摩尼幢を建て、八功德水芬馥し盈滿せり。無量の衆鳥鴛鴦と鵝鵠とありて、和雅の音を出す。種種の浴池に、時華と雜樹と敷榮し間列して、芳茂嚴好なり。八方に五寶の瓔珞を合せ繫けたり。其地の柔軟なること猶し綿纊の如し。之に觸れ踐む者は皆快樂を受く。無量の樂器、自然に韻を諧ふ、其聲微妙にして人の聞かんと樂ふ所なり。無量の菩薩の福に隨つて感ずる所の、宮室殿堂意生の座あり。如來の信解願力より生ずる所の、法界標幟の大蓮華王を出現して、如來の法界性身、其中に安住し、諸衆生の種種の性欲に隨つて、歡喜を得しめたまふ。時に彼如來の、一切の支分に、無障礙力あり。十智力信解より生ずる所なり。無量の形と色との莊嚴の相あり、無數百千俱胝那由他劫の、布施持戒忍辱精進禪定智慧の、諸度の功德に資長せらるる身、即時に出現す。彼出現し已りて、諸の世界大衆會の中に於て、大音聲を發して、而も偈を說いて言はく、

諸佛は甚だ奇特にして、權智不思議なり
阿賴耶無き慧を以て、含藏して諸法を說きたまふ
若し無所得を解すれば、諸法の法相にて
彼無得にして而も得し、諸佛の導師を得ん

是の如きの音聲を說き已りて、還つて如來の不思議法身に入る。

【羯磨金剛を等】羯磨金剛を以て弟子の心地を加持して諸惡見煩惱を淨除して秘密曼荼羅を建立す。【方なる壇等】方は弟子の菩薩心地を表す、四角の境にして四門あり、西に向ふ門は常に開きて出入の門なり、今明すところは一一皆内心の法門なり、故に内心に觀作すべし。【其中に如來います】これは行者の自性無師智、大毘盧遮那佛なり、外より來るに非ず。【持金剛…其莖】其花の莖は即ち執金剛を以て之を持しめて以て其莖となす。【意生】心より花等を生ずるをいふ【大我】此心曼荼

爾時、世尊、復執金剛秘密主に告げて言はく、善男子、諦に内心の曼荼羅を聽け、秘密主、彼身地は即ち是れ法界の自性なり、眞言密印の加持を以て而も之を加持す。本性清淨なるを以ての故に、羯磨金剛を以て護持する所なるが故に、一切の塵垢の我と人と衆生と壽者と意生と儒童と造立者と等の株杌の過患を淨除す。方なる壇にして四門あり、西に向ひて通達せり。周く界道を旋せ。内に意生の八葉の大蓮華王を現ず、葉を抽き蘂を敷きて綵絢して端妙なり。其中に如來います、一切世間に最も尊特の身なり。身語意の地を超越して心地に至り、殊勝悅意の果を逮得す。彼に於て東方に寶幢如來、南方に開敷華王如來、北方に鼓音如來、西方に無量壽如來あり。東南方に普賢菩薩、東北方に、觀自在菩薩、西南方に妙吉祥童子、西北方に慈氏菩薩あり。一切蘂の中には、佛菩薩の母あり、六波羅蜜三昧の眷屬を以て、而も自ら莊嚴す。下には持明の諸忿怒衆を列ぬ。持金剛主菩薩を以て其葉と爲して、無盡の大海に遍せり。一切の地居天等、其數無量にして、而も之を環の如く遶る。

爾時、行者、三昧耶を滿せんが爲の故に、應に意生の香と華と燈明と塗香と、種種の肴膳とを以て、一切皆以て之を獻めよ。優陀那に曰はく、

眞言者諦に、曼荼羅を圖畫せよ
自身を大我と爲し、■字を以て諸垢を淨む
瑜伽の座に安住して、諸の如來を尋念し

頂に諸弟子に、阿字の大空點を授けよ
智者妙なる華を傳へて、自身に散ぜしめ
爲に内に見る所の、行人宗奉の處を説くべし
此れ最上の壇なるが故に、應に三昧耶を與ふべしと

秘密八印品第十四

爾時、毘盧遮那世尊、復諸の大衆會を觀じて、執金剛秘密主に告げて言はく、佛子、秘密の八印あり、最も秘密と爲す。聖天の位、威神の同ずる所なり、自ら眞言道を以て標幟と爲す。具曼荼羅を圖すること、本尊の如く相應せよ。若し法教に依りて、眞言門に於て、菩薩の行を修する諸の菩薩は、應に是の如く知るべし。自身本尊の形に住して、堅固にして不動なり。本尊を知り已りて、本尊の如く住すれば、而も悉地を得ん。云何が八印なる。謂く、智慧三昧手を以て、空心合掌を作して、而も風輪と地輪とを散じて、光焔を放つが如くす、是れ世尊の大威德生の印なり。其曼荼羅は三角にして、而も光明を具せり、彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃駄喃一 嚂囉二 莎訶

即ち此印を以て、而も風輪を屈して、虚空輪の上に在りて、鑁字の形の如くす、是れ世

羅の上に佛あつて住するをいふ、即ち毘盧遮那なり。

【自身に散ぜしめ等】阿闍梨の身上に投花せしむるなり、師は之によつて其本緣の尊を知るべし、弟子は但其身上にあるを見るのみなり。

【秘密八印品】中臺八葉八尊の印明を明す。

【大威德生の印】此印中より無量の威德生ずる故に名く、東方寶幢佛の印なり。

【鑁字の形】圓形なり。

【金剛不壞の印】如來智は衆生に非ざるよりは破壞すべからざるが故にいふ、南方開敷華王佛の印なり。

【蓮華藏の印】自性清淨の心蓮花を表する故に名く、西方阿彌陀佛の印

【萬德莊嚴の印】若しは內、若しは外、如來の衆德莊嚴皆此印に具する故に名く。此方天鼓雷音佛の印なり

【一切支分生の印】此印如來の一切の支分より生ずる故に名く、印相は瓶の形、東西方普賢の印なり。

【陀羅尼の印】眞言の始に勃駄陀羅尼とある故に名く、東北方觀自在の印なり。

尊の金剛不壞の印なり。其曼荼羅は嚩字の相の如くして、金剛光あり、彼眞言に曰はく、

　南麼三曼多勃駄喃一鑁嚩二急呼 莎訶

復初の印を以て、而も水輪と火輪とを散ず、是を蓮華藏の印と名く。其曼荼羅は月輪の相の如くして、波頭摩華を以て、而も之を圍遶す。彼眞言に曰はく、

　南麼三曼多勃駄喃一糝索二 莎訶

即ち此印を以て、二地輪を屈して掌の中に入る、是れ如來の萬德莊嚴の印なり。其曼荼羅は猶し半月形の如し、大空點を以て之を圍せ。彼眞言に曰はく、

　南麼三曼多勃駄喃一含鶴二 莎訶

復定と慧との手を以て、未開敷華合掌を作して、二虛空輪を建立し、而も稍之を屈す。是れ如來の一切支分生の印なり。其曼荼羅は迦羅捨月の形の如し、金剛を以て之を圍せ。彼眞言に曰はく、

　南麼三曼多勃駄喃一暗噁二 莎訶

即ち此印を以て、其火輪を屈す。餘の相は前の如し。是れ世尊の陀羅尼の印なり。其曼荼羅は猶し彩虹の如くにして、而も遍く之を圍して金剛の幡を垂る。彼眞言に曰はく、

　南麼三曼多勃駄喃一勃駄陀羅尼二上娑沒㗚三合底沫羅駄那羯隸三駄囉也薩鑁四薄伽鑁嚩底五阿上迦引囉嚩底六三麼曳七莎訶

復虛心合掌を以て、火輪を開き散し、其地輪と空輪と和合して相持す、是を如來の法住

【法住の印】具する所の智慧を以て正法を住持して他人に惠む故に名く西南方文殊師利の印なり。

【虚空の如し等】方形にして其左右に各一點ありて之を挾む。

【迅疾持の印】法輪を左右に轉じて加持迅疾にして速に成就する故に名く。西北方彌勒の印なり。

【持明禁戒品】持戒と六月念誦法を明す。

の印と謂ふ。其曼荼羅は、猶し虚空の如くして、雜色を以て之を圍せ、二の空點あり。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一阿上吠娜尼泥二莎訶

前に同じく虚心合掌をして、智慧三昧の手を以て、互に相加持して、而も自ら旋轉す。是を世尊の迅疾持の印と謂ふ。其曼荼羅は亦虚空の如くして、而も靑き點を用て之を嚴れ。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一摩訶引瑜伽輕瑜擬宜以反寧上二瑜詣洗嚩曬三欠若哩計四莎訶

祕密主、是を如來祕密の印と名く。最勝にして祕密なり、應に輙く人に授與すべからず。已に灌頂せる其性調柔にして、精勤堅固にして、殊勝の願を發して師長を恭敬し、恩德を念ずる者の、內外淸淨にして、自の身命を捨て、而も法を求むる者を除く。

持明禁戒品第十五

爾時、金剛手、復偈頌を以て、大日世尊に持明禁戒を請問したてまつる。眞言門に菩薩行を修する、諸の菩薩の爲の故なり。

云何が禁戒を成ずる。云何が尸羅に住する

云何が所住に隨つて、修行して諸の著を離るる

【明に緣って等】明即ち眞言を持するを因緣として起する所の制限の戒。即ち次に說くところの一行者持誦の時或は一月或は一年等を以て、此制限の了る時に、此禁戒亦罷む等なり。

【菩提心】如來の正因、法は心法、即ち一切の地波羅

修行に幾の時と月とありてか、禁戒終竟することを得る
何の法教に住して、而も彼威德を知る
時と方と作業と、及び法と非法と等を離る
云何が而も速に成ずる、願くば佛其量を說きたまへ
先佛の宣說したまふ所なり、悉地を得しめたまへ
我一切智の、正覺兩足の尊に問ひたてまつる
未來の衆生の爲なり、人中の尊諦知したまへり

是の時、薄伽梵毘盧遮那、衆生を哀愍したまふが故に、而も偈を說いて言はく、

善い哉勤勇士、大德持金剛
說く所の殊勝の戒、古佛の開演したまふ所なり
明に緣りて起す所の戒は、戒に住すること正覺の如くにして
悉地を成ずることを得しむ、世間を利せんが爲の故なり
等しく自の眞實を起して、疑慮の心を生ぜず
常に等引に住して、戒を修行して當に覺るべし
菩提心と及び法と、及び修學の業と果と
和合して一相と爲す、遠く諸の造作を離れて
具戒は佛智の如し、此に異るは具戒に非ず

術自在力等、要は一切功徳の法皆これなり。此れ皆佛の眷屬なり。業は如來の妙業、果は如來の果なり。此等の法は差別の相を離れて一切一味なり、是れ、此戒に住する所以、然らざれば佛戒を持するには非ず。

【落叉を滿す等】持戒の量を明す、即ち六月持誦の法を説くなり。落叉とは淺略には十萬遍なるも今は然らず、落叉とは見なり、即ち自心の寶相を見るなり。

【金輪の觀】心佛自心衆生三平等の觀を明す。

【大因陀羅】四方の境、黄色なり。

【金剛の印】内五股の印、即ち金剛手の印。

【水輪】圓形白色の壇なり。

【蓮華印】八葉の印即ち觀音印なり

諸法に自在なることを得て、通達して衆生を利す
常に無著の行を修すれば、礫石と衆寶とを等しうす
乃至落叉を滿すに至りて、說く所の眞言教
時と月と等を畢へて、禁戒の量終竟す
最初には金輪の觀なり、大因陀羅に住して
當に金剛の印を結び、乳を飲んで以て身を資くべし
行者一月滿じて、能く出入の息を調ぶ
次に第二の月に於ては、水輪の中に嚴整して
應に蓮華印を以て、醇淨の水を服すべし
次に第三の月に於ては、勝妙の火輪の觀なり
不求の食を噉へよ、印は大慧刀を以てす
一切の罪を燒き滅して、而も身と意と語とを生ず
第四の月には風輪なり、行者常に風を服して
轉法輪の印を結んで、心を攝して以て持誦せよ
金剛水輪の觀は、瑜伽に住するに依り
是を第五の月と爲す、得と非得とを遠離して
行者著する所無くして、三菩提に等同なり

【火輪】三角の境、赤色なり、其出入の息も亦赤色なり。
【風輪】半月形の境、黒色なり。
【風を服す】出入の息なり。
【金剛水輪の觀】方形の外に黄色の境を作り、中に白色圓形の境を作る。此中に住する行者臍より以下は黄色、臍より以上は白、空輪は無相の故に、此觀には印を用ひざるなり。
【風と火との輪等】第六月の觀なり、曼荼羅は風輪の中に火輪あり、臍以上は火、以下は風なり、一切食することを得ず。
【梵と釋と等】以下は六月持誦の功德を明す。行者、此持明戒に由りて六大法界の大日如來を證するの意なり。

風と火との輪を和合して、衆の過患を出過す
復一月持誦して、亦利と非利とを捨てよ
梵と釋と等の天衆と、摩醯と毘舍遮と
遠く住して而も敬禮し、一切守護を爲して
皆悉く教命を奉く、彼當に是の如くなることを得て
人天の藥叉神と、持明の諸の靈仙と
其左右に翔侍して、命ずる所に隨つて當に作すべし
不善爲障者の、羅刹七母等
地眞言者を見て、恭敬して而も之を遠ざけよ
是處の光明を見て、馳せ散ずること猛火の如し
所住の法教に隨つて、皆明禁に依るが故に
等正覺の眞子、一切に自在を得て
難好の者を調伏すること、大執金剛の如し
諸の群生を饒益すること、觀世音に同じ
六月を經逾し已りて、願ふ所に隨つて果を成ぜよ
常に當に自他に於て、悲愍して而も救護すべし

【阿闍梨眞實智品】阿字一切眞言心なるを說く。

阿闍梨眞實智品第十六

爾時、持金剛者、次に復大日世尊に、諸の曼荼羅の眞言の心を請問したてまつりて、而も偈を說いて言さく、

云何が一切の、眞言實語の心と爲す
云何が而も解了するを、說いて阿闍梨と名くる

爾時、薄伽梵大毘盧遮那
金剛手を慰喩したまはく、善い哉摩訶薩
彼心をして歡喜せしめ、復是の如きの言を告げたまふ
祕中の最祕、眞言智の大心を解る
今汝が爲に宣說せん、一心に應に諦に聽くべし
謂ゆる阿字とは、一切の眞言の心なり
此より遍く無量の、諸の眞言を流出し
一切の戲論息んで、能く巧智慧を生ず
祕密主、何等か一切の眞言心なる
佛兩足尊、阿字を說いて種子と名く

【支分に安住し等】一身の支分に諸字を加ふと雖も、亦阿字其中にあり、人の心の所有支分に遍ずるが如し。【相應の如く等】師自ら前の如く布し了つて、次に行者に授けて、布字せしむるなり、【本初の字】阿字最初の二音をいふ。根本なり、男聲なり、次に伊伊より烏奧に至る凡そ十二字は從生聲加字なり、女聲なり、阿字は根本と從生との字に遍ずるなり。【心を以て等】上の心は阿字、一切法の心なるが故に下の心は行者の自心なり。【餘】十二の摩多字を餘といふ、【我體】我は大日如來、大日に同じき故に阿闍梨と成ることを得るなり【[illegible]】全補

故に一切是の如し、諸の支分に安住し
相應の如く布し已りて、法に依つて普遍く授けよ
彼本初の字、增加の字に遍在するに由り一
業字以て音を成じ、支體是に由りて生ず
故に是れ一切の身に遍じて、種種の德を生ず
今分布する所を說かん、佛子一心に聽け
心を以て而も心に作せ、餘は以て支分に布すべし
一切是の如く作せば、即ち我體に同じ
瑜伽の座に安住して、尋いで牟尼の如來を念ぜよ
若し此教法に於て、斯廣大智を解るは
正覺大功德なり、說いて阿闍梨と爲す
是れ即ち如來と爲し、亦即ち名けて佛と爲す
菩薩と及び梵天と、毘紐と摩醯羅と
日と月との天と水天と、帝釋の世間主と
黑夜と焰摩等と、地神と妙音と
梵志と及び常浴となり、亦梵行者とも名く
淨嚴と比丘衆と、吉祥と持秘密と

輪座にして阿字なり。

【聲智の性】字に從つて聲の出づることあり、智を以て之を分別するは即ち智なり、阿字は法體常に一切處に遍ずるを以ての故に是の如し。

【有ゆる諸の字等】上來心を說くことを了りて、次に文字を身の支分に布する法を說く。

【眉間】一切執金剛所持の處。

【胸】心上四寸は蓮花手の所住處なり。

【心位】阿字菩提心の位。

【阿字は第一の命】一切有情非情の法に遍じ、諸法は阿字を以て命とす。

【不死の句】阿字を以て一身の支分に布するをいふ。

一切知見者と、法自在と財富となり
若は菩提心と、及與聲智の性とに住して
一切の法に著せざるを、說いて遍一切と名く
即ち是れ眞語者と、持吉祥眞言と
眞實語の王と、持執金剛印となり
有ゆる諸の字輪は、若は支分に有らんには
當に知るべし眉間に、吽字金剛の句を住せしめ
娑字を脣の下に在け、是を蓮華句と謂ふ
我即ち心位に同じ、一切處に自在なり
普く種種の有情と、及び非情とに遍ず
阿字は第一の命なり、嚩字を名けて水と爲し
囉字を名けて火と爲し、吽字を忿怒と名く
佉字は虛空に同じ、謂ゆる極空の點なり
此最眞實を知るを、說いて阿闍梨と名けよ
故に應に方便を具して、佛の所說を了知すべし
常に精勤に修することを作して、當に不死の句を得べし

【布字品】悉曇の遍口聲と五類聲の布字とを明す。

布字品第十七

爾時、世尊、復金剛手に告げて言はく、
復次に秘密主、諸佛の宣說したまふ所の
諸の字門を安布すること、佛子一心に聽け
迦字は咽の下に在り、佉字は腭の上に在り
哦字を以て頸と爲す、伽字は喉の中に在り
遮字を舌根と爲す、車字は舌中に在り
若字を舌端と爲し、闍字は舌の生處なり
吒字を以て脛と爲し、咤字は知るべし髀なり
拏字を說いて腰と爲し、荼字を以て坐に安んず
多字は最後分なり、他字は知るべし腹なり
娜字は二手と爲す、馱字を名けて脇と爲す
波字を以て背と爲す、頗字は知るべし胸なり
麼字を二肘と爲す、婆字は次に臂の下なり
莽字は心に住す、耶字は陰藏相なり

囉字を名けて眼と爲す、邏字を廣き額と爲す
縊伊は二の眥に在り、塢烏は二の脣と爲し
翳藹を二耳と爲す、汚奥を二の頬と爲す
暗字は菩提句なり、噁字は般涅槃なり
是一切の法を知る、行者正覺を成ぜん
一切智の資財、常に其心に在り
世に一切智と號す、是を薩婆若と謂ふ

大毘盧遮那成佛神變加持經卷第五　終

大毘盧遮那成佛神變加持經　卷第六

大唐天竺三藏善無畏共沙門一行譯す

受方便學處品第十八

【受方便學處品】十善戒四根本罪を明す、

【智慧方便】般若の方便なり。

【生命を奪はざる戒】一念の殺心を生ぜず、殺心なきを以ての故に不殺生戒と名く、

爾時、執金剛祕密主、佛に白して言さく、『世尊願くば諸の菩薩摩訶薩等の智慧方便を具して、修學する所の句を說いて歸依の者をして、諸の菩薩摩訶薩に於て、二意有ること無く、疑惑の心を離れて、生死流轉の中に於て、常に不可壞ならしめたまへ。』と。是の如く說き已りて、毘盧遮那世尊、如來眼を以て一切法界を觀じて、執金剛祕密主に告げて言はく、『諦に聽け金剛手、今善巧修行の道を說かん。若し菩薩摩訶薩、此に住する者は、當に大乘に於て而も通達することを得べし。祕密主、菩薩は生命を奪はざる戒を持て爲すべからざる所なり。不與取と及び欲邪行と虛誑語と麁惡語と兩舌語と無義語との戒を持し、貪欲と瞋恚と邪見と等皆應に作すべからず。祕密主、是の如く修學する所の句は、菩薩修學する所に隨つて、則ち正覺世尊及び諸の菩薩と同行なり、應に是の如く學すべし。』

爾時、執金剛祕密主、佛に白して言さく、『世尊薄伽梵、聲聞衆に於て、亦是の如きの十善業道を說きたまふ。世間の人民及び諸の外道も、亦十善業道に於て常に願つて修行す。

【形壽を盡す】但一期のみに非ず、菩薩初發心より成菩提に及ぶなり。

世尊、彼と何の差別かある、云何が種種に殊異なる。』是の如く說き已りて、佛執金剛祕密主に告げて言はく、『善い哉善い哉、祕密主。汝復善い哉。能く如來に是の如きの義を問ひたてまつる。祕密主、應當に諦に聽くべし。吾今差別の道と、一道の法門とを演說せん。祕密主、若し聲聞乘の學處は、我慧の方便を離れて、敎令を以て成就し、邊智を開發す。等しく十善業道を行ずるに非ずと說く。彼、諸の世間は、復我に執著するが故に、他因に轉ぜらるるを離る。菩薩は大乘を修業して、一切法平等に入つて、智慧方便を攝受して、自他倶なるが故に、諸の所作轉ず。是故に祕密主、菩薩は此に於て、智の方便を攝し、一切法平等に入つて、當に勤めて修學すべし。』

爾時、世尊、復大慈悲の眼を以て、諸の衆生界を觀じて、金剛手菩薩に告げて言はく、『祕密主、彼、諸の菩薩は、形壽を盡すまで、生命を奪はざる戒を持して、應に刀杖を捨て、殺害の意を離れ、他の壽命を護ること、猶し己身の如くなるべし。餘の方便あつて、諸の衆生類の中に於て、其事業に隨つて、彼惡業の報を解脫せしめんが爲の故に、施作する所あるは、怨害の心に非ず。

復次に祕密主、菩薩は與へざるを取る戒を持して、若し他の所攝の、諸の受用の物には、觸取の心を起さず、況んや復餘物の與へざるを而も取らんをや、餘の方便あり、諸の衆生の慳悋積聚して、施福を修せざるを見ては、其像類に隨つて、彼慳を害するが故に、自他を離れしめ、彼が爲に施を行ず。因つて讃ずる時に施せば、妙色等を獲と云ふべし。祕

密主、若し菩薩、貪心を發起して、而も觸れて之を取れば、是れ菩薩は菩提分を退して、無爲の毘奈耶の法を越ゆ。

復次に祕密主、菩薩は邪婬せざる戒を持つて、若は他の攝する所と、自らの妻と、自種族と、標相の護る所とに、貪心を發さざれ。況んや復非道に二身を交へ會せんをや。餘の方便あらば、應に度すべき所に隨つて衆生を攝護せよ。

復次に祕密主、菩薩は形壽を盡すまで妄語せざる戒を持て、設ひ活命の因緣の爲にも、應に妄語して、卽ち諸佛の菩提を欺誑すべからず。祕密主、是を菩薩の最上の大乘に住すと名く。若し妄語する者は、佛菩提の法を越失す。是故に祕密主、此法門を應に是の如く知つて、眞實ならざる語を捨て離るべし。

復次に祕密主、菩薩麤く惡しく罵らざる戒を受持して、當に柔軟の心語と、隨類の言辭とを以て、諸の衆生等攝受すべし。何を以ての故に。祕密主、菩提薩埵の初行は、衆生を利樂す。或は餘の菩薩惡趣の因に住する者を見ては、之を折伏せんが爲に、而も麤語を現ず。

復次に祕密主、菩薩兩舌語せざる戒を受持して、間隙語を離れ、惱害語を離れよ。犯せば菩薩と名くるに非ず。衆生に於て離拆の心を起さざれ。異の方便有りて、若し彼衆生所見の處に隨つて、著を生ぜば、其像類の如く、離間の言語を說いて、一道に住せしめよ、謂ゆる一切智智の道なり。

復次に祕密主、菩薩は綺語せざる戒を持て、隨類の言辭を以て、時と方と和合して、義利を出生し、一切衆生をして歡喜の心を發して、耳根の道を淨めしめよ。何を以ての故に。菩薩は差別の語あるが故に、或は餘の菩薩戲笑を以て先と爲して、衆生の欲樂を發起して佛法に住せしむ。具に義利無き語を出すと雖も、是の如きの菩薩は、生死の流轉に著せず。

復次に祕密主、菩薩は當に貪らざる戒を持つべし。彼他の物を受用する中に於て、染思を起さざれ。何を以ての故に。菩薩は著心を生ずること有ること無きが故に、若し菩薩心に染思あれば、彼一切智門に於て力無くして、而も一邊に墮す。又祕密主、菩薩は應に歡喜を發起して是の如きの心を生ずべし。我應に作すべき所を彼をして自然に而も生ぜしむ。極めて善哉と爲す、數自ら慶慰す。彼諸の衆生をして、資財を損失せしむることなきが故に。

復次に祕密主、菩薩は應當に瞋らざる戒を持つて、一切の處に遍く當に安忍を修すべし。瞋と喜とに著せず、怨及び親に於て、其心平等にして而も轉ぜよ。何を以ての故に。菩提薩埵は而も惡意を懷くに非ず。所以は何んとなれば、菩薩は本性清淨なるを以ての故に。是故に祕密主、菩薩は應に瞋恚せざる戒を持つべし。

復次に祕密主、菩薩は應當に邪見を捨て、離れて正見を行じ、他世を怖畏し害無く曲無く諂無く其心端直にして、佛法僧に於て心に決定を得べし。是故に祕密主、邪見は最も極

【邪見の因縁を起さざるべし】上來明すところの十善戒は眞言行者にありて偸蘭遮にして斷頭罪にあらず、故に此外に更に十重禁戒あり、一不捨佛、二不捨法、三不捨僧、四不捨菩提心、五不謗一切三乘經、六不應一切法生慳悋、七不得邪見、八發心人に於て不令退息、九小乘人の前に大乘を說かず大乘人の前に小乘を說かず、十常に當に道を行ずべし、これを祕密の十重禁といふ、たとへ不衆生等の十戒を犯すとも後十事を持つ者は犯戒とせざるなり、

【有爲の戒】無爲戒は卽ち本性戒にして修戒に非ず、之に對して所行の方便ある故に有爲といふ。然れども深く觀ずれば卽ち

めて大なる過失たり、能く菩薩の一切善根を斷ず。是れ一切の諸の不善法の母たり。是故に祕密主、下、戲笑に至るまで、亦當に邪見の因縁を起さざるべし。

爾時、執金剛祕密主、佛に白して言さく、『世尊、願くば十善道戒の極根を斷ずる斷を說きたまへ。云何が菩薩王位自在にして宮殿に處し、父と母と妻と子と眷屬と圍遶し、天の妙樂を受けて而も過を生ぜざる。』是の如く說き已りて、佛、執金剛に告げて言はく、『善い哉善い哉、祕密主、汝當に諦に聽け、善く之を思念せよ。吾今菩薩の毘尼の決定善巧を演說せん。祕密主、應に知るべし、菩薩に二種あり、云何が二と爲す。謂ゆる在家と出家となり。祕密主、彼在家の菩薩は、五戒の句を受持す、勢位自在にして、種種の方便道を以て、時方に隨順し、自在に攝受して、一切智を求む。謂ゆる方便を具足して、舞伎天祠主等の種種の藝處を示現し、彼彼の方便に隨つて、四攝の法を以て衆生を攝取して、皆阿耨多羅三藐三菩提を志求せしむ。謂はく生ける命を奪はざる戒と、及び與へざるを取ると、虛妄語と、欲邪行と、邪見等とを持つを、是を在家の五戒の句と名く。菩薩は說く所の如き善戒を受持して、應に具に諦に信じ、當に勤めて修學すべし。往昔の諸の如來の學處に隨順し、有爲の戒に住し、智慧の方便を具足して、如來の無上吉祥の無爲戒蘊に至ることを得ん。四種の根本罪あり、乃至活命の因縁にも亦應に犯すべからず。云何が四と爲す。謂く、諸法を謗ずると、菩提心を捨離すると、慳悋すると、衆生を惱害するとなり。所以は何ん。此性は是れ染なり、菩薩戒を持つに非ず。何を以ての故に。

無等戒に同じ、阿字門を離れざるを以ての故に。

【說百字生品】晴字を明す。

【不空教】一切衆生の見聞覺知する所あるに隨つて空しく過ぐる者無く、皆無上菩提を必定する故に名く。

【眞言の自在】如來の諸法に於て自在なるが如く、一切の眞言に於て自在を得る故に。

【眞言の王】一切の眞言に於て自在なるが故に名く、

【眞言の導師】一切の眞言を導いて大寶を得る所に達

過去の諸正覺と、及與未來世
現在の人中の尊と、智と方便とを具足して
無上覺を修行して、無漏の悉地を得たまへり
亦餘の學處の、方便智を離れたるを說くは
當に知るべし大勤勇、諸の聲聞を誘進するなりと

說百字生品第十九

爾時、毘盧遮那世尊、諸の大會の衆を觀察して、不空教の樂欲に隨つて、一切を成就する、眞言の自在と、眞言の王と、眞言の導師との大威德者を說きたまふ。三昧耶に安住して、三法圓滿するが故に、妙音聲を以て、大力の金剛手に告げて言はく、「勤勇士、一心に諦に諸の眞言と眞言の導師とを聽け」と。即時に智生三昧に住して、而も種種の巧智を出生する、百光遍照の眞言を說いて曰はく、

南麼三曼多勃陀喃一 暗

佛金剛手に告げたまはく、此は一切眞言
眞王救世者なり、大なる威德を成就したまへり
即ち是れ正等覺、法自在牟尼なり

進する故に名く、
【三昧耶】身口意の三三昧なり。
【三法】理行果をいふ。
【百字果相應品】暗字の果位境智相應を明す。
【大智灌頂地】如來の第十一地。
【陀羅尼の形を以て等】眞言輪を總束して佛身を爲す即ち普門の身を成ずるなり。

諸の無智の暗を破すること、日輪の普く現ずるが如し
是れ我自體なり、大牟尼加持もて
衆生を利益するが故に、應化して神變を作し
乃至一切をして、思願に隨つて生起せしむ
悉く能く爲に神變を、施作する無上の句なり
故に當に一切種にて、淨身にして諸の垢を離れ
理に應じて常に勤修して、佛菩提を志願せよ

百字果相應品第二十

爾時、毘盧遮那世尊、執金剛祕密主に告げて言はく、『祕密主、若し大覺世尊の、大智灌頂地に入れば、自ら見るに三三昧耶の句に住す。祕密主、薄伽梵の大智灌頂に入れば、即ち陀羅尼の形を以て佛事を示現す。』爾時、大覺世尊、隨つて一切の諸の衆生の前に住して、佛事を施作し、三三昧耶の句を演說したまふ。佛言はく、『祕密主、我語輪の境界の廣長にして、遍く無量世界に至る清淨門を觀ぜよ。其本性の如く、類に隨ふ法界門を表示して、一切衆生をして皆歡喜を得しむること、亦今の釋迦牟尼世尊の、無盡虛空界に流遍して、諸の刹土に於て佛事を勤作したまふが如し。祕密主、諸の有情の能く世

【無上覺者の句】成佛するは此百字の心、即ち暗字を修するに由りてなり。

【百字位成品】前品の境智相應境界は無自性なるを說く

尊の是語輪相より、正覺の妙音莊嚴の瓔珞を流出し、胎藏より佛の影像を生じて、衆生の性欲に隨つて、歡喜を起さしむることを知るに非ず。」

爾時、世尊、無量の世界海の門に於て、法界に遍く慇懃に勸發して、菩提を成就し、普賢菩薩の行願を出生したまふ。此妙華布地、胎藏莊嚴世界の、種種性海の中に於て生を受けて、種種の性の淸淨の門を以て、佛刹を淨除し、菩提場を現じて、而も佛事を作す。次に復三藐三菩提の句を志求すらく、『心の無量を知るを以ての故に、身の無量を知る。身の無量を知るが故に、智の無量を知る。智の無量を知るが故に、即ち衆生の無量を知る。衆生の無量を知るが故に、即ち虛空界の無量を知る。祕密主、心の無量に由るが故に、四種の無量を得、得已りて最正覺を成じて、十智力を具し、四魔を降伏し、無所畏を以て而も師子吼す。』

佛、偈を說いて言はく、

勤勇、此一切の、無上覺者の句は
百門の學處に於て、諸佛の說きたまふ心なり

百字位成品第二十一

爾時、執金剛祕密主、未曾有なることを得て、而も偈を說いて言さく、

【外道】二あり、一は世間の外道、二は佛法内の外道なり、佛法内の外道とは二乘をいふ

佛眞言救世者の、能く一切の諸の眞言を生ずることを說きたまへ
摩訶牟尼云何が知る、誰か能く此を知る、何れの處よりす
誰か是の如きの諸の眞言を生ずる、生ずる者を誰とかする、唯演說したまへ
大勤勇士は說の中の上なり、此の如く一切を、願くば開示したまへと
爾時に薄伽梵、法自在牟尼
圓滿し普く周遍して、悉く諸の世界に遍じたまふ
一切智慧者の、大日尊告げて言はく
善い哉、摩訶薩、大德金剛手
吾當に一切を說くべし、微密にして最も希有なり
諸佛の祕密は、外道は知ること能はず
若し悲生曼荼に、大乘の灌頂を得れば
調柔にして善行を具し常に悲ありて、他を利する者なり
緣有りて菩提を觀ずるに、常に見ること能はざる所なり
彼能く此内心の、大我を知ること有れば
其自心の位に隨つて、導師所住の處あり
八葉の意より生ず、蓮花は極めて嚴麗なり
圓滿の月輪の中に、無垢にして猶し淨き鏡のごとし

彼に於て常に安住せる、眞言救世の尊は
金色にして光焔を具せり、三昧に住して毒を害すること
日の觀るべきこと難きが如し、諸の衆生も亦然なり
常恆に內外に於て、普く周遍して加持す
是の如く慧眼を以て、意の明鏡を了知す
眞言者の慧眼を以て、是圓鏡を觀ずるが故に
當に自の形色に、寂然として正覺の相なるを見るべし
身は身より生ずる影像にして、意は意より生ずる所なり
常に清淨の種種の、自の作業を出生す
次に彼光現ずるに於て、圓照なること電焔の如し
眞言者能く、一切の諸の佛事を作す
若し見に清淨を成ぜば、聞等も亦復然なり
意の思念する所の如く、能く諸の事業を作す

二復次に祕密主、眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は、是の如く自身の影像生起す。殊勝なること三菩提に過ぎたること有ること無し。眼耳鼻舌身意等の、四大種の攝持し集聚するが如く、彼是の如く自性空にして、唯名字の所執のみ有り。猶し虛空の如くにして、執著する所無きこと影像に等し。彼如來正覺を成じて、互に相緣起したまふこと間絶有る

【百字成就持誦品】百光王の三十二字の字輪及び非字は三十六相を現ずることを明かす。

【百字自成就持誦品】下に明かす三昧及び道

こと無し。若し緣に從つて生ずること、彼即ち影像を生ずるか如し。是故に、諸の本尊は即ち我なり。我は即ち本尊なり、互に相發起す。身より生ずる所の身は、尊の形像生ずるなり。祕密主、觀ぜよ、是法は通達慧により、通達慧は法に緣り、彼等遞に作業を爲し無作にして性空なりと。祕密主、云何が意より意を生じ、能く影像を生ずる。祕密主、譬へば若は白、若は黃、若は赤、作意する者の作す時に、染著の意生ずるが如く、彼と同類にして是の如く身轉ず。祕密主、又內に意の中の曼荼羅を觀ずるが如きは、熱病を療治するに、彼衆生の熱病即時に除愈して疑惑有ること無し。曼荼羅は意に異るに非ず、意は曼荼羅に異るに非ず。何を以ての故に。彼曼荼羅と一相なるが故に、祕密主、又幻者の男子を幻作して、而も彼男子又復化を作すが如きは、祕密主、意に於て云何。彼何なる者をか勝れたりと爲す。時に金剛手、佛に白して言さく、「世尊、此二人は、相異こと無きなり。何を以ての故に。世尊、實に生ずるに非ざるが故に。是二の男子は本性空なるが故に、幻に等同なり。是の如し祕密主、意より生ずる衆の事と、及び意の生ずる所と、是の如く倶に空にして無二無別なり。」

百字成就持誦品第二十二

爾時、世尊、執金剛祕密主に告げて言はく、「諦に聽け祕密主、眞言救世者は、身と身

佉等の字輪を云ふ

【身と身】前の身は垢身、後のは淨身なり。

【意は意より】前の意は染汚の意、後のは清淨の意。

【彼處】淨心の處

【此道】眞言の行

【無盡衆生界を淨除する句等】淨除無盡衆生句は即ち三昧流出句、流出の句即ち不思議の句、不思議の句即ち他門を轉ずるの句なり、他は衆生なり、無明なり。他の無明を轉じて如來の明となし、他の衆生を轉じて佛となすなり。

【想の行に住する】

と異分有ること無し。意は意より生じて善く淨除せしむれば、普く皆光有りて彼處より流出す、相應して而も起りて諸の支分に遍ず。彼愚夫の類は常に知らざる所なり。此道に達せず、乃至身の所生の分無量種なるが故に、是の如く眞言救世者の、分說も亦無量なり。譬へば吉祥の眞陀摩尼の、諸の樂欲に隨つて而も饒益を作すが如し。是の如く世間に世を照す者の身は、一切の義利成ぜずと云ふ所無し。祕密主、云何が無分別の法界に、一切の作業隨轉する。祕密主、亦虛空界の衆生に非ず、壽者に非ず、摩奴闍に非ず、摩納婆に非ず、作者に非ず、吠陀に非ず、能執に非ず、所執に非ず、一切の分別及び無分別を離れて、而も彼無盡の衆生界の一切の去來の、有ゆる所作に疑心を生ぜざるが如く、是の如く無分別の一切智智も、虛空に等同にして、一切衆生に於て、內外に而も轉じたまふ。」

爾時、世尊、又復無盡衆生界を淨除する句、三昧を流出する句、不思議の句、他門を轉ずる句を宣說したまふ。

若し本より所有無しとも、世間に隨順して生ぜば
云何が空の、此瑜伽者を生ずることを了知せん
若し自性是の如く、名不可得なりと覺るとき
當に等空の心生ずべし、謂ゆる菩提心なり
隨に慈悲を發起して、諸の世間に隨順すべし
唯想の行に住する、是を即ち諸佛と名く

唯阿字本不生の眞理を觀想するに由りて還て隨類身を生じて廣く衆生界を利するをいふ。

【自然形を顯示す】本不生をいふ阿字門は即ち自身なり。故に自身不生不滅なり、不生不滅は如來の身なり。【或は不可得の義等】以下は諸字を以て阿字を轉釋す。阿字に無量の功德を具するを或は直に本不生を以て顯し、或は異門にて顯す。異轉字門に從つけて異門なり。

當に知るべし想より造立す、此を觀じて空空と爲す
數を下す法の轉じて、一を增して而も分異なるが如く
勤勇の空も亦然なり、增長すること次第に隨ふ
即ち此阿字等の、自然智の加持なり

阿娑嚩、迦佉哦伽、遮車若社、吒咤拏茶、多他那駄、波頗麼婆、野囉邏嚩奢、沙娑訶
乞灑、仰壤拏曩麽。

祕密主、此を觀ずれば空の中より流散し假立す。阿字に加持せられて、三昧道を成就す。

祕密主、是の如く阿字は、種種の莊嚴に住して、圖位を布列せり。一切の法本不生なるを以ての故に、自形を顯示す。或は不可得の義を以て、嚩字の形を現し。或は諸法造作を遠離するが故に、迦字の形を現し。或は一切の法等虛空の故に、迦字の形を現し。或は行不可得の故に、哦字の形を現し。或は諸法一合相不可得の故に、伽字の形を現し。或は一切の法、生滅を離れたるが故に、遮字の形を現し。或は一切法影像無きが故に、車字の形を現し。或は一切の法生不可得の故に、若字の形を現し。或は一切の法離戰敵の故に、社聲上呼字の形を現し。或は一切の法離我慢の故に、吒字の形を現し。或は一切の法離養育の故に、咤字の形を現し。或は一切の法離怨對の故に、拏字の形を現し。或は一切の法離災變の故に、茶字の形を現し。或は一切の法離如如の故に、多字の形を現し。成は一切の法離住處の故に、他字の形を現し。或は一切の法離施の故に、那字の形を現し。或は一切法界

【三十二大人相等】阿娑嚩の三字、迦等の九字、遍口聲の九字合して三十二相なり。又十二の摩多と迦等の二十字と遍口聲の野等の八字と合して四十字、此に各定と慧とある故に各八十隨好なり。

【百字眞言法品】唯阿の一字を明す一字を擧げて餘を顯すなり。

【此三昧門に於て等】百光遍照王の三昧、阿字を以て加持するを空を加持すといふ。

【阿字は第一の句】

不可得の故に、陀字の形を現し。或は一切法勝義諦不可得の故に、波字の形を現し。或は諸法不堅如聚沫の故に、頗字の形を現し。或は一切法離繫縛の故に、麼字の形を現し。或は一切の法諸觀不可得の故に、婆字の形を現し。或は一切の法諸乘不可得の故に、野字の形を現し。或は一切の法離一切塵の故に、囉字の形を現し。或は一切の法無相の故に、邏字の形を現し。或は一切の法離言說の故に、嚩字の形を現し。或は一切の法離寂の故に、奢字の形を現し。或は一切の法本性鈍の故に、沙字の形を現し。或は一切の法諦不可得の故に、娑字の形を現し。或は一切の法離因の故に、訶字の形を現す。祕密主、隨つて此等の一一の三昧門に入れ。祕密主、是を觀ずれば、乃至三十二大人相等、皆此中より出づ。仰壤儜曩莽、等しく一切の法に於て、自在にして而も轉ず。此等隨つて現れて、三藐三佛陀の隨形好を成就す。」

百字眞言法品第二十三

復次に祕密主、此三昧門に於て、空を以て加持すれば、一切の法に於て自在に、最正覺を成就す。是故に此字を卽ち本尊と爲す。

而も偈を說いて言はく、

祕密主、當に知るべし、阿字は第一の句なり

阿の一字より迦等の多字を生ずるの謂。

【說菩提性品】阿字の體性を明す。

明法普く周遍し、字輪を以て周遍せり
彼尊は相有ること無し、遠く諸の見の相を離れたり
無相なれども衆の聖尊、而も相を現じて中より來りたまふ
聲は字より出で、字は眞言を生じ
眞言は果を成立す、諸の救世尊の說なり
當に知るべし聲の性は空なり、卽ち空の造作する所なり
一切業生の類は、言の如く而も妄に執す
空に非ず亦聲に非ざれども、修行者の爲に說く
聲の解脫に入つて、卽ち三摩地を證す
法に依つて布して相應せよ、字を以て照明を爲せ
故に阿字等の類の、無量の眞言を想へ

說菩提性品第二十四

譬へば十方の虛空の相の、常に遍くして一切に所依無きが如く
是の如く眞言救世者も、一切の法に於て所依無し
又空中の諸の色像の、現に見るべしと雖も依る處無きが如く

【一切智の句】菩提性は即ち阿字門なり、阿字門は即ち一切智の句なり

眞言救世者も亦然なり。彼諸法の所依の處に非ず
世間成立の虛空の量は、遠く去來現在の世を離れたり
若し眞言救世者を見ば、亦復三世の法を出過せり
唯名趣のみに住して、遠く作者等を離れたり
虛空の衆の假名は、導師の宣說したまふ所なり
名字は所依無きこと、亦復虛空の如し
眞言自在にして然なり、現見すれども言說を離れたり
火と水と風と等に非ず、地に非ず日光に非ず、
月等の衆曜に非ず、晝に非ず亦夜に非ず
生に非ず老病に非ず、死に非ず損傷に非ず
刹那の時分に非ず、亦年歲等に非ず
亦成壞有るに非ず、劫數も不可得なり
淨染の受生に非ず、或は果亦不生なり
若し是の如き等の、種種の世の分別無くば
彼に於て常に勤修して、一切智の句を求めよ

【三三昧耶品】菩提の相三寶等を說く。

【初心には等】初心に發心して成佛せんと欲するも、但、求佛の心のみあつて、自己身の本性に何の功德ありやを了達すること能はず、故に自性を觀ぜずといふ、第二心は如實智生じて分別妄想を斷ずる自利の心、第三心は利他大悲の心なり。

【三三昧耶】此は佛法僧を以て三三昧とす、此三寶即ち一體なり、故に三三昧耶ありといふ。

三三昧耶品第二十五

爾時、執金剛祕密主、佛に白して言さく、『世尊の說きたまふ所の、三三昧耶は、云何が此法を說いて、三三昧耶と爲す。』是の如く言ひ已りて、世尊、執金剛祕密主に告げて言はく、『善い哉善い哉、祕密主、汝吾に是の如きの義を問ふ。祕密主、汝當に諦に聽き、善く之を思念すべし。吾今演說せん。』金剛主の言さく、『是の如し、世尊。願樂くば、聞かんと欲す。』佛言はく、『三種の法相續すること有りて、除障と相應して生ずるを、三三昧耶と名く。云何が彼法相續して生ずる。謂ゆる初心には自性を觀ぜず。此より慧を發し如實の智生じて、無盡の分別の網を離る、是を第二の心と名く。菩提の相は無分別の、正等覺の句なり。祕密主、彼實の如く見已りて、無盡の衆生界を觀察して、悲自在に轉ず。無緣の觀をもて、菩提心生ず。謂ゆる一切の戲論を離れて、衆生を安置し、皆無相菩提に住せしむ、是を三三昧耶の句と名く。』

復次に祕密主、三三昧耶あり
最初は正覺の心なり、第三を名けて法と爲す
彼より心相續して生ず、謂ゆる和合僧なり
此三三昧耶は、諸佛の導師なりと說きたまふ

【祕密主三藐三佛陀等】以下三身を具するを亦三三昧耶と名くるを明す

【說如來品】菩提卽如來の相を明す

若し此三等に住して、菩提の行を修行すれば
諸の導門の上首として、諸の衆生を利することを爲す
當に菩提を成じ、三身自在に轉ずることを得べし

祕密主、三藐三佛陀、教を安立したまふが故に、一身を以て加持したまふ。謂ゆる初變化の身なり。復次に祕密主、次に一身に於て三種を示現したまふ。謂ゆる佛法僧なり。復次に祕密主、此より成立して、三種の乘を說き、廣く佛事を作し、般涅槃を現じ、衆生を成熟したまふ。祕密主、彼諸の眞言門に、菩提の行を修する諸の菩薩を觀ずべし。若し三等を解り、眞言の法則に於て、而も成就を作して、彼一切の妄執に著せざれば、能く障礙を爲す者無し、不樂欲と懈怠と、無利の談話と、信心を生ぜざると資財を積集する者とを除く。復應に二事を作さざるべし、謂く、諸の酒を飲むと、及び床の上に寢ぬとなり。』

說如來品第二十六

爾時、執金剛祕密主、世尊に白して言さく。
云何が如來と爲す、云何が人中の尊
云何が菩薩と名け、云何が正覺と爲す

導師大牟尼、願くば我疑ふ所を斷じたまへ
菩薩大名稱、疑慮の心を棄捨して
當に摩訶衍を修すべし。行の王として上行ること無けん

爾時、薄伽梵毘盧遮那、諸の大會の衆を觀察して、執金剛秘密主に告げて言はく、「善い哉善い哉、金剛手。能く吾に是の如きの義を問ふ。秘密主、汝當に諦に聽き、善く之を思念すべし、吾今摩訶衍の道を演說せん。」

頌に曰はく、

菩提は虛空の相なり、一切の分別を離れたり
彼菩提を樂求するを、菩提薩埵と名く
十地等を成就して、自在に善く
諸法は空にして幻の如しと通達す、此一切同なりと知り
諸の世間の趣を解す、故に名けて正覺と爲す
法は虛空の相の如く、無二にして惟一相なり
佛の十智力を成ず、故に三菩提と號す
唯慧を以て無明を害し、自性言說を離れたる
自證の智慧あり、故に說いて如來と名く

【世出世護摩法品】外道の四十四火、出世の十二火、四種火等の護摩法を明す。

【一】初に外道の邪火四十四種を明す。

世出世護摩法品第二十七

復次に、秘密主、往昔に一時、我菩薩と爲つて、菩薩行を行じて、梵世に住せし時に、梵天有り來つて、我に問うて言はく、「大梵、我等火に幾種有るかを知らんと欲す」と。

時に我是の如く答へて言はく、

謂ゆる大梵天を、我慢自然と名く
次に大梵天の子、彼を簸吒何と名く
世間の火の初なり、其子を梵飲と名け
子を畢怛羅と、吠濕婆捺羅と名く
復訶嚩奴と、合毘嚩訶那と
簸囉三鼻覩と、及び阿闍末拏とを生ず
彼の子は鉢體多と、補色迦路陶となり
是の如きの諸の火天、次第にして以て相生ず
復次に胎藏を置くに、忙路多火を用ひ
後に身を澡盥せんと欲するときは、嚩訶忙囊火なり
妻に浴せしむるに用ふる所は、鉢藥盧火を以てす

若し子を生じての後には、鉢伽痡火を用ふ
子の爲に初めて名を立つるには、簸體無火を用ひ
飲食の時に用ふる所は、當に知るべし戌脂火なり
子の爲に髻を作る時は、應に殺毘火を用ふべし
次に禁戒を受くる時は、三謨婆嚩火なり
禁滿じて牛を施す時は、素哩邪火を用ひ
童子の婚媾の時は、瑜赭迦火を以てす
衆の事業を造作するには、跛那易迦火なり
諸の天神を供養するには、簸嚩句火を以てす
房を造るには梵火を以てす、惠施には扇都火なり
羊を縛ぐに用ふる所は、阿縛賀寧火なり
觸穢の用ふる所は、微吠脂火を以てし
熟食するに用ふる所は、婆訶婆火を以てす
日天を拜する時の用には、合微誓邪火なり
月天を拜する時の用には、謂ゆる儞地火なり
滿燒に用ふる所は、阿密栗多火なり
彼息災の時に於ては、那嚕拏火を用ふ

【二】次に出世間
正法の外護摩の十
二の火天を說く。
此十二火天は正
法の内護摩にも通
ず。

増益の法を作す時には、訖栗旦多火なり
怨對を降伏する時には、當に忿怒の火を以てすべし
諸の資財を召攝するには、迦摩奴火を用ひ
若し林木を焚燒するには、應に使者火を用ふべし
食する所を消化せしむるには、社吒路火を用ひ
若し諸火を授くる時には、謂ゆる薄叉火なり
海中に火有り、縛拏婆目佉と名く
劫の燒盡の時の火をば、名けて瑜乾多と曰ふ
汝諸の仁者の爲に、已に略して諸火を說けり
韋陀を修習する者、梵行の傳へ讀む所なり
此四十四種は、爾時に我宣說せり
復次に祕密主、我往昔の時に於て
諸火の性を知らずして、諸の護摩の事を作す
彼護摩の行に非ず、能く業果を成ずるに非ず
(二)我復菩提を成じて、十二火を演說す
智火を最も初と爲し、火因陀羅と名く
端嚴にして淨金の相なり、增益して威力を施す

焔鬘もて三昧に住す、當に知るべし智圓滿せり
第二を行滿と名く、普光ありて秋月の耀の如し
吉祥圓の輪中にして、珠鬘鮮白の衣あり
第三の摩嚕多は黒色にして風燥の形なり
第四の盧醯多は、色朝日の暉の如し
第五の沒嚟拏は、鬚多くして淺黃の色なり
頸脩くして大威光あり、遍く一切を哀愍す
第六をば忿怒と名く、眇目にして霏煙色なり
髮鬔くして而も震吼す、大力にして四牙を現す
第七の闍吒羅は、迅疾にして衆綵を備ふ
第八は迄灑耶なり、猶し電光の聚るが如し
第九を意生と名く、大勢あつて巧色の身なり
第十の羯攞微は、赤黒にして唵字の印なり
第十一の火神は（梵本に名を闕く）第十二の謨賀那は、衆生の迷惑する所なり
祕密主、此等の火色の所持は
其れ自の形色に隨つて、藥物等も彼に同じうして
而も外護摩を作せ、意に隨つて悉地を成ず

【三】次に內護摩觀を說く。【一性にして而も三を具す】菩提心の性に本尊の三密と爐壇の三密と行者の三密とを具するをいふ。此三平等不二なるを三處を合して一と爲すといふなり。

(三)復次に內心に於て、一性にして而も三を具す
三處を合して一と爲す、瑜祇の內護摩なり
大慈大悲の心、是を息災の法と謂ふ
彼兼ねて喜を具す、是を增益の法と爲す
忿怒は胎藏に從つて、而も衆の事業を造す
又彼祕密主、其所說の處の如く
相應の事業に隨ひ、信解に隨つて焚燒せよ
爾時、金剛手、佛に白して言さく、「世尊、云何なるか火爐の三摩地、云何なるか而も用ひて散灑し、云何が順に吉祥草を敷く、云何が緣の衆物を具する。」是の如く說き已れり。
爾時に金剛手、佛に白して言さく
世尊、云何が火爐の定、云何が散灑を用ふ
順に吉祥草を敷く、云何が衆物を具す
佛、祕密主、持金剛者に告げて言はく
火爐は肘量の如くして、四方の相均等なり
四節を緣の界と爲し、金剛の印を周匝すべし
之を稱くに生茅を以てし、爐を遶りて而も右に旋す
末を以て本に加へざれ、應に本を以て末に加ふべし

次に吉祥草を持して、法に依りて而も右に灑げ
塗香と華と燈とを以て、次に火天に獻ぜよ
行人一一華を以て、沒栗荼に供養して
坐位に安置す、復當に灌灑を用ふべし
當に滿施を作すべし、持するに本眞言を以てし
次に息災の護摩、或は增益の法を以てす
是の如きの世の護摩を、說いて名けて外事と爲す
復次に內護摩は、業生を滅除す
自の末那を了知して、遠く色聲等を離る
眼と耳と鼻と舌と身と、及與語と意との業は
皆悉く心より起りて、心王に依止す
眼等の分別生じて、及び色等の境界あり
智慧未生の障は、風燥火能く滅す
妄分別を燒除して、淨菩提心を成ずと
此を內護摩と名く、諸の菩薩の爲に說く

【說本尊三昧品】字印形に各二種あることを明す。

【本尊の形】自の所持の尊なり。

【尊と及び菩提心】尊を觀ずるは字義を觀ずるなり、即ち字の實相に由て菩提心を觀ずるなり、菩提心とは但觀菩提心なり。

【有形と無形】初心には其本尊の形と色と住處と坐立と、所持の印等を觀ず、即ち有相の故に有形といふ。後には宛然として直に見て鏡像の想はざるに見ゆるが如き故に無形といふ。

【清淨と非清淨】有相を非清淨、無相を清淨とす、行

說本尊三昧品第二十八

爾時、執金剛祕密主、佛に白して言さく、「世尊、願くば諸尊の色像、威驗の現前することを說きたまへ、眞言門に菩薩行を修する、諸の菩薩をして、本尊の形を觀緣せしむるが故に、即ち本尊の身を以て自身と爲す。疑惑有ること無くして、而も悉地を得ん。」是の如く說き已りて、佛、執金剛祕密主に告げて言はく、「善い哉善い哉、祕密主、汝能く吾に是の如きの義を問ふ。善い哉、諦に聽き極めて善く作意せよ。吾今演說せん。」金剛手の言さく、「是の如し、世尊。願樂くば聞かんと欲す。」佛言はく、「祕密主、諸尊に三種の身あり、謂ゆる字と印と形像となり。彼字に二種あり、謂く、聲及び菩提心なり。印に二種あり、謂ゆる有形と無形となり。本尊の身に亦二種あり。謂ゆる淸淨と非淸淨となり。彼淨身を證すれば、一切の相を離る。非淨有想の身は、則ち顯と形との衆色あり。彼二種の尊形、二種の事を成就す。有想の故に、有相の悉地を成就し、無想の故に、隨つて無相の悉地を生ず。」

而も偈を說いて言はく、

佛有想を說きたまふ、故に樂欲して有相を成ず
無相に住するを以ての故に、無想の悉地を獲

者初心の間は畫像等に由て緣觀するは有相、此觀漸く熟して閉目開目に常に見る位を無相といふ。有相によつて無相に入るなり、即ち無常の因に由て常住の果に至るなり。

【說無相三昧品】無相三昧を明す。

【無相三昧】身口意平等の法門を修觀して成熟するをいふ。身口意の三事は因緣生の法、故に有なるも都て自性なし、不生不滅なり、即ち是れ阿字門の法界性なり、是を無相三昧と名く。凡夫は此理を知らざるが故に身口意の事法に由て修せしめて三平等の性に引入するなり。

是故に一切の種、當に非想に住すべし

說無相三昧品第二十九

復次に薄伽梵毘盧遮那、執金剛祕密主に告げて言はく、『祕密主、彼眞言門に、菩薩行を修する諸の菩薩、無相三昧を成就せんと樂欲せば、當に是の如く思惟すべし。想は何れより生ずる、自身と爲んや、自の心意とせんや。若し身より生ぜば、身は草木瓦石の如し。自性是の如く造作を離れたり、識知する所無し、因業の生ずる所なり、當に等しく觀じて外事に同ずべし。又建立せる形像の如く、火に非ず、水に非ず、刄に非ず、毒に非ず、金剛等に傷け壞られ、或は忿恚麤語すれども、而も能く少分も其をして動作せしむるに非ず。若し飮食と衣服と塗香と華鬘とを以て、或は塗香と栴檀と龍腦と、是の如き等の類の、種種の殊に勝れたる受用の具を以て、諸天と世人と、奉事し供給すれども、亦喜を生ぜず。何を以ての故に。愚童凡夫は、自性空の形像に於て、自ら我分を生じて、顚倒不實にして、諸の分別を起して、或は復供養し、或は毀害を加ふ。祕密主、當に是の如く循身の念に住して、性空を觀察すべし。

復次に、祕密主、心は自性無し、一切の想を離れたるが故に、當に性空を思惟すべし。祕密主、心は三時に於て求むるに得べからず、三世を過ぎたるを以ての故に、是の如きの

自性は、遠く諸相を離れたり。祕密主、心想ありとは、即ち是れ愚童凡夫の分別する所なり。了知せざるに由りて、是の如き等の虚妄の横計あり。彼不實不生の如く、當に是の如く思念すべし。祕密主、此眞言門に、菩薩行を修する諸の菩薩は、無相の三昧を證得す。無相三昧に住するに由るが故に、如來の說きたまふ所の眞語親り其人に對して常に現在前す。』

世出世持誦品第三十

復次に祕密主、今祕密眞言を持する法を說かん
一一の諸の眞言に、心意の念誦を作せ
出入の息を二と爲す、常に第一と相應するなり
此に異りて而も受持すれば、眞言支分を闕く
內と外と相應するに、我四種ありと說く
彼世間の念誦は、所緣あつて相續して
種子の字と句とに住し、或は心本尊に隨ふ
故に攀緣ありと說く、出入の息を上と爲す
當に知るべし出世の心は、遠く諸字を離れたり

【世出世持誦品】四種念誦を說く。

【第一と相應】心意念誦と出入息念誦の二が、第一即ち阿字第一命と相應するなり。

【所緣あつて等】聲念誦。

【或は心等】作意念誦。

【出入の息等】出入息念誦。

【出世の心は等】三摩地念誦。

【三落叉】相の義即ち字の眞言の相と身の印相と本尊の相の心相との平等の觀をなすなり。

【囑累品】流通分人相等を明す。

【不放逸に住す】前品に是の如きの教に異すること勿れといふを承けてかくいふなり。

自と尊と一相と爲す、二無く取着無し
意と色像とを壞らず、法則に異すること勿れ
說く意の三落叉に、多種の持眞言あり
乃至衆の罪を除いて、眞言者淸淨なり
念誦の數量の如くして、是の如きの教に異すること勿れ

囑累品第三十一

爾時、世尊、一切の衆會に告げて言はく、『汝今應當に、不放逸に住すべし。此法門に於て、若し根性を知らざれば、應に他人に授與すべからず。我弟子の標相を具する者をば除く。我今演說せん、汝等當に一心に聽くべし。若し吉祥の執宿の時に於て生れて、勝事を志求し、微細の慧あつて、常に恩德を念じ、渴仰の心を生じ、法を聞きて歡喜して而も住せん。其相靑白なり、或は白色なり。廣首長頸、額廣く平正にして、其鼻脩直に、面輪圓滿にして端嚴相稱はん。是の如くならば、應當に慇懃に而も之を教授すべし。』

爾時、一切其威德者、咸く慶悅を懷いて、聞き已りて頂受し、一心に奉持す。是諸の衆會、種種の莊嚴を以て、廣大に供養し已りて、佛足を稽首し、恭敬し合掌して、而も是言を說く、惟願くば此法教に於て、救世の加持の句を演說して、法眼道をして、一切處

に遍じて、久しく世間に住せしめたまへ。」と。爾時、世尊、此法門に於て、加持句の眞言を說いて曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 薩婆他引 勝勝二 怛隣怛隣三 顚顚四 達隣達隣五 婆他引二跛也婆他引二跛也六 勃馱薩底也合七 達摩薩底也合八 僧伽薩底也合九 鉿鉿十 吠那尾吠一十 莎訶二十

時に佛、此經を說き已りたまひて、一切の持金剛者、及び普賢等の上首の諸の菩薩、佛の說きたまふ所を聞いて、皆大いに歡喜し信受し奉行せり。

大毘盧遮那成佛神變加持經卷第六　終

大毘盧遮那成佛神變加持經　卷第七

大唐天竺三藏善無畏共沙門一行譯す

供養次第法中眞言行學處品第一

(一)毘盧遮那佛の、淨眼を開敷したまへること靑蓮の如くなるを稽首したてまつる
我大日經王に依つて、供養を資くる所の衆の儀軌を說かん
次第の眞言の法を成ぜん爲に、彼の如くせば當に速に成就することを得べし
又本心をして垢を離れしめんが故に、我今要に隨ひ略して宣說せん
(二)然も初に自他の利成就することは、無上智願の方便なり
彼を成ずる方便無量なりと雖も、悉地を發起することは信解に由る
悉地の諸の勝願を滿したまへる、一切如來と勝生子と
彼等の佛身の眞言形と、住する所の種種の印威儀と
殊勝の眞言を行ずる所の道と、及び方廣乘とに於て皆諦に信ぜよ
有情の信解に上中下あり、世尊彼證修の法を說きたまふ
六趣に輪廻する衆を哀愍して、隨順し饒益するが故に開演したまふ

【供次第法中法門眞言行學處品】此卷以下は此經の供養にして、金剛頂要略念誦經と同本異譯、本品は本經の序文。
【一】序分。中初二頌は歸敬勸信序。
【我】文殊なり。
【二】精勤修行序
【悉地の諸の等】初の歸敬三寶は說主の自敬にして、今段は行者の諸信三寶を明す。
【方廣乘】大日經のこと。
【有情の信解に等】即ち六趣の衆生なり。

【道場】曼荼羅、教本とは大日經なり。
【勝三昧耶】傳法灌頂なり。

當に恭敬して決定の意を以てすべし、亦勤誠深信の心を起すべし
若し最勝の方廣乘に於て、妙眞言の調伏の行を知り
善逝子の修習する所の、無上持明の別律儀に隨ひ
具緣の衆の支分を解了し、傳教の印可等を受くることを得たる
是の如きの師を見ては恭敬し禮して、利他の爲の故に一心に住せよ
瞻仰すること猶世の導師の如く、亦善友及び所親の如くせよ
慇懃殊勝の意を發起して、供養し給侍して所作に隨ひ
善く師の意に順じて歡喜せしめよ、慈悲攝受して相對はん時には
稽首して勝れたる善逝の行を請へ、願くば尊應の如く我を教授したまへ
彼師自在に、而も大悲藏等の妙圓壇を建立し
法に依りて曼荼羅に召入し、器に隨つて三昧耶を授與せよ
道場と教本と眞言印と、親く尊の所に於て口に傳授せよ
勝三昧耶及び護を獲て、爾して乃ち應當に說の如く行ずべし
然も此契經の說く所は、正眞言の平等の行を攝す
劣慧の弟子を哀愍するが故に、漸次の儀式を分別す
勝利に造れる天中の天、正覺の心より生ずる所の子に於て
下世天の身語印に至るまで、此眞言の最上乘に入る

諸の密行に導く軌範の者をば、皆當に敬ひ重んじて、輕んじ毀らざるべし
能く諸の世間を饒益するを以て、是故に捨離の心を生ずること勿れ
常に應に無間に而も彼等の、廣大の諸の功德を繫念すべし
其力分相應の事に隨つて、悉く皆承奉して而も供養せよ
佛と聲聞衆と及び緣覺との、彼教門の苦を盡すの道を說くと
學處を授けたる師と同梵行とに、一切毀慢する心を懷くこと勿れ
善く時宜の當に作すべき所を觀じて、和敬と相應して而も給侍せよ
愚童の心行の法を造らざれ、諸尊に於て嫌恨を起さざれ
世の導師の契經に說きたまふが如く、能く大利を損ずるは瞋に過ぎたるは莫し
一念の因緣、悉く、俱胝曠劫に修する所の善を焚滅す
是故に慇懃に常に、此義利無きの根本を捨離せよ
淨菩提心の如意寶は、世と出世との勝希願を滿す
疑を除けば究竟じて三昧を獲、自利利他是に因りて生ず
故に應に守護せんこと身命より倍すべし、觀ずれば廣大の功德藏を具す
若し身口意に衆生を嬈すことは、下少分に至るまで皆遠離せよ
異の方便の濟ふ所多きをば除く、内に悲心に住して而も瞋を現ぜず
恩德に背く有情の類に於て、常に忍辱を行じて過を觀ぜざれ

【軌範】阿闍梨。
【和敬】身口意戒見利の六和敬。
【淨菩提心の如意寶】即ち眞言のこと。

又常に大慈悲と、及び喜捨無量の心とを具足して
力の能くする所に隨つて法食を施し、慈の利行を以て群生を化せよ
或は大利と相應する心に由りて、時を俟つが爲の故に而も棄捨せよ
若し勢力の廣く饒益すること無くば、法に住して但菩提心を觀ぜよ
佛此中に萬行を具し、清白醇淨の法を滿足すと說きたまふ
布施等の諸の度門を以て、衆生を攝受して大乘に於てす
受持と讀誦と等と、及與思惟と正修習とに住せしめよ
智者は六情の根を制止して、常に當に意を寂めて等引を修すべし
事業を毀壞するは、諸の酒に由る、一切の不善法の根なり
毒と火と刀と霜雹と等の如し、故に當に遠く離るべし、親しみ近づくこと勿れ
又佛我慢を增すと說きたまふに由つて、應に高妙の床に坐臥すべからず
要を取つて之を言はば、其愚者は悉く自損損他の事を捨てよ
我正三昧耶の道に依りて、今已に次第に略して宣說す
佛の說きたまふ修多羅を顯開して、廣く知解して決定を生ぜしむ
此に依りて正しく平等戒に住して、復當に毀犯の因を離るべし
謂く惡心を習ひ及び懈惰し、妄念し恐怖し談話する等なり
妙眞言門の覺心者は、是の如く正しく三昧耶に住して

【補峯】大山の裏の峰を云ふ。【半巖】石壁の中に穴ありて居るべし。【龕】室龕土龕石龕の別あり、窟に似たり。【窟】石室なり。【芰】菱角。【荷】蓮花葉。【淨川】常に流れて水絕えざるなり。【練若】菩提道場と無稱草處と無喧靜處との三あり。【蓋纏】慳貪と瞋と惛沈と睡眠と掉擧と散亂と疑なり

當に障蓋をして漸く消え盡さしむべし、諸の福德增益するを以ての故に
此生に於て悉地に入らんと欲せば、其所應に隨つて之を思念せよ
親り尊の所に於て明法を受けて、觀察し相應すれば成就を作す
當に自ら眞言行に安住せんことを說く所の、明の次第儀の如くすべし
先づ灌頂傳敎の尊を禮して、眞言に修する所の業を請白せよ
智者師の許可を蒙り已りて、地分の所宜の處に依れ
妙山と補峯と半巖との間、種種の龕窟と兩山の中と
一切の時に於て安隱を得べし、芰と荷と靑蓮との遍く嚴る池と
大河と淨川と洲岸との側と、遠く人物の憒閙を離るると
篠葉扶疎にして意を悅ばしむる樹あり、多く乳木と及び祥草と饒ならん
蚊虻と苦と寒と熱と、惡獸と毒蟲との衆の妨難有ること無く
或は諸の如來聖弟子の、嘗て往昔に於て遊居したまふ所
寺塔と練若と古仙の室と、當に自心意樂の處に依るべし
在家を捨離し諸務を絕して、勤めて五欲の諸蓋纏を轉ぜよ
一向に深く法味を樂み、其心を長養して悉地を求めよ
又常に堪忍の慧を具足して、能く飢渴の諸の疲苦を安ぜよ
淨命の善伴或は伴無くば、常に妙法經卷と俱にせよ

若は諸佛と菩薩との行に順じて、正眞言に於て堅く信解し
淨慧力を具して能く堪忍し、精進にして諸の世間を求めず
常に樂つて堅固にて怯弱無し、自他の現法に成就を作し
餘の天の無畏依に隨はず、此を具するを名けて良き助伴と爲す

増益守護清淨行品第二

彼成就の處所を作り已りて、毎日に先づ念慧に住せよ
法に依りて寢息して初めて起くる時に、諸の無盡の障を爲す者を除け
是夜に放逸より生ずる所の罪を、慇懃に還つて淨く皆悔除せよ
根を寂にし悲を具し利益の心を以て、無盡の衆生界を度せんと誓へ
法の如く澡浴し或は浴せずとも、應に身口意をして淸淨ならしむべし
次に齋室空靜の處に於て、妙花等を散じて以て莊嚴せよ
隨つて形像と勝妙典とを置き、誠心に十方の佛を思念せよ
心目に現觀して諦に明了にせよ、當に本尊の住す所の方に依りて
誠を至し恭敬して一心に住し、五輪を地に投じて而も禮を作すべし
（一）十方の正等覺の、三世一切に三身を具したまへるを歸命し

【増益守護清淨行品】九方便、入佛三昧耶、法界生、金剛薩埵、金剛甲冑、字觀、無堪忍大護の印明を明す。以下三品は本經の正宗分。

【一】以下眞言十五門あり、中初を

胎藏の九方便といふ、第一に作禮の方便眞言門。

【作禮方便の眞言】普賢三昧耶の印。

【二】次に出罪方便眞言門。

【出罪方便眞言】大慧刀の印なり。

【三】第三に歸依方便眞言門。

【歸依方便の眞言】金剛合掌の印なり

一切の大乘法を歸命し、不退の菩提衆を歸命し
諸明眞實の言を歸命し、一切の諸の密印を歸命して
身口意の清淨の業を以て、慇懃に無量に恭敬し禮したてまつる

作禮方便の眞言に曰はく、

唵一　南麼薩婆怛他引蘖多二　迦引耶嚩引吃質合多三　播娜鑁無范反　娜雜迦嚕弭四

此作禮の眞實の言に由りて、即ち能く遍く十方の佛を禮したてまつる。

(二)右の膝を地に著け爪掌を合せて、思惟して先の罪業を悔ゆることを說け

我無明に由りて積集する所、身口意業に衆罪を造れり
貪欲と恚と癡と心を覆ふが故に、佛と正法と賢聖僧と
父母と二師と善知識と、以及無量の衆生との所に於て
無始生死流轉の中に、具に造れる極重の無盡の罪を
親り十方現在の佛に對し奉りて、悉く皆懺悔して復作らじ

出罪方便の眞言に曰はく、

唵一　薩婆播波薩怖合吒二　娜訶曩伐折囉合引二　也三　莎訶

(三)十方三世の佛の、三種の常身と正法の藏と
勝願菩提の大心衆とを南無したてまつる、我今皆悉く正しく歸依せん

歸依方便の眞言に曰はく、

【四】第四に施身方便眞言門。

【施身方便の眞言】羯磨杵の印なり。

【五】第五發菩提心方便眞言門。

【發菩提心方便の眞言】法界定印なり。これ生佛不二の三昧耶を表す。

【六】第六隨喜方便眞言門。

唵一 薩婆勃駄菩提薩怛鑁二合引二 設囉敬 蘗車弭三 代折囉二合達摩四 頡唎二合五

(四)我此身を淨めて諸垢を離れたると、及與三世の身口意との

大海と刹塵との數に過ぎたるを、一切の諸の如來に奉獻したてまつる

施身方便の眞言に曰はく、

唵一 薩婆怛他引 蘗多二 布闍弥囉二合 鉢反 無湯 嚩多二合 曩夜 怛忙合 難三 涅哩夜二合 哆夜弭四 薩婆怛他引 蘗多室栖二合地底瑟咤二合 勃哩反 摩五 薩婆怛他引 蘗多 若難 謎阿引 味設覩六

(五)淨菩提心の勝願の寶を、我今起發して群生を濟ふ

生苦等の集に纒逼せられ、及與無知に害せらるる身を救攝し

歸依して解脱せしむ、常に當に諸の含識を利益すべし

發菩提心方便の眞言に曰はく、

唵一 菩提質多二 母多播引二合 娜夜弭三

是中の增伽の句に言はく、「菩提心は一切の物を離れたり、謂く、蘊と界と處と能執と所執とを捨てたるが故に、法は我有ること無し、自心平等にして本來不生なることと大空の自性の如し。佛世尊及び諸の菩薩の菩提心を發し、乃し菩提道場に至りたまへるが如く、我も亦是の如く菩提心を發す」と。此增伽の句は眞言に同きなり。亦梵本を尋すべし。

(六)十方無量の世界の中の、諸の正遍知の大灋衆の

種種の善巧方便力と、及び諸の佛子の群生の爲に

【隨喜方便の眞言】金剛合掌の印なり
【七】第七勸請方便眞言門。
【勸請方便の眞言】亦金剛合掌の印、即ち如意寶珠の印なり。
【八】第八奉請法身方便眞言門。
【奉請法身方便の眞言】金剛合掌の印なり、一切衆生をして法界身に安住せしめんと奉請するなり。
【九】第九迴向方便眞言門、
【迴向方便の眞言】印は前に同じ、自他平等に迴向する意に。

諸の有ゆる修する所の福業等とを、我今一切盡く隨喜す
隨喜方便の眞言に曰はく、
唵一薩婆怛他引蘗多二本嗜反去尼也若嚢三努慕捺那布闍迷伽參暮捺囉四二合薩叵二合囉拏三麼曳五件六

(七)我今諸の如來と、菩提大心の救世者とを勸請す
唯願くば普く十方界に於て、恆に大雲を以て法雨を降したまへ
勸請方便の眞言に曰はく、
唵一薩婆怛他引蘗多二引睇灑儜布闍迷伽娑慕捺囉二合三薩叵二合囉儜三麼曳四件五

(八)願くは凡夫所住の處をして、速に衆苦の集むる所の身を捨てしめ
當に無垢處に至ることを得て、淸淨の法界身に安住すべし
奉請法身方便の眞言に曰はく、
唵一薩婆怛他引蘗多二捺睇灑夜弭三薩婆薩怛嚩二合係多引嘌他去二耶四達麼駄覩薩嚕他以反二合嗾嘌婆合上二靺覩五

(九)修する所の一切の衆の善業、一切の衆生を利益せんが故に
我今盡く皆正しく迴向して、生死の苦を除いて菩提に至らん
迴向方便の眞言に曰はく、
唵一薩婆怛他引蘗多二涅哩也二合怛嚢布闍迷伽參慕捺囉三二合薩叵二合囉儜三麼曳四件五

【一〇】第十入佛三昧耶眞言門。

【入佛三昧耶】以下五箇の印明は自身を守護するなり行者此印の加持に由て佛の三昧耶即ち眞淨の菩提心に入住することを得る故に入佛三昧耶といふ、此三昧耶を持せざれば一切眞言の法事を作すことを得ざるなり

【三法道界】三法とは印と眞言と意密とをいふ。道界とは果、故に三法の果なり。

【一一】第十一法界生眞言門、前に聖

(一〇)復餘す所の諸の福事の、讀誦と經行と宴坐と等を造すことは
身心をして遍く清淨ならしめんが爲なり、哀愍して自他を救攝せよ
心性は是の如く諸の垢を離る、身所應に隨つて以て安坐せよ
次に復三昧耶印を結ぶべし、謂ゆる三業の道を淨除するなり
應に知るべし密印の相は、諸の正遍知の說なり
當に定慧の手を合せて、二空輪を並べ建つべし
遍く諸の支分に觸れて、眞實の語を誦持せよ

入佛三昧耶の明に曰はく、

南麼薩婆怛他引蘗帝驃一微濕嚩二合目契喋二唵阿三迷三呾哩二合三迷四三麼曳五平莎訶六

纔に此密印を結べば、能く如來の地を淨む
地波羅蜜滿じて、三法道界を成ず
餘す所の諸の印等は、次第に經に說くが如し
眞言者當に知るべし、所作成就することを得

(一一)次に法界生の、密慧の標幟を結べ
身口意を淨むるが故に、遍く其身に轉ぜよ
般若と三昧との手、俱に金剛拳と作して
二空を其掌に在き、風輪を指正しく直くせよ

胎藏に託する者胎藏圓滿して此法界生の加持に由りて佛家に生在す。故に法界生といふ。

【一二】第十二金剛薩埵眞言門。既に佛家に生在す、次に此加持に由りて佛家の事業滿足するなり。

是の如きを法界、清淨の秘印と名く
法界生の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃一達摩馱睹二薩嚩二合婆嚩句痕三
法界の自性の如く、而も自身を觀ぜよ
或は眞實の言を以て、三たび轉じて而も宣說せよ
當に法體に住して、無垢なること虛空の如しと見るべし
（一二）眞言印の威力、行人を加持するが故に
彼をして堅固ならしめんが爲に、自ら金剛の身なりと觀ぜよ
金剛智の印を結べ、止觀の手を相背けて
地と水と火と風との輪、左右に互に相持せよ
二空各旋轉して、慧の掌の中に合す
是を名けて法輪と爲す、最勝吉祥の印なり
是人當に久しからずして、救世者に同ずべし
眞言印の威力、成就者當に見るべし
常に寶輪を轉ずるが如く、而も大法輪を轉ぜよ
金剛薩埵の眞言に曰はく、
南麼三曼多伐折羅二合赧一伐折羅二合引二咀麼二合句痕

此眞言を誦し已りて、當に等引に住して
諸に我此身は、卽ち是れ執金剛なりと觀ずべし
無量の天魔等、諸の之を見ること有るもの
金剛薩埵の如くす、疑惑の心を生ずること勿れ
(一三)次に眞言印を以て、而も金剛甲を擐る
當に所被の服、體に遍くして焔光を生ずと
是を用ひて身を嚴るが故に、諸の魔障を爲す者
及び餘の惡心の類、之を觀て咸く四に散ず
是中の密印の相は、先づ三補吒に作して
止觀の二風輪、火輪の上に糺ひて持す
二空自ら相並べて、而も掌の中に在け
彼眞言を誦し已りて、當に無垢の字を觀ずべし
金剛甲冑の眞言に曰はく、
南麼三曼多伐折囉二合赧一唵二伐折囉二合迦嚩遮三吽
(一四)囉字の色は鮮白なり、空點を以て之を嚴れ
彼髻の明珠の如し、之を頂の上に置け
設ひ百劫の中に於て、積れる所の衆の罪垢も

【一三】第十三金剛甲冑眞言門。

【三補吒】虛心合掌なり。

【金剛甲冑】金剛薩埵の身を莊嚴せんが爲に金剛甲冑を說く、又無垢字とは囕字なり、金剛甲冑を被て光猛炎の如くなるを見て一切の作障者皆近迫すること能は

是に由りて悉く除滅して、福慧皆圓滿す
彼眞言に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃嚂
眞言は法界に同し、無量の衆罪を除く
久しからずして當に成就して、不退地に住すべし
一切の觸穢の處に、當に此字門を加すべし
赤色にして威光を具せり、焰鬘遍く圍遶せり
(一五)次に魔を降伏して、諸の大障を制せんが爲の故に
當に大護者、無能堪忍の明を念ずべし
無堪忍大護の明に曰はく、
南麼薩婆怛他引蘖帝弊一薩婆佩也微蘖帝弊二微濕嚩合二目契弊薩婆他三引唅欠四囉吃灑合二
摩訶引沫禮五薩婆怛他引蘖多奔抳也合二涅社帝六吽吽七怛囉合引二吒怛囉吒八同上阿鉢囉合二底
訶諦九娑訶十
纔に憶念するに由るが故に、諸の毘那也迦
惡形の羅刹等、彼一切馳散す

ざるなり、又金剛冑を被るを以て六道に輪轉し生を出で死に入れども、一切の煩惱業苦の傷ること能はざる所なり。【一四】第十四嚂字眞言門。【一五】第十五無堪忍大護眞言門。諸の魔眷等此眞言を持誦する人を見ては眼を開いて見んとするも見る能はざる故に無堪忍といふなり。【吽吽】此中の眞實語なり。重ねて云ふ意は、一は外障を摧き、二に內障を摧く、又外障は煩惱障、內障は所知障なり。

【供養儀式品】布字、四字觀、道場觀、虛空藏轉明妃、大日、釋迦、文殊、不動、次に召請、入佛三昧耶、閼伽如來座、不動辟除金剛薩埵、降魔、大界、不動辦供、閼伽、五供養、運心供養、阿利沙偈を明す。

供養儀式品第三

是の如く正業をもて其身を淨め、定に住して本眞言の主を觀ぜよ
眞言と印とを以て而も召請せよ、先當に三昧耶を示現すべし
眞言と相應して障者を除き、兼ねて不動の慧刀の印を以てし
稽首して閼伽水を獻奉し、行者復眞言の座を獻れ
次に應に花香等を供養すべし、去垢するに亦無動尊を以てす
辟除と作淨とも皆是の如し、加持するに本眞言王を以てし
或は諸佛勝生の子、無量無數の衆圍遶せりと觀ぜよ

右は攝頌竟りぬ。下に當に次第に分別して說くべし。

現前に囉字を觀ぜよ、點を具して廣く嚴飾せり
謂く淨光焰鬘ありて、赫くこと朝日の暉の如し
聲の眞實の義を念ずれば、能く一切の障を除いて
三毒の垢を解脫す、諸法も亦復然なり
先づ自ら心地を淨め、復道場の地を淨めて
悉く衆の過患を除け、其相虛空の如し

【一】以下風水金の三輪器界觀を明す、下位とは世界を成ずる風輪なり。今第一に世界成就門。

【二】次に第二莊嚴道場門。

金剛の所持の如く、此地も亦是の如し
(一)最初に下位に於て、彼風輪を思惟せよ
訶字の安住する所なり、黑光焰流布せり
彼眞言に曰はく、
南麼三曼多勃駄喃唅
次の上に水輪を安け、其色猶し雪乳のごとし
嚩字の安住する所、頗胝月電の光なり
彼眞言に曰はく、
南麼三曼多勃駄喃鍐
復水輪の上に於て、金剛輪を觀作し
想うて本初の字を置け、四方にして遍く黃色なり
彼眞言に曰はく、
南麼三曼多勃駄喃阿
(二)是輪は金剛の如く、大因陀羅と名く
光焰淨金色にして、普く皆覆く流出す
彼中に於て導師、諸佛子を思惟せよ
水中に白蓮を觀ぜよ、妙色にして金剛の莖あり

【其上に復等】以下道場の莊嚴を明す。

【我功德力と等】自他不共の三力を明す。

【虛空藏轉明妃曰】虛空藏とは自心淨

八葉にして鬚蘂を具せり、衆寶自ら莊嚴して
常に無量光を出す、百千の衆の蓮遶れり
其上に復、大覺師子座を觀想せよ
寶玉を以て校飾して、大宮殿の中に在り
寶樹皆行列して、遍く諸の幢と蓋と有り
珠鬘等交絡して、妙なる寶の衣を垂れ懸けたり
周く香華雲と、及與衆の寶雲とを布け
普く雜華等を雨らして、繽紛として以て地を嚴れり
韻に諧ひ愛すべき所の聲、而も諸の音樂を奏す
宮中に淨妙の、賢瓶と閼伽とを想へ
寶樹王開敷して、照すに摩尼燈を以てす
三昧と總持との地に、自在の婇女あり
佛波羅蜜等と、菩提妙覺との華あり
方便もて衆伎を作し、歌は妙法音を詠ふ
我功德力と、如來の加持力と
及以法界力とを以て、普く供養して而も住す
虛空藏轉明妃に曰はく、

南麼薩婆怛他引蘖帝驃一　微濕縛二合目契弊二　薩婆他三　欠四　嗢蘖帝薩叵二合囉係門五　伽伽娜劍六　莎訶七は法なり。應に多く誦すべし。

此に由りて一切を持するに、眞實にして異り有ること無し

金剛合掌を作せ、是れ則ち加持の印なり

一切の法は不生なり、自性本寂なるが故に

此眞實を想念して、阿字を其中に置け

(三)次に當に阿字を轉じて、大日牟尼と成すべし

盡ること無き刹塵の衆、普く圓光の內に現る

千界を增數と爲して、光焰の輪を流出す

普く衆生界に至つて、性に隨つて開悟せしむ

身と語と一切に遍ず、佛心も亦復然なり

閻浮淨金の色なり、世間に應ずるが爲の故なり

加趺して蓮の上に坐し、正受にして諸の毒を離る

身に綃縠の衣を被て、自然の髮髻の冠あり

(四)若し釋迦牟尼ならば、彼中に婆字を想へ

復是の如き字を轉じて、而も能仁尊と成せ

勤勇は袈裟衣にして、四八の大人相あり

菩提心を云ふ。即ち如意寶珠の名なり。轉とは能生の義。即ち能く此藏を生じ能く一切の佛事を生ずるなり。

【三】第三成畫大日門。

【千界】三千世界なり。千界を增數となして等は大千を一數として乃至不可說不可說の光焰をいふ。

【跏趺して蓮の上に坐す】左の足を先づ右の胜の上に着け、右の足を左の胜の上に着くるを蓮花坐といふ。又右の足を左の胜の上に着くるを吉祥坐といふ。

【四】第四に成畫釋迦門。

【四八の大人相】三十二相のこと。

【本體】所放化身即ち大日尊なり。

【五】第五に成畫文殊門。

【中】八葉華臺なり。

【無我字】梵の字なり、文殊の本體は即ち空なり、上點は是れ空門なり、謂ゆる大空なり、十八空を越ゆるを大空といふ、

釋迦種子心に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃婆
字門轉じて佛と成りて、亦諸々の衆生を利すること
猶し大日尊の如し、瑜伽者觀察せよ
一身と二身と、乃至無量の身と
同じく本體に入り、流出すること亦是の如し
佛の右の蓮の上に於て、當に本所尊を觀ずべし
左に執金剛と、勤勇の諸々の眷屬とを置く
前と後との華臺の中に、廣大の菩薩衆あり
一生補處等の、衆生を饒益する者なり
右邊の華座の下は、眞言者の居る所なり
(五)若し妙吉祥を持せば、中に無我字を置け
是字轉じて身と成る、前に觀ずる所の如し
文殊の種子心に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃
若は觀世自在、或は金剛薩埵
慈氏と及び普賢と、地藏と除蓋障と

又諸佛甚深智門の故に佛部中の攝なることも得、蓮華部中に攝するを得、是故に佛の次列なり。

佛眼と幷に白處と、多利と毘倶知と
忙弁と商羯羅と、金輪と馬頭と
持明の男と女との使と、忿怒の諸の奉教と
共樂欲する所に隨つて、前の法に依りて而も轉ぜよ
心をして喜ばしめんが爲の故に、外の香と華と
燈明と閼伽水とを奉獻せよ、皆本教に說くが如し
不動を以て去垢し、辟除して光顯ならしめよ
本法を以て自ら相加し、及び我身を護持し
諸の方界等を結するに、或は降三世を以てす
召請すること本教に、用ふる所の印と眞言との如し
及び此普通印と、眞言王と相應せよ

聖者不動尊の眞言に曰はく、
南麼三曼多伐折羅二合赧一戰拏摩訶路灑停二薩破二合吒也三吽怛羅二合迦四悍引曼引。當に三遍を誦すべし。

當に定と慧との手を以て、皆金剛拳を作して
正しく直く火風を舒べて、虛空は地水を持せよ
三昧の手を鞘と爲し、般若を以て刀と爲して
慧刀を入住出して、皆三昧の鞘に在け

是れ則ち無動尊の、密印の威儀なり
定の手を其心に住して、慧の手を普く旋轉す
應に知るべし觸るる所の物を、卽ち名けて去垢と爲す
此を以て而も左に旋す、是に因つて辟除と成す
若し方隅界を結せば、皆隨つて右に轉ぜしめよ
餘す所の衆の事業の、惡を滅し諸の障を淨むること
亦當に是の如く作すべし、類に隨つて而も相應せよ
次に眞言印を以て、而も衆聖を請召す
諸佛菩薩の說なり、本誓に依りて來りたまふ

召請方便の眞言に曰はく、

南麽三曼多勃馱喃 一 阿 呼去 薩婆怛羅 引二合 鉢囉 二合 底訶諦 二 怛他 引 蘖黨矩奢 三 菩提浙哩耶 二合 鉢曬布囉迦 四 莎訶 應に七遍を誦すべし。

歸命合掌を以て、固く金剛縛を結んで
當に智慧の手をして、直く彼風輪を舒べ
俛せて其上節を屈すべし、故に號けて鉤印と爲す
諸佛救世者、茲を以て一切の
十地に安住する等の、大力の諸の菩薩と

【諸明】本尊のこと。

【本眞言と印】不動の印と眞言となり。

及び餘の難調伏の、不善心の衆生とを召きたまふ
次に三昧耶を奉るには、具に眞言と印とを以てす
印相は前に說く、諸の三昧耶の敎の如し
三昧耶の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃一阿三迷二怛嚟三迷三三麼曳四莎訶五 應に三遍を誦すべし。
是の如きの方便を以て、正しく三昧耶を示せば
卽ち能く普く、一切の衆生類を增益す
當に悉地を成ずることを得て、速に無上の願を滿すべし
本眞言主、諸明をして歡喜せしむるが故に
獻る所の閼伽水は、先づ已に具に嚴かに備へよ
本眞言と印とを用て、如法に以て加持して
諸の善逝者に奉る、用て無垢の身を浴せよ
次に當に一切の、佛口所生の子を淨むべし
閼伽の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃一伽伽娜三摩引三摩二莎訶 當に二十五遍を誦すべし。不動尊の印を以て之を示す。
次に敷く所の座を奉れ、密印と眞言とを具せり
蓮華臺を結び作して、遍く一切處に置け

【阿】是れ障、本有在纏の故に、傍の二點は除遣なり、即ち是れ除蓋障の義なり。

【鑁】自性清淨心の故に金剛薩埵の種子となる。

覺者の安坐する所なり、最勝の菩提を證したまふ
是の如き處を得んが爲の故に、持して以て奉獻す

如來座の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃阿急呼引聲

其中の密印の相は、定と慧との手相合せて
而も普く之を舒べ散ず、猶し鈴と鐸との形の如し
二空と地輪と、聚め合せて以て臺と爲し
水輪は稍相遠けよ、是れ即ち蓮花の印なり
復次に當に、自身より生ずる所の障を辟除するには
大慧刀の印と、聖不動の眞言とを以てすべし
當に見るべし彼に同じく、最勝の金剛の焰ありて
一切の障を焚燒して、盡く餘有ること無からしむと
智者當に轉じて、金剛薩埵の身と作るべし
眞言と印と相應して、遍く諸の支分に布せよ

金剛種子心に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃鑁

此眞實の義を念ずれば、諸法は言說を離る

【半金剛の印】右の手暇なき時半に作るも可。

印等を具するを以ての故に、卽ち執金剛に同じ
當に知るべし彼印相は、先づ三補吒を以て
火輪を中鋒と爲して、端銳りて自ら相合す
風輪を以て鉤と爲せ、舒べ屈して其傍らに置け
水輪は互に相交へて、而も掌の內に在け
金剛薩埵の眞言に曰はく、
南麼三曼多伐折囉赧二合一　戰拏摩訶引　路灑拏平二　吽
或は三昧の手を用て、半金剛の印を作し
或は餘の契經に、說く所の軌儀を以てせよ
次に當に身に周遍して、金剛の鎧を被服すべし
身と語との密印は、前に已に法に依りて說く
佉字と及び點とを以て、而も頂上に置いて
此眞言を思惟せよ、諸法は虛空の如しと
彼眞言に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃欠
應に此字門に住して、然る後に金剛薩埵の身と作るべし
次に應に一心に、諸魔を摧伏する印を作すべし

智者應に普く轉じて、眞語と共に相應すべし
能く極めて猛利の、諸の惡心有る者を除いて
當に此地に遍じて、金剛の熾なる焔光ありと見るべし
降伏魔の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃駄喃一 摩訶引沫羅嚩哆二 捺奢嚩路嗢婆合吠三平 摩訶引味怛囉也合三 毘庾合二 嗢蘖合二 底四 莎訶五
當に智慧の手を以て、而も金剛拳を作し
正しく直く風輪を舒べて、白毫の際に加ふべし
毘倶知の形の如し、是れ則ち彼の幖幟なり
此印を大印と名く、之を念ずれば衆魔を除く
纔に是法を結ぶが故に、無量の天魔の軍
及び餘の障を爲す者、必定して皆退き散ず
次に難堪忍の、密印と及び眞言とを用て
而も用て周界を結すれば、威猛にして能く覩るもの無し
無能堪忍の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃駄喃一 薩婆怛他引蘖多引弩瓌帝 二 滿駄也徙嚩引摩訶三摩耶涅上闍上帝四 娑麼合二囉嬭五
阿鉢囉合二底訶諦六 駄迦駄迦七 拶囉拶囉八 滿駄滿駄九 捺奢儞猶十 薩婆怛他引蘖多引弩瓌帝

十一鉢囉二合嚩囉達摩馱微若曳十二薄伽嚩底十三微矩囇微矩麗十四麗魯補囇微矩麗十五莎訶十六當に三遍を誦すべし。

或は第二の略說を以てす。眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一麗魯補囇微矩麗二莎訶當に七遍を誦すべし。

先づ三補吒を以て、風輪を掌に在き
二空と及び地輪と、內に屈すること猶し鉤の如し
火輪を合して峯と爲し、其水輪を開き散ず
旋轉して十方を指す、是を結大界と名く
用て十方の國を持して、能く悉く堅住せしむ
是故に三世の事、悉く能く普く之を護る
或は不動尊を以て、一切の事を成辦す
身處を護して淨からしめ、諸の方界等を結せよ

不動尊の種子心に曰はく、

南麼三曼多伐折囉二合赦悍

次に先づ恭敬し禮し、復閼伽を獻れ
經に說くが如く香等もて、法に依りて供養を修せよ
復聖不動を以て、此樂物を加持し

【本眞言】香等の眞言なり。
【自ら持する所の明】念誦者本尊の眞言なり。
【名を稱し】香等なり。
【塗香の眞言】今三世無障礙智の戒香を以て遍く法身に塗る故に、能く淨香を以て普く一切に熏ずるなり。
【華の眞言】心蓮華妄我の所纒となつて増長を得ず、今自ら心の實相を證知するが故に慈悲藏の中より八葉鬚蘂次第に開敷するなり。
【焚香の眞言】瑜伽行人恆に勝進して休息せず、故に三業悉く是の如く法界に遍じ、下一華もて佛を供養す

彼慧刀の印を結んで、普く皆遍く之に灑げ
是諸の香花等の、辦ずる所の供養の具
數密印を以て灑ぎ、復頻に眞言を誦せよ
各の本眞言と、及び自ら持する所の明を說け
應に是の如く作し已りて、名を稱して而も奉獻すべし
一切に先づ遍く、清淨の法界心を置け
謂ゆる囕字門なり、前に開示する所の如し

稱する所の名の中の塗香の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃駄喃一微輸上駄健杜引納婆合嚩二莎訶 當に三遍を誦すべし。
次に花の眞言を說いて曰はく、
南麼三曼多勃駄喃一摩訶引妹怛囉也二合 毘庾二合嗢蘖帝三 莎訶 當に三遍を誦すべし。
次に焚香の眞言を說いて曰はく、
南麼三曼多勃駄喃一達摩駄睹弩蘖帝二 莎訶 當に三遍を誦すべし。
次に然燈の眞言を說いて曰はく、
南麼三曼多勃駄喃一怛他引揭多引喇旨二合二 薩叵合囉儜嚩婆上娑娜三 伽伽猱陀哩耶四二合 莎訶 當に三遍を誦すべし。
次に諸食の眞言を說いて曰はく、

るに至るまで亦是の如く法界に遍ずるなり。是れ即ち燒香の義なり。【然燈の眞言】毘盧遮那大智の光明を以て無明の諸暗を照す、是れ燈の義なり。【諸食の眞言】甘露の門を開いて不老不死の無過上味を成ず。

南麼三曼多勃駄喃一阿囉囉迦囉囉二沫隣捺泥三摩訶引沫履四莎訶五 當に三遍を誦すべし。

及び餘の供養の具の、應に奉獻すべき所の者は
此法則に依隨して、淨むるに無動尊を以てせよ
當に定と慧との掌を合して、五輪互に相交ふべし
是れ則ち衆物を持する、普通供養の印なり
眞言具慧者、衆の聖尊を敬養し
復心の儀式を作すこと、淸淨にして極めて嚴麗なれ
獻る所皆充滿して、平等なること法界の如し
此方及び餘刹、普く諸趣の中に入り
諸佛菩薩の、福德に依りて而も生起する
幢と幡と諸の瓔と蓋と、廣大の妙樓閣と
及び天の寶樹王と、遍く有ゆる諸の資具
衆の香と花との雲等、際無きこと猶し虛空のごとし
各諸の供物を雨らし、供養して佛事を成じ
思惟して一切の、諸物と及び菩薩とに奉る
虛空藏の明、普通供養の印を以て
ただ轉じて加持を作せば、願ふ所皆成就す

【虚空藏の明の增加の句】虚空藏とは本不生の理、藏とは能出能藏なり、增加の句は能の義を顯す。

【心の供養】運心理供養なり。

【外の儀軌】事相の供養なり。

持虚空藏の明の增加の句に云はく、
我功德力と、及び法界力とに依りて
一切の時に獲易く、廣多にして復清淨なり
大供莊嚴の雲、一切如來と
及び諸の菩薩衆との、海會に依りて而も流出す
一切の諸佛と、菩薩との加持を以ての故に
法の如く修する所の事に、諸の功德を積集し
迴向して悉地を成ず、諸の衆生を利せんが爲に
以て是の如きの心を說いて、明行清淨なることを願へ
諸障消除することを得、功德自ら圓滿す
時に隨つて正行を修せよ、是れ則ち定れる期無し
若し諸の眞言の人、此生に悉地を求めば
先づ法に依りて持誦して、但心の供養を作せ
爲す所既に終り竟つて、次に一月を經て
具に外の儀軌を以て、而も眞言を受持せよ
又持金剛、殊勝の諷詠を以て
佛と菩薩とを供養して、當に速に成就することを得べし

【阿利沙】アールシャ（Arsa）聖主と譯す、即ち大日如來の功德を讃歎するなり。
【無等にして等】以下東方發心門を明す。
【虛空に等同等】以下南方修行門を明す。
【常に垢翳無き悲等】次に西方菩提門を明す。
【障を離れて等】次に北方涅槃門を明す。

執金剛の阿利沙の偈に曰はく、
無等にして動ずる所無く、平等にして堅固なる法なり
流轉の者を悲愍して、衆の苦患を攘ひ奪ふ
普く能く悉地の、一切の諸の功德を授けたまふ
垢を離れて遷變せざる、無比勝願の法なり
虛空に等同なり、彼喩と爲すべからず
隙塵の千萬分も、尚其一に及ばず
恆に衆生界に於て、果を成就する願の中に
悉地に於て盡ること無し、故に譬喩を離れたり
常に垢翳無き悲は、精進に依りて生じ
願に隨つて悉地を成ず、法爾にして能く蔽するもの無し
衆生の義利を作すこと、及ぶ所に普く周遍す
照明にして恆に斷えず、哀愍廣大の身なり
障を離れて罣礙無し、悲を行ずる行者なり
周く三世の中に流れて、施し與へて願を成就す
無量の量に於て、究竟の處に至らしむ
奇なる哉此妙法、善逝の到りたまふ所なり

【唯本誓を越えず等】次に中央方便門を明す。この五偈は大日如來の五轉即ち五智の功德を讃歎するなり。

唯本誓を越えず、我に無上の果を授けたまふ
若し斯願を施す者は、恆に殊勝の處に至る
廣く世間に及して、能く勝希願を滿す
一切の趣に染せず、三界に依る所無し
右此偈は即ち眞言に同じ、當に梵本を誦すべし。
是の如きの偈讃を誦持し已りて、至誠にして世の導師を歸命したてまつる
唯願くば衆聖、我に有情を慈み濟ふの悉地を授け與へたまへ
復次に他を利せんと欲するが爲の故に、佛化の雲も一切に遍ずと觀ぜよ
我修する所の福と佛の加持と、普賢の自體法界力ともて
蓮華臺に坐し十方に往いて、性欲に隨順して衆生を導かん
諸の如來の本誓願に依りて、一切の內外の障を淨め除き
出世の諸の資具を開き現して、其信解の如くに之を充滿せん
我功德の莊嚴する所と、及び淨法界の中より出生すると
如來の神力の加持とを以ての故に、衆生の諸の義務を成就し
諸佛の庫藏を備足し、無盡の寶を出すこと不思議ならん
三たび虛空藏の轉明を誦せよ、及び密印の相は前に說くが如し
此眞言乘の諸の學者、是故に當に諦信の心を生ずべし

一切の導師の宣說したまふ所なり、應に誹謗して疑悔を生ずべからず

持誦法則品第四

是の如く法を具して供養し已りて、盡ること無き衆生を利する心を起して
諸佛と聖天と等を稽首し、相應の座に住して三昧に入れ
四種の靜慮の軌儀もて、能く內心をして喜樂を生ぜしむ
眞實の義を以て加持するが故に、當に眞言もて等引を成ずることを得べし
(一)若し眞言の念誦を作さん時には、今當に次に彼方便を說くべし
智者先に開示する所の如く、現前に而も本所尊を觀ぜよ
其心月の圓明の中に於て、悉く皆眞言の字を照見し
卽ち意に次第に而も授持し、乃至心をして淨め垢無からしむべし
數と及び時分の相現ずると等は、經敎に依隨し已りて滿足せよ
有相の義利を志求すれば、眞言の悉地意に隨つて成ず
是を世間の具相の行と名く、(二)四支の禪門は復殊異なり
行者應に決定の意を生じ、先づ當に一緣にして本尊を觀ずべし
彼眞言と祕密印とを持して、自ら瑜伽の本尊の像と作り

【持誦法則品】念誦法則の區別にして、諸眞言、支分上、曼荼羅、二種灌頂、三種悉地、四種法を明す。

【四種の靜慮の軌儀】先づ本尊を觀じ、次に本尊の心中に圓明の月輪を現じ、次に其月輪の中に尊の眞言の字を現じ、次に次第に念誦す、これを四種といふ。靜慮とは定。

【一】第一有相念誦門。

【二】第二無相念誦門、自身の外に本尊を現ぜざるが故に無相といふ。四門とは前にいふ四種なり。

【三】次に第三變字成身門。

【四】次に第四本尊三昧隨息門。【心を以て心に證く】上の心は本尊の種子、下の心は行者の肉心なり。【種子】眞言を念誦するを以て果を得るが故に名く。

共色相威儀等の如くして、我身無二にして行亦同なり
本地と相應する身に住するに由りて、少福の者なりと雖も亦成就す
瑜伽の勝義品の中に說けり、（三）次に應に明の字門を轉變すべし
而も觀じて本尊の形と作るを以て、身祕の標幟を速見す
契經に略說するに二の相有り、正遍知の觀を最も先と爲す
次に菩薩と聖天との觀に及びては、妙吉祥尊を上首と爲す
亦彼乘の位に依りて轉ず、相應の印と及び眞言とを以てせよ
文殊の種子は謂ゆる滿字門なり、已に前の品の中に於て說く。
（四）本尊の三昧と相應する者は、心を以て心に置いて種子と爲せ
彼應に是の如く自ら觀察して、清淨の菩提心に安住すべし
當に知るべし聖者妙音尊は、身相猶し鬱金色の如し
頂に童眞の五髻の相を現ぜり、左には伐折羅に靑蓮に在き
智慧の手を以て施無畏とし、或は金剛輿願の印を作せ
文殊師利の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃駄喃一 係係具摩嚕迦二 微目吃底二合鉢他悉體二合多三 薩麼二合囉薩麼二合囉四 鉢囉二合底然五 莎訶六
定と慧との手を合せて虛心合掌にして、火輪交り結んで水輪を持し

二風を環のごとく屈して大空に加ふ、其相鉤の如くして密印を成ず
而も用て遍く自の支分に置け、爾して乃ち衆の事業を修行す
當に知るべし諸佛と菩薩と等の字を、轉ずる瑜伽も亦復然り
或は餘の經に說ける眞言と印と、是の如く之を用ふるも違背せざるなり
或は彼說の異の儀軌に依り、或は普通の三密門を以てす
若し能く解了して旋轉する者は、諸有の所作皆成就す

普通種子心に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃迦

契經の所說の迦字門は、一切諸法造作無し
當に是の如きの理の光明を以て、而も此聲の眞實の義を觀ずべし
眞陀摩尼寶王の印もてせよ、定と慧との五輪互に相交ふ
金剛合掌の標式なり、普く一切の菩薩の法に通ず

一切諸菩薩の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一薩婆他二微法底三微枳羅儜上四達摩馱睹涅闍多五參參訶六莎訶七

佉字は衆の色を含む、大空點を增加せり
前に宣說する所の如し、之を頂上に置け
當に虛空に等しきことを得べし、諸法を說くことも亦然り

【本初の字】阿字なり。點とは大空點なり。

【大空無垢の字】囕字なり。

【單子と句因】單子は種子、句因は二字以上なり。

【五】第五に意支念誦眞言門なり。

復其首の內に於て、本初の字を想念せよ
純白にして點もて嚴飾せり、最勝の百明の心なり
眼界は猶し明燈のごとし、大空無垢の字なり
本尊の位に住せば、正覺當に現前すべし
乃至諦に明了にして、應當に是の如く見るべし
又彼心處に、圓滿の淨月輪を觀ぜよ
阿字門を炳現して、遍く金剛の色を作せ
聲の眞實の義を說かば、諸法本より無生なり
中に於て正しく觀察すべし、皆此心より起る
聲字は花鬘の如し、輝焰自ら圍遶せり
其光普く明淨にして、能く無明の暗を破す
迦字を以て首と爲し、或は復餘の字門も
皆當に是法を修すべし、念ずるに聲の眞實を以てす
或は持する所の眞言、環のごとく列ねて圓明に在り
單字と句因と、息に隨つて而も出入せよ
(五)或は意支の法を修め、理に應じて等引の如くし
緣念して悉地を成ずるには、普く衆生を利するの心を以てす

【六】第六に念誦無定時門なり。

【七】第七に樂求現法成就門なり。

【上中下】次に佛菩薩、聲聞等。

方に迺ち持誦を作して、辦極せば然る後に已めよ
或は眞言の字を以て、心月の中に運布し
其深密の意に隨つて、聲の眞實を思念せよ
是の如く受持する者を、復一の方便と爲す
(六)諸の福聚を修すること有るもの、諸の善根を成就す
當に意支の法を習ふべし、定れる時分有ること無し
(七)若し現法の上中下の悉地を樂求せば
應に斯方便を以て、先づ心の受持を作すべし
正覺の諸の世尊の、說きたまふ所の法是の如し
或は香花等を奉りて、力に隨つて供養を修せよ

是中の先持誦の法に、略して二種有り。一には時に依るが故に、二には相に依るが故なり。時に謂く、期する所の數滿ち、及び定る時の日月を限る等なり。相は謂く、佛塔圖像より、光、焰、音聲等を出生するなり。當に知るべし、是は眞言行者の罪障淨除の相なり。彼經に說く所の如し。先づ作意し念誦し已りて、復持して一落叉に滿つ、此より第二月を經て、迺ち其支の方便を修せよ。然して後に其本願に隨つて成就の法を作せ。若し障有らば、先づ現相門に依りて心意を以て持誦して、然る後に第二の月に於て、其支を以て供養すべし。應に是の如く知るべし。

【八】第八に大日三密速得門。

【下體】腰の中ほど。

(八)復樂つて如來の、三密門を修習して
一月を經る者の爲に、次に彼方便を說く
行者、若し大毘盧遮那の
正覺の眞言と印とを持誦せば、當に是の如きの法に依るべし
大日如來の種子心に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃阿
阿字門は謂ゆる一切法本不生の故なり、已に前に說くが如し。
是中の身密印は、正覺の白毫の相なり
慧の手を金剛拳にして、而も眉間に在け
如來毫相の眞言に曰はく、
南麼三曼多勃馱喃 一 去聲 阿急呼 痕 若急呼
前の如くに阿字を轉じて、而も大日尊と成せ
法力に持せらるるが故に、自身と異ること無し
本尊の瑜伽に住して、加するに五支の字を以てす
下體と及び臍の上と、心と頂と眉間となり
三摩呬多に於て、運想して而も安立せよ
是法に依りて住するを以て、即ち牟尼尊に同じ

【第二品の中等】實は供養儀式品中の所所に散說す。

阿字は遍く金色なり、用て金剛輪と作して
下體を加持す、說いて瑜伽の座と名く
鑁字は素月の光の如くにして、霧聚の中に在り
自の臍の上を加持す、是を大悲の水と名く
囕字は初日の暉の如くにして、形赤にして三角に在り
本心の位を加持す、是を智火光と名く
唅字は劫災の焰の如くして、黑色にして風輪に在り
白毫の際を加持す、說いて自在力と名く
佉字と空點とは、一切の色を成ずと想ひ
加持して頂の上に在く、故に名けて大空と爲す
此五種の眞言心は第二品の中に已に說けり。又此五の偈は傳度者の頗る經意を以て足して文句をして周備せしむるなり。
五字を以て身を嚴れば、威德具に成就す
熾然たる大慧の炬、衆の罪業を滅除す
天魔軍衆等と、及び餘の障を爲す者
當に是の如きの人を見るべし、赫奕たること金剛に同うす
又首の中に於て、百光遍照王を置け
無垢眼を安立して、猶し燈明の顯照するが如し

【聲鬘】種子の字を中間に置きて箇の字もて之を圍むこと。周匝し圍繞せしむるをいふ。

【九】第九釋迦眞言成就門。

前の如く瑜伽に住して、加持すること亦是の如し
智者自體を觀ずること、如來の身と等同なり
心月の圓明の處に、聲鬘與に相應し
字字間斷すること無くして、猶し鈴と鐸とを韻ぶるが如し
正等覺の眞言、取に隨つて而も受持して
當に此方便を以て、速に悉地を成ずることを得べし

(九)復次に若し釋迦牟尼尊を觀念せば
用ふる所の明の字門を、我今次に宣說せん

釋迦の種子は謂ゆる婆字門なり、已に前の品の中に於て說けり。

是中の聲の實義は、謂ゆる諸の觀を離れたり
彼佛身の密印は、如來の鉢等を以てす
當に智慧の手を用て、三昧の掌に加ふべし
正受の儀式なり、而も臍輪に在け

釋迦牟尼佛の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃馱喃一 薩婆吃麗合二舍喋素捺那二 薩婆達摩嚩始多引 鉢囉合引二 鉢多三合二 伽伽娜三摩引三摩四 莎訶五

是の如く、或は餘の等正覺の密印と眞言とは、各の本經の用ふる所に依つて、亦當に

前の方便の如く、字門を以て觀じて、轉じて本尊の身と作し、瑜伽の法に住して種子を運布し、然る後に受くる所の眞言を持誦すべし。若し此如來の行に依る者は、當に大悲胎藏生曼荼羅王に於て、阿闍梨灌頂を得て、乃ち具足して修行すべし、但し持明灌頂を得る者の堪ふる所に非ざるなり。其四支の禪門の方便次第は、設ひ餘經の中に說く所の儀軌なりとも、虧き缺くる所有らば、若し此法を加へて之を修せば、諸過を離るることを得ん、本尊歡喜したまふを以ての故に、其威勢を增し功德隨つて生ず。又持誦すること畢已りて輙ち本法を用て之を護持せよ。餘經に說かざる者ありと雖も、亦當に此意を通用して、修行人をして、速に成就を得しむべし。

（一〇）復次に本尊の住したまふ所の、曼荼羅位の儀式
彼形色の如く壇も亦然なり、此瑜伽に依りて疾に成就す
當に知るべし悉地に三種有り、寂災と增益と降伏との心なり
事業を分別するに凡そ四分あり、其物類に隨つて當に用ふべき所なり
純素黃赤深玄の色なり、圓方三角蓮花の壇なり
面を北にするは勝方なり蓮坐に住す、惔怕の心もてせよ、寂災の事なり
面を東にするは初方なり吉祥の坐にせよ、悅樂の容は增益の事なり
面を西にするは後方なり賢坐に在り、喜怒與倶に攝召の事なり
面を南にするは下方なり蹲踞等にす、忿怒の像は降伏の事なり

【本法】入佛三昧耶法界生轉法輪等なり。

【一〇】第十秘密事業可知門なり。

【悉地に三種等】寂災とは三毒の煩惱等畢竟不生なるを謂ひ、增益とは煩惱は本不生卽ち佛果なりと悟りて佛果を得るをいふ。降伏とは一に佛果を得て後に煩惱起らざるが故に、二に煩惱不起なるに由り能く萬德を攝す、故にまた攝召

若は秘密の標幟と、性位形色及び威儀とを知れ
花香等を奉つることは所應に隨へ、皆當に是の如く廣く分別すべし
障を淨め福を增し圓滿する等、處を捨てて遠く遊び摧害する等なり
眞言の初に唵字を以てし、後に莎訶を加するは寂災の用なり
若し眞言の初に唵字を以てし、後に吽發を加するは召攝の用なり
初後に納麼あるは增益の用なり、初後に吽發あるは降伏の用なり
吽の字發の字は三處に通ず、其名號を增すことは中間に在り
是の如く眞言の相を分別して、智者當に悉く知解すべし

眞言事業品第五

(一)爾時、眞言行者、其所應に隨つて法の如く持誦し已りて、復當に前の事業の如く而も自ら加持して金剛薩埵の身と作り、佛、菩薩、衆の無量の功德を思惟し、無盡の衆生界に於て大悲心を興し、其所有の資具に隨つて而も供養を修せよ、供養し已りて又當に一心に合掌して、金剛の諷誦及び餘の微妙の言辭を以て、如來の眞實の功德を稱歎したてまつるべし。

(二)次に造る所の衆の善を持つて廻向し發願して、是の如きの言を作せ、大覺世尊の證知し解了し積集したまへる所の功德を以て、無上菩提に廻向したまふが如く、我も今亦復是

の義あり、四念誦によつて之を得るなり。
【後方】東の初方に對して西をいふ。
【下方】北の勝方に對し南をいふ。
【賢坐】蹲坐して雙の脚跟を身に着けて後分を地に至らしむるをいふ。
【蹲踞】後分地に至らず右の脚を以て左の脚を支へて地に至らず膝稍つけて前に向くるをいふ。
【標幟等】印なり性は本尊の自體、形色は本尊の外相威儀は所持の蓮等なり。
【三處】寂災と增益と降伏とをいふ
【眞言事業品】本經の流通分、念誦事業を明す。
【一】第一上求下化修求門。
【前の事業の如く等】不動尊の眞言印もて加持し、心中に鑁字を觀じて

金剛薩埵を成ずるなり。
【二】第二如佛我修廻向門。
【證知し解了し】内證の境界なり。
【如來の大住】本不生處なり。
【大悲願を與す】所悟の理を一切衆生に與へんと欲するを云ふ。
【三】第三奉送本尊門。

の如く所有の福聚を法界の衆生に與へ、之を共にして咸く生死の海を度つて遍知の道を成じ、自利利他の法皆滿足し、如來の大住に依りて而も住せしめん。獨り己が身の爲の故に菩提を求むるに非ざるなり。乃至生死に往返して、諸の衆生の同じく一切種智を得んを濟りしより以來、常に當に福德と智慧とを修し集めて餘業を造らざるべし。願くば我等第一安樂に到ることを得ん、求むる所の悉地、諸の障礙を離れて、一切を圓滿せんが故にと、復更に思惟せよ。我をして速に當に若は內若は外の種種の清淨の妙寶を具足して、而も自ら莊嚴し相續して、無間に普く皆流出せしむべし。是因緣を以ての故に、能く一切衆生の所有の希願を滿す。

有略して說くこと是の如し、若し廣く修せん者は、當に普賢行願及び餘の大乘修多羅に說く所の如くすべし。決定の意を以て而も之を稱述すべし、或は云へ、諸佛、菩薩の自ら證知して大悲願を與したまふ所の如く、我も亦是の如く願を發すなりと。

〔三〕次に當に閼伽を奉獻すべし、歸命合掌を作して之を頂の上に置いて、諸佛、菩薩の眞實の功德を思惟し、誠を至して禮を作し、而も偈を說いて言へ、

諸有の永く一切の過を離れ、無量の功德身を莊嚴し
一向に衆生を饒益することある者を、我今悉く皆歸命して禮したてまつる

次に當に衆聖に啓白して是偈を說いて言ふべし、

現前の諸の如來と、救世の諸の菩薩と

【各の當に所安に隨ふ】本不生より出で本不生に還るを云ふ。
【後に復哀を垂れて赴く】自ら本尊と成れば何れの時か佛の海會を離れんとなり。
【法界の本性】曉字を指す。
【三印】入佛三昧法界生、轉法輪なり。
【四】第四被甲護修如佛門。
【五】第五自住佛身眞言門。以下は道場を出て以後の事業を明す。

大乘の教を斷せずして、殊勝の位に到る者
唯願くば聖天衆、決定して我を證知したまへ
各の當に所安に隨つて、後に復哀を垂れて赴きたまふべしと

次に當に三昧耶の眞言と密印とを以て頂の上に於て、之を解いて而も是念を生ずべし、各々諸の有ゆる結護加持皆解脫せしむ、此方便を以ての故に、先に奉請する所の諸尊を、各々の所住に還したてまつる、無等の大誓の爲に留止する所にあらざるなりと。復法界の本性を用て自體を加持し、淨菩提心を思惟して而も金剛薩埵の身に住す。是中の明印は、第二品の中に已に說けり、若し念誦し竟らば此三印を以て身を持すべし、所行の眞言行門終り畢りぬれば法則皆悉く圓滿す。

(四)又當に前方便の如く法界の字を觀じて、以て頂相と爲し金剛甲冑を被服すべし。斯祕密の莊嚴に由るが故に、即ち金剛の如き自性を得、能く之を沮壞する者無し、諸そ其音聲を聞き、或は見、或は觸ること有らば、皆必定して阿耨多羅三藐三菩提に於て、一切の功德皆悉く成就す、大日世尊と等うして、異ること有ること無きなり。

(五)次に復增上心を起して殊勝の事業を修行し、淸淨の處に於て嚴るに香華を以てし、先づ自身をして觀世音菩薩と作さしめて、或は如來の自性に住して、前の方便に依りて眞言と密印とを以て加持し、然して後に法施の心を以て、大乘方廣經典を讀誦し、或は心を以て誦して、而も諸天神等を請じて之を聽受せしめよ。說く所の偈に言ふが如し。

【本性の加持】本尊の種子印等なり

【婆】諸漏なり、傍に二點あるは即ち阿にして諸漏を除遣するなり。無漏觀の故に自在なり。

金剛頂經に說く、觀世蓮華眼は
即ち一切の佛に同じ、無盡莊嚴の身なり
或は世の導師の、諸法に自在なる者を以て
隨つて一の名號を取つて、本性の加持を作せ
觀自在の種子心に曰はく、
南麽三曼多勃馱喃婆急呼
字門の眞實の義は、諸法に染著無し
音聲の流出する所なり、當に是の如きの觀を作すべし
此身中の密相は、謂ゆる蓮華の印なり
前の敷座を奉るが如し、我已に分別して說けり
次に觀自在の眞言を說いて曰はく、
南麽三曼多勃馱喃一薩縛怛他引蘖多縛路吉多二羯嚕拏麽也三囉囉囉吽若四短聲莎訶五

前の法界心の字を以て之を置いて頂に在らしめよ。又此眞言と密印とを用て、相加して力の堪ふる所に隨つて經法を讀誦せよ。或は曼茶羅等を造り、爲す所已に畢つて次に座より起つて、和敬の相を以て應に諸の人事を接すべし。又身輪を支持することを得んが爲の故に、次に乞食を行ず。或は檀越の請、或は僧中に得る所なり、當に魚肉葷菜、及び本尊諸佛を供養せるの餘乃至種種の殘宿の不淨なるを離るべし。諸酒と木果等との漿

【六】第六搏食奉獻門。搏食とは節量食なり。
【増減し】其心を動かすなり。
【法界心の字】嚂字なり。
【事業金剛】鑁字もて身を嚴にするなり。即ち金剛薩埵なり。
【七】第七誦十力明瑜伽門。
【八】第八修業無間得益門、

の以て人を醉すべきもの、皆飲み噉ふべからず。

（六）次に摶食を奉げて用て本尊に獻る。又隨喜の食法を作せ。若し故に餘あらば、更に少分を出せ、飢乏乞求を濟けんが爲の故なり。當に是心を生ずべし、我身器を任持して、安穩道を行ぜんが爲に、是段食を受く、車の轄に膏し、敗傷せずして所至に到ること有らしむるが如し。應に滋き味を以ての故に其心を增減し、及び悅澤嚴身の想を生ずべからず、然る後に法界心の字を觀じて、遍く諸食を淨め、事業金剛を以て自身を加持すべし、是中の種子は鑁字の眞言に說く所の如し。

（七）復施十力明八遍を誦して、方に乃ち之を食せよ、此明を說いて曰はく、

南麼薩嚩勃駄菩提薩埵喃一 唵麼蘭捺泥去帝孺忘栗寧二 莎訶三

是の如く先づ成就の本尊瑜伽に住して、飯食し訖已りて、餘す所の觸食は、成辦諸事の眞言心を以て、應に食ふべき所の者に供養す、當に不空威怒增加聖不動の眞言を用ふべし、當に一遍を誦すれば受者歡喜して、當に行人に隨つて而も之を護念すべし。彼眞言に曰はく、

南麼三曼多伐折囉二合赧一 怛囉二合怛輕 阿謨伽二 戰拏摩訶路灑儜上三 婆破二合吒野 吽四 怛囉二合麼野 怛囉二合麼野五 吽怛囉二合吒輕 悍曼六

（八）彼食し竟りて休息すること少時にして、復當に諸佛を禮拜し衆罪を懺悔すべし。淨心の爲の故に是の如く常の業を修せよ、乃至前に依つて經典を讀誦し、恆に是に依りて住せよ。

【明】本尊の種子の字なり、睡眠せんとする時出入の息に本尊の種子の字を和すれば睡眠も亦本尊の三昧なり、睡も覺も佛會を離れざるなり。【床の上に偃に臥すべからず】行者本尊の境より高かるべからざるを戒む、行者若し自ら本尊と成らば高下の別なきなり、【數と時】數は念誦の遍數、時は持誦の月、相現は煙火焰の三品悉地の相なり。【休息せず】睡眠

後日の分に於ても、亦復是の如し、初夜後夜には大乘を思惟して間絶を得ること無かれ、中夜の分に至りて、事業金剛を以て前の如く金剛の甲を被て、一切の諸佛と大菩薩と等を敬禮し、次に當に運心して如法に供養して、而も是念を作すべし、我一切衆生の爲に大事の因緣を志求するが故に、應當に是身を愛護して少時安み寢べし、睡眠の樂に貪著せんが爲には非ず、先づ當に身の威儀を正しくして、二足を重累ねて右脅にて、而も臥すべし、若し支體疲懈せば意に隨つて轉側するに咎無し。速に寤めしめんが爲に、常に當に意を係けて明に在くべし、又復應に床の上に偃に臥すべからず、次に餘の日に於て亦是の如く之を行ぜよ、持眞言者法則を虧かずして、無間に勤修するを以ての故に、眞言門に菩薩の行を修するの名號を得るなり、若し數と時と相現と等の、持誦の法の中に前の方便を作し、乃至具に勝業を修せんに、猶成就せずんば、應に自ら警悟して倍精進を加ふべし、下劣の想を生じて、而も是法は我堪ふる所に非ずと言ふことを得る勿れ。是の如く其志力を展して自ら利し他を利せよ、常に空しく過さざれ。行者勤誠にして、休息せざるを以ての故に、業障並に其心を照して、則ち威神の建立を蒙つて諸の障を離るることを得。是中に二事あり、應に捨離すべからず、謂く、諸佛と菩薩とを捨てざると、及び無盡の衆生を饒益する心となり。復に一切智の願に於て心傾動せざれば、此因緣を以て必定して隨類の悉地を成ずることを得るなり。

當に內法に依りて而も澡浴せよ、外淨の法に執著すべからず

せざるなり。

【九】第九澡浴摧障門。

【方等を護り】辟除結界なり。

【默然】三處あり食時、大小便時、洗浴時となり。

觸食等に於て疑悔を懷かば、是の如きは皆爲すべからざる所なり
若し是身を任持せんが爲の故に、時に隨つて盥沐して諸の垢を除け
河流等に於て法教の如くして、眞言と印と共に相應せよ
法界心を以て諸の水を淨め、隨つて不動と降三世とを用ふ
眞言と密印とを以て方等を護り、本尊の自性觀に住せよ
復當に三轉して淨土を持し、恆に一心を以て正しく思惟すべし
聖不動の眞言等を念じて、智者默然として應に澡浴すべし

淨法界心と、及び不動尊の種子と、刀印とは皆前に說くが如し。

降三世の種子心に曰はく、

南麼三曼多伐折囉合引二 赧酒

此中の訶字門は、聲と理と前の說の如し

少分の差別なることは、謂ゆる淨除の相なり

降伏三界尊の、身密の儀式は

當に事業を成ずる、五智金剛の印を用ふべし

次に降三世の眞言を說いて曰はく、

南麼三曼多伐折囉合引二 赧一 訶訶訶二 微薩麼合二曳平三 薩婆怛他引揭多微灑也三婆嚩四 怛囇合二路枳也合二 微若也五 𤙖若六急呼 渉訶七

【聖天衆】本尊海會。

【三等】自身の三密平等なり、限量となすは本尊に同じきを云ふ。

【一〇】第十出世間成就無相寂勝門。

【出世間品】第三成就悉地品第七なり。

是の如く澡浴し灑淨し已つて、三昧耶を具し支分を護る
盡ること無き聖天衆を思惟し、三たび水を掬り奉りて而も之を獻れ
身心を淨めて他を利せんが爲の故に、如來勝生子を敬禮す
三毒分別等を遠く離れ、諸根を寂調して精室に詣で
或は水室の異の方便に依る、心住すること前に制する所の儀の如くせよ
自身の三等を限量と爲す、上中下との法を求めんが爲の故なり
行者是の如く持誦を作さば、有ゆる罪流當に永く息むべし
必定成就して諸の障を摧き、一切智の句其身に集る
彼世間成就品と、或は復餘經に說く所とに依れ
供養の支分と樂の方便と、其次第の如く修行する所なり
未だ有爲の諸相を離れざるが故に、是を世間の悉地と謂ふ
（一〇）次に無相の最も殊勝なるを說かん、信解を具する者の觀察する所なり
若し眞言乘の深慧の人、此生に無上の果を志求せば
信解する所に隨つて觀照を修せよ、前の心供養の儀の如し
及び悉地流出品と、出世間品との瑜伽の法に依れ
彼眞實の緣生の句に於て、內心の支分に攀緣を離れよ
此方便に依りて而も諦修して、常に出世間の成就を得ん

【說く所の等】此一偈は流通中の流通なり。

說く所の優陀那の偈に言ふが如し。

甚深無相の法は、劣慧の堪へざる所なり

彼等に應ぜんが爲の故に、兼ねて有相の說を存すと

右は阿闍梨の集る所の、大毘盧遮那成佛神變加持經の中の、供養儀式具足し竟んぬ。傳度の者頗る會意を存せよ。又文を省かんと欲するが故に、其重複を删れり、眞言は旋轉して之を用ひよ。修行者當に上下の文義を綜べ括ろべきのみ。

毘庚反 毘也 丁以 儞入 他以 凡そ眞言中平聲の字皆稍上聲に之を呼ぶ、若し諸語下字と相
嘌反 弊反 底反 哩聲 嚧反 連らば亦便を逐らて入聲を以て之を呼べ、婆伽梵の如きは呼
んで薄伽梵と爲す類は是なり。

大毘盧遮那成佛神變加持經卷第七　終

經典部
第八卷

金剛頂經

（金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大敎王經）

金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經　卷上

特進試鴻臚卿大興善寺三藏沙門大廣智不空　詔を奉じて譯す

金剛界大曼荼羅廣大儀軌品之一

(一)是の如く我聞けり。一時、婆伽梵、一切如來の金剛加持の殊勝の三昧耶の智を成就し、一切如來の寶冠の三界の法王の灌頂を得、一切如來の一切智智瑜伽自在を證し、能く一切如來の一切の印平等の種種の事業を作すこと、無盡無餘の一切有情界に於て、一切の意願作業皆悉く成就したてまつる。大悲毘盧遮那常恆に三世に住せる一切の身口心の金剛の如來、一切如來の遊戲の處、阿迦尼吒天王宮の中の大摩尼殿の、種種に間錯して鈴鐸繒幡微風搖激、珠鬘瓔珞半滿月等の而も莊嚴を爲せるに住して、九十倶胝の菩薩衆と倶なり。謂ゆる金剛手菩薩摩訶薩、聖觀自在菩薩摩訶薩、曼殊室利童眞菩薩摩訶薩、虛空藏菩薩摩訶薩、金剛拳菩薩摩訶薩、纔發心轉法輪菩薩摩訶薩、虛空庫菩薩摩訶薩、摧一切魔力菩薩摩訶薩、是の如く等の菩薩を而も上首爲り。

(二)恆河沙等數の如來と與なり。猶し胡麻の如く示現して閻浮提に滿てり。阿迦尼吒天に於ても亦復是の如し。彼無量數の如來の身、一一の身より無量阿僧祇の佛刹を現ず、彼佛刹

【一】序分、三十七尊、賢劫十六尊、諸佛頂、諸金剛の德を歎ず。卽ち智用を示現し、會衆を驚發するなり。今初に通序。

【阿迦尼吒天】古佛成道の色究竟天のこと。

【倶胝】千萬の義。

【二】以下別序。化佛、盧舍那現瑞相を明す。

に於て還つて此法の理趣を說きたまふ。時に婆伽梵大毘盧遮那如來、常に一切虛空の一切如來の身口心の金剛に住したまふ。一切如來互相に涉入す。一切金剛界の覺悟智薩埵の一切虛空界の微塵の金剛、加持所生の智藏、一切如來無邊の故に、大金剛智灌頂寶の一切虛空に舒遍せる眞如智、三菩提を現證するを爲す。一切如來の自身性清淨の故に、自性清淨の一切の法、一切虛空に遍じて、能く一切の色智を現じ盡して餘り無し、有情界を調伏したまふ行最勝なり。一切如來不空、敎令を作したまふが故に、一切平等なる無上の巧智あり。一切如來大菩提堅固の薩埵、一切如來鉤召の三昧耶、一切如來隨染の智自在、一切如來善哉、一切如來灌頂寶、一切如來日輪圓光、一切如來思惟王の摩尼寶幢、一切如來大笑、一切如來大清淨の法、一切如來般若智、一切如來輪、一切如來祕密語、一切如來不空の種種の事業、一切如來大精進の妙堅固の甲冑、一切如來遍守護の金剛藥叉、一切如來身口心の金剛印の智となり。

普賢と妙不空と、摩羅と極喜王と
虛空藏と大妙光と、寶幢と大微笑の
能觀大自在と、曼殊と一切壇と
無言と種種業と、精進と忿と堅持とあり
金剛と鉤と箭と喜と、寶と日と幢幡と笑と
蓮と劍と妙輪と語と、羯磨と甲と怖と持とあり

【一切虛空の等】一切如來身等の三密は常恆不變一味平等にして不生不滅。

【一切如來互相に涉入】佛内證の四智恆に用あり、一一の智、是れ法界にして別なし、理智不二の故に互に涉入す。

【一切金剛界の等】内證の體より法界の用を起すを明す中、提行の初に四波羅蜜を明す。至智藏は金剛波羅蜜、所生智藏は寶波羅蜜、行最勝は法波羅蜜、無上功智は羯摩波羅蜜を明す

【一切如來大菩提等】十六大菩薩を擧ぐ。

【普賢と妙不空と等】下十一行偈、次に偈頌もて互相涉入の諸聖衆を明す。

【三】以下正宗分
初に祕密現證相を明す。即ち五相成身觀等なり。中に二、初に菩薩を示して如來心に住するを明す。

無始無終と寂と、暴怒と大安忍と
藥叉と羅刹勇と、威猛と大富貴と
鄔摩天と世主と、毘紐と勝大寂と
世護と虛空と地と、三世と及び三界と
大種と善人と益と、諸の設縛祖父と
流轉と涅槃と常と、正流轉と大火と
覺清淨と大乘と、三有と常恆者と
降三世と食樂と、主宰と諸能調と
堅主と妙地と勝と、智彼岸と理趣と
解脫と覺有情と、行一切如來と
覺利益と佛心と、諸菩提と無上と
遍照と最勝王と、自然と總持念と
大薩埵大印と、等持と佛作業と
一切の佛を身と爲ると、薩埵常益覺と
大根本と大黑と、大染欲と大樂と
大方便と大勝と、諸の勝宮自在となり

（三）薄伽梵大菩提心普賢大菩薩、一切如來の心に住したまへり。時に一切如來、此佛世界に

【一切義成就菩薩】金剛薩埵。

【爾時、一切如來等】菩薩現證を明示す。分って六、初に自性成就を授く。

【受用身】毘盧遮那身。

【阿娑頗娜伽三摩地】無識身平等持といふ。此定に入る者は能く攀縁散亂等の障を治す。

【自性成就の眞言】自性清淨心は本より福智圓滿の故に

【時に菩薩等】二に心智豐盛を示す。

【此性成就の眞言等】三に教へて金剛の形を思惟するを明す。

滿ちたまふこと猶し胡麻の如し。

爾時、一切如來雲集して一切義成就菩薩摩訶薩の菩提場に坐せるに於て、往詣して受用身を示現して、咸く是言を作したまふ。善男子、云何が無上正等覺菩提を證する。一切如來の眞實に諸の苦行を忍ぶを知らず。時に一切義成就菩薩摩訶薩、一切如來の警覺に由りて、即ち阿娑頗娜伽三摩地より起つて一切如來を禮して白して言さく、「世尊如來、我に教示したまへ。云何が修行せん、云何が是れ眞實なる。」是の如く說き已りて、一切如來、異口同音に彼菩薩に告げて言はく、『善男子、當に自を觀察する三摩地に住して、自性成就の眞言を以て、自ら恣にして誦すべし。』

唵質多鉢囉二合底丁以反微騰迦嚕弭

時に菩薩、一切如來に白して言さく、「世尊如來、我遍く知り已んぬ。我自心を見るに形日輪の如し。」一切如來、咸く告げて言はく、『善男子、心の自性の光明は、猶し遍く功用を修して作すに隨つて、隨つて獲るが如く、亦素衣の色を染むるに、染むるに隨つて、隨つて成ずるが如し。』時に一切如來、自性の光明の心智をして豐盛ならしめんが爲の故に、復彼菩薩に敕して言はく、

唵菩提質多畝怛波娜夜弭

此性成就の眞言を以て菩提心を發さしむ。時に彼菩薩、復一切如來に從つて旨を承けて菩提心を發し已りて是言を作さく、「彼月輪の形の如く我も亦月輪の形の如く見る。」一切如

【月輪】是れ大福德の所成、菩提心より生ず、卽ち佛性なり。

【菩薩白して等】四に堅固普賢心を示す。

【所有一切の虛空等】五に自身佛形を觀ずるを教ふ。

【一切如來は自身】智は體性に契つて一多自在、體は極智に合して事理無礙の故にいふ。

【是言を作し已りて等】六に加持を請うて現證するを明す。

【自身の如來を證す】前の自性成就の力に由て既に五佛身を成就せる故に

來告げて言はく、『汝已に一切如來の普賢の心を發して、金剛の堅固なるに齊等なることを獲得し、善く此一切如來の普賢の發心に住して、自心の月輪に於て金剛の形を思惟して、此眞言を以てす。』

唵底瑟姹二合嚩日囉二合

菩薩白して言さく、『世尊如來、我月輪の中に金剛を見る。』一切如來、咸く告げたまはく、『一切如來の普賢の心の金剛を堅固ならしむるに、此眞言を以てす。』

唵嚩日羅二合怛麼二合俱唅

所有一切の虛空界に遍滿せる一切如來の身口心の金剛界、一切如來の加持を以て悉く薩埵金剛界に入る。則ち一切如來一切義成就菩薩摩訶薩に於て、金剛の名を以て金剛界と號す。金剛界の灌頂したまふ時に、金剛界の菩薩摩訶薩、彼一切如來に白して言さく、『世尊如來、我一切如來は自身たりと見る。』一切如來、復告げて言はく、『是故に摩訶薩、一切薩埵金剛は、一切の形を具することを成就して自身の佛形を觀じ、此自性成就の眞言を以て意に隨つて誦せよ。』

唵也他薩嚩怛他竭多薩怛二合他唅

是言を作し已りて、金剛界の菩薩摩訶薩、現に自身の如來を證し、盡く一切如來を禮し已りて白して言さく、『唯願くば世尊、諸の如來、我を加持して、此現證の菩提をして堅固ならしめたまへ。』是語を作し已りて一切如來、金剛界の如來の彼薩埵金剛の中に入る。

【三昧耶】一切等持と云ふ。一切處に於て身智を等持して即ち一切如來の智に入る故なり。

【毘首羯磨】善巧事業と譯す。

【四】第二に現證須彌盧頂に往詣するを明す。

【五】第三に祕密境界無礙神變三昧の相を示現するを明す。分つて五となす、初に五方如來に就いて。

【一切如來の普賢心】圓鏡智心なり、虚空法性等下に次での如く、平等性智、妙觀察智、成所作智、智、

【一切如來の性を等】二に十六大菩薩の智用祕密の境界を明す。中初に東方、一切如來菩心提門の四大菩薩を明す。今普賢菩薩授寶冠繒綵金剛菩薩心智灌頂門。

【縛日羅】、金剛と

時に世尊、金剛界の如來、彼剎那の頃に當つて等覺一切如來平等智を現證し、一切如來平等智三昧耶に入り、一切如來の法平等智自性清淨を證し、則ち一切如來平等自性光明智藏如來、應供正遍知を成ず。時に一切如來、復一切如來薩埵金剛より出でたまふ。虚空藏大摩尼寶を以て灌頂し、觀自在法智を發生し、一切如來毘首羯磨を安立したまふ。

(四)此に依りて須彌盧頂の金剛摩尼寶峯樓閣に往詣し、至り已りて金剛界の如來、一切如來の加持を以て、一切如來の師子座に於て、一切の面に安立したまふ。時に不動如來と寶生如來と觀自在王如來と不空成就如來との一切如來、一切如來の自身を加持したまふを以て婆伽梵釋迦牟尼如來、一切平等に善く通達したまふが故に、一切の方を平等に觀察して四方に而も坐したまふ。

(五)爾時、世尊毘盧遮那如來、久しからずして等覺一切如來の普賢心を現說し、一切如來虚空發生大摩尼寶灌頂を獲得し、一切如來觀自在法智彼岸と一切如來毘首羯磨不空無礙の教、圓滿事業、圓滿意業とを得たまへり。一切如來の性を自身に於て加持して、即ち一切如來の普賢摩訶菩提薩埵の三昧耶に入り、薩埵加持の金剛三摩地を出生したまふ。一切如來の大乘現證の三昧耶を一切如來心と名く。自心より、

嚩日囉薩怛嚩（二合下同）を出したまふ。

纔に一切如來心を出して、即ち彼婆伽梵普賢衆多の月輪と爲りて、普く一切有情の大菩提心を淨めたまふ。諸佛の所に於て周匝して住したまふ。彼衆多の月輪より一切如來の智

譯す、薩怛嚩は有情なり。

【纔に一切如來の心等】下は祕密神變の相十二を明す即ち依因、顯本、應實、顯相、顯力、還源、顯智、示相、明德、顯實、普現、感應これなり。

【合つて一體と爲る】佛心菩提及び智相は本心より起れば還佛心に入り以て相用一體の性を表すなり。

【五峯の光明】 五智門なり。

【種種の色相等】如來の智德無邊にして、一心三業五智光より生起す。

【嗢陀南】 物攝の義。一偈の義を以て法界離相の法無量義を攝する故。

【堅薩埵は自然】大心は金剛山の如く、其體性は常住にして性相法爾の故。

【堅固の無身】此身自然極理、常恆

金剛を出して、即ち婆伽梵毘盧遮那如來の心に入る。普賢の堅牢に由るが故に、金剛薩埵三摩地に從ひ、一切如來の加持に由りて合りて一體と爲る。量虛空を盡して、遍滿して五峯の光明と成る。一切如來の身口心より金剛形を出生す。一切如來の心より出でて佛の掌中に住す。復金剛より金剛形の種種の色相を出して、舒遍して一切世界を照曜す。彼金剛の光明門より一切世界の微塵等の如來の身を出して、法界に遍周し、一切の虛空を究竟して一切世界の雲海に遍じ、遍く一切如來の平等智神境通を證する一切如來に大菩提心を發して普賢の種種の行を成辦し、一切如來に承事し、大菩提場に往詣し、諸の魔軍を摧き、一切如來の平等大菩提を證成し、正法輪を轉じ、乃至一切を拔濟し、盡無餘の有情界を利益し安樂し、一切如來智最勝神境通悉地等を成就したまふ。一切如來神通遊戲普賢の示現するが故に、金剛薩埵の三摩地妙堅牢の故に、聚りて一體と爲り、普賢摩訶菩提薩埵の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住して、嗢陀南を說きたまはく、

　奇しき哉我普賢、堅薩埵は自然なり

　堅固の無身より、薩埵身を獲得す

時に普賢大菩提薩埵の身、世尊の心より下りて、一切如來の前にして月輪に依りて而も住して、復教令を請ふ。時に婆伽梵、一切如來智三昧耶に入りたまふ。金剛三摩地と名く。一切如來の、或は定慧解脫解脫知見を受用し、正法輪を轉じ有情を利益し、大方便力と精進と大智と三昧耶とをもて、無盡無餘の有情界を拔濟したまふ。一切主宰安樂悅意の故に、

不變、寂寥無身の故。
【一切如來成就金剛】五智印三昧耶のこと。
【轉輪王灌頂】轉法輪智三昧なり。
【左を慢にして】左手金剛拳に作りて左の腰に置くなり。
【右は舞】右の手にて五股杵を持ちて弄んで輪轉するをいふ。
【增進の勢】抽擲なり。
【金剛もて金剛に加ふ】修生の金剛に本有の金剛を以て加持すること。
【六】第二に一切如來菩提心門の第二不空王大菩薩授金剛鉤召智集一切如來灌頂門を明す。
【所生の薩埵加持】不空王智より鉤相を現じ、有情を加持す。
【嚩日囉邏惹】金剛王と譯す。

乃至一切如來の平等智神境通無上大乘現證の最勝悉地の果を得たまふが故に、一切如來の成就金剛もて、彼普賢摩訶菩提薩埵一切如來の轉輪王の灌頂を授與したまふ。一切佛身の寶冠繒綵を以て灌頂し、已りて雙手に授與したまふ。則ち一切如來、金剛名を以て金剛手と號す。金剛手灌頂の時、金剛手菩薩摩訶薩、左は慢にし右は舞して跋折羅を弄ぶ。則ち彼金剛を自心に安じ增進の勢を持して、此嗢陀南を說きたまはく、

此は是れ一切佛なり、金剛の無上を成ぜり
我手掌に授與して、金剛もて金剛に加ふ

(六)爾時、世尊、復不空王大菩薩の三昧耶に入りたまふ。所生の薩埵加持を金剛三摩地と名け、一切如來鉤召三昧耶と名く。一切如來の心、自心より、

嚩日囉二合邏引惹を出したまふ。

一切如來の心より纔に出で已りて、則ち彼婆伽梵金剛手、一切如來の大鉤と爲り出で已りて、世尊毘盧遮那の心に入り、聚りて一體と爲りて金剛大鉤の形を生じて、佛の掌中に住す。金剛大鉤の形より一切世界の微塵等の如來の身を出現して、一切如來等を召請し、一切佛の神通遊戲を作す。妙不空王の故に、金剛薩埵の三摩地極堅牢の故に、聚りて一體と爲りて不空王大菩薩の身を生じ、毘盧遮那佛の心に住して此嗢陀南を說きたまはく、

奇しき哉不空王、金剛所生の鉤
一切佛に遍ずるに由りて、鉤召を成就することを爲す

【不空王】一切を鉤召して空しきこと無し。

【七】第三に摩羅大菩薩授金剛華器伏智灌頂門を明す即ち金剛愛菩薩の行位なり。

【摩羅】殺者と譯す。

【邏哦】愛の義。

【華器杖】弓箭等の兩端に皆蓮華あるをいふ。

時に不空王大菩薩の身、佛心より下りて、一切如來の右の月輪に依りて住して、復教令を請ふ。時に婆伽梵、一切如來鉤召三昧耶に入りたまふ。金剛三摩地と名く。一切如來の鉤召三昧耶を受け、無餘の有情界を盡して、一切鉤召し一切安樂し、悅意するが故に、乃至一切如來集會加持最勝悉地の故に、則ち彼金剛鉤もて不空王大菩薩の雙手に授與す。一切如來金剛の名を以て金剛鉤召と號して、金剛鉤召灌頂したまふ時に、金剛鉤召菩薩摩訶薩、金剛鉤を以て一切如來を鉤召して、此嗢陀南を說きたまはく、

此は是一切佛の、無上金剛の智なり
諸佛の利益を成ずる、最上能く鉤召す

(七)爾時、婆伽梵、復摩羅大菩薩の三昧耶に入りたまふ。薩埵加持を出生するを金剛三摩地と名く。一切如來の隨染の三昧耶を一切如來心と名く。自心より、

嚩日囉二合邏哦を出したまふ。

一切如來の心より纔に出し已るに、即ち彼婆伽梵持金剛、一切如來の花器仗と爲りて出で已りて、世尊毘盧遮那佛心に入つて聚りて一體と爲りて、大金剛箭の形を生じて佛の掌中に住す。彼金剛箭の形より一切世界の微塵等の如來の身を出し、一切如來の隨染等を作し、一切佛の神通遊戲を作して極殺するが故に、金剛薩埵三摩地極堅牢なるが故に、聚りて一體と爲りて摩羅大菩薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛心に住して、この嗢陀南を說きたまはく、

【調伏】本有清淨の染欲を以て、妄想修起の染欲を伏するをいふ。

【染智にして等】大貪染の故に穢なし。

【厭離を害し】煩惱に縛せられて佛法を樂はざるの有情類、此等の心を射害して菩提に安住せしむ。

【八】第四に歡喜王大菩薩授金剛善哉智灌頂門を明す。此れ金剛歡喜位なり。

【嚩日囉娑度】金剛善哉と譯す。

【大歡喜の形】左右の手金剛拳に作して相並べて風指彈指の形を爲す。

奇しき哉自性淨、染欲に隨つて自然なり
　欲を離れて清淨なるが故に、染を以て調伏す

時に彼摩羅大菩薩の身、世尊の心より下りて、一切如來の左の月輪に依りて住して復教令を請ふ。時に世尊、一切如來の隨染加持に入りたまふ。金剛三摩地と名く。一切如來の能殺三昧耶を受け、無餘の有情界を盡して、隨つて一切安樂し悅意するが故に、乃至一切如來の摩羅業の最勝悉地の果を得るが故に、則ち彼金剛箭を摩羅大菩薩雙手に授與したまふ。則ち一切如來金剛名を以て金剛弓と號す。金剛弓灌頂したまふ。時に金剛弓菩薩摩訶薩、金剛箭を以て一切如來を殺して、此嗢陀南を說きたまはく、

此は是一切佛の、染智なれども瑕穢無し
　染を以て厭離を害して、能く諸の安樂を施す

(八)爾時、婆伽梵、復極喜王大菩薩の三昧耶に入りたまふ。所生の薩埵加持を金剛三摩地と名く。一切如來の極喜三昧耶なり。一切如來心と名く。自心より、

嚩日囉二合娑度を出したまふ。

一切如來の心より纔に出し已りて、彼婆伽梵持金剛、一切如來善哉の相と爲りて、世尊毘盧遮那佛心に入り、聚りて一體と爲りて大歡喜の形を生じて佛の掌中に住したまふ。彼歡喜の形より、一切世界の微塵等の如來の身を出し、一切如來の善哉の相を作し、一切の佛の神通遊戲を作す。極喜の故に、金剛薩埵三摩地極堅牢の故に、聚りて一體と爲りて歡

【究竟の喜を生ず】金剛乘人初發心より如來智を證る。

【能轉善哉の相】一切諸佛は此智印もて能く轉じて自他の大喜を生ぜしむる故。

【九】第二に一切如來福德聚門、四大菩薩を明す中、初に虚空大菩薩金剛七寶灌頂智門を授くを明す。此四菩薩は南方寶生如來の眷屬なり。今の分別位は金剛寶形なり。

【嚩日囉囉怛那】金剛寶と譯す。

喜王大菩薩の身を生じて、世尊毘盧遮那佛心に住して、此嗢陀南を説きたまはく、

奇しき哉我善哉、諸の一切の勝智なり
分別を離るる所の者、能く究竟の喜を生ず

時に歡喜王大菩薩の身、世尊の心より下りて一切如來の後の月輪に依りて住して復教令を請ひたまふ。時に世尊、一切如來の等喜加持に入りたまふ。金剛三摩地と名く。已に一切如來の等喜一切の安樂悅意を受くるが故に、乃至一切如來の無上喜味の最勝の悉地の果を得るが故に、彼金剛喜を彼歡喜王大菩薩摩訶薩の雙手に授く。則ち一切如來、金剛名を以て金剛喜と號す。金剛喜灌頂したまふ、時に金剛喜菩薩摩訶薩、金剛喜善哉の相を以て一切如來を歡悅せしめて、此嗢陀南を説きたまはく、

此は是れ一切佛の、能轉善哉の相なり
諸喜を作す金剛なり、妙喜を增長せしむ

大菩提心と一切如來鉤召三昧耶と一切如來の隨染智と大歡喜となり。是の如きは一切如來大三昧耶の薩埵なり。

(九)爾の時、婆伽梵、復虚空藏大菩薩の三昧耶に入りたまふ。所生の寶加持を金剛三摩地と名く。一切如來の灌頂三昧耶なり。一切如來の心と名く。自心より、

嚩日囉二合囉怛那を出したまふ。

一切如來の心より、纔に出し已りて一切虚空平等性智善通達の故に、金剛薩埵の三摩

【大金剛寶の形】光焔を放てる三辨寶珠なり。

【妙灌頂】寶灌頂智は甚深微妙にして是れ三乘顯教の所測に非ざる故。

【無上金剛寶】法界に周遍して佛事を起作して壞亂する者無し。

地極堅牢の故に、聚りて一體と爲りて、則ち彼婆伽梵持金剛、一切の虛空光明と爲りて出し已りて、一切の虛空光明を以て一切有情界を照耀して、一切の虛空界を成ず。一切如來加持を以て一切虛空界世尊毘盧遮那佛心に入りたまふ。善修習の故に、金剛薩埵の三摩地は、一切の虛空界胎藏の所成なり。一切世界に遍滿すること等量にして、大金剛寶形を出生して佛の掌中に住す。彼金剛寶形より一切世界微塵等の如來の身を出生し已りて一切如來灌頂等を作し、一切世界に於て一切如來神通遊戲を作したまふ。虛空界の胎藏妙出生の故に、金剛薩埵の三摩地極堅牢の故に、聚りて一體と爲りて虛空藏大菩薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛心に住して、此嗢陀南を說きたまはく、

奇しき哉妙灌頂、無上金剛の寶なり
佛は所著無きに由りて、名けて三界の主と爲す

時に彼虛空藏大菩薩の身、世尊の心より下りて一切如來の前の月輪に依りて住して、復敎令を請ふ。時に世尊、一切如來の大摩尼寶に入りたまふこと金剛三摩地と名く。一切如來の圓滿意樂の三昧耶を受け、無餘の有情界を盡して一切の義利を獲しめ、一切の安樂悅意を受けしむるが故に、乃至一切如來の利益最勝榮盛の悉地を得しむるが故に、彼金剛摩尼を受けて、彼虛空藏大菩薩摩訶薩に金剛寶轉輪王を與へたまふ。金剛寶形の灌頂を授與して、雙手に安じたまふ。則ち一切如來、金剛名を以て金剛藏と號す。金剛藏灌頂したまふ時に、金剛藏菩薩摩訶薩、金剛摩尼を以て自の灌頂處に安じて、此嗢陀南を說

【有情界に灌頂】一切如來此寶印を以て諸佛を莊嚴し衆生を利益す。

【二〇】第二に大威光大菩薩授金剛輪智灌頂門、即ち日金剛光を明す。

【嚩日囉帝惹】金剛光と譯す。能く一切を護つて堅牢を得しむ。

【無比光】此身顯示に勝るるが故に

きたまはく、

　此は是れ一切佛、有情界に灌頂せしめたまふ
　我手掌に受與して、寶を寶の中に安じたまふ

(二〇)爾時、婆伽梵、復大威光大菩薩の三昧耶に入りたまふ。寶加持を出生し、金剛三摩地と名く。一切如來光三昧耶なり、一切如來心と名く。自心より、

　嚩日囉二合帝惹を出したまふ。

一切如來心より僅に出し已りて、卽ち彼婆伽梵金剛手、衆多の大日輪と爲りたまふ。出で已りて世尊毘盧遮那佛心に入り、聚りて一體と爲りて大金剛日形を生じて佛の掌中に住す。彼金剛日輪より一切世界微塵等の如來の身を出して、一切如來の光明等を放ちて、一切佛の神通遊戲を作したまふ。極大威光の故に金剛薩埵三摩地極堅牢の故に、聚りて一體と爲りて、大威光菩薩摩訶薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛心に住して、此嗢陀南を說きたまはく、

　奇しき哉無比光、有情界を照耀す
　能靜清淨者、諸佛救世者なり

時に彼無垢大威光菩薩の身、世尊の心より下りて一切如來の右の月輪に依りて住して、復教令を請ふ。時に世尊、一切如來の圓光の加持に入りたまふ。金剛三摩地と名く。一切如來の光三昧耶を受け、無餘の有情界を盡して無比の光を以て一切安樂悅意の故に、乃至

【無智の暗を壞し】此金剛威光三摩地智は、諸の衆生の無明愚暗を破し、大智光を發す。

【二】第三に寶幢大菩薩授如意滿願幢灌頂智門即ち金剛幢を明す。

【嚩日囉計都】金剛幢と譯す。

【金剛幢の形】如意寶幢なり。

一切如來の白の光明最勝の悉地を得るが故に、金剛日を大威光菩薩摩訶薩の雙手に授與したまふ。則ち一切如來、金剛名を以て金剛光と號す。金剛光灌頂したまふ。時に金剛光菩薩摩訶薩、彼金剛日を以て一切如來を照曜して、此嗢陀南を說きたまはく、

此は是れ一切佛、能く無智の暗を壞したまふ
設ひ微塵數の日なりとも、此光は彼に超えん

（二）爾時、婆伽梵、復寶幢大菩薩の三昧耶に入りたまふ。寶加持を出生し、金剛三摩地と名く。一切如來の滿意願の三昧耶なり。一切如來心と名く。自心より、

嚩日囉計都を出したまふ。

一切如來の心より、纔に出し已りて即ち彼婆伽梵持金剛、種種の色の幢幡莊嚴の形と爲りたまふ。出し已りて世尊毘盧遮那佛の心に入りて、聚りて一體と爲りて金剛幢の形を生じて、佛の掌中に住す。彼金剛幢の形より一切世界の微塵等の如來の身を出し、一切如來の寶幢等を建て、一切佛の神通遊戲を作したまふ。大寶幢の故に、金剛薩埵の三摩地極堅牢の故に、聚りて一體と爲りて寶幢大菩薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住して、此嗢陀南を說きたまはく、

奇しき哉無比の幢、一切の義成就し
一切の意滿せる者なり、一切の願を滿ぜしめん

時に彼寶幢大菩薩の身、世尊の心より下つて一切如來の左の月輪に依りて住して復敎令

【無比幢】此滿願は如意珠の如し。
【一切の義成就し】世出世一切の樂具此智中に於て皆悉く具足す。
【建立加持に入り】如來諸の緣起法性に赴遊す。
【安立す】檀波羅蜜と相應す。
【檀度の理趣】檀度濟物の理趣。
【二二】第四に常歡喜根本菩薩授金剛笑灌頂智門即ち金剛笑を明す。
【韈日囉賀娑】金剛笑と譯す。
【金剛笑の形】左右の手の金剛拳を抑へて相並ぶるなり。

を請ふ。時に世尊、一切如來の建立加持に入りたまふ。金剛三摩地と名く。一切如來の思惟王摩尼幢を受け、能く三昧耶を建て無餘の有情界を盡して一切の意願をして圓滿せしむ。一切安樂悅意の故に、乃至一切如來大利益の最勝の悉地の果を得るが故に、則ち彼金剛幢を彼寶幢菩薩摩訶薩の雙手に授けたまふ。則ち一切如來、金剛名を以て金剛幢と號す。金剛幢灌頂したまふ。時に彼金剛幢菩薩摩訶薩、金剛幢を以て一切如來に檀波羅蜜を安立して、此嗢陀南を說きたまはく、

　此は是れ一切の佛、能く諸の意欲を滿じたまふ
　思惟寶幢と名く、是れ檀度の理趣なり

(二二)爾時、婆伽梵、復常喜悅大菩薩の三昧耶に入りたまふ。寶加持を出生し、金剛三摩地と名く。一切如來の喜悅三昧耶なり。一切如來心と名く。自心より、

　韈日囉二合賀娑を出したまふ。

一切如來の心より纔に出し已りて、即ち彼婆伽梵持金剛、一切如來の微笑となりたまふ。出し已りて世尊毘盧遮那佛の心に入り、聚りて一體と爲りて金剛笑の形を生じて、佛の掌中に住す。彼金剛笑の形より一切世界微塵等の如來の身を出し、一切如來の奇特等を作し一切佛の神通遊戲を作す。常喜悅根の故に、金剛薩埵の三摩地極堅牢の故に、聚りて一體と爲りて常喜悅根大菩薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住して、此嗢陀南を說きたまはく、

奇しき哉我大笑、諸の勝大の奇特あり
佛の利益を安立して、常に妙等引に住す

時に彼常喜悅根大菩薩の身、世尊の心より下りて、一切如來の後の月輪に依りて住して復教令を請うて、時に世尊一切如來の奇特加持に入りたまふを、金剛三摩地と名く。一切如來の出現三昧耶を受け。無餘の有情界を盡して、一切の根無上安樂悅意の故に、乃至一切如來の根清淨智の神境通の果を得るが故に、則ち彼金剛微笑を彼常喜悅根大菩薩摩訶薩の雙手に授與したまふ。則ち一切如來、金剛名を以て金剛喜と號す。金剛喜灌頂したまふ時に、金剛喜菩薩摩訶薩、金剛微笑を以て一切如來を笑悅せしめて、此嗢陀南を說きたまはく、

此は是れ一切佛、奇しき哉出現を示して
能く大喜悅を作したまふ、他の師は知ること能はず

大灌頂と尋圓光と有情大利と大笑と、是の如きは一切如來大灌頂の薩埵なり。

(二三)爾時、婆伽梵、復觀自在大菩薩の三昧耶に入りたまふ。法加持を出生して金剛三摩地と名く。一切如來の法三昧耶を一切如來の心と名く。自心より、

囀日囉二合達摩を出したまふ。

一切如來の心より纔に出し已りて、即ち彼婆伽梵持金剛、自性清淨一切法平等智善通達の故に、金剛薩埵三摩地を正法の光明と爲す。出し已りて彼正法の光明を以て一切

【我大笑等】　智身の名。

【佛の利益等】諸佛利生の大事を建立し、滅定を起たずして諸の威儀を現ず。

【奇しき哉出現】一切諸佛此智印を以て一切喜悅の相を示現す。

【他師】　外道小乘權菩薩。

【二三】次に西方彌陀如來の眷屬、即ち第三に一切如來智慧門の四大菩薩を明す中の第一に觀自在大菩薩授金剛開敷白蓮華智灌頂門即ち金剛法を明す。

【囀日囉達摩】　金剛法と譯す。

世界を照燿して、法界と成爲す。法界を盡して世尊毘盧遮那佛の心に入り、聚りて一體と爲りて量虛空法界に遍ぜり。大蓮華形を生じて、佛の掌中に住す。彼金剛蓮華形より一切世界の微塵等如來の身を出す。一切如來の三摩地智神境通等を以て、一切の神通遊戲を作す。一切の世界に於て妙觀自在の故に、金剛薩埵三摩地極堅牢の故に、聚りて一體と爲り、觀自在大菩薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住して、此嗢陀南を說きたまはく、

　奇しき哉我勝義、本より淸淨にして自然なり
　諸法は筏喩の如し、淸淨にして得つべし

時に彼觀自在大菩薩の身、世尊の心より下りて一切如來の前に月輪に依りて住して復敎令を請ふ。時に世尊、一切如來の三摩地智に入りたまふ。三昧耶出生を金剛三摩地と名く。能く一切如來を淨め、無餘の有情界を盡す。我淸淨にして一切安樂悅意の故に、乃至一切如來の法智と、神境通の果とを得るが故に、則ち彼金剛蓮華を觀自在菩薩摩訶薩正法轉輪王に授與す。一切如來の法身の灌頂を授與して、雙手に灌ぎたまふ、則ち一切如來、金剛名を以て金剛眼と號す。金剛眼灌頂したまふ時に、金剛眼菩薩摩訶薩、則ち彼金剛蓮華、開敷蓮華の勢の如し。貪染の淸淨にして染着無き自性を觀察す。觀じ已りて此嗢陀南を說きたまはく、

　此は是れ一切佛、欲の眞實を覺悟す
　我手掌に授與して、法に法を安立したまふ

【金剛蓮華】堅の獨股杵の上に赤色の八葉初割の蓮華を安くなり。

【諸法は筏喩等】智身は諸法に著せず捨つるところの筏喩の如し、然る後に當に本性智身を得べきが故。

【金剛眼】若し煩惱の本際に了達せずば、盲瞽闇の如し、今此菩薩、惑障は本性淸淨を覺悟す、喩へば目あつて、日光の照明を仰いで大虛に瞻るが如し。

【貪染の淸淨等】貪染の自性は本より不生なるを照了す、本不生の故に垢染なし。

【法に法を安立】此菩薩法智を具足して能く有情を利するに、如來復無染法智を以て更に之に授與する故にいふ。

【一四】第二に文殊師利大菩薩授金剛猛利劍智灌頂門即ち金剛利を明す。

【嚩日囉底乞灑拏】金剛利と譯す。

【微妙音】妙音を以て一切を開悟する故。

【慧は色無き等】凡夫は人執、二乘は法執、乃至等覺も微妙の執あるも今此三摩地の慧は此等の執を離る。此無著の慧の故に妙智身を得べし。妙聲とは文殊の名なり。

（一四）爾時、婆伽梵、復曼殊室利大菩薩の三昧耶に入りたまふ。法加持を出生し、金剛三摩地と名く。一切如來の大智慧の三昧耶なり。一切如來心と名く。自心より、

嚩日囉二合乞灑拏二合三を出したまふ。

一切如來の心より纔に出し已りて即ち彼婆伽梵持金剛、衆多の慧劍と爲る。出て已りて世尊毘盧遮那佛の心に入る。聚りて一體と爲り、金剛劍形を生じて佛の掌中に住す。則ち彼金剛劍の形より、一切世界の微塵等の如來の身を出したまふ。一切如來の智慧等を以て、一切佛の神通遊戲を作す。妙吉祥の故に、金剛薩埵三摩地極堅牢の故に、聚りて一體と爲り曼殊室利大菩薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住して、此嗢陀南を說きたまはく、

奇しき哉一切佛、我を微妙音と名く
慧は色無きに由るが故に、音聲もて得べし

時に彼曼殊室利大菩薩の身、世尊の心より下りて、一切如來の右の月輪に依りて住して、復敎令を請ふ。時に世尊、一切如來智慧三昧耶に入りたまふ。金剛三摩地と名く。一切如來の結使を斷ずる三昧耶なり。無餘の有情界を盡して一切苦を斷じ、一切の安樂悅意を受けしむるが故に、乃至一切如來の隨順音聲の慧圓滿し、成就したまふことを得るが故に、即ち彼金剛劍を曼殊室利大菩薩摩訶薩の雙手に授與したまふ。則ち一切如來金剛名を以て金剛慧と號す。金剛慧灌頂したまふ時に、金剛慧菩薩摩訶薩、金剛劍を以て揮斫して、此嗢陀南を說きたまはく、

【怨敵】三惑五住

【一五】第三に纔發心大菩薩授金剛輪道場智灌頂門即ち金剛因を明す。轉法輪菩薩なり。

【嚩日囉係都】金剛因と譯す。

【金剛輪の形】八幅の金輪なり。

【金剛勝持】諸持金剛に於て此最勝上なるをいふ。

此は是れ一切佛の、智慧度の理趣なり
能く諸の怨敵を斷じ、諸罪を除ふ最勝なり

(一五)爾時、婆伽梵、復纔發心轉法輪菩薩摩訶薩の三昧耶に入りたまふ。法加持を出生したまふ。金剛三昧地と名く。一切如來輪三昧耶なり。一切如來心と名く。自心より、

嚩日囉二合係都を出したまふ。

一切如來の心より、纔に出し已りて、即ち彼婆伽梵持金剛、金剛界の大曼荼羅と成りたまふ。一切如來の大曼荼羅と爲り、出で已りて世尊毘盧遮那佛の心に入り、聚りて一體と爲り、金剛輪の形を生じて佛の掌中に住す。彼金剛輪の形より一切世界微塵等の如來の身を出す。纔發心轉法輪の故に、金剛薩埵の三摩地極堅牢の故に、聚りて一體と爲り、纔發心轉法輪菩薩摩訶薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住して、此嗢陀南を說きたまはく、

奇しき哉金剛輪、我は金剛の勝持なり
纔に發心するに由るが故に、能く妙法輪を轉ず

時に彼纔發心轉法輪大菩薩の身、世尊の心より下つて一切如來の左の月輪に依りて住して、復敎令を請ふ。時に世尊、一切如來輪に入りたまふ。金剛三摩地と名く。一切如來の大曼荼羅三昧耶もて、無餘の有情界を盡して、得不退轉法輪に入り、一切安樂悅意を受けしむるが故に、乃至一切如來の正法輪を轉ずる最勝悉地の故に、則ち彼金剛輪を纔發心轉法輪大菩薩摩訶薩の雙手に授與す。則ち一切如來、金剛名を以て金剛場と號す。金剛場

【能く一切の法等】若し法輪を轉ぜば能く惡を轉じて善を生じ、二執の垢を淨除して、清淨法身を顯得す、一切諸佛、常に此事を行ずる故にいふ。
【二六】第四に無言大菩薩授金剛陀羅尼速成就智慧灌頂門即ち金剛語を明す。
【嚩日囉婆沙】金剛說と譯す、能く有情を護念して一切の惡惠を斷除して如來法界辨を得しむ。
【念誦の形】舌根なり。
【自然密】隱密妙理幽微にして外道二乘の所知に非ざる故。
【祕密語】眞言陀羅尼なり。

灌頂したまふ時に、彼金剛場菩薩摩訶薩、彼金剛輪を以て、一切如來をして不退轉に安立せしめて、此嗢陀南を說きたまはく、

　此は是れ一切佛、能く一切の法を淨めたまふ
　是れ則ち不退轉なり、亦菩提場と名く

(二六)爾時、婆伽梵、復無言大菩薩摩訶薩の三昧耶に入り、法加持を出生したまふ。金剛三摩地と名く。一切如來の念誦の三昧耶を一切如來心と名く。自心より、

　嚩日囉二合婆沙を出したまふ。

一切如來の心より纔に出し已りて、即ち彼婆伽梵金剛手、一切如來の法文字と爲り、出で已りて世尊毘盧遮那佛の心に入り、聚りて一體と爲り、金剛念誦の形を生じて佛の掌中に住す。彼金剛念誦の形より、一切世界の微塵等の如來の身を出す。一切如來法性等もて一切佛の神通遊戲を作す。妙語言の故に、金剛薩埵三摩地極堅牢の故に、聚りて一體と爲り、無言大菩薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住して、此嗢陀南を說きたまはく、

　奇しき哉自然密、我を祕密語と名く
　所說の微妙の法、諸の戲論を遠離せり

時に彼無言大菩薩の身、世尊の心より下りて一切如來の後の月輪に依りて住して復教令を請ふ。時に世尊、一切如來祕密語に入りたまふ。金剛三摩地一切如來語智三昧耶と名く。一切の安樂悅意を受くるが故に、乃至一切如

來の語の祕密の體性の最勝の悉地を得るが故に、則ち彼金剛念誦を無言大菩薩摩訶薩の雙手に授與す。則ち一切如來、金剛名を以て金剛語と號す。金剛語灌頂したまふ時、金剛語菩薩摩訶薩、彼金剛念誦を以て一切如來と共に談論して、此嗢陀南を說きたまはく、

此は是れ一切佛、金剛念誦と名く
一切如來に於て、眞言速に成就す

金剛法智の性と、一切如來の智慧と、大轉の輪智と、一切如來の語、輪轉戲論の智と、此は是れ一切如來の大智の薩埵なり。

金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經卷上　終

金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大敎王經　卷中

特進試鴻臚卿大興善寺三藏沙門大廣智不空　詔を奉じて譯す

大曼荼羅廣大儀軌品之二

爾時、婆伽梵、復一切如來の毘首羯磨大菩薩の三昧耶に入りたまふ。羯磨加持を出生す。金剛三摩地と名く。一切如來の羯磨の三昧耶なり。一切如來心と名く。自心より、嚩日囉羯磨を出したまふ。

一切如來の心より、纔に出し已りて一切如來羯磨平等智もて善く通達するが故に、金剛薩埵の三摩地なり。即ち婆伽梵持金剛に從ひ、一切如來の羯磨光明と爲りたまふ。出で已りて彼一切如來羯磨光明を以て一切有情界を照耀して一切如來の羯磨界と爲す。其れ一切如來の羯磨界を盡し、世尊毘盧遮那佛の心に入りて聚りて一體と爲り、量、一切虛空界に遍す。則ち一切如來の羯磨界の故に、羯磨金剛形を生じて佛の掌中に住す。則ち羯磨金剛の形より、一切世界の微塵等の如來の身を出し、一切世界に於て、一切如來の羯磨等もて一切の佛の神通遊戲を作し、一切如來の無邊の事業を作すが故に、金剛薩埵の三摩地極堅牢の故に、聚りて一體と爲り、一切如來の毘首羯磨大菩薩摩訶薩の身を生じ、世尊毘

【一】第四に北方不空成就如來の四親近として、一切如來大精進門の四菩薩を明す、第一に毘首羯磨大菩薩授金剛羯磨輪智灌頂門卽ち金剛業を明す。

【嚩日囉羯磨】金剛業と譯す。

【羯磨金剛の形】この三股金剛杵を十字に交へ又へたるもの、事業成辨の義を表す。

【我一切の業等】諸佛の不空を見るを以ての故に一切微塵界に遍滿し、諸佛を供養する事業有情を利益する事業多し。

【功無うして等】若し不空法界の極理を證すれば、功用を作さずして任運に廣大の佛事を起作す。

【能く金剛の業を轉ず】若し業智の所作、能く壞する者無くば、能く此等堅牢の事業を作す故。

【金剛羯磨性智】成所作智。

【羯磨平等の處等】羯磨印を以て一切佛事を建作する故

【業を以て業に安す】究竟智を以て分得智に安置する故、

【(二)】鬪戰勝精進大菩薩授金剛甲冑智灌頂門、即ち金剛護を明す。

【嚩日囉路乞沙】

盧遮那佛の心に住して、此嗢陀南を說きたまはく、

　奇しき哉佛の不空、我一切の業多し
　功無うして佛の益を作し、能く金剛の業を轉ず

爾時、毘首羯磨大菩薩の身、世尊の心より下りて一切如來の前の月輪に依りて住して、復教令を請ふ。時に世尊、一切如來の不空金剛三昧耶に入りたまふ。金剛三摩地と名く。一切の供養等の無量不空の一切業の軌儀廣大の三昧耶を轉じ、無餘有情界を盡し、一切悉地を作し、一切安樂悅意を受けしむるが故に、乃至一切如來の金剛羯磨性智と神境通の果とを成就するが故に、則ち彼羯磨金剛を一切如來金剛羯磨大菩薩に授與したまふ。一切如來の羯磨轉輪王と爲りて、一切如來の灌頂を以て雙手に授與したまふ。則ち一切如來、金剛名を以て金剛毘首と號す。金剛毘首灌頂したまふ時に、彼金剛毘首菩薩摩訶薩、則ち羯磨金剛を自心に安立したまふ。一切如來を羯磨平等の處に安せしめて、此嗢陀南を說きたまはく、

　此は是れ一切佛、種種の勝業を作し
　我掌中に授與し、業を以て業に安じたまふ

(二)爾時、婆伽梵、復難敵精進大菩薩摩訶薩の三昧耶に入りたまふ。羯磨加持を出生し金剛三摩地と名く。一切如來の守護三昧耶なり。一切如來心と名く。自心より、

　嚩日囉二合路乞沙二合を出したまふ。

一切如來の心より、纔に出し已りて、即ち彼婆伽梵金剛手、衆多の堅固の甲冑と爲る。

出で已りて世尊毘盧遮那佛の心に入りたまふ。聚りて一體と爲り、大金剛甲冑の形を生じて佛の掌中に住す。彼金剛甲冑の形より、一切世界の微塵等の如來の身を出す。一切如來の守護儀軌廣大の事業等もて、一切佛の神通遊戲難敵精進を作すが故に、金剛薩埵の三摩地極堅牢の故に、聚りて一體と爲り、難敵精進大菩薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住して、此嗢陀南を說きたまふ。

奇しき哉精進の甲、我は固くして堅固の者なり
堅固の無身に由りて、金剛の勝身を作す

時に彼難敵精進大菩薩の身、世尊の心より下りて、一切如來の右の月輪に依りて住して、復教令を請ふ。時に世尊、一切如來の堅固に入りたまふ。金剛三摩地と名く。一切如來の精進波羅蜜の三昧耶をもて盡無餘の有情界を救護して、一切安樂悅意を受けしむるが故に、乃至一切如來の金剛身の成就果を得るが故に、則ち金剛甲冑をもて難敵精進大菩薩の雙手に授與す。則ち一切如來、金剛名を以て金剛慈友と號す。金剛慈友灌頂したまふ時に、彼金剛慈友菩薩摩訶薩、金剛の甲冑を以て一切如來に被せしめて、此嗢陀南を說きたまはく、

此は是れ一切佛、最勝慈の甲冑なり
堅精進の大護なり、名けて大慈友と爲す

(三)爾時、婆伽梵復摧一切魔大菩薩摩訶薩の三昧耶に入りたまふ。羯磨加持を出生し金剛三摩地と名く。一切如來の方便の三昧耶なり。一切如來心と名く。自心より、

金剛護と譯す。

【精進の甲】大慈三摩地智、若し大慈を以て其身を莊嚴せば敢て壞する者無き故に。

【固くして堅固】此金剛慈は諸教に勝れ、彼教の慈悲は極理の所生に非ざるを以ての故。

【慈友】大慈悲精進の甲冑を被て、生死海に遊戲し、諸の衆生類に隨つて、厭捨心を生ぜず、終に智地に至らしむる故に名く。

【三】第三に摧伏一切魔大菩薩授金剛牙器杖智灌頂門即ち金剛牙を明す

【嚩日囉藥乞灑】金剛盡或は食と譯す。大力の魔を食ひ盡すの義。

【有形寂靜】佛菩薩等の寂靜大悲の身なり。又一切菩薩をして三摩地智を受用せしめん爲の故に、金剛藥叉暴怒の形を成ずるなり。

【如來を恐怖す】如來は一切の恐怖を遠離するも、但衆生の爲に此相を示現し、又因位菩

嚩日囉二合藥乞灑二合を出したまふ。

一切如來の心より纔に出し已りて、即ち彼婆伽梵持金剛、衆多の大牙器仗と爲る。出で已りて世尊毘盧遮那佛の心に入る。聚りて一體と爲り、金剛牙の形を生じて、佛の掌中に住す。彼金剛牙の形より、一切世界の微塵等の如來の身を出して、一切降伏暴怒等を作し、一切佛の神通遊戲を爲し、一切の魔を善く摧伏するが故に、金剛薩埵の三摩地極堅牢の故に、聚りて一體と爲り、摧一切魔大菩薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住して、此嗢陀南を說きたまはく。

奇しき哉大方便、諸佛の慈愍なり

有形寂靜なるに由りて、暴怒の形と作ることを示す

時に彼摧一切魔大菩薩の身、世尊の心より下りて、一切如來の左の月輪に依りて住して復教令を請ふ。時に世尊、一切如來の極怒金剛三摩地に入りたまふ。一切如來難調を調伏し、無餘の有情界を盡して無畏を施し、一切の安樂悅意を受けしむるが故に、乃至一切如來の大方便智と神境通の最勝悉地の果とを得るが故に、則ち彼金剛牙器仗をもて、彼摧一切魔大菩薩の雙手に授與す。則ち一切如來金剛名を以て金剛暴怒と號す。金剛暴怒灌頂したまふ時に、彼金剛暴怒菩薩摩訶薩、彼金剛牙器仗を以て自の口中に安じ、一切如來を恐怖せしめて、此嗢陀南を說きたまはく、

此は是れ一切佛、諸の難調を調伏したまふ

薩及び衆生を恐怖せしむるをいふ。

【四】第四に如來拳大菩薩授金剛縛智灌頂門、卽ち印金剛拳を明す。

【嚩日囉散地】 金剛拳と譯す。

【金剛縛の形】 外縛の形なり。

【堅縛】 能く衆生をして善法に住せしむる故に、縛と又有情煩惱の堅縛を解し、所に隨つて名を得る故にいふ

【堅三昧耶】 如來拳薩埵は卽ち是れ堅三摩地此外に別身無き故なり、

金剛牙の器仗なり、方便もて慈愍する者なり

(四)爾時、婆伽梵、復一切如來拳大菩薩摩訶薩の三昧耶に入りたまふ。羯磨加持を出生し金剛三摩地と名く。一切如來の身口心の金剛縛の三昧耶なり。一切如來心と名く。自心より、

嚩日囉二合散地を出したまふ。

一切如來の心より纔に出し已りて、卽ち彼婆伽梵持金剛、一切如來の一切印縛と爲る。出で已りて世間毘盧遮那佛の心に入り、聚りて一體と爲り、金剛縛の形を生じて佛の掌中に住す。彼金剛縛形より一切世界の微塵等の如來の身を出す。出し已りて一切世界に於て一切如來の印縛智等もて、一切佛の神通遊戲を作したまふ。一切如來の拳もて善く縛するが故に、金剛薩埵の三摩地極堅牢の故に、聚りて一體と爲り、一切如來の拳大菩薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住して此嗢陀南を說きたまはく、

　奇しき哉妙堅縛、我は堅三昧耶なり

　諸の意樂を成ずるが故に、解脫者を縛と爲す

時に彼一切如來拳大菩薩の身、世尊の心より下りて、一切如來の後の月輪に依りて住して復敎令を請ふ。時に世尊、一切如來の三昧耶に入りたまふ。金剛三摩地と名く。一切如來の三昧耶もて無餘の有情界を盡し一切如來の聖天をして一切の悉地を現驗し、一切安樂悅意を受けしむるが故に、乃至一切如來の一切智智印の主宰の最勝の悉地の果を得るが故に、則ち彼金剛縛を一切如來の金剛拳大菩薩摩訶薩の雙手に授與したまふ。則ち彼一切如來、

【速に諸印を成ず等】諸佛の印智は此に依らざる無き故に速成諸印といふ、若し依らざれば、諸印成ぜず、印成ぜざるが故に三昧耶を越ゆ、若し此智に依る時は一切智成就する故に不越三昧耶といふなり。

【五】第二段に四波羅蜜を明す中、四に分ち、初に如來部中金剛波羅蜜一切如來金剛三摩地智に就て。

【薩怛嚩】有情の義。

【嚩日囉】金剛女なり。

【堅の無身に由る】法性の身は妄分別の起作する所に非ず、色に非ずして

金剛名を以て金剛拳と號す。金剛拳灌頂したまふ時に、彼金剛拳菩薩摩訶薩の金剛縛を以て一切如來を縛して、此嗢陀南を說きたまはく、

此は是れ一切佛の、印縛大堅固なり
速に諸印を成ずるが故に、三昧耶を越えず

一切如來の供養廣大儀軌の業と、一切如來の大精進堅固の甲冑と、一切如來の大方便と、一切如來の一切印縛智と、是の如きは一切如來の大羯磨薩埵なり。

(五)爾時、不動如來、世尊毘盧遮那の一切如來智を成就し已りて、一切如來の智を印するが故に、金剛波羅蜜三昧耶に入りたまふ。所生の金剛加持を金剛三摩地と名く。一切如來の金剛三昧耶なり。一切如來の印と名く。自心より、

薩怛嚩日囉を出したまへり。

一切如來の心より纔に出し已りて、金剛光明を出す。彼金剛光明門より卽ち彼婆伽梵持金剛、一切世界の微塵等の如來の身と爲りて一切如來智を印し、復聚りて一體と爲り、一切世界の量に等しく大金剛形を生じて世尊毘盧遮那佛の前の月輪に依りて住して、此嗢陀南を說きたまはく、

奇しき哉一切佛、薩埵金剛の堅なり
堅の無身に由るが故に、金剛の身を獲得す

(六)爾時、世尊寶生如來、世尊毘盧遮那の一切如來智を印したまふが故に、寶波羅蜜の三昧

耶に入る。所生の寶金剛加持を金剛三摩地と名く。金剛三昧耶を自印と名く。自心より、

囉怛那嚩日離二合を出したまふ。

一切如來の心より纔に出し已りて寶光明を出す。彼寶光明より、卽ち彼婆伽梵持金剛、一切世界の微塵等の如來の身と爲りて一切如來の智を印し、復聚りて一體と爲り、一切世界の量に等しく大金剛寶形を生じて、世尊毘盧遮那佛の右の月輪に依りて住して、此嗢陀南を說きたまはく。

奇しき哉一切佛、我を寶金剛と名く

一切の印業に於て、堅灌頂の理趣なり

(七)爾時、世尊觀自在王如來、世尊毘盧遮那の一切如來智を印したまふが故に、法波羅蜜の三昧耶に入り、所生の法金剛加持を金剛三摩地と名く。法三昧耶を自印と名く。自心より、

達磨嚩日離二合を出したまふ。

一切如來の心より纔に出し已りて、蓮花光明を出す。彼蓮華光明より卽ち彼婆伽梵持金剛、一切世界の微塵等の如來の身と爲りて、一切如來の智を印し、復聚りて一體と爲り、一切世界の量に等しく大金剛蓮華形を生じて、世尊毘盧遮那佛の後の月輪に依りて住して、此嗢陀南を說きたまはく、

奇しき哉一切佛、法金剛我淨なり

自性淸淨なるに由りて、貪染をして無垢ならしむ

色、色に非ざるを以ての故に法界は俱に無、而も色を以ての故に法界は俱に有、有に卽して無の故にいふ。無に卽して有の故に獲得金剛身といふ。

【六】二に寶波羅蜜一切如來金剛寶灌頂三摩地智を明す。

【寶】如來智海自利利他福德寶珠。

【一切印業】十方三世一切佛の智印

【堅灌頂の理趣】かの諸如來の智印に於て印は堅固たり寶灌頂の趣向する所、譬へば火炎の必ず害に迎るが如く、三世の諸佛此寶灌頂に賴らざるなきなり。

【七】第三法波羅蜜三摩地所生加持金剛三摩地智を明す、

(八)爾時、世尊不空成就如來、毘盧遮那の一切如來智を印したまふが故に、一切波羅蜜三昧耶に入る。所生の金剛加持を金剛三摩地と名く。一切三昧耶を自印と名く。自心より、

羯磨嚩日離二合をいだしたまふ。

一切如來の心より纔に出し已りて、一切羯磨光明を出す。彼一切如來の羯磨光明より、卽ち彼婆伽梵持金剛、一切世界の微塵等の如來の身と爲りて、遍く一切如來智を印し、復聚りて一體と爲り、一切世界の量に等しく、面を一切處に向けて大羯磨金剛形を生じて、世尊毘盧遮那佛の左の月輪に依つて住して、此嗢陀南を說きたまはく、

奇しき哉一切佛、我名は業金剛なり
一は一切を成ずるに由りて、佛界に善く業を作す

一切如來の智三昧耶と、大灌頂と、金剛の法性と、一切供養と、是の如きは一切如來の大波羅蜜なり、

(九)爾時、世尊毘盧遮那佛、復一切如來の適悅供養三昧耶に入りたまふ。所生を金剛三摩地と名く。一切如來族の大天女なり。自心より、

嚩日囉二合邏西を出したまふ。

一切如來の心より纔に出し已りて、金剛印を出す。彼金剛印門より則ち彼婆伽梵持金剛、一切世界の微塵等の如來身と爲り、復聚りて一體と爲り、金剛嬉戲大天女と爲りたまへり。金剛薩埵の如くして、一切の身性種種の形色威儀あり。一切莊嚴の具もて一切如來族を攝

【八】第四に一切如來三摩地羯磨波羅蜜一切如來作佛事業智を明す。

【一切佛】毘盧遮那佛のこと。

【多業の金剛】彼佛の大智海中の成所作智をいふ、諸佛に奉事し、有情を利益する故多業といふ。

【一は一切を成ず等】一智より無量の用を起して佛世界に滿ず。

【九】第三段に內外四供養を明す中初に毘盧遮那如來金剛天女を化出し外の四方如來を供養する門を明す。中を四に分け、今

初に一切如來喜愛密供養菩薩三摩地一切如來安樂悅意智に就て。

【適悅供養三昧耶】若し供養祕密極理を了せば能く有無を遮し、能く有無を照す。

【遊戲】戲と譯す歡喜の義なり。

【供養を貪染等】無食染の大食染を縁じ能く諸の供養を成ず。

【一〇】第二に一切如來寶鬘灌頂供養一切如來覺分智に就て。

【摩梨】鬘と譯す

【我無比等】諸の供養中等輪有ることなき故。

【敎勅を受けて等】一切に勝る故に諸の如來を敎へて供養を受けしむるなり。

【一一】第三に一切如來歌詠供養菩薩三摩地一切如來偈頌三摩地智に就て。

【儗帝】歌と譯す

するに、金剛薩埵女なり。世尊不動如來の曼荼羅の左邊の月輪に依りて住して、此嗢陀南を說きたまはく、

奇しき哉比有ること無し、諸佛の中の供養なり
供養を貪染するに由りて、能く諸の供養を轉ず

〔一〇〕爾時、世尊毘盧遮那、復一切如來の寶鬘灌頂三昧耶に入りたまふ。所生を金剛三摩地と名く。一切如來族の大天女なり。自心より、

縛日囉二合摩梨を出したまふ。

一切如來の心より、纔に出し已りて大寶印を出したまふ。彼大寶印より則ち彼婆伽梵持金剛、一切世界の微塵等の如來の身と爲り、復聚りて一體と爲り、金剛鬘の大天女と爲りて世尊寶生如來の曼荼羅の左邊の月輪に依りて住して、此嗢陀南を說きたまはく、

奇しき哉我無比、稱へて寶供養と爲す
三界に於て王として勝れたり、敎勅を受けて供養す

〔一一〕爾時、世尊毘盧遮那、復一切如來の歌詠供養の三昧耶に入りたまふ。所生を金剛三摩地と名く。一切如來族の大天女なり。自心より、

縛日囉二合儗反以帝を出したまへり。

一切如來の心より、纔に出し已りて一切如來の法印を出したまふ。彼一切如來の法印より、則ち彼婆伽梵持金剛、一切世界の微塵等の如來の身と爲り、復聚りて一體と爲り、金

【諸の見者】如來は明に諸法を見るが故。
【此供喜に由るが等】供とは不思議の理を供養す、此理滋味にして聖をして歡喜せしむ。
【一二】第四に一切如來供養一切如來無上供養羯磨智に就て。
【儞哩帝曳】舞と譯す。遍法界の神通舞戯なり。
【一三】以下第二に四方如來各一金剛女を化し、毘盧遮那世尊を供養する

剛歌詠大天女と爲りて、世尊觀自在王如來の左邊の月輪に依りて住して、此嗢陀南を說きたまはく、

奇しき哉歌詠を成じて、我諸の見者に供す
此供喜に由るが故に、諸法響の應ふるが如し

（一二）爾時、世尊毘盧遮那、復一切如來の舞供養に入りたまふ。所生を金剛三摩地と名く。一切如來族の大天女なり。自心より、

嚩日囉二合儞哩二合帝曳を出したまふ。

一切如來の心より、纔に出し已りて、一切如來の舞廣大の儀を出したまふ。彼より一切如來の舞供養の儀を出す。則ち彼婆伽梵持金剛、一切世界の微塵等の如來の身と爲り、復聚りて一體と爲り、金剛舞の大天女と爲りて、世尊不空成就如來の左邊の月輪に依りて住して、此嗢陀南を說きたまはく、

奇しき哉廣供養、諸の供養を作すが故に、
金剛の舞儀に由りて佛の供養を安立す

一切如來の無上安樂悅意三昧耶と、一切如來の鬘と、一切如來の諷詠と、一切如來の無上の作供養業となり。是の如きは一切如來の祕密の供養なり。

（一三）爾時、世尊不動如來、毘盧遮那如來の供養に答へ作るが故に、一切如來の能悅澤の三昧耶に入りたまふ。所生を金剛三摩地と名く。一切如來の婢使なり。自心より、

門中、四に分つ、切に一切如來香供養能令滋潔菩薩三摩地所生金剛攝智に就て。

【杜閉】香と譯す

【大供養】焚香の雲海は法界に遍周し、見聞覺知せしめ、臭穢の煩惱を破し、適悅を獲得し、遍く諸佛に入り悅樂歡喜す。

【薩埵の遍入等】如來の智印、衆生を捨せず、遍く其中に入る。

【一四】第二に一切如來金剛花供養菩薩三摩地一切如來寶莊嚴具供養三摩地智に就て。

【補澁閉】花と譯す。

【花供養等】金剛華菩薩、微妙の覺花もて諸佛に奉獻し、能く衆生に安樂の嚫を與ふ。

嚩日囉二合杜閉を出したまふ。

一切如來の心より、纔に出し已りて則ち彼婆伽梵持金剛、種種の儀の燒香の供養雲海嚴飾と爲り、一切の金剛界に舒遍す。出で已りて彼燒香供養雲海より、一切世界の微塵等の如來の身を出したまふ。復聚りて一體と爲り、金剛燒香天女の身と爲る。世尊の金剛摩尼寶峯樓閣の隅の左邊の月輪に依りて住して、此嗢陀南を說きたまはく、

奇しき哉大供養、悅澤して端嚴を具せり
薩埵の遍入に由りて、速疾に菩提を證す

（一四）爾の時、世尊寶生如來、毘盧遮那如來の供養に答へ奉るが故に、寶莊嚴の供養三昧耶に入りたまふ。所生を金剛三摩地と名く。一切如來の承旨の大天女なり。自心より、

嚩日囉二合補澁閉二合を出したまふ。

一切如來の心より、纔に出し已りて、即ち彼婆伽梵持金剛、一切の花供養嚴飾と爲りて一切の虛空界に舒遍す。出し已りて、彼一切花供養嚴飾より、一切世界の微塵等の如來の身を出す。出し已りて、復聚りて一體と爲り、金剛花の天女の形と爲り、如來の金剛摩尼寶峯樓閣の隅の左邊の月輪に依りて、住して此嗢陀南を說きたまはく、

奇しき哉花供養、能く諸の莊嚴を作す
如來の寶性に由りて、速疾に供養を獲

（一五）爾の時、世尊觀自在王如來、世尊毘盧遮那の供養に答へ奉るが故に、一切如來の光明

【如來の實性等】實性は諸の嚴具を備ふ、此實性より無邊種々の嚴具を出して諸如來をして花供養を得しむる故。

【三】第三に一切如來證光明供養莊嚴菩薩三摩地一切如來光明遍法界智に就て。

【路計】明と譯す。無盡の燈明なり。

【廣大供養】塵界に遍周して諸佛を供養し、及び有情をして無明の暗を破せしむる故に。

【端嚴】是淸淨の義、謂く、本際淸淨の故に諸法淸淨、諸法淸淨の故に般若亦淸淨なるをいふ。

【四】第四に一切如來塗香供養三摩地是一切如來戒三摩地慧解脫知見香智に就て、

【健題】香と譯す

【塗香供養】如來の五分法身を開發

供養三昧耶に入りたまふ。所生を金剛三摩地と名く。一切如來の女使なり。自心より、

嚩日囉二合路計を出したまふ。

一切如來の心より、纔に出し已りて、即ち彼婆伽梵持金剛、一切の光明界の供養の嚴飾を出して、盡法界に舒遍す。彼一切の光明界の嚴具より、一切世界の微塵等の如來の身を出したまふ。出し已りて、復聚りて一體と爲り、金剛の光明の天女の身と爲る。世尊の金剛摩尼寶峯樓閣の隅の左邊の月輪に依りて住して、此嗢陀南を說きたまはく、

奇しき哉我廣大なる、燈の端嚴なるを供養す

速に光明を具するに由りて、一切の佛眼を獲

（一六）爾時、世尊不空成就如來、毘盧遮那如來供養に答へ奉るが故に、一切如來塗香供養の三昧耶に入りたまふ。所生を金剛三摩地と名く。一切如來の婢使なり。自心より、

嚩日囉二合健題を出したまふ。

一切如來の心より纔に出し已りて、即ち彼婆伽梵持金剛、一切塗香供養の嚴飾を出して一切の法界に舒遍す。彼一切塗香供養の嚴飾より、一切世界の微塵等の如來の身を出したまふ。出で已りて復聚りて一體と爲り、金剛塗香天女の身と爲る。世尊の金剛摩尼寶峯樓閣の隅の左邊の月輪に依りて住して、此嗢陀南を說きたまはく、

奇しき哉香の供養、我微妙の悅意なり

如來の香に由るが故に、一切の身に授與す

一切如來の智遍入と、大菩提の支分の三昧耶と、一切如來の光明と、戒定慧解脫解脫知見の塗香と、是の如きは一切如來の教令を受くる女なり。

（一七）爾時、世尊毘盧遮那如來、復一切如來の三昧耶鉤三昧耶に入りたまふ。所生の薩埵を金剛三摩地と名く。一切如來の一切の印の衆主なり。自心より、

嚩日囉二合矩賒を出したまふ。

一切如來の心より、纔に出し已りて則ち彼婆伽梵持金剛、一切如來の一切の印衆を出したまふ。彼一切如來の一切印衆より、一切世界の微塵等の如來の身を出して、復聚りて一體と爲り金剛鉤大菩薩の身と爲る。世尊の金剛摩尼寶峯樓閣の金剛門の中の月輪に依りて住し、一切如來三昧耶を鉤召して、此嗢陀南を說きたまふ。

奇しき哉一切佛、鉤誓我堅固なり

我遍く鉤召するに由りて、諸の曼荼羅に集む

（一八）爾時、世尊、復一切如來の三昧耶引入摩訶薩埵の三昧耶に入りたまふ。所生を金剛三摩地と名く。一切如來の印入の承旨なり。自心より、

嚩日囉幡賒を出したまふ。

一切如來の心より、纔に出し已りて、則ち彼婆伽梵持金剛、一切如來の三昧耶の印入の印衆を出す。彼一切如來の三昧耶の印入の印衆より、一切世界の微塵等の如來身を出して、復聚りて一體と爲りて、金剛索大菩薩の身と爲る。世尊金剛摩尼寶峯樓閣の寶門の間の月

するをいふ。【微妙の悦意】樂生熱を除き法清涼を得る故。【如來香】體性中の智印、諸佛を莊嚴し有情を救濟す。【一七】第四に鉤索鎖鈴攝入四大護金剛を明す中、四あり。初に一切如來鉤菩薩三摩地一切如來三摩地鉤召智に就て、【印の衆主】一切の諸印は菩提心四攝を以て首と爲す故に主とす。【矩賒】鉤といふ。【鉤誓】此三昧耶は諸佛の本誓にして鉤は一切に遍く動壞することなき故堅固といふ。【我遍く、鉤召する等】四攝の鉤誓は法界に遍周して一切を金剛道場に請召するをいふ。【一八】第二に一切如來金剛罥索大菩薩三摩地引一切如來智門に就て。

輪に依りて住し、一切如來を印入して、此嗢陀南を說きたまはく、

奇しき哉一切佛、我金剛索を堅くす
設ひ諸の微塵に入るとも、我復此に引入せん

(一九)爾時、世尊復一切如來の三昧耶鏁大薩埵の三昧耶に入りたまふ。所生を金剛三摩地と名く。一切如來の三昧耶、一切如來を縛する使なり。自心より、

縛日囉二合薩普二合吒を出したまふ。

一切如來の心より、纔に出し已りて則ち彼婆伽梵持金剛、一切如來三昧耶を出す。縛を印衆とする彼一切如來三昧耶の縛の印衆より出し已りて、一切世界微塵等の如來の身を出す。復聚りて一體と爲り、金剛鏁大菩薩の身と爲りて、世尊の金剛摩尼寶峯樓閣の法門の中の月輪に依りて住して、此嗢陀南を說きたまはく、

奇しき哉一切佛の、大堅金剛の鏁
諸縛をして脫せしむる者なり、有情の利の故に縛す

(二〇)爾時、世尊復一切如來遍入大菩薩の三昧耶に入りたまふ。所生を金剛三摩地と名く。一切如來の一切印の僮僕なり。自心より、

縛日囉二合吠捨を出したまふ。

一切如來の心より、纔に出し已りて則ち彼婆伽梵持金剛、一切如來の印主と爲りて、出し已りて、彼一切如來の印主より、一切世界微塵等の如來の身を出したまふ。復聚りて一

【播賒】索と譯す

【諸の微塵に入る等】智印の力は但賢聖を引入するのみに非ず、諸界の塵數に遊入す。

【一九】第三に一切如來鏁大菩薩三摩地一切如來三摩地縛智に就て。

【薩普吒】鏁と譯す。

【法門等】法とは大惠勝淨の法。門は是れ一切如來三摩地大惠、

【諸縛をして等】諸縛者とは諸の分極聖賢斷惑證理者をいふ。此等の衆をして他を利益せしむる故。

【二〇】第四に一切如來遍入大菩薩三摩地所生金剛三摩地一切如來金剛遍入智に就て。

【遍入】般若の妙普遍く一切賢聖の身心に入り、大樂を生ぜしめ、有情

體と爲りて、金剛遍入大菩薩の身と爲る。世尊の金剛摩尼寶峯樓閣の羯磨門の中の月輪に依りて住して、此嗢陀南を說きたまはく、

　奇しき哉一切佛、我堅金剛に入る
　一切主宰と爲り、亦即ち僮僕爲り

一切如來の三昧耶の鉤召と、引入と、縛と、調伏と、是の如きは一切如來の教令なり。

爾時、世尊、一切如來召集の爲の故に、金剛彈持の相を爲して、此一切如來召集加持の心を說きたまはく、

　嚩日囉二合三摩惹

由し刹那攞嚩須臾の頃に、一切如來彈指の相もて警覺し已りて、一切世界の雲海の中に遍ず。一切世界の微塵等の如來、幷に菩薩、曼荼羅に集會す。集り已りて金剛摩尼寶峯樓閣の世尊毘盧遮那如來の所に往詣す。至り已りて一切如來の足を禮する心を說きたまふ。

　唵薩嚩二合怛他孽多播那滿娜曩迦嚕彌

此性成就の眞言に由りて意に隨つて念誦し、一切如來を禮し已りて、此嗢陀南を說きたまはく、

　奇しき哉大普賢、菩薩の敬儀
　是れ如來の輪壇なり、如來を影現せしむ

時に十方の一切世界の集會の如來說きたまふこと已りて、一切如來の加持に由りて、一

自性の心內に普遍して菩提の大種智牙を開析する故に普智といふ。
【映捨】 遍入と譯す。
【調伏】 此菩薩精進の戶を守りて剛強難化の衆生を降伏す。
【二】 以下總門第二に善巧もて祕密智相を建立して衆生を攝し佛位に入らしむる利他の行なり。
【三摩惹】 三摩は平等、惹は召集を義とす。
【唵薩】 普賢の眞言、即ち金剛王を以て曼荼羅の諸佛を召集して禮敬を伸ぶるなり。
【性成就】 自性清淨心なり。
【意に隨ふ】 如來の自意に隨つて本不生際に住し他の爲に擾ぜざるなり。
【輪壇】 自性清淨心。

切の菩薩、曼茶羅に集會して毘盧遮那佛の心に入りたまふ。彼一切如來の心より、各各に自ら菩薩衆の曼茶羅を出し已りて、世尊毘盧遮那佛の金剛摩尼寶峯樓閣の周圍作壇の三摩地に依りて住して此嗢陀南を說きたまはく、

奇しき哉一切佛、廣大にして無始より生ず

一切塵數に由りて、佛の一性を獲得せり

爾時、婆伽梵一切如來、復集會を作して金剛界の大曼茶羅をして加持せしむるが故に、無餘の有情界を盡して一切を拔濟し、利益し、安樂することを得るが故に、乃至一切如來の平等智と、神境通と三菩提最勝成就の故に、婆伽梵一切如來主宰金剛薩埵無始無終大持金剛を請じ奉る。此一百八讃を以て請ず。

金剛勇と大心と、金剛の諸の如來と

普賢と金剛初と、我金剛手とを禮す

金剛王と妙覺と、金剛鉤と如來と

不空王金剛と、我金剛召とを禮す

金剛染と大樂と、金剛箭と能伏と

魔欲と大金剛と、我金剛弓とを禮す

金剛善と薩埵と、金剛戲と大適と

歡喜王と金剛と、我金剛とを禮す

【時に十方の等】次に神變の相を現ず。

【自ら菩薩衆の曼茶羅】諸尊の曼茶羅各各等しきなり

【無始生】本來不生をいふ。

【一切塵數等】塵數は是れ差別性、一性は無差別性、

【大持金剛】五智印を執持し、諸金剛に勝るるが故にいふ。

【金剛勇と等】東方の諸德を歎ず。

【金剛寶と等】南方の諸德を歎ず。

【金剛法と等】西方の諸德を歎ず。

【金剛業と等】北方の諸德を歎ず。

金剛寶と金剛と、　金剛と空と大寶と
空藏の金剛峯と、　我金剛藏とを禮す
金剛威と大炎と、　金剛日と佛光と
金剛光と大威と、　我金剛光とを禮す
金剛幢と善利と、　金剛播と妙喜と
寶幢と大金剛と、　我金剛利とを禮す
金剛笑と大笑と、　金剛笑と大奇と
愛喜と金剛勝と、　我金剛愛とを禮す
金剛法と善利と、　金剛蓮妙淨と
世貴と金剛眼と、　我金剛眼とを禮す
金剛利と大乘と、　金剛と劍仗器と
妙吉と金剛染と、　我金剛慧とを禮す
金剛因と大場と、　金剛輪の理趣と
能轉と金剛起と、　我金剛場とを禮す
金剛語と妙明と、　金剛誦と妙成と
無言と金剛成と、　我金剛語とを禮す
金剛業と教令と、　金剛廣と不空と

【寂靜の讃】能く二死散亂を休息して佛の大涅槃に契會せしむるが故に。

【大持金剛】毘盧遮那金剛薩埵。

【大乘現證】大持金剛、祕密乘を修行して現に法界の體を證するが故に。

【遍く大理趣】無緣の大慈悲を請うて諸の有情に普遍せしむるなり。

【爾時、婆伽梵等】諸佛の請求に依りて大日如來金剛の大曼荼羅を說く。

業金剛遍行と、我金剛巧とを禮す
金剛護と大勇と、金剛甲と大堅と
難敵と妙精進と、我金剛勤とを禮す
金剛盡と方便と、金剛牙と大怖と
摧魔と金剛峻と、我金剛忿とを禮す
金剛令と威嚴と、金剛能縛と解と
金剛拳と勝誓と、我金剛拳とを禮す
若し此名の百八の、寂靜の讃を持して
金剛の名を以て灌頂せば、彼亦是の如きを獲ん
若し此名を以て、大持金剛を讃じて
正意歌詠の者あらば、彼持金剛の如し
我等此名の、一百八名を以て讃す
願くば大乘現證、遍く大理趣を流さん
我等、世尊、願くば最勝の儀と
一切佛の大輪の、勝大の曼荼羅とを說きたまへと讃す

爾時、婆伽梵大持金剛、一切如來の請語を聞いて、一切如來の三昧耶の所生の加持金剛三摩地に入り、金剛界の大曼荼羅を說きたまふ。

次に當に遍く、勝大の曼荼羅を說くべし
由し金剛界の如し、名けて金剛界と爲す
教の如くして應に安坐すべし、曼荼羅の中に於て
大薩埵の大印もて思惟して、應に加持すべし
印に住して則ち當に起つべし、諸方を顧視し
倨傲して按行し、金剛薩埵を誦す
絣線を以て善く合せ、應量にして以て端嚴ならしめよ
線智を以て應に抨くべし、力に隨つて曼荼羅をなせ
四方に應に四門あるべし、四刹もて嚴飾し
四線もて交絡し、繒綵鬘もて莊嚴す
隅の分の一切處と、門戶と合處に
金剛寶を鋼飾せよ、應に外輪壇を抨くべし
彼中をば輪形の如くし、應に中宮に入りて
金剛線もて遍く抨くべし、八柱もて莊嚴せよ
金剛の勝柱に於て、應に五の輪壇を飾るべし
中曼荼羅に於ても、佛の形像を安立せよ
佛の一切の周圍の、曼荼羅は中に於て

【大薩埵の大印】五股金剛杵。

【倨傲】高拳の相卽ち慢の相。

【線智】五色線。

【四の刹】刹は寶幢柱なり。

【勝柱】前の八柱

【五の輪境】五佛の曼荼羅なり。

【佛の一切】四邊の一切の佛は中曼

茶羅を周圍せよとなり。

【四の勝三昧耶】四波羅蜜菩薩。

【金剛進にして歩む】金剛勢を以て踰過し四境に入るなり。

【金剛藏等】金剛寶を名けて藏、金剛輪を滿、金剛法を默、金剛利を淨とす。金剛巧とは菩薩なり。

【金剛女】内の四供なり。

【佛の供養】外の四供なり。

【摩訶薩】賢劫の十六尊なり。

【金剛の師】大阿闍梨なり。

四の勝三昧耶、次第に圖畫せよ
金剛進にして歩む、門の曼荼羅に於て
阿閦毘等の門もて、一切の佛を安立す
不動壇を作すべし、隣金剛持等なり
金剛藏等は、寶生の曼荼羅に滿てり
金剛眼淨等は、無量壽の輪壇なり
應に不空成の、金剛巧等の壇を畫くべし
輪の隅に安立し、應に金剛女を畫くべし
外壇には隅角に於て、應に佛の供養を畫くべし
門の中の一切處には、守護門の四業もて
外壇に安立して、摩訶薩を畫くべし
即ち勝三昧耶なり、印を結ぶこと儀則の如し
金剛の師入り已りて、摧印もて遍く入れ
此の諸の遍入の心もて
[illegible]聲もて請勅すること本教の如し、自身加持等
作し已りて自の名を稱し、應に金剛もて
薩埵金剛鈎を成ずべし、金剛師則ち結べ

召し集めて彈指を作して、應に一切佛を請すべし
刹那の頃に諸佛、並に金剛薩埵を
應に一切の壇に滿つべし、曼荼羅に集會して
則ち速疾に大印もて、金剛薩埵を觀ぜよ
一遍百八を稱す、結集に由り則ち喜ぶ
如來皆堅固なり、金剛薩を自成す
慈友もて而も安住す、諸門の一切の處に
鈎等もて業を作す、大羯磨の印を以て
三昧耶に安住す、即ち三昧耶
薩埵金剛等もて、應に大薩埵を成ずべし
弱吽鑁斛を誦すれば、則ち佛等の一切
大薩埵を召集し、鈎召し引入し已る
縛し已りて調伏せしむ、則ち密供養を以て
大威德を喜ばしめ、自ら有情の利に應じて
一切成ることを作さんと願へ、是の如きの諸壇の中は
金剛の師の事業なり

金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大敎王經卷中終

【一】以下は法界の衆生を曼荼羅に引入する作法を說く。器と非器とを揀擇せざるが故に結緣灌頂なり。

【世尊或は有情等】結緣の機を明す。慈覺の疏尾に、以下は第四に教授弟子の儀軌等を說く此門に廣く灌頂阿闍梨の軌範及び諸尊の祕密眞言印契等の法を說く。傳法の聖者心の裏に記錄す、是故に且く止むなりと。

【世尊復正法等】二には從顯入密の正機を明す。

金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經　卷下

特進試鴻臚卿大興善寺三藏沙門大廣智不空　詔を奉じて譯す

大曼荼羅廣大儀軌品之三

(一)次に當に廣く金剛の弟子の金剛大曼荼羅に入る儀軌を說くべし。中に於て我先づ盡無餘の有情界を入れしめて、拔濟し利益し安樂する最勝悉地の因果を說かん故に、此大曼荼羅に入るには、是器非器を應に簡擇すべからず。何を以ての故に。世尊、或は有情の大罪を作る者有り、彼此金剛界大曼荼羅に入りて、見已り、入り已りぬれば、一切の惡趣を離る。世尊、或は有情の諸利と飮食と貪欲とに染着して、三昧耶を憎惡するを先行とする等有り。是の如き等の類、意の愛樂に隨つて入り已らば、則ち一切の意願を滿ずることを得ず。世尊、或は有情有り、歌舞嬉戲飮食翫具を愛樂して、一切如來の大乘現證の法性を曉悟せざるに由るが故に、餘の天族の曼荼羅に入り、一切意願を滿じて無上を攝受し、能く愛樂歡喜を生ずる一切如來族の曼荼羅の禁戒に於て怖畏して入らず。彼惡趣壇路門に入るが爲に、應に此金剛界の大曼荼羅に入るべし、一切の適悅最勝の悉地安樂の悅意をして受用せしめんが爲の故に、能く一切の惡趣の現前の道を轉ずるが故に、世尊復正法に住せる有

【久しく禪定等】行者の顯教にありし位の歷劫の修行をいふ。解脫地とは十地。

【二】以下曼荼羅に引入する作法を明す、中初に四禮を明す、即ち阿閦寶生彌陀不空の四佛を禮するなり。

【角絡】偏袒右肩に袈裟をかくるが如くするをいふ。

【薩埵金剛の印】外縛二中指を立て合せたる針印なり

情有り、一切衆生の爲に、一切如來の戒定慧の最勝の悉地の方便、佛菩提を求むるが故に、久しく禪定解脫地等を修して、彼等を勞倦するもの、此金剛界の大曼荼羅に入らん。纔に入り已らば、一切如來の果すら尙し難からじ。何に況んや餘の悉地の類をや。

〔二〕次に當に且く先づ四禮を以て一切如來を禮すべし。全身臂を舒べて金剛合掌して、心臆を以て地に着けて東方を禮す。眞言に曰はく、

唵薩嚩怛他蘗多布儒開口呼跛薩他三合那耶怛麼二合南儞哩二合耶多夜彌薩嚩怛他蘗多嚩日羅二合薩怛嚩二合地瑟姹二合薩嚩二合𤚥

即ち前の金剛合掌を心に住せしめて、額を以て南方を禮す。眞言に曰はく、

唵薩嚩怛他蘗多布惹引毘曬迦耶怛麼二合南涅哩二合夜多夜彌薩嚩怛他蘗多嚩日囉二合囉怛那二合毘詵遮𤚥

即ち前の金剛合掌を頭に安じて、口を以て地に着け、西方を禮す。眞言に曰はく、

唵薩嚩怛他蘗多布惹鉢羅二合韈㗚二合多那夜怛麼南涅哩夜多夜彌薩嚩怛他他蘗多嚩日囉達磨鉢羅韈㗚多二合夜𤚥

即ち前の金剛合掌を心に當てて頂を以て地に着けて北方を禮す。眞言に曰はく、

唵薩嚩怛他蘗多布惹羯磨尼輕呼阿怛麼南涅哩夜多夜彌薩嚩怛他蘗多嚩日羅羯磨句路𤚥

則ち緋の繒を以て角絡して披き、緋の帛を以て面を覆ふ。弟子をして薩埵金剛の印を結ばしめて、此心を以てせよ。

三摩耶薩怛鑁二合

則ち二中指を以て花鬘を持せしめて、此心眞言を以て三摩耶吽に入れしめよ。入れ已りて是言を作さく、

阿儞也二合薩怛鑁二合薩嚩怛多蘖多句梨鉢囉尾瑟吒二合薩多二合娜悍諦嚩日囉枳惹二合那母怛跛二合那以使也二合弭曳那枳娘二合泥那怛鑁薩嚩怛他蘖多悉地囉比嚩囉二合鉢且二合嘶金反吉溪布那囉儞也二合悉馱藥囉惹那遮耶嚩二合耶涅哩二合瑟吒摩訶曼拏羅寫也二合羯哆二合尾閉二合麼帝三薩瑜尾也二合他儞帝丁翼反

金剛の阿闍梨、自ら應に薩埵金剛印を結び反して、弟子の頂に安いて、是言を作すべし。此は是れ三昧耶の金剛なり。汝が頂を摧くとも應に説くべからず。誓水を加持すること一遍して、弟子をして誓水を飲ましむ。眞言に曰はく、

嚩日羅薩怛嚩薩嚩延諦儞耶二合紇喇那曳婆摩嚩悉體丁以反哆揑尼逸反避儞也二合薩怛乞喃夜耶儞也二合儞沒嚕二合耶儞難那去闍嚩日路娜迦折

即ち弟子に告ぐらく、自今已後、汝婆跢我を觀ぜんこと金剛手の如くして、我應に言ふべき所を汝應に是の如く作すべし。汝、應に我を輕慢すべからず。汝をして災禍を招かしむること勿れ。死し已りて當に地獄に墮すべし。是の如きの語を作し已りて、唯願くば一切如來加持し、願くば金剛薩埵、金剛の阿闍梨に遍入したまへ。應に薩埵金剛の印を結んで是言を作すべし。

阿衍怛三摩欲呼開口嚩日嚂合二嚩日囉薩怛嚩弭底反丁以 薩蜜哩合二吮阿尾捨野都諦曳嚩合二嚩日囉枳孃那摩弩怛嚩嚩日囉引吠奢噁

則ち忿怒拳摧薩埵金剛の印を結んで、意に隨つて金剛語を以て大乘現證百字の眞言を誦せよ。則ち阿尾捨なり、纔に阿尾捨し已りて、則ち微妙の智を發生す。此に由りて他心を知り、他心を悟り、一切の事に於て三世を知る。其心則ち堅固なることを得。一切如來の教の中に於て、悉く一切の苦惱を除いて、一切の諸の惡趣を離れ、一切の有情に於て沮壞するもの無し。一切如來加持したまへ。一切の悉地見前して未曾有を得、喜悦安樂の悦意を生ぜん。此安樂等に由りて、或は三摩地を成就し、或は陀羅尼門、或は一切の意願皆滿足することを得。乃至一切如來の體性を成就せん。

則ち彼印を結んで、以て弟子の心を解き、此心眞言を誦せよ。

底瑟吒合二嚩日囉湼哩濁咩婆嚩捨濕嚩合二都咩婆嚩吃利娜閻咩地底瑟吒薩嚩悉䟦亭反上遮咩

鉢囉合二也車吽呵呵呵呵斛引

則ち其花鬘を以て、弟子をして大曼荼羅に擲げしめ、此心眞言を以てせよ。

鉢囉底車嚩日囉斛引

花の落つる處に隨つて、則ち彼尊成就す。則ち彼花鬘を取りて彼弟子の頭の上に繫けて、此心眞言を以てせよ。

唵鉢囉底佉哩紇拏怛嚩弭鈐

【忿怒拳摧薩埵】二手金剛拳にして二中指相鉤して咒を誦し畢りて掣き開く印、此を摧印ともいふ。

【阿尾捨】徧入といふ。

【金剛を以て】五股金剛杵。

薩怛嚩摩訶麼囉

此に由りて則ち大薩埵の攝受速に成就することを得。入り已りて則ち面を解くに、此心眞言を以てせよ。

唵嚩日囉薩埵嚩薩嚩延帝儞耶二合灼乞芻引二合娜伽合吒曩怛鉢二合囉烏娜伽吒野底丁以反薩嚩乞嚩嚩日囉二合灼乞嚩囉拏多藍

則ち見の眞言を誦すらく、

係嚩日囉波捨

則ち弟子をして次第に大曼荼羅を視しむ。纔に見已りて、一切如來加持し護念したまふこと、則ち金剛薩埵、彼弟子の心に住して、種種の光相遊戲神通を見しむ。曼荼羅を見るに由り、如來の加持に由るが故に、或は婆伽梵大持金剛の本形を示現したまふを見、或は如來を見たてまつる。此より已後、一切の義利、一切の意所樂の事、一切の悉地、乃至持金剛及び如來を獲得す。大曼荼羅を示し已りぬ。

則ち金剛を以て香水の瓶を加持し、弟子の頂に灌ぐに、此心眞言を以てす。

嚩日囉毘詵遮

則ち隨つて一の印を以て鬘を繫け、白の標幟を以て二手の掌中に安じ、心眞言を誦せよ。

阿儞也二合毘色羯多二合薩埵嚩二合麼斯沒代嚩日囉毘飾羯哆伊難帝薩嚩勃馱怛鑁二合吃哩紇拏二合嚩日囉蘇悉馱曳吽嚩日嚩地波底怛嚩二合麼毘詵遮彌底瑟姹二合嚩日羅三摩那薩怛鑁二合

【毘誂遮】灌頂の意。
【自の標識】五股杵なり。
【阿儞也…蘇悉馱史】この眞言は諸佛金剛灌頂儀、汝已如法灌頂竟、爲汝成如來體性故、汝應援此金剛杵の梵文なり。

則ち金剛の名を以て、灌ぐに、此心眞心を以てす。
唵嚩日羅薩怛嚩(二合)若摩毘誂遮弭嚩日囉那摩毘餔羯哆儞嚩日羅(二合)麼麼
金剛某甲、若し弟子の爲に名號を授く。應に係を加へて、用て之を呼ぶべし。已に廣く一切の曼荼羅に入る儀則を說きぬ。則ち弟子に問うて言へ、『汝愛樂は出生悉地智なりや。神通悉地智なりや。持明悉地智なりや。乃至一切如來の智最勝悉地智なりや。』彼所樂に隨つて應に之を說き、則ち義利悉地成辦の印智を教ふべし。
金剛形の藏に住せるを、當に心の中に於て觀ずべし
觀じ已りて地に住せば、則ち當に伏藏を見るべし
金剛形を觀じ已りて、空中に遍く觀ぜよ
若し隨つて墮つる處を見るは、彼則ち是れ伏藏なり
金剛形を舌に於て、智者是を觀ずべし
自ら此處に有りと言ふ。語已りて眞實を成ぜん
金剛形を一切にして、應當に自身を觀ずべし
遍く入りて彼に落つれば、其處是れ伏藏なり
彼等の心眞言に曰はく、
嚩日囉儞地囉怛那儞地達摩儞地羯摩儞地
次に應に金剛悉地の成辦の印智を教ふべし。

【水に金剛の形を成ず】水上に五股金剛杵を觀成するの意。

【安達怛】隱形の意。

金剛に入りて生じ已りて、水に金剛形を生ず
觀速に成就するに由りて、水の上に於て遊行す
復金剛を生じて入らしむ、身色日形の如し
是の如くなるを修習すれば、自然に佛形の如し
遍く自身に入りて、自身を空の如しと觀ず
樂に隨ひて修習し已つて、則ち安達怛を得
金剛自に入り已りて、自ら金剛の如しと觀ず
乃至踴りて上昇して、則ち虚空に行くことを得

是の如き等の眞言に曰はく、

嚩日囉若攞縛日囉嚕波縛日囉迦者嚩日羅麼唅

次に則ち金剛持明悉地成辨の印智を教ふべし。

應に月の形像を觀ず、上虚空に踴り
手に金剛を擎ぐれば、金剛の持明を得べし
月輪の上に昇り、應に金剛寶を觀ずべし
淨身の者は欲に隨つて、刹那に騰空を成ず
月輪に昇り已りて、手に金剛の蓮を持し
應に金剛の眼を觀ずれば、則ち持明の位を得べし

【速念堅固】堅固なることと念に隨つて速に成ること。

月輪の中に住して、應に業金剛を觀ずべし
　速に金剛巧を獲、則ち諸の持明を得ん
是の如き等の心眞言に曰はく、
嚩日羅達攞囉怛娜達攞播娜麼達攞羯麼達攞
次に則ち一切如來の最勝悉地成辦の印智を教ふべし。
　諸の金剛定に住して、虛空界を思へば
樂に隨つて金剛の、身刹那に騰空を成ず
　諸の淨等持に住して、最勝を修習すれば
五神通を獲得し、速疾の智成就す
金剛薩埵を觀じて、一切の空に變じぬれば
速念堅固なることと已りて、則ち持金剛と爲る
一切佛形と成りて、虛空を觀想すれば
諸佛の等持に由りて、則ち正覺を成ずることを得
是の如き等の眞言に曰はく、
嚩日囉嚩日囉述駄述駄薩怛嚩薩怛縛沒駄沒駄
如上は是れ一切悉地智の成辦なり。
次に當に弟子をして祕密堪忍の法を持せしむべし。初に曰く誓心の眞言を誦して曰はし

【婆伽に於て身を入れ】入我我入の觀。

むらく、

唵嚩日囉薩怛嚩二合薩嚩二合延諦儞耶二合吃喇那曳平薩摩嚩薩體反汀以哆埋反尼逸避儞也二合怛乞二合叉南夜也耶儞二合儞二合沒唱二合耶儞難那去闍

則ち是の如きの言を告ぐらく、「汝應に此誓心の眞言を越ゆべからず、汝をして災禍夭壽を招き、此身を以て地獄に墮せしむること勿れ。則ち應に祕密の印智を敎ふべし。金剛に入り已りて、等引して手もて微細の金剛の掌に拍つに由りて、山石すら尙し敬愛す。

次は是れ金剛拍の印なり。

金剛の儀に入り已りて、金剛縛し、掌を擊つ

微細の掌の法を以てすれば、山石すら尙し遍入す

如上の入の儀を以て、金剛縛を舒展し

勝拍應に等しく摧くべし、刹那に百族を壞す

微細遍入の儀、諸指以て等引し

金剛縛して解すれば、能く諸苦を奪勝す

次に當に祕密の成就を說くべし。婆伽に於て身を入れ、女人或は丈夫一切入り已ると想ひ、彼身を以て遍舒せしむ。

是の如き等の心眞言に曰はく、

【彼等を結ぶ】印を結ぶこと。

【三の金剛儀】身口意の三密なり。

嚩日囉縛笘嚩日囉尼捨嚩日囉訶那嚩日囉訶囉

即ち應に心眞言を授與し、已に自本尊の四智印を教ふべし。此儀則を以て弟子に告げて言はく、『汝愼んで餘人の未だ此印を知らざるに於て、一切應に指示すべからず。何を以ての故に。彼有情、大曼荼羅を見ずして、輙く彼等を結べは皆成就せず。則ち疑惑を生じて災禍を招き、速に死して無間大地獄に墮し、惡趣に墮せん。

次に當に一切如來の薩埵成就の大印智を說くべし。

心智より應に發すべし、應に金剛日を觀ずべし
自を觀して佛形と爲し、應に金剛界を誦すべし
此に由りて纔に成就すれば、智と壽と力と年とを獲ん
一切遍行することを得れば、佛體尚し難からず

此は是れ一切如來の現證菩提の印なり。

次に當に金剛薩埵成就の大印を結ぶことを說くべし。

倨傲して杵を抽擲し、等しく金剛慢を持して
身口心の金剛もて、金剛薩埵と成る
此遍行の印に由りて、諸欲生安樂なり
通と壽と力と勝色と、金剛薩埵の如し
三の金剛儀を以て、畫の如く順じて修習し

標幟の印と相應すれば、大薩埵を成就す
我今に諸教の、能成と及び所成とを説かん
成就者の大業、我今次第に説かん
毎日先づ時に依り、及び自ら加持等
作し已りて成ずること初の如し、然して後應に意に隨ふべし
次に當に廣く大印成就の儀則を説くべし。
金剛に遍入し已りて、大印儀則の如し
身の前に應當に結んで、大薩埵を思惟すべし
彼智薩埵を見て、應に自身を觀ずべし
鉤召し引入し縛し、喜せしめて成就を作せ
是の如き等の眞言に曰はく、
嚩日囉薩怛嚩二合噁
此は是れ金剛遍入の心なり。
嚩日羅薩怛嚩涅哩二合舍野
此は是れ大薩埵の觀念の心なり。
弱吽鑁斛引
此は是れ大薩埵の鉤召し引入し縛し喜せしむる心なり。

【我今事業を説かん】以下大曼茶羅を説く、即ち三十七尊なり。中に於て佛を觀じて等は大日、薩埵金剛は阿閦、寶金剛は寶生、法金剛は彌陀、業金剛は不空なり。

【金剛薩埵と成る等】東方の四菩薩

【佛に奉施し等】南方の菩薩。

三昧耶薩怛嚩二合を誦せよ、背後に遍入して而も月輪なり
中に於て薩埵を觀ずべし、我三昧耶薩怛鑁なり
彼薩埵の印に隨つて、修習して自身に觀ぜよ
金剛語以に成じて、能く諸印を成就す
弱吽鑁斛を誦して、身中に諸佛を入る
應に善思惟を作して、大印をして成就せしむべし
我今事業を説かん、金剛の業は無上なり
觀佛成就するに由りて、速に佛の自性を獲
薩埵金剛と成りて、諸佛の主宰と爲る
寶金剛を結ぶに由りて、諸寶の主宰となり
法金剛を成就して、則ち能く佛法を持す
業金剛の印に由りて、則ち金剛業となる
金剛薩埵と成ることは、薩埵の印を結ぶに由るなり
能召の持金剛は、金剛召と相應す
金剛染の大印、能く一切の佛を染す
一切の佛を喜せしむることは、金剛善哉に由る
佛に奉施して灌頂すること、寶印の儀則に由る

【金剛法等】西方の四菩薩。
【金剛業等】北方の四菩薩。
【金剛嬉戯を以て】内の四供養。
【悦懌すること等】外の四供養。

速に金剛光を爲すことは、金剛光の儀に由る
金剛幢を持習すれば、則ち一切願を滿ず
金剛笑の儀に由れば、諸佛と共に戯笑す
金剛法を持し已ることは、金剛法の儀に由る
諸佛の勝慧を得ることは、金剛利の儀に由る
金剛輪を持習すれば、則ち能く法輪を轉ず
佛の語言を成就すること、金剛語の儀に由る
速に金剛業を獲ることは、金剛業を作すに由る
金剛甲を擐服すれば、金剛身を獲得す
金剛藥叉を成じて、金剛藥叉の如し
一切の印を成就することは、金剛拳を結ぶに由つてなり
金剛嬉戯を以て、大金剛悦を獲
金剛鬘を結ぶに由りて、佛に從つて灌頂を獲
金剛歌と相應すれば、金剛歌を獲得す
金剛舞を結ぶに由りて、則ち諸佛を供養す
悦懌すること皆一切なるは、金剛燒香に由る
金剛花と相應すれば、諸の群品を敬はしむ

【金剛鉤召等】 四攝なり。

【三】 上來大曼荼羅を説き竟り、三昧耶を説く。

【堅固に合掌を等】 印母を明す。先づ金剛合掌を結び、次に外縛をなす。

【堅薩埵】 阿閦佛、大と中と等は寶生佛、指を移して等は彌陀、中指を交へるは不空佛、頭指を中指に附くるは大日にして、即ち五佛の印なり。

【我今遍く等】 餘の三十二尊の三昧耶會の印契を明す。

【月形】 仰掌なり

金剛燈印に由りて、供養するが故に眼を獲

能く一切の苦を除くことは、金剛香の儀に由る

金剛鉤召に由りて、能く諸の勝業を作す

能く一切を引入することは、金剛索の儀に由る

金剛鎖と相應すれば、一切の縛を堪任す

金剛入の儀に由りて、能く諸の遍入を成ず

（三）次に當に一切如來の金剛三昧耶の印智を説くべし。

堅固に合掌を結び、諸指互に交へ結ぶを

名けて金剛掌と爲す、極めて結ぶことは金剛縛なり

諸の三昧耶印は、皆金剛縛より生ず

我今結儀を説く、金剛縛は無上なり

堅薩埵金剛は、中指竪つること針の如し

大と中と寶形の如し、中指は而も反し屈む

指を移して蓮葉の如くす、中指を交へ合す

頭指を中指に附くるは、名けて第五の佛と爲す

我今遍く如來族の三昧耶の勝印を説かん

結するに由りて成就を作す、二手月形の如くして

【勝指】 大指なり

中指金剛の如くし、餘指は面を着けず
金剛薩埵の印なり、頭をば鉤し、勝指をば交へよ
由し彈指の勢の如し、金剛薩埵の四つなり
此を衆印等と爲す、實金剛は頭指
面を合して反し屈む、中無名小指
舒展して旋らして心に當つ、無名指は幢の如くす
及與小指を合す、復笑處に住めよ
則ち彼等の印と名く、竪てて二大指を齊して
頭指は屈して蓮の如し、則ち彼金剛劍は
中を合して上節を屈す、卽ち彼無名を齊しく
小指を交へて輪の如し、則ち大指の縛を解け
舒展することと口より起る、小大指面を合せて
集會すれば業金剛なり、則ち彼頭指を齊しくして
心に住めて舒展せよ、頭指を曲むること牙の如し
小指亦復然なり、大指を小指の間にして
頭指其上に屈せよ、心に於て大指を齊しくす
臂を展ぶるを名けて鬘と爲す、掌を騰げて口より散ず

舞を作して頂上に合す、金剛縛にして下し施す
掌より上げ獻ず、頭指を齊しくして相逼めん
舒展すること塗勢の如くす、由し一の頭指を屈せよ
二頭指結縛す、大頭の端は鎖の如し
金剛拳の如く合す、我今能成を說かん
金剛は最勝を成ず、自印、心に住するは
薩埵金剛の定なり、次に事業を作すことを說かん
金剛業は無上なり、金剛界の等印なり
如來を集會するに由りて、檀と師と弟子に於て
刹那に加持を成ず、薩埵金剛を結べば
則ち持金剛と成る、繩に金剛鉤を結んで
能く一切の佛を召す、欲金剛儀の故に
尙し等覺者を染す、金剛歡喜に由りて
善哉の彈指喜なり、由りて寶金剛を結ぶに從うて
佛に灌頂を獲、金剛日を結ぶに由りて
佛の如くに圓光を得、金剛幢を持し已りて
則ち一切の願を滿つ、金剛笑の儀の故に

【戲に由りて等】八供養菩薩に就て
【金剛鉤】四攝を說く。
【我今に法印等】微細會を說く。即ち法曼荼羅なり、法印とは眞言のこと、
【佛に通じ】五佛に通ずるなり。
【本儀】三昧耶會の印。

諸佛と共に等しく笑ふ、法金剛の印を持すれば
法金剛に等同なり、遍く金剛劍を持すれば
慧を得て世を救ふ人なり、金剛の輪を持習すれば
則ち能く法輪を轉ず、金剛語に由るが故に
金剛語を成就す、遍く業金剛を持すれば
金剛業に等同なり、堅く金剛護を作せば
身を成ずること金剛の如し、金剛牙の勝印は
能く諸の惡魔を摧く、堅く金剛拳を作せば
諸の契印を順伏す、戲に由りては喜悅を得
鬘に由りては莊嚴を得、語に由りては語威肅なり
供を得ることは舞に由るが故なり、焚香は世を滋澤す
花に由りては色端嚴なり、燈に由りては世淸淨なり
香に由りては妙香を獲、金剛鉤は召を得
金剛索は入を得、金剛鎖は能く縛し
金剛鈴は遍入す、我今に法印を說かん
薄日囉惹南は佛に通じて、能く堅固の金剛界を作す
次に復我今當に遍く說くべし、法印の勝契は本儀の如し

三昧耶薩怛鑁を誦すれば、一切の印契に主宰と爲る
阿娜耶薩縛を誦し已れば、即ち能く一切の佛を鉤召す
阿斛引蘇佉稱誦し已れば、一切の諸佛等を染愛す
娑度娑度是を語し已れば、皆善哉を以て歡喜せしむ
蘇摩訶怛鑁合二を誦し已れば、則ち一切佛の灌頂を獲
唵嚢佩庾合二多を語し已れば、則ち正法威徳の光を獲ん
遏他鉢羅合二底丁以反を誦すれば、能く一切殊勝の願を滿つ
呵呵吽蹙是笑を作せば、如來微妙の笑を獲得す
薩嚩迦哩是を誦し已れは、能く非法を淨めて皆清淨なり
耨佉製反之曳那を誦持し已れば、能く一切苦受の業を斷ず
勃駄冐地是言已れば、曼荼羅に於て主宰と爲る
鉢羅底捨娜を誦し已れば、共に諸佛の談語論に預る
蘇縛始怛鑁合二を誦し已れば、一切に遍行すること而も自在なり
儞尼逸反娑去也怛鑁を誦し已れば、刹那に則ち無所畏を得
捨怛嚕薄乞叉を誦すれば、能く一切の怨敵の者を嚥す
薩嚩悉地是を誦し已れば、一切の妙悉地を獲得す
摩訶囉底は適悅を得、嚕波輪陛も亦復然なり

【次に羯磨の印等】羯磨會の印を明す
【金剛拳】佛尊の印をいふ。
【右の手を左に安く】智拳印なり。

室嚕怛羅二合縛佉は樂を得、薩婆布哆は供養を得
鉢羅訶羅儞儞は悦ぶ、頗攞鉢羅は果を獲得す
素布悉化噁は光を得、素嚩誐駄は妙香を得
阿夜阿覩は鉤召を成ず、阿嚩吽吽は能く引入す
係縛嚩吒哉は大いに得、健吒囉嚩は震動せしむ
我今法印を說く、成就して清淨ならしめよ
舌に於て金剛を觀じ、能く諸の事業を作せ
次に羯磨の印を說かん、應に金剛拳を結ぶべし
等引にして兩に分ちて、二の金剛印を成ず
次に則ち結縛を說かん、持して金剛指を作して
右の手を左に安く、此印を覺勝と名く
能く佛菩提を與ふ、不動佛は地に觸れよ
寶生は施願の印なり、無量壽は勝定にせよ
不空は施無畏なり、次に今當に遍く
羯磨印の次第を說くべし、金剛薩埵等なり
能く金剛の業を轉ず、左は慢にし右は抽擲す
鉤を持せる勢に安作す、相應して射法の如く

【其六、金剛業等】三十七尊の悉地成就を說く。
【次に羯磨の印】羯磨會の印の功德を說く。

善哉は心に於て住す、灌頂は二の金剛なり
心に於て口形を示す、右の肘を左の拳に住せしむ
二掌を口に及して、左は蓮右は開く勢にす
左は心にして劒もて殺害す、旋轉すること火輪の如くす
金剛の二を口に散ず、金剛舞を旋轉して
兩の頰より頂に住す、甲胄をし小指を牙にす
二拳面も相合す、應に金剛鬘を以てすべし
頂禮して意に戰悚すべし、鬘を口の下に繫け寫して
旋轉して金剛舞にせよ、金剛拳儀を以て
應に燒香等を獻ずべし、一切佛供養
供養印を分別せよ、小指互に相鉤し
頭指上鉤の如くし索の如くし、二つ鏁の如くし
手を背けて相逼む、我今
金剛業作等を成就することを說かん、應に羯磨金剛もて
心に於て而も修習すべし、次に羯磨の印の
金剛業の種種なることを說かん、智拳を結ぶに由るが故に
能く遍く佛智に入る、阿閦毘を結ぶに由りて

傾動無きことを獲得す、寶生の印を結ぶに由りて
能く他を攝受す、法輪の印を結ぶに由りて
則ち能く法輪を轉ず、無畏の勝速なるに由りて
有情に無畏を施す、堅く金剛鬘を作して
金剛薩埵樂しむ、金剛の鉤召に由りて
刹那に諸佛を集む、金剛箭は染せしむ
尙し能く金剛妻たり、金剛喜は諸佛に
　咸く善哉の聲を施す、大金剛寶を結んで
師に從つて灌頂を受く、遍く金剛日を持して
金剛の日の如くなることを得、金剛の幢幡を竪てて
則ち寶雨を雨らすことを得、遍く金剛笑を持して
　速に佛平等に笑ふ、遍く金剛花を持して
則ち金剛の法を見る、堅く金剛劍を結んで
能く一切の苦を斷ず、遍く金剛輪を持して
能く法輪を轉ず、所有の諸佛の語
成ずるに金剛の語を以てす。金剛舞の供養は
尙し佛をして順伏せしむ、金剛甲を被るに由りて

金剛の堅實を獲、遍く金剛牙を持して
倘し能く金剛を壞る、金剛拳は能く奪つて
印の成就を獲得す、金剛喜は悅を得
金剛鬘は妙色なり、金剛歌は妙語なり
金剛舞は順ぜしむ、香を以て意悅澤す
花を以て一切を奪ふ、燈供の火は熾盛なり
金剛香は妙香なり、金剛鉤は能く召す
金剛索は能く引く、金剛鎖は縛せしむ
金剛聲は動せしむ、

我今廣く一切印の都結の儀則を說かん。

先づ當に金剛縛にして、自心を摧き拍つて心眞言を誦して曰ふべし。

嚩日囉滿駄怛囉吒

則ち一切印の縛は、自らの身口心の金剛に於て自在を得。即ち金剛遍入三昧耶の印を結んで、此心眞言を誦せよ。

噁

則ち遍く阿尾捨を成ずること親友の如し。加持するに則ち三昧耶の印もて大薩埵を想念して、此心金剛の眞言を誦せよ。

摩訶三昧耶薩怛無反無毛唅

此眞言に由りて、一切の印皆成就することを得。此は此れ一切印の成就の廣儀なり。則ち我都噴の儀則を說く。

初に自印を結び、已りて自印の薩埵を自身と觀ずるに、此心眞言を以てす。

三摩底唅

則ち自印の薩埵を自身と觀ずること已りて、此眞言を以て加持す。

三摩耶薩怛嚩二合地瑟姹二合薩嚩二合鋡

則ち然る後に應に成就すべし。此は是成就の儀則なり。

次に初に義利の成就を欲求することを說く。此眞言を以てす。

遏他悉地

此眞言に由りて、意に隨つて金剛の成就を得。

次に金剛悉地の成就を說く。此心眞言を以てす。

嚩日囉悉地

次に持明の成就を說く。此心眞言を以てす。

嚩日囉尾儞耶二合達囉

此に由りて意に隨つて、即ち持明の成就を得ん。最勝の成就を欲求せん。自印の眞言を以て、當に成就を求むべし。

【我今、一切等】是れ擬遣作法を說くなり。

我今、一切都て自の身口心の金剛の中に、金剛儀軌の如く作さしめんことを說かん。若し印を以て緩慢を加持し、若し意衜せんと欲せば、則ち此心眞言を以て堅固なることを作さしめよ。眞言に曰はく、

唵嚩日羅二合薩怛嚩三摩耶摩努波引攞耶嚩日羅薩怛嚩怛尾怒波底瑟姹捏哩濁寐婆嚩蘇都使庾寐婆嚩阿努囉羯都寐婆嚩蘇布使庾寐婆嚩薩嚩悉朕寐鉢囉也卓薩嚩羯磨素者寐質多室哩二合藥矩嚕吽呵呵呵呵斛引婆伽梵薩嚩怛他蘖多嚩日囉摩弭悶遮嚩日囉婆嚩摩訶三摩耶薩怛嚩噁引

此眞言に由りて設ひ無間の罪を作り、一切如來及び方廣大乘の正法を謗し、一切の惡を作るとも、尙し一切如來の印を成就することを得ることは、金剛薩埵の堅固の體に由るが故なり。現生に速疾に樂に隨つて一切最勝の成就を得ん。乃至如來の最勝の悉地を獲得せよ。婆伽梵一切如來、金剛薩埵の是の如きの說を作したまふ。我今都て一切印の解脫の儀則を說かん。

彼彼より出生する所有の一切の印、彼彼に於て、當に解くに、此眞言心に由るべし。

嚩日囉穆

自心より金剛寶印を起して灌頂の處に安じ、勝指を以て自ら灌頂せよ。手を分ち頭に纏ひて鬘に繫く。次に甲冑を結ぶに、此心眞言を以てせよ。

唵嚩日囉囉怛那毘詵者銘薩嚩母捺羅二合吽捺哩二合搩矩嚕嚩囉迦嚩制那鍐

【唵嚩等】是れ四智讚なり。

被甲し已りて、以て掌を齊くして拍つて歡喜せしむるに、此心眞言を以てす。
嚩日羅都沙斛引
此心眞言に由りて、縛を解いて歡喜を得しむ
金剛の體を獲得して、金剛薩埵の如し
一遍金剛薩埵を誦して、意の愛樂に隨つて安樂に住す
纔に誦ずるに皆速に成就することを得、金剛手の所說の如し
婆伽梵普賢、是の如きの說を作したまふ。
金剛薩埵等の薩埵は、一切成就して事業を作す
意に隨つて念誦すれば此中に於て、諸の事業に於て皆成就す
眞言心印及び諸明、樂に隨つて諸の理趣を修習す
教の所說及び自作に於て、皆成就を得ること一切に遍ぜり
次に四種の祕密の供養を說かん。應に作すに、此金剛歌詠の眞言を以てすべし。
唵嚩日羅二合薩怛嚩僧蘗囉賀嚩日囉囉怛那麼努怛藍嚩日囉達磨哦耶奈引嚩日囉羯磨迦嚕
婆嚩
曼荼羅の中に於て、此金剛の讚詠を以て、歌するに金剛の舞を以てす。二手の掌、及び供養花等を以て供養を作す。外曼荼羅に於て金剛香等を供養し已りて本處に安く。一切力に隨つて供養し、啓白し、一切如來に隨意の香等を供養し已る。已に曼荼羅に入りては、

力に隨つて已に大曼荼羅に献ず。一切の滋味の飲食安樂等の一切の資具を充足し受用せしむ。應に一切如來の成就の金剛禁戒を受與すべし。

此は是れ一切佛の體性なり、金剛薩埵の手に住す

汝今應に、金剛薩埵堅固の禁を受持すべし

唵薩囉怛他蘖多悉地嚩日囉三摩耶底瑟姹二合翳沙怛鑁二合駄羅夜弭嚩日囉薩怛嚩二合呬呬呬呬吽

則ち各各に復告げて言はく、「餘人に説くことを得ること勿れ」則ち誓心の眞言を誦す。

先に已に入らんもの、一切如來に啓白して、薩埵金剛の印を結び、下より上に向つて、解くに此眞言心を以てせよ。

唵吃哩二合都嚩薩嚩薩怛嚩二合囉他二合悉地捺多也他努哦蘖車駄梵二合勃駄微灑閻補那囉哦曩也都嚩日囉二合薩怛嚩二合穆

是の如く一切の曼荼羅に於て、三昧耶の勝印を而も解くことを作す。

金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經卷下　終

蘇悉地羯羅經

經典部
第八卷

【請問品】忿怒軍荼利が未來衆生の爲に曼荼羅の法則と次第とを問へるに對して執金剛の解意を明す。
【一】忿怒軍荼利の請問。
【忿怒軍荼利】南方の明王虛空藏菩薩のこと。
【云何が眞言を持誦する等】以下四十一問をあげて請ふ。初十三問は遠修成就の相を問ふ。
【云何なるをか扇底迦とする】以下二十八問は近修成就の相を問ふ。

蘇悉地羯羅經 卷上

大唐中天竺三藏輸波迦羅譯す

請問品第一

(一)爾時、忿怒軍荼利菩薩、合掌恭敬し、尊者執金剛の足を頂禮し、即ち是問を發すらく、「我時に往昔、尊者の所に於て、一切明王の曼荼羅の法と及以次第とを聞き、復明王の諸の所管屬の神驗威德を聞けり。願くば未來の諸の有情の爲の故に、唯尊者、廣く爲に解說する事を垂れたまへ。云何が眞言を持誦する法則次第を得て、速に成就することを得しむる、其諸の眞言法は一體なりと雖も、成就する所の法は其數無量なり。云何が眞言の相。云何が阿闍梨。云何が成就者の弟子。云何なる方所をか勝處と爲す。云何が眞言速に成就する。云何が調伏の相。云何が眞言を持誦する方便の次第。云何なる華をか供養する。云何なる香をか塗香とする。云何なる香をか燒香とする。云何が燈油の相。云何なる食をか供養とする。云何なるをか扇底迦とする。云何が增益の相。云何が降伏の相。此三種の中に於て、各何等の事をか成ずる。云何が上中下の次第成就の相。云何なる法をか請召とする。云何が供養を修する。云何が身を持護せん。云何が廣く法を持し、何れの偈

【事法の曼荼羅】事法とは所成就の事法此曼荼羅の所成就の事をして光顯ならしむ。
【二】大執金剛の答を明す。
【吉祥に莊嚴す】此菩薩は百八吉祥の德を具して其身を莊嚴し、法界に普周して有情を利益するをいふ。
【應當に一心に等】以下本品は持誦する問に眞言法を答ふ中に就き初に持誦眞言法則次第速得成就に就て明す。
【三】入眞言者は菩提を發し慈悲

の眞言をか誦する。云何が灌頂を作さん。云何が眞言を試むる。云何が當に受付すべき、云何なる字か圓なることを得る。云何が增益を得ん。云何が護摩の種種の次第の法用を作す。何等の物を以てか能く速に成就せしめん。云何が藥を成すの相。云何が藥を受くるの相。云何が藥を淨治する。云何が藥の量分。云何が諸藥の相。云何が諸の成就物を護する。云何が分別して分數を爲す。云何が成就物を受用する。云何が物を失うて却て得しめん。云何が破せられて却つて彼に着かん。云何が障礙を作す相を知らん。云何が曼陀羅を成就せん。云何が事法の曼荼羅。云何が灌頂の曼荼羅。如上の所問、其要なる者に隨つて、唯願くば尊者大慈悲を具し、一一に分別して廣く我爲に說きたまへ。【一】

（二）爾時、吉祥に一切を莊嚴したまへる持明大執金剛應供養者、彼大精進、忿怒に告げて言はく、善い哉善い哉大忿怒、能く我所に於て斯の如きの問を發す。應當に一心に、是勝上微妙の法則、蘇悉地羯羅の五つの莊嚴の法を聽くべし。何をか謂つて五と爲す、一には謂く精進、二には謂く明王、三には謂く除障、四には謂く諸の勇猛の事を成就し、五には謂く一切の眞言を成就す。此蘇悉地經は若し餘の眞言法を持誦して成就せざる事あらば、當に兼ねて此經の根本の眞言を持せしむべし。當に、速に成就すべし。三部の中に於て此經をば王と爲す、亦能く一切等の事を成辦す。謂ゆる護身し召請し結界し供養し相助し決罰して、一切の眞言の一一の次第を教授し、成就を得しむ。若し諸の心眞言の中に、三の虎吽の字あるは、則ち能く如上の所說の一切の法事を成辦す。三の虎吽の字の心眞言

の甲冑を被て無盡生死の中に成佛國土成就衆生の爲に都て怯弱あるなく諸の天魔等を破して直に不退轉に進むをいふ。

【明王】次に諸佛の三昧耶道を以て所依とせずんば生死海に沒入せる群品を利することを能はざる故明王を擧ぐ。

【除障】扇底迦の法は能く三惑三障を寂する故にいふ。

【諸の勇猛の事を成就す】阿毘遮嚕迦の法は凡聖無始の怨敵を降伏して能伏の法に隨ふ。

【一切の眞言を成就す】補瑟徵迦の法は能く凡聖一切の所樂を滿す故。

【當に速に成就すべし】此經は三種祕密の爲に攝し盡さずといふことと無き故其根本眞言の成德諸餘の敎法眞言の故に、速に成

に曰はく、

唵喉中擽聲引呼一句知二合嚕駄曩句二虎二合吽若句二。

辨才の眞言に曰はく、

唵同上呼一句咄嚕二合嚕底二句丁以反僧乙攃反嚦底三句同上駄羅抳句四虎二合吽礭句五

此眞言を以て水を眞言して三遍身に灑ぎ作淨せよ。

（三）復次に上中下の成就の法とは、別經に說くが如し。成就を求めん者は、須らく眞言の上中下の法を解すべし。此經に通じて三部所作の曼荼羅の法を攝す。佛部の眞言は扇底迦の法、觀音部の眞言は補瑟徵迦の法、金剛部の眞言は阿毘遮嚕迦の法なり、腋より頂に至るを上と爲し、臍より腋に至るを中と爲し、足より臍に至るをば下と爲す、眞言の中に於て當に三種の成就を分別すべし。斯三部に於て各分ちて三と爲す。善く須らく三部の中の眞言を了解すべし。明王の眞言是れ上成就なり。諸餘の使者の制吒制徵等は是れ下成就なり。扇底迦の法、補瑟徵迦の法、阿毘遮嚕迦の法は三部の中に於て、各各に皆有り。應に須らく善く知つて次第を分別すべし。若し佛部の中には佛母の眞言を用て扇底迦の法と爲す。佛母の眞言に曰はく、

娜謨播下同音伽縛下同音底句一喃瑟抳灑反踈貫野句二唵三句同上呼嚕嚕攃反僧乙普嚕句四入嚩攞句五底瑟佗六句遮價反悉駄路者儞句七薩末陽詑反他可婆去駄儞句八沙嚩訶句九

若し觀音部の中には、觀音母の半拏羅嚩悉儞の眞言を用ひて扇底迦の法と爲す。觀音母

の眞言に曰はく、

那謨囉怛二合娜怛二合囉耶野一句唵同上二句迦下同居羅反制知西反弭迦制同上三句迦縿知價反下迦藚知降反迦制同上音四句皤伽嚩底弭惹曳五句涉二合去嚩訶六句

若し金剛部の中には、執金剛母の忙莽鷄の眞言を用ひて扇底迦の法と爲す。金剛母の眞言に曰はく、

娜謨囉怛二合娜怛二合囉耶野一句娜莫室戰拏跋日囉皤拏曳二句摩訶藥起灑上同栖娜皤韡下同多可反曳三句娜謨路迦馱窒丁吉反嚦曳四句娜莫商迦隷扇底迦隷五句邏下同俱爵反縿下同知價反緻縿六句具置顛伽上韡野七句繖置顛八句涉二合去嚩訶

又佛部の中には明王最勝佛頂の眞言を以て補瑟徵迦の法と爲す。明王の眞言に曰はく、

娜謨跛二合北沒反囉底上同歌姤一句悉馱灑野二合薩嚩怛二合囉皤邏爾韡野二句捨麼野捨麼野三句扇底但底四句五達麼邏若皤使羝六句摩訶蜜儞曳七句薩嚩遏詑婆去駄儞八句婆嚩訶九句

又觀音部の中には明王歌野訖利嚩の眞言もて補瑟徵迦の法と爲す。明王の眞言に曰はく、

唵同上一阿上蜜㗚姤二皤森皤嚩三娜莫四

又金剛部の中には、明王蘇皤の眞言を以て補瑟徵迦の法と爲す。明王の眞言に曰はく、

娜謨囉怛二合娜怛二合囉耶野一娜莫室戰拏二跋日囉皤拏曳三摩訶藥起灑上同栖娜皤韡曳四唵同上五蘇皤顛蘇上皤六虎二合吽七吃下同魚乙反里豐拏吃里豐拏八虎二合吽九吃里豐拏平皤野虎二合吽十阿上曩野十一薄伽上畔十二莬地耶邏惹十三虎二合吽抪吒十四

就を得るなり。

【三遍身に灑ぎ等】面を東に向け蹲踞して兩手を點し二膝の間に置き印し手をもて水を掬して三度水を飲み又後遍く口目耳鼻肩等に觸るなり。

【三】以下眞言の相を答ふ。

【扇底迦】息災と譯す。

【觀音部】蓮華部のこと、此部は觀音を首となすが故に。

【補瑟徵迦】增益と翻す。

【阿毘遮嚕迦】降伏と翻す。

【半拏囉嚩悉儞】白處と譯す、觀音は常に白蓮の中に在る故に名く。亦天髮髻冠を戴き、純素の衣を襲ね、左手に開敷蓮華を持し、此最白淨處より普眼を出生するが故に、此三昧を名けて蓮花部母となす。

【忙莽鷄】金剛母と譯す。

【慈善】不生の境理と相應して無緣

又佛部の中には、大忿怒阿鉢囉爾彈の眞言を以て阿毘遮嚕迦の法と爲す。忿怒の眞言に曰はく、

唵一同上虎嚕虎嚕二戰拏里摩燈伲反魚枳去三渉合嚩訶四

又蓮華部の中には、大忿怒施婆嚩訶の眞言を以て、阿毘遮嚕迦の法と爲す。施婆嚩訶の眞言に曰はく、

嚩謨剌怛二合嚩怛二合囉耶野一娜謨摩訶室里野曳二唵三鑠枳二合曳縒摩曳四誐蘇告反弭曳五悉睇悉睇六娑去馱野七始發無計反始發八始梵步廿反遮隷始梵米九阿上嚩訶十薩嚩遏訖婆去駄顗十一渉合去二嚩訶十二

又金剛部の中には、大忿怒軍茶利の眞言を以て阿毘遮嚕迦の法と爲す。忿怒の眞言に曰はく、

嚩謨剌怛二合嚩怛二合囉耶野一娜莫室戰拏二摩訶跋日囉矩嚕駄野三唵四同上虎嚕虎嚕五底瑟佗底瑟佗六畔駄畔駄七歌難歌難八阿蜜㗚底丁禮反九虎二合吽摧十

復眞言有りて三部に入らざれば、彼眞言の文字に隨つて、而も扇底迦等の三種の法を辨ぜよ。眞言の中を看るに、若し扇底句嚕の字、渉悉底句嚕の字、闍莽の字、鉢囉二合闍莽の字、烏波闍莽の字、渉去訶去の字あらば、當に知るべし即ち是れ扇底迦の眞言なり。若し補瑟置迦の字有らば、當に知るべし即ち是れ補瑟置迦の眞言なり。若し句嚕の字あらば、當に知るべし即ち是れ阿毘柘嚕迦の眞言なり。復眞言の句義慈善なる有らば、當に知るべ

廣大の慈善を發すを慈善とす。若し此に住すれば諸の災難を除く、内に慈悲心を起し、外に大忿怒を示すを猛怒とし、此句義あるは、除伏の眞言にして、能く正法を破壊するの諸鬼神等を降伏す。

【天中の天】眞實不虛にして尊重すべき故。

【上中の上】諸言中の最上、大乘中の上上たり。

【金剛の下部に屬す等】能說の主は下部と雖も、法王より教を奉じ、三部秘密の教勅を受くる故に所說遍く諸部に通じて能く成就するなり。

し即ち扇底迦の用に入る。若し眞言の句義猛怒なる有らば、當に知るべし即ち阿毘遮嚕迦の用に入る。若し眞言有りて非慈非猛ならば、當に知るべし即ち補瑟徵迦の用に入ると。

若し速に扇底迦を成ぜんと欲せば、當に佛部の眞言を用ふべし。若し速に補瑟徵迦を成ぜんと欲せば、當に蓮華部の眞言を用ふべし。若し速に阿毘遮嚕迦を成ぜんと欲せば、當に金剛部の眞言を用ふべし。此經は深妙なること天中の天の如しといひ、上中の上と言ふこと有るは、若し此法に依らば、一切の諸事成就せざること無ければなり。此經は金剛の下部に屬すと雖も、佛教を奉ずるが爲に、亦能く上の二部の法を成就す。譬へば國王の教勅あるに隨つて、自ら亦依行するが如く、此法も亦爾なり。義に準じて應に知るべし。

若し眞言有りて、字の數少しと雖も初に唵の字有り、後に莎訶の字有らば、當に知るべし此眞言は、速に能く扇底迦の法を成就すと。或は眞言有りて、初に唵字有り、後に撥吒の字有り。或は嚩普の字有り、此は是れ訶聲なり。上の如くの字有る眞言は、速に阿毘遮嚕迦の法を成就することを得。或は眞言有りて初に唵字無く、後に莎訶の字無く、又唵字無く、亦撥吒の字無く、及び嚩普等の字無くんば、當に知るべし此等の眞言は、速に能く補瑟徵迦の法を成就すと。若し復人有りて、諸餘の鬼魅及び阿毘舍等を攝伏することを求めんと欲せば、當に使者及び制吒迦等の所說の眞言を用ふべし。速に成就を得ん。

若し復異部眞言有りて、能く一切の事を成就すと云はば、但能く本部の所說のみを成就して餘部には通せず。猶經に彼に眞言ありて、毒を除き病を除くが爲の故に之を說くと、演

【分別阿闍梨相品】阿闍梨の相に就て明す。

【支體圓滿し等】以下廿三相を擧げて阿闍梨の相を說く。

【四攝】布施愛語利行同事の四。

【大法】大菩提心

ぶること有るも、亦能く餘の諸の苦を除く。當に卽ち其は一切に通じて用ふと知るべし。善く其部を知り、善く眞言の所應の用處を識り。亦須らく其眞言の功力を知るべく、復須らく善く眞言を修する法を解すべし。所求の願に隨つて、當に須らく誦持して彼眞言を誦すべし。

蘇悉地羯羅經分別阿闍梨相品第二

復次に我今當に阿闍梨の相を說くべし。一切の眞言是に由りて得るが故に、阿闍梨を知るを最も根本と爲す。其相何ん。謂く支體圓滿し、福德莊嚴すると。善く須らく世出世の法を知解すると。恆に法に依りて住して非法を行ぜざると。大慈悲を具して衆生を憐愍すると。貴族に生長すると。性調ひ柔和にして、共住すること有るに隨つて皆安樂を獲ると。聰明智慧辯才無礙なると。能く忍辱を懷き我見を懷かざると。善く妙義を解し深く大乘を信ずると。設ひ小罪を犯すも、猶大怖を懷き、身口意の業に善く調柔を須ふると。心常に悅樂すると。大乘經を讀み、謹みて法敎に依ると。勤めて眞言を誦して間斷せざると。所作の悉地皆悉く成ずる者と、復須らく善く解して曼荼羅を畫くと。常に四攝を具し、大法を求めんが爲に小緣を樂はざると。永く慳悋を離るると、曾し師に從つて大曼荼羅に入りて、灌頂の法を受くると。復先師の爲に德者と讚歎せられ、汝今より往灌頂

【歸依の處】大菩提心をいふ。

【分別持誦相品】持誦人成就の相を明す。

【三業をして内外清淨等】以下三十の行相を擧げて說く。

を授け、阿闍梨と爲るに堪へんと。斯印可あらば、方に自ら曼荼羅の法則次第を造せしめて、乃ち弟子に眞言を授與するに合へり。若し此者に依つて受くる所の眞言は、速に成就することを得んこと疑を懷くべからず。若し和上阿闍梨の處に授からずして、擅に眞言を誦せば徒に功勞を施して終に果を獲じ。夫れ弟子の法は、闍梨に恭侍すること、猶し三寶及菩薩等の如くせよ。何を以ての故に、謂く、能く授與せる歸依の處なり、諸の善事に於て首の因と爲り現世は安樂にして、當來には果を獲。謂く阿闍梨に依るが故に、當に嗣いで久しからずして無上正等菩提を得べし。是義を以ての故に、之を敬ふこと佛の如くするを以て弟子と爲す。闍梨に承事するに懈怠有ること無く、勤持して授かる所の明王及び明王妃を闕かざれば、當に悉地を得べし。必ず疑を得ること無かれ。

蘇悉地羯羅經分別持誦相品第三

復次に我今眞言を持誦し、成就する行相を說かん。當に須らく三業をして内外清淨ならしめ、心散亂せず、曾て間斷無くして常に智慧を修し、能く一法を行じて業事を成就すべし。復慳悋を離るれば所出の言詞に滯礙有ること無く、衆に處して畏れ無く所作皆辨す、常に慈忍を行じ諸の諍誑を離るれば、諸の疾病無く、常に實語を行ずれば善く法事を解す。年歲少壯にして、諸根身分皆悉く圓滿す。三寶の處に於て常に徹信を起し、大乘

微妙の經典を修習して、諸善功德退心を懷くこと無し。此の如きの人は速に成就することを得。諸の菩薩、及以眞言に於て常に恭敬を起し、諸の有情に於て大慈悲を起す。此の如きの人は速に成就を得。常に寂靜を樂つて衆中を樂はず。恆に實語を行じて作意し護淨す。此の如きの人は速に成就を得。若し執金剛菩薩の威力自在なるを聞いて、心に諦信を生じ、歡喜して聞かんと樂ふ、此の如きの人は速に成就を得。若し人少欲にして、一切に知足し眞言を誦持し、所求の事を念じて晝夜に絕えず、此の如きの人は速に成就を得。若し人初めて眞言經法を聞いて、則ち身の毛竪ち心に踊躍を懷き大歡喜を生ぜん。此の如きの人は、則ち成就を得。若し人夢中に自ら悉地、經の所說の如くなるを見、心に寂靜を樂つて衆と與に居せず。此の如きの人は速に成就を得。若し人、常に阿闍梨の所に於て、敬重すること佛の如くせん。此の如きの人は、速に成就を得。若し人、眞言を持誦するに、久しく効驗無くとも棄捨すべからず。倍〻廣願を增し、轉〻精進を加へて成るを以て限と爲ん。此の如きの人、速に成就を得ん。

蘇悉地羯羅經分別同伴品第四

【分別同伴品】持誦者同伴の相を明す。

【一】以下初に具相同伴の相を明す。中に二あり、今初に内相十七を明す。

（一）復次に當に同伴の者の相を說くべし。福德莊嚴し貴族に生種し、常に正法を樂つて非法を行ぜず。復深信を懷いて諸の恐怖を離れ、精進して退せず、尊教を奉行して常に實語

【二】以下外相二十二相を明す。外相とは他教に隨つて性を成ずるなり

【自然の聖戒】戒とは十善性戒、これ有佛無佛に常に世間に在りて受不受を問はず持すれば即ち善を成じ、犯せば必ず罪を成ずる故に名く。

を作し、諸根支相皆悉圓滿し身に疾病無く、太だ長く、太だ短く、太だ肥え、太だ麁きに過ぎず、亦痩せて小からず、色太だ黑からず、亦太だ白からず、此陋疾を離れたれば福德の同伴なり。

(三)餘の諸の苦を忍び、善く眞言と印と曼荼羅と供養の次第と、諸餘の法則とを解して、常に梵行を修し諸事に順忍し、言を出すに和雅にして、人をして聞かんと樂はしめ、諸の我慢を離れ强記にして忘れず、教有れば奉行して相推託せず。多聞にして智慧有り、慈心有りて恚ること無く、常に布施を念じ、善く解して明王の眞言を分別し、恆に須らく所持の眞言を念誦して行者と同うし、兼ねて結界護身等の法を明かにせん。是の如きの伴を得ば、則ち速に成就せん。三業調善にして曾て師の所に於て曼荼羅に入り、佛教に歸修して疏小の法を習はず、善く行者所須の次第を知り、言教を待たずして所求有るに隨ひ、時を知りて即ち送らん。此の如きを具せる者を勝れたる同伴と爲す。身意賢善にして心に憂惱無く、決定堅固にして終に退心せず。是の如きの伴を得ば、則ち速に成就す、多くの財利に於て貪着することを望まず、是の如きの德を具するを說いて勝伴と爲す。復行者に於て心に捨離すること無く、若し諸餘の等葉を成就せんと欲せば、爲に强緣と作りて應に自然の聖戒を捨離せしむべからざらん。是の如きの德を具せざるを說いて勝伴と爲す。行者の處に於て規求する所無く、未だ悉地成就を得ざるより此來、終に捨離せず、縱ひ年歲を淹くして悉地を證すること無くとも、終に捨離の退心を懷かず。假令大苦及餘の難事

【三】二に闕相の同伴の相を明す。初に文に二あり、初に正しく闕相同伴の相を明す。

【智慧高明】明に法則を知り善く曼荼羅を解し、又兼ねて三乘一乘に達するをいふ。

【最上の事を成就せん等】以下同伴助成を明す。

有りて身心を逼惱すとも、亦捨つべからず。是の如きの徳を具するを說いて勝伴と爲す。

(三)若し前の如く種種の徳行有るは、最上の勝事を成就するに堪能なり。縱ひ前の徳無くとも、但し眞言成就の法則を明にし、幷に須らく善く諸の曼荼羅を解し、智慧高明にして復加ふるに福德有りて持誦者に勝る。是の如きの伴は、亦能く最上の勝事を成就す。最上の事を成就せんと欲するが爲の故に、其福德の伴、半月半月に持誦者の與に、而も灌頂と及以護摩とを作し、時に隨つて辨ずる所の香花燃燈、諸餘次第に依りて擁護し簡擇し、爲すこと有る所に隨つて並に須らく助作すべし。直に前の如き等の事を助修するのみにあらず、若し誦持者闕失する所有らば、其福德の伴、經法に依り、理を以て敎誨し、法事をして闕くこと有ること勿らしめよ。乃至事事に廣く爲に諸行の因緣を開釋せよ。是の如きを具せる者、最も勝伴と爲せ。行者每日持誦の時、所行の事に、及び時有りて忘失せば、其福德の伴、所見の處に隨つて、相助けて之を作して周備せしめよ。若し藥法を成就せんと欲せん時は、須らく常に手を以て其藥を按し、或は草幹を執りて用て之を按ぜよ。念誦作法せんには、事務多しと雖も終に廢忘せず、行者持誦すること了らんと欲せん時には、其伴當に須らく側に近いて立つて彼行者の念誦既に勞るるを見るべし。或は神を發遣する法、數珠を置く法、及餘の法等を作すことを忘るるを恐る。彼の忘れん處を見ば助けて應に之を作すべし。其伴常に須らく持誦し供養して、所作の諸事をして福德を生ぜしむべし。並に皆持眞言者に廻向して所求の願を滿ぜしめよ。指授する

【四】第三に展轉の同伴を明す。

【擇處品】持誦の方處を明す。

【一】初に廣く方處を明す。略して三十七勝處あり。

所有らば、唯伴と共に語れ。

(四)若し最勝の事を成就せんと欲するが故に、更に一の伴を許す。展轉し合語して參差することを得ざれ。其伴の食する所は行者と同うせよ。行者の所食は法に依りて、制するが如し。是の如きを具せる者、最上の勝事の同伴と爲るに堪へたり。第三の同伴の福德も亦然り。前の所說の如し。

蘇悉地羯羅經擇處品第五

(一)復次に眞言を持誦して、成就する處の者を演說せん。何なる方地に住してか、速に佛を得たまへる所の道を成就することを得ん。四魔を降したまふ處、最も勝上たり。速に成就を得ん。尼連禪河の近岸の處に於てせよ。諸難無きが故に、其地の方所は速に悉地を得ん。縱ひ衆魔有りとも淨を爲すこと能はず、所求の事悉地せざる事無し。是の如きの處は速に成就を得ん。或は佛の所轉法輪の所に於てし、或は拘尸那城の佛涅槃の處、或は迦毘羅城の佛所生の處、上の如きの四處は最も上勝と爲す。諸の障難無く三種の悉地決定して成ずることを得。又は諸佛所說の勝處に於てし、復菩薩所說の勝處と佛の八大塔と有り、或は名山の諸の林木多く、復花菓多くして、泉水交り流るる有らん。是の如きの處を說いて勝處と爲す。或は蘭若の諸の花菓渠水交り流れて、人の愛樂する所

【曼荼羅品】廣く諸の教法を指す、即ち眞言祕密の教法にあつては曼荼羅を造作する品類

あらん。是の如きの處を說いて勝處と爲す。復蘭若の諸の麋鹿多くして人の採捕すること無く、復羆熊虎狼等の獸無き有らん。是の如きの處を說いて勝處と爲す。或は大に寒すること無く、復大に熱すること無く、其處は人に宜く、心に隨ふ所の者、是の如きの處を說いて勝處と爲す。或は山の傍に於てし、或は山峯の頂の獨高臺たらん。或は山腹に於てし、復流水有らん。是の如きの處を說きて勝處と爲す。復勝處有らん。青草地に遍く諸の樹花多く、中に其木護摩を作すに堪へたる有り。是の如きの處を說いて勝處と爲す。或は舍利を安置せる塔の前に於てし、或は山中の舍利を安ずる處に於てし、或は四河の邊、或は蘭若の種種の林木茂飾し。嚴麗にして多く人無き處有らん。或は寒林の烟絕えざる處に於てし、或は大河の岸、或は大池の邊、或は往昔多牛有りて居せし處、或は迴獨なる大樹の下、神靈の所依として、日の影轉ぜざるに於てし、或は多聚落の一の神祠の處、或は十字の大路の邊に於てす。或は龍池の邊、是の如きの處を說いて勝處と爲す。或は佛經行所至の國、是の如きの方は速に成就を得、但し國土の人民三寶を信順し、恭敬し、正法を弘揚することあらん。是の如きの處は速に成就を得ん。復國土の諸の仁樂多くして、皆慈悲を具する有らん。是の如きの處は速に成就することを得ん。既に是の如きの上妙の處所を得ば、應に須らく地中の穢惡瓦礫等の物を簡擇すべし。曼荼羅品に一一に廣く明さん。

(二)悉地の法の如く、善く須らく三部の處所を分別すべし。復須らく扇底迦の法、補瑟徵迦

の中にあつて一一に廣く地中の穢惡を除去するを明せばなり。

【二】三部等に於て處所を分別することを明す。

【持眞言品】正しく眞言を持するの相を明す。卽ち應作と不應作と二種の法則を說いて持誦者をして悉地を成就せしむる故にいふ。

【一】眞言速成就の相を明す。三密を擧べる持眞言者に名けて有智の者と稱す。

【諸の眞言及以法則】諸佛の師をいふ。

【所受の人も三寶等】既に本無き故に受學の輩も三部

の法、阿毘遮嚕迦の法、是の如きの三法を分別すべし。復須らく上中下の成法を分別すべし。卽ち是處に於て、心の所宜に隨つて、淨く塗灑し、掃ひて諸の事業を作さば、速に悉地の法を成就することを得ん。

蘇悉地羯羅經持眞言法品第六

復次に廣く眞言を制持する儀式と法則とを說かん。若し此式に依らば、久しからずして當に一切の成就を獲べし、若し有智の者諸の眞言を持せんに、先づ瞋恚を斷ぜよ。乃至天神にも應に瞋を生すべからず。亦餘の持眞言者を瞋嫌せざれ。諸の眞言に於て應に意を檀にして、乃至功能及び諸の法則、之を分別すべからず。諸の眞言及以法則に於て、深く敬重を生し、諸の惡人に於ても善く須らく將護すべし。何を以ての故に、能く大事を障へ、及び彼を壞るが故に、阿闍梨の所に於て縱ひ愆過を見るとも、身業に猶驕慢慊恨の種種の是非を談說することを生さず。心意に終に惡想を分別せざれ。過に於ても既に爾るのみ。況んや法に依るをや。縱ひ大なる怒を懷くとも、終に自の所持の眞言を以て他の明王を縛し、及び損害を生し、並に苦に治罰すべからず。亦復應に降怨の法を作すべからず。未だ曾て阿闍梨の處に於て眞言を受けずして應に人に授くべからず。所受の人も三寶の處に於て恭敬を生ぜずば、復是れ外道なり。阿闍梨の所にして眞言を受得すとも、

の法に於て敬信を生ぜず、又師に隨つて學せざれば神祇を感ぜず、感ぜざる故に悉地得難し。從つて三寶處に於て恭敬を生ぜざるなり。

【一切有情兩足の類】これ上勝の類即ち人天なり、多足の類とは人天を除ける所餘の類なり。是等の類は皆如來金剛界性あつて未來世中に必ず菩提を得べければ跳驀を制するなり。

【鎚と輪…金剛杵等】是れ皆佛菩薩所執持の標幟なればなり。

【藥草根莖等】亦神の守護あり、悉地を成就する故に。

【大乘…詰難すべからず】これ凡夫情想の境界に非ざればなり。

【歌詠】唱歌詠詩等言詞とは言を巧にし語を美にする等調戯とは無益の

亦與ふべからず。乃至手印及以眞言並に功能の法、及び普行の法をば並に應に與ふべからず。未だ曾て曼荼羅に經入せざるものに亦授與せざれ。一切有情兩足の類を應に跳驀すべからず。乃至多足をも亦跳驀せざれ。又應に諸の地印を踐驀して過ぐべからず。謂ゆる鎚と輪と棓と杵と螺と金剛杵等となり。及以素より成ぜるも、並に踐驀せざれ。諸餘の藥草根莖枝葉及以花實亦踐驀せざれ。亦不淨の穢處に棄てざれ。若し眞言法を成就せんと樂はんものは、應に須らく制に依るべし。應に大乘の正義を詰難すべからず。若し菩薩の甚深稀有不思議の行を聞いては、應に諦信を生すべし。疑心を懷かざれ。眞言を持せん人は、彼別の持誦の人と更相に驗を施すべからず。若し小過に緣つて應に即ち降伏の法を作すべからず、成就を願はん人は應に歌詠し言詞し調戯すべからず。身を嚴るが爲に、好んで應に脂粉花鬘を塗飾すべからず。亦跳躑し急走し邪に行かざれ。亦河中に裸形にして浮び戯れざれ。略して之を言はば、身の諸の嘲調と、一切の戯咲の諸の邪口業と、及び虛誑語と、心を諂汚する語と、離間和合と、惡口と罵詈と皆應に作すべからず。應に對答すべき所多言を假らず。無益の言談終に習學せざれ。亦復外道の人、及び旃茶羅の人と同住せざれ。斯の如き等の類、來りて相問詰すとも、亦與に語らざれ。亦外の諸人と談話せざれ。唯伴と共に語れ。念誦の時に當りては、縱ひ是れ同伴なりとも、亦與に語らざれ、唯餘時をば除く。所須に非ざる自りんば、伴と與に語らざれ。亦油を以て身に塗飾せざれ。又應に葱蒜蘿菔油麻酒酢、及び餘の一切の諸の菜茹を喫ふべからず。米粉豆餅、并に蒸せ

談笑等。

【因緣の事】祕教中にては或時は此鏡花等を用ふるを得ればなり。

【智慧を尋思せよ】第一義諦を尋思するなり。

【自ら謙下して等】若し菩提心を發さば所犯の罪皆悉く消滅すべし、既に如來一切智智の心を發せば、小罪の此大事を妨ぐことなければなり。

る畢豆及び油麻餅幷に團に作れる食、皆應に喫ふべからず。一切毘那夜迦所愛の食、及び供養の、殘食の油麻粳米豆粥、及以乳粥、薦へらるる所の食、或は觸せられたる食、皆應に食すべからず。一切の車乘及以鞍乘皆乘騎せざれ。一切の嚴身の具、謂ゆる鏡と花粉と藥と傘蓋と因緣の事に非ずんば、亦應に用ふべからず。亦手を以て手を搯り脚を以て脚を搯らざれ。一切の水中に、大小便せざれ。應に岸の側にて手を以て食を承けて而も食すべからず。亦鍮銅の器を以て食せざれ。諸の葉上を以て翻して食を盛らざれ。大小の床榻に臥さざれ。亦人と同處にして臥さざれ。臥さんと欲せん時は清淨にして臥し、智慧を尋思せよ。面を地にして臥さざれ。亦仰いで臥さざれ。師子王の如く、右脇にして臥せよ。臥す時に當つて目を張つて睡らざれ。日に再び食せざれ。應に斷食すべからず、應に多食すべからず。應に少食すべからず。食に於ては疑ひ有らば、須らく之を食すべからず。一切の調戲と多く人の叢叢乃至女人あらん。皆觀看せざれ、身口意等くして所受し、房舍及び好き飮食皆應に著すべからず。惡しき房舍及び麁き飮食を受くるも、皆應に棄つべからず。亦應に紫色の衣裳を著すべからず。亦應に故破の衣服と垢穢の衣服とを著すべからず。念誦の時には應に內衣を著すべし。自ら謙下して愆犯多くして、三種の悉地を成ずる事を得るに由無しと云はざれ。縱ひ宿業の爲に、身諸疾に嬰ろとも、亦念誦を遺闕せざれ。所受の眞言、終に捨棄せざれ。其夢中に於て、或は虛空に於て、聲を現じて告げて言はく、汝應に是眞言を持すべからずと。是の如きを頻に聞くも亦捨棄せざれ。復彼諸

の惡き責罵をも瞋らざれ。何を以ての故に。並に是れ魔なるが故に、唯須らく精進すべし。應に退心して惡思し、諸の邪境界を攀縁して諸根を縱放すべからず。恆常に護淨して之を念誦すべし。

(二)若し大悉地の成就を求めんと欲せば、自ら誦持する所の眞言を以て、應に魑魅魍魎を攝伏すべからず。亦自他を擁護せざれ。亦難を救ひ諸の惡毒を禁ぜざれ。直に所持の眞言のみに非ず。諸餘の眞言をも亦應に作すべからず。所有の隨用、一切の眞言、皆應に頻頻に、而も作すべからず、亦人と互に驗力を諍はざれ。

(三)若し悉地を求めば、當に須らく三時に洗浴し、三時に持誦すべし。浴する毎に、眞言水を以て之を洗浴せよ。水の眞言に曰はく、

唵一同上 虎合吽歌娜二 跋日囉拏曜三

此眞言を以て水を眞言すること七遍して洗浴せよ、一切の魔族毘那夜迦災惱を爲さず。眞言せざる水をば用ひざれ。土の眞言に曰はく、

唵一同上 顊佉羅二皤素反 瞞蘇吉三 娑縛合去訶四

此眞言を以て土を眞言すること七遍して、少水を以て土に和して之に攪いて則ち身に塗楷し、如法に洗浴すべし。一切の毘那夜迦災惱を爲さず。毘那夜迦を辟くる眞言に曰はく、

唵一同上 阿密栗底丁禮反二 歌羅歌羅三 虎合吽抻四

此眞言之を誦すること七遍して、諸の毘那夜迦を辟けて、即ち之を澡浴せよ。沐浴の

【退心】自ら所行を退くが故に、三寶を誹謗する故に、惡思、魔境に隨順にするが故に諸邪境を攀縁すといふ。

【二】第二段に調と不調との二相を明す。

【三】大段第三に正しく持眞言の相を明す。今初に眞言の方便次第を明す。

【水の眞言】攪水の印これなり。

【土の眞言】其手印の相は供養次第の法の如し。

【毘那夜迦の眞言】印を以て頂より下に向ひ足に至つて略去する其印相なり。

【諸の毘那夜迦を僻く】是れ身中の毘那夜迦の難を遣除するなり。

【沐浴の眞言】軍茶利の眞言。

【自灌頂の眞言】教法印あり、印を以て水を取り眞言を持誦すること三遍して自ら灌頂する是その印なり。

眞言に曰はく、

唵同上一　阿上密栗底二同上　虎合吽柹三

此眞言誦すること七遍して、意に隨つて澡浴せよ。洗浴の時には、謾に談話すること勿れ。心に須らく沐浴の心、眞言を持念すべし。沐浴の心眞言に曰はく、

唵同上一　曬可理理二　虎合吽柹三

此眞言之を誦し乃至浴し竟りて、次に水を掬して、自ら頂上に灌げ。自灌頂の眞言に曰はく、

唵同上一　賀佉里里二　虎合吽柹三

此眞言もて二手に水を掬して、眞言三遍して、自ら其頂に灌げ。是の如く三度して、次に頂髮を結べ。眞言に曰はく、

唵同上一　素上反蘇古悉地迦曬二　莎嚩合去二訶三

此眞言を以て髮を眞言すること三遍して、頂に當てて髻を作せ。若し是れ比丘ならば、右の手を拳と作して大拇指を舒べ、頭指を屈して大指の頭の上を押へ、頭指をして圓に曲げしめよ。眞言三遍して印を頂上に置く。佛部の結髮の眞言に曰はく、

唵同上一　尸紙尸契二　莎嚩合去二訶三

蓮華部の結髮の眞言に曰はく、

唵同上一　尸契二　莎嚩合去二訶三

金剛部の結髮の眞言に曰はく、

唵一同上 尸佉上去 寫二 莎嚩合去二 訶三

次に應に手を洗ひ、三度口を漱ぎ、本尊主を浴したてまつるべし。佛部の漱口飲水灑淨の眞言に曰はく、

唵一同上 摩訶二 入嚩囉吽

蓮華部の漱口飲水灑淨の眞言に曰はく、

唵一同上 覩知雉反 覩囉二 矩嚕矩嚕三 莎嚩合去二 訶四

金剛部漱口飲水灑淨の眞言に曰はく、

唵一同上 入嚩理多二 嚩日哩抳吽三句

漱口飮水灑淨を作し已らば、面を本尊所居の方に向け、本尊を觀念して、眞言を持誦し及び手印を作し、水を取り三掬して本尊を浴し、並に閼伽を奉ると想へ。或は水中に於て意に隨つて念誦して方に道場に詣せよ。佛部の獻水の眞言に曰はく、

唵一同上 帝囉二 勃陀二 莎嚩合去二 訶三

蓮華部の獻水の眞言に曰はく、

唵一同上 避哩避哩二 件𠷑三

金剛部の獻水の眞言に曰はく、

唵一同上 微濕合二 嚩二 嚩日𠺁三 莎嚩合去二 訶四

【諸境】瞋嫉を除ける餘の煩惱並に色聲等なり。

【本神】本尊なり

【勝事】所求の悉地なり。

【惠施を行じ等】財寶を行じ、諸の法教等に於て法施を行ずるなり。

【常に忍辱等】以下六度をいふ、六念心に繼ぎは定。

【妙曼荼羅を畫く】悉地をして速に成就せしめんが爲に曼荼羅を畫くなり。

【菩提心と等】三種心なり。大悲なくば其菩提心未だ

其手印の相は、二手掌を仰げ、側めて相著けよ、二頭指を以て、二大拇指の頭を捻じて、餘の六指は相著けて、微し屈す。印を以て水を掬し、眞言三遍して本尊を浴し奉る。此印は三部に通じて用ふ。復其處に於て所持の眞言を誦すること隨つて多少に任す。然して始めて常の念誦の處に往くべし。乃至未だ彼所に到らざる已來は、瞋嫉を懷き、諸境に隨順すること勿れ。身心清淨にして敬つて本神を想うて徐く之に往く。堅く禁戒を持すること、前の所制の如く、常に持して忘れざれ。既に彼所に到らば、即ち應に法の如く諸の事業を修して之を念誦すべし。常に須らく法の如く曼荼羅を作りて、供養し持誦すべし。若し疲倦有らば、當に須らく大乘經典を轉讀すべし。或は制多を作る。諸餘の善事も常に廢忘せざれ。日に須らく三たび三寶に歸し、三度諸餘の罪業を懺悔し、三時に誓ひて大菩提心を發すべし。若し是の如くならば當に成就を得べし。三時に發願して、勝事を成じ、諸罪を除かんと願へ。故に應に常に教に依りて、諸の善業を作して惠施を行じ、大慈悲を具すべし。諸の法教に於て慳悋を生ぜざれ。常に忍辱を懷き、精進して退せず。深く歸信を懷いて、六念心に繼ぎ、所聞の經典諸に文義を思ひ、常に須らく眞言法品を轉讀すべし。當に須らく、眞言法經を供養すべし。經に依りて善く妙曼荼羅を畫きて、應に須らく、自ら入りて之を發すべし。初には諦信の比丘を定めて、之に入れ。比丘尼と優婆塞と優婆夷とは、次に隨つて之に入れよ。並に皆堅固に菩提心と決定心と正見心とを發し、曼荼羅に入り了らば、當に手印を結ぶ法、及び眞言を持する次第法則を授與す。正に廣く

堅固を得ず、故に大悲を以て決定心となす。若し正智なくば利生の弘誓を究竟することを得ざる故正見心と名く。

【四】第二に道具を加持する眞言の次第を明す。

爲に眞言の法則を宣說すべし。白月の八日、或は十四日十五日、及以月盡の日、或は十一月の十五日、是の如きの日、倍 供養を加へ、法に依り、持誦して護摩の法を作せ。加ふるに禁戒を持し、常に勤めて憶念し、倍 諸事を加ふれば、卽ち眞言速疾に成することを得ん。

護摩を作すに向かん時には、當に須らく手を以て抜折羅を持し、瞋怒金剛の眞言一千八十遍を誦し、或は百八遍して一切の事を作すべし。瞋怒金剛の眞言に曰はく、

曩謨剌怛娜二合怛囉二合夜耶一 那莫室戰拏跋日囉幡拏曳二 摩訶藥乞灑上同栖奈反奴尚幡彈曳三 唵同上四 枳里枳里五 跋日囉六 避麼囉滂捺二合囉七 北跋反没羅訖二合囉底八 摩訶矩嚕駄彌惹野九 顊訖鑠彈十 虎二合吽虎二合吽抪抪十一 畔駄畔駄曜十二

金剛の諸事には、應に天火を用て木を燒くべし。或は苦練木、或は屍を燒ける殘火の櫓木を取れ。或は白栴檀木、或は紫檀木、隨つて一木を取りて刻んで三股金剛杵に作れ。呼摩を作らん時、及び念誦の時には常に左の手を以て執持せよ。能く諸事を成すが故に、杵と號す。是れ善成就の者なり。若し常に此金剛杵を持する者は、一切毘那夜迦障難を作す者、悉く皆恐怖し、馳散して去る。紫檀香の泥を以て、金剛杵に塗りて、本尊の前に置き、當に如上の眞言を以て花香を眞言して供養すべし。其諸の事業は金剛の祕密微細にして、悉く能く諸餘の事等を成就す。諸事を作さん時は、常に須らく右の手に珠索を帶持して、香を以て之に塗り、眞言を誦すべし。眞言一百八遍し、或は一千八十遍す。金

【金剛明王の珠索の眞言】即ち金剛部淨數珠の眞言。三部各此眞言あり其本部の眞言に隨つて珠孔を穿ち、一一の珠顆に七遍を崇誦し、乃至穿繼し畢りて、又更に眞言百遍を持誦し、復前法の如く數珠を淨め、後に此眞言を以て成就を作すなり。

【嗚嚕捺囉叉】天目と譯す、金剛部念誦の人の數珠に用ふ。

【半拏囉嚩斯尼】白處又は白衣觀音の梵名、

剛明王の珠索の眞言に曰はく、歸命同前

唵一同上枳嚦枳嚦二潑捺二合嚦抳上三莎嚩合去二訶四

此明王の大印をば忙莽鷄と名く。能く一切の明王の眞言を成じ、亦能く增益し、及び能く眞言の字句を滿足し、亦能く諸餘の法事乃び護身の事を成就す。眞に但是れ諸々の明王の母なるのみに非ず。亦是れ一切金剛の母なり。若し金剛部の珠索は、一の嗚嚕捺囉叉を著けて、線の中に置いて、後に繫いで結と爲せ。金剛部の中既に爾り。餘の二も知んぬべし、佛部の珠索は、應に佛母の眞言を用ふべし。若し蓮華部の珠索ならば、應に半拏囉嚩斯泥を用ふべし。云はく、觀音母の眞言なり。佛母の眞言に曰はく、

娜謨皤伽上嚩底鄔瑟抳灑野一唵二同上嚕嚕塞同上普嚕三入嚩攞四底瑟佗同上悉駄路者儞五薩嚩

囉他娑去駄儞六莎合去二嚩訶七

觀音母の眞言に曰はく、

娜謨囉怛二合娜怛合囉夜野一唵二同上迦制下同知西反弭迦制三迦穆迦顛反知除迦制四皤伽上嚩底弭

惹曳五莎合去二嚩訶六

此珠索を帶持する者は、毘那夜迦障を爲すこと能はず。身清淨なることを得て、當に速に諸々の所求の願を成滿すべし。作法の時は、當に茅草を用て鐶に作り、右の手の無名指の上に貫き置くべし。應に當部の三字、半の心眞言を誦すべし。眞言一百八遍、或は一千八遍して、後に指の上に安ず。佛部の心眞言に曰はく、

【五】威儀次第を明す。　次に三業の

唵同上爾娜職反而翼

觀音部の心眞言に曰はく、

唵同上阿上嚕力

金剛部の心眞言に曰はく、

唵同上跋日囉娙力

若は供養の時、若は持誦の時、若は護摩の時には、應に草鐶を著すべし。鐶を著するを以ての故に、罪障除滅し、手淸淨なることを得て、所作吉祥なり。復白氎の絲以及麻の縷を取りて童女をして、染めて紅色或は欝金色に作さしめ、合せて線索に作るに眞言の結を作せ。一び眞言して一び結び、一七結を滿ちて本尊の前に置き、眞言を以て、索を眞言すること一千八遍せよ。念誦の時、及び護摩の時、若は消息の時午暮の時なり。皆持して腰に繫けよ。眠るにも精を失せず。常に當に繫け、佩ぶべし。索の眞言に曰はく、

唵一同上歌囉歌囉畔馱顎二犿訖囉二馱囉捉二悉馱剌梯四莎嚩二合訶五

（五）若は念誦の時、若は護摩の時、若は梳髮の時、着衣の時、偏袒の時、臥の時、洗淨の時、澡浴の時、凡そ著し脫ぐ所の上の淨衣服皆之を眞言せよ、若し大小便には、應に木履を著くべし。若し本尊の前、及び和上阿闍梨の前、諸の尊宿の前に詣るには皆應に着くべからず。諸尊の處に於て、身口意を以て之を供養せよ。若し悉地速に成ずることを得んと樂はん者は、若し制多及び比丘僧を見ば、應に當に禮敬すべし。若し外天の形像に遇ふに

【定】阿字の大定。

【世間の諸欲】六塵なり。

【本戒】眞言門の四重禁等なり。

【明王の戒】此品等所說の法則。

【供養花品】以下五品は眞言を作する時の供物を明す。今品には七十九種の華をもて三部諸尊を供養するの法則を明す、意は華の意思より生ずるの義。

【一】供養華を

は、但應に合掌し、或は伽佗を誦すべし。若し尊者を見ては、亦應に禮を致すべし。若し妙法を聞かば、深く敬信を生ぜよ。若し菩薩の不思議の相を聞き、或は眞言所成の諸事を聞かば、皆應に歡喜し、心の踊躍を懷くべし。若し成就を樂はば、常に應に勇進すべし。懈怠を生ずること勿れ。斯の如きの所制、常に須らく繫念すべし。若し爾らずんば、則ち制戒に違し、大重罪を獲て成就する所無けん。身等の諸根、恆常に定に在りて應に世間の諸欲に貪著すべからず。常に勤めて斯の如きの律制を依行して廢忘せざれば、若し晨朝の時に諸罪を誤犯して、若し暮間に至らば即ち須らく懺悔すべし。若し夜時に於て諸業を誤犯せば、明けて晨朝に至つて誠心に懺悔せよ。恆に須らく清淨にして、法に依りて念誦し、及び護摩供養等の事を作すべし。常に本戒に依りて應に是の如く作意して時日を遣度すべし。明王の戒の中に、常に須らく作意せば、久しからずして悉地を獲る位の中に住すべし。

蘇悉地羯羅經供養花品第七

復次に分別して三品の法を說かん。扇底迦の法、補瑟徵迦の法、阿毘遮嚕迦の法及び餘の諸法是を三品と爲す。三部に各の三等の眞言有り。謂ゆる聖者の說、諸天の說、地居天の說、是を三部と爲す。聖者の說とは、謂く、佛菩薩聲聞緣覺の說きたまへる者、是を聖

かんとして初に三品の法を明す。【餘の諸法】鈎召敬愛等の法なり。【諸天】三界廿八天のこと。【部多】山の名。【畢舍遮】持國天所領の鬼の名。【鳩槃茶】增長天所領の鬼。

【二】正しく供養の花を明す。中初に略して花を供養するの法式を明す。【三種の法】三部に各扇底迦等三品の法あるをいふ。【等しく】普く諸花を三部の諸尊に供養するなり。【花を眞言し】眞言もて花を加持して以て諸尊に奉獻するなり。

【四】二に廣く花を供養するの法式を明す。白は諸色の本、佛は白にして法の源の故に。

者の眞言と爲す。諸天の說とは、淨居天より乃し三十三天に至るまで諸天の所說、是を諸天の眞言と爲す。地居天の說とは、夜叉、羅刹、阿修羅、龍、迦樓羅、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅、部多、畢舍遮、鳩槃茶等の所說、是を地居天の眞言と爲す。若し扇底迦の法を作さば、應に聖者の眞言を用ふべし。若し補瑟徵迦の法を作さば、應に諸天の眞言を用ふべし。若し阿毘遮嚕迦の法を作さば、應に地居天の眞言を用ふべし。若し上成就を求めん者は、應に聖者の眞言を用ふべし。若し中成就を求めん者は、應に諸天の眞言を用ふべし。若し下成就を求めん者は、應に地居天の眞言を用ふべし。是の如きの三部の各の三等の成就有り。

(二)三種の法を作す中に、倶に當に等しく水陸所生の諸種の色花を用ふべし。名色の差別は、各の本部に依りて、善く之を分別せよ。以て花を眞言して當に之を奉獻すべし。是頌を發して言はく、此花は清淨なり、生處復淨なり。我今奉獻す。願くば納受を垂れて、當に成就を賜ふべしと。獻花の眞言に曰はく、

阿上歌囉上阿上歌囉一薩嚩上莫地合耶馱囉二布爾底反三丁上莎嚩二合訶四

此眞言を用て花を眞言して三部に供養せよ、

(三)若し佛に獻ぜん花は、白花の香しき者を用て之を供養すべし。若し觀音に獻ぜんには、應に水中の所生の白花を用て之を供養すべし。若し金剛に獻ぜんには、應に種種の香花を以て之を供養すべし。若し地居天に獻ぜんには、時に隨つて取る所の種種の諸花、而も之

【應に獻ずべき華等】下、如法供養を明す。今三十一種の花を擧ぐ。

【三部三品三等】佛部等を三部、扇底迦等を三品、增者說等を三等といふ。

を供獻せよ。應に獻ずべき花とは、忙攞底丁異反花、鉢吒羅花、蓮花、瞻蔔迦花、龍蘂花、母單の花に似たり。嚩無可反句嚂花、俱物頭花、娑羅樹花、末利花、擧示迦花、喩底聽以反迦花、勢破理迦花、句嚕嚩上同劍花、迦淡聞花、末度擯抳迦花、怛嘌二合拏花、彥陀補澁波花本囊去言花那嚩同上忙里迦花、阿輸去劍花、母注拑難花、那莽難花、注多曼折利花、勿勒蘱頭鉢羅花、迦宅嚂花、健折娜藍花、擯抳劍花、優鉢羅花、得藥嚂花、拑難花、迦囉末花等なり。林邑蘭若水陸に生ずる所の、上の如き等の花に於て、應に須らく善く三部三品三等を知りて花を以て供獻すべし。忙攞底花、得藥嚂花、拑難花、末理迦花、喩底迦花、那龍蘂花、上の如き等の花を以て佛部に供獻せよ。優鉢羅花、俱物頭花、蓮花、娑羅樹花、勢破理羅開底迦花、本娜言花、得藥嚂花、上の如き等の花を用ては、觀音部の中に供獻するを勝と爲す。青蓮花、鉢孕衢花、葉花、枝條の餘の說かざるもの等を用ては、金剛部の中に通じ、供獻すべし。如上の花の中に白色の者は扇底迦の法を作し、黃色の者は補瑟徵迦の法を作し、紫色の者は阿毘遮嚕迦の法を作せ。是の如きの花の中に味甘き者は、扇底迦の法を作し、味辛き者は、阿毘遮嚕迦の法を作し、味淡き者は補瑟徵迦の法を作せ。或は淨處に生ずる所の枝花有り。或は始めて芽を生ずる茅草、或は小草の花、或は中樹の花、大樹の花、種種の諸の花、類に隨つて當に用ふべし。其闍底蘇末那花をば、唯通じて佛に獻ぜよ。若し紅蓮花ならば、唯通じて觀音に獻ぜよ。若し青蓮花は、唯通じて金剛に獻ずるを、各說いて上と爲す。佛部の中に扇底迦の法を作さんには、闍底蘇末那花を用ひ、補瑟徵迦の

【長時の供養に等】次に長時通供養を明す。

【如し作法の時等】三に隨得供養を明す。

【若し花の獻ずべきなし等】四に相替供養を明す。

法を作さんには紅蓮花を用ひ、阿毘遮嚕迦の法を作さんには青蓮花を用ひよ。餘の二部の中には此に類して之を作せ。上色の香花、中色の香花、下色の香花、事に隨つて分ち用ふ。或は花の條を用ひ、或は墮ちたる花を用ひては、以て天后に獻ぜよ。說いて上勝と爲す。紫白二色の羯嚕末囉花は、用て忿怒尊主及び諸の使者に獻ぜよ。說いて上勝と爲す。句吒惹花、底落迦花、婆羅花、迦嚟臘迦引囉引花、阿婆攞努嚕莽二合花、尾螺花、迦吒嚧花等、隨つて其一を取り、遍く三部に通じて、之を供養せよ。及び上中下の除災等の三には、復種種の諸花を以て、合成して鬘に爲れ。或は種種の花を以て、聚めて供養せよ。遍く九種に通じて用ふ。諸花の中に、唯臭き花、刺樹に生ぜる花、苦辛の味ある花をば除く、供養するに堪へず。前に廣く花を列るに、名無き者をば、亦應に用ふべからず。又木菫花、計得劍花、阿地目得迦花、菩句藍花、俟鑊花等亦應に用ふべからず。長時の供養に、九種に通ずる者は、紅花閃弭花、鉢囉孕句花、骨路草等及び稻穀花、油麻相和して供養せよ。如上所說の種種の花等の供養は、最も勝上たり。如し此類の諸花の獻ずべき無くば、但白粳米を用ひよ。擣碎なる者、擇んで之を供養せよ。亦九種に通じて、互に諸花を用ふるを得ざれ。如し作法の時、求むるに得ざらん者は、所得の花に隨つて、亦通じて供養せよ。若し花を以て供獻せば、應に當部の花の眞言を用て花を眞言して獻ずべし。若し花の獻ずべき無くば、應に蘇囉三の枝葉、或は莽嚕闍葉、灘敦葉、鉢忙攞羅葉、訖嚟瑟拏吉利迦葉、忙視嚩伽葉、闍羅惹迦葉、及び蘭香等の葉を替へて之を獻ずべし。如し此等の枝葉無くば

【若し如上の花菓等】五に想會供養を明す。
【前の如く花菓等】六に合掌供養を明す。
【五】第三に總結
【塗香藥品】廣く數十の香藥を和合して以て塗香となし、諸尊に奉獻するの法則を明す。
【一】初に廣く所獻の塗香を陳說す

應に嚩無可反落迦の根、甘松香の根、卷栢牛膝の根、及び諸の香藥の根、香菓等を用て、亦通じて供養すべし。謂ゆる丁香、豆蔻、肉豆蔻、甘蒲桃、諸の香菓等、並に通じて花に替へ用ひて之を供養せよ。若し如上の花藥根菓の獻ずべき無くば、曾見曾聞の獻供養の花、或は自ら曾て獻せし花、所應に隨つて想運して供養せしめよ。最も勝上の供養尊法と爲す。前の如く花菓等の獻有りと雖も、若し能く心を至して虔處に合掌頂奉し、本尊に花菓を供養せよ。是の如くの心意の供養は最上なり。更に過ぎたる者無し。

(五)常に應に是の如きの供養を致すことを作すべし。疑惑を懷くこと勿れ。則ち成就を得ん。

蘇悉地羯羅經塗香藥品第八

復次に今三部の塗香藥の法を說かん。諸の眞言に隨つて應に供養すべき者は、能く衆福を成ずべし。

(一)其香藥を名けて曰はく、香附子、句吒縒吒靑木香嚩落迦、烏施嚩、舍哩嚩、煎香、沈香、欝金迦、白檀迦、紫檀迦、嚩囉拏二合肥唔鉢囉鉢怛羅或云杜忙囉拏劍婆囉藍云五粒松婆北嚩迦鉢特莽劍云栢木帶囉鉢㗚抳迦迦利也釼或云甲香羅云車佛劉子丁香、娑羅門杜皮、天木、鉢孕瞿、閼乳雞燥囉盆泥、去聞細囉嚩唔劍、迦畢舍、嚧達囉、訖嚧母劍、頗里迦聹、囊里迦、始嚩擔髀、蘇嚩㗚拏除迦藍、忙覩拃伽、卑皮、多利三縛娑但㗚拏忙去斯云甘松香那莽難、莽唔聞母羅計施耽云蘇水忙去羅

本嚢去言、翳羅米夜傑囉、嚢却設擬羅縛利縛、澁比迦、但胡綏備闍、設多補澁波、迦訶駄香、蔬蹄草、笯迦脚、白豆寇句藍若反而夜底都以反云完豆寇頗囉諸囉劍、却泮藍、娑縛孄闍地夜莽劍、戰茶、都嚕香蘇合瑟劍、鉢囉娑怛婆縛計薩藍等の類、及び膠計なり。謂ゆる龍腦香、吉陀羅婆、娑遮囉娑、安悉香、薫陸香、設落翅、勞薜婆迦等、及び餘の膠ある樹の香しき者、並に本部に隨つて善く須らく合和して用ふべし。諸草の香と、根汁の香と、花等の三物、和して塗香と爲したるは、佛部の供養にせよ。又諸の香樹の皮、及び白栴檀香、沈水香、天木香、煎香等の類、幷に香藥を以て、前の如く分別し、和して塗香と爲して、蓮華部に用ひよ、又諸の香草の根と花菓葉等と、和して塗香と爲して、金剛部に用ひよ。或は塗香の諸々の根菓を具して、先人の合はする所の香氣の勝れたる有らば、亦三部に通ず。或は唯沈水香を少しき龍腦香に和し、以て塗香と爲して佛部に供養せよ。或は唯白檀香を少しき龍腦香に和し、以て塗香と爲して蓮華部に用ひよ。或は唯鬱金香を少しき龍腦香に和し、以て塗香と爲して金剛部に用ひよ。又紫檀を以て塗香と爲し、一切の金剛等に通じて用ひよ、完豆寇、脚句羅惹底都以反、蘇末那、或は濕沙蜜、蘇澁咩羅、鉢孕罹等を以て塗香と爲し、用て一切の女使者天に獻ぜよ。又甘松香、濕沙蜜、完豆寇を以て塗香と爲し、用て明王の妃后に獻ぜよ。又白檀、沈水、鬱金を以て塗香と爲し、用て明王に獻ぜよ。又諸の香樹の皮を以て塗香と爲し、用て諸の使者に獻ぜよ、又所得の香に隨つて以て塗香と爲し、地居天に獻ぜよ。或は單に沈水香を用ひて以て塗香と爲し、三部九種の法等及び明王妃一

【香を和合する分等】次に供と合せざる物を明す。

【又四種の香等】三に日別供養を明す、

【之を獻ぜん等】四に眞言塗香供養を明す。

【若し諸香を求むる等】五に隨得供養を明す、

【分別燒香品】三部に隨つて焚香を明すの差別を說く

切處に通じて用ひよ。若し別に扇底迦の法を作すこと有らば、白色の香を用ひよ。若し補瑟徵迦の法には黄色の香を用ひよ。若し阿毘遮嚕迦の法には紫色の無氣の香を用ひよ。若し大悉地を成ぜんと欲せば、前の汁香及以香菓を用ひよ。若し中の悉地を欲せば、堅木香及以香花を用ひよ。若し下の悉地を欲せば、根皮の香と花菓とを用て、以て塗香と爲して之を供養せよ。香を和合する分には、應に有情の身分の香を用ふべからず。謂く、甲香麝香紫鉚等の香、及以酒酢、或は分に過ぎたる者、世に愛せざるは、皆應に用て之を供養すべからず。又四種の香あり。謂く、塗香、末香、顆香、丸香なり。一の香を用ふるに隨つて壇を畫いて花と爲して日別に供養せよ。之を獻ぜんと欲せん時には、是の如きの言を誓ふべし。此香は芬馥なること天の妙香の如し。清淨に護持して我今奉獻す。唯納受を垂れ、願をして圓滿せしめたまへ。塗香の眞言に曰はく、

阿上歌囉阿上歌囉一薩嚩無可反苾地二合耶馱囉二布爾羝三莎嚩去二合訶

此眞言を誦し、塗香を眞言し、後に所持の眞言を誦して淨持すること法の如くして尊に奉獻せよ、若し諸香を求むるに、而も得ること能はざれば、隨つて塗香を取りて之を眞言し、復本部の塗香の眞言を用て香を眞言し、已りて本尊に奉獻せよ。

蘇悉地羯羅經分別燒香品第九

【一】正しく說く中初に燒香を明す

【遍く九種に通ず】三部に各三種の法或は三等成就ある故に九種といふ。

【是の如く三種の和香等】初の七膠香を次の膠香に和して上等とし、後蘇合沈水等の香を和せるを第一となす等を三種とするなり。

復次に今三部の燒香の法を說かん。

(一)謂く、沈水、白檀、欝金香等なり。其次第に隨ひ取りて供養せよ。或は三種の香和して三部に通じ、或は一香を取りて隨つて部に通じて用ひよ。香の名を列ねて、曰はく、室唎二合吠瑟吒二合劍汁、婆折云沙樹膝囉婆、乾陀羅素香、安悉香、婆落翅香、龍腦香、薰陸香、語苫地夜二合日劍、祇哩惹密訶梨勒、砂糖香附子、蘇合香、沈水香、嚩引落劍、白檀香、紫檀香、五葉松木香、天木香、嚢里迦、鉢哩閉攞嚩、烏施藍、石蜜、甘松香、及び香菓等なり。若し三部の眞言の法を成就せんと欲せば、應に香を和合すべし。室唎二合吠瑟吒迦樹の汁香は遍く三部に通じ、及び通じて諸天に獻ぜよ。安悉香は通じて藥叉に獻ぜよ。薰陸香は通じて諸天の天女に獻ぜよ。婆折囉婆香は地居天に獻ぜよ。婆落翅香は女使者に獻ぜよ。乾陀囉婆香は男使者に獻ぜよ。龍腦香と乾陀羅婆香と、婆折囉婆香と、薰陸者と、安悉香と、薩落翅香と、室唎二吠瑟吒二合迦香と、此七の膠香を和して、以て之を燒けば遍く九種に通ず。此七の香を說いて、最も勝上と爲す。膠香を上と爲し、堅木香を中と爲し、餘の花葉根等をば下と爲す、蘇合沈水欝金等の香を和せるを第一と爲す。又白檀と砂糖とを加へたるを、第二の香と爲す。又安悉と薰陸とを加へたるを、第三の香と爲す。是の如く三種の和香、隨つて共一を用て遍く諸事に通ず。又地居天等及以護衞には、應に薩折囉婆、砂糖、訶利勒を用ひて以て和して香と爲して、彼等に供養すべし。又五の香あり。謂ゆる砂糖と、勢羅翼迦と薩折囉婆と訶利勒と石密と和合して香と爲して、三部に通じて一切の事

に用ひよ。或は一の香あり、遍く諸事に通ず。如上の好香は衆人の貴ぶ所の上妙の和香なり。如し是香無くば、所得の者に隨つて、亦三部に通じて、諸餘の事に用ひよ。上の所說の合和香の法の如く、善く須らく分別して、其所用に應じて、根葉花菓時に合ひ、持して獻ずべし。又四種の香あり、應に須らく之を知るべし。謂ゆる自性香と、籌丸香と塵末香と作丸香となり。亦須らく要ず應用の處を知るべし。若し扇底迦の法には籌丸香を用ひよ、若し阿毘遮嚕迦の法には、塵末香を用ひよ。若し補瑟徵迦の法には作丸香を用ひよ。一切に攝通して自性を用て、籌丸香に合して置け。沙糖を以て塵末香、樹膠香に和して、應に好蜜を用て丸香に合和すべし。或は蘇と乳と砂糖とを以て蜜に替へて、香に和して、自性香の上に應に少の蘇を着くべし。如し當部の所燒の香を求むるに、若し得ずんば、所有の香に隨つて先づ當部に通じて、先づ此部の香の眞言を誦じて香を眞言し、然る後に所持の眞言を誦ぜよ。合和香の法には甲香紫鈔等の香を置かざれ。亦應に末儞也等を用て香を和合すべからず。亦過分して惡氣をして香氣無からしむることを致さざれ。

【二】眞言の燒香供養を明す。

(二)此林野樹香膠香を以て能く、一切の諸人の意願を轉ぜよ、諸天の常の食をば、我今將に獻ぜんとす。哀愍して受くることを垂れたまへ。燒香の眞言に曰はく、

阿(上)歌囉阿(上)歌囉(一)薩嚩(同上)(二)苣地(合)耶馱囉(七)布爾起(三)莎嚩(二合)訶(四)

此眞言を誦して香を眞言し、後に所持の眞言を誦し、香を眞言して燒き、如法に獻ずるが故に。

【燃燈法品】略して二十三種の諸の香油等を燃じて諸餘を供養し、諸天仙をして歡喜せしむる成就の法則を明す。

【一】初に供物を明す。

【法に隨つて取用す】隨て眞言を以て加持して之を作し、而も充用するを以ての故にいふ

蘇悉地羯羅經燃燈法品第十

復次に當に三品の燃燈の法を說くべし。法に依るを以ての故に、諸の天仙をして歡喜し成就せしむ。

(一)金を以てし、銀を以てし、赤と熟との銅を以てし、或は瓷瓦を以て燈盞に作し、此五種の中に法に隨つて取用せば、本神歡喜す。燈炷を作る法は白氎の花にて作り、或は新しき氎布にて作り、或は耨句羅樹の皮の綵にて作り、或は新淨の布にて作れ。諸の香油の衆の樂ふ所の者を用ひ、或は諸の香しき蘇油を用ひよ。其扇底迦の法には上の香油を用ひよ。補瑟徵迦の法には次の香油を用ひよ。阿毘遮嚕迦の法には、下の香油を用ひよ。若し諸の香木の油をば扇底迦に用ひ、若し油麻の油をば補瑟徵迦に用ひ、若し白芥子の油をば阿毘遮嚕迦に用ひよ。阿去怛婆菓の油をば眞言の妃と后とに用ひ、及び諸の女仙に用ひ、若し諸菓の油をば眞言主に用ひよ。若し苦樹の菓の油をば諸天に用ひ、及び摩訶迦羅に用ひよ。若し魚の脂をば鬼を祀るに用ひよ。若し諸の畜生の脂をば藥叉を祀るに用ひよ。若し拔羅得鷄の油、麻子の油は、下類の天を祀るに用ひ、及び四姉妹遮門荼等に用ひよ。若し寒林の中に吠多羅を起す者には、犬宍の脂を用ひよ。諸油の中に犛牛の蘇は上なり、擇びて三部に通ぜよ。又白牛の蘇は扇底迦に用ひよ。黃牛の蘇は補瑟徵迦に用ひよ。

烏牛の蘇は、阿毘遮嚕迦に用ひよ。若し本部有らば別に之を分別せよ。亦は彼に依りて用ひよ。若し諸の薬の中に生ずる所の油をば補瑟徴迦に用ひよ。若し諸香の中に生ずる所の油をば、扇底迦に用ひよ。若し悪しき香氣の油は阿毘遮嚕迦に用ひよ。如上に略して燃燈の法則を説きつ、善く自ら之を觀ぜよ、縦ひ此は説かずとも、當に審かにして之を用ふべし。燈油の部に依らざるもの有りと雖も、本部の眞言を以て之を眞言して亦通じて供養せよ。

（二）燈は能く障を却け然も障を淨除す、我今奉獻す、哀愍して受くることを垂れたまへ。燈の眞言に曰はく、

唵一 阿上 路迦野阿上 趣迦野二 薩嚩 地 令耶駄羅三 布爾 跢四 莎嚩訶五

此眞言を誦し已りて、次に本持の眞言を誦して之を眞言せよ。復淨法を作して、諸過を除くが故に、前の品に説くが如し。准じて持修するが故に。

蘇悉地羯羅經獻食品第十一

復次に、我食を獻ずべき法を説き、諸の天仙をして悉く皆歡喜し、速に成就することを得しめん。

（一）略して獻食を説かん。應に圓根と長根と諸菓と蘇餅と油餅と諸の美膳等と、或は種種

【二】二に正しく燈油を供養するを明す。

【獻食品】種種の食を獻じて諸天仙をして皆悉く歡喜し、速に成就を得しむるを説く。

【一】初に供物を陳説す。中に就て今は四種食を以て通じて諸部に獻ずるを明す。

【圓根】芋等。

【長根】牛蒡等、

【美膳】あつもの

【其次第を示さば等】假使一菓の其味甘甜なる、或は甘酢等其次第の如く三部に獻ずべし味の差別に隨て各一部に獻ずる故なり。

【意を加へて】女天等に獻ずるには名の相似たるを以て、獻ずべければなり。

【三部の一切の忿怒】三部に各忿怒ある故に。

【或は村の側等】次に諸の草根等を明す。

【人中】夜叉、羅刹等も地居の故にこの中に入る。

の粥と、及び諸の飲食とを用ふべし。此四種の食は通じて諸部に獻ず。佉慕嚕迦菓は、普く三部に通ず。又柘榴菓注那菓を以ては、亦三部に通ず。其次第を示さば、各一部に通ぜん。若し味ひ甘甜なるは扇底迦に用ひ、若し味ひ甘酢なるは補瑟徵迦に用ひ、若し味ひ辛澁なるは阿毘遮嚕迦に用ひ、若し多羅樹の菓、蒻子菓、尾羅菓、儞跛囉菓、及び餘の臭き菓にして衆の樂はざる所は亦應に獻ずべからず。或は上味の菓有らん。世に復多く饒にして、復最貴なる此の如きの菓を獻ぜば、上成就を獲ん。或は諸菓有り、其味ひ次に美にして世に復求め易くして、價貴き所無き、此の如きの菓を獻ぜば、中成就を獲ん。或は諸菓有り、其味ひ苦く辛く澁き等、世に復豐にして足り、價復最も賤なる、此の如きの菓を獻ぜば、下成就を獲ん。若し意を加へて奉獻せんと欲せば、應に女名菓を取るべし。謂ゆる椑子杏桃等の菓は以て女天に獻ぜよ。諸樹より生ぜる菓の苦味無き者、眞言の妃と后とに獻ぜよ。室利佉羅菓をば、通じて三部の一切の忿怒に獻ぜよ。薄拏菓をば、唯一切の藥叉に獻ぜよ。郄比食菓をば室利天に獻ぜよ。鉢夜羅樹より生ぜる菓は鉢麗使迦に獻ぜよ。是の如きの諸の菓更に多種有り。諸の異名有るは、隨つて其味ひを觀て用て之を獻ぜよ。或は村の側、或は蘭若の淸淨の處に於て、諸の草根有りて其味ひ甘美ならば之を取つて奉獻せよ。亦成就を得ん。微那唎の根は、一切に通じて用ひよ。亦奇美の味有るは草根枝葉、亦通じて奉獻せよ。直に天神のみならず、人中にも亦用ひよ。若し山中に生ずる所の根の美味なる者は、佛部に供獻せよ。又熟芋の根亦佛部に通ず。又迦摩嚕迦

【圓根】烏芋の類

【莎悉底食等】以下二に諸の餅食を明す。

の根、微那唎の根、嚩也賜の根、倶擧知の根、及び餘の圓根の水より生ぜる者は、蓮花部に用ひよ。又一切の藥の圓根の味苦く辛く淡きと、及び多種の生芋とをば金剛部に用ひよ。又色白く香しく味極めて甘美なる、是の如きの圓根は佛部に供獻せよ。又色黃にして香しく、味太だ酸からず、亦太だ甘からざる、是の如きの圓根をば蓮花部に用ひよ、又赤色にして香しく、味ひ苦く辛く淡く、氣臭く甘からず。是の如きの圓根をば、金剛部に用ひよ。是の如きの三部の扇底迦の法等、及び上中下に並に同じく通用せよ。略して圓根を說きつ。善く其部に隨ひ、上中下に依りて用て之を獻ぜよ。是の如く分別すれば、速に成就を得ん。斯圓根長根の生長、及び所用の如法の類を說くことと是の如し。若し葱蒜韮の根と、及び餘の味ひの極めて臭く辛く苦き等をば、應に用て獻ずべからず。莎悉底食、烏路比迦食、布波食、嚩拏迦食、及び餘の粉食、或は種種に作れる胡麻團の食、或は種種に作れる白糖の食、歡喜團の食、莽度失食、毘拏迦食、儐抳拏句釋迦食、阿輸去迦嚩佉也食、指室羅食、餅食、過羅吒瑟吒迦食、除句離也食、鉢鉢吒食、布刺拏食、莽沙布波食、微諸鐸迦食、補沙嚩多食、羅嚩抳迦引食、藥部迦引囉迦食、倶矩知食、囉莽迦引食、析婆食、昔底迦食、鉢躁香指里迦食、室利布囉迦食、吠瑟微迦食、瞋諾迦食、吒那囉迦食、愚拏補囉迦食、質但囉布波食、却若羅食、愚拏鉢鉢吒失陵伽吒迦食、竭多食、種種の藥避修濱拏布波食、囉若析婆食、婆若迦食、竭嚟多布嚩迦食、劫謨微迦食、句莎里迦食、三補吒食、捨拏嚩食、訶哩儜食、釋句囊食、弭麗食、種種の鉢囉抳悖嚟瑟吒迦食、地比迦食、

【粳米の飯等】次に飯羹及び諸粥を明す。

若羅訶悉底儞闍食、羯羯囉儞拏迦食、畸羅伽去多食、嚩底徴迦食、乞灑合底迦食、伽若羯哩抳迦食等なり。上の如き等の食、或は砂糖を用て作り或は蘇油を以てし、或は油麻を以て和して作ること其本部の如し。法に隨つて用ひよ。法に依つて奉獻すれば、速に成就を得。米粉の食は、佛部にして扇底迦、及び上成就を作す。若し一切の麥麵の食は、蓮花部にして補瑟徴迦及び中成就を作す。若し油麻と豆子との食は金剛部にして、阿毘遮嚕迦及び下成就を作す等なり。一切の諸の食味を用ふる中に、白糖を以て莊る所のものをば、佛部の中に常に當に用て獻ずべし。若し室利吠瑟吒迦食をば蓮華部に用ひよ。若し歡喜團の食をば金剛部に用ひよ。若し布波迦引食をば藥叉に用ひよ。若し女名食をば眞言の妃と后とに用ひよ。女名食とは、餉謨里食、鉢鉢徴食なり。是は諸食の中に最も復美味なるものなり。上成就を求むるには、用て奉獻せよ。其次の味の如きは餘の二部に用ひよ。此中に具せざらんをば、所作の食に隨つて八部等に用ひよ。獻食の時は先づ巾菓葉等を敷いて莊嚴を爲し、先づ沙悉底迦食、烏路比迦食布波食を置け。是の如く先づ三部に作つて共に同じくし、復本部所須の飲食の如く、力に隨つて之を獻ぜよ。粳米の飯と六十日に熟せる粳米の飯と、大麥の乳の飯と種ゑずして自ら生えたる粳米の飯と、粟米の飯とを以て應に須らく獻ずべくんば、法に依りて之を獻ずべし。及び諸の香味奇美の羹𦞦と、幷に諸の豆𦞦をも之を奉獻せよ。乳煮の大麥の飯と、及び種ゑざるに自ら生えたる粳米の飯とは、上成就を求めよ。粳米の飯と、及び六十日熟の粳米の飯とは、中成就を

【前に各の說ける等】五に隨方食を明す、

【二】以下下食法を明す。中初に廣く献食の法を明す

【何事をか成さん】歡愛鈎召等なり。

【何等の類等】即ち補瑟徵迦なり、諸眞言に於て是の如きの性あり、是是

求めよ。粟米と及び飯とは下成就を求めよ。扇底迦の法を上成就と爲し、補瑟徵迦の法を中成就と爲し、阿毘遮嚕迦の法を下成就と爲す。飯食根菓飲粥を供獻せんことは上中下に依りて之を奉獻せよ。扇底迦の法は上にして佛部なり。補瑟徵迦の法は中にして蓮華部なり。阿毘遮嚕迦の法は下にして金剛部なり。最上の悉地と及與中下となり。善く須らく法に依り、類に隨つて知るべし。羹臛の中に味、甘甜の者は扇底迦に用ひよ。味、酢甜なるものは、補瑟徵迦に用ひよ。味、苦辛淡の者は阿毘遮嚕迦に用ひよ。乳の粥をば扇底迦に用ひ、柘榴の粥酪の粥等をば、補瑟徵迦に用ひ、訖婆囉の粥は、謂く胡麻粳米豆子等なり。阿毘遮嚕迦に用ひよ。前に各の說ける諸の食味等の如く、或は方所に隨つて種種の異有り。上中下を觀じて之を奉獻せよ。或は諸味の衆の稱讃する所、或は自愛の者有らん。應に持して佛に獻ずべし。或は本部の眞言の所說の獻食の次第有らば、宜しく當に之に依るべし。若し彼に異ならば成就を得ず。食の中に顯なる者、及以惡香をば金剛部に用いよ。

（二）前に說ける塗香燈食等、各の本部に依れ。扇底迦等は當品も之に依れ。眞言の性は喜と爲んや怒と爲んや。觀ぜよ。次に復之を觀ぜよ、然も何事をか成さんと。復細しく何等の願をか滿つると尋察せよ。既に觀知し已りて、前に獻ずる所の食、力に隨つて之を獻ぜよ。獻法の中に於て迦引弭迦食を用ふること有りと見ば、應に莎悉底食、烏路比迦食、及び餘の力の辨ずる所に食を獻ずべし。砂糖、酪飯、根菓、乳粥等是れなり。此迦引弭迦食

等の性を觀じて各所樂に隨て相應食を以て詩尊に奉獻する故に、既に觀知し畢つて等といふなり。

【獻法の中】中に十二獻法あり。文に就て知るべし。

【餘の力の辨ずるところ】功力を加へて成辨するところの食。

は、通じて一切に獻ず、唯阿毘遮嚕迦を除く。獻法の中に於て徵質覩路食を用ふること有りと見れば、應に迦引弭迦食の中に三兩種の上異の飲食を加ふることを以てすべきこと是なり。獻法の中に於て烏肥嚕食を用ふること有りと見ば、前の迦引弭迦食を以て、倍加して多く置くこと是れなり。獻法の中に於て三白食を用ふること有りと見ば、應に乳酪蘇の飯を以てすべきこと是れなり。復三甜食ありと見ば、蘇蜜乳の飯是れなり。獻法の中に於て薩嚩薄底迦食有りと見ば、婆也里迦食、陵祇里迦食、薺汝梨耶食、底羅比瑟吒劍食酪飯根菓なり。前の所說の食の中に於て、隨つて一兩の味を取りて、之を稻穀の花、諸の花、及び葉に置き、盛るに大器を以てし、水を置いて中に滿て、持誦の處を遠かりて棄つる是れなり。獻法の中に於て扇底迦の食有りと見ば、當に莎悉底と乳の粥と稻穀の花と蘇と蜜と乳と、及び乳煎と大麥の飯と徵若布羅等の食とを用ふべし、決然として災を除く、疑を懷くこと無かれ。獻法の中に於て補瑟徵迦の食有りと見ば、應に酪の飯と、酪の粥と歡喜團と、烏路比迦と、砂糖と、室唎吠瑟吒迦引等の食とを用ふべし。決んで能く願を滿たさん、疑を懷くこと無かれ。獻法の中に於て阿毘遮嚕迦の食有りと見ば、應に赤粳米の飯を用ふべし。或は句捺囉嚩子、或は赤色に染め作せる飯、或は油麻餅、婆布跛迦、薺汝利也二合訖婆囉粥等を用ひよ。決んで能く魔を降す、疑を懷くこと無かれ。若し藥叉の眞言を持するに、獻食の法無くば、應に此法に依つて之を奉獻すべし。當に赤粳米の飯と根と菓と蜜水と及び蜜と砂糖と米粉の餅等を用ふべき、是れなり。女天の眞言等を持せんに

【食を獻ぜん等】以下二に獻食せんと欲せん時の法を明す。

【先づ地を塗り等】三に正しく下食法を明す。

【若は曼荼羅等】四に隨時に飮食を奉獻するを明す。

は、應に羹飯、豆子臛等の諸の甜漿水鉢羅拏鉢唎瑟吒迦引正葉味等、及び諸の菓子を獻ずべし。一切の女天には、應に是食を獻ずべし。上成就を求めんと欲せば、本部の獻法の者應に此に依りて獻ずべし。諸の飮食の根菓香等衆の共に談ずる所の其味ひ美なる者多くして而も復貴き有り。此の如きの上味をば、上成就を求めん者に而も之を奉獻すべし。如上は略して諸の獻食の法を說きつ。各本部に隨へ、所求の事法皆已に略して陳ぶ。或は餘方に於ては飮食の味ひ異なれり。其色味を觀じ類に隨つて之を獻ぜよ。食を獻ぜんと欲せん時には、先づ淨く地を塗り香水を遍く灑ぎ、諸葉を淨め洗ひて後に蓮の葉と鉢羅勢葉と諸の乳樹の葉と或は新しき氈布等を以て、其上に敷き設けて、後に諸の餚饍を下すに此葉を依用せよ。扇底迦には、水より生ずる諸葉及び餘の奇樹の葉等、或は芭蕉等を用ひよ。又補瑟徵迦には拔羅得計樹の葉、阿伽樹の葉或は時に隨つて得ん者を用ひよ。又阿毘遮嚕迦には雌樹の名葉を用ひよ。謂く、芭蕉の始めて生ぜる葉、或は蓮の葉及び苦樹の葉等なり。又女仙の眞言には鉢隷迦使乾樹の葉を用ひよ。又地居天等には草を以て之を用ひよ。上中下の法を求めんには、善く須らく知解すべし。先づ地を塗り灑いで、後に諸葉を敷いて、當に淨く手を洗ひ口を漱ぎ水を噉むべし。次に須らく食を下すに先づ薩悉底迦食を下し、次に團根と長根と菓とを下し、次に諸の粥を下し、次に羹臛を下し、次に餠を下し、次に乳と酪とを下すべし。各本法に隨ひ此に依りて之を下せ。若は曼荼羅を作し、及び諸事を成就して、諸の境界を得んと擬せば、應當に倍加して清淨

【白と黑との等】地動の時まで合して九箇の時を擧ぐ

【若し本所制の食等】以下五に隨得食を明す。

の飲食と花菓等の類を奉獻すべし、初め持誦の時には、其所辨に隨ひ、所得の味に隨ひ、彼本法に依りて之を奉獻せよ。若は白と黑との二月の八日と十四日と十五日と、日月の蝕の時と、地動の時とには、廣く供養を加へよ。若し護摩の時に須ふる所の物をば、先づ本尊主の前に辨じ置け。若は持誦の人食はんと欲する時每に、先づ一分の食を出して、亦同じく尊の前に置け。先に護摩を作して而して後に食する如きは、應に預め食を作して之を出し置くべし。先づ供養の所辨の食を設け已りて、然して後に應當に念誦を起首すべし。諸の花藥と、及び諸の飲食とを獻じて、常に須らく之を念ずべし。應に廢忘すべからず、仍本法に依れ。若は言はく、一時に念誦せば、一時に諸の根と菓と食とを供養し、若は言はく、二時に念誦せば、二時に供養し、若は三時に念誦せば、三時に供養せよ。是の如き法に依りて當に速に成就すべし。持誦の人、飲食を獻ぜず、本部に違せば、其人乃ち魔障に著かれて身に精光無く、風燥飢渇し、恆に惡思想して本尊の眞言を成就すること能はず、皆本尊に菓食を獻ぜざるに由りてなり。應當に前の白黑の二月等の日に依りて、廣く供養を設けて、本尊并に諸の眷屬に奉獻すべし。初め持誦せん時には、前等の日に於て扇底迦の食を作りて、持誦の處を遠ざかり、四方に之を棄てよ、此に於て說かず、或は本部に通ぜず。縱ひ通ずる所有らんも、諸の下味を以て上成を求め及び所制の食の臭惡の類をば皆應に用ふべからず。常に酪の飯を獻ぜよ、其諸部の中に上中下の扇底迦等を求め、并に諸天の眞言等に通ぜば、應に是の如く供養すべし。若し本所制の食無くば、

【三】大段第二、正しく獻食を明す

其所得に隨ひて、本部の眞言を以て之を眞言せよ。

(三)此藥香美にして、尊主に奉るに堪へたり。我今奉獻す、哀愍を垂れて受けたまへ。治食の眞言に曰はく、

阿上歌囉阿上歌囉一薩嚩上茲地二合耶駄囉二布爾耶三涉二合嚩訶四

此眞言は遍く三部に通ず。食を眞言して、後に所持を誦し、食を眞言して之を奉獻せよ。

蘇悉地羯羅經卷上　終

【分別悉地時分品】以下は近修成就の相を明す中、今品は持誦者の爲に速に悉地を得る時分を分別するなり。
【吉祥成就の時節】上上好宿曜等は、上中下に扇底迦等を成就する時分、又三種成就扇底迦等の三事は吉祥に非ざるなく、此等の時節を成就する故にいふ。
【時節とは】以下時等を分つて七とす。

蘇悉地羯羅經　卷中

大唐中天竺三藏輸波迦羅譯す

分別悉地時分品第十二

復次に我今吉祥成就の時節を解說せん。行者知り已りて悉地を尋求すべし。謂く、時節とは八月臘月正月二月四月、此等の五の月の白の十五日に應に上成就を作すべし。其四月の時には、必ず雨難有り。其二月の時には、必ず風難有り。正月の時に於ては、種種の難有り。唯臘月のみ有りて諸難の事無し。八月の時に於ては雷電霹靂の難有り。如上所說の難は皆成就の相なり。此五箇の月には但上成就の法を作すことを求めしむ。亦當に扇底迦のことを作すべし。亦即ち此五の月の黑の十五日に應に中下の成就の法を作すべし。亦當に補瑟徵迦の事と阿毘遮嚕迦の事とを作すべし。月蝕の時に於ては最上の物を成就す。日蝕の時に於ては上中下の成就の物に通ず。或は月の一日三日五日七日、或は十三日に應に一切の事を成就することを作すべし。若し最上の成就を作さんには、應に上の宿曜の時を取るべし。其中下の法は、此に類して應に知るべし。然も諸宿の中には鬼宿を最と爲す、若し猛利の成就を作すには、還つて猛利の宿曜の時等に依れ。或

【類に隨て分配等】所成就に於て其類不同なり、或は空に乘じて自在、或は形を藏し跡を隱す、世間の諸事、各此等の類に於て三品ある故にいふ。【初夜の分等】次に時分に就て成就を作すを明す。

は三種の事法と相應せよ。其所成就も亦三事に依りて作せ。或は本法の所說の如くし、或は本尊の指授に依れ。然も十二月の一日より十五日に至るまで、其中間に於て應に一切の成就及び事を作すべし。或は本尊の指したまふ日を取れ。或は諸月の中の白と黑との十三日に亦成就することを得ん。七月八月は是れ雨時の後の節なり、應に此時に於て扇底迦の法を作すべし。九月十月は是れ冬の初の節なり。應に此時に於て補瑟徵迦の法を作すべし。三月四月は是れ春の後の節なり、應に此時に於て阿毘遮嚕迦の法を作すべし、正月二月は是れ春の初の節なり、應に此時に於て一切の事に通ずべし、五月六月は是れ雨の初の節なり、要ず成さんと欲せば下の悉地を作せ。是の如きの春冬、及び雨後節には亦應に三種の悉地を成就すべし。此中の九品の分別は類に隨つて分配せよ。初夜の分に於ては下成就の時なり。中夜の分に於ては、中成就の時なり。後夜の分に於ては、上成就の時なり。初夜の分に於ては、是れ扇底迦の事を作す時なり。中夜の分に於ては、是れ阿毘遮嚕迦の事を作す時なり。後夜の分に於ては、是れ補瑟徵迦の事を作す時なり。此三事に於て九品に分別して、類に隨つて相應して其時節を知れ。其時分に現ずる所の相に於て上中下を辨ぜよ。然れども日月蝕の時に於ては、即ち當に作法して時分を觀ざるべし。凡そ猛利の成就、及び阿毘遮嚕迦の事には、日月蝕の時最も是れ相應す。凡そ成就を起首せば、三日二日一日斷食せよ。上中下の事は日に類して應に知るべし。

蘇悉地羯羅經圓備成就品第十三

復次に、當に本法の闕少せる、支具を成就することを說くべし。若し身力濟さざることを恐れなば斷食を須ふること勿れ。念誦の遍數滿ち已りて成就を起さんと欲せば、更に須らく念誦し護摩すべし。花香を供養し、種種に讚歎せよ。本尊を觀念して、白氎の縷を取りて童女に綫に合せしめ、前の如く作法し、繫けて七結に作して明を誦すること七百遍にして、晨朝の時に於て以て其腰に繫けよ。夢に精を失せざらん。

佛部の眞言索には倶摩履の眞言。

唵同上呼一句 惹曳倶摩㘑二句㘑式六反 訖嚩二合畔馱顊三句 沙嚩二合去訶四句

蓮華部の眞言索には矩嚨儗魚以反抳の眞言。

唵同上呼一句 嚕訖釤二句 矩嚕矩嚨儗同上抳三句 沙嚩二合去訶四句

金剛部の眞言索には茫莽鷄の眞言。

唵同上呼一句 㘕嬾馱履二句 畔馱畔馱三句 虎吽二合泮吒同上四句

初中後分の間に求請の句を誦せよ、若白の本法に求請の句無くば、應に取りて之を安ずべし。然も此三明は當部に之を用ひよ。其持誦の繩をば每日繫け持ち、作法して光顯にせよ。若し曼荼羅を作らん時、之を念誦せん時は、節日の時に於て皆須らく繫け持ちて難障

【圓備成就品】先に念誦遍數を滿じ已り將に成就を作さんとし、更に復闕くる所の支具を滿足し、悉地をして速に成就をえしめんを明す。

【本法】行者所修の本法。

【白氎の縷等】眞言索を備ふるを明す。

【求請の句】求むる所の願を求請するなり。

【其持誦の繩等】每日部母の呪等を以て光顯をな

す。若し然らば諸事の時に障難あることなし、

を除かしむべし。又眼藥を合せば、蘇嚕多と安膳那と、濫砂蜜と、龍腦香と、華撥と、丁香皮と、得伽囉香と、自ら生ぜる石蜜と、各の等分を取りて、擣き篩うて末に爲して、馬口の沫を以て相和して細に研き、復此明を以て持誦すること百遍すべし。之を成就せん時には、數數面を洗ひ、藥を以て眼に塗れば、懈怠及び惛沈する所を除去す。諸難起ること有るとも、夢に豫め驚見せん。

佛部の合眼藥の眞言。

唵同上呼一句入嚩囉路者濘二句娑嚩訶去二合三句

蓮華部の合眼藥の眞言。

唵同下一句弭路枳顆二句娑嚩訶去二合三句

金剛部の合眼藥の眞言。

唵呼同上一句畔度囉措反奴立跛反北没二合二句娑嚩訶去二合三句

此三の眞言は本部なり、持用して眼藥を合せよ。或は單に水を咒じて、數數面眼を洗はば、亦惛沈睡障を除くことを得べし。

若し成就せん時、念誦すること疲乏せば、白梅檀香を以て水に和して、部心の明を用て持誦すること七遍して、二掬を飲して、成就せんと欲せん時には、先づ水を以て身に灑げ。應に善相を取らば、方に成就すと欲ふべし。善相を見るとは、謂く、商佉と、輪と鉤と、魚と、右旋の印と、白蓮華と、幢と、莎悉底迦の印と、滿瓶と、萬字の印と、金剛杵と、

【天より降る等】細雨天華等を上成就、雷聲慶雲閃電微風等を中成就、所餘を下成就とす

【奉請成就品】成就の爲の故に奉請を爲すを明す。

花鬘となり。或は端正の婦人の瓔珞を以て身を嚴るを見、或は懷妊せる婦人と、或は衣物を擎ぐるとを見、或は歡喜の童女を見、或は淨行の婆羅門の新しき白衣を着するを見、或は車象馬に乘じ、根藥と及び菓とを見、或は奇事を見、或は雷の聲を聞き、或は吠陀を誦する聲を聞き、或は螺を吹き、角を吹く。諸の音樂の聲を聞き、或は孔雀と鶻鷓と鸚鵡と鷺鶴と吉祥鳥との聲を聞き、或は善言を以て慰愈するの音を聞かん。謂く、起居安樂成就可意の言なり。或は慶雲と閃電と微風と、細雨とを見、或は天花を雨らし、或は好香と及び暈虹とを見ること有り。此相の中に於て天より降る所の者をば上成就と爲し、空に於て現ずる者は是れ中成就なり。地に於て現ずる者をば下成就と爲す。此三相に於ける九品の分別は、上の所現の如し、皆是れ吉祥なり。此に反して見ん者は、即ち不成就なり。此相を見已りて深く歡喜を生じ、是の如きの心を以て後に方便して成就の事法を作せ。

蘇悉地羯羅經奉請成就品第十四

次に奉請成就の法を說かん。前に說く所の如きは、時節星曜及び瑞相等なり。曼荼羅を作る法の中、及び成就の法の中に於て、廣く以て陳說せり。若し不善の相現ぜん時は、即ち部母の明を以て、牛蘇を護摩すること一百八遍を經て、然して後作法せば亦悉地を成就することを得ん。前に分別する所の曼荼羅の地は、亦應に彼に依りて成就を作すべし。

【一】正しく本請の法を說く、中に就いて三、今初に成就を作す處を明す。【眞言と相應する處】三部各寂災等三事眞言あり。【舍利骨ある制底等】凡そ一切の佛身骨ある等の處を擧ぐ。【菩提道場に一切の難無し等】則ち如來成道の處、即ち法身の生處なり。

【二】次に道場を結護するを明す。中に就いて五、今は地界を結するの法【成辦諸事の眞言】枳利枳利忿怒眞言等を以てす。

（一）若し上成就は山の上に於て作せ。若し中成就は池の邊に於て作せ。若し下成就は處に隨つて作せ。或は眞言と相應する處にして作せ。若し此處に依りて成就を作さざれば稍遲からん。舍利骨有る制底の中に於て、一切の內法の眞言を作さば、皆成就することを得ん。佛の生處等の八大の制底は、成就の中に而も最も上たり。然も菩提道場に一切の難無うして、能く成就と相應す。魔王尙彼處に於ては其難を爲さず。況んや餘の諸類をや。是故に一切の眞言決定して成就せん。凡そ是れ猛利の成就は塚間に於て作し、或は空室に於てし或は一神獨居の廟に於てし、或は適なる獨樹の下、或は河邊に於て當に成就を作すべし。若し女藥叉を成就せんと欲せん者は、林間に於て作せ、若し龍王の法を成就せんと欲せん者は、泉の邊に於て作せ。若し富貴の法を成就せんと欲せん者は屋上に於て作せ。若し使者の法を成就せんと欲せん時は、諸の人民の集會處に於て作せ。若し諸穴に入る法を成就せんと欲せば、窟の中に於て作すべし。此は是れ祕密に成就の處を分別するなり。

（二）地を簡擇して定め已らば先づ應に斷食すべし。曼茶羅淨地の法の如く、或は念誦の室の法の如くして、應に其地を淨むべし。處所淸潔なれば、速に靈驗を得ん。初に成辦諸事の眞言を以てし、或は軍茶利の眞言を用て白芥子等の物を持誦して、其地に散打して諸難を辟除せよ。佉達羅木を以て橛四枚を爲れ。其量二指にせよ。拆籤して一頭を剗り、一股杵の如くし、紫檀の香泥を以て其橛の上に塗れ。復緋の線を以て之を纏ひ、拔折羅橛の印を以て、拳に作りて之を執れ。此眞言を以て持誦すること一百八遍して四角に釘し、橛の

【一の白旗等】二に八方界を結するの法を明す。

【復金剛鉤欄等】三に上方界を結する法を明す。

【外の曼荼羅の門等】四に曼荼羅門を護るを明す。

【其臺の中心等】五に中心を結護するを明す。

【三】次に奉請を明す。中に就いて二。今奉請を明す。中に六、初に奉請日時の法則なり。

頭を少しく現せ。一の白幡を作りて、曼荼羅の東面に於て長き竹竿の上に懸けよ。金剛墻の眞言を以て鐵末を持誦すること百遍して三服拔折羅を作れ。頭をば皆相接して曼荼羅を圍遶して金剛墻と爲せ。復金剛鉤欄の眞言を以て鐵末を持誦すること百遍して亦三服拔折羅を作りて、各横に竪てたる拔折羅の上に置いて、曼荼羅を遶し、金剛鉤欄を爲せ。

外の曼荼羅の門には軍荼利の眞言を以てし、拔折羅の印を以てして其門を護せ。第二重の門には、訶利帝母を以て其門を護し、中臺院の門には無能勝を以て其門を護せよ。此等の護門は三部に通用す。或は其一を以て通じて三の門を護せ。此三の聖者は、皆諸難を摧き、能く壊るもの有ること無し。是れ此祕密は成就の物を護るなり。其臺の中心には、五つの寶物を埋めよ。若し人民集會の處に於て曼荼羅を作らん時には、其五寶物をば、應に之を埋むべからず。但所成の物の下に置き、若は中庭及與室内に於てせよ。或は佛堂の中に曼荼羅を作らん時も、亦復是の如し。以上の五處には、但香水を持誦して灑がば、即ち淨を成ず、地を掘ることを假らざれ。若し本念誦の室の中に於て此法を作さば、速に成就を得ん。諸の窟中に於て合に成就の法を作すべからず。壊室の中に於ても合に亦作すべからず。

(三)曼荼羅を作らんと欲せん時には、七日已前黄昏の時に於て、敬仰の心を以て諸尊を觀念すること目前に對ひたてまつるが如くして、奉請して言はく、三部の内に於ける一切の諸尊、及び本藏の中に於ける諸尊と、眷屬等と、我已に久時に念誦し護摩して、堅く戒行を

【諸尊を觀念す】一切諸尊は唯心中にあり、鏡中具に萬像あるが如く、三部法諸尊等を觀ずるをいふ。
【奉請して言はく、】正しく奉請の辭を明す。
【本義】自己所修の義。
【又閼伽華香等】三に諸方神を供養するを明す。
【又香を以て手に塗り等】四に按物奉請を明す。
【復燒香を以て等】五に薰物奉請。
【又復斷食し等】略して曼茶羅を作すの奉請を說く。

持ち、此眞心を以て諸尊を供養したてまつる。願くば後の七日に道場に降赴し、我を哀愍したまふが故に此微供を受け、大慈悲を以て我をして、成就せしめたまへ。是の如く乃し其七日を滿つるに至るまで、時に依りて啓請し、然して後に作法せよ。又閼伽華香飮食及び讃歎等を以て每日の暮時に、別して一方の護世神を供養せよ。即ち三方に至りても皆應に此の如くすべし。又香を以て手に塗り、其手を持誦して以て其物を按じて、之を奉請せよ。復燒香を以て物に薰じて奉請せよ。又復斷食し、好き時日を取りて略して曼茶羅を作つて奉請の物を用ひよ。或は但し一色を用て圓曼茶羅を作らば、唯一門を開いて中に八葉の蓮華を置け。其量は一肘にせよ。次に餘の外院は意に隨つて大小に作れ。先づ內院に於て三部の主を置け、西面の門の北には摩醯首羅及び妃を置き、佛の右邊には帝殊囉施を置け。左邊には佛眼を置け。次に觀自在の右邊には摩訶利室を置き、左邊には六臂を置け。次に金剛の右邊には芒莽計を置き、左邊には明王心を置け。西邊の門の南には吉里吉里忿怒及び金剛鉤を置け。上に說く所の如く皆內院に於て安置せよ。次に外院に於て八方神を置き、及び能辦諸事の眞言主等を置け。內外の二院には心に敬重する所の眞言主等、樂のままに皆應に安置すべし。外門の北邊には軍荼利を置き、門の南には無能勝を置け。各心眞言を以て請じて供養せよ。蓮華の上に於て成就物を置いて之を供養せよ。或は蓮華の上に於て滿てる迦羅除瓶を置き、上に於て其成就の物を置け。或は蓮華の上に於て合子を置いて、中に於て物を盛れ。或は蓮華の上に其瓦器を置いて中に於て物を盛れ。其物或は

【四】三に一切を歴て奉請及び受持等を作すを明す。

花臺の中に於て盛りて蓮華の上に置いて、加ふるに手を以て按じて其物を持誦すること千遍し、或は一百遍せよ。次に復花を持誦して以て物の上に擲げ、次に復蘇を以て安悉香に和して燒き之を薰ぜよ。次に復香水を微しく物の上に灑げ。次に復部母の明を以て其物を持誦せよ。曼茶羅の所有の諸尊に、各彼等の眞言を以て其物を持誦せよ。次に復牛蘇を以て護摩し、或は牛乳を用ひ、或は蘇と蜜と胡麻とを以て和して護摩を作し、後に酪飯を以て護摩せよ。本法の中に於て說く所の諸物皆應に護摩すべし。各曼茶羅の內の所有の眞言を以て、遍く護摩を作せ。各眞言を以て香水を持誦して、其物に灑げ。前の所說の物を光顯にする法の如く、此も亦是の如く、自の眼を持誦して用て其物を看よ。心に眞言を誦して、是の如く作法すれば、其物即ち奉請することを成ず。

（四）凡そ一切の物に奉請の法を作すに、速に成就を得ん。或は本法の所有の一切の供養、及び祭祀の法に於て、一一に皆應に具に此奉請の法を作すべし。曼茶羅の中にして、亦通じて其物を受持し、亦は通じて其物を光顯にせよ、中に於て若し成就を作さん時、諸の作障の者亦便を得じ。亦通じて物を淨めんには、灌頂の法に依れ。亦通じて其物に灌頂し、亦通じて自身に灌頂せよ。此は是れ祕密にして、能く諸事を辨ずる勝曼茶羅なり。若し此法を作さば、久しからずして成ずることを得ん。

【補闕少法品】此品の中半品は行者若し放逸にして闕少なる事あるを恐れ、今其闕少を補ひ、作壇するの旨を陳べて行者をして速に成就を得しむるなり、
【一】正しく補闕法を明す中、今此法を説かん爲に勤修相を陳ぶるなり
【二】次に正しく補闕法を明す。今初に部母の明を持誦して補闕を作すを明す、
【復應に此曼茶羅等】次に曼茶羅を作して前の闕少を補ふを明す。
【界道】曼茶羅の輪廓をいふ。

蘇悉地羯羅經補闕少法品第十五

我今當に闕少を補する法を說くべし。

(一)物を受持し已りてより、每日三時に澡浴し、三時に供養し、及び護摩を作して手に其物を按ずべし。三時に衣を換へ、節日には斷食して、供養等の法皆須らく增加すべし。三時に禮拜し、懺悔し、隨喜し、勸請し、發願せよ。三時に讀經し、及び曼茶羅を作せ。三時に歸依し、受戒し、三時に護身せよ。是の如く作法するときは、定めて成就を得。

(二)或は放逸に由りて缺少あることを致さば、即ち應に部母の明二十一遍持誦すべし。便ち滿足することを成す。若し此法を缺きなば、成就すとも亦缺けなん。或は若し缺することあらば、更に須らく一十萬遍を念誦すべし。復應に此曼茶羅を作りて前の缺少を補し、然して後に方に成就に作すべし。其曼茶羅は方にして、四角、四門を安くこと前の所說の如くして界道に分布せよ。東面に佛を置き、右邊に佛毫を置き、左邊に佛の鍊底を置け。右邊に佛慈を置き、左邊に佛眼を置け。右邊に輪王佛頂を置き、左邊に白傘蓋佛頂を置く。右邊に帝殊囉詩を置き、左邊に勝佛頂を置け。右邊に超越佛頂を置き、左邊に須菩提を置き、右邊に阿難を置け。西南の角に於て鉢を置き、西北の角に於て錫杖を置け。右邊に訶利帝母を置き、左邊に無能勝を置け。曼茶羅の外に於て能辦諸事を置き、中央に輪を

【本眞言】諸尊各に眞言あるをいふ
【部心の明】三部に於て各心眞言あるをいふ。

【濕吠多】大白身

置き上に於て其所成就の物を置き、或は本尊を置け。外院に八方神を置き、門の兩邊に難陀、及び跋難陀龍王を置け。各本眞言を以て請じ、或は部心の明を以て都て請じて法に依りて供養し、然る後に護摩せよ。其諸尊等は、或は其印を置き、或は其座を置き、本眞言を以て、淨火を成じ已りて、蘇蜜を護摩すること一百八遍せよ。又酪飯を以てし、及び胡麻を用ひ、各本眞言を以て護摩すること百遍、其事畢已りて復百遍を誦ぜよ。此は是れ祕密にして愆過を補する法なり。所供養の物は、皆香美を須ひよ。其所獻の食は、烏那囉の供、及び砂糖の酪に和せるを用ひよ。此法を作さん者をば、諸尊皆滋充し歡喜することを得しめて速に成就を得べし。但缺を補ふのみに非ず。亦應に半月半月にして或は節日に於てし、或は復毎日に此曼荼羅を作りて諸尊を供養すべし。皆滋充することを得しめて速に成就し與ふ。若し辨ぜざらん時には力に隨つて作せ。前の所説の佛部の曼荼羅の法の如く、此蓮華部の法も、亦皆彼に同なり。唯改めて圓に作れ。其量は意に隨つてせよ。東面に觀自在を置き、右邊に馬頭明王を置き、左邊には毘首嚕波を置く。右邊に三目を置き、左邊に四臂を置く。右邊六臂を置き、左邊に十二臂を置き、右邊に能滿諸願を置け。又右邊に耶輸末底を置き、左邊に大吉祥を置け。右邊に多羅を置き、左邊に戰捺囉二合を置け。近き門に右邊に濕吠多を置き、左邊に半拏囉嚩悉顊を置き、中央に蓮華を置け。曼荼羅の外には、本部の能辨諸事を置け。此は是れ蓮華部の補缺の曼荼羅の法なり。前の所説の佛部の曼荼羅の如く、此金剛部も亦復是の如くして然して須らく方に作るべし。其

【三】三に三皴多護摩を作すを明す　三皴多とは究竟成就の義、作成就の護摩を修すなり。

量は意に隨へ。東面に執金剛を置き、右邊に明王を置き、左邊に忙莽計を置け。右邊に軍荼利忿怒を置き、左邊には金剛鉤を置く、右邊に棓を置き、左邊には大刀を置け。右邊に拳を置き、左邊に遜婆を置け。右邊に提防伽を置き、左邊に鉢椰顆乞潌二合跋を置け。右邊に忿怒火頭を置き、左邊の近門に金剛可畏眼を置き、右邊の近門に金剛無能勝を置き、曼荼羅の外に本部の能辨諸事を置け。諸餘の外院、及び供養の法は皆前に說くが如し。此は是れ金剛部の補闕の法なり。是の如くして供養畢已りなば、好夢を得ることを求めよ。晨朝に澡浴して白淨の衣を著く。稻穀花及び青き倶蔞草、香美の白花を以て所作の曼荼羅の地を供養せよ。然して後に牛糞を以て遍く塗掃して却つて後に三皴多の護摩を作せ。右邊に酪と倶蔞草と蘇と蜜と胡麻と及び飯とを置け。所有の護摩の物は、皆右に置き、左には遏伽の器を置け。蘇を攣む杓、及び諸物を攣む杓は、當に前に置くべし。蘇を隔てて次に杓を置け。前の成辨諸事の眞言を用て其物等に灑げ、部主の尊を請じて安置し、供養には本眞言を用ひよ、閼伽を以て其本尊を請じて亦復安置せよ。自身の前に蘇を置き、蘇の前には火を置け。蘇と火との中間に成就物を置け。最初に自身、次に蘇、次に物、次は火、次は本持の尊、及び部主の尊なり。前の如く五種の物をば置く。次で應に知るべし。部主の左邊に帝闍寧の明を置き、右邊に成辨諸事を置くことは、前の所說の護摩の法の中の次第の如く安置せよ。初には青き倶蔞草を敷いて酪に和せる飯を置き、稻穀の花を散じて涉隸悉地の供を獻じ、好美の香を以て供養し、然して後に法に依りて護摩の事を作せ。所成

【阿說他樹】柳の樹。

【三種相】光焰を上、烟氣を中、煴煖を下となす。

就の物をば、金器と或は銀と熟銅と石と商佉と螺と木と髀弭迦と土器等に置け。阿說他樹の葉を上に敷き、器を置け。或は有乳の樹の葉を敷け。或は閼伽樹の葉、或は芭蕉樹の葉、或は蓮華の葉、或は新淨の白㲲、隨つて取りて之を敷け。又葉を五重にせよ。先を地上に敷いて成就の物を置き、復葉を以て五重にして其物に覆ひ、或は是に散ずべし。或は種種の衣、或は諸の雜物、次第に應に盛る所の器を知るべし。然る後に不散亂の心を以て、三鉢多の法を作せ。心を以て其物を光明にし、及び之を散灑せよ。手に杓を執つて、緩く其蘇を掬み其物の上に置て、本眞言を誦して其莎去字に至りて卽ち爐中に瀉げ。其訶去の字を呼ぶとき、還つて其物に觸れ、却つて蘇器に至らしめよ。是の如く三處に來去して、物に觸れ斷絕することを得ざれ。是を三鉢多の護摩の法と名く。一千遍を經、或は一百遍せよ。或は眞言の廣略、或は復成就の下上輕重を觀じて、乃至護摩すること二十一遍、此を都說遍數の限と名く。三鉢多の時は杓を以て遍く其物を霑して皆潤膩ならしめよ。初に物を置く時には、先づ水を以て灑き、次に按じて持誦し、次に以て復看、次に供養を獻ぜよ。護摩し畢りなば、還須らく是の如くすべし。成就曼荼羅に於て說く所の三種成就の相、此法を作さん時、若し相現ずることあらば、卽ち須らく之を禁むべし。應に知るべし、久しからずして卽ち成就を得ん。其物若し大ならば右邊に置け。左の手に執るべきものは、左邊に置いて而も之を三鉢多せよ。若し有情の物を成ぜば、其形像を作り、杓の頭に觸れて護摩を作せ、若し自身を成ぜば杓を以て頂に觸れて護摩を作せ、若し他の爲の故に三

鉢多を作さば、但其名を稱して護摩を作せし其成就物にも、復三種の差別有り。一には但名を稱し、二には物を以て蓋うて之を隔てよ。三には但し露現して眼に觀見する所にす。或は蘇に是の如きは皆其蘇を用て護摩を作せ。若し蘇を獲ざれば、當に牛乳を用ふべし。或は蘇に乳を和し、或は三甜を用ひ、或は成就の差別を觀じて、應に酪を用ふべし。或は本所說の如く、而も用て護摩し、或は油麻を以て器仗を護摩せよ。若し吠多羅を成ぜば、應に堅木香の心を用て護摩すべし。或は蘇合等の諸餘の汁香を用ひ、或は其物の差別と、及び成就の差別とを觀じて、當に諸類の香物の法と相應せる者を取りて、護摩を作すべし。若し犬肉を成ぜば、還つて彼脂を用ひよ。諸餘の肉の類も、彼復是の如し。其成就物、或は畫いて前に置き、此所に三鉢多の法を以て說くこと、或は前に說ける護摩の法の如くせよ。應當に廣く三鉢多の法を作して、其物を護摩すべし。是の如く作し已りなば、速に成就を得ん。三鉢多已らば、洗灌して淨からしめ、然して後に如法に灌頂し畢已りて、供養し護持して本尊の前に置いて、更に種種の飲食を加へて本尊に供養し、及び當に八方の護世を祭祀すべし。亦須らく如法に護摩の地を供養すべし。然して後は、諸の澡豆及び阿摩羅を以て、以て自ら如法に澡浴し、其午時に於て手を以て、其物を按じて、而も念誦を加へよ。

（四）又更に別に其線を辮じ、前に依りて法の如く持誦せよ。臂釧と衣と灰と芥子と水とも、一一に皆須らく前の如く持誦すべし、成就を作さんと欲せん時には、是の如きの護身の物

【四】以下大段第三、云何が持護身、護持法、作障礙相、

諸藥相の問に答ふる中、初に持護身に答ふるなり。

【五】次に云何が廣持法に答ふる中初に三部各別に答ふ。

をば、先づ須らく持誦して後の用に擬充すべし。是の如く念誦し、護身して、諸物成就の時、所用有らん處、皆即ち驗有り。是故に、應に須らく豫め先づ持誦して、花等の供養の物を備擬すべし。亦須らく加法し、持誦して側近に置くべし。

(五)次に則ち法に依り、曼荼羅を作り、如法に供養して、成就を作せ。能辨諸事の眞言を用て、五色界道の線を持誦して、四橛の上に纒へ、軍荼利の眞言を以て瓶を持誦して、外門の前に置き、纒へる所の線の兩の頭は、俱に瓶の頸に繫けて、稍寬縱ならしめよ。出入の時每に、軍荼利を思念して、線を擧げて入れ、其線若は軍荼利の眞言を以て持誦するも亦得、或は本法の眞言を取りて持誦するも亦得、前の所說の難を辟除する法の如し。先づ其處を淨めて、然る後作法せよ。其時に外に於て八方の護世大神、幷に諸の眷屬、祭祀せよ。其瓶の上に於て拔折羅を置き、或は菓有らん枝條を置け。其瓶及び線は、或は當部の明王を用て持誦し、或は部心を用てし、或は部母を用て持誦して以て其處を護し、或は當部に於ける所有の契印、各本方に於て之を安置し、以て諸難を辟けよ。其橛は金剛橛の眞言を以て持誦すること百遍、其橛の上を、一頭に三股杵の形、或は一股の形を作れ。是の如く作り已りて、淨室の外に於て四の角に之を釘つ。若し曼荼羅を作らば、界道の角に於て之を釘つ。此を金剛橛の法と名く。能く諸事を辨ず。其曼荼羅は、或は乾末を用て彩色し、或は種種の香末を用てし、或は濕色を以てするに、牛毛の筆を用て畫け。諸角の外に於ては、三股杵を畫け。其諸の界道は、遍く三股杵の形を作り、還つて金剛墻の眞言を

用て、持誦せよ。復其界の中に於て、更に復一の杵を横へ置け。遍く應に是の如くすべし。側をば金剛鉤欄と名く。還つて金剛鉤欄の眞言を用て持誦せよ。是の如く作し已らば、能く壞するもの有ること無し。是故に中に於て成就の法を作せば、諸門の中及び門外に於て各拔折羅を置け。其成就の法は、或は淨室の中に於て作し、或は露地に於て曼荼羅を作せ。其量は五肘或は七或は八、或は其所成就の事を觀じて事に隨つて大小に而も作せ。諸門の當中に拔折羅を置き、諸の角の上に於ては、瓶を置き、外門の前に於ては能辦諸事の瓶を置け。內の東面に於て法輪の印を置き、右邊に佛眼の印を置き、左邊に佛の毫相の印を置く。右に牙の印を置き、左に鑠底の印を置く。右に五種の佛頂を置け。次第に左右に佛部の中に安置せよ。所有の諸尊は意に隨つて次第に左右に安置せよ。最後の兩邊には、阿難及び須菩提を置け。次に下の近門には、無能勝を置け。次に外院の東面に於ては悉達多明王を置き、北面には大勢至尊を置き、南面には妙吉祥尊を置き、西面には軍勢囉尊を置く。東面の右には梵天と及與色界の諸天とを置き、左には因陀羅より上他化自在に至り、及至地居天神を置け。東南の方に於て火神を置き、諸の仙人と與んじて以て眷屬と爲る。南方に於て焰摩王を置け。毘舍遮と布單那と諸の魔怛羅と與んじて眷屬と爲る。西南方に於て泥利帝神を置け。諸の羅刹と與んじて眷屬と爲る。西面の門に於て嚩嚕拏神を置け。諸の龍衆と與んじて眷屬と爲る。門の北には地神を置け。諸の阿脩羅と與んじて眷屬と爲る。西北の方に於て風神を置け。諸の伽路拏と與んじて眷屬と

爲る。北方に於て多門天王を置け。諸の藥叉と與んじて眷屬と爲る。東北方に於て伊舍那神を置け。諸の鳩槃荼と與んじて眷屬と爲る。復東面の一所の處に於て、日天子及與曜等を置け。復西面の一所の處に於て月天子を置き、宿と與に圍繞せよ。西門の曲の兩邊に於て難陀跋難陀龍王を置け。佛部の中に於ける所有の使者等の類の眞言、及び明をば、其外院の四面に於て意に隨つて安置せよ。然して後法に依りて啓請して、次第に供養し護摩し念誦せよ。最中央に於て其本尊或は成就物を安け。曼荼羅の法に於て說く所の護身等の事の如し。此れ亦是の如く次第に應に行ずべし。此は是れ佛部の成就諸物の曼荼羅の法なり。一切の諸難、能く便を得ること無し。中に於て作法せば、速に成就を得。一切の諸尊、衞護を增加したまふ前の如く、五の彩色を以て曼荼羅を作れ。唯門を改めて作れ。其內院の東面の處中に於ては蓮華印を置け。右に七多羅明を置き、左に七吉祥明を置き、次の左右に六大明王を置け。右に半拏羅嚩悉額を置き、左に耶輸末底を置け。近門の兩邊には一髻明妃及び馬頭明王を置け。外門の前に於て能辦諸事の瓶を置け。門及び角に於て拔折羅を置き、中に蓮華を置け。其外院に於て其梵天及び因陀羅と、摩醯首羅等と、淨居の諸天、及び無垢行菩薩と、光鬘菩薩と、莊嚴菩薩と、無邊龍王と、遜陀、及び優波遜陀龍王を置け。及び商佉持明仙王と、諸持明仙と倶なり。前の諸方の護世の如し。此部の中に於て所有の使者の諸類の眞言、及び明をば意に隨つて安置せよ。前の所說の安置の次第の如く、此も亦是の如くせよ。一切の諸難能く便を得ること無く、應當に此中にして成就

【六】次に通、總じて護持法を辨ず

の法を作さんには前の方の如く作すべし。先の界道の如く、內院の東面に於て蘇悉地羯羅を置け。右に吞金剛明妃を置き、左に金剛拳明妃を置け。右に遜婆明王を置き、左に許唎枳里明王を置け。右に拔折羅尊を置き、左に拔折囉但吒を置け。右に金剛母特迦羅鎚を置き、左に金剛商羯羅を置け。右に金剛鉤明妃を置き、左に忙莾計明妃を置け。其外院の東邊に於て、勝慧使者、金剛慧使者、摩醯首羅及び妃、多聞天王及び諸の藥叉を其外門の前に於て、能辨諸事の瓶を置け、金剛部の中に於て有ゆる使者の眞言、及び明部多毘舍遮乾闥婆、摩睺羅伽及び持明仙八方護世をば、各外院に於て次第に安置せよ。然して後、啓請して如法に供養し、護摩し、念誦し、起首し、成就せよ。其啓請する所の諸尊には、應に明王の眞言を用ふべし。或は部母の明を用て曼荼羅所有の諸尊を請ぜよ。各爲に瓶を置くこと前の曼荼羅所有の諸法の如く、此成就の法も亦皆是の如し。若し此等の曼荼羅の中に於て成就を作さん者は、縱ひ護身の法を具足せずとも亦悉地を得てん。彼諸尊に自ら其誓有るが爲なり。若し我等を請じて曼荼羅に赴かしめんには、虔誠の心を以て法の如く供養せよ。我等當に彼に所求の願を與ふべしと。是故に此に於て應に難無うして必ず加護を爲すことを知るべし。若は、部心の眞言及以部母を用ひ、或は明妃と能辨諸事の眞言と、並に及び部內の護身の眞言とを用て、而も用て啓請し、身と諸の界とを護らば、速に成就を得ん。此は是れ三部の祕密の法なり。

(六)復次に三部に通ずる祕密曼荼羅を說かん。法の如く界道に拔折羅を置き、中央には本部

【頂行】玄法阿闍梨云はく、魔波旬此に頂行となすと

主の印を置き、其前に本眞言主を置け。或は前の如く羯羅詩の瓶を置け。其物をば器等の中に盛りて其瓶の上に置け。內院の東面には如來の印を置き、北面には觀自在の印を置き、南面には金剛印を置け。西面の右邊には嚕達羅を置き、左邊には多聞天王を置け。前の所說の明王の曼荼羅の如く、此も亦是の如く次第に安置せよ。右邊には部母の明を置き、左邊には辨事の明を置け。蓮華と金剛との二部の左右も亦爾り。西面の右には嬌宜奇反喇を置き、左には落乞澁彌を置け。東面の兩の角には、鉢及び支伐羅を置け。北面の角には但拏棓及び軍持瓶を置け。南面の兩の角には、拔折羅及び母特伽羅を置け。西面の兩角には、輸羅及び寶瓶を置け。外門の前に於ても、別に處所に立置して無能勝を置け。東面の門の前には訶利帝母を置き、南面の門の前には句吒祇喇迦を置き、北面の門の前には翳迦契吒を置き、其外院に於て、意に隨つて遍く諸印を置いて、法の如く啓請し供養せよ。此は是れ秘密の都曼荼羅なり、中に於て作す所の成就の諸物は皆悉地を得ん。頂行すら此に於ては尙便を得ず。何に況んや諸餘の毘那夜迦をや。諸の美なる香花と燈と種種の飲食とを以て持誦し、光顯にして、然る後に供養せよ。念誦に於て、及び曼荼羅の所說に於て、供養する如く、此も亦是の如く應に作すべし。若は淨室の中に於て作すことも亦復是の如くせよ、其曼荼羅主の種種の供養は、應に四倍を加ふべし。此は是れ秘密の法なり。供養し畢已りなば、次に應に外に於て法の如く祭祀すべし。蘇を以て燈を燃せ。其燈は鮮淨にせよ。本尊に供養せん一一の物は、皆須らく閼伽を奉獻すべし。若し是の如く作法せ

ば、本尊速に驗あることを得しめん。明王の眞言を以て白芥子を持誦し、或は能辨諸事の眞言を用ひ、或は先より持する功有らん、眞言を用て持誦して近く成就物の邊に置き、用て諸難を辟けんに便卽退散す。又本印主の印を用て左邊に置き、或は但大刀を持誦して左邊に置き、其八方の所に於て各丈夫を置け。初め東方に於て其人帝釋の裝束を作して手に拔折羅を執れ。形色一ら帝釋の如くす。南方に於ては其人焰摩の裝束を作し、手に但拏棓を執れ。西方に於ては其人、龍王の裝束を作し、手に羂索を執れ。北方に於ては其人毘沙門の裝束を作し、手に伽陀棓を執れ。東北方に於ては其人伊舍那の裝束を作して手に三股叉を執れ。東南方に於ては其人火神の裝束を作し狀仙人の如くして手に軍持及び數珠を執れ、西南方に於ては其人羅刹王の裝束を作し、手に刀を執り横へよ。西北方に於ては其人風神の裝束を作し、手に幢旗を執れ。帝釋は白色、焰摩は黑色、龍王は紅色、毘沙門は金色、伊舍那は白黄色、火神は火色、羅刹王は淺黑雲の色、風神は青色なり。其所著の衣も皆亦是の如し。其人は皆須らく戒を受け、極めて清淨ならしむべく、大膽勇有りて善く護身の法を作し、形色端正に盛年肥壯にして、所執の器仗も皆須らく持誦すべし。頸と兩肩とに於て花鬘を交絡し、白芥子を備へて善く難の相を知れ。若し難至ること有らば、卽ち白芥子を散じて用て之を打ち、或は花鬘を擲ちて、或は難衆多にして大怖畏を現ぜば、當に所執の器仗を以て遙に之を擬るべし。彼若し相逼らば器仗を以て擊ち、白芥子を散じ、及び花鬘を擲げよ。器仗を以て擬り、及び之を擊たん時には、本處を移動す

【藏法】眞言藏法の智とは阿字本源の智、方便は即ち大悲方便智、是大日經三句の意、久時持誦すれば眞言に功あり、及び戒行清潔なれば、是人能く諸難を除く。故に此人をもつて諸事を助辨するなり

ることを得ざれ。若し本處を移さば彼當に便を得べし。是故に應に須らく本處を動さざるべし。本藏の中に於て有ゆる護身の印、難摧伏の者をば持誦し供養して己身の邊に置くべし。若し極大猛害の難來ること有らば、應に自ら彼諸印を用ひて以て之を擲打すべし。或は先より來持誦して功有らん眞言を以て白芥子を誦して、難者を散擊せんに、必ら若に止まざれば、即ち應に外に出で、好飮食を以て加以て豐多にして、如法に彼諸の難衆を祭祀せよ。一切の護法に總べて九種あり。謂く、辟除諸難と、結地界と、結虛空界と、結曼荼羅界と、結方界所と、結金剛墻と、結金剛鉤欄と、護物と、護身となり。以て諸難を除く。成就を作さん時は斯の如き等の法、皆須らく憶念すべし。或は若し前の護方の人を辨ぜずんば、應當に其當方の器仗を置くべし。此も亦辨ぜずんば、諸の方所に於て那羅遮の器仗を置け。或は弓をば張り、箭を揣けて諸の方所に置け。或は成就の人を助けん與に、明に藏法を解き、智方便有り、持誦に功有りて、戒行淸潔なるを門の中に立て、在いて諸事助辨し、諸難を辟除せよ。乃至內院をも外院をも、彼皆應に助くべし。所有の一切の諸事は、暮間に至りて皆須らく辨足すべし。日纔に沒し已りなば、即ち起首して成就の法を作せ。中間に困れん時は曼荼羅の外に出でて水を含めて口を漱き、軍荼利の眞言を以て、持誦の水を用て三掬を含め。或は本尊の心眞言を以て少許の牛蘇を持誦し、用て之を飮せよ。有ゆる疲極當に除愈することを得べし、復蜜を以て華撥に和し、佛部母の明を以て持誦して以て其眼に塗れば、昏沈難起るも即ち除愈せん。先づ誠心を以て面を

東に向けて立ち、諸尊を觀察して歸命し啓請せよ。其三種の吉祥の瑞應に於ける、中に隨つて好相を得ば、歡喜の心を以て成就を作せ。先瑞を見るに隨つて成就せんこと亦爾なり。是故に行者、應に先瑞を觀ずべし。先づ當に須臾に蘇悉地羯羅明王を觀察すべし。次には則ち右遶して諸事の瓶を辦ぜよ。曼荼羅に入らん時には、進ふ所の瓶に隨つて、皆右に遶りて過ぎよ。到り已りて諸尊を頂禮し、及以遍く觀じて、各各に本眞言を以て閼伽を奉れ。或は部心の眞言を以て奉獻せよ。所請の眞言主をば、當に明王の眞言を以て請召すべし。所請の明王をば、當に明妃を以て請召すべし。已に本印を視、及び本眞言明等を誦し、或は但部て一印を視、其眞言及び明を誦せよ。若し是の如く作さば、速に悉地を得ん。其成就の物をば、閼伽の器の中に置くこと有り。或は瓶の上に置き、或は手の内に掬合し、或は但心念し、或は鉢羅二弥迦の器に置き、或は葉の上に置き、近く內の本尊の前に置け。所成の諸器をば皆牛黄を以て之を塗る。次に白芥子を用て護を作せ。次に摩辣底花を持誦して、其物を供養せよ。牛黄を以て塗るが故に、便ち禁作を成じ、其芥子を用てすれば、便ち作護を成じ、花を以て供養すれば便ち光顯を成ず。此三種の法は、次第に應に作すべし。廢闕することを得ざれ。本尊の前に於て成就物を置け。中に於て餘物間隔することを得ざれ。成就の物をば兩種の法を用ひ、以て作護を爲せ。一には、謂く、手印、二には、白芥子なり。成就物をして速に驗有らしむるが故に、數閼伽花香等の具及び燈を獻じ、數應に供養すべし。其助成就の人、其物を護るが故に、常に其處に在け。悉く

【七】大段第三中云何知作障礙現相に答ふ。

の如く供養物を安置し已りて、然して後手を以て之を按じ、或は眼を以て觀よ。其不散の心を以て徐徐として持誦し、中間に數數其物を光顯ならしめよ。是の如く相續し、竟夜持誦して間斷せしむること勿れ。其夜の三時に閼伽等を以て次第に供養せよ。若し須らく外に出でて口を漱がんには、助成の人をして替へて物の前に坐し、續次して念誦せしむべし。其持誦の人廢忘する所あらば、其所助の人皆須らく補闕すべし。持誦の時、若し大難至らば、助成の人應に其難を拒ぐべし。如し禁ずること能はずんば、行者應に自ら白芥子を散じて以て其難を辟け、助成の人、其物を持誦すべし。

(七)時に東方にして是難現ずること有らん。謂く、大いに雨電せば、應に知るべし、帝釋の難なることを。東南方に於て是難現ずること有らん。謂く、火色の大人なり、或は日の盡きんとするが如くなるは、應に知るべし、卽ち是れ火天の難なることを。其南方に於て是難現ずること有らん。謂く、死屍の形にして、甚だ怖畏すべく、高聲に叫喚し、手に大刀を執りて皆悉く鼻を劓り、手に髑髏を執りて人の血を盛りて飲み、頭上に火燃ゆるは、應に知るべし、卽ち是れ焰摩の難なることを。西南方に於て是難現ずること有らん。謂く、其屎を雨らして曼荼羅を穢し、及び種種の形甚だ怖畏すべきは、應に知るべし、卽ち是れ泥哩羝の難なることを。其西方に於て是難現ずることあらん。謂く、雨雷電霹靂雹等せば、應に知るべし、卽ち是れ龍王の難なることを。西北方に於て是難現ずること有らん。謂く、大黑風起ること有るは、應に知るべし、卽ち是れ風神の難なることを。其北方に於て是難現す

【八】大段第三中
云何諸業相に答ふ

ること有らん。謂く、大夜叉及び女夜叉、行者を惱亂せん。應に知るべし、即ち是れ多聞天王の難なることを。東北方に於て是難現すること有らん。謂く、象頭猪頭狗頭異形にして、大火山を持せば、應に知るべし、即ち是れ伊舍那の難なることを。其上方に於て諸天現じて大威德を具すること有るは、應に知るべし、即ち是れ上方天の難なることを。下方の天の難は地動き及び裂く、應に知るべし、即ち是れ阿修羅の難なることを。上成就を作すに、方に斯難を現ず。是の如き等の難は中夜に於て現ぜん。凡そ上成就の難の相は還つて大なり。中下の成就は、此に準じて應に知るべし。

（八）夜の三時に於て是れ其上中下の相有り。時と相應せば、即ち是れ成就なり。時と相應せざるは、即ち成就に非ず。其三種の相は、謂く、煖氣と烟と光となり。是の如きの三の相は應に次第に現ずべし。若し上成就には、即ち三の相を具し、若し中成就には前の二の相を具し、若し下成就には唯初の相のみを現ず。或は若し持誦すること虔誠にして、初夜の時に於て三相次第に現せば、即ち部母の明を以て其光を禁住し、或は明王の心を以て其相を禁住し、及以牛黃を持誦して、塗り灑ぎ或は手を以て按し、或は蘇を用て灑ぎ、或は以て花を散じ、或は白芥子を散じ、或は但水を灑ぎ其相を禁住せん、便即受用して亦其願を果せ。或は若し初夜ならば、或は即便禁住して、但念誦のみを作し、其本時に至りては、方に受用すべし。其中成就も此に準じて應に知るべし、其初夜に於ては下の悉地を成じ、其中夜に於ては中成就を獲、明相の動する時に於ては上成就を獲ん。其中成就中夜に成

【其助成のもの等】本身他を利するが爲に此物等を成就す、而も今助成のもの受用をなさざる故に不吉となすなり。

【被偸成物却徵品】被偸成物を若し追取せずんば、普く二界に遍じて請願を滿し大道となる故に忿怒の三摩地を經遊し彼をして恐怖せしめ秘密利生の妙物を奉獻するを却徵と云ひ此品此等の妙法を明す。

ずる者は、如法に禁じ已れば、縱ひ明曉に至りて受用するも亦得。其下成就は此に準じて應に知るべし、各本時に於てすることを。其助成の者、若し受用せざれば亦吉と爲さず、其物縱ひ成ずとも卽ち受用せず、又禁住せず、其平曉に至つても亦受用せざれば、其物猶し萎める花の如く亦殘食の如くして用ふるに堪ふる所無からん。念誦するを以ての故に、眞言を啓請して其物の中に入れよ。時卽に過ぎ已りなば、其驗亦失す。又成就物初の相現ずと雖も、然も成就せずんば、當時に若し其相を禁じて、以後に還つて光顯等の法を作し、及び諸の節日に供養し灌頂せば、便ち成就を作さん。三年を經るに、若し成ぜずんば、當に知るべし、此物は成ずることを得べからずと。上成就の法は三年に至るを限とし、若し中成就は第六月に至る、若し下成就は其時を限らず。成就の法を損するも、亦復是の如し。

蘇悉地羯羅經被偸成物却徵法品第十六

我今當に被偸の物、却徵の法を說くべし。

（一）其物成じ已り、或は成就を作すの時にも、其物偸れ、物を偸むの時、或は其形を見、或は但物を失つて偸者を見ざらん。時に日宿を擇ばず、亦斷食せずとも、瞋怒を發起して現前に速に應に此曼荼羅の法を作すべし。屍を燒ける灰を用て三角に而も作り、唯西門を

【我今當に等】以下云何失物令劫得に答ふ。
【二】卽徵の法を明す。二義ある中初に卽徵の法を修するを說く。
【日宿を擇ばず】若し日宿を擇ばば恐らく彼偷者其物を失卻せん故擇ばずといふ。
【瞋怒を發起す】普く盡無餘界一切の有情を利益せんの爲、而も忿怒三摩地中に住するをいふ。

開き外門の前に於て其本尊を置き、內院の東の角には蘇悉地羯羅明王を置き、右に金剛忿怒を置き、左には大怒を置き、右に金剛拳を置き、左に金剛鉤を置き、右に金剛計利吉羅を置き、左に毘摩を置き、右に勢吒を置き、左に賓蘗羅を置き、右に阿設寧を置き、左に商羯羅を置き、右に微惹耶を置き、右の門に迦引利を置き、左の門に難陀目佉を置き、左に金剛軍を置き、右に蘇摩呼を置き、及び諸餘の大忿怒等を置け。成就の爲の故に次第に安置し、法の如く啓請して赤色の花、及び赤き食等を以て次第に供養せよ。前の所說の阿毘遮嚕迦の法の如く、此に於て應に作すべし。門の外に置く所の本尊には、應に美妙の花等を以て如法に供養すべし。其外院に於て八方神を置き、及び本部の諸餘の使者等の尊を置いて、亦須らく是の如く供養すべし。其中央に於て護摩の法を作せ。其爐は三角にして、一一に前の如く七枚の纖き佉地羅を以てし、己身の血を以て塗つて用て護摩し、或は苦練木を用ひ、或は屍を燒ける殘の柴を用ひて、用て護摩せよ。火著き已る後に、屍を燒ける灰を以て己身の血に和して護摩し、及び苦練葉と己身の血を、芥子の油及び赤芥子との四種を以て、相和して用て護摩せよ。復此四種の物を取りて物を偷める者の形に作り、其上に坐せしめ、左の手を以て片片に割折して護摩を作せ、若し能く瞋を伏する者、及び法を明むる者有らば、應に此法を作すべし。其偷物者惶恐怖し賽持して行者に親付せば、便ち應に彼に無畏を施すべし。時に彼が與に扇底迦の法を作せ。若し作さずんば、彼便ち命終せん。或は將つらん所の物に、更に復加添して密に尊の前に置け。又成就物をして盜して

日久しからんとするを、若し追うて取らんと欲せば、即ち應に此三部に通ずる成辦諸事の曼荼羅を作るべし。四方にして作れ。中央に蘇悉地羯羅明王の印を安置し、内院の南面に金剛忿怒と大忿と忙莽鷄と、金剛鉤と金剛食と金剛拳と金剛火と金剛母特伽羅と金剛怖畏と金剛商羯鎖と計利吉羅と慧金剛と金剛無能勝とを置き、及び諸の大忿怒及び諸の使者と諸の大威德の眞言主等を置き、其南面に於て次第に安置せよ。内院の北面に、能滿諸願と觀自在と馬頭明王と多面多手と能現多形と耶輸末底と大吉祥と落氣濕彌二彌と濕吠多と半拏囉嚩悉額と陀囉と戰捺囉と末囉と所有の眞言及び明と諸使者等とを置き、各次第に法の如く内院の東面には、金剛佛頂等の諸餘の佛頂と佛毫と佛眼と佛鑠底と佛牙と佛慈と、及び無能勝等の自餘の明王、及び能辦諸事の眞言等と、諸餘の眞言と、及び諸の使者とを置き、其東面に於て、各各次第に法の如く安置せよ。近門の兩邊及び門外の者、亦復前の如く法に依り安置せよ。其外院に於ては八方神を置け。西門の南邊には梵天王及與眷屬を置け。西門の北邊には、摩醯首羅、及び妃后と耶鉢底等の諸の眷屬と倶なると、及び七忙怛羅母、及び八龍王と幷に諸の眷屬と阿修羅王と諸の眷屬と歸依佛者の大威德神とを置き、其外院に於て、各各法の如く次第に安置し、誠を至し啓請して次第に供養せよ。外の西面に於ては護摩の爐を置き、蠟を以て其物を盜める者の形を作りて、簸箕の中に置いて阿毘遮嚕迦の法に依りて、啓請し祭祀して供養護摩せよ。次に刀を以て其形を割いて護摩を作せ。或は本部の所說の阿毘遮嚕迦の法に依り、彼に依りて作せ。或は本

【本尊自らを等】是本尊の食を起して自ら盜むに非ずして持誦者をして勇猛心を發し、愼誡心を起さしむる故此事を行ずるなり。又成就を與へざるは行者精進不滿なるに由りてなり。

【末但那】醉果と譯す。

【殺の句】鉢吒なり、摩羅なり。

【二】二に若し其物を得、及び物を替ふれば即ち護物を作すの法を明す

【從つて歡喜を乞へ】若し彼敬從して歡喜を乞へば、行者即ち歡喜を施與すべしとなり。

尊自らを盜み、及び成を與へたまはざるも亦是の如く作せ。黒月の五日從り十四日に至る來の中間に作法するを說いて、勝吉と爲す。其形をば復杖を以て鞭ち及び火を以て燃き、種種の猛法を以て打棓し、末但那の刺を以て金剛橛の法に依りて、用て身分を刺せ。黒芥子の油を以て鹽に和して、遍く其身に塗りて意に隨つて苦楚せしめて、之を害することを致し、復屍に蓋ひし衣を以て其形を覆ひ、赤線を以て纏ひ、赤色の花を獻じて自の眼を持誦し、目を怒らして之を視よ。眞言の中に於て訶責の句を置いて、每日之を打て。若し物を將て來たらば即ち當に休止すべし。中夜に當に是猛利の法を作すべし。俱微那羅木を用て黒芥子の油を塗りて護摩を作せ。又毒藥及び己身の血と芥子の油と鹽及び黒芥子とを以て、總じて倶に相和して盜物者の名を稱して護摩を作し、八百遍を經よ。或は但己身の血を用て鹽に和して護摩を作せ。是の如く苦持せんに、若し物を還さずんば、即ち應に更に死に至る猛法を作すべし。阿毘遮嚕迦の法の中に於て說く所の殺法なり。遍く其法を作すとき、眞言の中に於て其殺の句を置け。

〔二〕若し物を將て來らば即ち其法を止め、從つて歡喜を乞へ。彼若し已に其物を用ひ、餘物を將て替ふるも亦其事を止めよ。或は已に其物を用ひ、復物の替ること無きも、但來つて悔謝せば、亦其事を止めて、彼に歡喜を施せ。彼或は損失し、及び分つて他に與へ、殘れる所に隨つて持ち來つて還すこと有らば、亦其事を止めて彼に歡喜を施せ。應當に金剛微那羅の眞言を以て護摩を作すべし。或は大怒を用てし、或は不淨忿怒を用て護摩を作し、

【三】云何分別爲分數に答へて數字法を明す。今初に上成就分法を明す。中下成就といふは三種成分と同じき故、中下を擧ぐ上雖も、意は先づに成分の與を明すとあり。

或は當部の所說の却追失物の眞言に於て護摩を作せ。然も此三種の眞言は、三部に通ずる眞言なり。

唵同上呼一句　阿上𧺝娜曳二合呼句盋反弭也合寫寫反合寫同上三句嚩反無賀歌曩野四句涉合去二嚩訶五合

火天を請じ已りて團食を持し、一たび明し一たび燒して三團食を滿て、火天を供養せよ。

又護摩の眞言、

唵同上呼一句　阿上𧺝娜宅二合句盋上寫同上合寫同上三句嚩反無賀歌曩野四句拙反奴立比反並也拙上同比上同俐跛野五句涉去二嚩訶六合句合

又蘇を持して、一たび明し、一たび燒して、亦三遍を滿て、火天に供養せよ。

金剛部の瞋怒金剛の眞言、

唵同上呼一句　枳里枳里二句　跋日羅矩嚕馱三句　吽抪

此眞言を以て一たび明し、一たび燒して、火食の作法せよ。成就護摩法の眞言、

那謨剌怛二合娜怛二合囉耶野一句　那謨室戰拏跋日囉幡拏曳二句　摩訶藥𧺝灑同上栖那幡𩎑曳三句　唵同上呼四句　歌囉歌囉跋日羅五句　麼詑麼詑跋日囉六句　度曩度曩跋日羅七句　歌曩歌曩跋日羅八句　馱歌馱歌跋日羅九句　幡者幡者跋日囉十句　娜囉娜囉跋日囉十一句　娜囉耶娜囉耶跋日囉十二句　弭娜囉耶弭那囉耶跋日囉十三句　瞋娜瞋娜跋日囉十四句　頻娜頻娜跋日囉十五句　虎二合吽抪十六句

（三）此眞言を誦して護摩の法を作さば、速に成就を得。若し其物を得、或は替りの物を得ば、卽ち其物を護し、兼ねて及び護身し、當に節日に於て次第に而も光顯等の法を作すべ

七一

【先づ閼伽を以て等】以下分與の法則を明す。

し。其中成就の物も下成就の物も、皆一分を以て世尊に奉施し、一分をば阿闍梨の處に奉施し、一分をば先成就の者に奉施し、一分をば同伴等の人に奉施し、一分をば自ら取りて分ちて兩分に作して一分をば自用し、一分をば比丘比丘尼鄔波索迦、鄔波斯迦等に奉施せよ。諸有ゆる未物の法、皆是の如くせよ。先づ閼伽を以て尊等に奉獻して、後に本分を取れ。其先成就の者の分をば閼伽を以て供養して、其價値を倍して自ら取りて受用せよ。其價値とは供養是なり、其阿闍梨若し在さざるときは、其分をば價値を還し離りて自ら受用せよ。其價値とは、心に慚愧を生ずる、即ち是れ價値なり。曼荼羅の外に出で先成就の者に奉らん時は、應に是言を作すべし。諸の先成の者は、本分を受取して予に閼伽を執れ。第二第三も應に是の如く唱ふべし。若し取る者無くば、即ち應に持を同伴の人に與ふべし。疑慮を懷くこと勿れ。彼等虔誠の心を以ての故に、供養するを以ての故に、堅く戒を持つが故に、行人に侍するが故に、即ち是れ先成の人なり。是故に其分を彼等應に受くべしと三たび之を唱ふる時、彼同伴の者、應に是の如く報ずべし。我等は即ち是れ先成就の者なりと、行人自ら其物を分ちて同伴等に與へよ。其物の若し少にして分つべからざる者は、即ち安善那及び牛黄等は分つべからざるなり。應當に心を以て其分量を作して自ら受用すべし。是の如き物唯一人用ゐて分つべからざる者有り。輪刀等是なり。其本法の所說の成就に隨つて、應に是の如く作すべし。其積像等も亦分つべからず。本法の中の成就の物に於て、其量縱ひ少くも任本量に加して成就を作して同伴等に與へよ。或は先成の人

【四】二に中下成就分法を明す。

【物成就し已りなば等】先づ閼伽を以て本尊等に奉献し後本分等を取るなり。

【五】三に云何受用成就物に答ふるを明す。今初に受用成就物の法則を明す。本眞言を誦し手印をし、とは語密、手印を作すとは身密、本尊を觀念すとは意密なり。

【意に隨って等】二に受用の功能を明す。

の物の量に依りて成就を作せ。縱ひ其半に滅ずとも、亦成就を得べし。或は本法の所說の分量に於ては、皆須らく依行すべし。行人物を分ち、同伴に與へん時は、應に處分して言ふべし。汝等、我に隨つて種種に驅使せよと。彼然も諾して、已後に當に之を與ふべし。或は若し一身に成就して餘人を利益せば、此藏教或は餘法の中に依ること、並に皆通じて許す。分ちて同伴等に與へん時は、其功勞に隨つて節限して物を分つて應に偏黨すべからず。物成就し已りなば、先づ應に本尊に供養して、深く慚愧を生じ、慇懃に再び請すべし。然して後に分つべし。一切の諸部の法も、皆是の如し。

(四)中と下との成就此に準じて應に知るべし。深く慚愧を生じて恭敬供養し、及び財物を施せ。所得の進止は其處分に依れ。是の如きの事を以て物の價を讎還せよ。物成就し已りなば、先づ閼伽を獻じて如法に分與せよ。

(五)本眞言を誦し、及び手印を作し、心を以て本尊を觀念し、及び明王明妃の眞言を誦し、乃至觀念して然して後に其物を受用せよ。意に隨つて空に昇り、樂仙の所に至らんに、彼能く壞し及以輕蔑すること無し。縱ひ怨敵有るも、亦能く損すること無けん。彼成就者常に本尊を念じて應に廢忘すべからず、其成就物をば、常に須らく心に念じ、或は眼を以て觀るべし。明王の眞言法を持するが爲の故に、諸仙恭敬し、明妃を持するが故に、諸の怖畏無し。三摩耶の印を作し、及び部の印を作し、及び眼を以て物を觀ること皆應に廢すべからず。仙と與に相見んときは、應に先づ起ち敬つて問訊して言ふべし。善來安樂なりや。

復何より至るやと。彼若し所問有らば、善言を以て答へよ。空を遊行せん時は、神廟の上に過ぐべからず。及び獨一の樹と幷に四衢道と、諸仙の居處及以城廓と、祭祀の壇と、婆羅門の集會の處と、邪法仙衆の所居の處とをも亦應に過ぐべからず。增上慢の故に、彼等を經て過ぎなば、必ず當に墮落すべし。放逸なるが故に、而も墮落せんときは、即ち應に明王の眞言を持誦し、及以思惟すべし。若し已に墮落し、及び墮ちんと欲はん時にも、便ち本位の虛空を得ん。無形色と雖も、天眼を以て道を見ん。譬へば成者の心を起せば、即ち至るが如く、亦定に在るに動せずして即ち至るが如し。是故に彼先成就の路に遊べば、福力を以ての故に、自然の衣服隨意の宮殿あり。花林園觀種種の諸鳥天女の遊戲、歌舞伎樂種種の欲樂熾然の光明を用ふること、猶し劫初の如意寶樹の能く諸願を滿つるが如し。居止の爲の故に寶石座となり。下に渠水流れ、軟草地に布き、種種の瓔珞嚴身娛樂の具あり、諸の吉祥樹に甘露の菓あり。乃至意樂し憶念する所の處に隨つて、皆其前に現ず。縱ひ是の如くし已るも、常に須らく護身すべし、廢忘すべからず。應に清淨の園林と、及び諸の山頂と、幷に海の洲島と、江河と潬渚とに住すべし。遊戲を以ての故に、應に其處に住すべし。彼に於て便ち前の如くの勝境有らば、或は先成の仙衆と共に住せよ。

蘇悉地羯羅經成就具支法品第十七

【彼能く壞し等】常に本尊を念じ及び常に成就物を念觀する故に、彼れ能く壞し及以び輕蔑するなく、縱し怨敵あるも亦能く損することなきなり。

【本位の虛空を得】本虛空に遊ぶも、放逸を以ての故に墮落の失を致す、相助の力に依らしめば還遊空を得んとなり。

【廢忘すべからず】因位には惑障を斷ぜず、乃至等覺にも細惑を盡さざる故なり。

【仙衆】諸聖山十境等、獨覺の如きを名く。

【成就具支法品】即ち具足して悉地を作すの法を明す

【一】正しく具支の法を説く中初に更に念誦法を作すを明す。

【二】護摩法を作すを明す。

【四種の護摩】増益降伏息災等。

我今復具足して、悉地を作す法を説かん。(一)其物成ぜずんば、法の如く禁住し護持し、藏し棄てて前の如く、更に先念誦の法を作し、乃至還りて成就の法を作せ。是の如く作し已りて、若し成ぜずんば、重ねて精進を加へ、又更に念誦して成就の法を作せ。是の如く七遍を經滿して猶成ぜずんば、當に此法を作さんに決定して成就すべし。謂ゆる乞食し精勤し念誦し、大恭敬を發して八の聖跡を巡りて禮拜し行道し、或は復大般若經を轉讀すること七遍し、或は一百遍し、或は勝物を持して僧伽に奉施し、或は海に入る河邊に於て、或は海島に於て應に一の窣都波を作ること數一百に滿ち、一一の窣覩波の前に於て如法に念誦し、一千遍を滿すべし。最後の第一百の塔、若し光を放たば、當に知るべし、作法決定して成就すと。復一千の窣覩波を作り、一一の前に於て千遍を念誦せば、假使無間の罪を造るとも、其數滿し已りなば、作法を須ひざるも自然に成就せん。又一切の眞言念誦すること一倶胝せば、決定して成就す。若し時念誦を作さん者は、十二年を經ば縱ひ重罪有れども、亦皆成就せん。假使法は具足せずとも、皆成就を得ん。

(二)又念誦の遍數、及び時滿ち已りなば、即ち當に增益の護摩を作すべし。或は復此成辦諸事の曼荼羅を作し、中に而も四種の護摩を作せ。或は山の頂に於てし、或は牛群の先より所住の處に於てし、或は恆河の渚にして其地を平治して曼荼羅の量一百八肘なるを作れ。一百八の瓶を置き、其四門に於て柱を立てて門を爲せ。各門の前に於て寶臺を建立して

【彼部の中に依りて】行者の所修、三部の中に於て必ず所依有る故にいふ。

種種に莊嚴し、以て名花枝條を作り、鬘を作りて其門の柱及び角の幢の上に繫け。遍く其處を圍み、蘇を以て燈を燃して一百八に滿し、曼荼羅を布き、及び一百八の香爐に諸の名香を燒いて亦其處に置け。內院の一面は其量七肘にし、外院の一面は三肘にせよ。餘は是れ中央なり。所有の啓請、及び供養等は皆悉く前の如くせよ。護摩の法に准ぜば、次に當に別說すべし。中に於て本眞言を以て羯羅舍瓶を置き、其瓶の四面にして護摩の法を作せ。其內院の東面に於て遍く佛部の諸尊を置き、其北面に遍く蓮華部中の諸尊を置き、其南面に於て遍く金剛部中の諸尊を置き、西面に於て嚕達囉神、及び多聞天王と各并に眷屬とを置け。前の如く所說の使者等の尊內院に若し容受せずば、當に外院に置くべし。其護方の神は諸の眷屬と與に各本方の位に置け。其三部の主及び嚕達羅、多聞天王とは先づ本處に置け。次に復各明王と明妃と辨事の眞言主等と并に諸の使者とを置け。次第に安置せよ。外門の前に於て軍荼利尊を置き、及び無能勝尊を置け。是の如く法に依つて曼荼羅を作し、成し已らば本部の心を用て啓請を作し、次第に供養せよ。即ち四方に於て念誦を作し、然る後に其瓶の四面に置く所の爐には、各彼部の中に依りて護摩の法を作せ。是を增益の諸尊の護摩と名く。其供養の食には那羅を用て獻せよ。此法を作し已らば一切の諸尊便ち增益を成ぜん。是の如く念誦し護摩し已りて、更に部母の眞言を以て蘇を護摩せよ。次に本尊の眞言を以て乳の粥に蘇を和して護摩を作せ。更に部母の眞言を以て胡麻を三甜に和して護摩を作せ。又部母の眞言を以て蘇を用い護摩せよ。此法を作し

【本尊を苦治す】本尊本誓に相違し成就を與へず、故に此法を作して本尊を苦治す。

已らば、一切の尊即便充足することを得、及び增益を成して圓滿具足し悉く皆歡喜して速に成就を與へん。若し此曼荼羅を作さんこと乃至七度せんに決心して成就せん。前の如く念誦し、及び八塔を巡ること乃至七遍して此曼荼羅を作さんに、若し成ぜずんば、即ち阿毘遮嚕迦の法を以て本尊を苦治し、蠟を以て其形像を作り、其眞言を取りて而も之を念誦せよ。先づ部母及び明王の眞言を誦じて、中間に本尊の眞言を置き、阿毘遮嚕迦の法を以て護摩し、芥子の油を以て其形像に塗つて便ち壯熱を著けよ。若し他を伏せんに著けなば遍身皆痛まん。瞋を以て鞭打し、及び花を以て打ちて前の二の眞言を用ひ、其瞋心を以て供養を作せ。譬へば鬼魅を治罰するが如く、本尊を治罰する法も亦是の如し。斯の如きの法は教に依りて作し、自ら專にすることを得ざれ。若し尊來現して其成就を與へ、本願を滿し已りなば、則ち前の事を止めて、扇底迦の法を作せ。或は毒藥を自己の心血、胡麻の油と鹽と亦芥子とを以て、總て相和し竟夜護摩せよ。本尊時に憧惶して、唱へて言はく、止みね止みね。爲すこと莫れ。即ち成就を與へんと。かくの如く作法すること三日を經已りて、亦復來りて成就を與へずんば、又勇猛を加へ。無畏の心を以て、便ち己が肉を割いて護摩すること三遍せよ。本尊即ち來りて彼歡喜を乞はば、心に求むる所の願即ち成就を與へん。若し闕する過有らば、一一に而も說かん、假使五無間を犯すとも、九夜を經て肉を割き護摩せんに、決定して來りて其成就を與へん。此は是れ眞言と鬪諍するの法なり。無畏の心を以て如法に護身して、方に而も作すべし。必ず空しく過さじ。成就を

【三種の事】三部中扇底迦等の三事
【一切の諸事】此曼荼羅に於て諸の念誦をなすなり。

得已らば、即ち應に速に扇底迦の法を作すべし。若し愆過を説かば、即ち須らく補闕すべし。諸の成就の事の中に於て此曼荼羅を最と爲す。中に於て三種の事を作し、三種の果を得。中に於て應に一切の諸事及以護摩を作し、本尊を治罰すること鬼魅を治するが如くすべし。每時の供養皆新物を用ひよ。護摩の物も亦復是の如し。此法は應に放逸にすべからず。澡浴清淨にして法の如く護身し應に輕慢すべからず。明かに藏教を解して、方に此法を以て本尊を治罰せよ。若し此に違する者は即ち自損せしめん。

蘇悉地羯羅經卷中　終

【分別成就品】能成所成等の多種を分別顯示し修行者をして錯謬あることなからしむるを說く、卽ち上中下次第成就の相に答ふるなり。

【一】正しく三部成就を說く。三に分つ中今初に、三成就悉地の果に於て悉地の別を陳ぶ。

【空に乘じて等】三部の上成就は三乘の果を得及び佛果を證するあり、然るに乘空自在なるは諸持明仙及び諸聖果に通ずるも今は通もて別を擧し、且く乘空をあぐるなり。

【三種の上中等】前の最上成就と中成就下乘世間の事とは前說の世間の諸事を下悉地となす、世間悉地の故下乘となすなり。

【辯才多聞】辯才とは四辯七辯、多聞とは世出世一切

蘇悉地羯羅經　卷下

大唐中天竺三藏輸波迦羅譯す

分別成就品第十八

我今復三部の悉地成就を說かん。(一)空に乘じて自在にして進まん。此を最上と爲す。形を藏し、跡を隱すを中成就と爲し、世間の諸事を下悉地と爲す。此三種、上中下乘の世間の事等の三種の成就を成すを、上中下に隨つて、更に之を分別せよ。三部の上成就の法は持明仙を得、空に乘じて遊往し五通を成就す、又多種有り、或は諸漏斷盡を得、或は辟支佛地を得、或は菩薩の位地を證し、或は一切の事を知解し、或は辯才多聞、或は吠哆羅尸を成じ、或は藥叉尼を成じ、或は眞陀摩尼を得、或は無盡の伏藏を得、上等の事を具するを、上が中の上成就の法と名く。三部の中成就の法は跡を藏し、身に於て大勢力を得、先來は懈怠なりしに、而も精勤することを得、修羅宮に入り、長壽の藥を得て、鉢賺史迦天の使と成り、或は能く鬼を使ひ、或は能く娑羅坌爾伽の樹の神を成就し、或は多聞を成じて未だ所聞を經ず、深き義理を悟り、或は藥を合せ成して、纔に足と頂とに塗れば、卽ち遠き所に渉れども疲乏有ること無し。如上の所說は、悉く中の上成就の法と名く。

の諸事に於て聞知せざるなきをいふ。
【吠路羅尸を成ず】族生の家主、盛年無病なるに卒に死し、瘢跡、無し由て脹壞せず、諸根具足せり。
【藥叉尼を成ず】是れ藥叉女なり。
【眞陀摩尼を得】其珠、紅頗璃光淨無翳を用て或は好水精なり。
【伏藏】金銀等の諸珍は、諸の天人及び龍鬼等に於て名けて伏藏あり。
【跡を藏くす】前所說の形を藏く跡を隱くすを中成就となすを指す。
【多聞を成じ等】世出世間一切の法門未だ此等を聞かざるに直に深理を悟るなり。
【二】二に所成就に約して差別を顯示するを明す。
【三】能成就に於て差別を說くを明す中に二あり、初

三部の下成就の法は、衆をして喜見せしめ、或は衆人を攝伏し、或は能く惡人を懲罰し、諸の怨衆を降し、及び餘の下事を下が中の下成就の法と名く。

(二)若し藥物等を成就せんと欲せば、三種の成有り、光焰を上と爲し、煙氣を中と爲し、煴煖を下と爲す。

(三)復次に聖者の眞言を上成就と爲し、諸天の所說を中成就と爲し、世天の眞言を下成就と爲す。復次に佛部の眞言を上悉地と爲し、蓮華部の眞言を中悉地と爲し、金剛部の眞言を下悉地と爲す。若し上の眞言を以て下成就を欲求せんと欲せば下の成就を得ん。或は下の眞言を以て上を祈求せば、上成就を得ん。或は中の眞言を以て上下を成ぜんとせば、亦等しく成就す。眞言の中に此四德を具す。當に知るべし、卽ち悉く上中下の分に能く大果を成ずるを。謂く、辟支佛の位を成滿せしめ、謂く、菩薩の十地を成滿せしめ、乃至成佛を大果報と爲す。復大德行を成ず。謂く、多くの諸の眷屬前後に圍遶す。是の如きの願を滿ずる者を大德行と爲す。復能く久しく位に住す。謂く、王處と轉輪王處と長壽仙處とを得。是の如きの願を滿ずる者を久住位と爲す。形儀廣大にして威光遠く照し、敎修廣大にして此四德を具する者は是れ下品の眞言なりと雖も、能く上品を成ず。若し上品の中に此德を具せざれば、是れ上品の眞言なりと雖も、下品の用なり、諸佛菩薩の所說の眞言は是の如きの轉次多し。佛菩薩の所說の者は下品に屬すと雖も、亦能く上品等の事を成就す。或は尊等の所說の眞言の中に唯一事を具すとは、謂く、扇底迦の法と補瑟徵迦の法と

に正しく能成の眞言を明す。【若し上の眞言を以て等】以下次に一一の眞言の能具に三品等の果を成就するに約して眞言品を説くを明す【大果】四乘の果【一事を具すと雖等】諸天等の眞言各各一事に屬すと雖も、而も各三品等の事を成就する故なり。【白檀木の等】檀木は性涼、若し風扇其木を擧つて相揩つに自ら火起るも如く上眞言と雖も人の所樂に隨つて下悉地を成ず、眞言は因、人樂は緣、若し因緣合すれば則ち下品を成じ亦中上を成ずるなり【身分の悉地】自身を轉じて無漏成ず等の事をいふ【諸藥の悉地】諸物に於て成就を得るなり。又富饒を感得するを富饒の

阿毘遮嚕迦の法となり。一事を具すと雖も、中に於て各上中下品あり、豈下品の眞言能く上事を成ずること有らんや。猶し青泥の妙蓮華を出すが如し。岡に疑無きなり。豈上品の慈善の眞言、能く忿怒の下品の成就を成ずること有らんやといはば、白檀木の其性清涼なれども、若し風撃ち相揩すれば自然に火起るが如し。因緣無きに非ざるなり。是の如く差互して次第に非ずと雖も、諸餘の悉地皆疑慮すること勿れ。身分の悉地を上品の成と成し、諸藥の悉地を中品の成と爲し、富饒の悉地を下品の成と爲す。若し復人有りて久しく下品の眞言を持誦するに至つては、縱ひ自ら力無くとも、本尊の邊に於て上品を轉求せんに、上品を自ら成ず。若し上品の眞言の中に於て心に猶豫を懷いて念持し供養し、復精誠ならずんば、上品の眞言に於てすと雖も、彼念誦の心輕きに由りて、敢て下品の成就を招く。故に知んぬ持誦は皆心意に由ることを、且く諸天の中にも亦貧者有り。諸の鬼部の内にも、亦富强有るが如し。此彼然るが如く眞言も亦爾なり。一一の眞言に皆三の悉地を具す。謂く、上中下なり、誠心の念誦は皆悉地を獲ん。

蘇悉地羯羅經奉請品第十九

(一)復次に若し本尊の室に入らんと欲せば、先づ尊の顏を覩て、十指の爪を合せ、當に少しく頭を低るべし。

悉地といふ。

【奉請品】前の奉請品と異り、本尊聖衆の降臨道場を奉請せん爲にする奉請なり。即ち云何法請召に答へて本尊の室に入つて奉請を作すを明す。

【一】本尊の室に入るの法則を明す本尊の室とは本尊所止の處、即ち道場なり。

【二】二に閼伽水を備ふるを明す。初に且く八箇の事もて閼伽水を嚴作するを說く。

【三】三に正しく本請の法則を明す。今初に請召所用の眞言を顯示するを明す。

【本法に若し請召等】次に正しく本請の法則を示す。

(二)復器を以て淨水を盛りて、所作の事に隨つて本の獻花を置き、復は塗香を置き、本法に依りて而も閼伽を作らんには、香を燒き之を薰じて應に眞言を誦すべし。閼伽を眞言すること、七遍して則ち當に奉請し已りて法に依りて供養すべし。閼伽を盛る器には當に金銀を用ひ、或は熟銅を用ふべし。或は石を以て作り、或は土木を以て作り、或は螺を取りて作り、或は束底を用てし、或は荷葉を用ひ、以て綴りて器を作れ。或は乳樹の葉にてもす。如上所說の閼伽の器等は、用ふるの時に當りて、須らく次第を知るへし。若し扇底迦には當に白器を用ふべし。補瑟徵迦には當に黃器を用ふべし。阿毘遮嚕迦には當に黑器を用ふべし。上中下の悉地成就を作すにも、前の所說に類して應に之を用ふべし。扇底迦を作すには所用の閼伽に少しき小麦を置き、補瑟徵迦には應に胡麻を着くべし。阿毘遮嚕迦には當に粟米を置くべし。又扇底迦には乳を置き、補瑟徵迦には酪を置き、阿毘遮嚕迦には應に牛尿を置くべし。或は自ら血を着けよ、遍く通用せんには、應に稻花と塗香と、及び花と胡麻と茅草頭とを着くべし。熟銅の器を用て盛るに閼伽を以てせよ。若し此器無くば所得の者に隨つて、亦遍く通用せよ。

(三)請召の時には、應に當部の明王の眞言及び慕捺囉を用ふべし。若し本法已に召請の眞言を說くこと有らば、應當に取りて用ふべし。別の者を取ること無かれ、先づ當部の尊を請じ、次に明王の妃を請ぜよ、三部の中にも皆應に是の如くすべし。本法に若し請召の眞言無くば、應に明王等の眞言を以て之を請召すべし。本法に請召の眞言を說くと雖も、眞言是れ

下ならば豈部主を請す合けんや。若は本法の眞言を以て請召せば、當に速に成就すべし。應に難ることを生すべからず。本法に若し請召の眞言及び發遣有らば、當に之を請ずべき時、此眞言主、部主の所に至りて請じて云はく、今某甲有りて其の事の爲に奉請すと。若し發遣の時にも亦復是の如くせよ。所作の事已らば、願くば尊證知して意に隨つて去りたまへと。明王妃の眞言は女仙等を請ずるに用ひ、明王の眞言は諸の眞言主を請ぜよ。或は眞言主の明王の眞言は所請を受けざる有らん。要ず明王及び明王妃の眞言を以て然も依り請ずべし。別部に說くが如し。閼伽を置く時には應に眞言を誦すべし。大は一遍し、中は三遍し、下は七遍せよ。極小は二十一遍せよ。上の所說の閼伽の法則の如し。先づ兩の膝を地に着けて、應に須らく手に淨き茅草の環を着け、閼伽を捧げ持ち燒香に之を薫ずべし。是の如くし、請を作せ。仰らくは唯尊者、本願を以ての故に道場に降赴し、願くは哀愍を垂れて此閼伽及び微獻の供を受けたまへ。眞言主有り、名けて獨勝奇伽忿怒と曰ふ。諸餘の眞言の召請を受けずんば、彼所說の眞言を用ふれば然も所請に降りたまふ。彼諸の眷屬も亦餘の眞言の請を受けずんば、亦應に彼眷屬の眞言を用ひて之を請召すべし。但請召に緣らば心眞言を用ひよ。或は根本或は明王妃の所說の眞言を說いて、而も用て請召せよ。部心の眞言は遍く三部に通ず。彼を用て請召せよ。當に降赴せしむべきには翳醯の字を加へよ。此は更に祕密なり。速に其願を滿つ。之を請ずる時に當り、誠心に禮を作し再三して啓白せよ。大慈悲者、本願に依りて道場に來降したまへと請ふ。若し請心にあ

【諸餘の方所に等】先づ本尊所止の方を觀じ、彼を請し已りなば、彼東西南北の所に於てす。面各異なる故にいふ。

【事緣】障起、魔嬈或は病者の苦を加ふる等をいふ。

らずんば、多の念誦を徒にせん。乃至眞言も亦皆慇重にせよ。以て兩の手を用ひ、閼伽の器を捧げ、頂戴して供養するを上悉地と爲す。心の間に置く中の悉地と爲す。臍の間に置くを下の悉地と爲す。先づ本尊の畫像を觀よ。其像若し立たば、持誦の人も亦應に立ちて請ずべし。畫像若し坐せば、亦應に坐して請ずべし。又彼像を觀んには、躬を曲げ立てる勢にして、亦應に之を教へて之を奉請すべし。當に之を請ずべき時には、先づ本尊の所止の方を觀じて、而も彼に面して請じ、然して便ち身を廻して、閼伽の器を尊像の前に置け。復祕觀有り、作す所の扇底迦等の、諸餘の方所にて、而も之を請召せよ。或は餘の時に於て諸の花菓を得て、本尊の意に稱うて須らく奉請すべし。然して之を獻ずべし。之を請ずるの時に當りては、手の爪指を合せ、本方に隨つて、但誠心を至して奉請せよ。或は兩手を以て諸の閼伽の器を捧げて之を請召して、然る後に所得の物を敷獻せよ。若し上中下の事及び扇底迦等を成就せんと欲せば、皆須らく加するに眞言及び慕捺羅を以てして請召を作すべし。諸餘の事等を成就することを作さんに、或は障起すこと有らん。或は魔興りて嬈し、或は者を病しめ苦を加さん。爾時に當りて事緣既に速ならば、當に閼伽の器を辨ずることを待つべからず。便即用心して本尊を啓請し、除遣の法を作せ。上の所說の如く、其大小に隨つて成就を擬欲せば、閼伽を以て之を請ぜよ。急難等の事あらは誠心の之を請ぜよ。若し復人有りて、諸部の尊を歸仰することを得んと欲せば、應當に常に召請の法則を作すべし。持誦の人速に成就を得ん。

【供養品】塗香等の事供養、眞言手印の眞心供養、或は護身結界等を說きて云何修供養に答へて部類或は諸の事業に依つて之を供養するを明す。

【一】初に供養の次第を明す。中に二、初に事法供養。

【依部類等】所說の供物は三部及び三事業に隨つて其色味種種不同なれば其差別に依つて之に奉獻すべしとなり。

【二】次に眞心供養。初に本色眞心供養。

【本色の眞言】即ち五供養の眞言並に印なり。

【此を離れて等】四種眞心供養。

蘇悉地羯羅經供養品第二十

(一)復次に尊を奉請し已りなば、次に部類或は諸の事業に依りて其大小を觀じ法則に依りて之を供養せよ。既に奉請し已りなば、是の如きの言を作せ。善來尊者、我等を愍むが故に、道場に降臨したまふ。復哀愍を垂れて當に此座に就いて坐して微獻の供を受けたまふべし。復誠心を起して頻に與に禮を作して而も尊に白して言さく、大悲愍みを垂れて本願を成ずるが故に、而も見に降臨したまふ。我所能として本尊を啓請するには有らず。是の如く三時に皆應に此に依るべし。前に已に說くが如く應に須らく供を辦ずべし。先づ塗香を獻じ、次に花等を施し、復燒香を獻じ、次に飲食を獻じ、次に乃し燈を燃せ。其次第の如く忿怒王の眞言を用ひよ。此等の供物悉く清淨にして善く人の心を悅ばしむ。各本色の眞言を用て而も之を眞言せよ。塗香を獻じ已りて各の其名を列ねよ。如は前の說に依りて即ち閼伽を奉れ。是の如く花香及び飲食等皆亦此に準ぜよ。

(二)若し塗香燒香花及び飲食の獻ずべき者無くば、但本色の眞言を誦し及び此手印此を以て之を獻ぜよ。表して云へ、供物の求め得べきこと無し。但眞心を納れたまへと。後に閼伽を作せ。眞心を以ての故に、速に其願を滿したまふ。此を離れて、外に四の供養有り。遍く諸部に通じて一切處に用ひよ。一には謂く合掌、二には閼伽を以てし、三には眞言及

【或は復長時の等】一種運心供養を明す。

【三】二に念誦の次第を明す、中に三、初に結護を明す。

【當部の成就諸事の眞言】部毎に辨事眞言あつて遣除に用ふべきをいふ。

び薬捺羅を用てし、四には但運心なり。此善品の中に、力に隨つて應に作すべし。或は復長時の供養の中に、最も運心に過ぎたるは無し。世尊の說きたまふが如く、諸の法行の中には心共首爲り。若し能く心を標して供養する者は一切の願を滿つ。

(三)若し諸餘の事を成就せば、應當に諸の障を爲す者を發遣すべし。若し遣除せずんば、後に傷の及ばんことを恐るる所以に、先づ須らく遣除の法を作すべし。忿怒の眞言を誦し、或は當部の成就諸事の眞言を用てして障を遣除し已りて、先づ次に應に本部尊の眞言を誦して水を眞言して、遍く請じて護摩し、及び手印を偷うすべし。佛部の請火天の眞言、

唵喉中擧聲呼一句　阿上　起鄔曳二合引蓋反呼　弭也合寫反　合寫三句　同上　嚩歌羅呼野四句　莎去二合　嚩訶五句

此眞言を誦すること三遍して、火天を請召して、食を燒いて供養せよ。

護摩の眞言、

唵同上呼一句　阿上　起鄔曳二合　蓋上寫上合寫三句　同上　嚩歌羅呼野四句　揩奴立比反　巳揩上比上　儞跛野五句　莎去二合　嚩訶六句

次に牛蘇を持して此眞言を以て、一たび眞言して一たび燒け、三遍に滿ちて火天に供養せよ。

金剛部の忿怒金剛の眞言、

唵同上呼一句　枳里枳里二　跛日羅三　矩嚕駄四　吽撥吒五句

此眞言を以て、一たび食を眞言し、一たび火食を燒き作法して、地中にして諸の障を

【一切事の眞言】
辨事眞言なり。

作す者を除遣せよ。又此眞言を用ひ、或は部尊を用て遍く花等に灑げ。復吉利枳羅忿怒の眞言幷に印を用ひよ。當に眞言を誦して左の手に印を作して、遍く印し塗香燒香飲食花等を作淨して、穢を除くべし。自ら身を淨むるが爲の故に、應に右の手を以て香水を掬持して、目に香水を覩て心眞言を誦し、自身の頂に灌いで作淨し除穢すべし。復一切の事の眞言、幷に忿怒の眞言を用て座を淨めんが爲の故に、香水を眞言し灑いで座を潔うせよ。又誦すること七遍して、地の方界に灑げ。能く諸穢を除いて、淸淨なることを得ん。

吉利枳羅の眞言。

唵同上呼一句　枳里枳里二句　跛日羅三句　跛日里部訥四句　勃沒反畔駄畔駄五句　虎合吽捕六句

此上の眞言を以て地と方とを護し訖りて虛空界を結するには、應に次下の蘇悉地の眞言に同じかるべし。燒香を執持して、當に眞言を誦して空中に薰馥して、諸の穢惡を除き便ち淸淨なることを得べし。

蘇悉地の眞言。

唵同上呼一句　蘇素反悉地迦上履合入聲同二句　里韓句三　娜娜薬訥上韓曳同四句　入嚩嚩入嚩攞五句　畔駄畔駄六句　歌娜歌娜七句　虎合吽捕八句

此金剛部の蘇悉地の眞言は、遍く諸事に通じて、空界を結するに用ひよ。

佛部の結空界の眞言。

唵同上呼一句　入嚩上同攞二句　虎二吽三句

【部心の眞言】三部に各心眞言あるなり。

此佛部の空界を結する眞言は唯當部のみに通ず。

蓮華部の空界を結する眞言。

唵同上呼一句　鉢頭途邑反　彌俑二句　皤伽上　嚩底三句　幕歌野　幕歌野四句　惹麗　幕歌顯五句　沙去二合　嚩訶

此蓮華部の空界を結する眞言は、唯當部のみに通ず。次に應當に部心の眞言を用て香水を眞言して諸方に撒灑すべし。復明王の根本の眞言、或は心眞言、或は眞言主の使者の心眞言を以て隨つて其一を取りて用て方界を結せよ。或は此の諸の心眞言を以て結界を作せ。所結の處には垣墻を置くが如くせよ。當部の仙天、常に當に護衞して能く障を作すこと無かるべし。若し諸部の事に法を爲すこと有らば、應に甘露軍茶利の法に依りて之を遣除すべし。又五種の護衞の法則有り。常に道場の室內に於て之を作せ。謂く、金剛墻と金剛城と金剛橛と忿怒吉利枳里と忿怒甘露軍茶利となり。部母の金剛墻の眞言。

唵同上呼一句　縒囉縒囉二句　跋日囉三句　跛北沒反二合　囉迦囉四句　虎吽二合　捧五句

金剛城の眞言。

唵同上呼一句　弭塞反　僧乙普囉二合　捺囉乞灑三句　跋日囉半惹囉四句　虎吽二合　捧五句

金剛橛の眞言。

唵同上呼一句　跋日囉枳攞二句　虎吽二合　捧三句

忿怒吉利枳羅の眞言。

唵同上呼一句　枳里枳里二句　跋日囉三句　虎吽二合　捧四句

忿怒甘露軍荼利の眞言。

那謨刺怛二合娜怛二合囉耶野一句那謨跋日囉矩嚕駄野二句摩訶薩羯躍跛遲訖囉摩野三句薩嚩上同弭起娜毘那舍曩耶句四唵五句同上呼虎嚕虎嚕六句底瑟侘上同底瑟侘七句畔駄畔駄八句訶曩訶曩九句阿密栗羝十句虎吽二合泮吒十一句

若し本法の中に是の如き等の金剛墻の眞言あらん。應に重ねて之を結すべし。諸事既に了りて、次に應に持誦すべし。之を持誦せん時には、先づ當部母の眞言を誦せよ。

佛部母の眞言。

唵一句同上呼嚕嚕塞反僧乙普嚕二句入嚩同上囉三句底瑟侘四句噂賀反悉駄路者泥五句寧計反薩嚩刺他可娑䭾

顆六句莎去二嚩訶七句合

蓮華部母の眞言普眞言頌歸命同盡

唵一句同上呼迦居還反知西下普同制反弭迦上制二句同上迦知降迦同上制三句迦穆弭迦穆四句迦穆迦制五句同上播儞上

嚩底弭惹曳六句莎去二嚩訶七句合

金剛部母の眞言。

娜謨囉怛那二合怛囉二合夜耶一句那莫商迦捺嚧底迦二句緇反九囀曇穆穆句緇置坭十句四迦上彈野緇置坭

五去二嚩訶六句莎合

先づ此母の眞言を誦して能く本尊を衛れば、能く衆罪を鋤き、諸の災障を除いて、悉地の門と而も相應することを制ん。但佛部の忙鏖鷄の眞言を誦せば、亦二部に通ず、初後

【若し本法に於て等】二に念誦の雜法則を明す。中に四、初に應隨本法先誦を明す。

【若は本部の尊主等】二に結護雜法則を明す。

に持誦せば、諸天衞を增す。若し本法に於て而も已に說かば、持誦の時に先づ此を念ぜば、本法に隨つて之を念誦すべし。或は本法に於て獨勝の眞言有らば亦應に先づ誦すべし。繁別すること無くば、上の所說の供養の次第の如し。乃至除穢し護淨し結界せよ。一切等の事に、初に持誦せん時、及び作法せん時、扇底迦等の所作の事の時に、皆應に之を作すべし。若は本部の尊主の眞言を以てし、或は本部の心眞言を以てし、或は一切の眞言王の眞言を以てし、或は蘇悉地の法王の眞言を以てし、或は一切の事の眞言を以てせよ。此五種の眞言は三部に遍く有り。隨つて諸事を作さんには各本部に於て、應に其一を取りて用て之を作すべし。謂ゆる自護し及び同伴を護し、請召し、灑水し、潔淨し、結界し、法を以て相治するに、眞言具らずとも力を增さんが爲の故に、治罰の眞言たるが故に、覺を發かんが爲の故に、及び餘の諸事に述べざる所は、亦當部の五の眞言の中を以て、隨つて其一を取つて、以て之を用ひよ。當に悉地を得べき部心の眞言は、能く本尊を護し、及び己身を護す。護身の時には應に三遍、或は復七遍を誦すべし。其頂髮を結して一髻に作れ。若し出家の人ならば、袈裟の角を結べ。或は線索を結んで持繫して身を護れ。或は頭指を眞言して、遍く五處に點ぜよ。亦護身を成ず。謂ゆる頂と額と兩と髆と咽の下と心の上となり。或は牛黃、或は白芥子、或は閼伽水を以て、隨つて其一を取り、而も用て護身せよ。若し阿毘遮嚕迦の法を作さば、應に部の尊主の眞言を用て自身を護すべし。若し扇底迦の法を作さば、應に忿怒金剛の眞言を用て之を護すべし。若し補瑟徵迦の法を作さば、

【但諸事を作さん時等】怖を除かん爲の故に但部尊主眞言を用ふ、若し諸事を作さば其旨然らざるなり。

【四】三に攝心念誦雜法則を明す。【念誦の人等】廣く法則を說く、內に五あり、初に行人所坐の座を明す。

應に部の尊主の眞言、及び忿怒金剛の眞言を用て、兼ねて之を護すべし。若し眞言主現ぜん時、持誦の人怖れなば、應に部の尊主の眞言を用ひ、用て自身を護すべし。但諸事を作さん時には、常に二の眞言を以て自身を護せよ。謂く、部の尊主及び忿怒の眞言なり。念誦了らん時には應當に發遣すべし。發遣の時には、彼眞言主を護し、或は部の尊主の眞言、或は部母を用ひ、或は部心を以て、亦自身を護して而して作すこと意に隨ふべし。若し穢處不淨等の處に於けるも事に緣つて往くべくは、先づ烏樞瑟摩の眞言を誦して印を作し、五處を印持して意に任せて往け。仍し須らく常に眞言を誦して廢忘することを得ざるべし。澡浴の時には、先づ伏障の眞言を誦して護身し、乃至浴し了るまで應に廢忘すべからず。伏障の眞言とは、忿怒甘露軍荼利なり。食を喫はん時には、部の尊主の眞言を用て護身し念持せよ。臥さんと欲せん時には、部母の眞言を用て護身せよ。若し諸の法を作さんに、遂に乃ち護持の法則を作すことを忘れなば、魔をして興らしむ。魔を除かんと欲するが故に、速に應に當部の明王の眞言を誦持して自身を將護すべし。一切の魔障其便を得ず。

(四)上の如く備に、護身結界及び餘の法を作し已りて、然る後に心を攝して安祥として念誦せよ。念誦の人の所坐の座には、青茅草を以て而も其座を作れ。座の高さは四指、闊は二磔手、長は十六指なり。是の如く、座は初めて念誦する時、及び持誦の時も皆應に受用すべし。或は迦奢草を用ひ、或は餘の青草等を用ひ、或は部の法に隨つて、乳樹木を取るを最も要妙と爲す。用て床座に作る。量も亦上の如くして淨く削り治ひ、或は諸葉を用

【五】次に讃歎を明す。是れ初問の云誦何偈眞言に答ふるなり。
【大慈救世の尊等】初一偈は佛、次は法、僧、觀自在、明王大威金剛を歎ず
【眞如捨摩の法】眞如とは自性清淨の義、捨摩とは寂靜と譯す。
【能く種種の福を生ず】若し一たび名を稱すれば、無量の苦を拔き、大無[illegible]の[illegible]を與ふる故、

て、或は枝葉を以て上の如く雨も制し、隨つて事法を觀じて枝葉を取りて、用て座とせよ。座の上に結跏趺坐して、屈底迦の上成就の法を作し、半跏趺坐して補瑟徵迦の中成就の法を作し、兩足を垂れ、坐して阿毘遮嚕迦の下成就の法を作し、供を作せ。

(五)供養旣に了らず、應に誠心を起して、佛を讃歎し、次に法僧を歎じ、次に觀自在を歎じ、次に明王大威金剛を歎ずべし。伽他に曰はく、

大慈救世の尊は、善く一切衆を導き
福もて功德海を滿したまふ、我今稽首して禮したてまつる
眞如捨摩の法は、能く貪瞋の毒を淨め
善く諸の惡趣を除きたまふ、我今稽首して禮したてまつる
得法解脫の僧は、善く諸の學地に住せる勝上の
福德田なり、我今稽首し禮したてまつる
大悲觀自在は、一切の佛讃歎し
能く種種の福を生じたまふ、我今稽首し禮したてまつる
大力忿怒の身は、善い哉持明の王として
難伏の者を降伏したまふ、我今稽首し禮したてまつる

是處讃を作して佛菩薩を讃じ、又復掌を合せ慇重の心を起して、餘の諸の佛菩薩の相好の功德を讃ぜよ。其讃歎の文は應に諸佛菩薩の所說の歎偈を用ふべし。當に自ら讃歎

【六】三に懺悔を明す。分けて五、初に諸罪を懺悔するを明す。【至誠の心を起し等】二に三寶に歸命す。

【歡喜踊躍等】三に菩提心を發す。【世間】分段、變易の二世間。【我過現未來等】四に廻向を明す。【正路に歸す】無上の因、妙果に昇るは無上の果なり。此廻向の善は有情を利して但に世樂を受けしむるのみに非ず、同じく共に無上涅槃因果の樂を得しむとなり。

を作るべからず。

(六)既に已りなば、至誠の心を起して諸罪を懺悔せよ。我今十方世界の諸佛世尊と、羅漢聖僧と、及び諸の菩薩とを歸命したてまつる。我等を證知せよ。過去より今生に及ぶまで、煩惱に心を覆はれて久しく生死に流れ、貪瞋癡に覆はれて諸の惡業を造れり。或は佛法と菩薩と聖僧と父母と尊處と一切衆生の有德と無德とに於て、如上の處に於て造る所の諸惡一切の罪業あらん。自作教他し、見作隨喜して、身口意業に廣く諸罪を聚む。今諸佛菩薩に對して誠心を以て所造の衆罪を懺悔す。諸佛の知りたまふ如く並に皆懺悔す。至誠の心を起して盡形までに、佛と法と僧寶と涅槃の正路とに歸命したてまつる。衆生の一切の苦を除かんが爲の故に、三寶に歸命したてまつる。是の如く歸依し、頭頂を以て禮し已りて、歡喜踊躍して、菩提心を發し、勝上解脫の甘露悉地の佛果を求む。世間の衆生は無量の諸苦あり。我當に救度して惡趣を離れしめ、諸の煩惱を除き、解脫を得しむべし。所有の衆苦種種に窮迫す。今大悲を起し、菩提心を發して、苦の衆生の爲に而も歸依と作り、無主の衆生には爲に歸主と作り、失路の衆生には爲に導師と作り、恐怖の衆生には爲に無畏と作り、苦惱の衆生には爲に安樂を得しめん。衆生の煩惱をば我爲に除滅せん。我過現未來從り發す所の勝心もて諸の善業の六波羅蜜一切の功德を修し、盡く皆一切衆生に廻施して正路に歸し、同じく妙果に昇り、速に佛道を成ぜん。乃し菩提に至るまで懈怠を生ぜじ。菩提心を發し、衆生を悲念し、大慈心を起さん。彼衆苦有り、何れの時に

【又過現の等】五に勝願を發するを明す。總じて六願を擧ぐ。

【七】廣く法則を明す中、初に數珠の法則を明す。

か除滅せん。心を淨めんが爲の故に、常に六念を持し、心一境に住して散亂せざれ。應に我執すべからず。又過現の諸佛の願を發すが如く、應に發願の如く諸の淨業を生すべし。願くば衆生と與に諸德を成就せん。復願くば過現所生の功德をば、願くば一切衆生に與へて無盡の財を獲しめん。復能く捨施し、智慧を增益して大忍辱を成じ、常に善品を修して宿命智を識り、心に大悲を懷かん。願くば諸の生類の所生の處に如上の事を具せんと。

（七）次に應に合掌して、本部の尊主を頂禮し、明王を憶念すべし。次に法則に依りて諸の事業を作さば、先づ右の手を以て數珠を取り、左の手の中に置き合掌して之を捧げ、明王を思念し、珠を數へて眞言を誦せよ。

佛部の淨珠の眞言。

唵同上呼一句　遏部羝弭惹曳二句　悉睇悉馱刺梯三句　莎去二合嚩訶四句

蓮華部の淨珠の眞言。

唵同上呼一句　阿上密栗諸反都浪魚迦反久音二句　伽迦字居邏反米句　室唎曳三句　室唎摩里捉四句　莎去二合嚩訶五句

金剛部の淨珠の眞言。

唵同上呼一句　枯嚧枯嚧二句　嫪彈舌呼寧壹反　曬抳三句　莎去二合嚩訶四句

右の手の大指を以て無名指の頭を捻ぜよ。直く中指小指を舒べて、微し屈して、頭指を以て中指の上節の側を押す。左の手も亦然なり。

右の手に念珠を掐ることとは、一切に通じて用ひよ。若し阿毘遮嚕迦には、其母指を竪て、數珠を捻ずる印なり。菩提子の珠をば佛部に用ひ、蓮華子の珠は觀音部に用ひ、嚕梛囉叉子の珠は金剛部に用ふ。三部に各〻の此等の數珠を用ふるを最も勝上と爲す。一切の念誦に應當に執持すべし。或は木槵子、或は多羅樹子を用ひ、或は土珠を用ひ、或は螺珠を用ひ、或は水精を用ひ、或は眞珠を用ひ、或は牙珠を用ひ、或は赤珠、或は諸〻の摩尼珠を用ひ、或は咽珠或は餘の草の子を各〻部に隨つて其色類を觀て取りて應に念持すべし。若し阿毘遮嚕迦の法を作さんには應に諸〻の骨を用ふべし。而も數珠に依りて速に成就を得。復護持して法驗を增さんが爲の故なり。

佛部の持珠の眞言。

唵同上呼一句　那謨皤伽上嚩底二句　悉睇睇三句　婆去駄野四句　悉駄剌揥五句　莎去二合嚩訶六句

蓮華部の持珠の眞言。

唵同上呼一句　素蘇古反悉底丁以反室唎曳二句　鉢頭途邑反二句　麼摩理抳三句　莎去二合嚩訶四句

金剛部の持珠の眞言。

唵同上呼一句　跛日囉二句　闡旦惹曳三句　莎去二合嚩訶四句

前の珠印を用て、各〻部中に依りて、之を念誦せよ。念誦の時は珠を當心に置いて、高下することを得ざれ。數珠を捧げん時は、微小く頭を低れて至誠の心を以て三寶を頂禮せよ。次に八大菩薩を禮し、次に明王の眷屬を禮せよ。

【一切の念誦に等】若し陀羅尼を修し諸如來菩薩の名を念ぜば、當に無量の勝功德を獲、所求の勝願皆成就を得べきなり。

【八】次に正しく念數の法則を明す

【九】念誦雜法則を明す中、第四に諸事を教授するを明す。中に十八對を擧ぐ、今一に字旨字數對。

【唵字及び曩塞迦嚕の字】是れ寂災の義、亦增益を兼ぬ

【吽柿吒の字】降伏の義。

【其部類を觀ずべし等】二に三品十分對。

【勝上の心を作して等】若し細に部類差別を觀じて念誦を作すと雖も、遍數足らざれば悉地則し難き故にいふ。

【初めて持誦せん時等】三に定數定事對。

(八)次に應に眞言を持誦すべし。眞言主を想ふことは目前に對するが如くせよ。是の如く誠を傾して應に散亂して、心に別境を緣すべからず。

(九)但し諸の眞言の初に、唵字及び曩上塞迦去嚕の字あらば、應に靜心の中に扇底迦の念誦を作すべし。補瑟徵迦の念誦には皆應に緩く誦すべし。或は心に念誦せよ。或は眞言有りて後に吽柿吒の字有らば、當に知るべし、皆應に忿の聲を殺作して、阿毘遮嚕迦の念誦、及び餘の忿怒の念誦を作すべし。三部の眞言は應に字數の多少を看るべし。字に十五有るは應に十五落叉遍を誦すべし。字に三十二有らば、應に三落叉を誦すべし。此數に過ぐるは應に七千遍已上を誦すべし。初に之を誦せん時は、如上の數を滿し、其部類を觀ぜよ。或は上中下、或は三種の事、或は聖者の說か、爲天の所說か、爲地居天の說かと觀じて細に部類を觀、當に之を誦持して乃し成就に至るべし。是の如く初めて誦せんに、若し先づ誦して遍く念持を滿せざれば、所求の下法も尚成ずることを得ず。況んや上中の悉地成就を求むるをや。是義を以ての故に、勝上の心を作して先づ念誦せよ。但し諸の眞言初に誦持せん時に、已に先の說の如く、誦持の遍數分ちて十分に爲し、然る後念誦せよ。既に滿じなば眞言主に悉地の因緣を祈請せよ。初に相貌無くば、復頭より第二第三の祈請を作せ。若し相貌あらば即ち當に法に依りて眞言を念誦すべし。若し警界無くば棄てて應に誦すべからず。祈請の法則は請召の法と同じ、祈請の時其夢の中に於て眞言主面を背いて去り、或は與に語らずと見ば、應當に更に須らく起首して念誦すべし。是の如く再三せよ。

【持誦の人は等】四に誡作勸作對。

若し夢中に於て眞言主と與に語ると見ば、當に知るべし、此人は久しからずして成就せん。若し警界無くば應に誦持すべからず。若し强ひて念持せば恐らくは人に禍を與へん。初めて持誦せん時は、淨密の處に於て起首し、誦持して初日より誦持し、乃し疲極に至るまで、遍數の多少一ら須らく定に依るべく應に加減すべからず。先づ三時の念誦の法を說かば、晝日の初分と後分と此二時に於て應當に持誦すべし。中分の時は加ふるに澡浴を以てして諸の善業を造せ。夜の三時に於けるも亦上に同じ。中分の間は消息の事あり。夜中の時に於て持誦して、阿毘遮嚕迦の法、安憺駄羅の法、起米多羅法を作せ。夜分に於て作すを說いて勝上と爲す。若は晝は念誦し、夜は護摩を作せ。若は夜持誦し、晝護摩を作せ。多く諸藥を具へて、念誦の前に而も護摩を作せ。持誦し了りて、後に復護摩を作せ。若し能く是の如くするを、最も其上と爲す。前の如く、先づ所說の團食を出して、應に護摩を作すべし。前後を問ふこと無く、恆に此法に依りて、念誦し護摩せよ。或は法の中に於て但護摩を作して成ずることを得る者は、當に知るべし、亦須らく眞言を念誦すべきことを。若し是の如くせば、諸明歡喜して法驗成じ易し。持誦の人は瞋怒を生ぜざれ、欲樂を求めざれ。應に自ら下るべからず。倦をも勤めて勞苦せざれ。恐れを生ぜざれ。過ぎて勤求せざれ。輕慢を生ぜざれ。念誦の時異語を作さざれ。身疲極すと雖も、之を縱放せざれ。諸の苦邪を制して、世間の談話皆思念せざれ。本尊を捨てざれ。縱ひ奇相を見るとも、應に之を怪しむべからず。念誦の時は、亦種種の相を分別せざれ。持誦了らん時は、應に

【正念誦の時等】五に息忘勤慎對。
【三時に念誦せよ等】六に一例三澤對、
【或に三衣を具す等】七に備衣奉鉢對、
【既に萎花を除いては等】八に積功累德對、
【先づ承事の眞言等】九に無間諸攝對、

部の尊主の眞言を誦すべし。或は部母の眞言を誦せよ。此眞言を誦して、當に衞護を得べし。部の法に違ふことなかれ。本法に依りて念誦し了已れ。或は本數に過ぐとも、亦畏るる所無かれ。應に誠心を起し、祈請を作して云ふべし。我本法に依りて念誦の數滿ず。唯願くば尊者領受して證を爲し、其夢中に於て爲に敎誨を授けたまへ。正念誦の時、若し謦欬呿洗吹呿して、眞言の字を忘るることあらば、卽ち起ちて水に就いて灑淨の法を作せ。縱ひ數珠を搯つて、一を欠いて匝らさんと欲せんに、斯病至ること有らば、灑淨し訖已りて、還つて首より念ぜよ。障隔せられなば、爲に須らく一一に皆始より心に念ずべし。數珠を搯つて、將に畢らんとする時には、禮を申べて一拜し、終りて復始めよ。又一禮を畫像の前に申べよ。或は塔の前に於てし、或は座所に於てす。念誦の處に隨つて數珠一匝しては、一たび尊顏を覩て一禮を作せ。念誦了已りなば心を淨處に安じ、或は眞言及び其尊主を想うて三時に念誦せよ、但し初中後誠心に遍數の多少を作意して、皆一類に例して增さず、減さざれ。三時に澡浴し、三時に地を塗り、花香水種種の供養を獻る。萎める花を除去し、隨に三衣を具すべし。又內衣をば、一日三時に洗濯せよ。其衣乾燥せば、香に熏じ灑淨せよ。一一の時の中に隨つて、一を作すことを聽す。別に睡衣及以浴衣を置け。此三時に於て內衣を替換し、日別に一たび洗へ。其衣乾燥せば熏灑を以てするを聽す。尊に獻ずる鉢器は三時に洗滌せよ。既に萎花を除いては、續いて新しきものを置け。三時に、常に大乘般若等の經を讀み、及び制多を作り、曼荼羅を塗れ。先づ承事の眞言を誦せよ。

【若し八大靈塔に等】十に上處上時上し

【或は師主の處等】十一に靈彼易彼對

【先づ承事せん時等】十二に備供除障時し

既に了りて請祈未だ得ざれども、中に於て廢闕することを得ざれ。一時二時乃至一響に應當に念誦すべし。間斷することを得ざれ。若し魔障著いて身心を擠擾するときは、則ち精誠ならず。便ち常に放逸し、身心疲勞し、時節に違し、法則に依らず。或時に浴せずして、持念誦及以護摩を作したるは、應に數と作すべからず。心を攝して行を用ひ、法に依りて念誦せよ。其れ此數は、應に記して數とすべし。護摩を作さん時、念誦の時、請召の時、此三事の中に有ゆる眞言の遍數、一一皆須らく法に依りて、數を滿つべし。縱ひ數滿せんと欲せんに、一を缺き、未だ了らざるに、而も障起ること有らば、更に頭より數へよ。若し法に依らずして作すときは、皆成ぜず。若し法に依りて曼荼羅を作すこと有らん時、或は日月蝕の時、此二時に於ては法を加へて念誦せよ。其福增高にして、久しからずして成就せんこと疑有ること無し。若は八大靈塔に於てし、或は過去の諸佛の菩薩の行じたまひし處に於てせよ。最も勝上と爲す。或は正月十五日の時に於てするを亦勝時と爲す。或は師主の處に於て眞言を受けんには、先づ承事を經て便ち當に念持すべし。久しからずして速に成ず。或は夢中に於て眞言の主、而も指授したまふと見ば、彼法則に依りて亦速に成就せん。彼念誦の人、供養をして增加し、處所尊勝なり。或は當に時に分に更に精誠を加へば、其數未だ滿ざれども、唯此れ勝れるが故に、眞言主悅んで、而して成就を賜へ。當に知るべし、此法は悉地速なりと雖も、久しからずして當に壞すべし。是義を以ての故に、先づ承事し了りて得る所の者、說いて堅固と爲す、先づ承事せん時には、

【善事業】日塔日佛等のこと。

【或は法の中等】十三に上悉下應對

【先づ承事了りて等】十四に如供增念對。

【復先づ求願し等】十五に夢警現罰對

應に廣く供養すべし。日月の蝕のとき、八月十四日十五日に於て、復加へて諸の神仙樂に獻供せんこと、餘部に說けるが如し。前等の日に、諸の善事業齋戒等の事を加へよ。是日に、復加へて不明の眞言主を獻供せよ。瓶に香水を盛りて花枝を挿み垂れ。或は、閼伽の器を取りて、甘露軍荼利の眞言を用て之を眞言し、自ら其頂に灌いで能く魔障を除け、或は其日に於て諸の飲食を獻じ、曼荼羅を塗り、及以護摩し、燃燈等の供並に須らく之を加ふべし。或は法の中に、但持誦して自然に驗の見はることを說くは、前に張る所の像舍利塔等忽然として搖動し、或は光焰の出づるは、當に知るべし、久しからずして速に成就を得ん時に、何の相貌か有る。謂ゆる身輕く病苦永く除き、勝慧を增益して、心に提る所無く、身に威光現れ、勇健增益し、夜夢に當に淸淨の實事を見、心恆に安泰ならん。誦念の時、及び事業を作すに於て疲倦を生ぜずして、身より奇香を出し、或は勇施を行じ、尊の德を欽敬して、眞言主に於て深く敬仰を生ぜん。成就の時に、如し上の事を現ぜば、當に知るべし、即ち是れ成就の相貌なりと。先づ承事了りて、法則に依りて本尊を供養し、應に獻供を加へ、及以護摩すべし。先づ承事の法、數に依りて既に了りて、次に應に須らく悉地の念誦を作すべし。復先づ求願し其夢中に於て警界を希ふべし。先の承事の法を作す時に念誦せし所の處にして、悉地の念誦を作せ。應に處を移すべからず。諸の難事有りて移し去らん者は、所住の處に至りて、復須らく先づ承事の法則を作して、然る後に乃ち悉地の念誦を作すべし。若し前に依らずして念誦せば應に治罰を作すべし。部

【正念誦の時等】十六に懺過罰過對

【半月半日に等】十七に内服外臟對

の尊主の眞言を取りて、一千遍を誦せよ。或時は本持の眞言を念誦して、十萬遍を經よ。若し此を離れては、還つて前の說の如く、先づ承事を作せ。正念誦の時に、忽然に錯誤して餘の眞言を誦せば、旣に錯誤なりと知りて、誠心を以て過を懺せよ。放逸に由るが故に、斯錯誤を致す。願くば尊過を捨したまへ。便ち頂禮を申べて、復須らく始めよ。之を念誦すべし。忽に穢處に於て、心放逸にして故に本眞言を誦せば、便ち自ら覺り已りて、應に治罰を須ふべし。持誦の處に至りて、部の尊主の眞言を誦ずること七遍せよ。半月半日に一日食せざれ。次に五淨を服せよ。五淨の眞言を誦ずること百八遍を經て、然る後に之を服せよ。此五淨を服するときは、半月の中に食する所の穢惡の食、當に淸淨なることを得て、眞言力を增すべし。

佛部の五淨の眞言に曰はく、

曩謨婆誐嚩上帝丁以反一 烏瑟膩沙上野二 弭秫駄反 徒睇三 弭囉惹反 而曳 始米四 扇底迦曬五 莎去二合 訶六

蓮華部の五淨の眞言。

曩謨囉怛二合曩二合怛囉二合夜野一 曩莫阿上哩野二 嚩路枳諦濕嚩囉野三 菩提薩埵野四 摩訶薩埵野五 摩訶迦嚕抳迦野六 唵七 阿上 野輸去 馱反八 泥二合 而曳去二 莎訶九

金剛部の五淨の眞言。

曩謨囉怛二合曩二合怛囉二合夜野一 曩謨室戰拏嚩日囉播拏曳二 摩訶藥乞灑細那鉢多曳三 唵四 阿上

【若し念誦の時等】十八に數設數增對

【一】結、

【増威品】云何試眞言に答へて、香水を身に着し、諸の供養を加へ、以れて護摩を作し、威驗を増益し、所持の眞言を速に成就するを明す。

始藥始藥五摩字一摩黎鉢曇瞇六鉢曇嚩婆合去二薄稷七諦制反而曳諦饒反照薄底八鉢曇縛薄底丁以反去二薄訶十反九潑合

黄牛の乳酪蘇糞尿を取りて、各別に眞言して百八遍を經、和して一處に置いて、復百八遍し、波羅捨を以て中に之を盛れ、或は諸の乳樹の葉、或は闊伽の器にせよ。復茅草を以て攪いて眞言を誦ずること一百八遍を經て、後に面を東に向け、蹲踞して坐し、頓に三合を啜す。是の如く三度、藥の升合の如くせよ。之を啜する時に當つて、應に語を致すべからず。念誦の時に像蠢蠕を現ぜば、先づ應に簡擇すべし。即ち部の尊主の眞言を誦し及び印せよ。若し是れ魔の作ならば、自然に退かん。或は語言を出すこと、本法と異らば、當に知るべし、魔の作なりと。或は語言を出し、悪事を作せと勸めば、亦是れ魔の作なり。若し惡夢を見ば、即ち須らく先づ部母の眞言を誦して一百八遍を經べし。若し先に部母の眞言を誦せずんば、念誦すべからず。若し念誦の時に、其數減少ならば、應に休止すべからず。若し増するは過無し。

上の所説の念誦の次第の如く、皆須らく之に依るべし。若し此法に異にして、悉地を求めんと擬すとも得べからざるなり。

蘇悉地羯羅經増威品第二十一

【一】正しく增成の法を明す。分けて三、初に增成の法を明す。
【字數の多少を觀ず】字數若し多くば其遍數を減じ、若し少くば其遍數を增して之を加持するなり。
【二】二に法則を作すに依りて眞言增成を明す。
【三】三に重ねて法則を作すを明す

復次に、今神驗を增益し歡喜せしめて所持の眞言、而も速に成就することを說かん。先づ香水を具へて身首を澡浴し、上の時日に於て諸の供養を施へよ。復蘇摩那花一百八枚を取れ。一一の花を取りて、眞言を誦ずること二十一遍を經、或は七遍を經、或時は三遍せよ。先づ眞言の字數の多少を觀じて、之を念誦して本尊に奉獻し、次に塗香及以燒香の奇なる香氣の者を獻じ、復飮食を獻ず。先に陳說するが如く、加ふるに砂糖及び蘇を以てせよ。復護摩を作すに、木を燒くこと一百八枚なり。木は量を過さざれ。次に乳酪を用て蜜に和して、護摩一百八遍せよ。次に蘇と蜜とを用て、粳米の飯に和して一百八遍して、而も護摩を作せ。此三たびの護摩は三七日、或は一七日、或は復五日、或は復三晨を經よ。此三の時に了りなば、更に乳粥を取りて和するに牛蘇を以てし、一百八遍して復護摩を作すべし。此れ既に終了なば、閼伽の器を取りて誦ずるに眞言を以て一百八遍を經、少水を傾け、致して護摩を作せ。

(二)此等の法を作さば、眞言驗を增さん。而く、異の眞言をば、其驗を劫奪して、自ら增益を得。或は眞言を損益し、或は羅殺せられて、眞言行せざらん。或は眞言に繫縛せられ、或は異の眞言邏相に交雜し、或は眞言の字缺け、或は眞言の字增す。上の如く等の患、盡く皆除去して、驗を增すことを得ん。

(三)諸の護摩の中に說く所の藥草、隨つて其一を取り、一日夜を經て護摩を作せ。眞言主歡喜して驗を增すことを得ん。復諸香を取り、和して香泥に作し、本尊の形に作りて供養

【眞言主歡喜】眞言は法然道理なれば愛喜のことなきも違せば罪を得、順へば福を獲れば今且く獲福の義に隨ふのみ。

【上の次第等】總結。

【本尊灌頂品】眞言主をして威德を增加せしむる故、灌頂を作す故にいふ。即ち云何灌頂に答ふるなり。

【一】灌頂を明す

底花を獻じ、樹膠香或は堅木香を燒け。一日三時に眞言を以て一百八遍を誦ずれば、眞言主歡喜して威を增すことを得。尊形を作りて荷葉の上、或は芭蕉の葉、或は乳樹の葉、或は諸草の葉に置け。直に晝日のみに非ず。夜も亦之を獻ぜよ。法事了らん時には、法の如く發遣して大河に送り置け。上の次第の如く、此法則に依りて作さば、本尊歡喜して速に悉地を賜はん。

蘇悉地羯羅經本尊灌頂品第二十二

復次に先づ承事すること了りて、若し眞言主をして威德を增加せんと欲するが故に、應に之を灌ぐべし。

（一）取るに金の瓶或は銀銅等、或は新しき瓦の瓶を以て香水を盛滿し、五寶と花と菓と香と五種の穀子と種種の塗香と、或は堅香の末とを置け。新しき綵帛を以て其瓶の頸に繫け、諸の鞞樹の枝、或は乳樹の枝を挿み、部の尊主の眞言を用ひ、或は部母の眞言を用ひて眞言すること百八遍して、然る後に其眞言主の頂に灌げ、應に金を用て作り、或は沈檀を以て其形を作り、座の上に置いて之を灌頂すべし。灌頂既に了らば、復當に花香等の物を獻供すべし。或は諸の瓔珞種種の供具之を供養し、及び護摩を作し、並に念誦を加へよ。是の如く作さん者は、能く本尊をして威力を增加せしめ、速に悉地を得ん。

【二】次に先承事の灌頂を明す。

【祈請品】上好の時日に澡浴清淨し、諸の垢穢を除き、廣く供物を設けて、眞言主に獻じ、前相所求の願を祈請せば速に成就を得ん即ち云何當受付に答ふ、受付に二義ある中今品は、眞言主に祈請して其分付を受得して念誦法を作すなり。

【二】祈請法則の廣說。

(二)先承事の者念誦を作さん時、應に本尊に灌ぐべし。閼伽器を取らんにも、本尊を標想して之を灌頂せよ。或は自ら浴し了らん時、復應に本眞言主を想念して、三度七度而も之に灌頂すべし。先承事の時廢忘すべからず。或時には乳を用ひ、或時には蘇を用ひ、或時には蜜を用ひ、瓶の中に盛滿し、内に七寶を置き、如法に執持して本尊の頂に灌げ。所祈の願速に滿足することを得。

蘇悉地羯羅經祈請品第二十三

復次に廣く祈請の法則を說かん。(一)白黑の二つの月の八日、十四日、十五日、或は日月蝕の時に於て、一日食せず、或は三日を經、或は七日を經、澡浴清淨にして新淨の衣を着せよ。此晨日を離れて祈請せんには、應に白月を用ひ、扇底迦の眞言を誦じて之を祈請すべし。後に幕間に於て諸の湯水を以てし、及び眞言を用て澡浴清淨にして、諸の垢穢を除き、五處を灑霑せよ。如法に本眞言主を供養し、復閼伽を獻じて、眞言一百八遍を加誦し、闍底花の未だ大いに開かざるものを用て、栴檀香水を灑ぎ、持ちて之を奉獻せよ。又廣く食を獻ぜよ。烏那去梨食と名く。食の中に酪を加へよ。忙攞底花を以て鬘を作つて供養せよ。先つ牛蘇を取りて護摩を作すこと一百八遍せよ。次に娑折羅婆を用て護摩すること一百八遍、白氎の縷と或は布線の縷とを用て、童女をして索を合さしめ、一たび

【其夢中に於て等】悉地前相を見るを明すに、今四十三相を舉ぐ。

【三】重ねて祈請の法則を說く。

一眞言しては一結し、當に結ぶこと七結すべし。復眞言七遍して、隨つて左の肘の上に繫け、右膝にして臥し眞言主を思念せよ。進止を得已りて、意に隨つて住し、茅座に安置せよ。上に花を敷散して尊形を想念せよ。其夢中に於て、自の部主を見、或は眞言主を見、或は明王を見ば、當に知るべし、此相は成就の相なり。或は三寶を見、或は諸の菩薩を見、或は四衆を見、或は供養を見るは、悉地の相なり。或は自身眞言を誦持して、諸の事等を作すと見、或は身に白淨の衣服を著すと見、或は他來りて恭敬し供養すと見るは、當に知るべし、勝上の悉地、纔に近づきぬ。或は山峯の上に登ると見、或は象に乘ると見、或は大河海を渡ると見、或は菓樹の上に昇ると見、或は師子に乘ずと見、或は牛鹿馬諸餘等に乘り、或は鵝鶴孔雀一切の飛禽に乘り、或は美女の身に瓔珞を被、手に花瓶を持し、或は香花臺もて開道し、行道すと見、或は象馬車乘、諸の寶物等を受得すと見る。是等の相を見るは、悉地の相なり。或は夢は花菓根牛蘇乳酪稻花等の物の所成就の藥を得るは、悉地の相なり。先づ承事せん時には、夢に成就の藥を示し、及び數珠を得る、是相を得る者は、當に知るべし、卽ち須らく便ち持誦の法を作すべきを、或は自身を薰馥すと見、或は澡浴清淨なりと見、或は身に瓔珞を帶すと見る。是相を見已らば、便ち持誦を作せ。當に速に悉地すべし。

(三)持誦の法を作さんには、闍底花一百八枚を取りて、部母の眞言と本眞言とを兼ね和して一百八遍を誦し、而して之を供養せよ。復白梅檀香を取りて眞言百遍せよ。是の如く祈請

し、意に隨つて臥せ。夢に本眞言主自ら當に相を現ずべし。又烏施囉葉を取りて搗き和げて眞言主の形像を作り、烏里弭迦と蟻の土とを和して其器を作り、牛乳を滿ち盛り像を乳の中に置け。或は蘇と乳と蜜とを用て和して器の中に置き、像を中に置いて誦すること一百八遍して三時に供養せよ。是の如く供養すれば本尊歡喜して、速に相現ずることを得。復白黒の二の月の八日、十四日、十五日、或は日月蝕の日に於て、不食持齋して廣く供養を作し、七の膠香と、及び五の堅香とを以て、一一の香等、一たび眞言を誦じて、一たび護摩を作せ。數一千一百遍を滿ち已りて、祈る所の願、速に前相を見ん。祈請の範則、若し法に依りて作さば、速に成就を得、其相貌を見て疑ふこと有らざるなり。

蘇悉地羯羅經受眞言品第二十四

復次に、廣く眞言を受くる法を説かん。(一)雙膝、地に着け、先づ尊者阿闍梨の處に於て廣く布施を作し、手に妙花を捧げて慇重の心を發し、闍梨の處に於て三遍口づから受けよ。眞言多きは受誦する事を得ず。應に紙葉牛黄を用て之を寫し、受取して隨意に之を誦すべし。先づ曼荼羅に入り已る後、餘時に於て眞言を受けば、良日時に於て、尊者闍梨の處に於て、廣く奉施を作し、前の如く之を受けよ。是の如く正しくして眞言を受けば、速に成ぜん。縱ひ先に承事の法を作さざれども、便即持誦せんに、亦成就を得ん。復新しき瓶の諸の

【七の膠香】乾陀羅娑香、薩闍羅娑香、安悉香、蘇合香、薫陸香、設落翅香、室唎吠瑟吒迦香。

【五の堅香】沈水香、白檀香、紫檀香、娑羅羅香、天木香。

【受眞言品】具に四種持眞言秘術の法則を受得するを明す。即ち前品の受付に同じく、今は二に阿闍梨處に隨つて其分付を受得して念誦法を作すなり。

【一】廣く眞言を受くるの法を説く五に分つ。中今曼荼羅に入つて眞言を受くるの法を明す。

【先づ曼荼羅に入り等】入曼荼羅後餘時に於て眞言を受くるの法を明す。

【若し弟子處に等先に持誦せる眞言を受くるを明す。】

病を離れたるものを以て、諸の花葉七寶五穀を置いて、一一に法の如くせよ。唯水を着けざれ。至誠心を作して廣く供養を作せ。阿闍梨先づ紙葉を取り、諸の眞言主の名を書寫して、瓶の中に置き、莊嚴し供養すること灌頂の法の如くせよ。此法を作す時は、或は一日を經、或は三日を經て、不食齋戒せよ。日暮の間に於て則ち牛黄を以て諸の眞言名號を抄して瓶の中に置いて獻ぜよ。塗香と花と香と燈と食とを以て、幷に本眞言を以て護摩を作すこと百八遍、廣く作勤して聖衆諦に聽きたまへと求めよ。三日を經滿し、其弟子をして先づ淨く身體を洗浴し香馥ならしむ。手に吉祥茅草の指環を著け。眞言を以用て、百八遍を誦して其瓶を眞言し、幷に香を以て薫じ、心を傾けて禮を作し、一葉を取り已りて、復重ねて頂禮せしめよ。是の如くして受くる者は、速に悉地を得ん。若し更に別に諸餘の眞言を誦せば、所受の眞言悉地を退失せん。若し弟子の處に於て、心に歡喜を生じて、自所持の悉地の眞言を授與せん時は、應に軌則に依りて、如法に之を受くべし。先づ誦持の爲の故に、弟子久しからずして當に悉地を得べし。先づ眞言主の處に於て啓請し、陳表して、此眞言を授けよ、斯弟子の與に願くば加被を作し、速に悉地を賜へと手に香花を捧げて一百八遍、或は一千遍を誦し、便ち弟子を呼び來りて、之を授與せよ。復是言を作さく、我今の時に於て、本明主を還して弟子に授與す。唯願くば照知して爲に悉地を作したまへと。弟子も應に言すべし。我今の時に於て已に明王を受けつ。誓つて今日より乃し菩提に至るまで、而も廢忘せじと。上の所說の如くして、師主弟子をして眞言の

【或は復人有り等】四に先承事を受け已つて眞言を了するを明す。

【眞言を受くる等】五に供養承事を明す。

【滿足眞言品】持誦の人、其夢中に於て眞言主の身の諸支分の增加減少を見、或は常に受持する所と異り、或は字數不同なるを見、即ち法に依つて滿足法を作し、其夢中に於て本餘相を示し、眞言字をして增減の失無く、圓滿具足せしむるを明す。即ち云何字得圓に答ふ。【一】夢中所見に依りて受持する所增加味異を知るを明す。

法を受けしめば、當に成就を得べし。此を離れて受けん者は悉地を得ず。此の如くして悉地の眞言を受得せば、中に於て決定して成就せんこと疑無し。先悉地に由らば、先承事せざれ。眞言既に爾なり。悉地藥等の受法も亦然なり。或は復人有り、先承事し已りて、次に合に念持して法則に依りて廻して人に授與すべし。受得する所の者は、先承事せざれども、但念持を作さんに便ち成就することを得ん。眞言を受くることは、悉地の爲の故なり。先づ師主の處に於て、廣く奉施を作せ。花菓諸根名衣上服金銀摩尼、諸の雜寶物、種種の穀麥蘇蜜乳酪男女童僕、種種の臥具奇妙の革履、嚴身の具、已成就の藥、象馬牛犢諸餘の乘等、乃し自身に至るまで、亦持して奉施し僕と爲りて使はれ、久しく承事を經て劬勞を憚からず。合掌虔誠し、珍重して奉施せよ。是の如く施を行ずれば、速に悉地を得、廣く說くこと上の如し、種種の物は、先づ須らく阿闍梨に奉施し已りて、然る後に眞言の妙句を受くべし。

蘇悉地羯羅經滿足眞言品第二十五

(一)復次に持誦の人其夢中に於て、眞言主の身の諸の支分加せりと見ば、應に知るべし、眞言の字の加せるなり。支分の減少せる若きは、應に知るべし、眞言の字の少たるなり。是相を委うし、已りて滿足の法を作せ。或は眞言を受持の者と異にして、或は加し、或は減じ、

【二】二に滿足法を作すを明す。

【空蘇】但蘇を以て供養をなすなり。

【三】三に本尊相を示すの楷定を明す。

【增力品】更に護摩を作し、及び妙好の塗香花等を以て本尊に奉獻し、眞言力をして增加を得しむるを明す。卽ち云何得增益に答ふるなり。

字數不同なりと見、心に便ち疑を生ぜば、應に法に依りて滿足の法を作すべし。

(二)先づ紙葉牛黃を以て錯れる所の眞言を稀ち寫して、如法に明王の眞言を供養し、及び衞護し已りて眞言主の座に置き、復乳木を取ること幷に本法に依れ。但し空蘇を用ひよ。明王師も助を加へたまはんことを求むるが爲の故なり。應に護摩を作さんには、茅草の鋪を佈くべし。先づ部の尊主を禮し、次に部母を禮し、次に諸佛を禮して是の如きの啓を作すべし、唯願くば諸佛、及び諸の聖衆助を加へて衞護したまへと。

(三)是の如く啓し已り、茅草の上に於て頭東に面して臥せ。其夢の中に於て本尊相を示さん。牛黃を以て寫す所の紙葉の上に加有り、減有らん。本尊還りて牛黃を以て題注して、字數滿足したまはん。乃至加減の點畫も、亦皆楷定せん。眞言錯らずば、但錯らずと云はん。或は夢中に於て指受して滿足したまはん。此法を作さん時、作法して衞護せよ。魔を除かんが爲の故なり。

蘇悉地羯羅經增力品第二十六

復次に說く、威力を增加せんと欲せば、應に護摩を作すべし。或は蘇蜜を用ひ、或は時に乳を用ひ各各別に作せ。或は油麻を用て蘇に和して護摩せよ。或は膠香を用て蘇に和して護摩せよ。或は蓮華を用て蘇に和して護摩せよ。或時は窣麥闍囉婆を用ひ、或は山間に

【護摩品】護摩とは焚燒の義、持誦者をして速に悉地をえしめん爲に說く即ち云何作呼摩種々次第法用に答ふ。

【一】護摩法を明す。中初に爐を作り供物を置くを明す。

【二】護摩法を修するを明す。又四に分つ、今初に大抵に約して護摩法を作すを明す。

於て常に五淨を服して餘飡を食せず。本部の花を取り十萬枚に滿ち、一一に眞言して本尊に妙好の塗香、及以香花燃食等を奉獻せよ。各眞言を誦して百八遍を經、一日三時にして三日を經よ。是の如く供養せば、威力を增加せん、或は堅木を用て燈と爲し、一日三時に七日を經ば、能く眞言をして威力を增加せしむ。或時には迦弭迦食を供養せよ。亦威力を增さん。上に說く所の念誦護摩供養の法則の如くせば、亦復能く威力を增加せしむ。

蘇悉地羯羅經護摩品第二十七

復次に廣く護摩の法則を說いて、持誦者をして速に悉地を得しめん。(一)尊像の前に於て護摩の爐を作り、須らく方一肘にすべし、四面に緣を安け。量の深さ半肘にせよ。若し圓爐を作らば、其量准じて然なり。念誦の處は、若し房室に在らば、應に外に出でて尊形を望み見て穿ちて爐を作るべし。其事業に隨ひ、法に依つて之を作れ。乳木等の物及以香花をば右邊に置き、護摩の器皿をば左邊に置き、諸事の眞言を用て諸物等に灑げ。

(二)茅草の座に坐れ。攝心靜慮にして、閼伽を捧持し、明王を啓請して閼伽水を傾けて、少しく爐中に灑ぎ、復一花を以て一たび眞言を誦して眞言主に獻ぜよ。穢を除かんが爲の故に、應に計利吉里の眞言を誦し、幷に手印を作すべし。衞護の爲の故に。軍荼利の眞言を以て水を灑いで淨を作し、乳木を火に燃ぜよ。既に燒火し巳らば、先づ火天を誦せよ。我

【三】二に且らく別に射證等に約して護摩法を作すを明す。

今火天の首を奉請す。天中の仙梵行の宗敬なり。此處に降臨して護摩を受納したまへ。次に請召火天の眞言を誦す。上に同じ火天を召し已りて先づ閼伽水を以て三度灑淨せよ。淨五穀蘇酪等の物を取って誦するに眞言を以てし、三遍護摩して火天を祀り奉る。眞言は上に同じ。火天に食を祀りなば、一心に標想し、火天を迎送して、本座に置け。後に計利吉里の眞言を誦し、并に手印を作って復其火を淨めよ。一切の護摩、皆應に是の如くすべし。次に本尊を請せよ。先づ本尊の眞言一遍を誦して、本座に安住せしめ、法に依りて供養せよ。願くば尊護摩の食を受くることを垂れたまへ。護摩するところの木は、謂く、鉢邏輸木、烏曇摩囉木、鉢攞訖沙木、尼倶陀木、佉他囉木、閼伽木、吠宮訖那木、閼沒囉木、迦濕沒囉也木、閃弭木、阿簸麼唎伽木、閼訖替那木なり。此十二種の木は、枝を取る量の長さ兩指一折にせよ。皆濕潤にして新しく採り得たるものを須ひ、通じて一切の護摩の法に於て條の端直なるものを用ひよ。其上下を觀て、一向に之を置き、香水もて淨く洗ひ、細き頭は外に向け、麁き頭は身に向け、蘇に兩頭を搵して爐內に擲げよ。扇底迦等一一の法を作す時には、各本法に依りて、先づ揣食を出して護摩を作せ。是の如きの軌摸遍く一切に通ず。毎日食を作さん時には、先づ一分の食を出して尊の前に置在て、護摩の時を待つて先づ應に取用すべし。念誦の時に兩手を置くに、雙膝の間に在る如くす。護摩の時も亦應に是の如くすべし。

沈の香木を以て量長さ四指齊頭指の如きを蘇合香に搵して百八護摩せよ、此法深妙にし

て眞言の威を益す、是の如く作す時は、遍く諸部に通ず。或は安悉を用て蘇に和して護摩すること。復百八遍せよ。或時には空にして薩闍囉婆を用ひて、護摩を作すこと一百八遍せよ。皆能く眞言の威力を増益す。眞言の法を成就せんと欲するが爲の故に、諸の護摩を作さんには、先づ部の尊主を請じ、次は本尊を請じて、然る後に法に依りて護摩を作せ。眞言の法を成就せんと欲するが爲の故に、諸の護摩を作さんには、先づ部母の眞言を用ひ、本尊を護衛し、次に自身を護せよ。然る後に法に依りて、乃ち護摩を作せ。眞言の法を成就せんと欲するが爲の故に、諸の護摩を作す。若し法了らん時には、加す眞言の力を増益せんが爲の故に、應當に部心の眞言を念誦すべし。諸の眞言法を成就せんと欲するが爲の故に、諸の護摩を作せ。初の時には皆大杓を須ひ酌んで施せ。了らんと欲する時にも、亦大杓を用ひよ。中間に在りては應に小杓を用ふべし。眞言の法を成就せんと欲するが爲の故に、諸の護摩を作せ。若し法の了る時は、部心の眞言を用て關伽を眞言して、之を供養すること漫拏羅法の中に說く所の如し。護摩の次第の法を作さんことも、亦應に是の如くすべし。先づ阿毘遮嚕迦の法を作し、次に補瑟徵迦の法を作し、次に扇底迦の法を作して護摩了已れば、本持の眞言を用て淨水を眞言し、手を以て遠く遶らして爐中に散灑せよ。是の如く三度の護摩都て了れば、復火天に啓して、重ねて餘供を受けて如法に供養し、退還し發遣して、烈に願ずること請召の法の如くせよ。降臨の字を去りて退還の字を置け。殘餘する所の穀蘇蜜酪等をば、並に一處に和して用て火天に祀れ。眞言三遍

【四】三に念誦を作すを明す。【五】四に都了發遣の法を明す。

【備物品】諸の眞言を成辦せんと爲る所の故に、先づ預め備具し用ふる物類を辨ず。然るに後先承事法を作す及び念誦法を說く。即ち前問中に說く云何等物を以て成就を速能令するなり。答ふるなり。

して護摩を作し、(四)復本眞言の字數の多少を觀じて之を念誦せよ。(五)復供養を作し本尊を護衞し、並に己身を護し如法に發遣せよ。

蘇悉地羯囉經備物品第二十八

復次に廣く諸の成就の支分を說かん、謂く、諸の眞言を成就せんと欲するが故に、先づ當に諸の雜物の分を備辨すべし。然る後應に先承事の法を作すべし。若し已に先承事する者あらば、次いで應に念誦すべし。謂ゆる諸の雜塗香、諸の雜燒香なり。五種の堅香は、謂く、沈水香と、白檀香と、紫檀香と、娑羅羅香と、天木香となり。七膠香は、謂く、乾陀囉娑香と、薩闍囉娑香と、安悉香と、蘇合香と、薰陸香と、設落翅香と、室唎吠瑟吒迦香となり。白芥子と、毒藥の鹽と、黑芥子と、胡麻油と、牛蘇と、銅瓶と、銅椀となり。五穀は大麥と、小麥と、稻穀と、小豆と、胡麻となり。五寶は、謂く、金と銀と眞珠と螺貝と赤珠となり。五藥は、謂く、乾託迦哩藥と勿哩訶底藥と婆訶藥と婆訶提婆藥と毘多擬哩擬哩迦藥蜜となり。五色線は、謂く、靑と黃と赤と白と黑となり。童子をして線を合せしめよ。金剛杵と、燈炷と、燈盞と、瓦椀と、五種の彩色となり。佉他囉木の橛、乳木の枝と、苦練木の椀と、大杓と、小杓と、牛黃と、鑌鐵と、紫檀と、護淨と、線淨となり。浴衣と、黑き鹿皮となり。鉢孕瞿花と、稻穀花と、木履と、冐餌草と、大茅草と、

【成諸物相品】法驗を得已つて相應諸物の相を成就するを明す、卽ち云何成藥相に答ふ。

【成就物の等】凡そ所成就の物は能成に依らざる無く、必ず三部の法に依て悉地を獲得するなり。

【一】正に諸物を成就するの法を說くを明す。二を分つ、中初に七物を成就するの法を明す。

【受持の者に隨て等】上悉地に於て多種あり、或は持明仙を得て空に乘じて遊往し、五通を成就し、或は諸湯藥書を得、或は辟支佛地を得、或は菩薩十地を證し、或は成佛を得、今次且らく其一悉地を擧ぐのみ。

設多布灑波なり迴香是花を採る筐、飲食に緣りて、須ふる所の蘇と蜜と沙糖と石蜜等の物なり。數珠は上の所說の如し。種種の諸物皆預め之を備へ、然る後應當に先承事を作し、及び廣く念誦すべし。

蘇悉地羯囉經成諸物相品第二十九

復次に、我今成就物の此三部の眞言に依る悉地を說かん。

（一）謂ゆる眞陀摩尼と賢瓶と雨寶と伏藏と輪と雌黃と刀と、此等の七の物は上が中の上なり。能く種種の悉地をして福德を成就し增益し、乃至法王の法を成滿せしむ。況んや餘の世事をや。佛部と蓮花部と金剛部との三部の眞言に、皆是の如きの勝上の成就あり。三部の中に於て受持の者に隨つて、具に五通を獲るを上悉地と爲す。言はく、七物とは若し眞陀摩尼を成就せんと欲せん者は、法驗成し已りて當に金臺を作るべし。量は長さ一肘にせよ。或は銀を用て作り莊嚴精細にし、臺の頭に摩尼珠を置け、其珠は紅頗梨の光淨にして、翳無きを用ひよ。或は好き水精を如法に圓に飾れ。此寶を成ぜんには、應に夜に念誦すべし。臺の圖樣を作れ。若し雨寶の法を成就せんと欲せば、法驗成し已りて、但當に誠心を以て五由旬の內に、能く金銀種種の雜寶を雨す。

若し伏藏の法を成就せんと欲せば、法驗成し已りて、但當に誠心に所念の處に隨ふべし。

【二】二に卅八物を成就するの法を明す。

伏藏より金銀諸珍を發起し、貧乏に濟給し、種種に費用すとも、其藏盡くることなし。若し輪仙の法を成就せんと欲せば、鑌鐵を以て輪を作れ。量は圓にして兩指一磔にせよ。輪に六の輻輞を安き、緣は銛利にすべし。是の如く作法せば速に悉地を得ん。若し雌黃の法を成就せんと欲せば、光れる雌黃の日の初めて出でたる色光の如く、亦は融金の色光の如くなるを取れ。是を上好と爲す。若し刀の法を成就せんと欲せば、好鑌の刀を取れ。量は長さ兩肘にせよ。小指を以て齊る、闊さ四指、諸々の瑕病無く、其色紺靑にして桑施鳥の毦の如くせよ。

(三)若し佛頂の法を成就せんと欲せば、當に金を以て佛頂に作ること、猶し畫印の如くすべし、臺の上に安置し、其臺の柱には薩頗胝迦寶を用ひよ。若し蓮華の法を、成就せんと欲せば、金を以て八葉の蓮華を作り、兩指一磔手の量の如くせよ。或は銀を用ひて作り、或は熟銅にて作り、或は白栴檀木にて作れ。若し拔折羅の法を成就せんと欲せば、好鑌鐵を以て拔折羅を作れ。長十六指にして兩の頭に各三股を作れ。或は紫檀木にて作り、或は三の寶にて作れ。謂ゆる金と銀と熟銅となり。若し雄黃の法を成就せんと欲せば、當に雄黃の色の融金の如くなるを取り、塊を分片に成すべし。復上に光有らんもの、是の如くなる、雄黃は能く上事を成ぜん。若し牛黃の法を成就せんと欲せば、當に黃牛の牛黃を取るを上と爲すべし。若し刈哩迦藥を成就せんと欲せば、當に其藥の色金錢花の如きものの上好なるを取るべし。若し素嚕二合多安膳那藥を成就せんと欲せば、蚯蟺の糞の如くなるもの

【取物品】好日を擇んで其所須を取らば、眞言感あつて速に、悉地を得ることを說く。即ち云何受藥相に答ふるなり。

上好なり。若し白氎布を成就せんと欲せば、細軟の者を取りて毛髮を擇び去り、鬱金香を以て之を染めよ。若し護身の線を成就せんと欲せば、白氎の縷を取りて細細にして三を合せて股に爲せ。復三股を以て索に合せ、童女をして合せ撚じて、皆須らく右に合すべし。或は縷の全きを合せよ。若し華鬘の法を成就せんと欲せば、闍底花を取りて鬘に作れ。若し牛糞灰の法を成就せんと欲せば、蘭若に乾ける所の淨き牛糞を取り燒いて白き灰と作し、龍腦香に和して用ひよ。若し木屐の法を成就せんと欲せば、室唎鉢陳尼木を取りて、木屐に作りて上に其蓋を安ずるなり。若し傘蓋の法を成就せんと欲せば、當に孔雀の尾を以て作りて、新しき端しき竹を以て其莖を作るべし。若し弓箭を成就せんと欲せば、槍と矟と獨股と叉と棓と、及び諸の器仗と、世に用ふるものに隨ひ、意に隨つて作れ。若し世間の鞍馬車乘の牛羊一切の鳥獸諸餘の物等を成就せんと欲せば、世人の輩の其に將て上と爲るに隨ひ、意樂に隨つて作れ。或は本法に依て是の如く制作せよ。若し吠多羅を成就せんと欲せば、應に族性の家に生れて、盛年無病にして卒死して體に瘢跡無く、由未だ脹壞せず、諸根具足するを取るべし。是の如きの屍を取りて成就を作せ。意の所作の上中下の法に隨つて、取る所の物も亦復是の如し。心に怖畏無うして方に此法を作すべし。

蘇悉地羯羅經取物品第三十

【淨物品】諸成就物を辨備せば理として洗淨すべし、今洗淨に五淨を以てする、胡麻水を以てする等多種あるを揀ぶるなり、即ち云何淨治藥に答ふ。
【空治いて】乳等と和せず直に末と作すなり

復次に我今取物の法を説かん。白黒の二の月の八日、十四日、十五日、日蝕の時地動の時日、其午の前に於て其物を取れ。念誦の時に於ては警界を得已りて諸物を取れ。或は澡浴清淨にし、不食持齋して、善の警界を求めて諸物を取れ、所説の須物隨方の處所にして、是物有らば、貴貨に就いて價値を讎はずして、諸物を取れ。或時には自ら威力を增加し、飢寒を堪忍して種種の異相を覺らん。爾時に當りて諸物を取れ。其取る所の諸物は、各本性の上中下品に依りて皆好きものを取れ。法の如く得已りて應に精進を加へて成就の法を作すべし。

蘇悉地羯羅經淨物品第三十一

復次に今諸物を淨むる法を説かん。五淨を用て洗へ。應に洗ふべからざる者は五淨を以て之を灑ぎ、諸物の量を觀じて五淨を末に和し、雌黄を乳に和して末に作し、朱砂を牛尿に和して末に作し、牛黄を蘇に和して末に作し、彩色を乳に和して之を調せよ。唯安膳那藥は空治いて末に作れ。刀輪等の物は牛糞水を用て洗へ。餘の所説の者の應に洗ふべき物等をば、先づ牛尿に洗ひ、次に胡麻水に洗ひ、次に香水に洗ひ、諸餘の物等の世に稱用する所をば、應に水に之を洗ふべし。或は香水に洗ひ已りて、次に諸事の眞言水を用て灑淨し、次に部心の眞言水を用て灑淨し、次に部母の眞言水を用て灑淨せよ。但應に洗ふべき

者は、先づ五淨に洗ひ、次に胡麻水に洗ひ、次に香水に洗へ。應に淨むべき所の如きは皆是の如くすべし。

【物量品】所成就物の輕重分數を說く、即ち云何藥量分に答ふ。

蘇悉地羯羅經物量品第三十二

復次に廣く成就物の量を說かん。成就物とは、謂く、身の莊嚴の具たる諸の器仗種種の衣服なり。世の常法に用ふる所の量數の如くして治研し細末して、成就の法を作せ。若し雌黃の法を成就せんと欲せば、五兩を上法と爲し、三兩を中法と爲し、一兩を下法と爲す。若し牛黃の法を成就せんと欲せば、一兩を上法と爲し、半兩を中法と爲し、一分を下法と爲す。若し雄黃の法を成就せんと欲せば、二兩を上法となし。一兩を中法と爲し、半兩を下法と爲す。若し安膳那の法を成就せんと欲せば、三分を上法と爲し、二分を中法と爲し、一分を下法と爲す。若し蘇の法を成就せんと欲せば、七兩を上法と爲し、五兩を中法と爲し、三兩を下法と爲す。若し灰の法を成就せんと欲せば、五兩を上法と爲し、三兩を中法と爲し、二兩を下法と爲す。若し鬱金香の法を成就せんと欲せば、量、雌黃に比せ。安怛陀那の法に於て、種々の丸藥の成就を說くは、其數須らく二十一丸を作るを上法と爲し、十五丸を中法と爲し、七丸を下法と爲すべし。本法の中に於て諸物の量、少くば應に其數を加ふべし。或は都量に依り、或は本法の如くし、或は世に貴ぶ所の量なり。數の多

【都量】前の量數の如きなり。

【灌頂壇品】普く世出世間一切の悉地を得る曼荼羅壇を明す。即ち云何成就、灌頂曼荼羅に答ふるなり。
【一】廣く成就妙法を說くを明す。初に略說。
【悉地の具】所成就の物、并に護摩所用及曼荼羅等なり。
【二】次に廣說、今初に廣く兩曼荼羅を明す。中に五、一に兩曼荼羅方界の肘量を明す。

少亦之に依るべし。應に念誦の功力を觀じ、及び同作の多少を觀ずべし。應當に具に備ふべし。本尊の恩答の境界の許多なるが如く、任に成就すべし。悉地の法に上中下有れば、諸物の數量も亦復是の如し。

蘇悉地羯羅經灌頂壇品第三十三

復次に廣く諸物を成就する秘密の妙法を說いて、悉地を速にせしめん。

(一)若し成就の法を起首せんと欲せば、先づ應に諸の悉地の具を備辨すべし。護摩の法を以て威を本尊と眞言とに加へ、及び自ら灌頂して灌頂の曼荼羅を作せ。如法に供養し灌頂を作し已りて、然る後に起首して成就の法を作せ。若し大灌頂曼荼羅を作さん者は、能く一切の諸事を成就する事を得ん。

(二)前の所說の如く明王の曼荼羅の淨地等の法も、皆應に是の如くすべし、其曼荼羅は須らく方四角にして四門を安置すべし。其量八肘或は七、或は五なり、唯西門を開け。界道の五色は法の如く畫飾して、其臺の量の如くせよ。次の外をば半を減じ、次の外は准じて然せよ。此西面の四肘の外に於て、復一曼荼羅を作れ。其量五肘或は四、或は三なり。唯東門を開け。或は根本の大曼荼羅の如くにして、灌頂の處所は半を減じて作れ。凡そ曼荼羅の地勢は、皆北は下し卸すを說いて吉祥と爲す。但曼荼羅の地勢、北は下し卸す者を

【或は一種の彩色等】二に諸曼荼羅の彩色莊嚴を明す

【凡そ灌頂せん等】三に尊位を安置するを明す。

說いて最勝と爲す。或は一種の彩色を用て之を畫け。四角の外に於て三肘の拔折羅を作れ。中臺の內に於て如法に八葉の蓮華を畫作せよ。諸の曼荼羅も亦應に是の如くすべし。蓮華葉の外に周匝して吉祥の妙印を畫作せよ。四門の中に於て拔折羅を畫け。復諸の角に於て吉祥瓶を安け。外の灌頂の曼荼羅に於ても、亦是の如く作せ。凡そ灌頂せんと欲せば、必ず四種の瓶を置ける所の處を須ひ、並に界の角を衞り持誦する所の眞言、及與明等に隨つて、其臺の內に於て本尊の印を畫き、幷に一の瓶を置け。所持の眞言は其部類に隨つて、本尊の主印を畫け。謂ゆる佛頂と、蓮華と金剛となり。應に知るべし、此法を最も祕密と爲す。所持の眞言、名號を識らず、及び部に貫らざるものには、應に一の瓶を安ずべし。辨諸事と名く。或は成就義利の瓶を安じ、或は一の瓶を安ずるを諸眞言と名く。次の外の東面に佛頂の印を畫け。右邊には部母の印、左邊には部心の印、次の右には鑠底の印、次の左には牙の印、次の右には阿難、次の左には須菩提なり。諸餘の眞言及び明等の印、左右に安置し、乃し兩の角に至る。次の北面に於て觀自在菩薩の印を畫け。右邊には部母の印、左邊には部心の印、次の右には落叉彌の印、次の左には多羅の印、次の右には成就義菩薩の印、次の左には大勢至菩薩の印、諸餘の眞言及び明等の印、左右に安置し、乃し兩角に至る。次に南面に於て金剛の印を畫け。右邊には部母の印、左邊には部心の印、次の右には金剛拳の印、次の左には食金剛の印、次の右には拔折羅の印、次の左には金剛棓の印なり。諸餘の眞言、及び明等の印は、左右に安置し乃し兩角に至る。次に西面の門

【是の如く曼荼羅等】門に護摩供養を作すを明す。

の南に於て、梵王の印及び梵吉祥明王、幷に諸の眷屬を畫せよ。乃至南の角の門の北には、嚕達羅神の印及び妃の印を畫け。幷に諸の眷屬をば、乃至北の角にす。次に第三の曼荼羅の門には、八方神の各眷屬と與なるを畫いて、其位を滿せしむ。第二の曼荼羅の門の門の外に於て、右邊には難陀龍王を畫き、左邊には跋難陀龍王なり。第三の曼荼羅の門の外に於て右邊には孫陀龍王を畫き、左邊には優婆孫陀龍王なり。曼荼羅の外には甘露瓶の印を畫け。是の如く曼荼羅の法を作し、供養せん者は、應に如法に三種の護摩を作すべし。毘那夜迦を遣除せんと欲するが爲の故に、應に阿毘遮嚕迦の事を作すべし。自の利益の爲の故に、應に補瑟徵迦の事を作すべし。諸の災難を息めんが爲の故に、應に扇底迦の事を作すべし。應に當部の成辦諸事の眞言を以て、阿毘遮嚕迦の事を作すべし。或は甘露瓶の眞言を用て三部に通じて用ひよ。應に當部の心明を以て、補瑟徵迦の事を作すべし。應に當部母の明を以て、扇底迦の事を作すべし。曼荼羅所集の聖者と一切の諸天とに於て各各に本眞言を以て三種の護摩を作せ。或は成辦一切事の眞言を以て護摩を作せ。其護摩の處は曼荼羅の南門の東にして作せ。護摩の法の蘇等の諸物の如きは、三事の眞言を以て各祀ること百遍し、或は其數を加へよ。威を諸の眞言に加へんと欲するが爲の故に、應に是の如く三種の護摩を作すべし。次に三部の諸の眞言等の爲に、各祀ること七遍せよ。其三部の主には、應に數を加へて祀るべし。或は但三部、各祀ること百遍し、如し辦ぜざらん者は七遍し、三遍して亦滿足することを得ん。所持の眞言主は、臺の曼荼羅

【法の如くに諸の眞言等】五に灌頂法を修するを明す

【第四】其臺内の瓶東北と東南、本尊前の瓶、是第四なり、餘のことは、西北と西南、軍荼利瓶なり。

の内の部尊の下に於て安置す。曼荼羅の外の東面に於て、別に訶利帝母を安じ、南面には輪利尼を安置せよ。西面には翳迦勢吒を安置し、北面には句吒齧利を安置せよ。彼所樂に隨つて、當に奉獻すべし。法の如くに諸の眞言を供養し已り、及び護摩し已りて、前の安ける瓶をば爲る所の者に隨つて、彼眞言を誦して用て加被せよ。本尊の前に於て安ずる所の瓶は、還つて彼眞言を用て之を加被せよ。其臺の内の瓶をば應に明王の眞言を用て加被を作すべし。門に當りて軍荼利の爲に安置する所の瓶も、亦須らく彼眞言を用て加被すべし。臺の曼荼羅の東面の兩角に於て、安置する所の瓶の東北の角の者は、部心の眞言を以てし、東南の角の者は部母の眞言を用ひ、西北の角なる者は能辨諸事の眞言を用ひ、西南の角の者は一切の眞言を用ひよ。是の如く此上の瓶を加被し已り、及び供養し已りて、次に應に右に遶るべし。前に灌頂の法を說くが如く、此も亦是の如く吉祥の瓶を安置せよ。謂ゆる穀實と、藥草と、花果と、香樹と、枝葉と、花鬘と、及び寶と瓶の內に置いて、新帛の繒綵を用て其頸に纒へ。諸の灌頂の法も皆應に是の如くすべし。即ち同伴をして行者の頂に灌がしむ。其同伴の者は皆須らく持誦すること如法清淨なるべし。或は阿闍梨の灌頂を配與せんことを求めよ。諸の作障を除遣せんと欲するが爲の故に、先づ軍荼利の瓶を用ひ、而も灌頂を以てせよ。第四に應に所持の眞言の瓶を用ひ、而も用て灌頂すべし。其餘の二瓶は意に隨つて用ひよ。是の如くし畢已りて應に牛黃と、塗香と、薰香と、芥子と、線釧と、衣服とを以てすべし、皆應に受用して灌頂を作し已るべ

【三】略して曼荼羅を明す。

し。復諸障を息めんが爲の故に、應に護摩を作し已りて便即發遣すべし。

(三)或は淨處に於てせよ。但し一の彩色を以て小曼荼羅を作れ。極めて方正ならしむ。其量二肘なり。三部の大印を安置し、西面は槊の印なり。前の如く淨瓶を安置し、法の如く灌頂すれば、能く諸障を離れて本尊歡喜したまひ、久しからずして速に此祕密最勝の悉地を成ぜよ。

【光物品】灌頂し已て後、護摩等を作し及び曼荼羅を作し、所成の物をして光装光顯あらしむるを說く、即ち云何護諸成就物及云何事曼荼羅に答ふるなり。

【二】初に廣く光顯の法を明す中に就き三を分つ、初に護諸成就物種種光顯の法を明す。

【所成就の物等】以下十一種光顯の法を明す、

蘇悉地羯羅經光物品第三十四

(一)復次に如法に灌頂し畢已りて、護摩を作すべし。三七日を經、或は一七日、或は一月を經よ。或は其成就の相應に隨ひ、或は本法の所說に於て、毎日三時に蘇蜜酪を用て和するに胡麻を以てして、應に護摩を作すべし。或は本法に依りて乳の粥を祀り、或は酪の飯を祀れ。所成就の物をば毎日三時に香を以て之を薰じ、香水を以て灑ぎ、眞言を以て加被し、其物を觀視して吉祥の環を以て指の上に貫き置き、其物を搗按いて牛黃水、或は白芥子を以て物の上に灑散し、及び節日に於て諸の供具を加へて、彼物に奉獻せよ。若し白月に成ぜば、十五日を取り、黑月に成ぜば十四日を取れ。斯の如く作法して其物を光顯にせよ。皆部母の眞言を用て、復重ねて諸の華香華鬘等の物を加へて供養せよ。香を以て手に塗り茅草環を設けて、所成の物を畢夜持誦せよ。夜の三時に於ては百八遍を誦せよ。

【三部の法等】下三部眞言光顯の法七種を擧ぐ。

【二】二に事法曼荼羅光顯の法を明す。

斯の如くして成就の物を光顯にし、始より終に至るまで皆應に是の如くすべし。若し此法を具せば速に成就を得ん。

佛部の光顯の眞言に曰はく、

唵二同上 諦若寫反 增乙二尾儞二 悉睇婆去 馱野三 虎合吽 捕四

蓮華部の光顯の眞言に曰はく、

唵一同上 摀奴立也并已 比反 摀同上比儞 同上比儞跛野二 摩訶室利曳三 涉合去二 嚩訶四

金剛部の光顯の眞言に曰はく、

唵一同上 入嚩攞入嚩攞野二 吽度哩三 涉嚩合去二 訶四

三部の法に於て皆赤き羯囉微囉華を用ふ。眞言を以て持誦して、其物に散灑せよ。或は忙落底華を用ひ、或は白芥子を用ひよ。首末と中間とに皆應に是の如く其物に散霑すべし。或は驚界有り、異相を見るに及んでも亦是の如く散ぜよ。成就せんと欲するに臨んでも、亦是の如く散ずれば、便ち光顯を成ず。若し蘇等の物を成就せんと欲せば、香水を眞言して用て其物に灑げ、便ち光顯を成ず。是の如きの法を以て物を光顯にせよ。縱成ぜずとも應に間斷すべからず。

(二)或は曼荼羅を作さんにも以て光顯を爲せ。前の如く地を淨め、五種の色を用て、曼荼羅を作せ。其量四肘にして一門を開け。內院の東面に先づ輪印を置き、東北の角には跡の印を置き、東南の角には袈裟の印を置け。次に北面に蓮華の印を置き、西北の角に灘拏棓の

【三】三に重ねて護摩等種種光顯の法を作すを明す。

印を置き、東北の角に軍持瓶の印を置け。次に南面に抜折羅の印を置き、東南の角に葉那椑の印を置き、西南の角に羯攞賒瓶の印を置き、西面に金剛鈎の印と金剛拳の印とを置け。西南の角に計利吉羅の印を置き、西北の角に遜婆の印を置け、復東面に輪を置け、右邊に佛眼部母の印を置き、又北面の蓮花印の右邊に半拏囉嚩思寧部母の印を置け。次に南面に抜折羅の印を置き、右邊には忙莽計部母の印を置け。次に曼荼羅の門の外に於て前の所說の如く能摧諸難軍荼利の印を置き、前に依りて供養せよ。復北面に六臂の印と、馬頭の印と、多羅の印と、戰捺羅の印と、及び當部に於ける有ゆる眷屬とを置いて、次第に安置せよ。其形皆白し、復東面に如來鑠底の印と、帝殊囉施の印と、無能勝明王の印と、無能勝妃の印とを置け。復南面に當部の內に於ける所有の眷屬次第に之を安ぜよ。然して西面に於ては意に隨つて三部の諸印を安置せよ。次に外院に俱尾羅等の八方大神を置け。其空處に於て任に三部の內の成辦諸事の眞言等を置け。次に中臺に於て所持の部主の印を置け。所成就の物をば本法の所說に隨つて、其中に置き、其部主の中臺の上に安ぜよ。其物の東邊に眞言本所持の印を置き、其物の西邊に護摩の爐を安け。次に西邊に持誦の人坐して、各各に本眞言を以て法に依りて召請し、前の所說の如く次第に供養し畢りて、三部の持の明を以て次第に護摩して其物を光顯にし、然る後本眞言を以て護摩して光顯を作せ。諸の光顯の法の中に於ては護摩を最と爲す。凡そ初めて護摩するには、先づ部母の明を以て、香水を持誦して其物を灑淨せよ。護摩既に畢らば、亦是の如く灑げ、或は忙莽計の

心明を用ひ、或は四字の明王の眞言を用ひよ。三部に通じて、護摩して光顯を作せ。其所用の眞言に隨つて護摩を爲さん者は、初に且く其眞言を誦し、次に求請の句を誦じ、復中間に其眞言を誦せよ。復求請の句を誦して後、亦其眞言を誦せば、還つて求請の句を安せよ。是の如く眞言の中の三處の上中下分に、求請の句を安置せよ。最後に其虎吽泮吒莎去訶去字を安け。謂ゆる、

闍嚩二合引二攞也合放光攞闍嚩合攞也況悉地成娑去駄也合成儞去馳成耀儞去跛耶耀合成儞去跛跢合去二南耀者諾成
帝闍也澤潤二合帝闍也澤合潤拔駄也長合增忙尾覽摩遲莫延阿去尾賒入遍囉乞沙護持二合散儞輕甜現前合瑞倶上嚕
最吽泮吒莎去訶去

是の如き等の求請の句を以て其物を光顯にせよ。前後中間に種種に重ねて説くに亦妨ぐる所無し。護摩畢已りて次に應に白き羯囉尾囉花を持誦して、其物の上に散じて光顯を作すべし。或は赤き羯囉尾囉花を持誦し、或は白芥子を用てし、或は蘇摩那花を用て光顯を作せ。先づ塗香を用て手に塗り以て其物を按じ、次に諸花を以て持誦せよ。而して白芥子を散じ、次に香を燒き之を薰じ、次で後に香水を持誦して灑げ。應に知るべし、是の如く次第に初中後夜の三時に本藏主の眞言を以てし、香水の眞言を持誦して灑ぐ。次いで本持の眞言を誦して灑ぎ畢已り、前の如く護摩念誦すること乃し日出に至れ。此法を具せば速に成就を得ん。是の如く諸物を光顯にし及び己身を光顯にせば、決定して速に物を成就することを得ん。其物は縱ひ少くとも亦大なる驗を獲ん。此法を具せん者は其物の增多に

【四】第二段に結勸を明す。

及び清淨なることを得ん。是故に應に光顯の法を作すべし。

(四)此を一切成就祕密の法と名く、諸の節日に於て、應に是の如き光顯の法を作すべし。餘日は時に隨つて光顯を作せ、念誦の遍數滿じ已りて成就の法を作さんと欲はん時には、先づ應に初夜に具に光顯の法を作して、然る後に成就すべし。

蘇悉地羯羅經卷下　終

解深密經

經典部
第八卷

【序品】本經の序分即ち教起因緣分なり。初に證信序
【最勝の光曜等】經の說所を明す。
【三界所行の處】諸愛所執の處。
【最極自在の淨識等】此淨土は最極自在にして佛の無漏心もて體相とし如來の大圓鏡智相應の淨識のみあり。
【大念慧行等】大念とは聞所成の慧、大慧とは思所成の慧、大行とは修所成の慧なり。
【大止妙觀】止とは三摩地、觀を般若羅といふ。

解深密經　巻第一

大唐三藏法師玄奘　詔を奉じて譯す

序品第一

是の如く我聞けり。一時、薄伽梵、最勝の光曜ある七寶の莊嚴より、大光明を放ちて、普く一切無邊の世界を照し、無量の方所妙飾間列して、周圓際り無く、其量測り難く、三界所行の處を超過し、勝れたる出世間の善根の起す所にして、最極自在の淨識を相と爲し、如來の都する所、諸の大菩薩衆の雲集する所、無量の天、龍、藥叉、健達縛、阿素洛、掲路茶、緊捺洛、牟呼洛伽、人非人等の常に翼從する所なり。廣大の法味喜樂に持せられ、諸の衆生に一切の義利を作し、諸の煩惱災横纏垢を蠲除し、衆魔を遠離し、諸の莊嚴に過ぎたる如來莊嚴の所依處にして、大念慧行を以て遊路と爲し、大止妙觀を以て所乘と爲し、大空、無相、無願の解脱を所入の門と爲し、無量の功徳衆の莊嚴する所、大寶華王衆の建立する所の大宮殿の中に住したまふ。是薄伽梵は最清淨の覺あり、二現行せず。無相の法に趣き、佛の住に住し、一切佛平等性を逮得し、無障處に到り、轉ずべからざる法にして、行ずる所無礙なり。其成立する所思議すべからず。三世平等の

【空、無相、無願】三解脱門といふ。【是婆伽梵等】總別して佛の德を歎ず。【三現行ぜず】諸の異生は生死に住著し、二乘の聖者は涅槃に住著す。【無相の法】清淨直如をいふ。【佛の住】大悲なり。【安立】契經等の正法を施設するをいふ。【三世平等の等】三世諸法平等眞如の故に過未を證知すること現在の如し。【所現の身は等】如來身は雜染分別起に非ざる故分別すべからざるなり。【佛の無二等】法身眞如を體となし無差別平等の故に無二、所住の境の故に住といふ。【無量の大聲聞衆等】教機を擧ぐる中、初に聲聞、以

法性に遊び、其身一切世界に流布し、一切法に於て智礙滯する無く、一切の行に於て大覺を成就す。諸法の智に於て疑惑有ること無く、凡そ所現の身は分別すべからず。一切の菩薩のみ正しく求むる所の智にして、佛の無二を得て勝れたる彼岸に住し、相間雜せざる如來の解脱妙智究竟し、中邊無き佛地の平等を證し、法界を極め、虚空性を盡し、未來際を窮めたまふ。無量の大聲聞衆と倶なり、一切調順にして、皆是れ佛子なり。心善く解脱し、慧善く解脱し、戒善く清淨にして、法樂を趣求し、多聞聞持して其聞積集し、善く所思を思ひ、善く所説を説き、善く所作を作し、捷慧、速慧、利慧、出慧、勝決擇慧、大慧、廣慧及び無等慧の慧寶成就し、三明を具足し、第一の現法樂住を逮得せる、大淨福田なり、威儀寂靜にして圓滿せざること無し、大忍柔和、成就し減ずること無くして、已に善く如來の聖教を奉行せり。

復無量の菩薩摩訶薩衆有り、種種の佛土よりして來りて集會す。皆大乘に住し、大乘の法に遊び、諸の衆生に於て其心平等なり。諸の分別及び不分別の種種の分別を離れ、一切の衆魔怨敵を摧伏し、一切の聲聞獨覺所有の作意を遠離し、廣大の法味喜樂に持せられ、五怖畏を超え、一向に不退轉地に趣入し、一切衆生の一切の苦惱逼迫する所の地を息して、而して現在前す。其名を解甚深義密意菩薩摩訶薩、如理請問菩薩摩訶薩、法涌菩薩摩訶薩、善清淨慧菩薩摩訶薩、廣慧菩薩摩訶薩、德本菩薩摩訶薩、勝義生菩薩摩訶薩、觀自在菩薩摩訶薩、慈氏菩薩摩訶薩、曼殊室利菩薩摩訶薩等と曰ふ、而も上首爲り。

下十三德を述ぶ。【復無量の菩薩衆等】次に菩薩衆を釋す。【五怖畏】不活畏、惡名畏、死畏、惡趣畏、怯衆畏。

【勝義諦相品】眞如の理に離言等の五相の義あるを明す。以下七品は聖教正說分を釋す。【一】離言及び無二の相を明す。長行中初に請問。【最勝子】最勝なる佛弟子の義。【有爲、無爲】有爲とは依他起性、因緣所造の法なり、無爲と圓成實性、永く生滅を絕せる常住不變の理なり。【本師假施設】一切法は皆言說を離るるも本師如來は大悲力の故假施しして有爲と說くなり

勝義諦相品第二

（一）爾時、如理請問菩薩摩訶薩、卽ち佛前に於て、解甚深義密意菩薩摩訶薩に問うて言はく、『最勝子、一切法無二と言ふ、一切法無二とは何等か一切法なる、云何が無二と爲すや。』解甚深義密意菩薩、如理請問菩薩に告げて曰はく、「善男子、一切法とは略して二種有り、一には有爲、二には無爲なり、是中有爲は有爲に非ず、無爲に非ず、無爲も亦無爲に非ず、有爲に非ず。」如理請問菩薩、復解甚深義密意菩薩に問うて言はく、「最勝子、如何が有爲は有爲に非ず、無爲に非ざるや、無爲も亦無爲に非ず、有爲に非ざるや。」解甚深義密意菩薩、如理請問菩薩に謂て曰はく、「善男子、有爲と言ふは、乃ち是れ本師假施設の句なり。若し是れ本師假施設の句なれば、卽ち是れ遍計して執る所の言辭の所說なり。若し是れ遍計して集むる所の言辭の所說なれば、卽ち是れ究竟じて種種遍計言辭の所說は、成實ならざるが故に、是れ有爲に非ず。善男子、無爲と言ふは亦言辭に墮す、設ひ有爲無爲を離るるも、少しく所說有れば其相も亦爾り。然れども事無くして、所說有るに非ず。何等をか事と爲す、謂く、諸の聖者、聖智聖見を以て名言を離るるが故に、現に等正覺し、卽ち是の如き離言の法性に於て、他をして現に等覺せしめんと欲するが爲の故に、名想を假立して之を有爲と謂ふ。善男子、無爲と言ふは、亦是れ本師假施設の句なり、若し是れ本師假施設の

【少も所說有れば】犢子部所立の五法藏の義を遮す。

【善幻師等】幻師。幻事の譬。善幻師とは善き魔術師。阿賴耶識をこれに、前七識を其弟子に譬ふ。

【四衢道】四識住。五蘊の中に於て、色受想行の四は識の住する所故識住といふ。

【若し諸の衆生等】愚者は執實の譬。

句なれば、即ち是れ遍計して執る所の言辭の所說なり。若し是れ遍計して執る所の言辭の所說なれば、即ち是れ究竟じて種種遍計の言辭の所說は、成實ならざるが故に是れ無爲に非ず。善男子、有爲と言ふは、亦言辭に墮す、設ひ無爲有爲を離るるも少も所說有れば其相亦爾り。然れども事無くして所說有るに非ず。何等をか事と爲す、謂く、諸の聖者、聖智聖見を以て、名言を離るるが故に現に等正覺し、即ち是の如き離言の法性に於て、他をして現に等覺せしめんと欲するが爲の故に、名想を假立して之を無爲と謂ふ。

爾時、如理請問菩薩摩訶薩、復解甚深義密意菩薩摩訶薩に問うて言はく、「最勝子、如何が此事にて、彼諸の聖者、聖智聖見を以て名言を離るるが故に、現に正等覺し、即ち是の如き離言の法性に於て、他をして現に等覺せしめんと欲するが爲の故に、名想を假立して或は有爲と謂ひ、或は無爲と謂ふや。」解甚深義密意菩薩、如理請問菩薩に謂て曰はく、「善男子、善幻師或は彼弟子四衢道に住して、瓦礫、草葉、木等を積集して、種種の幻化の事業を現作す。謂ゆる象身、馬身、車身、步身、末尼、眞珠、瑠璃、螺貝、璧玉、珊瑚、種種の財穀庫藏等の身なり。若し諸の衆生愚癡頑鈍惡慧の種類にして、曉知する所無く、瓦礫、草葉、木等の上の諸の幻化の事に於て、見已り聞き已りて是の如きの念を作さく、『此所見の者は實に象身有り、實に馬身、車身、步身、末尼、眞珠、瑠璃、螺貝、璧玉、珊瑚、種種の財穀庫藏等の身有り』と。其所見の如く、其所聞の如く、堅固に執著して、隨つて言說を起し、唯是のみ諦實にして餘は皆愚妄なりとし、彼後時に於て應に更

【若し衆生等】悟者覺妄の喩。

【是の如く若し衆生等】擧法同の喩。

【異生】凡夫のこと。

【聖諦】苦集滅道の眞如なり。

【行相】心識が對境を慮知する行解の相貌。

に觀察すべし。若し衆生有りて愚に非ず、鈍に非ず、善慧の種類にして、知曉する所有りて、瓦礫、草葉、木等の上の諸の幻化の事に於て見已り聞き已りて、是の如きの念を作さく「此所見の者は、實の象身無く、實の馬身、車身、歩身、末尼、眞珠、瑠璃、螺貝、璧玉、珊瑚、種種の財穀庫藏等の身無し、然るに幻狀の眼を迷惑する事有りて、中に於て大象身の想、或は大象身差別の想を發起し、乃至種種の財穀庫藏等の想、或は彼種種差別の想を發起す」と。所見の如くならず、所聞の如くならず堅固に執著して隨つて言說を起し、唯此のみ諦實なり、餘は皆愚妄なりとす、是の如きの義を表知せんと欲するが爲の故に、亦此中に於て隨つて言說を起し、彼後事に於て觀察を須ひざるが如く、是の如く若し衆生有りて是れ愚夫の類、是れ異生の類にして、未だ諸聖の出世間の慧を得ず、一切法の離言法性に於て、了知すること能はず、彼一切の有爲無爲に於て見已り聞き已りて、是の如きの念を作さく「此得る所の者は決定して實に有爲無爲有り」と。其所見の如く其所聞の如く、堅固に執著して隨つて言說を起し、唯此のみ諦實にして餘は皆癡妄なりとし、彼後時に於て應に更に觀察すべし。若し衆生有りて愚夫の類に非ず、已に聖諦を見、已に諸聖の出世間の慧を得、一切法の離言の法性に於て如實に了知し、彼一切の有爲無爲に於て、見已り聞き已りて、是の如きの念を作さく「此得る所の者は決定して實の有爲無爲無し。然るに分別して起す所の行相有りて、猶し幻事の覺慧を迷惑するが如く、中に於て爲無爲の想、或は爲無爲の差別の想を發起す」と。所見の如くならず、所聞の如くたらず堅

【是の如く善男子等】第三に結通外釋。

【一】頌もて略說す。

【二に樂著】有爲無爲の二に。

【不定或は邪定】衆生を修道上の見地より正定聚、不定聚、邪定聚の三に分つ。

【正智】前二を證する智。

【牛羊等の類】諸趣。

【三】第二段に過尋思所行相を釋す。初に長行。

【勝義諦】眞如第一義諦なり。

固に執著して、隨つて言說を起し、唯此のみ諦實にして餘は皆癡妄なりとす。是の如きの義を表知せんと欲するが爲の故に、亦此中に於て隨つて言說を起し、彼後時に於て觀察を須ひず。是の如く善男子、彼の諸の聖者は此事の中に於て、聖智聖見を以て名言を離るるが故に、現に等正覺し、即ち是の如き離言の法性に於て、他をして現に等覺せしめんと欲するが爲の故に、名想を假立して之を有爲と謂ひ、之を無爲と謂ふ。

(二) 爾時、解甚深義密意菩薩摩訶薩、重ねて此義を宣べんと欲して頌を說いて曰はく、

佛の離言無二の義は、甚深にして愚の所行に非ず
愚夫此に於て癡に惑され、二に樂著して言に依りて戲論す
彼或は不定或は邪定、流轉して極めて長く生死に苦む
復是の如き正智の論に違せば、當に牛羊等の類の中に生ずべし

(三) 爾時、法涌菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、世尊、此より東方七十二殑伽沙に等しき世界を過ぎて世界有り、具大名稱と名け、是中の如來を廣大名稱と號す。我先の日に於て、彼佛土より發して此に來至す。我彼佛土に於て、曾て一處を見しに、七萬七千の外道幷に其師首有り、同じく一會に坐して、諸法の勝義諦の相を思はんが爲に、彼共に思議し、稱量し、觀察し、遍く尋求する時、一切法の勝義諦の相に於て、竟に得ること能はず。唯種種の意解、別異の意解、變異の意解を除くのみにして、互に相違背し、共に諍論を興し、口に矛矟を出し、更に相矟し、刺し已り、惱し已り、壞り已りて各各離散せり。世尊、

我爾時に於て竊に是念を作さく、「如來の出世は甚奇希有なり、出世に由るが故に、乃ち是くの如く一切尋思の所行を超過せる勝義諦の相に於て、亦通達作證の得べき有り」と。「是語を說き已りぬ。爾時、世尊、法涌菩薩摩訶薩に告げて日はく、「善男子、是の如く是の如し、汝が說く所の如し。我一切の尋思を超過せる勝義諦の相に於て、現に等正覺し、現に等覺し已りて、他の爲に宣說し、顯現し、開解し、施設し、照了す、何を以ての故に。我說く勝義は是れ諸の聖者內に自ら證する所なり、尋思の所行は是れ諸の異生、展轉して證る所なり。是故に法涌、此道理に由りて當に知るべし、勝義は一切の尋思の境相を超過すと。復次に法涌、我說く勝義は無相の所行なり、尋思は但有相の境界にのみ行ず。是故に法涌、此道理に由りて當に知るべし、勝義は一切の尋思の境相を超過すと。復次に法涌、我說く勝義は言說すべからず、尋思は但言說の境界にのみ行ず。是故に法涌、此道理に由りて當に知るべし、勝義は一切の尋思の境相を超過すと。復次に法涌、我說く勝義は諸の表示を絕す、尋思は但表示の境界にのみ行ず。是故に法涌、此道理に由りて當に知るべし、勝義は一切尋思の境相を超過すと。復次に法涌、我說く勝義は諸の諍論を絕す、尋思は但諍論の境界にのみ行ず。是故に法涌、此道理に由りて、當に知るべし、勝義は一切の尋思の境相を超過すと。法涌、當に知るべし、譬へば人有りて其壽量を盡すまで辛苦の味を習ふも、蜜石蜜の上妙なる美味に於て尋思すること能はず。比度すること能はず、信解すること能はず、或は長夜に於て欲貪の勝解に由りて、諸欲の熾火に燒然せらる

【諸の聖者內に等】聖者は無分別智もて眞如境を緣じ、自證を內證するなり。

【展轉して證る所】異生は他の言說に依り、內の所證に非ず。

【無相】眞如涅槃にして五境男女生老死の十相を離絕する故に無相なり

【有相】有爲法には種種相の差別あるを以て有相。

【蜜石蜜】飴。

【妙遠離樂】諸欲惡不善法を斷除して初禪處を證し、離生喜樂なるをいふ。

【寂靜聖默然の樂】第二靜慮以上の諸定、尋伺の止息したる境界の樂なり。

【薩迦耶滅の究竟涅槃】薩迦耶とは移轉身と譯す、有人の身は五蘊假和合の故に實有に非ざるも、亦假和合の物なれば全く虚無の無體にも非ず、此移轉身を滅し盡して餘すところなき無餘涅槃を薩迦耶滅の究竟涅槃といふ、

【我所攝受】凡夫は實我に執して我見に隨し、後に我所見を生じ、之に執して自己に繫屬するを攝受といふ。

【四】偈頌もて略說す。

【五】第三に勝義諦は諸法の一異性相を超過すること

るが故に、內に一切の色聲香味觸の相を除滅せる妙遠離樂に於て尋思すること能はず、比度すること能はず、信解すること能はず、或は長夜に於て言說の勝解に由りて、世間の綺言說に樂著するが故に、內の寂靜聖默然の樂に於て尋思すること能はず、比度すること能はず、信解すること能はず、或は長夜に於て見聞覺知の表示の勝解に由りて、世間の諸の表示に樂著するが故に、永へに一切の表示を除斷せる薩迦耶滅の究竟涅槃に於て尋思すること能はず、比度すること能はず、信解すること能はずと。法涌、當に知るべし、譬へば人有りて其長夜に於て、種種の我所攝受、諍論の勝解あるに由りて、世間の諸の諍論に樂著するが故に、北拘盧洲の無我所、無攝受、離諍論に於て尋思すること能はず、比度すること能はず、信解すること能はざるが如しと。是の如く法涌、諸の尋思する者は一切の尋思の所行を超えたる勝義諦の相に於て尋思すること能はず、比度すること能はず、信解すること能はずと。』

爾時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、頌を說いて曰はく、

　內證と無相の所行と、不可言說と表示を絕すると
　諸の諍論を息するとの勝義諦は、一切尋思の相を超過す

爾時、善淸淨慧菩薩、佛に白して言さく、『世尊、甚だ奇なり、乃至世尊、善說なり。世尊の言ふが如く勝義諦の相は微細甚深にして、諸法一異の性相を超過して、通達すべきこと難し。世尊、我即ち此に於て曾て一處を見しに、衆の菩薩有りて等しく正しく勝解

を明す。初に長行

【勝解行地】瑜珈論にいふ七地中の第三地、十住、十行、十廻向の位なり。

【諸行】有爲遷流のこと。

【無上方便安隱涅槃】涅槃に本來清

行地を修行し、同じく一會に坐し、皆共に勝義諦の相と諸行の相との一異の性相を思議せり。此會中に於て一類の菩薩は是の如きの言を作さく、「勝義諦の相は諸行の相と都て異ること有ること無し」と。一類の菩薩は復是言を作さく、「勝義諦の相は諸行の相と都て異ること有ること無きに非ず、然るに勝義諦の相は諸行の相に異れり」と。有餘の菩薩は疑惑猶豫して復是言を作さく、「是諸の菩薩の誰の言か諦實にして誰の言か虚妄なるや、誰か如理に行じて、誰か不如理なるや」と。或は是言を唱ふらく、「勝義諦の相は諸行の相と都て異ること有ること無し」と。或は是言を唱ふらく、「勝義諦の相は諸行の相に異り」と。世尊、我彼を見已りて、竊に是念を作さく、「此諸の善男子、愚癡、頑鈍、不明不善にして、如理に行ぜず、勝義諦の微細甚深にして諸行一異の性相を超過せるに於て、解了すること能はず」と。是語を說き已りぬ。

爾時、世尊、善清淨慧菩薩に告げて日はく、「善男子、是の如く是の如し、汝が說く所の如し、此諸の善男子は、愚癡、頑鈍、不明、不善にして如理に行ぜず、勝義諦の微細甚深にして、諸行一異の性相を超過せるに於て、解了すること能はず。何を以ての故に。善清淨慧、諸行に於て是の如く行ずる時を、能く勝義諦に通達し、或は勝義諦に於て作證を得ると名くべきに非ざればなり。何を以ての故に。善清淨慧、若し勝義諦の相と諸行の相と都て異ること無しとせば、應に今時に於て一切の異生皆已に見諦すべく、又諸の異生皆應に已に無上方便安隱涅槃を得べく、或は應に已に阿耨多羅三藐三菩提を證すべ

淨、有餘、無餘、無住處の四義を立つる中、有餘と無住處とに約す、是れ方便道を擧げて涅槃の果を顯すなり。

【相縛】如幻の事を了知せざる故に諸の心心所は所緣の相に於て自在を得ざる故に相分を說くをいふ。

【麤重縛】凡夫は其性麤强沈重にして無相眞如の理を見る能はず。

し、若し勝義諦の相と諸行の相と一向異りとせば、已に見諦の者、諸行の相に於て應に除遣せざるべく、若し諸行の相を除遣せずんば、應に相縛に於て解脫を得ざるべく、此見諦の者、諸の相縛に於て解脫せざるが故に、麤重縛に於て亦應に脫せざるべく、二縛に於て解脫せざるに由るが故に、已に見諦の者、應に無上方便安隱涅槃を得ること能はざるべく、或は應に阿耨多羅三藐三菩提を證せざるべし。善清淨慧、今時に於て諸の異生皆已に見諦するに非ず、諸の異生已に能く無上方便安隱涅槃を獲得するに非ず、亦已に阿耨多羅三藐三菩提を證するに非ず、是故に勝義諦の相と諸行の相と都て異相無しとは道理に應ぜず。若し此中に於て、是の如きの言を作し、勝義諦の相と諸行の相と都て異ること無しとせば、此道理に由りて、當に知るべし、一切如理に行ずるに非ず、正理の如くならずと。善清淨慧、今時に於て見諦の者諸行の相に於て、除遣すること能はざるに非ず、然も能く除遣し、見諦の者、諸の相縛に於て解脫すること能はざるに非ず、然も能く解脫し、見諦の者麤重縛に於て解脫すること能はざるに非ず、然も能く解脫す。二障に於て能く解脫するを以ての故に、亦能く無上方便安隱涅槃を獲得し、或は能く阿耨多羅三藐三菩提を證すること有り、是故に、勝義諦の相と諸行の相と一向異相なりとは道理に應ぜず。若し此中に於て是の如きの言を作し、勝義諦の相と諸行の相と一向異りとは、此道理に由りて、當に知るべし、一切は如理に行ずるに非ず、正理の如くならざることを。復次に善清淨慧、若し勝義諦の相と諸行の相と、都て異ること無しとせば、諸行の相の雜染の相

【共相】一切法無我の相は眞如勝義に等しく、諸法に遍きをいふ。

【唯無我性唯無自性に顯現等】佛は一切諸法皆唯無我或は諸法無自性と説けば、勝義と一切行と一向に異なるに非ざるを知る若し一向に異なりとせば、諸行は唯無我性、唯無自性の所顯現に非ざるべし。

に墮するが如く、此勝義諦の相も亦應に是の如く雜染の相に墮すべし。善淸淨慧、若し勝義諦の相と諸行の相と一向異りとせば、應に一切行の相の共相を勝義諦の相と名くるに非ざるべし。善淸淨慧、今時に於て勝義諦の相は、雜染の相に墮するに非ず、諸行の共相を勝義諦の相と名く、是故に、勝義諦の相と諸行の相と、都て異相無しとするも道理に應ぜず、勝義諦の相と諸行の相と一向異相なりとするも道理に應ぜず。若し此中に於て是の如きの言を作さく「勝義諦の相と諸行の相と都て異ること有ること無しとするも、或は勝義諦の相と諸行の相と一向異りとするも、此道理に由りて、當に知るべし、一切、如理に行ずるに非ず、正理の如くならざることを」と。復次に善淸淨慧、若し勝義諦の相と諸行の相と都て異ること無しとせば、勝義諦の相の諸行の相に於て差別有ること無きが如く、一切行の相亦應に是の如く差別有ること無かるべし。觀行を修する者、諸行の中に於て、其所見の如く、其所聞の如く、其所覺の如く、其所知の如く、應に後時に更に勝義を求むべからず。若し勝義諦の相と諸行の相と一向異りとせば、應に諸行の唯無我性、唯無自性に顯現せらるるもの、是れ勝義の相なるに非ざるべし。又應に倶時に別相成立すべし、謂く、雜染の相及び淸淨の相なり。善淸淨慧、今時に於て一切行の相皆差別有り、無差別に非ず、觀行を修する者、諸行の中に於て其所見の如く、其所聞の如く、其所覺の如く、其所知の如く、復後時に於て更に勝義を求め、又卽ち諸行の唯無我性、唯無自性に顯現せらるるを、勝義の相と名け、又倶時に染淨の二相別相成立するに非ず、是故に、

【黑沈】沈水香。
【訶梨】紫檀或は佉羅といふ。
【蠧羅】樹の花絮より製せる綿。
【補特伽羅無我性】人無我性といふ。

勝義諦の相と諸行の相と、都て異ること有ること無しとするも、或は一向異りとするも、道理に應せず。若し此中に於て是の如きの言を作さく、「勝義諦の相と諸行の相と都て異ること有ること無しとするも、或は一向異りとするも、此道理に由りて、當に知るべし、一切如理に行ずるに非ず、正理の如くならざることを」と。善清淨慧、螺貝上の鮮白色性の、彼螺貝と一相異相を施設し易からざるが如く、螺貝の上の鮮白色性の如く、金の上の黄色も亦復是の如し。箜篌聲の上の美妙の曲性の、箜篌の聲と一相異相を施設し易からざるが如く、黑沈の上に妙香の性有り、彼黑沈と一相異相を施設し易からざるが如く、胡椒の上の辛猛利の性の彼胡椒と一相異相を施設し易からざるが如く、胡椒の上の辛猛利の性の如く訶梨の澁性も亦復是の如し。蠧羅綿の上に柔軟の性有り、蠧羅綿と一相異相を施設し易からざるが如く、熟酥の上に有る所の醍醐の彼熟酥と一相異相を施設し易からざるが如く、又一切行の上の無常性、一切有漏法の上の苦性、一切法の上の補特伽羅無我性の彼行等と一相異相を施設し易からざるが如く、又貪の上の不寂靜の相及び雜染の相の、此れ彼貪と一相異相を施設し易からざるが如く、貪の上に於けるが如く、瞋癡の上に於けるも、當に知るべし亦爾り」と。是の如く善清淨慧、勝義諦の相は諸行の相と一相異相を施設すべからず。善清淨慧、我是の如き微細の極めて微細なる、甚深の極めて甚深なる、難通達の極めて難通達にして、諸法一異の性相を超過せる勝義諦の相に於て、現に正等覺し、現に等覺し巳りて、他の爲に宣說し、顯示し、開解し、施設し、照了す。」

【六】頌もて略説す。

【行界】諸行は皆眞如を以て自性となす故に行界といふ。

【七】第四に勝義諦は一切に遍じて一味相なるを釋す初に長行。

【阿練若】清閑にして修行に適する處をいふ。

【有所得の現觀】無所得一味の法何勝義を了せずして増上慢を起し、空覺勝義を勝得したりといふなり。

【蘊】色受想行識の五蘊なり

【處】六根六境の

（六）爾時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、頌を說いて曰はく、

行界勝義の相は、一異の性相を離れたり
若し一異を分別せば、彼如理に行ずるに非ず
衆生、相の爲に縛せられ、及び彼麁重に縛せらる
要ず勤めて止觀を修せよ、爾せば乃ち解脫を得ん

（七）爾時、世尊、尊者善現に告げて曰はく、「善現、汝、有情界の中に於て幾くの有情か増上慢を懷き、増上慢の爲に執持せらるるが故に、所解を記別すと知るや。汝、有情界の中に於て、幾くの有情か増上慢を離れて所解を記別すと知るや。」

長老善現、佛に白して言さく、「世尊、我有情界の中に、少分の有情のみ増上慢を離れて所解を記別すと知る。世尊、我有情界の中に、無量無數不可說の有情有つて、増上慢を懷き、増上慢の爲に執持せらるるが故に、所解を記別すと知る。世尊、我一時に於て、阿練若大樹林の中に住せり。時に衆多の苾芻ありて、亦此林に於て、我に依近して住せり。我彼諸の苾芻を見るに、日の後分に於て展轉聚集して、有所得の現觀に依りて、各各種種なる相法を說いて所解を記別せり。中に於て一類は蘊を得するに由るが故に、蘊の相を得するが故に、蘊の起るを得するが故に、蘊の盡くるを得するが故に、蘊の滅を得するが故に、蘊の滅を作證するを得するが故に、所解を記別す。此一類、蘊を得するに由るが故にといへるが如く、復一類有り、處を得するが故に、復一類有り、緣起を得するが故にとす

十二處これなり。處とは生長の義、【緣起】十二緣起なり。【食】段觸思識の四食。【諦】苦集滅道の四諦。【苦諦の遍知を得ず等】苦諦は四轉倒所依處に由る故、爲に轉倒を除けば、苦旣に遍知す、苦即ち遍知の故に集を遍知す、彼集諦は苦諦の攝に由る故に、遍知の苦と雖も包す集に追逐せらるる故集諦を永斷すべし、作證とは現見の義なり滅諦を現前に見る故に怖畏を生ぜざるなり、又若し道を數修せば、所觀の三義を成辨する故に後に修習道諦を說くなり、【界】十二處に六識を加へて十八界となす、界は能持の義。【非一性】諸の界

るも、當に知るべし亦爾りと。復一類有り、食を得するに由るが故に、食の相を得するが故に、食の起るを得するが故に、食の盡くるがを得するが故に、食の滅を得するが故に、食の滅を作證するを得するが故に、所解を記別す。復一類有り、諦を得するに由るが故に、諦の相を得するが故に、諦の遍知を得するが故に、諦の永斷を得するが故に、諦の作證を得するが故に、諦の修習を得するが故に、所解を記別す。復一類有り、界を得するに由るが故に、界の相を得するが故に、界の種種なる性を得するが故に、界の非一性を得するが故に、界の滅を得するが故に、界の滅を作證するを得するが故に、所解を記別す。復一類有り、念住を得するに由るが故に、念住の相を得するが故に、念住の能治所治を得するが故に、念住の修を得するが故に、念住の未だ生ぜざるは生ぜしむることを得するが故に、念住の生じ已れるは堅住し、忘れずして倍修し增廣なることを得するが故に、所解を記別す。一類有りて念住を得するが故にとするが如く、復一類有りて正斷を得するが故に、神足を得するが故に、諸根を得するが故に、諸力を得するが故に、覺支を得するが故にとするも、當に知るべし亦爾りと。復一類有り、八支聖道を得するが故に、八支聖道の相を得するが故に、八支聖道の能治所治を得するが故に、八支聖道の修を得するが故に、八支聖道の未だ生ぜざるは生ぜしむることを得するが故に、八支聖道の生じ已れるは堅住し、忘れずして倍修し增廣なることを得するが故に、所解を記別す。世尊、我彼を竊に見已りて是念を作さく、「此の諸の長老有所得の現觀に依りて、各種種なる相法を說いて、所解

は無量有情種種差別の所依住の故に【念住】身受心法の四念住なり。【念住の能治所治を得ず】四念住の四倒を能治するを顯す。【正斷】已生の惡不善法は斷ぜしめ、未生の惡不善法は生ぜざらしめ、未生の一切善法は生ぜしめ、已生の一切善法を住せしめんとする即ち四念住なり。【神足】欲勤心觀の四神足、禪定は神通を發するの立脚地なるをいふ。【諸根】信進念定慧の五根をいふ。根とは增長の義。【諸力】信進念定慧の五力なり、五根增長して煩惱を斷ずる作用あるをいふ。【覺支】念、擇法精進、喜、輕安、捨の七菩提分なり【八支聖道】正見

を記別す、當に知るべし、彼諸の長老一切皆增上慢を懷き、增上慢の爲に執持せらるるが故に、勝義諦の一切に遍き一味の相に於て、解了する能はざることを一と。是故に世尊、甚だ奇なり、乃至世尊、善說なり。世尊の言ふが如く、勝義諦の相は微細の最も微細なる、甚深の最も甚深なる、難通達の最も難通達なる、一切に遍き一味の相なり。世尊、此聖教の中に修行する苾芻すら勝義諦の遍一切一味の相に於て、尚通達し難し、況んや諸の外道をや。」

爾時、世尊、尊者善現に告げて曰はく、「是の如く是の如し、善現、我微細の最も微細なる、甚深の最も甚深なる、難通達の最も難通達なる、一切に遍き一味の相なる勝義諦に於て、現に正等覺し、現に等覺し已りて他の爲に宣說し、顯示し開解し施設し、照了す。何を以ての故に、善現、我已に一切蘊の中に於て清淨の所緣、是れ勝義諦なりと顯示し、我已に一切の處、緣起、食、諦、界、念住、正斷、神足、根、力、覺支、道支の中に於て、清淨の所緣是れ勝義諦なりと顯示したればなり。此清淨の所緣は、一切蘊の中に於て是れ一味の相にして、別の異れる相無し。蘊の中に於けるが如く、是の如く一切處の中乃至一切道支の中に於けるも、是れ一味の相にして別の異相無し、是故に善現、此道理に由りて當に知るべし、勝義諦は是れ一切に遍き、一味の相なりと。復次に善現、觀行を修する苾芻は、一蘊の眞如勝義法無我の性に通達し已れば、更に各別の餘の蘊と諸の處、緣起、食、諦、界、念住、正斷、神足、根、力、覺支、道支の眞如勝義法無我の性を尋求

正思正語正業正命正精進正念正定なり。

【八】偈頌もて略說す。

せざれども、唯即ち此眞如勝義に隨つて無二の智を依止と爲るが故に、一切に遍き一味の相なる勝義諦に於て、審察し趣證す。是故に善現、此道理に由りて當に知るべし、勝義諦は是れ一切に遍き一味の相なりと。復次に善現、彼諸蘊の展轉して異れる相あるが如く、彼諸の處、緣起、食、諦、界、念住、正斷、神足、根、力、覺支、道支の展轉して異れる相あるが如く、若し一切法の眞如勝義法無我の性も亦異れる相あらば、眞如勝義法無我の性も亦應に因ありて因より生ずる所なるべし。若し因より生ぜば、應に是れ有爲なるべし。若し是れ有爲ならば應に勝義に非ざるべし。若し勝義に非ずんば、應に更に餘の勝義諦を諄求すべし。善現、此に由りて眞如勝義法無我性は因ありと名けず、因の所生に非ず、亦有爲に非ず、是れ勝義諦なり。此勝義を得て、更に餘の勝義諦を尋求せざれ。唯常常の時、恆恆の時、如來の出世にも、若は不出世にも、諸法の法性安立し、法界安住すること有り。是故に、善現、此道理に由りて當に知るべし、勝義諦は一切に遍き一味の相なるを。善現、譬へば種種非一の品類異相の色の中にて、虛空は相無く、分別無く、變異無く、一切に遍き一味の相なるが如く、是の如く異性異相の一切法の中の勝義諦の遍一切一味の相も、當に知るべし亦爾りと。」

〔八〕爾時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、頌を說いて曰はく、

此一切に遍き一味の相たる勝義は、諸佛の說異ること無し
若し中に於て異なる分別するあらば、彼定んで愚癡にして上慢なるに依る

【心意識相品】前に勝義諦を說き覺り、今品には世俗諦としての心意識を說き八識の性相を述べ唯識轉變の由來を示して迷悟の分齊を明かにす。

【二】初に長行にもて心意識を明す。

【心意識】通じていはば八識を心とも意とも識とも名くべきも別していはば、心は諸法種を集め、諸法を起す故第八識に名け、意とは第八識を緣じ、恒に審に思量して我等と爲す。故に第七識に名け、識とは六別境に於て麤動間斷し了別轉ずる故に餘六識に名く。

【廣慧當に知るべし等】第八識の衆名差別を明す。

【一切種子の心識】第八阿賴耶識をいふ。此識體中に一切法の種子を集め藏むるが故にいふ。

心意識相品第三

(一)爾時、廣慧菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、『世尊、世尊の、心意識の祕密に於て、善巧なる菩薩と說きたまふが如き、心意識の祕密に於て、善巧なる菩薩とは、何に齊りて名けて心意識の祕密に於て善巧なる菩薩と爲し、如來は何に齊りて施設して、彼を心意識の祕密に於て善巧なる菩薩と爲したまふや。』

是語を說き已るや、爾時世尊、廣慧菩薩摩訶薩に告げて曰はく、『善い哉善い哉、汝今乃ち能く如來に是の如きの深義を請問す。汝今無量の衆生を利益し、安樂ならしめんと欲するが爲に、世間及び諸の天人、阿素洛等を哀愍して、義利安樂を獲得せしめんが爲に斯問を發せり。汝應に諦に聽くべし、吾當に汝が爲に心意識の祕密の義を說くべし。廣慧、當に知るべし、六趣の生死に於て、彼彼の有情、彼彼の有情衆の中に墮し、或は卵生に在り、或は胎生に在り、或は濕生に在り、或は化生に在りて、身分生起す。中に於て最初に一切種子の心識成熟し、展轉和合し、增上廣大して二つの執受に依る、一には有色の諸根及び所依を執受し、二には相、名、分別の言說戲論の習氣を執受す。有色界の中には、二つの執受を具す、無色界の中には、二種を具せず。廣慧、此識を亦阿陀那識と名く、何を以ての故に。此識、身に於て隨逐し、執持するが故なり。亦阿賴耶識と名く、何

を以ての故に。此識は身に於て、攝受し、藏隱して、安危の義を同うするが故なり。亦名けて心と爲す、何を以ての故に、此識あるに由りて聲香味觸等積集し滋長するが故なり。廣慧、阿陀那識を依止と爲し、建立と爲すが故に、六識身轉ず。謂く、眼耳鼻舌身識と意識となり。此中識あり、眼及び色を縁と爲して眼識を生ず、眼識と倶に隨行し、同時同境に分別の意識有りて轉ず。識有り、耳鼻舌身及び聲香味觸を縁と爲して耳鼻舌身の識を生ず、耳鼻舌身の識と倶に隨行して、同時同境に分別の意識ありて轉ず。廣慧、若し爾時に於て一の眼識轉ずれば、即ち此時に於て唯一の分別意識のみありて眼識と所行を同うして轉ず。若し爾時に於て、二三四五の諸識身轉すれば、即ち此時に於て唯一の分別意識のみ有りて、五識身と所行を同うして轉ず。廣慧、譬へば大瀑水の流の、若し一浪の生ずる縁現前すること有れば、唯一浪のみ轉じ、若は二若は多浪の生ずを縁現前すれば、多浪轉ずること有り。然も此瀑水の自類は恆に流れて、斷ずること無く、盡くること無きが如く、又善淨の鏡面の、若し一影の生ずる縁現前すること有れば、唯一影のみ起る、若は二若は多くの影の生ずる縁現前すれば、多くの影起ること有り、此鏡面轉變して影と爲るに非ず、亦受用滅盡すること得べき無きが如し。是の如く廣慧、瀑流に似たる阿陀那識を依止と爲し、建立と爲すに由るが故に、若し爾時に於て、一の眼識の生ずる縁現前すること有れば、即ち此時に於て一の眼識轉じ、若し爾時に於て、乃至五識身の生ずる縁現前すること有れば、即ち此時に於て五識身轉ず。廣慧、是の如く菩薩は、法住智を依止と爲し、建立と爲

【執受】阿頼耶識の執受する境界。

【諸根】第八識の對境たる五根。

【所依】第八識所縁の對境たる五境

【相、名、分別】相とは有漏色心の境界をいひ、名とは境相を詮表する語をいひ、分別とは慮知の心心所をいふ。

【習氣】薫習したる氣分の義。唯識家にては種子の異名に用ふ。

【阿陀那識】執持識といふ。第八識の異名なり。

【阿頼耶識】アーラヤ(Alaya)第八識の一名にして藏と譯す。藏に三義あり、一に能藏、能く諸法の種子を攝藏するが故に、二に所藏、前七識の現行に種子を薫藏せらるるが故に、三に執藏、第六末那識のために自我なりと執著せらる

すに由るが故に、心意識の祕密に於て善巧なりと雖も、然も諸の如來は此に齊りて施設して、彼を心意識の一切の祕密に於て善巧なる菩薩と爲さず。廣慧、若し諸の菩薩、内に於て各別に、如實に、阿陀那を見ず、阿陀那識を見ず、阿賴耶を見ず、阿賴耶識を見ず、積集を見ず、心を見ず、眼、色及び眼識を見ず、耳、聲及び耳識を見ず、鼻、香及び鼻識を見ず、舌、味及び舌識を見ず、身、觸及び身識を見ず、意、法及び意識を見ざるを、是を勝義善巧なる菩薩と名く、如來は施設して彼を勝義善巧の菩薩と爲す。廣慧、此に齊りて名けて、心意識の一切の祕密に善巧なる菩薩と爲す、如來は此に齊りて施設して、彼を心意識の一切の祕密に於て善巧なる菩薩と爲す。(一)

(二)爾時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、頌を説いて曰はく、

阿陀那識は甚だ深細なり、我凡と愚とに於ては開演せず
一切の種子は瀑流の如し。恐らくは彼分別し執して我と爲んことを

解深密經 卷第一 終

るが故に。

【安危の義を同うす】死生を共にして常に相離れざるの意。

【亦名けて心】阿賴耶識中に諸法種の集りて諸法を起す故。

【六識身】八識中の前六識、眼、耳、鼻、舌、身、意。

【法住智】佛の教法によりて法門を安立施設するの智。

【二】頌もて略説す。

【一切種子は瀑流の如し】剎那展轉相續不斷の故にいふ。

【我】第七末那識の行相なり。常恒の展轉の阿賴耶識の見分を思量して實我實法と執するなり。

【一切法相品】諸法を說いて三性三無性の道理を明す今品は遍計、依他圓成の三性についてのみ明す。

【諸法の相に略して等】初に所觀に約して諸法の相を辨ず。

【遍計所執相】所遍計の法が能遍計の心によりて妄執せられたる時、その妄情の前に現は

解深密經　卷第二

大唐三藏法師玄奘詔を奉じて譯す

一切法相品第四

爾時、德本菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、「世尊、世尊の諸法の相に於て善巧なる菩薩と說きたまふが如き、諸法の相に於て善巧なる菩薩とは、何に齊りて名けて諸法の相に於て善巧なる菩薩と爲し、如來は何に齊りて施設して、彼を諸法の相に於て善巧なる菩薩と爲したまふや。」是語を說き已りぬ。

爾時世尊、德本菩薩に告げて曰はく、『善い哉、德本。汝今乃ち能く如來に是の如きの深義を請問す。汝今無量の衆生を利益し、安樂ならしめんと欲するが爲に世間及び諸の天人、阿素洛等を哀愍して、義利安樂を獲得せしめんが爲の故に、斯問を發す。汝、應に諦に聽くべし、吾當に汝が爲に諸法の相を說くべし。諸法の相に略して三種有り、何等をか三と爲す、一には遍計所執相、二には依他起相、三には圓成實相なり。云何が諸法の遍計所執相なる、謂く、一切法の名假安立の自性と差別となり、乃至言說を隨起せしむるが爲なり。云何が諸法の依他起相なるや、謂く、一切法の緣によりて生ぜる自性なり、則

ち此有るが故に彼有り。此生ずるが故に彼生ず。謂く、無明は行に緣たり、乃至純大苦蘊を招集す。云何が諸法の圓成實相なるや、謂く、一切法の平等眞如なり。此眞如に於て、諸の菩薩衆勇猛精進を因緣と爲すが故に、如理の作意、無倒の思惟を因緣と爲すが故に、乃ち能く通達す。此通達に於て漸漸に修集し、乃至無上正等菩提を方に證すること圓滿なり。善男子、眩翳の人の眼中に有る所の眩翳の過患の如く、遍計所執相も當に知るべし、亦爾りと。眩翳の人の眩翳の衆相の、或は髮毛、輪、蜂蠅、苣勝、或は復青黃赤白等の相、差別現前するが如く、依他起相も當に知るべし亦爾りと。淨眼の人の、眼中の眩翳の過患を遠離し、卽ち此淨眼本性の所行に亂れたる境界無きが如く、圓成實相も當に知るべし亦爾りと。善男子、譬へば淸淨の頗胝迦寶の若し青染色と合するときは、卽ち帝の青及大青なる末尼寶の像に似たるのみなるに、邪に帝の青と大青となる末尼寶なりと執取するに由るが故に、有情を惑亂し、若し赤染色と合するときは、則ち琥珀の末尼寶の像に似たるのみなるに、邪に琥珀の末尼寶なりと執取するに由るが故に、有情を惑亂し、若し綠染色と合するときは、則ち末羅羯多の末尼寶の像に似たるのみなるに、邪に末羅羯多の末尼寶なりと執取するに由るが故に、有情を惑亂し、若し黃染色と合するときは、則ち金の像に似たるのみなるに、邪に眞金の像なりと執取するに由るが故に、有情を惑亂するが如く、是の如く德本、彼淸淨なる頗胝迦の上の有ゆる染色相應するが如く、依他起相の上の遍計所執相の言說習氣も、當に知るべし亦爾りと。彼淸淨の頗胝迦

る無體のものをいふ。

【依他起相】他の衆緣の和合によりて生起せる法。

【圓成實相】圓滿と成就と眞實の三義を具へたる本性をいふ、卽ち眞如のこと。

【自性】色聲等諸法の自體、差別とは體の上の無常無我等種種の別義なり。

【行】身口意善惡の業なり。

【純大苦蘊】十二因緣中の生、老死これなり。

【眼翳の人】眼病の人。

【髮毛輪】實になきも眼病人の前にある如く思はるる髮毛の相なり。

【苣勝】胡麻なり

【頗胝迦寶】白玉といふ。

【帝青】帝釋天の寶冠の青き寶石。

【末羅羯多】綠色の寶玉、能く毒を

さく。

【復次に德本】第二に能觀門によつて善巧菩薩を明す

の上の有ゆる帝青、大青、琥珀、末羅羯多、金等の邪執の如く、依他起相の上の遍計所執相の執も、當に知るべし亦爾りと。彼の清淨なる頗胝迦寶の如く、依他起相も、當に知るべし亦爾りと。彼の清淨なる頗胝迦の上の有ゆる帝青、大青、琥珀、末羅羯多、眞金等の相の、常常の時に於て、恆恆の時に於て、眞實有ること無く、無自性の性なるが如く、即ち依他起相の上に遍計所執相あるに由りて、常常の時に於て、恆恆の時に於て、眞實有ること無き無自性の性なる圓成實相も、當に知るべし亦爾りと。復次に德本、相と名と相應するを以て緣とするが故に、遍計所執の相を而も了知すべし。依他起相の上の遍計所執相の執を以て緣とするが故に、依他起の相を而も了知すべし。依他起相の上に遍計所執相の執の無なるを以て緣とするが故に、圓成實の相を而も了知すべし。善男子、若し諸の菩薩、能く諸法の依他起相の上に於て、如實に遍計所執相を了知すれば、即ち能く如實の一切無相の法を了知す。若し諸の菩薩、如實に依他起相を了知すれば、即ち能く如實に一切雜染相の法を了知す。若し諸の菩薩、如實に圓成實相を了知すれば、即ち能く如實に一切清淨相の法を了知す。善男子、若し諸の菩薩、能く依他起相の上に於て、如實に無相の法を了知すれば、即ち能く雜染相の法を斷滅す。若し能く雜染相の法を斷滅すれば、即ち能く清淨相の法を證得す。是の如く德本、諸の菩薩、如實の遍計所執相、依他起相、圓成實相を了知するに由るが故に、如實に諸の無相の法、雜染相の法、清淨相の法を了知す。如實に無相の法を了知するが故に、一切雜染相の法を斷滅す。一切雜染

相の法を斷滅するが故に、一切清淨相の法を證得す。此に齊りて名けて諸法の相に於て善巧なる菩薩と爲す。如來は此に齊りて施設して、彼を諸法の相に於て善巧なる菩薩と爲す。」

爾時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、頌を說いて曰はく、

若し無相の法を了知せざれば、雜染相の法を斷ずること能はず
雜染相の法は能はざるが故に、微妙淨相の法を證することを壞す
諸行の衆の過失を觀ぜざれば、放逸の過失は衆生を害ひ
懈怠は住法と動法との中無にし、有にして失壞す憐愍すべし

無自性相品第五

（一）爾時、勝義生菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、「世尊、我曾獨り靜處に在りて、心に是の如き尋思を生じぬ。世尊は無量の門を以て曾て諸蘊に有る所の自相、生相、滅相、永斷、遍知等を說きたまふ、諸蘊を說きたまへるが如く、諸の處、緣起、諸の食も亦爾り。無量の門を以て曾て諸諦に有る所の自相、遍知、永斷、作證、修習を說きたまふ。無量の門を以て、曾て諸界に有る所の自相、種種界性、非一界性、永斷、遍知を說きたまふ。無量の門を以て、曾て四念住に有る所の自相、能治所治、及び修習の未生なるは生ぜしめ、生じ

【住法】涅槃常住不滅の故に。
【動法】生死流轉の法なり。
【無にし有にして等】懈怠の故に住法なく、動法あるにより淨相を失壞す、失壞の故に憐愍すべし。
【無自性相品】諸法無自性の義を說き相、生、勝義の三無自性性の相狀を明す。
【一】菩薩請問分
【自相】即ち各別の相なり、色は是れ質礙、識は是れ

了別と說く如し。
【生相、滅相】是れ通相、色等皆生滅の相ある故。
【永斷】集諦、苦煩惱を斷ず。
【遍知】苦諦、生死の果を知る。
【作證】滅諦、涅槃を證す。
【修習】無漏道諦を修習す。
【種種界】十八界の展轉して異相なるをいふ。
【非一界】十八界は無量有情の所依として差別非一なるをいふ。
【二】三無性に就て說く。
【三】中に五、初に長行、初に三無性に約して一切法無自性無生滅等を釋す。

已れるは堅住し、忘れずして倍倍修し、增長廣大なるを說きたまふ。念住を說きたまへるが如く、正斷、神足、根、力、覺支も亦復是の如し。無量の門を以て、曾て八支聖道に有る所の自相、能治所治、及び修習の未生なるは生ぜしめ、生じ已れるは堅住し、忘れずして倍倍修し、增長廣大なるを說きたまふ。世尊は復一切諸法は皆無自性なり、無生無滅なり、本來寂靜なり、自性涅槃なりと說きたまふ。未審、世尊、何の密意に依りて是の如く、一切諸法は皆無自性なり、無生無滅なり、本來寂靜なり、自性涅槃なりと說くことを作したまふや。我今如來に斯義を請問したてまつる。惟願くば如來、哀愍して、一切法は皆無自性なり、無生無滅なり、本來寂靜なり、自性涅槃なりと說きたまふ。有ゆる密意を解釋したまへ」

(二)爾時、世尊、勝義生菩薩に告げて曰はく、『善い哉善い哉、勝義生。汝が尋思する所甚だ如理と爲す。善い哉善い哉、善男子。汝今乃ち能く如來に是の如きの深義を請問す。汝今、無量の衆生を利益し、安樂ならしめんと欲するが爲に、世間及び諸の天人、阿素洛等を哀愍して、義利安樂を獲得せしめんが爲の故に、斯問を發す。汝應に諦に聽くべし、吾當に汝が爲に、說きし所の一切諸法は皆無自性なり、無生無滅なり、本來寂靜なり、自性涅槃なりといふ。有ゆる密意を解釋すべし。

(三)勝義生、當に知るべし、我三種の無自性性に依つて、密意を以て說いて一切諸法皆無自性なりと言ひしことを。謂ゆる相無自性性、生無自性性、勝義無自性性なり。善男子、

云何が諸法の相無自性性なる、謂く、諸法の遍計所執相なり。何を以ての故に、此は假名に由りて安立して相を爲す、自相に由りて安立して相と爲すに非ず、是故に說いて相無自性性と名く。云何が諸法の生無自性性なる、謂く、諸法の依他起相なり。何を以ての故に。此は他の緣力に依るに由るが故に有なり、自然に有なるに非ず、是故に說いて生無自性性と名く。云何が諸法の勝義無自性性なる、謂く、諸の法は、生無自性性に由るが故に說いて無自性性と名く、卽ち緣生の法をも亦勝義無自性性と名く。何を以ての故に。諸の法の中に於て、若し是れ清淨の所緣の境界なるは、我、彼を顯示して以て勝義無自性性と爲す、依他起相は是れ清淨の所緣の境界に非ざれば、是故に亦說いて名けて勝義無自性性と爲す。復諸法の圓成實相有り、亦勝義無自性性と名く。何を以ての故に。一切諸法の法無我性を名けて勝義と爲し、亦名けて無自性性と爲すことを得、是れ一切法の勝義諦なり、無自性性の所顯なればなり。此因緣に由りて、名けて勝義無自性性と爲す。善男子、譬へば空華の如く相無自性性も、當に知るべし亦爾り。譬へば幻像の如く生無自性性も、當に知るべし亦爾り。一分の勝義無自性性も、當に知るべし亦爾り。譬へば虛空は惟是れ衆色の無なる性に顯されて、一切處に遍ずるが如く、一分の勝義無自性性も、當に知るべし亦爾り。法無我性に顯さるるが故に、一切に遍ずるが故なり。善男子、我は是の如き三種の無自性性に依りて、密意を以て說いて一切諸法皆無自性と言ひぬ。勝義生、當に知るべし我は相無自性性に依りて、密意を以て說いて、「一切諸法は無生無滅なり、本來

【四】第二に三性門に約して三無性の意を立つ。

【增益】所執の實我實法の種種相は理實には無きに、而も妄りに有りとするをいふ。

寂靜なり、自性涅槃なり」と言ひぬ。何を以ての故に。若し法の自相都て所有無ければ、則ち生有ること無し、若し生有ること無ければ則ち滅有ること無し、若し無生無滅なるときは則ち本來寂靜なり、若し本來寂靜なるときは則ち自性涅槃なり、中に於て都て少分の所有も更に其をして般涅槃せしむべきもの無ければなり。是故に我は相無自性性に依りて、密意もて說いて、一切諸法は無生無滅なり、本來寂靜なる自性涅槃なりと言ひぬ。

善男子、我は亦法無我性に顯されたる勝義無自性性に依りて、密意もて說いて、一切諸法は無生無滅なり、本來寂靜なる自性涅槃なりと言へり。何を以ての故に。法無我性に顯されたる勝義無自性性は、常常の時に於て、恆恆の時に於て諸法の法性安住して無爲なり、一切の雜染相應ぜざるが故に、常常の時に於て、恆恆の時に於て諸法の法性安住するが故に無爲なり、無爲に由るが故に無生無滅なり、一切雜染相應ぜざるが故に本來寂靜なる自性涅槃なればなり。是故に我法無我性に顯されたる勝義無自性性に依りて、密意もて說いて、一切諸法は無生無滅なり、本來寂靜なる自性涅槃なりと言へり。

(四)復次に勝義生、有情界の中、諸の有情の類、別に遍計所執の自性を觀じて、自性と爲すに由るが故に、亦彼別に依他起の自性及び圓成實の自性を觀じて、自性と爲すに由るが故に、我三種の無自性性を立つるに非ず。然るに有情は依他起の自性及び圓成實の自性の上に於て、遍計所執の自性を增益するに由るが故に、我三種の無自性性を立つ。遍計所執の自性の相に由るが故に、彼諸の有情は、依他起の自性及び圓成實の自性の中に於て

【言說を隨起し】理實には二性皆名言を離るるも、遍計所執相に由る故に、二相中に言說の起るあるなり。
【言說熏習】名字言說の識を分別す
【言說隨覺】人天等言語を媒介して分別覺知す。
【言說隨眠】牛羊等の言說を解せず
【五】五位、加行位等に約して三無性を辨立するを明す。

言說を隨起し、かくの如くかくの如くに言說を隨起す。是の如く、是の如く言說熏習の心に由るが故に。言說隨覺に由るが故に。言說隨眠に由るが故に。依他起の自性及び圓成實の自性の中に於て、遍計所執の自性の相に執著す。かくの如く、かくの如くに執著して、是の如く是の如く、依他起の自性及び圓成實の自性に上に於て、遍計所執の自性に執著す。是因緣に由りて當來世の依他起の自性を生ず、此因緣に由りて或は煩惱雜染の爲に染せられ、或は業雜染の爲に染せられ、或は生雜染の爲に染せられ、生死の中に於て長時に馳騁し、長時に流轉して休息有ること無く、或は那洛迦に在り、或は傍生に在り、或は餓鬼に在り、或は天上に在り、或は阿素洛に在り、或は人中に在りて諸の苦惱を受くるなり。

(五)復次に勝義生、若し諸の有情、本より已來、未だ善根を種ゑず、未だ障を清淨にせず、未だ相續を成熟せず、未だ多く勝解を修せず、未だ福德智慧二種の資糧を積集すること能はず。我、彼が爲の故に、生無自性性に依りて諸法を宣說す。彼、是を聞き已りて、能く、一切緣生の行の中に於て、分に隨つて、無常なり、無恆なり、是れ不安隱にして變壞の法なりと解了し已りて、一切の行に於て心に怖畏を生じ、深く厭患を起せり。心に怖畏を生じ、深く厭患し已りて諸惡を遮止し、諸の惡法に於て能く造作せず、諸の善法に於て能く勤めて修習す。善因を習するが故に、未だ善根を種ゑざるをば能く善根を種ゑ、未だ障を清淨にせざるをば能く清淨ならしめ、未だ相續を熟せざるをば能く成熟せしめたり。此因緣に由りて多く勝解を修し、亦多く福德智慧二種の資糧を積集す。彼、

【二種の勝義無自性性】依他起性と圓成實性との勝義無自性なり。
【簡擇し思惟し】四善根位中の煖位頂位の四尋思觀。
【如實に通達す】忍位世第一法位の四如實智觀。
【言説不熏習の智】名言を執著し熏習せざるの智。
【言説不隨覺の智】名言に隨て分別覺知せざるの智。
【言説離隨眠の智】名言に由て熏ぜし種子を已に斷ぜるが故に更に執着せざるの智。

是の如く諸の善根を種ゑ、乃至福德智慧二種の資糧を積集すと雖も、然も生無自性性の中に於て、未だ如實に相無自性性及び二種の勝義無自性性を了知すること能はず。一切の行に於て未だ能く正しく厭はず、未だ正しく欲を離れず、未だ正しく解脱せず、未だ遍く煩惱雜染を解脱せず、未だ遍く諸の業雜染を解脱せず、未だ遍く諸の生雜染を解脱せず。如來は彼が爲に更に法要を説きたまふ、謂く、相無自性性及び勝義無自性性なり。其をして一切の行に於て能く正しく厭はしめ、正しく欲を離れしめ、正しく解脱せしめ、一切の煩惱雜染を超過せしめ、一切の業雜染を超過せしめ、一切の生雜染を超過せしめんと欲するが爲の故なり。彼是の如き所説の法を聞き已りて、生無自性性の中に於て、能く正しく相無自性性及び勝義無自性性を信解し、簡擇し思惟し、如實に通達す。依他起の自性の中に於て、能く遍計所執の自性の相に執著せず。言説不熏習の智に由るが故に。言説不隨覺の智に由るが故に。言説離隨眠の智に由るが故に。能く依他起相を滅し、現法の中に於て智の力に持せられ、能く永く當來世の因を斷滅す。此因緣に由りて一切の行に於て、能く正しく厭患し、能く正しく離欲し、能く正しく解脱し、能く遍く煩惱、業、生の三種の雜染を解脱す。

(六)復次に勝義生、諸の聲聞乘種性の有情、亦此道、此行迹に由るが故に、無上安隱の涅槃を説得す。諸の獨覺種性の有情、諸の如來乘種性の有情も亦此道、此行迹に由るが故に、無上安隱の涅槃を説得す。一切の聲聞、獨覺菩薩皆此一妙清淨の道を共

【六】第四に三無性に約して一乘の義を辨ず。
【此道、此行跡等】諸の煩惱有漏の苦身を離れ、常住寂滅の樂を得。
【一向趣寂の聲聞】五性の中菩薩と不定とは成佛するも餘の三は不成佛なり、就中二乘は志小にして僅に羅漢の果を以て究竟とし、寂なる無餘涅槃に趣入するを目的とする故に趣寂といふ。
【廻向菩提の聲聞】五種姓中不定姓の者なり、彼定んで成佛するの故。
【七】第五に密意教意解差別を釋す。
【善說】經藏。
【善制說】論藏。
【毘奈耶】律藏。
【不了義經】理を

にし、皆此一究竟清淨を同うし、更に第二無し。我此に依るが故に、密意を以て說いて、惟一乘有りと言ふ。一切有情界の中に於て、種種なる有情の種情有ること無きには非ず。或は鈍根性、或は中根性、或は利根性の差別有り。善男子、若し一向趣寂の聲聞種性の補特伽羅は、諸佛の施設したまふ種種なる勇猛の加行方便の化導を蒙ると雖も、終に當に道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を證得せしむること能はず。何を以ての故に。彼本來唯下劣種性のみ有るに由るが故に。一向に慈悲薄弱なるが故に。一向に衆苦を怖畏するが故に。彼一向に慈悲薄弱なるに由る。是故に、一向に諸の衆生を利益する事を棄背し、彼一向に衆苦を怖畏するに由る。是故に、一向に諸行を發起する所作を棄背す。我終に一向に衆生を利益する事を棄背する者と、一向に諸行を發起する所作を棄背する者とをば、當に道場に坐して能く阿耨多羅三藐三菩提を得べしとは說かず。是故に彼を說いて名けて一向趣寂の聲聞と爲す。若し廻向菩提の聲聞種性の補特伽羅をば、我亦異門もて說いて菩薩とも爲す。何を以ての故に。彼既に煩惱障を解脫し已りて、若し諸佛等の覺悟を蒙る時は、所知障に於て其心亦當に解脫を得べければなり。彼最初に自らの利益の爲に加行を修行し、煩惱障を脫するに由りて、是故に如來は彼を施設して聲聞種性と爲す。

(七)復次に勝義生是の如く我、我善說、善制法、毘奈耶、最極清淨の意樂もて、說く所の善教法の中に於て、諸の有情類の意解、種種差別の得べきあり。善男子、如來は但是の如き三種の無自性性に依りて、深き密意に由りて宣說する所の不了義經に於て、隱密の相

を以て諸の法要を說く。謂く、一切法は皆無自性なり、無生無滅なり、本來寂靜の自性涅槃なりと。是經の中に於て若は諸の有情已に上品の善根を植ゑ、已に諸障を淸淨にし、已に相續を成熟し、已に多く勝解を修し、已に能く上品の福德智慧の資糧を積集するあり。彼若し是の如きの法を聽聞し已れば、我甚深密意の言說に於て如實に解了し、是の如き法に於て深く信解を生じ、是の如き義に於て無倒の慧を以て如實に通達し、此通達に依りて善く修習するが故に、速疾に能く最極究竟を證し、亦我所に於て深く淨信を生じ、是れ如來の應正等覺にして一切法に於て現に正等覺すと知る。若は諸の有情、已に上品の善根を植ゑ、已に諸障を淸淨にし、已に相續を成熟し、已に多く勝解を修するも、未だ上品の福德智慧の資糧を積集すること能はず、其性質直なり、是れ質直の類にして思擇廢立するに力能無しと雖も、自の見取の中に安住せざるあり。彼若は是の如き法を聽聞し已れば、我甚深祕密の言說に於て、如實に解了するに力能無しと雖も、然も此法に於て能く勝解を生じ、淸淨の信を發し、此經典は是れ如來の說なり、是れ其れ甚深なり、顯現して甚深なり、空性と相應し、見難く、悟り難く、尋思すべからず、諸の尋思所行の境界に非ず、微細詳密なる聰明智者の解了する所なり」と信じ、此經典に說く所の義の中に於て自を輕んじ而も住し、是の如きの言を作さく、「諸佛の菩提は最も甚深なりと爲す。諸法の法性も亦最も甚深なり。唯佛如來のみ能善く了達したまふ。是れ我等が能く解了する所に非ず。諸佛如來は彼種種なる勝解の有情の爲に、正法教を轉じたまふ。諸佛如

盡くさざる方便の經、卽ち般若皆空の敎。

【是經の中に於て等】有情の意解不同なるを明す。

【其性質直なり等】性質直の故に慧力無しと雖も、聖敎の是非道理を簡擇して自らの見取中に安住せず、更に亦了義經を進求するなり。自の見取すとは自己の劣見を取て勝れたりと執する煩惱。

【無の見、無相の見】依他起及び圓成實を撥無するを無の見といひ、遍計所執等名言の相を撥無するを無相の見といふ。

來は無邊の智見あり、我等が智見は牛跡の如し」と。此經典に於て能く恭敬し、他の爲に宣說し、書寫し、護持し、披閱し、流布し、慇重に供養し、受持し、溫習すと雖も、然れども猶未だ其修相を以て加行を發起すること能はず。是故に我甚深密意の所說の言辭に於て通達すること能はず。此因緣に由りて、彼諸の有情、亦能く福德智慧二種の資糧を增長し、彼相續に於て、未だ成熟せざる者も亦能く成熟す。若は諸の有情、廣說乃至、未だ上品の福德智慧の資糧を積集すること能はず、性質直に非ず、質直の類にも非ず、思擇廢立する力能ありと雖も、而も復自の見取の中に安住するあり。彼若し是の如きの法を聽聞し已りて、我甚深密意の言說に於ては、如實に解了すること能はず、是の如き法に於て信解を生ずと雖も、然も其義に於て言に隨つて執著し、一切法は決定して皆無自性なり、決定して不生不滅なり、決定して本來寂靜なり、決定して自性涅槃なりと謂ふ。此因緣に由りて、一切法に於て、無の見及び無相の見を獲得す。無の見、無相の見を得るに由るが故に、一切相は皆是れ無相なりと撥し、諸法の遍計所執相、依他起相、圓成實相を誹撥す。何を以ての故に。依他起相及び圓成實相あるに由るが故に、遍計所執相方に施設すべし、若し依他起相及び圓成實相に於て、見て無相なりと爲ば、彼亦遍計所執相をも誹撥すればなり。是故に彼三相を誹撥すと說く。我法に於て法の想を起すと雖も、而も非義の中に義の想を起す。我法に於て法の想を起すに由るが故に、及び非義の中に義の想を起すが故に、是法の中に於て持して是法と爲し、非義の中に於て持して是義と爲す。彼、法

に於て信解を起すが故に、福德增長すと雖も、然も非義に於て執著を起すが故に、智慧を退失す。智慧退するが故に、廣大無量の善法を退失す。復有情有り、他に從うて、法を謂つて法と爲し、非義を義と爲すを聽聞して、若し其見に隨へば、彼即ち正法に於て正法想を起し、非正義の中に於て正義の想を起し、正法を執して法と爲し、非義を義と爲す。此因緣に由りて當に知るべし、彼に同じく善法を退失すと。若し有情有りて其見に隨はざれば、彼より欻ち一切諸法は皆無自性なり、無生無滅なり、本來寂靜なり、自性涅槃なりと聞いて、便ち恐怖を生じ、恐怖を生じ已りて是の如きの言を作す。是れ佛語に非ず、是れ魔の所說なりと、此解を作し已りて是經典に於て誹謗し、毀罵す。此因緣に由りて大衰損を獲、大業障に觸れん。是緣に由るが故に、我說く、若し一切相に於て、無相の見を起し、非義の中に於て宣說して義と爲すこと有れば、是れ廣大なる業障を起すの方便なりと。彼無量の衆生を陷墜し、其をして大業障を獲得せしむるに由るが故に。善男子、若し諸の有情にして未だ善根を種ゑず、未だ障を淸淨にせず、未だ相續を熟せず、多くの勝解無く、未だ福德智慧の資糧を集めず、性質直に非ず、質直の類にも非ざれば、思擇廢立する力能有りと雖も、而も自の見取の中に安住す。彼若し是の如きの法を聽聞し已るも、如實に我甚深密意の言說を解すること能はず。亦此法に於て信解を生ぜず。是法の中に於て非法の想を起し、是義の中に於て非義の想を起し、是法の中に於て執して非法と爲し、是義の中に於て執して非義と爲して、是の如き言を唱ふ、此れ佛語に非ず、是魔の所說な

【八】第二段に頌もて重說す。

【微妙難思の無漏界】出世の體なり

【一切の義を成じ等】無餘涅槃眞如

りと。此解を作し已りて、是經典に於て誹謗し、毀罵し、撥して虛僞なりと爲し、無量の門を以て是の如きの經典を毀滅し摧伏す。諸の此經典を信解する者に於て怨家の想を起す。彼先に諸の業障の爲に障へられたり、此因緣に由りて復是の如きの業障の爲に障へらる。是の如きの業障は初には施設し易し、乃し百千俱胝那庾多劫を齊るに至るまでも出期有ること無し。善男子、是の如く我善說、善制法、毘奈耶、最極淸淨の意樂もて說く所の善教法の中に於て、是の如き等の諸の有情類の意解、種種の差別の得べきこと有り。」

(八)爾時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、頌を說いて曰はく、

一切諸法は皆無性なり、無生無滅にして本來寂たり
諸法の自性は恆に涅槃なり、誰の有智か密意無しと言はん
相生勝義の無自性なりと、是の如く我已に顯示す
若し佛の此密意を知らざれば、正道を失壞して往くこと能はず
諸の淨道に依りて淸淨なる者は、惟此一のみに依る第二無し
故に其中に於て一乘を立つ、有情の性差別無きに非ず
衆生界の中の無量の生、惟一身を度して寂滅に趣くのみ
大悲勇猛にして涅槃を證し、衆生を捨てず甚だ得難し
微妙難思の無漏界の、中に於て解脫等しうして差ふ無し
一切義を成じて惑と苦とを離る、二種に異說して常なり樂なりと謂ふ

の體に於て一切無爲功德の義を成ずるなり。

【常なり樂なり】惑を離るるを以ての故に常なり、苦を離るるが故に樂なり。

【九】第三大段、菩薩領解受持分、内に二、初に菩薩の領解。

【六界】地、水、火、風、空、識の六大なり。

爾時、勝義生菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、諸佛如來の密意の語言は甚奇希有なり、乃至微妙の最も微妙なり、甚深の最も甚深なり、難通達の最も難通達なり。是の如く我今領解すらく、「世尊所說の義は若し分別所行の遍計所執相の所依の行相の中に於て假名安立して、以て色蘊の或は自性相、或は差別性と爲し、假名安立して色蘊の生と爲し、色蘊の滅と爲し、及び色蘊の永斷、遍知の或は自性の相、或は差別の相と爲す、是れ遍計所執相と名く。世尊は此に依りて、諸法の相無自性性を施設したまふ、若は即ち分別所行の遍計所執相の所依の行相を、是を依他起相と名く。世尊は此に依りて、諸法の生無自性性及び一分の勝義無自性性を施設したまふ」と。是の如く我今領解すらく、「世尊所說の義は、若は即ち此分別所行の遍計所執相の所依の行相の中に於て、遍計所執相は成實ならざるに由るが故に、即ち此自性の無自性性、法無我の眞如の、清淨の所緣なる、是を圓成實相と名く。世尊は此に依りて、一分の勝義無自性性を施設したまふ」と。色蘊に於けるが如く、是の如く餘蘊に於ても皆應に廣說すべし、諸蘊に於けるが如く、是の如く十二處の一一の處の中に於ても皆應に廣說すべし、十二有支の一一の支の中に於ても皆應に廣說すべし、四種の食の一一の食の中に於ても皆應に廣說すべし、六界、十八界の一一の界の中に於ても皆應に廣說すべし。是の如く我今領解すらく、「世尊所說の義は、若は分別所行の遍計所執相の所依の行相の中に於て假名安立して、以て苦諦と苦諦遍知の或は自性相、或は差別相と爲す、是を遍計所執相と名く。世尊は此に依りて、諸法の相無自性性を施設したまふ。

【毘濕縛藥】ヰシヴ(Viśva)此に有功能といふ、功能多き藥なり諸藥草に合するに皆神驗あり。

若は即ち分別所行の遍計所執相の所依の行相を、是を依他起相と名く。世尊は此に依りて、諸法の生無自性性及び一分の勝義無自性性を施設したまふ」と。是の如く我今領解すらく、「世尊所說の義は、若は即ち此分別所行の遍計所執相の所依の行相の中に於て、遍計所執相は成實ならざるに由るが故に、即ち此自性の無自性性、法無我眞如の、淸淨の所緣なる、是を圓成實相と名く。世尊は此に依りて、一分の勝義無自性性を施設したまふ」と。苦諦に於けるが如く、是の如く餘の諦に於ても皆應に廣說すべし。集諦に於けるが如く、是の如く諸の念住、正斷、神足、根、力、覺支、道支の中に於ても、一一皆應に廣說すべし。是の如く我今領解すらく、「世尊所說の義は、若は分別所行の遍計所執相の所依の行相の中に於て、假名安立して以て正定と爲し、及び正定の能治所治、若は正修の未生なるは生ぜしめ、生じ已れるは堅住し忘れずして倍修し、增長廣大なるもの或は自性の相、或は差別の相と爲す。是を遍計所執相と名く。世尊は此に依りて、諸法の相無自性性を施設し、若は即ち分別所行の遍計所執相の所依の行相を、是を依他起相と名く。世尊は此に依りて、諸法の生無自性性及び一分の勝義無自性性を施設したまふ」と。是の如く我今領解すらく、「世尊所說の義は、若は即ち此分別所行の遍計所執相の所依の行相の中に於て、遍計所執相は成實ならざるに由るが故に、即ち此自性の無自性性、法無我眞如の、淸淨の所緣なる、是を圓成實相と名く。世尊は此に依りて、諸法の一分の勝義無自性性を施設したまふ」と。世尊、譬へば毘濕縛藥を一切の散藥、仙藥の方の中に皆應に安處すべきが如く、

【一】更に如來の密持を明す、

是の如く世尊の此諸法の皆無自性、無生無滅、本來寂靜、自性涅槃なる無自性性に依りたまふ了義の言教は遍く一切の不了義經に於て、皆應に安處すべきなり。世尊、彩畫の地の、一切彩畫の事業に遍く、皆同一味にして、或は青、或は黄、或は赤、或は白にて、復能く彩畫の事業を顯發するが如く、是の如く世尊は此諸法の皆無自性なり、廣說乃至、自性涅槃なる無自性性に依りたまふ了義の言教は、遍く一切不了義經に於て、皆同一味にして、復能く彼諸經の中の不了なる所の義を顯發す。世尊、譬へば一切の成熟せる珍羞なる諸の餅果の内に、之に熟酥を投ずれば、更に勝味を生ずるが如く、是の如く世尊は此諸法の皆無自性なり、廣說乃至、自性涅槃なる無自性性に依りたまふ了義の言教を、一切の不了義經に置けば、勝れたる歡喜を生ず。世尊、譬へば虛空の一切處に遍じて、皆同一味にして、一切所作の事業を障へざるが如く、是の如く世尊の、此諸法の皆無自性なり、廣說乃至、自性涅槃なる無自性性に依りたまふ了義の言教は、一切の不了義經に遍じて、皆同一味にして、一切の聲聞、獨覺及び諸の大乘の修なる所の事業を障へざるなり。〔一〕是語を說き已りぬ、

〔二〕爾時、世尊、勝義生菩薩を歎じて曰はく、〔一〕善い哉善い哉、善男子。汝今乃ち能善く、如來所說の甚深密意の言義を解す。復此義に於て善く譬喩を作す、謂ゆる世間の毘濕縛藥、雜彩畫地、熟酥、虛空なり。勝義生、是の如く是の如し、更に異ることあること無し。是の如く、汝應に受持すべし。〔一〕

（一二）そのとき、勝義生菩薩、復佛に白して言さく、『世尊初め一時に於て、婆羅痆斯仙人墮處施鹿林の中に在して、惟聲聞乘に發趣する者の爲にのみ四諦の相を以て、正法論を轉じたまふ。是れ甚だ奇なり、甚だ希有なりと爲す、一切の世間、諸の天人等、先に能く法の如く轉ずる者有ること無しと雖も、彼時に於て轉じたまへる法輪は、有上なり有容なり、是れ未了義なり、是れ諸の諍論の安足する處所なりき。世尊在昔第二時の中にて、惟發趣して大乘を修する者の爲にのみ一切法は皆無自性なり、無生無滅なり、本來寂靜なり、自性涅槃なるに依りて、隱密の相を以て、正法輪を轉じたまふ。更に甚だ奇なり、甚だ希有なりと爲すと雖も、彼時に於て轉じたまへる法輪も、亦是れ有上なり、容受する所有り、猶未了義なり、是れ諸の諍論の安足する處所なりき。世尊、今第三時の中に於て、普く一切乘に發趣する者の爲に、一切法は皆無自性なり、無生無滅なり、本來寂靜なり、自性涅槃なる無自性性に依りて、顯了の相を以て、正法輪を轉じたまふ。第一の甚奇なり、最も希有なりと爲す、于今世尊の轉じたまふ所の法輪は、無上なり、無容なり、是れ眞の了義なり、諸の諍論の安足する處所には非ざるなり。世尊、若は善男子、若は善女人にして、此如來の、一切法は皆無自性なり、無生無滅なり。本來寂靜なり、自性涅槃なるに依りて、說かせられたる甚深了義の言教に於て、聞き已りて信解し、書寫し、護持し、供養し、流布し、受誦し、溫習し、理の如く思惟し、其修相を以て加行を發起すれば、幾所の福をか生ずるや。』是語を說き已りぬ。

【一二】大段第四、校量歎稱分。初に三轉の勝劣不同を說く。
【初め一時】以下其佛一代の教說を其義理の淺深に應じて有教、空教、中道教の三法輪に分つ。即ち三時の教判なり。今初め一時とは初時の有教なり。
【婆羅痆斯】ヴァーラナシー／Benares の今のベナレス。
【仙人墮處施鹿林】鹿野苑のこと。
【有上なり等】此法輪に空を說かずして有を說けば是れ不了義なり、具に生死に執着の因果を顯し、未だ人空を說くも、未だ法空の眞理を顯さざれば、此教を有上勝教といひ、有容勝教といふ。
【諸の諍論】道理未だ盡さざる故、小乘之より次第に起り、二十部の分派ある所以なり。

【第二時】所謂空教を說くの時。即ち大乘初行の空無相教なり。

【第三時】中道教即ち大乘至極の了義教これなり。

【普く一切乘】第三時教は普く三乘の諸根を網羅して漏らすなきをいふ。

【二】如來の正說を明す。

【鄔波尼殺曇】ウパニシャッド(Upanisad)近少、微細と譯す、數の極なり。

【三】大段第五、依教奉持分、

(一二)爾時、世尊、勝義生菩薩に告げて曰はく、『勝義生、是善男子或は善女人の、共生ずる所の福は無量無數にして喩知すべきこと難し。吾今汝が爲に略して少分を說かん。爪上の土を大地の土に比するに、百分にして一に及ばず、千分にして一に及ばず、百千分にして一に及ばず、數、算、計、喩、鄔波尼殺曇の分にしても亦一に及ばざるが如く、或は牛跡の中の水を四大海の水に比するに、百分にして一に及ばず、廣說乃至、鄔波尼殺曇分にしても亦一に及ばざるが如く、是の如く諸の不了義經に於て聞き已りて信解し、廣說乃至、其修相を以て加行を發起して獲る所の功德を、此所說の了義經の教を聞き已りて信解して集むる所の功德、廣說乃至、其修相を以て加行を發起して集むる所の功德に比するに、百分にして一に及ばず、廣說乃至、鄔波尼殺曇分にしても亦一に及ばず。是語を說き已りぬ。

(一三)爾時、勝義生菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、是解深密法門の中に於て、當に何んが此教を名くべき、我當に云何が奉持すべき。』佛、勝義生菩薩に告げて曰はく、『善男子、此を勝義了義の教と名く。此勝義了義の教に於て、汝當に奉持すべし。』

此勝義了義の教を說きたまふ時、大會の中に於て、六百千の衆生有り、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、三百千の聲聞遠塵離垢して諸法の中に於て法眼淨を得、一百五十千の聲聞諸漏を永盡して心解脫を得、七十五千の菩薩無生法忍を得たり。

解深密經卷第二　終

【分別瑜伽品】唯識止觀の行門を明す。卽ち三乘止觀の行は方便善巧相應の義あって正理に合し正行に順じ勝果を得るが故に瑜伽と名く。
【一】初に廣く止觀の相を辨ず。中に十八門あり、一に分別依住止觀門
【法假安立】一切諸法皆名言を離るるも、假に十二分教を安立するなり
【二】二に止觀所緣差別門、
【有分別影像所緣】地前の菩薩の推求有分別の觀智の上に現れし影像の境
【無分別影像所緣】亦地前無分別の定

解深密經　卷第三

大唐三藏法師玄奘詔を奉じて譯す

分別瑜伽品第六

(一)爾時、慈氏菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、『世尊、菩薩は何をか依とし、何にか住して、大乘の中に於て奢摩他毘鉢舍那を修する。』佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、『善男子、當に知るべし、菩薩は法假安立と及び阿耨多羅三藐三菩提の願を捨てざることを依と爲し住と爲して、大乘の中に於て奢摩他毘鉢舍那を修す。』

(二)慈氏菩薩、復佛に白して言さく、『世尊の說きたまふが如し、四種の所緣の境事あり。一には有分別影像所緣の境事、二には無分別影像所緣の境事、三には事邊際所緣の境事、四には所作成辦所緣の境事なり。此四の中に於て、幾くか是れ奢摩他の所緣の境事なる。幾くか是れ毘鉢舍那の所緣の境事なる。幾くか是れ倶所緣の境事なる。』佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、『善男子、一は是れ奢摩他の所緣の境事なり、謂く、無分別の影像なり。一は是れ毘鉢舍那所緣の境事なり、謂く、有分別の影像なり。二は是れ倶所緣の境事なり、謂く、事邊際と所作成辦となり。』

心の上に現れたる影像。

【事邊際所縁】十地菩薩の正觀所縁の眞如なり、眞如は五蘊、十二處、十八界、四諦の事法に通達する故に事邊際といふ。

【所作成辦所縁】所作成辦せる佛地の正觀の所縁たる有情饒益事理の功德なり

【四】分別能求止觀門

【身輕安】禪定に入るが、前五識と相應し、身を輕利安適ならしむ。

【心輕安】入定の時第六識と相應し心を輕利安適ならしむ

【三摩地】等持と譯す、心を一境に集注して散亂せしめざるなり。

【五】內に隨順止觀作意門

(四)慈氏菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩は、是四種の奢摩他、毘鉢舍那所縁の境事に依りて、能く奢摩他を求め、能く毘鉢舍那を善くするや。』佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、『善男子、我菩薩の爲に說く所の法假安立の如きは、謂ゆる契經、應頌、記別、諷頌、自說、因緣、譬喩、本事、本生、方廣、希法、論議なり。菩薩は此に於て善く聽き、善く受け、言善く通利し、意善く尋思し、見善く通達し、即ち是の如きの善思惟の法に於て、獨り空閑に處して作意し、思惟す。復即ち此能く思惟する心に於て、內心に相續して作意し思惟す。是の如く正行に多く安住するが故に、身輕安及び心輕安を起す、是を奢摩他と名く。是の如く菩薩は能く奢摩他を求む。彼身心の輕安を獲得するを、所依と爲すに由るが故に、即ち善く思惟する所の法の如き內の三摩地所行の影像に於て觀察し、勝解し、心相を捨離し、即ち是の如き三摩地影像の所知の義の中に於て、能く正しく思擇し、最極に思擇し、周遍く尋思し、周遍く伺察するところの、若は忍、若は樂、若は慧、若は見、若は觀、是を毘鉢舍那と名く。是の如く菩薩は能く毘鉢舍那を善くす。』

(五)慈氏菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、若は諸の菩薩、心を緣じて境と爲す內の思惟の心、乃至未だ身心の輕安を得ざる有ゆる作意を、當に何等とか名くべき。』佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、『善男子、奢摩他の作意に非ず、是は奢摩他に隨順する勝解相應の作意なり。』『世尊、若し諸の菩薩、乃至未だ身心の輕安を得ず、所思の如き有ゆる諸法の內の三摩地所緣の影像に於て作意し、思惟すれば、是の如き作意を、當に何等とか名くべき。』

【五】五に止觀二道同異門。

【六】六に分別止觀章義門。

【識の所縁】識とは能縁の見分、所縁とは境の相分なり、是れ能所縁相對して見分相分を說く。唯識の所現とは識は能變の自體分、所現とは所變の相見二分にして能所變相對して三分本末の義を說き唯識轉變の妙理を示す。

【此中少法の等】見らるる一微塵の

『善男子、毘鉢舍那の作意に非ず、是れ毘鉢舍那に隨順する勝解相應の作意なり。』

(五)慈氏菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、奢摩他道と毘鉢舍那道とは、當に異り有りと言ふべきや、當に異り無しと言ふべきや。』佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、『善男子、當に異り有るに非ず、異り無きに非ずと言ふべし。何が故に異り有るに非ずとならば、毘鉢舍那所縁の境は、心を所縁と爲すを以ての故なり。何が故に異り無きに非ずとならば、有分別の影像は所縁に非ざるが故なり。』

(六)慈氏菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、諸の毘鉢舍那三摩地所行の影像は、彼、此心と當に異り有りと言ふべきや、當に異り無しと言ふべきや。』佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、『善男子、當に異り無しと言ふべし。何を以ての故に。彼影像は唯是れ識なるに由るが故に、善男子、我、識の所縁は唯識の所現なりと說くが故なり。』『世尊、若し彼所行の影像は、卽ち此心と異り有ること無くんば、云何が此心還つて此心を見る。』『善男子、此中に少法の能く少法を見る有ること無し。然るに此心是の如く生ずる時、卽ち是の如き影像有りて顯現す。善男子、善く瑩ける淸淨の鏡面に依りて、質を以て縁と爲して還つて本質を見るを、而も我今影像を見ると謂ひ、及び質を離れて別に所行の影像あつて顯現すと謂ふが如く、是の如く此心生ずる時、異り有るに相似たる三摩地所行の影像顯現す。』『世尊、若し諸の有情自性にして、住して色等を縁ずる心の所行の影像は、彼、此心と亦異ること無きや。』『善男子、亦異り有ること無し。而るに諸の愚夫顚倒の覺に由りて、諸

の影像に於て、如實に唯是れ識なりと知ること能はずして、顚倒の解を作す。』

(七)慈氏菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、何に齊りて、當に菩薩に一向に毘鉢舍那を修すと言ふべきや。』佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、『善男子、若は相續作意して、唯心相を思惟するのみなり。』『世尊、何に齊りて當に菩薩は一向に奢摩他を修すと言ふべき。』『善男子、若は相續作意して、唯無間心を思惟するのみなり。』『世尊、何に齊りて當に菩薩には奢摩他と毘鉢舍那と和合して俱に轉ずと言ふべき。』『善男子、若は正しく思惟する心一境性なり。』『世尊、云何が心相なる。』『善男子、謂く、三摩地所行の有分別の影像、毘鉢舍那の所緣なり。』『世尊、云何が無間心なる。』『善男子、謂く、彼影像を緣ずるの心、奢摩他の所緣なり。』『世尊、云何が心一境性なる。』『善男子、謂く、三摩地所行の影像は唯是れ其識なりと通達し、或は此に通達し已りて、復如性を思惟するなり。』

(八)慈氏菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、毘鉢舍那に凡そ幾種か有る。』佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、『善男子、略して三種有り。一には有相毘鉢舍那、二には尋求毘鉢舍那、三には伺察毘鉢舍那なり。云何が有相毘鉢舍那なる、謂く、純ら三摩地所行の有分別影像を思惟する毘鉢舍那なり。云何が尋求毘鉢舍那なる、謂く、慧に由るが故に、遍く彼彼の善く解了せざる一切法の中に於て、善く了せんが爲の故に作意し、思惟する毘鉢舍那なり。云何が伺察毘鉢舍那なる。謂く、慧に由るが故に、遍く彼彼の善く解了せる一切法の中に於て、善く極解脫を證得せんが爲の故に作意し、思惟する毘鉢舍那なり。』

少法と雖も心外の法に非ず。一切悉く皆心內の影像に非ざるなし。

【質】本質。鏡中に映じたる影像に對して、その眞の面像を本質といふ。

【顚倒の解】影像は心を離れざるに愚夫は心亂るるに由り、諸の影像を心外の解となすなり。

【七】七に修習止觀單雙門。

【無間心】間斷なく相續して法義を緣ずる觀心。

【心一境性】一切法は一の依他心を離れざる境の故、又其實性は一の眞如心なる故にいふ。

【八】八に止觀種數差別門。

【八種】八定なり色界定の四靜慮と無色界定の四定これなり。
【九】九に依不依法止觀門。
【靑瘀等】不淨觀中の九想觀なり。
【一切行は皆是れ無常等】是れ四法印、法相を觀ずる楷定不易の義を法印と名く。
【隨法行の菩薩】根利なるが故に、自ら諸法に隨つて修行す。
【隨信行の菩薩】根鈍なるが故に、他の教を信ずるに

慈氏菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、是奢摩他に凡そ幾種か有る。』佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、『善男子、卽ち彼無間心に隨ふに由るが故に、當に知るべし、此中亦三種有りと。復八種有り、謂く、初靜慮乃至非想非非想處に各一種の奢摩他有るが故なり。復四種有り、謂く慈悲喜捨の四無量の中に各一種の奢摩他有るが故なり。』

(九)慈氏菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、法に依る奢摩他毘鉢舍那と說き、法に依らざる奢摩他毘鉢舍那と說きたまへるが如き、云何が法に依る奢摩他毘鉢舍那と名け、云何が復法に依らざる奢摩他毘鉢舍那と名くる。』佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、『善男子、若し諸の菩薩、先に受けたる所、思へる所の法相に隨つて、其義に於て奢摩他毘鉢舍那を得るをば、法に依る奢摩他毘鉢舍那と名く。若は諸の菩薩、受けたる所、思へる所の法相を待たずして、但他の教誡教授に依りて、其義に於て、奢摩他毘鉢舍那を得る有り。謂く、靑瘀なり、及び膿爛等なり、或は一切の行は皆是れ無常なり、或は諸行は苦なり、或は一切法は皆我有ること無し、或は復涅槃は畢竟寂靜なりと觀ずる、是の如き等の類の奢摩他毘鉢舍那を法に依らざる奢摩他毘鉢舍那と名く。法に依止して、奢摩他毘鉢舍那を得るに由るが故に、我隨法行の菩薩を施設す、是れ利根の性なり。法に依らずして、奢摩他毘鉢舍那を得るに由るが故に、我隨信行の菩薩を施設す、是れ鈍根の性なり。』

慈氏菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、別法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那と說き、復總法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那と說くが如き、云何が名けて、別法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那と爲し、

隨って修行す。

【轉依】煩惱を轉捨して菩提を轉得し、生死を轉捨して涅槃を轉得す、即ち佛果の菩提と涅槃とを二轉依の妙果といふ、

【後後慧】能緣の智を擧げて所緣の教を辨じ智一に非ざるを顯す故に後後といふ、上上智なり、

云何が復總法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那と名くる。佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、善男子、若は諸の菩薩各別の契經等の法を緣じて、受くる所、思惟する所の如き法に於て、奢摩他毘鉢舍那を修する、是を別法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那と名く。若は諸の菩薩、即ち一切契經等の法を緣じて、集めて一團、一積、一分、一聚と爲して作意し、思惟す此一切法は眞如に隨順し、眞如に趣向し、眞如に臨入す。菩提に隨順し、涅槃に隨順し、轉依に隨順し、及び彼に趣向し、或は彼に臨入す。此一切法は無量無數の善法を宣說すと、是の如く思惟して、奢摩他毘鉢舍那を修するを、是を總法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那と名く。

慈氏菩薩、復佛に白して言さく、世尊、小總法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那を說き、復大總法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那を說き、又無量の總法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那を說きたまふが如き、云何が小總法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那と名け、云何が大總法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那と名け、云何が復無量の總法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那と名くるや。佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、善男子、若は各別の契經乃至各別の論議を緣じて、一團等と爲して作意し思惟するを、當に知るべし、是を小總法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那と名くることを。若は乃至受くる所、思ふ所の契經等の法を緣じて一團等と爲し、作意し、思惟して、各別を緣ずるに非ざるを、當に知るべし、是を大總法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那と名くることを。若は無量なる如來の法教、無量なる法句文字、無量なる後後慧の照了する所を一團等と爲して、作意し思惟して、乃至受くる所、思ふ所を緣ずるに非ざるを。當に知るべし、是を無量の總

【樂法樂】無分別智の眞如法界を證して喜ぶを法樂といひ、其法樂を受け樂しむを樂法樂といふ。

【十方無差別の相等】十方無邊無分限の相を了達する光ことを普く文字の如明を習識すといふが如きを法光明といふ。

【極喜地】菩薩十地中の第一地。

【初業の菩薩】未登地未通達の菩薩をいふ。

【一】第十有尋伺等九別門。

【取らるる如き尋伺等】三釋を答ふるに二說あり、一は菩薩地前の觀行について三に分つ、尋伺とは思と

法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那と名くることを。」

慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、菩薩は何に齊りて、總法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那を得ると名くるや。」佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「善男子、五緣に由るが故に、當に知るべし、得ると名くと。一には思惟する時に於て、刹那刹那に一切麤重の所依を融銷し、二には種種の想を離れて樂法樂を得、三には十方無差別の相、無量の法光を解了す、四には所作成滿し、淨分に相應する無分別の相、恆に現在前す、五には法身をして成滿を得しめんが爲の故に、後後の轉勝妙なる因を攝受するなり。」

慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、此總法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那は、當に何れよりか名けて通達と爲し、何れよりか得と名くと知るべきや。」佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「善男子、初の極喜地より名けて通達と爲し、第三の發光地より乃ち名けて得と爲す。善男子、初業の菩薩も亦是中に於て隨學し作意す。未だ歎ずべからずと雖も、應に懈廢すべからず。」

(一)慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、是奢摩他毘鉢舍那を、云何が有尋有伺三摩地と名け、云何が無尋唯伺三摩地と名け、云何が無尋無伺三摩地と名くるや。」佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「善男子、取らるる如き尋伺の法相に於て、若は麤顯の領受觀察ある諸の奢摩他毘鉢舍那、是を有尋有伺三摩地と名く、若は彼相に於て、麤顯の領受觀察無しと雖も、而も微細の彼光明の念の領受觀察ある諸の奢摩他毘鉢舍那を、是を無尋唯

慧との分別心なり。尋何分別の麤なるを第一、細なるを第二、尋何分別を離れ眞如無相を観ずる無分別観を第三とす。

【復次等】以下は第二地前地上に通じて三を分つ。地前加行位の中煖頂善根の名、義、自性差別を尋求する四尋何観を第一、忍世第一善根の如實に了知する四如實の覺を第二、地上の尋何分別を離れたる無分別智の眞如觀を第三とす。

【二】第十一に止擧捨相差別門。

【二の隨煩惱】惛沈、掉擧なり。

【三】第十二知法知義差別門。初に所知に約して知法、知義を明す。中を二に分って初に知法、

【彼二の依止】文によりて名を成じ、名によりて句を成

何三摩地と名く。若し即ち彼一切法相に於て、都て作意、領受、観察無き諸の奢摩他毘鉢舍那を、是を無尋無伺三摩地と名く。復次に、善男子、若は尋求有る奢摩他毘鉢舍那を、是を有尋有伺三摩地と名け、若は伺察有る奢摩他毘鉢舍那を、是を無尋唯伺三摩地と名け、若は總法を縁ずる奢摩他毘鉢舍那を、是を無尋無伺三摩地と名く。』

〔二〕慈氏菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、云何が止の相、云何が擧の相、云何が捨の相なる。』佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、『善男子、若は心掉擧し、或は掉擧を恐るる時の諸の可厭の法の作意、及び彼無間心の作意を、是を止の相と名く。若は心沈沒し、或は沈沒を恐るる時の諸の可欣の法の作意、及び彼心相の作意を、是を擧の相と名く。若は一向止道に於て、或は一向觀道に於て、或は雙運轉道に於て二の隨煩惱に染汚せらるる時の諸の無功用の作意、及び心任運轉の中なる有ゆる作意を、是を捨の相と名く。』

〔三〕慈氏菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、奢摩他毘鉢舍那を修する諸の菩薩衆の知法知義とは、云何が知法なる、云何が知義なる。』佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、『善男子、彼諸の菩薩は、五種の相に由りて法を了知す。一とは名を知り、二には句を知り、三には文を知り、四には別を知り、五には總を知る。云何が名と爲す、謂く、一切染淨の法の中に於て、所立の自性を想の假に施設するものなり。云何が句と爲す、謂く、即ち彼名の聚集する中に於て、能く隨つて諸の染淨の義を宣說する依持建立なり。云何が文と爲す、謂く、即ち彼二の依止する所の字なり。云何が彼各別に於て了知する、謂く、各別の所縁

を作意するに由る、云何が彼總合を了知する、謂く、總合の所縁の作意するに由る。是の如き一切を、總略して一と爲すを名けて知法と爲し、是の如きを名けて菩薩の知法と爲す。

善男子、彼諸の菩薩は、十種の相に由りて義を了知す。一には盡所有性を知り、二には如所有性を知り、三には能取の義を知り、四には所取の義を知り、五には建立の義を知り、六には受用の義を知り、七には顚倒の義を知り、八には無倒の義を知り、九には雜染の義を知り、十には清淨の義を知る、善男子、盡所有性とは、謂く、諸の雜染と清淨の法の中の有ゆる一切の品別の邊際、是を此中の盡所有性と名く。五數の蘊、六數の內處、六數の外處の如き、是の如き一切なり。如所有性とは、謂く、即ち一切染淨の法の中の有ゆる眞如、是を此中の如所有性と名く。此に復七種あり、一には流轉眞如、謂く、一切の行の先後無きの性なり。二には相眞如、謂く、一切法の補特伽羅無我の性及び法無我の性なり。三には了別眞如、謂く、一切の行、唯是れ識の性なり。四には安立眞如、謂く、我說く所の諸の苦聖諦の性なり。五には邪行眞如、謂く、我說く所の諸の集聖諦なり。六には清淨眞如、謂く、我說く所の滅聖諦なり。七には正行眞如、謂く、我說く所の諸の道聖諦なり。當に知るべし、此中流轉眞如、安立眞如、邪行眞如に由るが故に、一切有情、平等平等なり、相眞如、了別眞如に由るが故に、一切諸法平等平等なり、清淨眞如に由るが故に、一切の聲聞の菩提と獨覺の菩提と阿耨多羅三藐三菩提と平等平等なり、正行眞如に由るが故に、正法を聽聞し、總境界を緣ずる勝れたる奢摩他毘鉢舍那

ず、即ち文は名句を成ずる第一位にして名句の二の所依なり。

【善男子、彼諸の菩薩等】以下知義を明す、初に止觀知義。中を四に分つて初に十義に約して明す。

【盡所有性】染淨の諸法中、所有の一切品類差別を周盡して知ること。以下十義の別釋。

【五數の蘊】五蘊

【六數の內處】六根眼耳鼻舌身意の六根

【六數の外處】六境色聲香味觸法の六境

【如所有性】染淨法中の一味眞如平等法性なり。

【流轉眞如】流轉とは有爲法、其實性の失はざるを眞如といふ。

【安立眞如等】以下四諦の眞如實相

【平等平等】一切諸法皆眞如唯識の道理を以て自性となす故、諸法平等

なり。

【能取の義等】能取の心若し心に緣取せらるる時は亦所取の對境となる

【資具】器物。

【離繫の菩提分法】煩惱の繫縛を離るる三十七菩提分法なり、

【復次に善男子】五義に對して知義を明す、

に攝受せらるる慧平等平等なりと云ふことを。能取の義とは、謂く、內の五色處、若は心意識及び諸の心法なり。所取の義とは、謂く、外の六處なり。又能取の義も亦所取の義なり。建立の義とは、謂く、器世界なり、中に於て一切の諸の有情界を建立することを得べし、謂く、一村田、若は百村田、若は千村田、若は百千村田、或は一大地の海の邊際に至る、此百、此千、若は此百千、或は一の瞻部洲、此百、此千、若は此百千、或は一の四大洲、此百、此千、若は此百千、或は一小千世界、此百、此千、若は此百千、或は一の三千大千世界、此百、此千、若は此百千、或は此拘胝、此百拘胝、此千俱胝、此百千拘胝、或は此無數、此百無數、此千無數、此百千無數、或は三千大千世界の無數、百千の微塵の量等、十方面に於ける無量無數の諸の器世界なり。受用の義とは、謂く、我說く所の諸の有情類は、受用の爲の故に、資具を攝受す。顚倒の義とは、謂く、卽ち彼能取等の義に於て、無常を常と計する想倒、心倒、見倒、苦を計して樂と爲し、不淨を淨と計し、無我を我と計する想倒、心倒、見倒なり。無倒の義とは、上と相違し、彼を對治するものなり。應に其相を知るべし。雜染の義とは、謂く、三界の中の三種の雜染なり、一には煩惱雜染、二には業雜染、三には生雜染なり。清淨の義とは、謂く、卽ち是の如き三種の雜染の有ゆる離繫の菩提分法なり。善男子、是の如きの十種、當に知るべし、普く一切の諸義を攝むることを。復次に善男子、彼諸の菩薩、能く五種の義を了知するに由るが故に、名けて知義と爲す。何等か五義なる。一には遍知の事、二には遍知の義、三には遍知の因、四

【此中遍知の事等】五義を別釋す。

【世俗の故等】以下遍知の義を別釋するに十一門あり。

【二を取る菩提分法】佛果の無上菩提と二乘の菩提との二。

【毘奈耶】ギナヤ(Vinaya)滅と譯す、永く三毒を滅して遺餘なきなり。

【共にし共にせざる】聲聞及び諸如來の八解脫等を共の功德、力無畏等一百四十を不共の功德とす。

【復次に善男子】以下四種義に約して知義を明す。

には遍知の果を得、五には此に於て覺了せしむるなり。善男子、此中遍知の事とは、當に知るべし、即ち是れ一切の所知なりと。謂く、或は諸の蘊、或は諸の內の處、或は諸の外の處、是の如きの一切なり。遍知の義とは、乃至有ゆる品數差別の應に知るべき所の境なり。謂く、世俗の故に、或は勝義の故に、或は功德の故に、或は過失の故に、緣の故に、世の故に、或は生じ或は住し、或は壞する相の故に、或は病等の如くなるが故に、或は苦集等の故に、或は眞如、實際、法界等の故に、或は廣略の故に、或は一向記の故に、或は分別記の故に、或は反問記の故に、或は置記の故に、或は隱密の故に、或は顯了の故に、是の如き等の類、當に知るべし、一切を遍知の義と名くることを。遍知の因と言ふは、當に知るべし、即ち是れ能く前の二を取る菩提分法なりと。謂ゆる念住、或は正斷等なり。遍知の果を得るとは、謂く、貪恚癡を永く斷ずる毘奈耶、及び貪恚癡の一切を永く斷ずる諸の沙門果、及び我說く所の聲聞と如來と若は共にし共にせざると世出世間との有ゆる功德を、彼に於て作證するなり。此に於て覺了せしむるとは、謂く、即ち此作證の法の中に於て、諸の解脫智もて、廣く他の爲に說き、宣揚し、開示するなり。善男子、是の如きの五義は、當に知るべし、普く一切の諸義を攝むることを。復次に善男子、彼諸の菩薩は、能く四種の義を了知するに由るが故に、名けて知義と爲す。何等か四義なる。一には心執受の義、二には領納の義、三には了別の義、四には雜染清淨の義なり。善男子、是の如きの四義は、當に知るべし、一切の諸義を攝むることを。復次に善男子、彼諸の

【雑染清淨】染淨の法。以上の身受心法は四念處觀の境なり。

【復次に善男子等】三種義に約して知義を釋す。

【義の義】名句文に詮顯されたる義理。

【法界】五蘊等種種諸法の差別界。

【三】第二に三慧による知義を明す初に三慧知義の差別を明す。

菩薩は、能く三種の義を了知するに由るが故に、名けて知義と爲す。何等か三義なる、一には文の義、二には義の義、三には界の義なり。善男子、文の義と言ふは、謂く、名身等なり。義の義とは、當に知るべし、復十種有ることを。一には眞實相、二には遍知相、三には永斷相、四には作證相、五には修習相、六には即ち彼眞實相等の品差別の相、七には所依能依相屬相、八には即ち遍知等の障礙法の相、九には即ち彼隨順法の相、十には不遍知等及び遍知等の過患功德相なり。界の義と言ふは、謂く、五種の界なり。一には器世界、二には有情界、三には法界、四には所調伏界、五には調伏方便界なり。善男子、是の如き五義は、當に知るべし、普く一切の諸の義を攝むることを。」

〔一一三〕慈氏菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、若は聞所成の慧、其義を了知し、若は思所成の慧、其義を了知し、若は奢摩他毘鉢舍那の修所成の慧、其義を了知す、此れ何の差別かある。」佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、「善男子、聞所成の慧は、文に依止して、但其說の如くにして、未だ意趣を善くせず、未だ現在前せず、解脫に隨順すれども、未だ解脫を成ずる義を領受すること能はず。思所成の慧も亦文に依る、惟說の如くなるのみならず、能く意趣を善くすれども、未だ現在前せず、轉解脫に順ずれども、未だ解脫を成ずる義を領受すること能はず。若は諸の菩薩の修所成慧は亦は文に依り、亦は文に依らず、亦は其說の如く、亦は其說の如くならず、能く意趣を善くし、所知の事の同分なる三摩地所行の影像現前す、極めて解脫に順じ、已に能く解脫を成ずる義を領受す。善男子、是を三種の知義

の差別と名く。』

(一四)慈氏菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、奢摩他毘鉢舍那を修する諸の菩薩衆の知義知法にて、云何が智と爲し、云何が見と爲す。』佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、『善男子、我無量の門もて、智と見との二種の差別を宣説せり、今當に汝が爲に略して其相を說くべし。若は總法を緣じて奢摩他毘鉢舍那を修する有ゆる妙慧、是を名けて智と爲す。若は別法を緣じて奢摩他毘鉢舍那を修する有ゆる妙慧、是を名けて見と爲す。』

(一五)慈氏菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、奢摩他毘鉢舍那を修する諸の菩薩衆は、何の作意に由りて、何等をか、云何が諸相を除遣するや。』佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、『善男子、眞如作意に由りて、法の相及び義の相を除遣す。若は其名及び名の自性に於て、無所得なる時、亦彼所依の相をも觀ぜず。是の如く除遣す。其名に於けるが如く、句に於て、文に於て、一切の義に於て、當に知るべし亦爾り。乃至界及び界の自性に於て、無所得なる時、亦彼所依の相をも觀ぜず、是の如く除遣す。』『世尊、諸の了知する所の眞如の義相あり、此眞如の相も亦遣るべきや不や。』『善男子、了知する所の眞如の義の中に於て、都て相有ること無く亦所得無し、當に何の遣る所かあるべき。善男子、我說く、眞如の義を了知する時、能く一切の法義の相を伏す。此了達は餘の能く伏する所に非ず。』

(一六)『世尊、世尊の說きたまへるが如き、濁水器の喩、不淨鏡の喩、撓泉池の喩にては、自の面影の相を觀察するに任へず。若し堪任る者あれば上と相違す。是の如く若し善く心を

【一四】次に智見の差別を明す。

【智と見】智とは慧の上の決斷の用見とは推求の用をいふ。

【一五】第二段に除遣諸相門なり。中初に除遣諸相を問答分別す。

【眞如作意】眞如無相の理を緣ずる觀なり。

【一六】次に堪忍觀察を問答分別す。

修せざること有れば、則ち如實に有ゆる眞如を觀察するに堪任せず。若し善く心を修すれば、觀察するに堪任すと。此は何等の能觀察の心を說き、何なる眞如に依りて、而も是說を作したまふや。」『善男子、此は三種の能觀察の心を說けるなり。謂く、聞所成能觀察の心、若は思所成能觀察の心、若は修所成能觀察の心なり。了別眞如に依りて是の如きの說を作せり。』

【一七】「世尊、是の如く法義を了知する菩薩、諸相を遣らんが爲に加行を勤修す。幾種の相ありてか除遣すべきこと難きや、誰か能く除遣するや。」『善男子、十種の相あり、空能く除遣す。何等をか十と爲す。一には法義を了知するが故に、種種の文字の相有り、此は一切法空に由りて、能く正しく除遣す。二には安立眞如の義を了知するが故に、生滅住異の性、相續隨轉の相有り、此は相空及び無先後空に由りて、能く正しく除遣す。三には能取の義を了知するが故に、顧戀身の相及び我慢の相有り、此は內空及び無所得空に由りて、能く正しく除遣す。四には所取の義を了知するが故に、顧戀財の相あり、此は外空に由りて、能く正しく除遣す。五には受用の義、男女の承事と資具の相應とを了知するが故に、內の安樂の相、外の淨妙の相あり、此は內外空及び本性空に由りて、能く正しく除遣す。六には建立の義を了知するが故に、無量の相有り、此は大空に由りて、能く正しく除遣す。七には無色を了知するが故に、內の寂靜解脫の相有り、此は有爲空に由りて能く正しく除遣す。八には相眞如の義を了知するが故に、補特伽羅無我の相、法無我の相、若は唯識の

【一七】次に難除の諸相を問答分別す。中に三を分ち、初に難除の相等を問答分別す。

【相空】生住等の四相を遣るを相空、流轉を遣るを無先後空とす。

【能取】內の六根

【顧戀身の相】我根等諸法を能取するなり。我慢の相とは我心等他に勝るるに由るが故に

【內空】內の六處を空ずるなり。

【所取】外の六處

【顧戀財の相】財實を愛著する我所

相、及び勝義の相有り。此は畢竟空、無性空、無性自性空及び勝義空に由りて、能く正しく除遣す。九には淸淨眞如の義を了知するに由るが故に、無爲の相、無變異の相有り、此は無爲空と、無變異空とに由りて、能く正しく除遣す。十には卽ち彼相の對治の空性に於て、作意し思惟するが故に、空性の相有り、此は空空に由りて能く正しく除遣す。」

(一八)世尊、是の如き十種の相を除遣する時、何等を除遣して、何等の相に從うて而も解脫を得るや。」「善男子、三摩地所行の影像の相を除遣して、雜染縛の相に從つて解脫を得て、彼をも亦除遣す。善男子、當に知るべし、勝れたるに就いて、是の如きの空、是の如きの相を治すと說く。一一一切の相を治せざるには非ず。譬へば無明は、乃至老死の諸の雜染法を生ずること能はざるに非ざれども、勝れたるに就いて、但能く行のみを生ずと說くが如し。是れ諸の行の親近の緣なるに由るが故なり。此中の道理も當に知るべし、亦爾りと。」

(一九)爾時、慈氏菩薩、復佛に白して言さく「世尊、此中何等の空か是れ總空の性相なる。若し諸の菩薩、是を了知し已らば、失壞有ること無く、空の性相に於て增上慢を離れん。」爾時、世尊、慈氏菩薩を歎じて曰はく「善い哉善い哉、善男子、汝今乃ち能く如來に是の如きの深義を請問し、諸の菩薩をして、空の性相に於て失壞有ること無からしむ。何を以ての故に。善男子、若し諸の菩薩、空の性相に於て失壞すること有る者は、便ち一切大乘を失壞すと爲せばなり。是故に、汝應に諦に聽き諦に聽くべし。當に汝が爲に

見の執相なり。「外空」外の六境を空ず。「本性空」一切法の本性は、有爲無爲を問はず、本性の然るありて、三乘及び餘の所作に非ざるをいふ。「建立の義」前說の器世間相、建立の義による故、三千世界等無量の相あり。「大空」十方空。「內の寂靜解脫の相」修定者の無色定を得て以て寂靜解脫涅槃となすをいふ。「有爲空」三界空「畢竟空」諸法畢竟不可得空。「無性空」實有法の少性たりとも得べきなしと空ずるなり。「無性自性空」諸法自ら能く、和合する所の性無きも、和合の自性あるをいふ。「勝義空」眞如勝

總空の性相を說くべし。善男子、若し依他起相及び圓成實相の中の一切品類の雜染清淨に於て、遍計所執相の畢竟じて遠離せる性及び此中に於て、都て無所得なる、是の如きを名けて大乘の中に於ける總空の性相と爲す。』

(二〇)慈氏菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、此奢摩他毘鉢舍那は、能く幾種の勝三摩地をか攝むる。』佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、『善男子、我所說の如く、無量の聲聞、菩薩、如來に無量種の勝三摩地あり。當に知るべし、一切皆此に攝めらると。』

(二一)『世尊、此奢摩他毘鉢舍那は何を以てか因と爲す。』『善男子、清淨の尸羅、清淨の聞思所成の正見を以て、其因と爲す。』『世尊、此奢摩他毘鉢舍那は何を以てか果と爲す。』『善男子、善清淨戒、清淨心、善清淨慧を以て、其果と爲す。復次に善男子、一切の聲聞及び如來等の所有の世間、及び出世間の一切の善法は、當に知るべし、皆是れ此奢摩他毘鉢舍那所得の果なりと。』『世尊、此奢摩他毘鉢舍那は、能く何の業をか作す。』『善男子、此は能く二縛を解脫するを業と爲す。謂ゆる相縛及び麤重縛なり。』

(二二)『世尊、佛の所說の如き、五種の繫の中に、幾くか是れ奢摩他の障、幾くか是れ毘鉢舍那の障、幾くか是れ倶の障なる。』『善男子、身と財とを顧戀するは、是れ奢摩他の障なり。諸の聖教に於て、欲するに隨ふことを得ず、是れ毘鉢舍那の障なり。相雜住することを樂むと。少きに於て喜足するとは、當に知るべし、倶の障なりと。第一に由るが故に、造修すること能はず。第二に由るが故に、修むる所の加行究竟に到らざるなり。』

義の理體、即ち空なりと觀ず。【無爲空】生住異滅の四相なきをいふ。【無變異空】五蘊皆空と觀ずる故。【空空】能除の空をも空ずるをいふ。【一八】第二に除相解脫を問答分別す。【一九】第三に總相空性を分別問答するなり。【一切大乘】大般若經に十八空を說く。【若し依他起相等】依他圓成の有なるをも一向に空ずる人を惡取空者といふ。【二〇】第十三に止觀能攝諸定地門。【二一】第十四に止觀因果作業門。【尸羅】戒のこと。清淨の尸羅とは止觀中の定共戒なり。【善清淨心】奢摩他の果。【善清淨慧】毘鉢舍那の果。

【二二】第十五に止觀諸障差別門。中に五、初に五繫能障止觀門。

【二三】次に五蓋能障止觀門、中に二あり、五蓋能障止觀。五蓋とは貪欲、瞋恚、睡眠、掉擧及び疑の五煩惱なり。

【惡作】所作を增惡する追悔の心所。

【睡眠】心を昏昧ならしむる煩惱。

【世尊何に齊りて等】次に止觀二道圓滿門。

【二四】第三に分別五種散動門。

【五種の妙欲】色等五塵の境を妙なりとする貪欲。

【三摩鉢底】等至と譯す。四禪八定の隨一の定に入り、定味を愛著するを愛味の三摩鉢底といふ。

【隨煩惱】根本煩

(二三)『世尊、五蓋の中に於て、幾ばくか是れ奢摩他の障、幾ばくか是れ毘鉢舍那の障、幾ばくか是れ倶の障なる。』『善男子、掉擧と惡作とは、是れ奢摩他の障なり、惛沈と睡眠と疑とは是れ毘鉢舍那の障なり、貪欲と瞋恚とは、當に知るべし倶の障なりと。』『世尊、何に齊りて奢摩他道の圓滿清淨を得ると名くるや。』『善男子、乃し有ゆる惛沈と睡眠とに至るまで正しく善く除遣す、是に齊りて、奢摩他道の圓滿清淨を得ると名く。』『世尊、何に齊りて毘鉢舍那道の圓滿清淨を得ると名くるや。』『善男子、乃し有ゆる掉擧と惡作とに至るまで正しく善く除遣す、是に齊りて毘鉢舍那道の圓滿清淨を得ると名く。』

(二四)『世尊、若は諸の菩薩は、奢摩他毘鉢舍那現在前する時に於て、應に幾種の心の散動法をか知るべき。』『善男子、應に知るべし、五種あることを。一には作意散動、二には外心散動、三には內心散動、四には相散動、五には麤重散動なり。善男子、若は諸の菩薩は大乘相應の作意を捨てて、聲聞獨覺相應の諸の作意の中に墮在す、當に知るべし、是を作意散動と名くることを。若は其外の五種の妙欲の諸の雜亂相に於ける有ゆる尋思の隨煩惱の中、及び其外の所緣の境の中に於て、心を縱にして流散す、當に知るべし、是を外心散動と名くと。若は惛沈及び睡眠に由り、或は沈沒に由り、或は愛味の三摩鉢底に由り、或は隨一の三摩鉢底の諸の隨煩惱に染汚せらるるに由るあり、當に知るべし、是を內心散動と名くることを。若は外相に依りて、內の等持所行の諸相に於て、作意し、思惟するを相散動と名く。若は內の作意を緣として、有ゆる諸受を生起し、麤重の身に由りて、

惱に隨從して生起する忿覆等の煩惱をいふ。【諸受】定中に受くる喜樂なり、之を計して我所となす。【麤重の身】麤重とは種子のこと、此により身硬澁なるに、此を謬計して自在の身となす。【二五】第四止觀所持十一障門。【障】これに我執より起る煩惱障と法執より起る所知障の二あり。【二六】第十六に止觀能證菩提門なり

我を計し、慢を起すあり、當に知るべし、是を麤重散動と名くることを。』

(二五)『世尊、此奢摩他毘鉢舍那は、初の菩薩地より乃至如來地にて、何の障をか對治する。』『善男子、此奢摩他毘鉢舍那は、初地の中に於て、惡趣の煩惱と業と生との雜染障を對治し、第二地の中にては、微細の悞犯現行する障を對治し、第三地の中にては、欲貪障を對治し、第四地の中にては、定愛及び法愛の障を對治し、第五地の中にては、生死涅槃を一向に背趣する障を對治し、第六地の中にては、相多く現行する障を對治し、第七地の中にては、細相現行する障を對治し、第八地の中にては、無相に於て功用を作し、及び有相に於て自在を得ざる障を對治し、第九地の中にては、一切種の善巧の言辭に於て、自在を得ざる障を對治し、第十地の中にては、圓滿法身を證得するを得ざる障を對治す。善男子、此奢摩他毘鉢舍那は、如來地に於て、極微細、最極微細なる煩惱障及び所知障を對治す。能く是の如き障を永害するに由るが故に、究竟じて、無着無礙の一切の智見を證得し、所作成滿の所緣に依りて、最極淸淨なる法身を建立す。』

(二六)慈氏菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、云何が、菩薩は奢摩他毘鉢舍那に依りて、勤めて修行するが故に、阿耨多羅三藐三菩提を證得するや。』佛、慈氏菩薩に告げて曰はく、『善男子、若は諸の菩薩は、已に奢摩他、毘鉢舍那を得て、七眞如に依りて、聞く所思ふ所の如き法の中に於て、勝定の心に由りて、善く審定せる、善く思量せる、善く安立せる眞如性の中に於て、內に正しく思惟す。彼眞如に於て

【心の所執受等】以下四種相は次第の如く身受法心の四觀の境なり。
【內相等】內相とは六根、外相とは六境、根境合しては內外相といふ。
【正智の相等】今五相に約して且く勝說に就いて二相を明す。
【一切は是れ一切等】色心諸法の自相、一切を有する相とは可見不可見等一切差別の相なり。
【補特伽羅無我の相等】以下二は二無我相なり。
【繫蓋散動】五繫五蓋五散動あり。
【通達智】眞如に體會する根本無分別智。
【見道】世第一法位の無間に眞無漏無分別智を生じて親しく唯識の實性たる眞如の理を證

正しく思惟するが故に、心は一切の細相の現行に於て尙能く棄捨す。何に況んや麤相をや。善男子、細相と言ふは、謂く、心の所執受の相、或は領納の相、或は了別の相、或は雜染淨の相、或は內相、或は外相、或は內外の相、或は我當に一切の有情を利することを修行すべしと謂ふの相、或は正智の相、或は眞如の相、或は苦集滅道の相、或は有爲の相、或は無爲の相、或は有常の相、或は無常の相、或は苦有變異性の相、或は苦無異變性の相、或は有爲異相の相、或は有爲同相の相、或は一切は是れ一切なりと知り已りて、一切を有する相、或は補特伽羅無我の相、或は法無我の相なり。彼、現行するに於て心能く棄捨す。彼既に多く是の如きの行に住するが故に、時時の間に於て、其一切の繫蓋散動に從ひて、善く心を修治す。是より已後、七眞如に於て、七各別なる自ら內に證する所の通達智生ずることあり、名けて見道と爲す。此を得るに由るが故に、菩薩の正性離生に入り、如來の家に生れ、初地を證得すと名く。又能く此地の勝德を受用す。彼、先時に於て、奢摩他毘鉢舍那を得たるに由るが故に、已に二種の所緣を得たり。謂く、有分別影像の所緣及び無分別影像の所緣なり。彼今時に於て、見道を得るが故に、更に事邊際の所緣を證得す。復後後の一切地の中に於て、修道を進修す。即ち是の如き三種の所緣に於て、作意し、思惟す。譬へば人有りて其細楔を以て麤楔を出すが如く、是の如く菩薩は、此楔を以て楔を出す方便に依りて、內相を遣るが故に、一切の雜染分別に隨順する相皆悉く除遣す。相を除遣するが故に、麤重をも亦遣る。一切の相と麤重とを永へに害するが故に、漸次に彼

し、分別起の二障を斷ずる位をいふ十地中初歡喜地の位に當る。
【正性離生】正性とは無漏の聖道、離生とは見道所斷分別の煩惱なり。見道の異名なり。
【一七】以下第十七引發廣大威德門。
【不可覺知堅住器の識】第八識なり
【或は頓に一念等】これ無漏の意識なり、後得智なれば分別の意識といふ
【小相所緣の識】以下五は五相に約して第八阿賴耶識を說く。
【大相所緣の識】阿賴耶識は色界中に於て廣大執受の境を緣じ、廣大執受の所緣を了別す

後後の地の中に於て、錬金の法の如く其心を陶錬し、乃至阿耨多羅三藐三菩提を證得し、又所作成滿の所緣を得るなり。善男子、是の如く菩薩は内の止觀に於て、正しく修行するが故に、阿耨多羅三藐三菩提を證得す。」

(一七)慈氏菩薩、復佛に白して言さく「世尊、云何が修行して菩薩の廣大なる威德を引發するや。」「善男子、若し諸の菩薩、善く六處を知れば、便ち能く菩薩所有の廣大なる威德を引發す。一には善く心生を知り、二には善く心住を知り、三には善く心出を知り、四には善く心增を知り、五には善く心減を知り、六には善く方便を知る。云何が善く心生を知る、謂く、如實に十六行の心生起する差別を知る、是を善く心生を知ると名く。十六行の心生起する差別とは、一には不可覺知堅住器の識生ず、謂く、阿陀那識なり。二には種種行相所緣の識生ず、謂く、頓に一切の色等の境界を取る分別の意識、及び頓に内外の境界を取る覺受たり。或は頓に一念、瞬息、須臾に於て、現に多くの定に入り、多くの佛土を見、多くの如來を見る分別の意識なり。三には小相所緣の識生ず、謂く、色界繫の識なり。四には大相所緣の識生ず、謂く、色界繫の識なり。五には無量相所緣の識生ず、謂く、空と識との無邊處繫の識なり。六には微細相所緣の識生ず、謂く、無所有處繫の識なり。七には邊際相所緣の識生ず、謂く、非想非非想處繫の識なり。八には無相の識生ず、謂く、出世の識及び滅を緣ずる識なり。九には苦俱行の識生ず、謂く、地獄の識なり。十には雜受俱行の識生ず、謂く、欲に行ずる識なり。十一には喜俱行の識生ず、謂く、初二靜慮の識

なり。十二には樂俱行の識生ず、謂く、第三靜慮の識なり。十三には不苦不樂俱行の識生ず、謂く、第四靜慮より乃至非想非非想處の識なり。十四には染汚俱行の識生ず、謂く、諸の煩惱及び隨煩惱相應の識なり。十五には善俱行の識生ず、謂く、信等相應の識なり。十六には無記俱行の識生ず、謂く、彼と俱に相應せざる識なり。云何が善く心住を知る、謂く、如實に了別眞如を知るなり。云何が心出を知るや、謂く、如實に二種の縛を出づることを知る、謂ゆる相縛及び麤重縛なり。此は能く其心をして、是の如きより出でしむべきことを知るなり。云何が善く心增を知る、謂く、如實に、相縛麤重縛を治する心の、彼增長する時、彼積集する時に亦增長することを得、亦積集することを得と知るを、能く增を知ると名く。云何が善く心減を知る、謂く、如實に彼所對治の相及び麤重に雜染せらるる心の、彼衰退する時、彼損減する時に此も亦衰退し、此を亦損減すと知るを、善く減を知ると名く。云何が善く方便を知るや、謂く、如實に解脫、勝處及び遍處の或は修し、或は遣るを知るなり。善男子、是の如く菩薩は、諸の菩薩の廣大なる威德に於て、或は已に引發し、或は當に引發すべく、或は現に引發するなり。」

〔一八〕慈氏菩薩、復佛に白して言さく「世尊、世尊の說きたまふが如く、無餘依涅槃界の中に於て、一切の諸受、餘無く永く滅す。何等の諸受か此に於て永く滅する。」「善男子、要を以て之を言はば、二種の受ありて餘無く永く滅す。何等をか二と爲す、一には所依とし麤重の受、二には彼果たる境界の受なり。所依麤重の受に、當に知るべし、四種あり。一に

る故にいふ。

【雜受俱行の識】苦樂雜り受く欲界人天の識。

【不苦不樂】捨受なり。

【信等】十一の善の心所。

【心住】眞如は識心の所依實性なるをいふ。

【了別眞如】識の實性。唯識觀の智

【解脫】八解脫なり。

【勝處】八勝處なり。

【遍處】十遍處なり。

【一八】第十八於無餘依滅受門。

【無餘依涅槃】煩惱障を斷じて得たる涅槃。

は有色所依の受、二には無色所依の受、三には果已成滿麤重の受、四には果未成滿麤重の受なり。果已成滿の受とは、謂く、現在の受なり。果未成滿の受とは、謂く、未來の因受なり。彼果たる境界の受にも亦四種有り、一には依持の受、二には資具の受、三には受用の受、四には顧戀の受なり。有餘依涅槃界の中に於て果未成滿の受一切已に滅し彼對治の明の觸より生ぜられたる受を領し、共有或は復彼果已成滿の受を領受す、又二種の受一切已に滅して、唯現に明の觸より生ぜられたる受を領受す。無餘依涅槃界の中に於て、般涅槃する時、此も亦永く滅す。是故に說いて、無餘依涅槃界の中に於て、一切の諸受餘無く永く滅すと言ふなり。」

(二九)爾時、世尊、是語を說き已りて、復慈氏菩薩に告げて曰はく『善い哉善い哉、善男子。汝今善く、圓滿最極淸淨の妙瑜伽道に依止して、如來に請問す。汝瑜伽に於て已に決定の最極善巧を得、吾已に汝が爲に、圓滿最極淸淨の妙瑜伽道を宣說す。有ゆる一切の過去未來の正等覺者已說當說すること皆亦是の如し。諸の善男子若は善女人、皆應に此に依りて、勇猛精進して當に正しく修學すべし。』

(三〇)爾時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、頌を說いて曰はく『法假立の瑜伽の中に於て、若し放逸を行ずれば大義を失す。

此法及び瑜伽に依止して、若し正しく修行すれば大覺を得

有所得を見て免離を求め、若し此見を謂ひて得法と爲さば

【果未成滿麤重の受】未來の因たる現在の惑業相應の受。
【依持の受】器世界を緣ずる受。
【資具の受】資生の具を緣ずる受。
【受用の受】前二受の合說。
【顧戀受】財物を顧戀する受。
【果未成滿の受】以下有餘無餘二涅槃中の滅受の多少を說くに二種ある中第一。
【共有】器世界の受なり。
【二九】長行中大段第二結歎勸學。
【妙瑜伽道】止觀の妙道。
【三〇】頌もて重說す。

【三二】第三大段依教奉持分。

慈氏、彼瑜伽を去ること遠きこと、譬へば大地と虚空との如し
利生堅固にして作さず、悟り已りて勤修して有情を利す
智者此を作して劫量を窮め、便ち最上離染の喜を得
若し人欲の爲に法を說かば、彼を欲を捨てて還つて欲を取ると名く
愚癡は法の無價寶を得て、反つて更に遊行して乞匃す
諍諠雜戲論の著に於て、應に捨てて上精進を發起すべし
諸天及び世間を度せんが爲に、此瑜伽に於て汝當に學すべし

(三二)爾時、慈氏菩薩、復佛に白して言さく『世尊、是解深密法門の中に於て、當に何とか此教に名くべき。我當に云何が奉持すべき。』佛、慈氏菩薩に告げて曰はく『善男子、此を瑜伽了義の教と名く。此瑜伽了義の教に於て、汝當に奉持すべし。』此瑜伽了義の教を說く時、大會の中に於て、六百千の衆生ありて、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、三百千の聲聞遠塵離垢し、諸法の中に於て法眼淨を得、一百五十千の聲聞、諸漏永く盡きて、心に解脫を得、七十五千の菩薩、廣大なる瑜伽作意を獲得せり。

解深密經卷第三　終

【地波羅蜜多品】菩薩十地の修行を明す。卽ち前に云へる唯識の止觀行をば十地の階位を經て修することを示し、其行法を分ちて十波羅蜜多とす。

【一】初に廣く諸地を明す。中に六を分ち、今四種清淨及び十一分に約して諸地を分別す

解深密經　卷第四

大唐三藏法師玄奘　詔を奉じて譯す

地波羅蜜多品第七

(一)爾時、觀自在菩薩、佛に白して言さく、『世尊、佛所說の菩薩の十地の如き、謂ゆる極喜地、離垢地、發光地、焰慧地、極難勝地、現前地、遠行地、不動地、善慧地、法雲地なり、復佛地を說いて第十一と爲す。是の如きの諸地幾種の清淨かあり、幾分の所攝なるや。』

爾時、世尊、觀自在菩薩に告げて曰はく、『善男子、當に知るべし、諸地には四種の清淨ありて、十一分を攝む。云何が名けて四種清淨能く諸地を攝むと爲すや。謂く、增上意樂清淨に初地を攝め、增上戒清淨に第二地を攝め、增上心清淨に第三地を攝め、增上慧清淨は、後後の地に於て、轉勝妙なるが故に、當に知るべし、第四地より乃至佛地を攝む。善男子、當に知るべし、是の如く四種の清淨に、普く諸地を攝む。云何が名けて、十一種の分能く諸地を攝むと爲んや。謂く、諸の菩薩、先に勝解行地に於て、十法行に依りて、極めて善く勝解の忍を修習せるが故に、彼地を超過して、菩薩の正性離生に證入す。彼諸の菩薩、是因緣に由りて、此分圓滿す。而れども未だ微細の毀犯誤つ

【聞持陀羅尼】きくところの妙義を能持して忘れざること。

【等至愛】定愛なり。

【背趣】生死涅槃無差別の理を證り得ず一向に生死に背いて涅槃をとる二乘の作意なり。

て現行する中に於て、正知にして行ずること能はず。是因縁に由りて此分の中に於て、猶未だ圓滿せず。此分をして圓滿を得しめんが爲の故に、精勤修習して便ち能く證得し、彼諸の菩薩、是因縁に由りて、此分圓滿す。而れども未だ世間の圓滿なる等持、等至及び圓滿なる聞持陀羅尼を得ること能はず。是因縁に由りて、此分の中に於て、猶未だ圓滿せず。此分をして圓滿を得しめんが爲の故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼諸の菩薩、是因縁に由りて、此分圓滿す。而れども未だ獲得する所の菩提分法に隨つて、多く修習して、住せしむること能はず。心未だ諸の等至愛、及び法愛を捨つること能はず。是因縁に由りて、此分の中に於て、猶未だ圓滿せず。此分をして圓滿を得しめんが爲の故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼諸の菩薩、是因縁に由りて、此分圓滿す。而れども未だ諸諦の道理に於て、如實に觀察すること能はず。又未だ生死涅槃に於て、一向背趣の作意を棄捨すること能はず。又未だ方便所攝の菩提分法を修すること能はず。是因縁に由りて、此分の中に於て、猶未だ圓滿せず。此分をして圓滿を得しめんが爲の故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼諸の菩薩是因縁に由りて此分圓滿す。而れども未だ生死流轉に於て、如實に觀察すること能はず。又彼に於て多く厭を生ずるに由るが故に、未だ多く無相作意に住すること能はず。是因縁に由りて、此分の中に於て猶未だ圓滿せず。此分をして圓滿を得しめんが爲の故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼諸の菩薩、是因縁に由りて、此分圓滿す。而れども未だ無相作意をして、無缺無間に多く修習して住せしむること能は

【二】次に地の名義を釋す。

ず。是因緣に由りて、此分の中に於て、猶未だ圓滿せず。此分をして圓滿を得しめんが爲の故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼諸の菩薩、是因緣に由りて此分圓滿す。而れども未だ無相住の中に於て、功用を捨離すること能はず。又未だ相に於て自在なることを得る能はず。是因緣に由りて、此分の中に於て猶未だ圓滿せず。此分をして圓滿を得しめんが爲の故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼諸の菩薩、是因緣に由りて此分圓滿す。而れども未だ異名と衆相と訓詞との差別、一切品類の宣說法の中に於て大自在を得ること能はず。是因緣に由りて此分の中に於て猶未だ圓滿せず。此分をして圓滿を得しめんが爲の故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼諸の菩薩、是因緣に由りて、此分圓滿す。而れども未だ圓滿法身を現前に證受するを得ること能はず。是因緣に由りて、此分の中に於て猶未だ圓滿せず。此分をして圓滿を得しめんが爲の故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼諸の菩薩是因緣に由りて、此分圓滿す。而れども未だ遍く一切所知の境界に於て、無著無礙なる妙智妙見を得ること能はず。是因緣に由りて、此分の中に於て猶未だ圓滿せず。此分をして圓滿を得しめんが爲の故に、精勤修習して便ち能く證得す。是因緣に由りて此分圓滿す。此分滿ずるが故に、一切の分に於て皆圓滿することを得。善男子、當に知るべし、是の如きの十一種の分に普く諸の地を攝むることを。』

【三】觀自在菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、何の緣ありてか最初を極喜地と名け、乃至何の緣ありてか說いて佛地と名くるや。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、『善男子、大義を成

【難勝地】眞俗二智は互に相違するに由りて合觀すること難きを、此の地にて合して相應せしむるなり。

【清淨地】八地以上第六識の觀心純無漏清淨の故。

【麤重身】煩惱所知の二障を麤重といふ。種子の麤體を麤重身といふ。

【三】第三に二十二愚に約して諸地を分別す。

就して、未だ曾て得ざる出世間心を得し、大歡喜を生ず、是故に最初を極喜地と名く。一切微細の犯戒を遠離す、是故に第二を離垢地と名く。彼所得の三摩地及び聞持陀羅尼は、能く無量の智光を依止と爲るに由りて、是故に第三を發光地と名く。彼所得の菩提分法は、諸の煩惱を燒く、智は火焔の如くなるに由りて、是故に第四を焔慧地と名く。卽ち彼菩提分法に於て、方便修習すること最も極めて艱難なるに、方に自在を得るに由りて、是故に第五を極難勝地と名く。現前に諸行の流轉を觀察し、又無相に於て、多く修する作意方に現在前す。是故に第六を現前地と名く。能く遠かり缺くこと無く間無く無相の作意なるに證入し、清淨地と共に相隣接す、是故に第七を遠行地と名く、無相に於て無功用を得るに由りて、諸相の中に於て現行の煩惱の爲に動ぜられず、是故に第八を不動地と名く。一切種の說法に於て自在にして、無礙廣大の智慧を獲得す、是故に第九を善慧地と名く。麤重身の廣なる虛空の如くなること、法身圓滿して、譬へば大雲の如くに皆能く遍く覆ふ、是故に第十を法雲地と名く。最極微細の煩惱及び所知障を永斷し、無著無礙にして一切種所知の境界に於て、現に正等覺するが故に、第十一を說いて佛地と名く。』

(三)觀自在菩薩、復佛に白して言さく、『此諸地に於て幾くの愚癡あり、幾くの麤重ありて、所對治と爲るや。』

佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、『善男子、此諸地の中に、二十二種の愚癡と、十一種の麤重とありて所對治を爲す。謂く、初地に於て二の愚癡あり、一には補特伽羅及び法に執

【現前に諸行の等】有漏苦集の染汚法の相ありと執する愚なり。

【微細の相】相とは緣生の相、緣生は苦集二諦生滅の法なり。

【一向に無相等】純ら無相に於て作意し勤求し、未だ空中に有の勝行を起すことを能はざるなり。

著するの愚癡、二には惡趣雜染の愚癡、及び彼麤重を所對治と爲す。第二地に於て二の愚癡有り、一には微細誤犯の愚癡、二には種種業趣の愚癡及び彼麤重を所對治と爲す。第三地に於て二の愚癡有り、一には欲貪の愚癡、二には圓滿聞持陀羅尼の愚癡、及び彼麤重を所對治と爲す。第四地に於て二の愚癡有り、一には等至愛の愚癡、二には法愛の愚癡及び彼麤重を所對治と爲す。第五地に於て、二の愚癡有り、一には一向に作意して生死を棄背する愚癡、二には一向に作意して涅槃に趣向する愚癡、及び彼麤重を所對治と爲す。第六地に於て二の愚癡有り、一には現前に諸行の流轉を觀察する愚癡、二には相多く現行する愚癡、及び彼麤重を所對治と爲す。第七地に於て二の愚癡有り、一には微細の相現行する愚癡、二には一向に無相を作意し方便する愚癡、及び彼麤重を所對治と爲す。第八地に於て二の愚癡有り、一には無相に功用を作さしむる愚癡、二には相の自在なるに於ける愚癡、及び彼麤重を所對治と爲す。第九地に於て二の愚癡有り、一には無量の說法と無量の法句文字と後後の慧辯とに、陀羅尼自在なるに於けるの愚癡、二には辯才自在なるに於ける愚癡、及び彼麤重を所對治と爲す。第十地に於て二の愚癡有り、一には、大神通の愚癡、二には微細祕密なるに悟入するの愚癡及び彼麤重を所對治と爲す。如來地に於て二の愚癡有り、一には一切所知の境界に、極めて微細にして著する愚癡、二には極めて微細にして礙ふる愚癡、及び彼麤重を所對治と爲す。善男子、此二十二種の愚癡、及び十一種の麤重に由るが故に、諸地を安立し、而して阿耨多羅三藐三菩提は彼繫縛を離る。」

【四】第四に八種の殊勝に約して諸地を安立す。
【心淸淨】心とは禪定なり。
【悲淸淨】四無量中の悲無量。
【生淸淨】衆生を利せん爲に種種の生を受く。
【威德淸淨】神通等の威力なり。
【五】第五に殊勝生に約して諸境を分別す。

觀自在菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、阿耨多羅三藐三菩提は甚奇希有なり、乃至大利大果を成就し、諸の菩薩をして、能く是の如き大愚癡の羅網を破り、能く是の如き大麁重の稠林を越え、現前に阿耨多羅三藐三菩提を證得せしむ。』

(四)觀自在菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、是の如き諸地は、幾種の殊勝の安立する所なるや。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、『善男子、略して八種あり、一には増上意樂淸淨、二には心淸淨、三には悲淸淨、四には到彼岸淸淨、五には見物供養承事淸淨、六には成熟有情淸淨、七には生淸淨、八には威德淸淨なり。善男子、初地の中に於て、所有の増上意樂淸淨乃至威德淸淨、後後の諸地乃至佛地所有の増上意樂淸淨乃至威德淸淨は、當に知るべし、彼諸の淸淨展轉して増勝なり。唯佛地に於て生淸淨を除く。又初地の中の有ゆる功德は、上の諸地に於て平等に皆有れども、當に知るべし、自地の功德は殊勝なり、一切菩薩の十地の功德は皆是れ有上なり。佛地の功德は、當に知るべし、無上なり。』

(五)觀自在菩薩、復佛に白して言さく、『世尊は何の因緣の故に、菩薩の生は、諸有の生に於て最も殊勝なりと爲すと說きたまふ。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、『善男子、四の因緣の故なり。一には極淨善根の集起する所あるが故に、二には故意思擇の力の所取なるが故に、三には悲愍して諸の衆生を濟度するが故に、四には自ら能く無染にして他の染を除くが故なり。』

【六】第六に三大願に約して十地を分別す。

【七】第二段に廣く六度、十度等を釋す、中を十八段に分つ、初に所學種數多少門。

【八】二に分別三學相攝門。

【九】三に分別福智資糧門。

(六)觀自在菩薩、復佛に白して言さく、『世尊は何の因緣の故に、諸の菩薩は廣大願、妙願、勝願を行ずと說きたまふや。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、『善男子、四の因緣の故なり、謂く、諸の菩薩は、能善く、涅槃の樂住を了知し、能く速に證するに堪ふ。而も復樂住を速に證するを棄捨す。無緣無待に大願心を發す。諸の有情を利益せんと欲するが爲の故に、多くの種種の長時の大苦に處す。是故に我彼諸の菩薩は廣大願、妙願、勝願を行ずと說く。』

(七)觀自在菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、是諸の菩薩には、凡そ幾種の所應學の事か有る。』佛、觀自在菩薩に告げたまはく、『善男子、菩薩の學事に略して六種有り。謂ゆる布施、持戒、忍辱、精進、靜慮、慧の到彼岸なり。』

(八)觀自在菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、是の如き六種所應學の事は、幾くか是れ增上戒學の所攝、幾くか是れ增上心學の所攝、幾くか是れ增上慧學の所攝なる。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、『善男子、當に知るべし、初の三は但是れ增上戒學の所攝なり。靜慮の一種は但是れ增上心學の所攝なり。慧は是れ增上慧學の所攝なりと。我精進は一切に遍ずと說くなり。』

(九)觀自在菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、是の如き六種の所應學の事は、幾くか是れ福德資糧の所攝、幾くか是れ智慧資糧の所攝なるや。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、『善男子、若は增上戒學の所攝なる者は、是を福德資糧の所攝と名け、若は增上慧學の所攝な

【一〇】四に五相修學六度門。

【菩薩藏】大乘菩薩の教法。

【菩提の心を隨護】菩提心を退轉せざらしむるなり。

【一一】五に諸度數無增減門。

【一二の因緣】自利と自他。

る者は、是を智慧資糧の所攝と名く、我精進・靜慮の二種は一切に遍ずと說くなり。』

（一〇）觀自在菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、此六種の所學の事の中に於て、菩薩は云何が應に修學すべき。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、『善男子、五種の相に於て、應當に修學すべし。一には最初に菩薩藏の波羅蜜多と相應する微妙なる正法敎の中に於て、猛利に信解す。二には次に十種の法行に於て、聞き、思し、修して成ずる所の妙智を以て、精進して修行す。三には菩提の心を隨護す。四には眞の善知識に親近す。五には無間に善品を勤修す。』

（一一）觀自在菩薩、復佛に白して言さく、『世尊は何の因緣の故に、是の如きの所應學の事を施設するに、但六數のみ有るや。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、『善男子、二の因緣の故なり、一には諸の有情を饒益するが故に、二には諸の煩惱を對治するが故なり。當に知るべし、前の三は有情を饒益し、後の三は一切の煩惱を對治す。前の三は諸の有情を饒益すとは、謂く、諸の菩薩は布施に由るが故に、資具を攝受して、有情を饒益し、持戒に由るが故に、損害、逼迫、惱亂を行ぜずして、有情を饒益し、忍辱に由るが故に、彼の損害、逼迫、惱亂するに於て、堪能忍受して有情を饒益す。後の三は諸の煩惱を對治すとは、謂く、諸の菩薩は精進に由るが故に、未だ一切の煩惱を永伏せず、亦未だ一切の隨眠を永害せずと雖も、而も能く勇猛に諸の善品を修す、彼諸の煩惱は善品の加行を傾動すること能はず、靜慮に由るが故に煩惱を永伏し、般若に由るが故に隨眠を永害す。』

【四數】方便、願、力、智の四度。【諸の攝事方便善巧】布施、利行、愛語、同事の四攝事をいふ。

觀自在菩薩、復佛に白して言さく、『世尊は何の因緣の故に、所餘の波羅蜜多を施設するに、但四數のみ有るや。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、『善男子、前の六種波羅蜜多の與に助伴と爲るが故なり、謂く、諸の菩薩は、前の三種の波羅蜜多所攝の有情に於て、諸の攝事方便善巧を以て、之を攝受して善品に安置す。是故に我方便善巧波羅蜜多は、前の三種の與に助伴と爲ると說く。若は諸の菩薩現法の中に於て煩惱多きが故に、修すること無間なるに於て、堪能すること有ること無く、羸劣ある意樂の故に、下界の勝解の故に、內の心住に於て堪能すること有ること無く、菩薩藏に於て聞緣して善く修習すること能はざるが故に、有ゆる靜慮は、出世間の慧を引發すること能はず、彼便ち少分狹劣の福德資糧を攝受して、未來世の煩惱輕微ならんが爲に、心に正願を生ず、是の如きを願波羅蜜多と名く。此願に由るが故に、煩惱微薄にして能く精進を修す。是故に我願波羅蜜多は、精進波羅蜜多の與に而も助伴と爲ると說く。若は諸の菩薩、善士に親近し、正法を聽聞し、如理に作意するを因緣と爲すが故に、劣意樂を轉じて、勝意樂を成じ、亦能く上界勝解を獲得す、是の如きを力波羅蜜多と名く。此力に由るが故に、內の心住に於て、堪能する所あり。是故に我力波羅蜜多は靜慮波羅蜜多の與に、助伴と爲ると說く。若は諸の菩薩、菩薩藏に於て已に能く聞緣して、善く修習するが故に、能く靜慮を發す。是の如きを智波羅蜜多と名く。此智に由るが故に、能く出世間の慧を引發するに堪へたり。是故に我智波羅蜜多は慧波羅蜜多の與に、助伴と爲ると說く。』

【一二】六に分別諸度次第門。

【後後の引發依】前前のものは次第に後後のものを引發する依所となる

【一三】七に六度品類差別門。

【戒の三種】三聚淨戒。

【耐怨害忍】自己の宿業を觀じて他の怨害を忍ぶ。

【一四】八に波羅蜜多得名門。

(一二)觀自在菩薩、復佛に白して言さく『世尊は何の因緣の故に、六種の波羅蜜多を說きたまふに、是の如く次第するや。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく『善男子、能く後後の引發依と爲るが故なり、謂く、諸の菩薩、若し身財に於て、顧悋する所無く、便ち能く淸淨の禁戒を受持し、禁戒を護らんが爲に、便ち忍辱を修し、忍辱を修し已りて能く精進を發し、精進を發し已りて能く靜慮を辨じ、靜慮を具し已りて便ち能く出世間の慧を獲得す。是故に我波羅蜜多を說くに、是の如く次第す。』

(一三)觀自在菩薩、復佛に白して言さく『世尊、是の如き六種波羅蜜多に、各幾種の品類差別か有る。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく『善男子、各三種有り。施の三種とは、一には法施、二には財施、三には無畏施なり。戒の三種とは、一には轉捨不善戒、二には轉生善戒、三には轉生饒益有情戒なり。忍の三種とは、一には耐怨害忍、二には安受苦忍、三には諦察法忍なり。精進の三種とは、一には被甲精進、二には轉善法を生ずる加行の精進、三には有情を饒益する加行の精進なり。靜慮の三種とは、一には分別無くして寂靜なり。極寂靜なり、罪無きが故に、煩惱の衆苦を對治し樂住なる靜慮、二には功德を引發する靜慮、三には有情饒益を引發する靜慮なり。慧の三種とは、一には世俗諦を緣ずる慧、二には勝義諦を緣ずる慧、三には有情饒益を緣ずる慧なり。』

(一四)觀自在菩薩、復佛に白して言さく『世尊は何の因緣の故に、波羅蜜多を說いて波羅蜜多と名くるや。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく『善男子、五の因緣の故なり、一には無染著

【間雜染の法】六度を行ずる時、間雜して起る障。

の故に、二には無顧戀の故に、三には無罪過の故に、四には無分別の故に、五には正廻向の故なり。無染著とは、謂く、波羅蜜多と諸の相違せる事に染著せざるなり。無顧戀とは、謂く、一切の波羅蜜多の諸の果異熟及び報恩の中に於て、心繫縛無きなり。無罪過とは、謂く、是の如き波羅蜜多に於て、間雜染の法無く、非なる方便の行を離るるなり。無分別とは、謂く、是の如き波羅蜜多に於て、言詞の如くに自相に執著せざるなり。正廻向とは、謂く、是の如き所作所集の波羅蜜多を以て、無上大菩提の果を廻求するなり。【問】世尊何等をか名けて波羅蜜多と諸の相違せる事と爲す。【答】善男子、當に知るべし、此事略して六種有りと。一には喜んで財富自在の諸の欲樂を樂欲する中に於て、深く功德なり、及び勝利なりと見、二には所樂に隨つて身語意を縦にし、而して現行する中に於て、深く功德なり、及び勝利なりと見、三には他の輕蔑するに堪忍せざる中に於て、深く功德なり、及び勝利なりと見、四には勤修せずして欲樂に著する中に於て、深く功德なり、及び勝利なりと見、五には憒閙に處する世雜亂の行に於て、深く功德なり、及び勝利なりと見、六には見聞、覺知、言說、戲論に於て、深く功德なり、及び勝利なりと見るなり。【問】世尊、是の如き一切の波羅蜜多に、何なる果異熟有る。【答】善男子、當に得るべし、此にも亦略して六種有りと。一には大財富を得、二には善趣に往生し、三には無怨無壞にして諸の喜樂多く、四には衆生の主と爲り、五には身に惱害無く、六には大宗葉有り。【問】世尊、何等をか名けて波羅蜜多の間雜染の法と爲す。【答】善男子、當に知るべし略して四種の加行に由ることを。

【糞穢】行苦に喩ふ。【香潔】涅槃に喩ふ。

【一五】九に諸度清淨種數門。

【一には】名聞利養を求めざるなり【二には】執着の相を生ぜず、三輪を離るるなり。

一には無悲の加行の故に、二には不如理の加行の故に、三には不常の加行の故に、四には不殷重の加行の故なり。不如理の加行とは、謂く、餘の波羅蜜多を修行する時、餘の波羅蜜多に於て、遠離し失壊するなり。「世尊、何等をか名けて非なる方便の行とか爲す。「善男子、若は諸の菩薩、波羅蜜多を以て衆生を饒益する時、但財物を攝して衆生を饒益し、便ち喜足を爲して而して其をして不善處を出して善處に安置せしめず、是の如きを名けて非なる方便の行と爲す。何を以ての故に。善男子、衆生に於て唯此事を作すのみを、實饒益と名くるに非ざればなり。譬へば糞穢の若は多きにまれ、若は少きにまれ、終に能香潔と成らしむること有ること無きが如し。是の如く衆生は行苦に由るが故に、其性是れ苦なり。方便として但財物のみを以て、暫く相饒益して、樂と成さしむべきこと有ること無し。唯妙善法の中に安處せしむる有るのみ、方に第一の饒益と名くることを得べし。」」

(一五)觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、是の如き一切の波羅蜜多に、幾くの清淨か有る。「佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、我終に波羅蜜多には、上の五相を除いて、餘の清淨有りと說かず。然るに我卽ち是の如き諸事に依りて、總と別とに當に波羅蜜多の清淨の相を說くべし。總じて一切波羅蜜多の清淨の相を說かば、當に知るべし、七種ありと。何等をか七と爲す。一には菩薩、此諸法に於て他に知られんことを求めず。二には此諸法に於て見已りて執著を生ぜず。三には卽ち是の如き諸法に於て疑惑を生ぜず、謂く、能く大菩提を得ると爲んや不やと。四には終に自讃毀他して輕蔑する所あらず。五

【見清淨】我能く惠施を行ず等と計度せざるなり。
【心清淨】憐愛の心等を以て而も惠施を行ずるなり。
【語清淨】舒顏含笑慰諭問訊して惠施するが故に清淨なり。
【垢清淨】懈怠貪瞋等の煩惱の垢離れて清淨なり。

には終に憍慢放逸ならず。六には終に少しく所得有るに於て、便ち喜足を生ぜず。七には終に此諸法に由りて、他に於て嫉妬慳悋を發起せず。別して一切波羅蜜多の清淨の相を說かば、亦七種有り。何等をか七と爲す。謂く、諸の菩薩、我所說の七種の布施の清淨の相に於て、隨順し修行す。一には施物清淨に由りて、清淨の施を行ず。二には戒清淨に由りて、清淨の施を行ず。三には見清淨に由りて、清淨の施を行ず。四には心清淨に由りて、清淨の施を行ず。五には語清淨に由りて、清淨の施を行ず。六には智清淨に由りて、清淨の施を行ず。七には垢清淨なるに由りて、清淨の施を行ず。是を七種の施清淨の相と名く。又諸の菩薩は能善く、制立する律儀の一切學處を了知し、能く所犯を出離することを了知し、常尸羅を具し、尸羅を堅固にし、常に尸羅を作し、常に尸羅を轉じ、一切有ゆる學處を受學す。是を七種の戒清淨の相と名く。若し諸の菩薩、自の有ゆる業と果との異熟に於て、深く依信を生じて一切有ゆる不饒益の事現在前する時も、憤發を生ぜず、亦反罵せず、瞋らず、打たず、恐れしめず、弄せず、種種不饒益の事を以て、反つて害を相加へず、怨結を懷かず、若し諫誨する時は恚惱せしめず、亦復他の來るを待たずして諫誨し、恐怖と有染愛の心とに由らずして忍辱を行じ、作恩を以て便ち放捨せず、是を七種の忍清淨の相と名く。若は諸の菩薩、精進平等の性に通達し、勇猛に勤めて精進するに由るが故に、自擧して他を凌がず、大勢力を具し、大精進を具し、堪能する所有り、堅固勇猛にして、諸の善法に於て終に軛を捨てず、是

の如きを名けて七種の精進清淨の相と爲す。若は諸の菩薩、善通達相三摩地靜慮有り、圓滿三摩地靜慮有り、俱分三摩地靜慮有り、運轉三摩地靜慮有り、無所依三摩地靜慮有り、善修治三摩地靜慮有り、菩薩藏に於て聞緣修習する無量の三摩地靜慮有り、是の如きを名けて七種の靜慮清淨の相と爲す。若は諸の菩薩、增益損減の二邊を遠離し、中道を行ずるを、是を名けて慧と爲す。此慧に由るが故に、如實に解脫門の義を了知す、謂く、空、無願、無相の三解脫門なり。如實に有自性の義を了知す、謂く、遍計所執、若は依他起、若は圓成實の三種の自性なり。如實に無自性の義を了知す、謂く、相、生、勝義の三種の無自性性なり。如實に世俗諦の義を了知す。謂く、五明處に於てなり。如實に勝義諦の義を了知す、謂く、七眞如に於てなり。又無分別にして諸の戲論を離れ、純一理趣に多く住する所なるが故に、無量の總法を所緣と爲すが故に、及び毘鉢舍那の故に、能善く法と隨法行とを成辨す。是を七種の慧清淨の相と名く。」

（一六）觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、是の如きの五相、各何の業か有る。」佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、當に知るべし、彼相に五種の業有り。謂く、諸の菩薩、染著無きが故に、現法の中に於て、修習する所の波羅蜜多に於て、恆に常に慇重に加行を勤修し、放逸有ること無し。顧戀無きが故に、當來の不放逸の因を攝受す。罪過無きが故に、能く正しく、極善圓滿、極善清淨、極善鮮白の波羅蜜多を修習す。無分別の故に、方便善巧波羅蜜多、速かに圓滿することを得。正廻向の故に、一切の生處に波羅蜜多

【善通達相三摩地靜慮】善く俗諦相に通達する定。

【圓滿三摩地靜慮】かの圓滿眞如の境を緣ずる定。

【俱分三摩地靜慮】通じて眞俗二諦の境を緣ずる定。

【運轉三摩地靜慮】加行智が有漏作意運轉の所依なる定。

【無所依三摩地靜慮】共根本智が異の境相なくして依止となる所依の定。

【善修治三摩地靜慮】後得智が能しく種種の行を修治して所依たるの定。

【增益損減の二邊】無無因に於て强立して有を立つるを增益、有無の因に於て强撥して無となすを損減と名く。

【中道】非有非空の中道觀、實我實法の二執は非有なりと空じて、增益の有執をやり、依他圓成の百法は非空なりと存して損減

の空執をやり、偏有偏空の二邊を超越する觀智なり。

【五明處】内明處、因明處、聲明處、醫方明處、工巧明處。

【法と隨法行】法とは涅槃、隨法行とは法に隨ひ教の如く修行する八支聖道なり。

【一六】十に分別五相五業門。

【一七】十一に最高大等五相門。

【一八】十二に六度因果無盡門。

【一九】十三に愛度不愛度果門。

及び彼可愛の諸の果異熟皆無盡なることを得、乃し無上正等菩提に至る。』

（一七）觀自在菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、是の如き所說、波羅蜜多にて、何者か最も廣大なる、何者か無染汚なる、何者か最も明盛なる、何者か不可動なる、何者か最も清淨なる。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、『善男子、無染著の性、無顧戀の性、正廻向の性なるを最も廣大なりと爲す。無罪過の性、無分別の性なるを染汚有ること無しとし、所作を思擇するを最も明盛なりと爲し、已に無退轉法の地に入れる者を不可動と名け、若は十地に攝め、佛地に攝めらるる者を、最も清淨なりと名く。』

（一八）觀自在菩薩、佛に白して言さく、『世尊、何の因緣の故に、菩薩所得の波羅蜜多の、諸の可愛の果、及び諸の異熟は常に盡くること有ること無く、波羅蜜多も亦盡くること有ること無きや。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、『善男子、展轉して相依りて生起し、修習すること間斷無きが故なり。』

（一九）觀自在菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、何の因緣の故にか、是の諸の菩薩は波羅蜜多を深信愛樂して、是の如き波羅蜜多所得の可愛の諸の果異熟に於てするに非ざるや。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、『善男子、五の因緣の故なり、一には波羅蜜多は、是れ最增上喜樂の因なるが故に、二には波羅蜜多は、是れ其れ究竟じて一切自他を饒益する因なるが故に、三には波羅蜜多は、是れ當來世の彼可愛果の異熟因なるが故に、四には波羅蜜多は、諸の雜染の所依の事に非ざるが故に、五には波羅蜜多は、是れ畢竟變壞の法に非ざ

【二〇】十四に諸度威德數門。
【慳悋等】六度の次第して能除する度弊なり。
【見趣】身見等の惡慧なり。
【二一】十五に諸度因果義理門。
【二二】十六に衆生自業過失門。

るが故なり。」

(二〇)觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、一切の波羅蜜多に、各幾種の最勝なる威德か有る。」佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、當に知るべし、一切の波羅蜜多に、各四種の最勝なる威德有りと。一には此波羅蜜多に於て、正しく修行する時、能く慳悋と犯戒と心憤と懈怠と散亂と見趣との所治を捨つ。二には此に於て正しく修行する時、能く無上正等菩提の眞實の資糧と爲す。三には此に於て正しく修行する時、現法の中に於て、能く自ら有情を攝受し饒益す。四には此に於て正しく修行する時、未來世に於て、能く廣大無盡の可愛の諸の果異熟を得るなり。」

(二一)觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、是の如きの一切の波羅蜜多は、何をか因、何をか果とし、何の義理か有る。」佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、是の如き一切の波羅蜜多は、大悲を因と爲し、微妙なる可愛の諸の果異熟と、一切有情を饒益するとを果と爲し、無上廣大の菩提を圓滿するを大義利と爲す。」

(二二)觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、若し諸の菩薩は、一切無盡の財寶を具足し、大悲を成就せば、何に縁りてか世間に現に衆生の貧窮の得べきかは有る。」佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、是れ諸の衆生、自業の過失のみ、若し爾らずんば、菩薩は常に他を饒益する心を懷き、又常に無盡の財寶を具足せるに、若し諸の衆生に、自の惡業の能く障礙を爲すこと無くんば、云何が世間の貧窮の得べき有らんや。譬へば、餓鬼の大

熱渇の爲に、其身を逼迫せられて、大海の水悉く皆凋竭せりと見るが如きは、大海の過に非ず、是れ餓鬼の自業の過なるのみ。是の如く菩薩の施す所の財寳は、猶し大海の如く、過失有ること無し、是れ諸の衆生の自業の過なるのみ。猶し餓鬼の自の惡業力もて、果有ること無からしむるが如し。』

(三三)觀自在菩薩、復佛に白して言さく『世尊、菩薩は何等の波羅蜜多を以て、一切法の無自性性をか取る。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく『善男子、般若波羅蜜多を以て能く諸法の無自性性を取る。』『世尊、若し般若波羅蜜多、能く諸法の無自性性を取らば、何が故に有自性性を取らざる。』『善男子、我終に無自性性を以て、無自性性を取るとは說かず。然るに無自性性は諸の文字を離るる自内の所證なり。言說文字を捨てて能く宣說すべからず。是故に我般若波羅蜜多は能く諸法の無自性性を取ると說く。』

(三四)觀自在菩薩、復佛に白して言さく『世尊、佛の所說の波羅蜜多、近波羅蜜多、大波羅蜜多の如き、云何が波羅蜜多、云何が近波羅蜜多、云何が大波羅蜜多なるや。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく『善男子、若は諸の菩薩無量の時を經て、施等を修行し、善法を成就すれども、而も諸の煩惱猶故に現行し、未だ制伏すること能はず。然れども彼が爲に伏せらる、謂く、勝解行地に於て、軟と中との勝解轉ずる時、是を波羅蜜多と名く。復無量の時に於て、施等を修行し、漸く復增上して善法を成就す。而るに諸の煩惱猶故に現ず。然れども能く制伏して彼所伏に非ず、謂く、初地より已上是を近波羅蜜多と名く。

【三三】十七に般若取法無性門。

【三四】十八に三種波羅蜜多門。【近波羅蜜】初地以上第二僧祇に修する施等漸く增上する故。【大波羅蜜多】第三僧祇所修の施等增して入觀すべき故。

【二五】第三段に地中の隨眠等の障を分別す。中に於て四あり初に隨眠種數多少を分別す。

【害伴隨眠】第六識相應の俱生の煩惱所知二障の現行なり。

【羸劣】第五地所斷の害伴に對するに稍微細の故に。

【微細】第七識相應の所知障の現行是れ一類微細にして知り難き障なる故に。

【二六】麤重顯示する所を分別するを明す。

【初二】害伴と羸劣の二。

【第三】微細隨眠

【二七】重斷の時節を分別するを明す

【二八】四に諸菩薩が地中に於て生ずる煩惱の德失を明する。

復無量の時に於て、布施等を修行し、轉復增上して、善法を成就し一切の煩惱皆現行せず。謂く、八地より已上、是を大波羅蜜多と名く。』

(二五)觀自在菩薩、復佛に白して言さく『世尊、此諸地の中の煩惱、隨眠に幾種か有るべき。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく『善男子、略して三種有り。一には害伴隨眠、謂く、前五地に於けるなり。何を以ての故に。善男子、諸の俱生せざる現行の煩惱は、是俱生する煩惱の現行の助伴なればなり。彼、爾時に於て永く復有ること無し。是故に說いて害伴隨眠と名く。二には羸劣隨眠、謂く、第六第七地の中に於けるなり。微細の現行、若は修に伏せられて現行せざるが故なり。三には微細隨眠、謂く、第八地已上に於けるなり。此より已去、一切の煩惱復現行せず。惟所知障の依止との爲るが故なり。』

(二六)觀自在菩薩、復佛に白して言さく『世尊、此諸の隨眠は、幾種の麤重の斷じて顯示する所なる。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく『善男子、但二種に由るのみ。謂く、皮に在る麤重斷するに由るが故に。彼初二を顯し、復膚に在る麤重斷ずるに由るが故に。彼第三を顯し、若は骨に在る麤重斷ずるは、我、永に一切隨眠を離ると說く、位佛地に在り。』

(二七)觀自在菩薩、復佛に白して言さく『世尊、幾ばくの不可數劫を經てか、能く是の如きの麤重を斷ずる。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく『善男子、三大不可數劫、或は無量劫を經。謂ゆる年月、半月、晝夜、一時、半時、須臾、瞬息、刹那の量劫數ふべからざるが故なり。』

(二八)觀自在菩薩、復佛に白して曰さく『世尊、是諸の菩薩、諸地の中に於て、生ずる所の

【二九】第四段に佛の一乘の意を分別す。

【同一法界】眞如は一味平等の故に一乘なるをいふ。

【同一理趣】三乘の道は同一の無自性觀の故に一乘なり。

【三〇】頌もて略說す。

煩惱は、當に何の相、何の失、何の德かあるを知るべき。」佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、無染汚の相なり、何を以ての故に。是の諸の菩薩は、初地の中に於て、定んで一切諸法の法界に於て已に善く通達すればなり。此因緣に由りて、菩薩は要ず知りて方に煩惱を起す、知らざるが爲には非ず。是故に說いて無染汚の相と名く。自身の中に於て苦を生ずること能はず、故に過失無し。菩薩は是の如き煩惱を生起して、有情界に於て能く苦の因を斷ぜしむ。是故に彼に無量の功德有り。」觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「甚だ奇なり、世尊、無上菩提に乃ち是の如きの大功德利ありて、諸の菩薩の生起せる煩惱すら、尙一切有情、聲聞、獨覺の善根に勝れしむ、何に況んや其餘の無量の功德をや。」

(二九)觀自在菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、世尊の、若は聲聞乘、若は復大乘も、唯是れ一乘なりと說きたまふが如き、此れ何の密意か有る。」佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、「善男子、我、彼聲聞乘の中に於て、種種の諸法の自性を宣說するが如きは、謂ゆる五蘊、或は內の六處、或は外の六處なり。是の如き等の類をば、大乘の中に於ては、卽ち彼法は同一法界、同一理趣なりと說くが故に、我乘の差別性を說かず、中に於て或は言の如く義に於て、妄に分別を起し、一類は增益し、一類は損減すること有り。又諸乘差別の道理に於て、互に相違せりと謂つて、是の如く展轉して遞に諍論を興す。是の如きを名けて此中の密意と爲す。」

(三〇)爾時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、頌を說いて曰はく、

【三】大段第二依教奉持分。

【大乘光明三摩地】大乘の教理行果を照見する智光明の禪定。

諸地の攝と想と所對治と、殊勝と生と願と及び諸學と
佛の是大乘を說くに由りて、此に於て善く修して大覺を成ず
諸法の種種の性を宣說し、復皆同一理趣なりと說くは
謂く下乘或は上乘に於てなり、故に我乘に異性無しと說く
言の如く義に於て妄に分別して、或は增益する有り或は損減す
此二種互に相違せりと謂つて、愚癡に意解して乖諍を成ず

(三一)爾の時、觀自在菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、『世尊、是解深密法門の中に於て、此を何の教と名け、我當に云何が奉持すべき。』佛、觀自在菩薩に告げて曰はく、『善男子、此を諸地波羅蜜多了義の教と名け、此諸地波羅蜜多了義の教に於て、汝當に奉持すべし。』此諸地波羅蜜多了義の教を說きたまふ時、大會の中に於て、七十五千の菩薩有りて、皆菩薩の大乘光明三摩地を得たり。

解深密經卷第四　終

解深密經　卷第五

大唐三藏法師玄奘詔を奉じて譯す

如來成所作事品第八

【如來成所作事品】能化主の所作の事業即ち三身萬德の佛果を顯す。
【一】問答正說分中に十二問答をあぐ、初に法身の相を分別す。
【曼殊室利】文殊師利。
【法身】佛果所證の菩提涅槃の二轉の妙果をいふ。
【戲論無き】一切語言の境を過ぐる故に。
【所爲なき】生滅を絕して業惑に爲作せらるるなし、
【所得の轉依】二乘が煩惱障を斷じて得るところの無爲なり。これ涅槃を證すも功德

（一）爾時、曼殊室利菩薩摩訶薩、佛に請問して言さく、『世尊、佛の說きたまふ所の如來の法身の如き、如來の法身に何等の相か有る。』佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、『善男子、若し諸地の波羅蜜多に於て、善く出離を修し、轉依成滿す、是を如來法身の相と名く。當に知るべし、此相は二の因緣の故に、不可思議なり。戲論無きが故に、所爲無きが故なりと。而るに諸の衆生、戲論に計著し、所爲有るが故なり。』

（二）『世尊、聲聞、獨覺の所得の轉依を法身と名くるや不や。』『善男子、法身と名けず。』『世尊、當に何の身とか名くべき。』『善男子、解脫身と名く、解脫身に由るが故に、一切の聲聞、獨覺と諸の如來と平等平等なりと說く。法身に由るが故に、差別有りと說く。如來の法身差別有るが故に、無量の功德、最勝の差別、算數譬喩の及ぶこと能はざる所なり。』

（三）曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、我當に云何が應に如來生起の相を知るべ

法の依止するところに非ざる故法身と名けざるなり。

【差別】法身は一切煩惱所知二障の縛并に諸の習氣を解脫し、十力四無畏等無量の妙功德衆に莊嚴せらるるも、解脫身は唯煩惱障の縛のみを遠離し、增上自在富樂の相應するなき故に、二身の間に差別ある所以なり。

【無量の功德】十力四無畏等。

【二】第二に化身の相を明す。中を三に分ち、初に生起の相を明す。

【三】次に方便善巧の相を示現す。

【四】言音差別の相を明す。

【三種】三藏なり

【五】三藏の別釋

き。『佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、『善男子、一切如來の化身の作業は、世界の起るが如く、一切の種類は、如來功德衆の莊嚴する所にして、住持するを相と爲す。當に知るべし、化身の相は生起すること有り、法身の相は生起有ること無しと。』

(三)曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく『世尊、云何が應に化身を示現する方便善巧を知るべき。』佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく『善男子、一切の三千大千佛國土の中に遍く、或衆の推許せる增上の王家、或衆の推許せる大福田家に、同時に入胎し、誕生し、長大し、愛欲し、出家し、苦行を行ずることを示し、苦行を捨て已りて、等正覺を成ず、次第に示現する、是を如來化身を示現する方便善巧なりと名く。』

(四)曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく『世尊、凡そ幾種の一切如來身に住持せらるる言音差別有りて、此言音に由りて、所化の有情の未だ成熟せざる者をば其をして成熟せしめ、已に成熟せる者は此を緣じて境と爲し、速に解脫を得るや。』佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、『善男子、如來の言音に略して三種有り、一には契經、二には調伏、三には本母なり。』

(五)『世尊、云何が契經、云何が調伏、云何が本母たる。』『曼殊室利、若は是處に於て、我攝事に依りて諸法を顯示す、是を契經と名く。謂く、四事に依り、或は九事に依り、或は復二十九事に依る。云何が四事なる。一には聽聞の事、二には歸趣の事、三には修學の事、四には菩提の事なり。云何が九事なる。一には施設有情の事、二には彼所受用の事、三に

は彼生起の事、四には彼生じ已りて住するの事、五には彼染淨の事、六には彼差別の事、七には能宣說の事、八には所宣說の事、九には諸の衆會の事なり。云何が名けて二十九事と爲す。謂はく、雜染品に依りて、諸行を攝する事、彼次第に隨轉する事、卽ち是中に於て補特伽羅の想を作し已りて、當來世に於て流轉する因の事、是想を作し已りて、當來世に於て流轉する因の事あり。淸淨品に依りて、念を所緣に繫くるの事、卽ち是事に於て勤めて精進する事、心安住する事、現法樂住の事、一切苦緣を超せる方便の事、彼遍知の事あり。此に復三種あり、顚倒を遍知する所依處の故に、有情の相、外の有情中に依る邪行を遍知する所依處の故に、內の增上慢を離るるを遍知する所依處の故なり。修の依處の事、作證の事、修習の事、彼をして堅固ならしむるの事、彼行相の事、彼所緣の事、已斷未斷の觀察善巧の事、彼散亂の事、彼不散亂の事、不散亂所依の事、劬勞加行を修習する事、勝利を修習する事、彼堅牢の事、聖行を攝むる事、聖行の眷屬を攝むる事、眞實に通達する事、涅槃を證得する事、善說法毘奈耶の中に於て、世間の正見すら、一切の外道所得の正見頂を超昇する事、及び卽ち此に於て修せずして退する事有り。善說法毘奈耶の中に於て、修習せざるが故に、說いて名けて退と爲す。見の過失の故に、名けて退と爲すには非ず。曼殊室利、若は是處に於て、我聲聞及び諸の菩薩に依りて、別解脫及び別解脫相應の法を顯示す、是を調伏と名く。』

(六)『世尊、菩薩の別解脫は幾相の所攝ぞや。』『善男子、當に知るべし七相有りと。一には受

【所緣】身受心法四念處の境なり。
【遍知】苦を知る。
【三種】三界の苦を知る。
【修の依處】集を斷ず。
【作證】滅を證す
【修習】道を修す
【彼をして】眞見道なり。
【彼行相】相見道能緣の行相。
【已斷未斷】相見道中に見惑已に斷ずるも修惑未だ斷ぜざるの法。
【散亂の事】見道の定を出でて未だ修道に入らざる中間の散亂心なり。
【不散亂】欲界修惑を斷ずるも方便加行の定をいふ。

定と同時俱有の法を不散亂所依の事といふ。

【功勞加行を修習す】欲界修惑を斷ずる無間道なり、又上二界の修惑を斷ずる無間道を勝利を修習すといふ。

【彼堅牢】金剛心。

【聖行を攝むる事】如理智盡無生智。

【聖行の眷屬等】如量智盡無生智。

【眞實に通達】無餘涅槃に入らんとして眞如を觀ずるをいふ。

【別解脫】戒律なり。

【六】別解脫を攝する相並に本母を明す、

【他勝】他勝處の略。所謂波羅夷罪のこと。善法が他の惡法に勝たるの義。

の軌則の事を宣說するが故に、二には他勝に隨順する事を宣說するが故に、三には毀犯に隨順する事を宣說するが故に、四には有犯の自性を宣說するが故に、五には無犯の自性を宣說するが故に、六には所犯を出することを宣說するが故に、七には律儀を捨することを宣說するが故なり。曼殊室利、若は是處に於て、我十一種の相を以て、決了し、分別して諸法を顯示す、是を本母と名く。何等をか名けて十一種の相と爲す。一には世俗の相、二には勝義の相、三には菩提分法所緣の相、四には行相、五には自性の相、六には彼果相、七には彼領受開示の相、八には彼障礙法の相、九には彼隨順法の相、十には彼過患の相、十一には彼勝利の相なり。世俗の相とは當に知るべし、三種ありと、一には補特伽羅を宣說するが故に、二には遍計所執の自性を宣說するが故に、三には諸法の作用事業を宣說するが故なり。勝義の相とは當に知るべし、七種の眞如を宣說するが故なりと。菩提分法所緣の相とは當に知るべし、遍一切種所知の事を宣說するが故なりと。行相とは當に知るべし、八行觀を宣說するが故なりと。云何が名けて八行觀と爲す。一には諦實の故に、二には安住の故に、三には過失の故に、四には功德の故に、五には理趣の故に、六には流轉の故に、七には道理の故に、八には總別の故なり。諦實とは、謂く、諸法の眞如なり。安住とは、謂く、或は補特伽羅を安立し、或は諸法の遍計所執の自性を安立し、或は復一向、分別、反問、置記を安立し、或は復隱密と顯了との記別の差別を安立するなり。過失とは、謂く、我諸の雜染法に無量の門の差別の過患有りと宣說す。功德とは、謂く、諸

【二邊】斷常の二見なり。
【三有爲相】生異滅の三相をいふ。
【四種の緣】因緣、等無間緣、所緣緣、增上緣、

の清淨法に無量の門の差別の勝利ありと宣說す。理趣とは當に知るべし六種ありと。一には眞義の理趣、二には證得の理趣、三には敎導の理趣、四には二邊を遠離する理趣、五には不可思議の理趣、六には意趣の理趣なり。流轉とは謂ゆる三世三有爲相及び四種の緣なり。道理とは當に知るべし、四種ありと、一には觀待道理、二には作用道理、三には證成道理、四には法爾道理なり。觀待道理とは、謂く、若は因、若は緣もて能く諸行を生じ及び隨說を起す、是の如きを名けて觀待道理と爲す。作用道理とは、謂く、若は因、若は緣、能く諸法を得し、或は能く成辨し、或は復生じ已りて、諸の業用を作す、是の如きを名けて作用道理と爲す。證成道理とは、謂く、若は因、若は緣能く所立、所說、所標の義をして成立するを得しめ、正しく覺悟せしむ、是の如きを名けて證成道理と爲す。

又此道理に略して二種有り、一には清淨、二には不清淨なり。五種の相に由りて、名けて清淨と爲し、七種の相に由りて、不清淨と名く。云何が五種の相に由りて名けて清淨と爲す。一には現見所得の相、二には依止現見所得の相、三には自類譬喩所引の相、四には圓成實の相、五は、善清淨なる言敎の相なり。現見所得の相とは、謂く、一切行は皆無常の性なり、一切行は皆是れ苦の性なり、一切法は皆無我の性なり。此を世間現量の所得と爲す。是の如き等の類、是を現見所得の相と名く。依止現見所得の相とは、謂く、一切の行は皆刹那の性なり、他の世有るべき性なり。淨不淨の業は失壞すること無きの性なり。彼能依の麤なる無常の性は、現に可得なるに由るが故に、諸の有情の種種の差別

【七】一切智者の相を明す。

【八】三十二種大丈夫の相 三十二相の

は種種の業に依りて現に可得なるに由るが故に、諸の有情の若は樂、若は苦は淨不淨の業を以て依止と爲すこと現に可得なるに由るが故なり。此因緣に由りて、不現見に於ても比度を爲すべし。是の如き等の類、是を依止現見所得の相と名く。自類譬喩所引の相とは、謂く、內外の諸行聚の中に於て、諸の世間の共に了知する所の所得の生死を引いて、以て譬喩と爲し、諸の世間の共に了知する所の所得の生等の種種の苦相を引いて、以て譬喩と爲し、諸の世間の共に了知する所の所得の不自在の相を引いて、以て譬喩と爲し、又復外に於て、諸の世間の共に了知する所の所得の衰盛を引いて、以て譬喩と爲す。是の如き等の類、當に知るべし、是を自類譬喩所引の相と名く。圓成實の相とは、謂く、卽ち是の如きの現見所得の相、若は依止現見所得の相、若は自類譬喩所得の相は、所成立に於て、決定して能く成ず。當に知るべし、是を圓成實の相と名く。善清淨言教の相とは、謂く、一切智者の宣說する所の、涅槃究竟寂靜と言ふが如き、是の如き等の類、當に知るべし、是を善清淨言教の相と名く。善男子、是故に、此五種の相に由るが故に、善く清淨の道理を觀察すと名く、清淨に由るが故に、應に修習すべきなり。」

（七）曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、一切智者の相には、當に幾種か有ると知るべき。」佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、「善男子、略して五種有り。一には若は有ゆる世間に出現する一切智の聲、普く聞かざる無し。二には三十二種の大丈夫の相を成就す。三には十力を具足して能く一切衆生の一切の疑惑を斷ず。四には四無所畏を具足して、正法

【聖教量】聖者の言說を權衡として信知す。
【此餘同類可得の相】以下四相は因明六不定過失の中の相違決定を除く餘の五不定なり。今は同品一分轉異品遍轉不定及び俱品一分轉不定の過失。
【此餘異類可得の相】異品一分轉同品遍轉不定過失。
【一切同類可得の相】共不定の過失。
【一切異類可得の相】不共不定の過失。
【異類譬喩所得の相】相違因の過失。
【圓成實に非さる相】前四相の不決定の過失ある時は決

を宣說し、一切他論の爲に伏せられず、而も能く一切の邪論を摧伏す。五には善說法毘奈耶の中に於て、八支聖道四沙門等皆現に得べきなり。是の如く、生の故に、相の故に、疑網を斷ずるが故に、他の所伏に非ずして、他を伏するが故に、聖道沙門現得べきが故に。是の如きの五種を、當に知るべし、名けて一切智の相と爲す。善男子、是の如きの證成道理は、現量に由るが故に、比量に由るが故に、聖教量に由るが故に、五種の相に由りて、名けて清淨と爲す

云何が七種の相を不清淨と名くるや、一には此餘同類可得の相、二には此餘異類可得の相、三には一切同類可得の相、四には一切異類可得の相、五には異類譬喩所得の相、六には圓成實に非ざる相、七には善清淨に非ざる言教の相なり。若は一切法の意識に識らる性、是を一切同類可得の相と名く。若は一切法の相性、業法、因果の異相なる、是の如き一一の異相に隨つて、決定展轉して、各各異相なるに由りて、是を一切異類可得の相と名く。善男子、若は此餘同類可得の相に於てし、及び譬喩の中の一切異類の相有る者は、此因緣に由りて、所成立に於て、決定に非ざるが故に、是を圓成實に非ざる相と名く。又此餘異類可得の相に於てし、及び譬喩の中の一切同類の相有る者は、此因緣に由りて、所成立に於て、決定せざるが故に、亦圓實に非ざる相と名く。非圓成實の故に、善觀察の清淨道理に非ず。不清淨の故に、應に修習すべからず。若は異類譬喩所引の相、若は善清淨に非ざる言教の相は、當に知るべし、體性皆不清淨なり。法爾道理とは、謂く、

定して圓滿に宗義を成立する能はずして似能立に墮するをいふ。

【善清淨に非ざる言教の相】擧者所説の言教に相違することをいふ。自教相違の過失。

【八】外道に共ぜさる陀羅尼を明す

如來の出世にまれ、若は不出世にまれ、法性に安住し法法界に住す、是を法爾道理と名く。

總別とは、謂く、先づ總じて一句の法を説き已りて、後後の諸句にて差別し、分別し、究竟し、顯了にす。

自性の相とは、謂く、我所説の有行、有緣の有ゆる能取の菩提分法なり。謂く、念住等なり、是の如きを名けて彼自性の相と爲す。彼果相とは、謂く、若は世間、若は出世間の諸の煩惱斷、及び所引發の世出世間の諸果功德なり。是の如きを名けて彼果相を得すと爲す。彼領受開示の相とは、謂く、即ち彼に於て、解脫智を以て之を領受し、及び廣く他の爲に宣説し開示す。是の如きを名けて彼領受開示の相と爲す。彼障礙法の相とは、謂く、即ち菩提分法を修するに於て、能く隨つて障礙する諸の染汚法なり、是を彼障礙法の相と名く。彼隨順法の相とは、謂く、即ち彼に於て、多く作す所の法なり、是を彼隨順法の相と名く。彼過患の相とは、當に知るべし、即ち彼諸の障礙法の所有の過失なり、是を彼過患の相と名くと。彼勝利の相とは、當に知るべし、即ち彼諸の隨順せる法の所有の功德なり、是を彼勝利の相と名く。」

(八)曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく、「惟願くば世尊、諸の菩薩の爲に、略して契經、調伏、本母の外道に共せざる陀羅尼の義を説き、此共せざる陀羅尼の義に由りて、諸の菩薩をして、如來所説の諸法甚深の密意に入ることを得しめたまへ。」佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、「善男子、汝今諦に聽け、吾當に汝が爲に、共せざる陀羅尼の義を略說し

て、諸の菩薩をして我所說の言詞に於て能善く悟入せしむべし。善男子、若は雜染の法にまれ、若は清淨の法にまれ、我一切皆作用無し、亦都て補特伽羅有ること無しと說く。一切種、所爲を離るるを以ての故に、雜染の法、先に染にして、後に淨なるに非ず、清淨の法、後に淨にして先に染なるに非ず。凡夫異生、麤重の身に於て、諸法と補特伽羅との自性と差別とに執著し、隨眠と妄見とを以て、緣と爲すが故に、我、我所を計す。此妄見に由りて我見、我聞、我嗅、我嘗、我觸、我知、我食、我作、我染、我淨と謂ふ。是の如き等の類、邪なる加行に轉ず。若し如實に知ること有らば、是の如き者は便ち能く麤重の身を永斷し、一切煩惱の住せざる、最極清淨にして諸の戲論を離れたる無爲の依止を獲得し、加行有ること無けん。善男子、當に知るべし、是を略して共せざる陀羅尼の義を說くと名く。」

爾時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、頌を說きて曰はく、

一切雜染清淨の法は、皆作用も數取趣も無し
由りて我宣說する所爲を離れ、染汚も清淨も先後に非ずと
麤重の身に於て隨眠と見とを、緣と爲して我及び我所を計す
此に由りて妄に我見等、我食我爲我染淨と謂ふ
若し如實に知ること是の如き者は、乃ち能く麤重の身を永斷し
無染淨無戲論の、無爲の依止を得て加行無からん

【九】第五に諸如來の心生起の相を明す。

【一〇】化身の有心無心を明す。

【自依心】緣慮の實用ある心の自體なり。

【依他心】變化身の心は非緣慮の相分心にして他の自受用報身佛の緣慮

(九)爾時、曼殊室利菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく『世尊、云何が應に諸の如來の心生起の相を知るべき。』佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく『善男子、夫れ如來は、心意識生起の所顯に非ず。然るに諸の如來は、無加行の心法生起すること有り。當に知るべし、此事猶し變化の如し。』曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく『世尊、若し諸の如來の法身は、一切の加行を遠離せり、既に加行無くんば云何が心法生起すること有る。』佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、『善男子、先に修習する所の方便般若の加行力の故に、心生起することあり。善男子、譬へば正しく無心睡眠に入るが如き、覺悟するに於て、加行を作すに非ず。先に作す所の加行の勢力に由りて、復覺悟す。又正しく滅盡定中に在るが如き、定を起つに於て、加行を作すに非ず。先に作す所の加行の勢力に由りて、還定より起つ。睡眠及び滅盡定より、心更に生起するが如く、是の如く如來は、先に修習せる方便般若の加行力に由るが故に、當に知るべし、復心法生起すること有り。』

(一〇)曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく『世尊、如來の化身は、當に有心と言はんや、無心と爲んや。』佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、『善男子、是れ有心にも非ず、亦無心にも非ず、何を以ての故に。自依心無く、依他心有ればなり。』

(一一)曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく『世尊、如來の所行と如來の境界との此二種は、何の差別か有る。』佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく『善男子、如來の所行とは、謂く、一切種の如來の共に有する、不可思議の無量の功德衆に、莊嚴せらるる清淨の佛土なり。如

心を本質とし、之によりて現はれたる影像なるをいふ。

【二一】七に如來所行境界差別の相を明す。

【二二】八に如來が諸性に緣たるの差別を明す。

【二三】十に如來法身と二乘解脫身の差別を明す。

來の境界とは、謂く、一切種に五界の差別有り。何等をか五と爲す。一には有情界、二には世界、三には法界、四には調伏界、五には調伏方便界なり。是の如きを名けて二種の差別と爲す。」

曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、如來の成等正覺、轉正法輪、入大涅槃、是の如きの三種、當に何の相なりと知るべきや。」佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、「善男子、當に知るべし、此三皆二の相無しと。謂く、等正覺を成ずるに非ず。等正覺を成ぜざるに非ず。正法輪を轉ずるに非ず。正法輪を轉ずるに非ず。大涅槃に入るに非ず。大涅槃に入らざるに非ず。何を以ての故に。如來の法身は究竟じて淨なるが故に、如來の化身は常に示現するが故なり。」

(二二)曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、諸の有情類は、但化身に於てのみ見聞奉事して、諸の功德を生ず、如來は彼に於て、何の因緣か有る。」佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、「善男子、如來は是れ彼增上と所緣との因緣なるが故に、又彼化身は是れ如來の力に住持せらるるが故なり。」

(二三)曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、等しく加行無くんば、何の因緣の故に、如來の法身は、諸の有情の爲に大智光を放ち、及び無量の化身の影像を出したまひ、聲聞、獨覺の解脫身には、是の如きの事無きや。」佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、「善男子、譬へば等しく加行無けれども、日月輪の水火二種の頗胝迦寶よりは大光明を放ち、餘の水

【大威德の有情】日天子月天子なり
【諸の有情の業増上力】修行者の光明業を修する業力
【一四】十一に如來菩薩の威德有情を住持するの相を明す。

火の頗胝迦寶に非ざるが如し。謂く、大威德の有情に住持せらるるが故に、諸の有情の業增上力の故なり。又彼善き工業者の雕飾する所の末尼寶珠よりは、印文の像を出し、所餘の雕飾せざる者よりは、不るが如し。是の如く無量の法界を緣ずる方便般若の、極めて善く修習し、磨瑩し、集成せる如來の法身は、是より能く大智光明を放ち、及び種種なる化身の影像を出し、惟彼解脫身よりは、斯の如き事有るに非ず。」

〔一四〕曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、世尊の說きたまふが如く、如來と菩薩との威德住持諸の衆生をして、欲界の中に於て、刹帝利、婆羅門等の大富貴の家に生れ、人身、財寶圓滿せずと云ふこと無く、或は欲界の天、色無色界の一切身財、圓滿し得べからしむとあり。世尊、此中に何の密意か有る。』佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく、『善男子、如來と菩薩との威德住持、若は道にまれ、若は行にまれ、一切の處に於て能く衆生をして、身財皆圓滿することを獲得せしむとは、卽ち所應に隨つて彼が爲に、此道、此行を宣說するに、若し能く此道、此行に於て、正しく修行すること有る者には、一切處に於て所獲の身財圓滿せざる無く、若し衆生有りて、此道と行とに於て違背し、輕毀し、又我所に於て、損惱の心及び瞋恚の心を起さば、命終し已りて後、一切處に於て所得の身財下劣ならざる無し。曼殊室利、是因緣に由りて、當に知るべし、如來及び諸の菩薩の威德住持は、但能く身財をして圓滿ならしむるのみに非ず、如來と菩薩との住持威德は、亦衆生の身財をして下劣ならしむ。』

【一五】十二に淨穢二土差別の相を明す。

【一六】大段第二、依教奉持分。

(一五)曼殊室利菩薩、復佛に白して言さく『世尊、諸の穢土の中にて何事か得易く、何事か得難き。諸の淨土の中にて何事か得易く、何事か得難きなり』佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく『善男子、諸の穢土の中にて、八事得易く、二事得難し。何をか名けて八事得易しと爲す。一には外道、二には有苦の衆生、三には種姓家世興衰の差別、四には諸の惡行を行ず、五には尸羅を毀犯す、六には惡趣、七には下乘、八には下劣意樂の加行の菩薩なり。何等をか名けて二事得難しと爲す。一には增上意樂の加行の菩薩の遊集する所、二には如來世に出現することなり。曼殊室利、諸の淨土の中にては、上と相違す。當に知るべし、八事は甚だ得難しと爲し、二事は得易し。』

(一六)爾時、曼殊室利菩薩、佛に白して言さく『世尊、此解深密法門の中に於て、此をば何の教とか名くる、我當に云何が奉持すべき。』佛、曼殊室利菩薩に告げて曰はく『善男子、此を如來成所作事了義の教と名く。此如來成所作事了義の教に於て、汝當に奉持すべし。』

是如來成所作事了義教を說きたまへる時、大會の中に於て、七十五千の菩薩摩訶薩有りて、皆圓滿法身の證覺を得たり。

解深密經卷第五　終

昭和五年三月一日印刷
昭和五年三月十日發行

昭和新纂 國譯大藏經 經典部第八卷

不許複製

編纂者 昭和新纂國譯大藏經編輯部
代表者 三井晶史

發行者 東京市下谷區上野櫻木町五十番地
株式會社東方書院
代表者 坂戸彌一郎

印刷者 東京市神田區表神保町十番地
同興舍
代表者 井波康三郎

發行所 東京市下谷區上野櫻木町五〇
株式會社東方書院
電話下谷四二五九
振替東京六八六一一

印刷所 西村由太郎 ・ 製本所 眞貝定次郎

東京市赤門前
山喜房佛書林
振替東京一九〇〇
電話小石五三六一

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03023 3746